

奇譚クラブ

新しい風俗文献誌



6



奇譚クラブ

1970.6

THE KITAN CLUB

Published Monthly by Akatsukayama

Osaka Japan

6

6月号 ¥350

好評の傑作集大成第四弾刊行!!

花と蛇 特集号

作・鬼・団

定価 五〇〇円 略号「花」

団鬼六作長篇サディズム小説『花と蛇』は、昭和37年8月号の奇譚クラブ誌上より現在まで引続いて連載し圧倒的人気を博した傑作であり、過去三回に亘って発行した特集号も悉く売切れとなる人気でありましたので、ここに新しく昭和42年1月号以降の分を一括登載、堂々三百数十頁の特集に加えて四馬孝画伯筆の秀麗きわまりない口絵を添えて御覧にいたします。

四馬孝画口絵

美女羞恥責へ花と蛇画集

- 一、恐ろしい洗滌の末排泄を強要される美女
二、中腰で縛られた美女の品定めする調教師
三、清純な美女に初めて縄掛けしていたふる
四、刺毛の羞恥責めに悶える地獄部屋の美女
五、全裸の開股縛りで深窓の美少女を責める
六、怯のように縛られて宙吊りにされた美女
七、股間縛りの全裸責めにされる絶世の美女
八、足吊りで強制洗滌を施される全裸の美女

日本本文内容見出し

- 第一章 清純な令嬢の屈辱
第二章 人身御供の令夫人
第三章 深窓の美少女とズベ公
第四章 小夜子への執拗な調教
第五章 変性色事師の登場
第六章 生れかわるスター京子
第七章 激しいスターへの訓練
第八章 低脳男と令夫人の結婚
第九章 愛弟子を調教する静子夫人
第十章 羞恥と屈辱の日本舞踊
第十一章 悪魔たちの哄笑
第十二章 地下室の羞恥と汚辱地獄

- 第十三章 珍芸を開陳する令夫人
第十四章 淫靡な時代劇ショー
第十五章 華々しきショーの展開
第十六章 野卑な妾二人のいたぶり
第十七章 ズベ公達の邪悪な責め
第十八章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち
第十九章 悪党の執拗ないたぶり
第二十章 文夫と小夜子の屈辱的対面
第二十一章 勝ち誇る悪党一味
第二十二章 中国伝来の秘法
第二十三章 緊縛された美女の涕泣
第二十四章 新しい餌食への触手
第二十五章 苦痛と屈辱の生地獄
第二十六章 恐怖の責め続く
第二十七章 結末なき責めの結末

最近版 粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組百態 大手札型印刷紙(9x13cm) 極鮮明焼付

Table with 3 columns: Photo Number, Model Name, and Photo Description. It lists 100 photos of various bondage poses and models like 佐々木真弓, 山崎清子, etc.

☆北歐系の金髪碧眼の美女を緊縛する

六月号誌上に、うら若き白人の女性を「純日本式縛り」にて縛り上げたルポ「金髪碧眼の美女を縛る」を掲載しました。鮮明な写真と紙に焼付けた極めて鮮明な写真とをほしうというマニアの要望にこたえるため、特にシーラの希望に文獻的に分譲することになりました。だと思ひます。非常珍らしい資料お申込は大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社宛前金にて願います。

首縄高手 小手縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいき
生れて初めて縛られる首縄高手。小手縛りの全裸の肢体を言われるように白く肌を晒すのだった。

縄の痛さに耐える

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいめ
ぎゅうぎゅうと力まかせに締めつける縄は柔肌に驚くほど喰い込んでは、その苦痛に耐えようとする彼女の表情に一段と迫力を増す。

股間縛は凄く締る

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいあ
きびしい高小手縛りに加えて首縄、更に埋れるような股間縛りで肌を割り不自然な姿態を強要すれば美しい顔面が忽ち紅潮する。

卓上の裸身は躍る

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいて
テーブルの固い板の上に正座させられた白人の美女が縦横に縄を掛けられて二つ折りになっているのを正面側面背面から狙った。

両手吊りの全裸像

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいえ
シーラ嬢の美しい容貌とすらりと伸びた肢体とが両手を吊られて拘束されることによって諦めきった被虐美を最高に発揮している。

投げだした被縛体

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいま
縛られた彼女の心の中にマゾの芽が芽ばえているかどうかかわからないが、全裸で縛られたこのポーズの中に諦めきった相が見える。

麻縄は女体を裂く

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいゆ
ドス黒い麻縄は情容赦なく白肌に埋まり青い目を曇らせて、この異様な緊縛に耐えようとする。

縛られるのはいや

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいせ
つぶらな青いひとみを見開いて何をするといいかたげに責手を見る目には可憐な拒否がある。

私の裸を見ないで

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいし
多分彼女は今まで人前で裸の肌を晒したことがないだろうに、今は後手に縛られて前をかくすべさえなく喘ぎ悶えるだけである。

日本式縛りの痛さ

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいそ
すらりと伸びた長い脚、しかし今は徒らな足掻きを見せるに過ぎない。日本式縛りの厳しさが今こそ彼女の骨身にこたえるのだ。

白人をいたぶる手

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいや
責めのイケニエとなった哀れな彼女は悪魔の触手によって身動きも出来ない縛られの肢体をさんざんに、いたぶられるのであった。

金髪美女も台なし

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいも
房々とした金髪、格好のよい高身長、平常は男性を尻目に高慢だったか知らないが、このように縛られると裸を羞らう哀れな女だ。

被虐の表情を狙う

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいむ
高小手乳房縛り首縄に責めあげたシーラを様々にいじめて其の表情をアップで狙いをつけた。

美しき緊縛の姿

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいけ
彼女の顔の美しさ肢体の美しさを縄を用いることによって、このように最大限にまで高めることが出来たのは大成功であると思う。

逆エビ責めの外人

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいひ
長い足を逆に折り曲げてエビ縛にすれば流石にスタイルの良さを誇るだけあって、まことに優美な肢体を輝くばかりに開陳した。

雁字搦目で椅子に

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいえ
あるだけの縄を使ってシーラの白く肌を狂ったように掛けた結末が、このよう余りにも日本的な縛りとポーズになっってしまった。

落花狼藉のしとね

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいう
ビール瓶、コップ、食べ散らかした寿司の器、その中で麻縄で縛られた彼女は疲れきった全裸体を長々とひたひたに横たえた。



本誌自肅の徹底

本誌は特殊な風俗文藝を研究する平明で健康な社会生活を営む真面目な成人を対象として編集しておりますが、青少年の保護育成に關する美例には抵触しないよう、十分配慮を今後更に徹底いたします。

本誌では従来巻頭を飾っておりましたグラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順次整えて参りましたが、更に挿入写真の減少及び見出し、キヤッチフレーズの改訂などによって煩瑣性を排除してゆきます。

本文の内容についても、刺激の強いものは極力掲載しないようにするのは勿論、掲載した文章は十分検討を加え、いやしくも青少年の健全なる育成に支障を与えないよう努力いたします。尚、本誌の発行部数は最低限度にとどめ、その増大を企てるための努力はいたしません。

奇クサロン

(232)

- SMプレイと愛情.....宮城 真知
全編の現像。妻と共に.....宮城 隆志
サロン楽我記 (第七十二回).....辻村 隆
早起きの寝巻 犬も歩けば.....吉井作一郎
イメージ画「セマイ、オリロ、ハヤク」.....小川 俊正
重女妻に望む.....国川 栄一
イメージ画「どうして欲しいの?」.....神戸狂四郎
フォト・レボ 私のプレイ.....佐野みさ子
編集部だより.....編集部
奇クへの提案.....左京 和男
セクソロジの位相.....北沢 壯可
奈加子後援会の夢想.....乃見 対造
僕のイメージ画「日中の散歩」.....室井重砂路
短歌「夢」.....松風 高志
S・コレクション「へびと花」.....星 美代子
縛り映画鑑賞 私の採点.....岡田 康彦
イメージ画「可愛い女」.....志羽 利也
二枚の写真 神酒拝受の図.....M・A・M生
私の夢想「暴力看護」.....赤城 狂介
前田カオル嬢に「含羞の蕾」.....城崎 狂介

奇譚クラブ

第二四巻 第六号・通刊第二六六号

(昭和四十五年) 六月号 目次

〈本 文〉

- 扉で一言「ツムジ曲りの井」.....芦田しげる (9)
読後感 人妻叢子に思う.....久野 忍 (10)
時代劇にみる「猿ぐつわのシチエーション」.....鳴山 能平 (11)
幻のプレイク一枚の写真.....千草 忠夫 (22)
告白「サド開眼?」.....有川 章 (36)
Mの傾斜 壺中の園 (2).....真砂十四郎 (38)
連載小説「大噴火」 (第二十一回).....千葉 青鬼 (46)
ゴムヒズム・シリーズ 京子受難記.....菅原 敏夫 (51)
ニッポン・ハラキリ「碧眼畏怖録」.....中康 弘通 (67)
シナリオ ク異譚・三億円事件.....風流極道軒 (76)
四等文「マゾヒストM氏の肖像」とKK誌.....新宿 町人 (92)
読後感など「山中のプレイ場」.....千部 好夫 (95)
三回分載小説「女狐」.....光谷 東穂 (98)
最相模物語 花の女斗美たち (20).....倉斗士好太 (101)

まそひすむす 3 「カテーテル」.....泉 一郎 (11)

SMカメラ・ハント(伊藤美子の巻).....辻村 隆 (15)
「孤独から遁れて」.....由利美千子 (15)

告白「洗腸」は最後の宴.....大川 昌弘 (15)
告白小説「被虐の旅」 (2).....早木 夢二 (16)

告白小説「Mの道程」.....並木 新一 (16)
告白「乳房の刺青」.....和泉 五郎 (16)

連載小説「花と蛇」 (続編第六十三回).....団 鬼六 (17)
山本五郎さんへ 裾の乱れ.....牧 高志 (17)

青春の陥穽 (7).....芳野 眉美 (17)
カメラ・ルボ 金髪碧眼の美女を縛る.....塚本 鉄三 (17)

思いつくまま「S・M・P雑考」.....三条 剛 (17)
創作「レスビエンヌ」.....林 たけし (17)

奇ク第二の青春「五月号雑感」.....松山 壮吉 (17)
随想 少年マンガのSM.....夢野 虹二 (17)

アブ神上行状記 M派交友録 (6).....鬼山 絢策 (17)
読者 通信.....編集部選 (17)

目次カット「思うひととき」.....神戸・狂四郎
扉カット「SMハンター」.....あらい・かず

△強烈な被虐女性▽

川路むら子子の狂態

本誌二月号のカメラハントで辻村氏もあつた驚いた典型的なM女性川路むら子さんの要望によつて彼女のある被虐の狂態を再び刻明に描写し、ここにファンの手元に提供することにします。

股間縛りにうめく

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号八むつ

羞恥責めに泣く女

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号八むな
如何に被虐を求めて泣き叫ぶのか、それとも悦びに泣いているのか？

妖気溢れる開股責

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号八むま
ねっとり脂肪を浮かした素足に縄をからませて、左右に引き開けば忽ち妖気が充満してくる。

全裸縛りの引廻し

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号八むや
縄尻をとられて追いついては、うば、もう責め手の意のままに、うしろも開陳してゆく。

臀部晒し浣腸責め

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号八むわ
後手に縛られたまま、臀部を高く持ち上げて肛門を晒せば恐ろしい浣腸器が近々と迫ってくる。

露出した全裸肢体

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号八むゆ
締めつけた表情で若々しい肢体をマニアの眼前にあらわした。

両足挙げ羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号八むえ
自分の顔面より上に両足を開いて挙げさせられた姿態をかくすべもなく身悶えして耐える。

壮絶肛門責の妙技

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号八むお
ありきたりのM女性であつたものの、このような責めは許容しなかつた。であるが彼女はやはり違つた。

悶悦海老縛り地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号八むも
身体が二つ折りになつた苦痛もさることながら羞恥の個所があらさまになる無防備感はいどい。

片足吊りの全裸像

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号八むみ
不安定な片足吊りで全身を揺め、るように見られる羞しい苦痛。

編集部特写初産婦若妻臨月の資料案内

昭和四十三年三月号の奇クサロ誌上で「或る願望に托して」という告白を発表して、本誌の緊縛モデルになりたつたというM女性と加子はその後希望通りに辻村氏や山本氏のカメラの前でその緊縛姿を公開したのであつた。記事にあるように、カメラハントの事には若妻の女体をカメラの前でさらすこととなつた。満天下の緊縛マニアの方々は勿論のこと、緊縛と考へ、ここに編集部の特写を試みたので、御希望の向きは打ちりにならぬ。うちに、大阪市阿倍野局私書箱第十四号、天星社宛へ代金同封の上お申込み願いたい。

△妊婦緊縛の部▽

逆吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円
金原奈加子 略号八さめ

両手吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さい

若妻初妊娠の哀歎

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さい

妊婦腹の緊縛側面

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さみ

強烈縛り妊婦責め

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さる

若妻の緊縛妊孕美

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さま

膨満妊婦乳房責め

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さむ

臨月腹全裸晒人形

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さち

躍動する妊婦裸像

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さほ

妊娠という異常美

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さへ

見てほしい臨月腹

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さと

妊婦全裸全身肢体

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八ささ



あらい・かず画

ツムジ曲りの弁

愈々万国博が開幕されて華やかな開会式の模様がカラーテレビによって全国に放映され新聞紙上も全紙面を挙げて、その報道に専念しているかに見える。しかし先日の日曜日、街を歩いていて「万国博反対」のデモに出喰わした。その理由をきいて見ると、もっともだと思われるところも少くない。

嘗て例のオシャモジおぼさん連が「新聞代値上げ反対」のオシャモジを押し立てて街頭行進をやっているのを市内の歩道橋の上から眺めたことがあるが、どの新聞の記事にもならなかった。一枚の写真も撮ってもらえない反対運動では名譽心の強いオシャモジおぼさん連の気にはいらないだろう。悪書追放運動でタスキ掛けの活躍だったら早速新聞記事にもなるが、新聞値上げ反対では永久に記事になる気づかいはないからだ。

言論出版に対する圧迫は、あなたがち公明党のお家芸ではなさそうである。私にはそう思えて仕方がない。

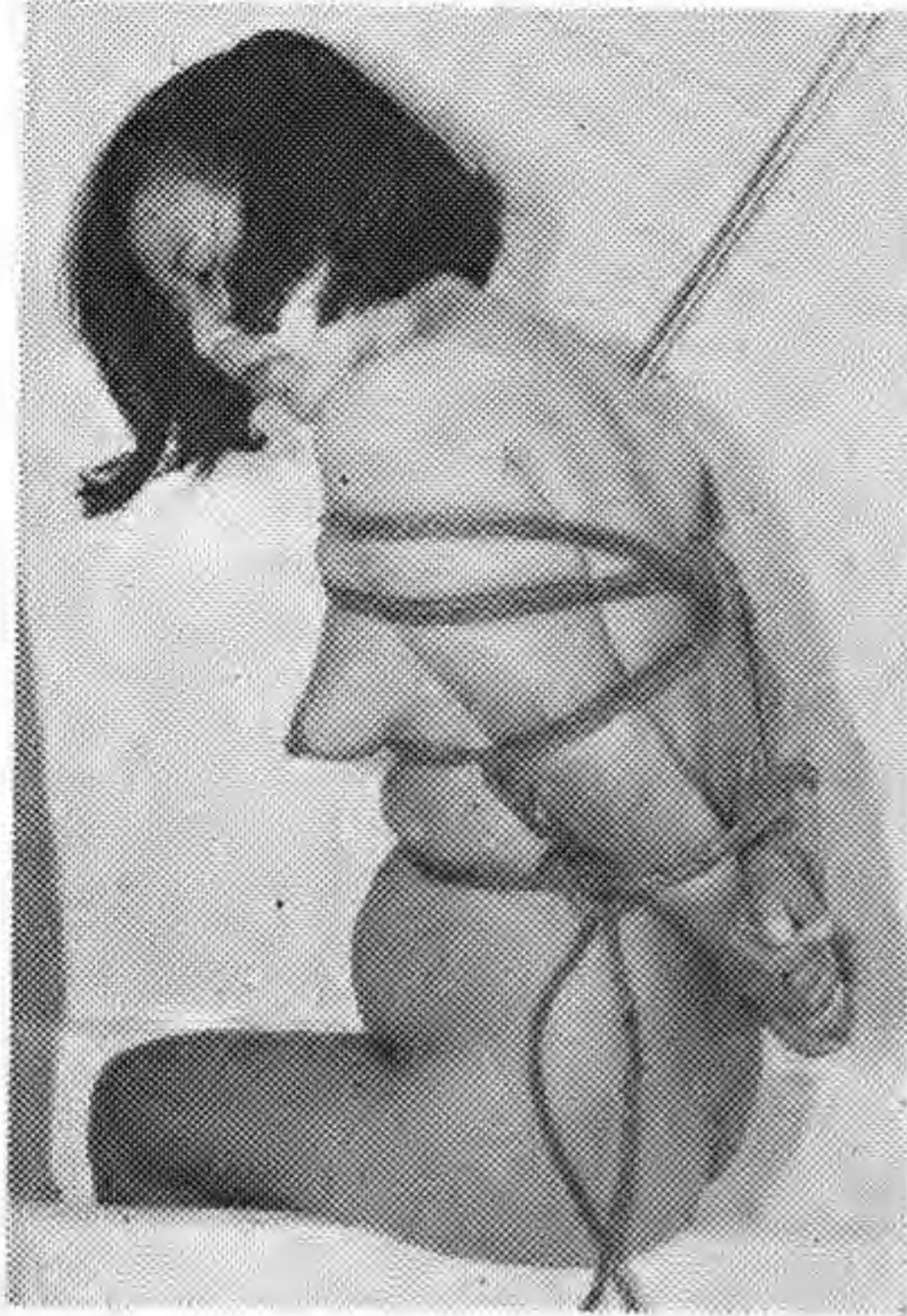
(青田しげる)

読 後 感

人妻「叢子」に想う

久 野

忍



「カメラ・ハント」に登場する女性や、モデル志願の女性のことを考えるとき、僕には、わからない部分が多すぎる。

それは、僕が常識的にすぐ、彼女の生活状況や生育過程など想像し、人間の環境の与える影響力を考え、判断し整理しようとするからであろう。心理的な不安、衝動性な

ど誰もある一瞬にもつ力、その力による行動などを考えることは簡単で、学問的で一つの統一がなされるが、心情として、どうも判然としないところがあり、僕としては、わからないと思う方が、パターンの認識をさける上でも必要な姿勢で、あえて、そう思い込んでいるのかもしれない。

この女性は、どんな家庭で育ち、今はどんな生活をし、なぜモデルになぞなったのか。生活の安逸さがもたらす退屈感、倦怠感、刺激欲しさなのか、それとも逆の状態なのか。教養の程度は。

僕は「なぜ」という疑問に答えるため独り想像する。これは人間への興味であろう。がこのいいかたは恰好が良すぎる。また、そう思われてもしかたないだろう。しかし、この女性達だけでなく全体としての人間への興味その一つ一つへの興味というものは人間の誕生以来だれでもがもって来たもので、文化もそれ故に、今日まで進展してきたものと信じる。

テオフラストスは「人さまざま」を著しているし、文学は、人間への興味を種々の中で求めている。この奇譚クラブにおいてもそれ

はある。

日本文化の中にだって、あの浮世絵の中にでさえある。大首絵はまさに個人に対する興味、人間にとって個人は敵であると同時に、友となるべきものである。それに対する興味は、文化が進めばかならず現われる現象である。進展への路であり、それは、社会と対峙する上で退歩する路でもある。歌麿の大首絵にみる人相描きや、北斎にみる同様の性格調書などあきらかに、人への興味である。自分から他人への興味。

ヌード・モデル雑誌にも、昔はただモデル嬢の写真が載っていただけだったが、最近では名前が入っている。この名前が仮名であることは見る側も充分知っている。しかし、ないより良いと考えるようになったのは、それなりの成りゆきなり理由があったからだと思う。それが、前述したことに基因していると思定できなくとも、そうした仮説はなりたつと思う。

前置きが長くなってしまったが「奇譚クラブ二月号」の「カメラ・ハント」に登場した川路叢子さんのことを考えると、彼女の生活や教育や家庭など、種々の環境が想像されて

ならない。

どのような過程を経てこの種の魅力のとりこになったのか、どこに因があって、彼女を夢想から、現実の世界での出来事に変貌させたのか……。

僕は考えてしまう。

☆

最初はモジモジして、辻村氏とのプレーをためらっていた彼女。何だか急に恥かしくなってきたのといって脱ぐことに抵抗をみせ、ひどく後悔してますと口にする。半ば、あきらめ気分、半ば、腹立たしさで、不きげんな辻村氏。

彼のペンの動きは、その両者の感情の曲線をうまく描いている。

最近の彼のハント記はいつも同じような手順で、同じような縄が女体にまつわり、一基調の心理しかうかがえないものになってきていたように思う。中年のうまさ、まるみ、反骨感の弱まり。それは、あたかも、彼の肉体のように。

いかに自分を卑下し、わるく書いてみてもどこかに、立派になってしまった「プレーの名人」としての辻村氏が自分でも必然と感じ

るくらい、ハント記の中に生存してしまっている。

それは、この記の長くつづいていることによるのか、それとも、ファンが妙に、彼をはやしたて「名人辻村」にしてしまっているからか。彼がそれに反抗しても意味がなく、むしろ、それを利用する以外なくなってしまう程に、彼に、その名称を皆が公然化してしま

った。彼は時折、自分は、ハント記など書かず、のんびり、きままに、緊縛をつづけたいともらし、自分より上手がいくらでもあることをもらしている。まさに、そうかもしれない。だが、読者は、ハント記による、彼の多数の女性を緊縛してきた経験をかい、信頼している。それは、いつしか、彼自身の中に出てきてしまった。

川路叢子さんの時、彼辻村氏の感情はきわめて人間的に動き廻っていた。それを如実に文章にしていく彼の才能は、なかなかのものであった。

緊縛する心とタイミングを心得ている辻村は、川路叢子の潜在的にねむっている心を巧みにおこしにかかる。それは術である。すぐ

れた術であろう。

川路叢子は、浜松からわざわざ新幹線で京都まで出てくるのだから、心の中では、それなりの強い願望があり、燃えていたのである。だが、まだ、夫以外の男性に肌を見せたことのない羞恥が、固いからを彼女に着せ、いざとなって緊縛をこぼんだ。その場になって、彼女は、どうしても後悔せずにはいられない気持になった。

あのような手紙を編集部に送ったのも、今日ここへきてしまったのも魔がさしたのだ、ほんの一時の衝動から出たことなのだ、としきりにわが心にいいきかせ、からをますます固く着てしまい、貞淑な女、貞女を心に改めて誓う。

しかし、彼女のそんな表面的な心のさらに奥でうずいている願望を辻村氏は巧みに嗅ぎ出している。彼女を満足させることは、帰すことなく緊縛することであった。それは京都まで出てきた辻村氏にしたところで、同様であつたろう。彼の長年のカン、数多くの女性との同様な接触の機会からの経験、カンが彼にその場での役をあたえ、彼は、それを巧みにやってみせた。

人妻叢子は一瞬にして変容した。

彼の、いつもながらのバイブレーターが勝利したのか、それとも彼自身の経験の勝利かは知らないが、人妻は、ついに彼女の本性をみせた。それは八足むれして微かな異臭の漂う無地の靴下Vを口の中に押し込まれ、猿轡をされたままで、彼女に襲いかかるバイブレーターの微動に享悦していく陶醉の中においてだった。

『もっと虐めて——』

彼女の悦虐の肉体はかたる。もはや観念ではなく、現実のもとで、シビレていく女叢子の本心だった。

しかし、彼女を悦ばせ、虐めるには、あまりに道具がとぼしかった。

辻村氏は、どんなにそのことに舌打ちしたことだろう。

『もっと、もっと激しくいじめて——』

と何度となく、口ばしる恍惚のセリフの前に彼は、くやしき、うらめしかったのではないだろうか。相手にあわせてプレーをする氏としても、また、さらに一歩先をいく彼としても、このセリフを満足させられなかったのは残念だったろうと思う。フェミニスト辻村

氏なら、あるいは男性ならだれでも持つ心理として、くやしかったろう。もっと責めて、せめてやりたい。

ハローソクよし、浣腸ポンプも拒みはせぬだろうし、更には大型パイプや大人の玩具の喜悦品のさまざまを使って、この女をのた打ち廻らせ得たであろうVと用具のないのを恨めしく思う。

女が真底から満足することによって、自分も満足する。

しかし、これから、みだれにみだれだそうとする女を相手に、どれだけ、彼女を満足させることが出来るだろうか。

辻村氏の心境としては、ただならぬものがあつたと思う。恐ろしくも美しく、かつ壮絶な変容である。人妻の心の動きは『昼顔』より巧みであつたといえよう。それは特殊的にみえて、一般的な人間の心の動きでもあるからであろう。

微視的に見れば、それはSとMのやりとりであろうが、巨視的に見れば、それは人間の心のからみであり、あやである。

この二人の心理がもっとも高まったのは、叢子がトイレをせがみ、辻村氏が連れていく

ところであろう。

——いたわりをこめて、縄を解こうとすると
急いでカブリを振り、

「いやーん、この尽連れてってえ」

と、せがむ。

彼がトイレに連行すると

「いっちゃいやーん、私のこの浅ましい姿、
見ていてえ」

と淫らな声がとぶ。

この壮絶さは、なんといいたらいいのだら
うか。

一枚の着物をぬぐことさえ躊躇していた人
妻が、縄目の状態でトイレでもよおすありさ
まを願うとは人間の意識の深さ、また、かぎ
りなく拡がっていく願望、欲望、意識そのも
のであり、潜在的な恐ろしさ、無意識のまた
新たなる発見である。

「あもう、ハダカになるのでしょうかね」

「そりゃ、なっていただかないと」

「恥かしいんです、私。もう余り若くないし
体の線くずれているんですもの」

と口ばしり、狼狽し、モジモジしていた人
妻は、いったい何処にいったしまったのだろ
う。

「やっぱり主人に悪いような気がして」

と躊躇した人妻叢子は、もはやそこには、
いなかった。いるのは女体の悦虐に陶醉して
いる女叢子であった。それはなんと不思議な
めざましくかがやかしい変容であろう。

静子夫人の変容がそれに似ている。辻村氏
も『花と蛇』をあるいは意識したのかもしれ
ない。

あの若くして美しい財閥の令夫人であった
静子夫人のような、ある日突然に襲った運命
の急変。あの裸にむしられ、下卑な男達や女
や年端もいかぬズベ公に翻られ、もてあそば
れ、肉体を責められ、羞恥に聳動し、戦慄的
な日々を送り、悲しい業をあじわっていく美
夫人静子そのものの、変容であった。
やけのようにつぶやく静子もやはり、もっ
ともっと責めて、もっとはずかしめて下さい
といていた。

それはまさに、叢子の言葉でもあった。叢
子は静子夫人にあこがれていたのかもしれな
い。自分で自分を演出し、夫人のように公衆
にさらされた夫以外の男性に見せたことのな
い柔肌を晒し、さらに人に責められ、翻られ
享悦することを、心底願っていたのかもしれ

ない。

なんと反道徳な心であり、またそれ故に、
未踏の地への歩みたい憧れそのものである。

人間のかくされた秘密、そして刺激が、ま
たエキスとなり、生命をあたえていく。

人妻叢子においても、あの日の出来事は、
新たな刺激であり、また一つのめざめであっ
たかもしれない。

辻村氏は、また、別の女性を求め、また彼
女の中にねむっているものを引きだし操り、
めざめをあたえるであろう。

それは限りない期待である。

☆

辻村氏の長年のハント記を写真本にして、
発刊出来ないものであろうか。大変な文献で
あり、読み物であり、写真である。このまま
うずもらせておくのはおしいのではないだろ
うか。考えて欲しいものだ。

また、辻村氏に変わるべき、ハンターを用
意して欲しいと思っている。山本氏は最近登
場しないが、辻村氏のような連続投球できる
人で、若々しい視点と行動力のある人をのぞ
みたいが、いないものなのか。



時代劇映画に見る……

猿ぐつわのシチュエーション

(環境設定)

絵と文 鳴山能平

げて書いてみよう。

◎誘拐 運搬型

この誘拐した女を運搬する道具として、ふんだんに利用されるのが町駕籠である。

大映作品「大菩薩峠・竜神の巻」

時代劇映画は、劇的局面の設定が現代ものより自由であるから、猿ぐつわのシーンが割合に登場し易い。そこで数多くの時代劇映画から猿ぐつわシーンのシチュエーションを研究してみると、大体、決まった型があるのに気がつく。

今、その型を二、三の代表的映画の例を挙

この映画は、山本富士子が初めて縛られ、猿轡を嵌められた映画であるが、その山本富士子扮する劇中人物お松が、本郷功次郎の宇津木兵馬と、見明凡太郎の義賊吉兵衛と連れ

だって、竜神の森近くの茶店にくる。折から天誅組の残党を追う幕兵達の通過する混雑の中で、寺島貢扮するぜげんが、お松の美ぼうに目を着ける。

ここでお松の連れの男共は、宿敵机竜之助が天誅組の残党にいたることを知り、お松一人を残して、竜之助の足どりを追うことになりお松はぜげんに拐かされる設定となる。——夕闇が迫る金井の宿場通りに、お松を乗せた町駕籠がくる。その垂れの下から着物の袖が

のぞいている。寺島貢が宿場女郎屋をたずねている隙に、近藤恵美子扮する旅芸人の連れだ犬が、いきなり吠えて駕籠の垂れを咬えて引っぱると、中に細紐で後手に縛られて、松葉を点々とあしらった手拭で、鼻口を覆う猿ぐつわを嵌められたお松が悶えている……という趣好である。

「座頭市関所破り」では高田美和の名主の娘が、付人に裏切られて好色な代官の家へ連れていかれるのだが、駕籠の中で、松葉模様の青い手拭いで顔の半ば以上を覆う猿ぐつわをされて、その膝の上に座頭市から貰った片目のダルマが揺れている。やがて、ダルマが転がり落ちる。そして娘が代官所にいることを座頭市が知るという設定になる。

そのほか、駕籠の中に拐われた猿ぐつわの娘がいるというシーンの映画は第二東映「砂絵呪縛」大映「銭形平次・地獄の門」松竹「伝七捕物帖花嫁小判」新東宝「女人曼陀羅」東映「鳳城の花嫁」新東宝「けんか大名と生首奉行」日活「鬨骨銭」大映「刺青」新東宝「真田十勇士総進軍」東映「花まつり男道中」日活「怪盗白頭巾」新興「里見八犬伝」新東宝「隠密七生記」東映「虚無僧変化」等々である。

次に運搬に舟を使うのもシバシバある。
東映「火の玉奉行」

長崎を根城とする婦女誘拐密輸団が、代官所の牢に閉じこめていた娘達を、牢から出して、一人一人を後手に縛りあげ、猿ぐつわを嵌めると長持ちに入れるという一場面があった。その計画を立聞きした木暮実千代の芸者

が捉えられ、厚い白布で巾広い猿轡をされ、河岸に引き立てられると、沖に停泊している千石船に移すため、十数人の娘達が、いずれも縛られ猿ぐつわをされて、はしけに乗せられている。

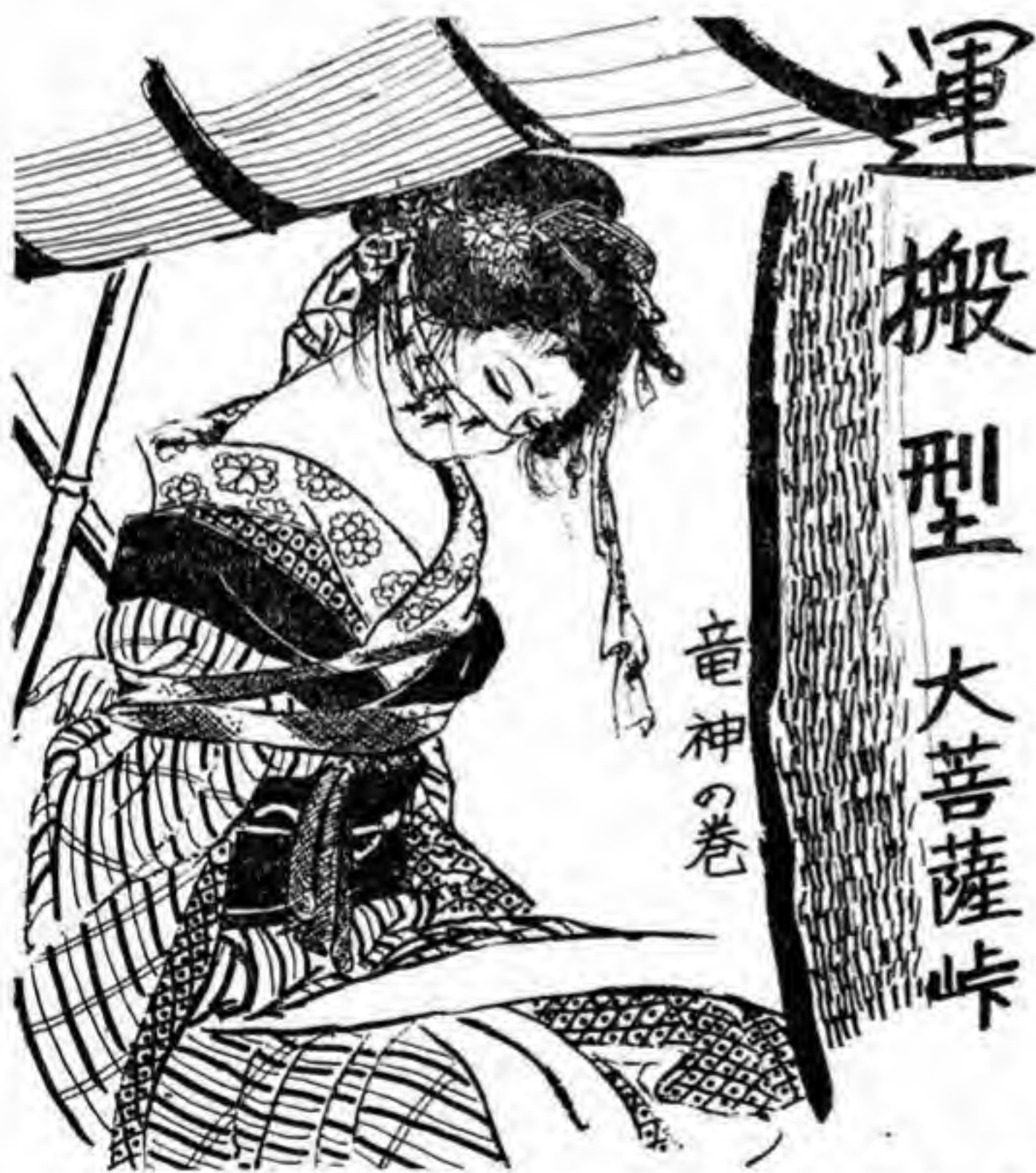
そこへ、さっそうとご存知、千恵蔵の遠山金さんが登場して、密輸団と立廻りになる。

時々、木暮実千代のアップシーンがあるのだが、鼻口を塞ぐ猿ぐつわは、残された目の美しさを強調していた。

舟の中で猿ぐつわという映画は、この他、

大映「銭形平次めくら狼」大映「女と海賊」東映「はだか大名」日活「神変麝香猫」新東宝「関八州大利根の対決」日活「薩摩飛脚」日活「お千代傘」新東宝「けんか大名と生首奉行」大映「遊侠の群れ」等々である。

さらに、運搬型には



型スペース

鞍馬天狗 大江戸異変



子の小唄師匠を、深夜、無頼の輩下を使って襲わせる――。

怪しい気配に布団に起き直った師匠に突然黒い影がおどろかき、その口を掌で塞ぐ。次に細引で後手に縛られ、豆しぼりの手拭で猿轡をされた師匠が、布団の上から逃がれようと腕くのを、数人の影がかつき上げる。獲物を肩に黒覆面が人通りの絶えた夜道を行く時、嵐寛のむつつり右門が行手をさえぎって立廻りとなる。

だが、飛来する半弓の矢に右門危うしと感じた師匠が、寝巻姿で、自由を奪われた猿ぐつわ後手のまま二度三度、白刃の間に割って入り、体当りするというシーンは印象的であった。

ほかに日活「白頭巾現わる」東映「風雲将棋谷」松竹「吃七捕物帖」新東宝「緋ぢりめん女大名」日活「無明有明」等々。

● 誘拐連行型

これは同じ場所替えでも運搬型とちがうのは、拐かした女と一緒に歩かせるという点で区別したい。

『大映「弥太郎笠」で浦路洋子のお雪を、松井田の久六一味が、山路をこづいて歩かせる

シーン。お雪の猿ぐつわは、手拭で矢張り鼻まで覆ってあり、その息づかいも苦しそうだ。った。

大映「黒い三度笠」で月丘夢路扮する若後家を、幼馴染の大前田英五郎を召捕るための囷として捕え、やくざ達が後手で引立てていくシーン。豆しぼりの猿轡が、ほおに喰い入るようであった。

余談だが、この月丘夢路が猿轡を嵌められている時は、不思議と口だけを縛っている恰好になっているようだ。例えば東映「風雲将棋谷」における捕物小町の役。大川端で、ごろつきと浪人に襲われ、手ぎわよく豆しぼりで猿ぐつわされる時も、口だけであり、松竹「伝七捕物帖黄金弁天」で伝七の女房お俊の役で、にせの伝七（高田浩吉二役）と、子分（沢村国太郎）につかまって松葉散らしの手拭で嵌められる時も、口だけの縛りであり、又、同じ松竹「伝七捕物帖一番手柄」の時、伝七の跡をつけて来たお俊が、賊の用心棒に抑えられ、お高祖頭巾の上から（大変、珍しい絵である）白布で猿ぐつわをかけられる時も然りである。

時代劇映画にでてくる猿ぐつわの絵（シーンは、鼻の上まで巾広く布が巻いてあるの

人の肩によるものが、ままある。

宝塚「右門捕物帖・伊豆の旅日記」

下田奉行所の役人（江川宇礼雄扮）は、同輩（河津清三郎扮）を色と欲の二筋から陥れようとするのだが、その秘密を知った花井蘭

が殆どなのだが、そしてその方が、はずれにくいし視覚に訴えた感覚を強調できると思う。

(例外として松竹「次郎吉格子」東宝「柳生武芸帖」東映「徳川女系図」などがあるが、唇を割って噛ませるのに大映「野盗と女」大映「女と海賊」などがあり、いずれも京マチ子なのが面白いが、実用的すぎて艶消しである。この三つの猿ぐつわのかけかたに良い例がある。大映「眠狂四郎女地獄」である。

開巻劈頭、商家の土蔵からカメラがパンすると、主人夫婦の寝室で、主人(香川良介)は齒と齒の間に手拭いをかまされており、背中合わせに縛られた女房(橘公子)は、口だけを縛られており、隣室では、娘は赤い扱帯で鼻口を覆う猿ぐつわを嵌められて呻き、もがいている——ここで始めて映画でもうずくような音楽の高鳴がある——そして娘は室から廊下に転がり出て、雨戸を仆して庭に落ちやうと猿ぐつわをはずして助けを叫ぶことになる。

しかし、現実の効果として猿ぐつわは、口の中に布をつめ、その上から更に縛ることが効果的に必要なのだが、まあ、そんな映画はお目にかかったことがない。ただ、大映「鬼あざみ」で馳落ちをして江戸に来て、火の見

やぐらの下で男と別れた田舎娘(山根寿子)が、地廻りにクルクルと丸めた豆しぼりの手拭を口にあてがわれるシーンが僅かにあっただけである。

さて次は東映「春風無刀流」の花柳小菊。

夢介(片岡千恵蔵)に首ったけの小唄師匠お銀が、大江戸を荒す怪盗一味にさらわれて庭の植込みの間を歩かされる時は、黒布の猿ぐつわであり、東映「薩摩飛脚」の鳥追いお蝶の時は顔一ぱいの手拭であった。

庄巻は東映「花まつり男道中」における長谷川裕見子の町娘であらう。

目の前で病気で寝ている父親が殺されて、子分共に両手を押さえられ、豆しぼりで猿ぐつわを嵌められようとするのを、必死に首を振って逃がれるが、やがて後手に縛られての猿ぐつわ。駕籠に押し込められて、吉田義夫

おとり型



の親分の待つ座敷に、連れてこられる。廊下を美しい衣裳が裾を引いて、障子を開けて中に押しやられるが、すぐ立って逃げようとするのを、無理やりに引き寄せて、娘のあごに手をかけ、ああもしようこうもしてやろうとニタリとする親分。豆しぼりの猿轡を嵌められた顔を振って町娘は……となる。いや、結構なシーンでした。

劇中、同じ人物が、背景も衣裳もガラリと

変わって連行されるのがある。日活「電撃二重奏」はサラリーマンものの現代劇だが、劇中劇の夢見るシーンでは、時代劇になっている。姫君（轟夕起子）に恋する若侍（杉狂児）は宿直の夜、ついウトウトとしている。城の

大門が開かれ、堀の上にかかる橋を、黒覆面に扮かされた姫君が、裾を引きながら出てくる。白布で嵌められた猿轡が、ずり落ちて助けを呼ぶと、若侍が気付いて馳けつけてくる段取りであり、又、次の場面は鷹狩りに出かけた男装の姫君は、山賊にとり巻かれてしまう。黒布で猿ぐつわをかけられ、足をバタバタさせて一応、抵抗するが、すぐ縄尻を取って山寨へ引きたてられる。その途中、若侍が馬に乗って助けにくる……。さて、現実ではうだつの上がらぬ新入社員が、会社に泥棒が入った時、再び回想シーンが出て姫君の猿ぐつわがはずれる。「助けてー」の声にハッと気付き、泥棒をとり押さえて目出度し目出度しとなる。お粗末でした。

◎ サスペンス型

普通、劇中、美しい女が誘拐されても生命の危険はない。あるとすれば貞操の問題だけであるという設定が多いが、このサスペンス

型とは、具体的行動ではっきり貞操が奪われる場面を表現しているもの。縛られ、猿ぐつわまでされて、殺されようとしている局面のシーンである。

新東宝「鞍馬天狗大江戸異変」

沢村昌子扮する居酒屋の娘は、貧乏旗本の二男坊（黒川弥太郎）に恋をしているが、二男坊は、幕末の混乱した世の中を生きていく信念がない。つつい遊興無頼の徒と交わるようになる。無頼組の首領（清川壮司）は、娘の美しさに魂を奪われ、折あらばと意馬心猿を燃やしている折、娘が組の本拠に二男坊をたずねてやってくる。好機到来とばかり首領は娘を縛り上げ、黒布で猿ぐつわを嵌め、寢室の柱につないで置く。二男坊にはシビレ薬を飲ませようと、はかる。その間、首領の情婦は娘の美しさにシットして、いきなり短刀で娘を刺そうとする。二度、三度、柱につながれていた娘は必死によけて（面白いシーン）いるうち、短刀の刃が縄にあたって手が自由になり、娘は立ち上がって逃げる。尚も追って刺そうとする情婦を首領が押える。娘は猿ぐつわをはずして首領の背にしがみつく――。そして次のカットでは再び縛られて猿ぐつわを嵌め直された娘が蚊帳の中に入れら

れ、布団の上で跪いている。その妖しい姿態に首領は舌なめずりをしながらニジリ寄る……。

欲をいうなら、この次に娘を玩具のようにもて遊ぶシーンもほしいのだが、そこは映画の限度で、すぐ鞍馬天狗（嵐寛寿郎）のお出ましとなる次第。

大映「平次八百八町」

抜荷買にからむ殺人事件で平次の追求をかわすため、女房のお静（長谷川裕見子）を人質としてさらった船頭（香川良介）は、高飛びの駄賃にと、料亭の娘（三条美紀）も部下にさらわせる。そこで用意の毒酒を部下に飲ませて、地下室に降りてくる。お静は豆しぼりの猿轡で柱につながれているし、娘は荒縄で縛られて猿ぐつわは松葉散らしの手拭い。僅かに自由のきく眼を見開いて男をにらみつけるが、男は娘の猿ぐつわをほどくと、無理やりに娘を連れ出そうとする。娘は叫ぶ。お静は身を揉む。男はお静を始末するために、火をつける。次第に立ちこめる煙と燃え広がる火の中で、お静の苦悶の動きが烈しくなる……という案配。

そのほか、後手猿ぐつわの忠臣の娘（花園ひろみ）を座敷の中で手打ちにしようとする

土蔵型



ーンとなる。夕陽が差し込む船宿の二階では両替屋の娘（近藤恵美子）と弁天小僧菊之助の妹（青山京子）が、細引でつながれて縛られている。二人共、もちろん手拭の猿轡を嵌められて、恐怖にののいている。その美しい獲物を前に、二人の浪人がくじを引いて、どちらを取るか決めている。

（市川雷蔵）の登場です。

◎ おとり型

「おい、これを見ろ！」その声の方をみると両手を縛られ、猿ぐつわまで嵌められた美しい女が、刀を突きつけられている……というシーンです。

東映「丹下左膳」新東宝「幽霊沼の黄金」などが、良い例でしょう。

◎ 土蔵型

これは、どういう型で誘拐するかでなく、すでに攫った女を、どこに置いておくか、どこに隠しておくか、という事後処理の場面である。

この場合、多くのシーンは、土蔵か物置の中であり、床の間に据える……というのはいふのである。うす暗い土蔵の中に、縛られた美しい女。矢張りムード的にいって、そうなるのであろう。この代表的なものは、何と云っても大映「天狗の安」である。

馬鹿殿（中村竜三郎）という設定の第二東映「獄門坂の決斗」。戦いの血祭りに押し入れに縛ってある女（宮城千賀子）を庭先に連れ出して斬ろうとする剣客（月形竜之助）の東映「修羅八荒」、東映「蜘蛛の巣屋敷」大映「赤胴鈴之助」等々があるが、名監督の名場面として大映「弁天小僧」伊藤大輔監督は、江戸情緒を満喫させてくれた。

「どれ賞玩つかまつろうか」と浪人共、（伊沢一郎と小堀明男）が近寄る。猿ぐつわの下から呻き声を上げて、女が逃げようとするが一本の細引でつながれている体、引きつ引かれつ、よろよろと蝶になって縛れるのを、ニンマリと刀を抜いて細引を斬り、女を二つに分ける。それぞれの女体が一人一人の男に抱かれて——そしてカメラは、二階につながる物干場に移ると、裾をなまめかしく乱した娘が、後手のまま逃げてくるのを、浪人が馬乗りのようになって、つかまえる時、弁天小僧

やくざの義理のしがらみから、人を斬ってワラジをはいた天狗の安が、親分の許に帰ってくると、惚れ合った芸者のお静が二、三日行方不明である。あにはからんや親分は、お

静に横恋慕して、土蔵の中に、閉じこめてい
る。そればかりか、安が家に来ると豆しぼり
の手拭いを出して「これで、お静の阿魔に猿
ぐつわを嵌めてこい」と、用心棒に命じる仕
末。

用心棒は土蔵に入って、長襦袢のまま扱帯
で後手に縛られて、柱につながれているお静
(入江たか子)に「親分のいいつけだ、悪く
思うなよ」と、グイとばかり猿ぐつわをかけ
る。

しばらくして安が帰ると、親分(進藤英太
郎)がお静の猿ぐつわをほどこいて口説き、ま
た袖にされ、猿ぐつわを嵌め直していく。

こんなシーンが二度あった時、映画館の観
客の中で「あら、また……」という女の溜息
が洩れた。

更に映画ではストーリーが運んで、芝居小
屋の掛け看板(中将姫が縛られている図)を
みつめる天狗の安(阪東妻三郎)のカットに
続いて、猿ぐつわのお静のアップが挿入され
るという趣好でした。

この土蔵型には案外とアップが多いので楽
しめるのも一つの特徴です。

東映「妖異忠臣蔵」も、このアップの多い
映画でした。縛られ役は長谷川裕見子で、殺

人現場を目撃した町娘の役。土蔵の柱にゆわ
かれて、やわらかい白布でシッカリと鼻口を
覆う猿ぐつわでした。

ストーリーは、吉良家の付人達の遺児の世
間に対する復しゅう奇談で、ラスト近くのク
ライマックス。三島雅夫扮する講師が、遺
児達の本拠に乗り込んで、赤穂義士伝を吉良
上野の立場から講釈しつつ彼等の正体をあば
いていく時、その朗々たる音声に聞き耳を立
てる、拐かされた土蔵の中の町娘のアップが
次々とカット・バックされて、なかなか見ご
たえのあるシチュエーションであった。

ほかに松竹「びっくり太平記」新東宝「怪
傑修羅王」松竹「寛永御前試合」大映「眠狂
四郎妖異剣」等々がある。

次にアッ、と驚く型というのを紹介してみま
しょう。

これは、シチュエーションも目茶苦茶なやつ
と、猿ぐつわなのに科白をしゃべるという代
物です。

松竹「びっくり太平記」

家々が戸をおろした夜の道を、拐かした
娘(星美智子)を連れて浪人(益田喜頓)が
ノンビリとくる。娘は荒縄で縛られて、黒布
で猿ぐつわだが、突然に、しゃがみ込む。す

ると浪人者がのぞきこんで、娘に訊く。「ど
うしたの? おんぶ?」娘がうなずくと、浪
人が娘の前に回って膝をかがめて、背負う恰
好をするのだが、娘はその腰を蹴飛ばして、
一目散に逃げていく――。

いくら喜劇とはいえ、猿ぐつわを嵌めた娘
に「どうしたの?」は、そりゃ、ないでしょ
う。

新東宝「江戸城炎上」

長襦袢一枚にむかれ豆しぼりで猿轡を嵌め
られた女が、柱に縛られている。遊び人小悪
党の情夫(細川俊夫)が、自分に愛想をつか
して逃げたんだから、折檻してやると凄んで
いると、その女(長谷川裕見子)が「ふん、
誰がお前なんかの自由になってたまるかい」
と、はつきり言うのには驚いた。すると、豆
しぼりの手拭で鼻孔まで覆った猿ぐつわは、
アクセサリーか。

同じことが、新東宝「煩惱秘文帖」にもあ
った。

池内淳子の武家娘は、人質となり駕籠に乗
せられている。悪人共は相手(劇中人物名、
伴大五郎)の戦力力をそぐために娘を見せる
のだが、垂れをまくると、帯を胸高にしめた
高島田の娘が、荒縄でグルグル巻き、額には

リアリズム型 三匹の侍



柴左近（丹波哲郎）

は百姓達に戦略を教え
代官の提案した、人質
との交換条件を聞くな
という。するとその娘
が叫ぶ。「父を、疑う
気か」……。

少し、ふがふがした
声だが、はっきりそう
いう。この猿ぐつわは
手拭を歯と歯の間に咬
ませたものであり、桑
野みゆき自身、いかに

も痛そうであり、苦し
そうであった。これな
どは、リアリズム型とも呼ぶべきか。

最後は、大分古くて恐縮だが、極東キネマ
「怪人金仮面」なる珍映画です。

杉並木の街道に茶店がある。そこへ一挺の
駕籠がくる。駕籠を降ろして雲助共がお茶を
一ぱい飲んでいると、茶店で飲んだくれてい
た浪人が、腰をとられてフラフラ歩き出し、
小石につまずいて、駕籠の垂れの中に首を突
っ込んだ。中には武家風の娘が、縛られて白
布で猿轡を嵌められている——。浪人（伴淳
三郎）は娘の美しさに目を見張って、あいさ

つをする。娘（小浜美代子）は不意のちん入
者に眉をしかめて、顔をそむける……という
シーンである。

大体、拐かした娘を駕籠に入れたまま、茶
を飲む雲助もノンビリしてるし、第一、娘が
逃げようとしないうし、浪人に助けを求めよう
とする素振りもしないで、迷惑そうな顔をす
るとは不届き千万である。そしてこの娘は、
画面に出るたびに、さらわれて、きまって縛
って猿ぐつわがあり、その都度、怪人が助け
てやるという映画だが、幼稚なシナリオ、シ
チュエーションといえはそれまでだが、実はシ
チュエーションなど、どうでも良いのだ。

要は美しい娘が縛られて猿ぐつわを嵌めら
れているシーンがあれば、それでいいのだ。
シチュエーションの研究とは要は、その映画に
そのシーンがあるかどうか、予想できる研究
なのだ。

この映画で、このストーリーなら多分、猿
ぐつわのシーンが出るであろう……そんな妄
想が脳裡に湧くだけで、胸を掻きむしられる
ような高鳴りが、くんでもくんでも湧き上っ
てくる、うずくような陶酔の井戸が、私にあ
る。次には、現代ものと、外国映画を書いて
みようと思っている。

松葉模様の手拭で猿ぐつわが、かけられてい
るといった絵なのだが「大五郎様！」と、こ
の武家娘も叫ぶのである。アッと驚く次第。

松竹・フジテレビ「三匹の侍」

お馴染みの柴左近が、荒れ果てた水車小屋
に近づくと、中から「ウツ、ウツ」という若
い女の押しつぶされた虹の呻き声がする。

ぬッと、入って見ると、柱に縛りつけられ
た代官の娘（桑野みゆき）が、猿ぐつわの手
拭を咬んでいる。娘を人質として誘拐したの
は、代官の重い年貢に苦しむ水呑み百姓達、
（藤原釜足達）だ。

一枚の写真

千草忠夫



仙台発上野行き特急ひばり六号は、十八時三十分に出る。上野まで四時間の旅である。

全席指定のこの列車は思ったよりすいていて、上野着が十時半という時間のせいか、東京からの出張帰りらしいサラリーマンの姿が目立った。白ちゃけたホームの明かりと賑やかな見送り人の笑顔と挨拶の群れが後方にすり抜け、闇が窓外に迫って

くる頃になると、車内のさざめきに一段落がついて、真白なシートカバーのかかった座席のひとつひとつにひとつあて黒い顔のてっぺんをのぞかせただけの、いかにも夜汽車らしい車内になった。

私の隣は空席であった。窓際に寄ってガラスの水滴を指先で拭い、暗い外を眺めた。遠くに赤いネオンが、ゆっくりと動いている。汽車に平行して走る道路に、自動車のヘッドライトと赤いテールライトが、違った世界の出来事のように眺められた。

私は一人旅の、このような感覚が好きだ。私ひとり世界から切り離されて、世界のさ

さまざまな動きを、ガラス越しに眺める。世界は私という存在を無視して、それぞれ私の知らない目的に向かって動いている。旅の楽しみ最大のものは、この眺めるという楽しみなのではないだろうか。みずからをその土地の異邦人と感じるということは、裏を返せばその土地の風俗、習慣、人情などという拘束から一切解放された眼で見る、ということなのだから。

それだけでなくさえ、今の私には、刻一刻と後方に置き去りにされてゆく仙台とその地方が、それだけ私を東京に近づけてゆくのだという喜びを与えるのだった。丁度三日前、上野を出る夜汽車に乗った時の、あの後髪を引かれる気持と、これは裏腹をなしていた。発車時刻を間違えたために予約しておいた寝台車に乗りおくれ、一時間後に出る鈍行列車にどうにか乗ることができた。あの薄暗く石のように固いシートの眠られぬ一夜にくらべて今の私の心は、はじめて恋人に手を握られた少女のそのように、歓喜とも不安とも知れずおののいていたのだ。純白のシートが並んだ列車の細い通路の連なりが、そのまま東京へ通じるチューブのようにさえ思えるのだ。

北陸の町に住む私が公務で仙台に出張を命

ぜられたとき、まずひらめいたのは、その往復に東京を通らねばならないということであった。東京へ行くということは、K氏に会えるということだった。そしてK氏に会えるということとは、或る別の世界、SMの世界に触れるということの意味した。その瞬間から私の仙台行きは名目だけになり、東京に滞在できる前後合わせて二十四時間ばかりの時間があった。もっぱら私の関心事になってしまったのである。

だから、杜の都とうたわれる仙台の街も、晩翠の詩碑も、松島も、何の感興も呼ばなかった。ただ、わずかに国宝瑞巖寺の雄大な建築美が印象に残ったが、それも丁度、来あわせていた新婚らしいカップルの、ピンクのスーツを着こなした女が、廊下に垂れた風鈴の音を楽しんでいる後姿を点景として持っていたせいなのかも知れない。

数百年間、磨き抜かれた黒光りする廊下を踏む、その若くしあわせげな女のストッキングだけの足は、こよなく美しかった。形よく盛りあがったふくらはぎから、引き締まった足首への削いだような線の美しさと、晩秋の冷気を耐えている爪先のなよやかさが、私の眼を引きつけたのだった。

しかし、それをそれほどの感動をもって眺めた眼は、すでにK氏から与えられた暗示によつて曇らされていた。と言えるかもしれない。(今夜だ。もうあと、八時間か九時間の我慢だ。そうすれば、これと同じような足をストッキングも何もつけていない足を縄で縛り上げ思うぞんぶんに罵るなり愛撫するなりできるのだ)

「たぶん」という言葉を、私は私自身に対してさえ用いることを、この時ばかりは禁じていた。

二

私は胸の内ポケットから手帳を取り出し、あたりをはばかりながら、そこにはさんである一葉の写真に視線を落とした。隣は空席で通路をへだてた向こうの席には中年の夫婦がはやばやと、まどろみかけており、前後を背の高いシートでへだてられているとはいえず、その写真は手帳から取り出して、おおっぴらに眺められる性質のものではなかった。手帳のページにはさんだまま、手帳をのぞき込んでいるようなふりをして、さりげなく見なければならぬ性質のものであった。ところが今の場合、そんなににして、ひそかに眺めね

ばならないという事情そのものが、私に奇妙な胸のときめきをさえ、感じさせるのだ。

今はじめて見る、写真では勿論ない。先夜汽車に乗りおくれる原因ともなったK氏との最初の会見で、K氏からもらったものだからその時も眺めているのだし、仙台の宿でも幾度か取り出して眺めはした。しかし、今ほど胸に迫るような気分を感じはしなかったのである。こうして私は窺視の楽しみをも、ひそかに味わうことになった。

手帳にスッポリはさめる六六判の小さな写真である。私は小さな真四角の画面を、チラと盗むように見ただけで、手帳を閉じた。写真がそこにある、というより、彼女がそこに居る、ということを確認しただけで、ほとんど私は満足した。温かなものが胸にこみ上げて来て、しばらくはその温かさに身をひたすために手帳を閉じ、頭をシートにもたれさせて眼をつぶることさえした。

それから再び手帳を、今度は少し長く開いて、脳裏に灼きついていく彼女の印象と写真のそれとがチグハグでないかを確認する作業に取りかかる。記憶にあやまりはなかった。彼女は間違いなく羞恥と困惑と愁恨の表情をわきにそむけて、一糸まとわぬ美しい肉体

を、柱を背に立縛りにされていた。カメラはそんな彼女を殆ど彼女の右真横あたりから、とらえている。だから顔をそむけているといっても、その顔はカメラの方を向いているわけ、やや伏せられた表情は、あます所なく写し取られていた。ただ彼女の視線が殆ど、いましめられた後手をのぞき見ようとしている程にまで後方にそむけられているので、この角度からのカメラでも、「顔をそむけている」という印象を強く与えるのだ。やや伏眼になった視線の具合と、きつく結んだ唇の線が、羞恥に悶えるというより、必死に耐えている感じを与える。

顔がこちら向きになっているのに対して、右足は左足の前に重なるようにして、羞恥をカメラから、かくしている。太腿から、ふくらはぎにかけて一本通っている強い陰影が、その右足にこめられた、はじらいの強さを浮き彫りにしていた。

私は手帳を閉じると、再び頭をシートに当て、目を宙に放って、脳裏に印象を、まさぐった。私の印象は、あくまで彼女の顔の表情と足の表情とに固執していた。大きくウェーブした長い髪が、丁度、湯上りの湿り気を帯びたかのように、しっとりとした輝きを放つ

て広い額に乱れかかり、更にその先端は肩先で前後に分かれて、前に垂れた方は殆ど頸から鎖骨のあたりを覆って、いましめが横切っている乳房の上の方に及んでいる。乱れた髪に囲まれたようになっていたために白く浮き上がった、例の表情が、よけい生きてくるのだ。その事は左足に重ね合わせた右足の姿についてとも言えた。殆どカメラに尻を向けんばかりに腰をひねって右足を楯にしているために最奥の羞恥は全く右の太腿の陰にかくれてしまっている。ちょっと腕を伸ばしてその足首をこちらに引っ張りさえすれば、ヒリつくような視線の欲望は満たされるだろうに。

ここに心にくいばかりの演出の巧みさがあった。見せるべき所をはっきりと見せ、隠すべき所は巧みに隠すことによって、見る者の視線を釘づけにすると同時に、彼女を一個の「羞恥」として完璧なまでに表現しつくしているのだ。私がこの一葉の写真を懐中にしてからというもの、たえずムズムズする視線の誘惑を感じ続けて来たのも、あるいは、こんな演出の巧みさによるのかも知れなかった。しかし、それだけだったなら、私はこれほどにまで胸を波立たされはしなかったかもしれないのである。緊縛写真は、これまでも数

多く見たことがあることだし、彼女に勝る美女のそれにも接した。恥部をあからさまにしたものも所有している。私のそうだったコレクションの中では、この一枚などは、むしろおとなしい。公開しても、なにか怪しまつか疑はれる所のない程度のものである。さういふものは、どうです、なかなかいい娘ではないが、女子大生なんですよ。これは置いてあるのに、早くK氏のこれと語が、これにして珍しく情ない写真に生氣を与えたのだった。

女子大生、あるいは女子高校生、あるいは女学生、という言葉の持つ魔力は、私のような男女共学の経験を持たない中年男にしか、効果を發揮しないものなのであるのかも知れない。女子大生といったところで、裸に刺せば、ただの女じゃないか、と言ってしまえば、身もふたもない。ただ、それが事実として、かなり大きな影響力を私に対して持っていることを、どうしは知らない、と言うまでである。

女子大生と告げられたことによつて、裸のその女は、いわば生活をになつた存在となつた。生命を吹き込まれた。

「それも、そこら辺りにウロウロしている遊び好きの文科学学生やなんかじゃなくて、レッ

キとした音楽大学の学生なんです。ピアノが専攻なんです。」

「ピアノと聞いて、私は反射的にテイクルの写真を手に取り上げ、その時の私の胸は殆ど彼女の腕と同じくらい痛んだといつても誇張ではなかつた。」

「ホースの端に来るのは自らのリッパル全盛、あるいはシロップを、尤もやかに弾きこなすであらうに本の腕は、固く四角な柱を抱かされて背中にも深く合わされ、素人には神技とも現れる動きを見せるのであろう感覚鋭い十本の指は、ぐくり喰ひ込まれて血も通わぬままにしびれ果てて、紫色に変色したまま縮かまっているではないか。目の前彼女が生きた重いの生命を与えられて私の心に生きた息吹きを通わせは止められずそれでこそ、あの表情に一抹の翳りをさしている愁恨の色が理解できる。」

ある名だたるMの知人が、私に言やたこと
がある。『さういふことゝは、真の故
山マスで汚れた綿なら、出でんなものだつて
いかゞあらわすぢやないか。必ず、それ、固有
名詞が冠せられなくてはならない。』
窓の外は暗い。その中を、ひとりのふたつ
遠い灯が、ゆつくりと後ずさつてゆく。それ
らは、名もない灯だ。しかし、それが仮に知

つた人の家の灯であるとわかったならば、と
ぼくは、かすかに見える灯も、その輝きを増
そうというものではないか。
「あなたが東京へもどられた晩は、ひとつ盛
大乾やあうむやあひませんか。その娘を主デ
ルにしてね。あなたが上京されるなんどこそ
は、めわ立花なやぢや、えなんだかあ」こゝろ
K氏の言葉を胸におさめた彼女の写真は、
単調な車の響きをきき歓迎の樂のやうに聞か
せる力を持ってゐた。不安はさういふやうに
あを数時間、あを数時間、あを数時間、あ
を数時間、あを数時間、あを数時間の、あ

三
その三つの部屋と、更だその二つに隣接する板張りの小部屋と、便所、或は浴所に通ずる内廊下かも知れない。そこで出るには、必ずすま張りの開き戸を開けるようになっていた。これら三つの部屋の間で立っている。それで、さういふ部屋の戸と襖を開けてしまえば、そこに都合よく晒し柱が出現するといふわけだ。彼女は、そのようにして開けられた襖の敷居の上に、左足の爪先を縮めるようにして

立っている。当然、彼女の背は開き戸を開けて板張りの床をのぞかせている小部屋（または廊下）に向くことになる。

写真の背景になっている部屋は、客間なのか、竹の模様の絨氈が敷かれており、壁に造りつけの棚に観葉植物の鉢が置いてある。カメラアングルの関係で、その葉の上向いたひと叢が彼女の腿から下腹のあたりを、下からさすり上げているように見える。

あと、眼につくものといえば、白い壁と二三の柱、低い欄間ぐらい。畳の縁のめくれ具合や柱の節の数から見て、あまり上等の普請とは見えない。K氏の話によると、このアパートは仕事でおそくなった時とか、こんなお遊びをする時のために借りてあるということであった。

丁度、植木鉢の棚の下あたりに、何か布のかたまりのようなものが置いてあるのに、写真をひと目、見た時から気づいていた。写真の版が小さいので、それは殆ど小さなシミのようにしか見えない。はじめは何気なく見過していたが、幾度も眺めつくし、他のあらゆるものの、せんさくをしつくした今、ようやく、その白いシミが、気になって来たのである。

それは如何にも不用なものであるかのよう
に無雑作に捨てられている。背景をクリアにするために植木鉢以外のあらゆるものを取りのけてある室内に、それ一つだけが見過ぎされたのだとは思えない。それは撮影が開始されてから、何気なく投げ出されたものか、或はむしろ、それがそこにあることが写真の効果を一段と高めるとの計算の上で置かれたものか。

それが撮影が始まり、かなり進行してから置かれたものであることは、前後の関係から推測して、ほぼ確実と思われた。というのは彼女の足首には幾重にも重なりあった縄目の跡が、ありありと印せられているからだ。この事は、この写真が撮られる前に、足首を縛ったポーズで撮られた段階があったことを示している。では今の段階で、なぜ足のいましめが解かれねばならなかったのか？ ポーズのはじめから全裸だったなら、足首を縛ったポーズは、縛らないポーズの後に来るのが自然である筈である。それが逆になっているのは、なぜだろう？ 答は一つしかない。あの布切れは、彼女が最後まで身につけていたパンティに違いない。パンティを着けたまま足首をも縛ったポーズの撮影が行なわれ、次い

で、いったん足首のいましめを解き、パンティが脱がされたのだ。

「もういいですか？ 用意ができたなら、この柱の所に来て、立ってください」と、K氏が言う。

「はい」

やや、かすれた小さな声で言って、彼女は脱衣室にあてられた板敷きの小部屋から、胸を抱き、腰をかがめ気味にして、おずおず姿を見せる。K氏の方を、うかがう眼は、つい一時間前までは見ず知らずの男だった者に素肌をさらす羞恥の色をたたえ、哀れみを乞うように気弱く、またたいている。身につけたのは純白のパンティ一枚なのだ。

彼女はK氏に指さされた傍の柱をおそろしげに見やる。不意に不安がおそいかかってくる。いったん、この柱に縛りつけられてしまえば、後は何をされても、どうしようもないのだ。大金が手に入るからというので、こんなアルバイトに応じたくらいだから、もちろん処女というわけではない。男がどんなものであるかも少しは知っているつもりだ。しかしそれとこれとは違う。縛られるということには女にとっては強姦されることを認めるに等しい不安を呼び起こす。

「さあ、別にどうってことはないですよ。痛くはしませんから」

女を扱いなれたK氏のおだやかな笑顔が、ものやわらかに、せきたてる。しかし、その手にしたロープの束を見ると、身ぶるいが出て鳥肌立つ思いになるのを、どうしようもない。ロープは、まっさらの、しかし、かなり太い綿のものだ。

彼女は殆ど肩を押されるようにして、柱を背にする。素足の裏に敷居の木肌が冷たい。

K氏は柱の後ろにまわる。

「手を背中にまわしてください。背中を柱につけて、柱を後ろで抱くようにです」

言いながら、今度は彼女のためらいを許さないかのように、肩から腕にそって手をすべらせると胸を覆ったままの手首を両手同時に握み、ゆっくりと乳房から引き離し、逆にねじるようにして後ろへ持ってゆく。彼女は目を閉じ深呼吸をする。自分の前に男の眼がないのが、まだしもの救いである。

K氏の縄さばきは慣れたもので、殆ど彼女には一瞬のことのようにさえ思える。しかしはっと気づいた時には、固い柱の角が背中に押しつけられ、腕の内側にもその冷やっこく角張った肌ざわりが密着し、それを遠ざけよ

うと思わず手を動かすと、すでにその自由を奪われていることを知る。(ああ、とうとう縛られてしまったのだわ) ふっと全身が熱くなる。

ぼんやりしていると、不意に男の手が乳房に触れてくる。ギクッと身を縮め、非難の眼を男の手に向けて見ると、それはロープを胸につけまわそうとしているのだ。乳房の上に一本、下に一本かけ渡され、二の腕に一まきして締め上げられると、もう上体は首から上をのぞいて、殆ど動かせない。

ロープを締めている間、故意にか偶然にかヒョイヒョイと乳房に触れていた指が離れて行ってしまうと、彼女はガッカリしたように肩を落とす。自然に首がうなだれて、柔らかな乳房を締め上げて喰い込んでいるロープが眼に入る。と、急に双の丘がしびれはじめ、しびれは頂点に及んで、うずくような感覚に変わる。自分の眼の下で、触れもしないのに乳首がふくれあがり、固くしこってゆくのを見て、彼女は血が噴き出しそうな羞恥を覚える。愛撫してくれるものもなく、むなしく宙に突き出て喘いでいる乳首が、急にいとしくてたまらなくなる。彼女はガクッと一つ大きく腰をひねって熱くこもって来たものの何分

の一かを発散させる。

「ちょっと、そのままのポーズで、カメラの方を向いてくれないかな。そう、その表情でいこう。うん、やっぱり足も縛っておいた方が感じが出るようだ」

いつのまにかファインダーをのぞいていたK氏が、ふたたび別のロープを手に寄って来て、足元にしゃがみ込む。

今の彼女には、下半身に近寄られる方が辛い。おびえが膝から腰へ走る。

「美しい足だね。手入れのゆきとどいた女の人の足というのは、その人柄を想像させて、いいもんだ」

彼女は自分の足が太いのを、いつも内心苦にしているのだが、お世辞でもそう言われると、うれしい。しかし、くるぶしのあたりをなぶられながら、そんなことを言われると、おびえがこぼれ出しような熱い波に変わってしまう。身悶えが出そうになるが、ようやくこらえる。もっとも足まで縛られてしまった今では身悶えといっても腰をゆすることしかできない。そんなことでもしようものなら……

「じゃ、さっきのポーズでいこう。そう、視線はもっとカメラの右にずらして、うん、い

「髪は……」と口をきくのは密着し、その手を動かした。時々の夕日を押すのかと思つたが寄つて来て髪の毛の乱れ具合に気が付くほどにはなほおひまらけつ縛りインダリをのをさ込む。髪の毛一本一本が汗をかいたばかりで少しづつ切られる。もう手首から先の方は目びれて感覚がない。真正面から照らすので付けてくるライトが目に入らず肌を焦がすような感じだとしてゐる。「あんな綺麗だね」とも言ふけど耳か指輪と同じようにあやうする北言語なのが聞き取れない三脚を移動させて遠くから近づくのが右から左から撮りまくってある。暗いところへ行く。」

（終）

「彼女が次第に無力感に陥つてゆく。中々もう
これ以上を望みないで振られてしまつたんだも
う、どうにも彼女の心は壊れてしまつた気分を
振動私たちが感じ取れなくて髪をゆきぶりに打
ねす時の感じが、そんなことではどうにもなら
ない。虚脱感が迫ってくる。そのせいで、心の中
夕陽の音が足どろき、目と目の間のしるしが油
用なしの青い眼を見ままたかせるほどに
朱唇神経だけはギクッギクッと小窓の外の
「どうも心附かないわ。疲れたのよ」と笑顔を
く氏氏は切なげにグーから顔をあげ、腰を伸
ばして、腕ずくる。」「ここおひびくよ。前

「脱走のなんだから体に力が入らなくなつた。たぬ
たかどきさすめはせんとてやうなだれる。大ま
くおや出、初めての仕事だから無理もないよ。
あす愛蔵だからね、頑張つて」むんじふ南
見はいまだ吐血を吐き出したと云ふ意味で賞え
卑敵女は氣を取り直すほうに肩をゆすり上げ
る。もう片側も早く撮影が終つたことを知る
ばかりで、K氏が意地の悪い笑みを浮かべた
のに、気が付かないうちに足道の縄を取つたのを
撮影技師めしと言ひて近寄つて来ても、さ
すがのうちに床を叩き渡るものはなして是もな
い。アッ、また、彼女がバツタリ、アッ、アッ、
山崎のかつたり、山崎の顔、アッ、アッ、アッ、
優しく問ひかけながら、K氏は、もはや、だ
姿勢で足首の鎖を解いてゆく。緊縛感
がゆるむにつれて、ほっとした気分が体中を
満ちたし、血が管をたてて爪先へ流れ落ちて
ゆくのもで感じられる。ジーンとなつた爪先
をにすり合わせると、白くして、赤くするが、ゆさ
耐える。アッ、アッ、アッ、アッ、アッ、アッ、
おぼれめを解き終つたとき、意中の口を、さ
めにしてカメラの中に入らないように部屋
片隅に放り投げ、K氏はそこに、全裸で、ま
はの姿勢で彼女を見上げる。(その顔は、さ
つき、さつきと見出しを同じ笑みが浮かんで

る。彼女が後頭部をうしろの柱にもたれかけ、
「ほっとした表情で眼をうむつてゐるのを見
ますと、つと両手をさしのべた。

「ちねでに取らちやおうよ」もこのないで……
今言わね時めいたてを黙むとちねよ
に言ふと、パンテいのゴム靴指をかけて、マ
ッと言ふ時にも毎度ずに引込降ろした。さう
しなや、何をなさるぬと、靴の底が変な丁
が反射的に膝に力をとめて、首を立て直した時
は、もうすでににおく、又におくとお形を
失した薄物は、難関の膝の部分を通り過ぎて
ふたたび膝から蹴第に細まってゆく足首を引
きずり降ろされてゆくところである。

人の足首のどのや、先生。彼女の前が丸くな
り、美しき足。毛入体のうちうしろ式文の
は、彼女は精々漸く眼を定めた美しい眼で、
一瞬前までは腰の最後の着正装と成るのを
た布が、張りを失ひ、愛情ない姿で足首にまっ
ちわりついてゐるのを、また、それを張氏の母
が至極の無造作にあつてかやにあつてを眺めお
ろす。力をこめてとすり合わせた膝小僧はパ
ンティ剝奪阻止の目的をかためられて、羞恥を
隠す目的に変わる。彼女は新たにあらわされて
た羞恥で眼がさめたるになる。さへその
足首を片方ずつ持ち上げてパンティを抜き

取ると、K氏は傍にホイと放った。それを眼にして彼女の羞恥は更につのる。腰まわりのうそ寒さがあらためて身に迫つて来る。本能的ともいえる動作で、彼女金や自由になつた右足を左足に重ね合わせるより、本能的な屈辱が、更に熱を帯びてくる感觸がする。が、それだけに、なおさら今とつた姿は変な格好になつてしまふ。丁度、その時、二ヤニヤ笑ひながらK氏は立ち上がる。「いや、御覧になれないで……」の聲を聞き、彼女は嫌々をして顔をそむける。「この夏あまり海水浴に行かなかったらしいね。この肌とこの色があまり違わないのは存難い」。彼女の羞恥は更につのる。彼女の新たにあらわになつた部分をジロジロ眺めまわす。そして「パンティの線が入らない方が良かったから、ここをそこをすこしマッサージュしてもいいかい」などと言ひながら、手を伸ばしてくる。「やめてください、おねがい……」

「じゃ、自然に消えるのを待たなくちゃならないが、それだと時間がかかる。疲れるよ」

それでもいいかい、と眼を彼女に向ける。彼女は真っ赤になる。そして、K氏の手がそつと肌に触れて来てもヒクと身じるきつただけで任せてしまふ。マッサージュの間、彼女は緊張が、ともすれば、あつた。K氏が特別にかかるのを、あつた。K氏が特別にみだらなふるまいに及ぶわけではないのだが、触れらるる個所によつて、キツキツとなつた。反対に物足しなかつた。そんな感觸の底接は、マッサージュが終わる頃には、グッタリとなつてしまふ。しかし、今度のグッタリはさっきまでの疲労の上でのグッタリと、かなり内容、性質を異にしてゐる。が、彼女は最後まで重ね合わせた両足を解くことだけはしない。いや、ますます、為しえなくなつてゐる。さ、いいね。顔をもうちょっとこちらへ向けて、目線はさっきと同じ。もうちょい伏し目になって。そうそう、足のボトズが、すぐいいよ。ハイ、そのまま」

「パシリ——」

四

列車は定刻に上野駅についた。いつもは、ふるさとの土くささが混雑している駅も、十

時半という時間のせいで、拍子抜けするくらい閑散としていた。K氏の父の墓のそばに、うか地下鉄にはようがとさんさん迷ったあばく、地下鉄はきぬ、つ通つても、きぬ、きぬ、地下鉄の薄さなさを抜けて、地下鉄のボトムに出た。働き疲れた顔が、ボトムにボトム、あつた。あつた。あつた。人を避けるような身ぶりで立っている。

「お母上は着くのは十一時とK氏には話してある。田舎住まいの私にとって十一時という時間は、床の中でぬくぬくと夢路をたどっている時間だけれど、大都會では夜の生活の幕開けどきというところじく、私の到着を待つた上でプレイベント者に取りあはるうといふ話であつた。おそろしく徹宵といひさうなるだろう。東京の土地を踏んでいるといふことで、私は、すでにプレイベントの予測の中へ身も心も投入しまつてゐた。二十分、カツ、カツ、カツ、カツ。眼前、カツ、カツの所に後姿を見せて立っている大きな紙袋をぶらさげたミニの女の子が、所在なげに、ボトムをコンクリートに鳴らしている。ボトムの上手を見、下手を見るたびに、長く実なおな髪が肩から背中を掃くように動く。ミニの裾

から伸びた白い綾織りのストッキングの、すらりと細いたたずまいが、つい十時間前に瑞巖寺で見た女の足を思い浮かべた。

まるで夢のように思える。

松島をめぐり五大堂の見える岸に上って、すぐ国宝と大書した立札に魅かれて通りを横切り、参道も何もなしに山門から杉の木立ちの門前の観光地まるだしの雰囲気とは打って変わって森閑とした境内に入り、伊達政宗建立する所の、瑞巖寺の雄大な建築美に直面する。国宝建造物なら、奈良に京都に、いやというほどめぐったことがあるけれど、いまだかつて、その美に心底から打たれたというところが無いのは、あまりに人間どもの数が多過ぎたせいなのであろうか。ここ瑞巖寺の国宝と銘打たれていながら人影のほとんどうかがえず、寺僧の物欲しげな案内顔もないのに、松島の俗悪さに愛想も尽きはてていた私には救いすら覚えたのであろう。

その磨き抜かれ初秋の日の光に冷えびえと輝く廊下を踏んだストッキングの優美な足がふと軒下に垂れ連ねられた風鈴の音色にとどめられて腕組み合った夫君のいとしげな表情を仰ぎ見る。ピンクのスーツの色が、ほのかに廊下に映じ、風の音にさそわれる鈴の音の

如く彼女の心のそよぎが伝わる。彼女の肌色のストッキングはめくり降ろされ、すくみあがった足に男の手が薪ざっぽうを束ねるごとく掴みかかり、ロープがぐるりぐるりと巻きつけられ、やがてそれが解かれたあとには、縄目のあとがあざやかに薄紫の色を残して印される。しびれた爪先をうごめかして感覚を取りもどそうとするうちにも、男の手は心持ち冷たくなった足首から、ふくらはぎへ、更に腿へと這いのぼりはじめて悲鳴をあげても後手に柱を背負わされた悲しさ、わずかに腰をゆさぶって忍び寄る感覚をふり払おうとはしてみても、男は眼をいやらしく光らせ歯を光らせて、十本の指を止めようとしめない。ミニのスカートは殆ど男の手を阻止する役を果たさず腰のあたりにまでたくしあがり、綾織りのストッキングを留めているガーターを好ましげにまさぐりながら、更に、じかに肌のぬくもりを楽しみ、逆三角形に肌を区切る薄いナイロン地の張り切った手ざわりへと指を拡げる。ゴムが肌に喰い込んでいるあたりを、いやらしくなぞりながら、ことわりもなしに、せいっぱいにゴムを張りひろげて、温かく湿った肌に外気を吸い込ませたかと思うと、薄皮を引き剥ぐように裏返しに、ずり

下げ、必死の思いではさみ込んでいた一端をも、ずるずると押し下げられて、わずかの温もりが初秋の外気にチリチリと縮かまる。

日中の数分間隔で発着する電車に慣れていた私には、夜のこの時間における運転時間に対する用意が全く出来ていなかった。ほんの五分ぐらいの立ちんぼうだったのに、二十分にも三十分にも思えた。渋谷駅まで二十分と踏んでいたのが電車がくるまでもう十一時近くになっていた。コンクリート打ち放しの地下トンネルにやけに音を良く轟かせるばかりで、電車の動きがやけにのろくさとしていのように感じられた。腰掛けた私の眼の前をしらじらしい他人の群れが、駅毎に乗り降りした。

「千草君、ばかにおそいな。ここがわからな

いんじゃないだろうな」
K氏がテーブルの皿から鮎をつまんで、あくびをしたついで大きな口に放り込む。皿の傍には銚子が何本かからになっている。

「少しおそくなるかもしれないから、君も腹ごしらえしておいたほうがいいよ」

テーブルの向かい側に黒のスーツの膝を横坐りにしている彼女の緊張のためか夜がおそいためかそけだった頬に、K氏は笑いを向

ける。その前に小皿に取ってある鮎は箸も割られていない。

「ボチボチ始めていたほうがいいんじゃないかな。ドアを開けたら眼の前にヌードの縛り姿がある、なんてのは、千草氏を歓迎するにはふさわしい趣向じゃないか」

部屋には、もうひとり年配の男が居る。同好者のひとりで、K氏のプレイ仲間だ。いやひとりだけじゃなくて、もうひとりぐらい居るかもしれない。ひとりの女を囲むのには、三人の男というのが一番釣合いがとれる。カメラマンとライトマン、それに縛り手。そこに私が加われれば私は半端ということになる。ハンパでもかまわない。私は見ているだけで充分満足するだろう。もちろん、時にちょっと指を伸ばして彼女の肌に血が通うぬくもりを感じ取りたくなることもあるだろうが。

「待ってくださいよ。もうすぐ着きますからいきなりヌードが飛び込んでくるのも悪かないけれど、やはり裸になってゆく所から見たいですね。裸になっちゃった女なんてアツケラカンとしていて、抱くか縛るかしくちやサマにならないのですよ。ストリップこそ男の楽しみなんじゃないですか」

安物スピーカーの雑音のような電車の騒音

に、私の脳中劇は、とかく中断されがちだった。頭の中をのぞき込んでいる網膜の中を、停車駅ごとに人の波がよぎった。渋谷は終点だから駅の名前を気にする必要はない。

部屋の中はたばこの煙がたちこめ、薄紫にかすんでいる。

「こりゃ待ちくたびれて飲み過ぎたかな」

K氏はテーブルの前にゴロリと横になって肘まくらをする。他の二人の仲間も思い思いの姿になって、煙をやたらと天井に吹き上げている。彼女さえ後ろの壁に背をもたせかけて、所在なげに週刊誌のページをめくりながら、あくびを噛み殺している。

「眠む気さまして、いっちょやろうじゃないか」

ひとりが膝を起こして仲間の顔を見渡す。「あと十分で半になるから、それで見えなかったら始めよう」

K氏も折れる。彼女は週刊誌を置くと手洗いに立つ。体を軽くしておいて、それから顔を直さなくてはならない。鏡はどこにあるのだろう。風呂場にあるだけか、それとも鏡台が部屋のどこかにあるのか。

私は、もう「待ってください」とは言えない。ヤキモキしながら劇の進行をガラスの向

こうでどう手を出しようもなく眺めている。電車が地下から高架に駆け登り始めた。街のネオンが眼に飛び込んで来た。

五

アパートは、渋谷駅の南口を出て国電にそった道を五反田の方に歩き、何本目かの通りを右に入ってすぐの所にある、ということだった。地図をもらっていた。私自身東京はかなり慣れてはいるものの、渋谷のこの界限は歩いたことがない。渋谷へ来てもらいたいのは映画館の多い道玄坂の方へ流れるのが常だったのだ。その慣れがかえっていけなかった。慣れているつもりで出た所がハチ公の銅像の傍。これが北口なので、ここから南口の方へ出るには、東急玉川線のガード下をくぐって大まわりをしなくてはならない。

私は舌打ちしながら重いカバンをぶら下げ、酔っぱらいの多い人混みを押し分けるように足を早めた。

「どうもおそいな」

十一時半をまわって、K氏も体を起こす。「この電話番号は知らせてあるんだろ？」

「うん」

「探しあぐねれば、電話をかけてくるさ。さ

「始めよう」――の聲音のよびで電車の聲音
「じつとがないな。さびや脱いでもらおうか」

顔をうつり終つていた彼女は、いちよと頬
をこわばらせて、うなずく。男たちはテンプ
ルを部屋の隅へ片付けはじめ、餌はあらか
た食い散らかされ、コップに残った酒の薄
黄がゆれる。

「彼女は立ち上がって板敷きの小部屋へ姿を
消す。男たちは三脚を立て、カメラを据え、
テンプルの位置をあれるれと相談ははじめる。
襖を取り払われ開き戸を開け放たれた後に、
柱が一本孤立して犠牲者の背中を待ち受け顔
だ。

「ようやく南口に出ることの出来た私は、そ
の交りように思わず眼を見張った。高速道路
が不細工な弧を描いて国電の線路をまたぎ、
駅前広場には巨大な箱の枠組みを思わせる大
仕掛はな横断歩道橋がかけ渡されて、まるで
グロテスクな風景である。歩道の奥に、同
歩道橋をこの時間にウロウロと渡るような
人影もない。それに対して眼の下道路は車
の波で、騒音と排気ガスの熱気がまともに頬
に吹きつけてくる。心はせくものの、この大
都会でなくては見られない景観に、私はしば
らく人影もない心細い歩道橋の上に立ちつく

していた。ふとこれに似た光景を前に見た回
とがあるような気がした。

「私は突拍子もない連想であった。昨年の
夏、立山に登った時、心細い吊り橋の上から
五斗米下の湯を巻く溪流を見降した時の印象
が、今もカキカするような排気ガスを吸いな
がら、ふとふと来たのだ。思わず「うま
い」と口にしたくなるようなあの深山の空気
がどこで排気ガスの臭気と結びついたのでか。
この晴れた日も曇った日もさだがでなく赤く
濁った夜空と、あくまで澄み渡って白い千切
れ雲をあざやかに浮かべていた立山の空と、
どこで結びついたのでか。それはあの瑞巖寺で
見た花嫁の脚が直ちにロトの跡もあざやか
な彼女の脚に結びついたのと同様、私の異
常な連想癖によるものだったろうか。
「車の波はヘッドライトを連ねて橋の下へと
向かうの坂からなだれ落ち、橋の下のスッ
プ信号で一時とどきおつては、再び堰を切っ
たように、なだれて行く。私は急に疲労をお
ぼえた。

した顔をライトにさらされて、眼はまかせ
切ったように閉じられ、唇は肌を伝わる悪感
を噛みしめるかのようになんか閉じられて
いる。

「私は線路ぞいの小暗い道を急いだ。人通り
はなく線路を通る電車もない。つい今しがた
の表通りとは打って交わった港の道に私の
心はますます疲労に重なり、ゆきようだや
な。ここを辺はほとんどが安アパートで、窓
々からもれる灯がけすら淡く、時間のおそひ
ることを示していた。時間はすでに指し時は近
かった。

「ふと何の脈絡もなく瑞巖寺で出会った女
のことが思い出された。あのカッパルは今夜
は松島泊りだろう。今頃はホテルの華やかな
ダブルベッドで新鮮な肌を愛し合っているだ
ろうか。それともひと汗かいた後のひんやり
い眠りを、素肌に腕をからめあったまま眠っ
ているだろうか。そしてあの時、ほんの数秒
間だけけれど数十センチの近距離にまで接近し
た私は、たちまち数百キロもへだたったここ
東京に居て、人通りのたえた夜中だというの
に、何物かに憑かれたように息を切らしなが
らうつろひまわっている。しかし彼女は今で
も身ぢかにいる。眼をこらしさるれば、そ

この暗い道路の果てにも、蕨のはう石垣の傍にも、あのピロウのヌミと恰好よい脚の線は直ちに現われる。細目の跡をつけた素足にからまれて、あなたはとうとうここまで連れてこられてしまったのだ。そのとき、光と影の間にわばあなたはあのとき、ほんの瞬間の間に私に犯されてしまったのだ。あなたに近づきしに腕をからめて寄りそって、はた夫君よりも深く、私はあなたを犯したのだ。新婚旅行だなどといつて、自分のしあわせを天下に見せびらかして歩いている、それはその罰です。あなたはすべての男性に犯されるために旅行して歩いているようなものです。あなたと夫君はアライヤ人の故智にならなくて、あなたを黒衣で包み、眼だけほかの男に触れさせるべきではなかった。

汗を流して、ようよう探して、たまたま通風に面した三階まである窓全部が暗く、寝しきっていた。暗い予感が身内をゆさぶり過ぎた。薄汚れた暗いコネクリトの段を登り、地図にあった通り三階の右端の部屋の前まで行く間、私は次第にしばんでゆく期待を魅めるのにおおわらわであった。そしてようやくたどりついた廊下のドンづまり、仙台から数百キロにわたってつながっていた廊下の

ドンづまりに待つていたものは、暗い沈黙とドギレセロテープで張りつけてある一枚の紙きれであった。山の開き、大群の、いかに

急用のため留守にします。
鍵は一階左端の管理人室にあずけてあります。K

六
今、私は部屋の中にいる。胸ポケットに秘めた写真を取り出して確かめるまでもなく、あの部屋であることは確実だ。そして今すぐで決まる位置も、あの写真を撮ったカメラが据えられた客の位置と同じであることも、断言できる。部屋そのものはこうして確実に存在し、私自身がその中に身を置いていたのに、部屋に生気を与え、私をあはれほど心はやらせた彼女の姿はどこにもない。そして彼女の姿がないという事実が、部屋そのものの存在をさへ空虚に感じさせる。この部屋の奥に、私が今すわっている部屋へ従ってカメラが据えられた部屋へは道路に面した窓のある部屋で、その窓を背にすると、右手の壁際に私が存在を予想していた三面鏡と洋服だんすがあり、左手は開き戸を通じて板敷きの小部屋

が隣接している。この部屋とその次の部屋の襖は今日も開け放されているが、小部屋に通じる開き戸は閉じられて、彼女の背負った柱は、その開き戸にはさまれて半ば姿を没し、それが晒し柱の役目を果たし得るという可能性をそじらぬ顔で隠しておおせている。ただわずかに他の柱にくらべて木肌がどす黒く脂じみて見えるのは、彼女（たち）の流した汗がしみ込んだものである。写真の、次の部屋は、左手に写真にうつっていた観葉植物の鉢をのせた棚があり、右手は押入れになつていて、畳の上には、見なれた竹の模様の絨氈がそのまま敷かれ、今日はテーブルがのつていて、テーブルの上には吸いさじのつまった灰皿、かきやまの食べ残し、マッチ、湯呑み。そして更にその向こう、写真の一番奥にあたる所は、ドアをへだてて左手に流し、右手に便所と風呂場、そしてその中央がこのアパートへの入り口になつていて、私はさっきから、コートを脱ぎ、気力さな

くベツタリ坐り込んで、眼の前に現実と虚のた部屋の空虚の中に、彼女の裸身を置くこととむなしに努力を続けている。しかし、古戦場とか、或る事件の現場に立っているという実感がもたらすあのなつかしい感慨は湧きはず

るものの、彼女のイメージだけは遂に私の脳裏に小さくくずくまっているばかりで、今眼の前にある柱の前に立ってくれようとはしないのだった。

私は、開き戸を開け放って柱を孤立させてみたらあるいは——という着想にうながされて立ち上がり、開き戸を開けた。板敷きの小部屋はK氏の書斎らしく、窓際に机と椅子、書物やら原稿用紙やらが、その上や周囲に乱雑に積み上げられていた。

私は再び元の場所に坐り込んで、今や戸を開け放たれて、ボソッと立っている柱に対して。しかし結果は前と変わらなかった。そしてそんなことまでしてみた自分の行為に、かえってうそ寒ささえ感じだして眼をそむけた。もう一時近い。アパートの中はもちろん、前の通りにも物音は絶えているのに、遠くはるかから地鳴りのような物音が絶えず耳の底を流れ続けていた。それは大都会の夜の音なのであろう。私は先刻歩道橋の上から眺めた、もののけのように両眼をギラギラ光らせた大都会の濁流の情景を思い浮かべた。あの流れは終夜絶えることなく続くのであろう。彼らもまた、私と同じように幻に憑かれて、千里の道を遠しとせず駆けずりまわっているの

あろうか。

私はテーブルの上に灰皿でおさえてあったK氏の書き置きを再び手に取った。

「よんどころない用事ができて家の方へ帰らねばならなくなりました。まことに申しわけない。またの日にくっこの埋めあわせをさせていただきます。今夜はアルバムの写真と酒で、せめて気分をまぎらせてください。アルバムは机の下に、酒は台所にあります。明日お電話します。K」

薬半紙に濃い鉛筆の走り書きである。私はそれを幾度か読み返して傍に置いた、似たような失望は以前にも何度か味わっているの。今更怒り狂う気持ちも起きないのだが、それでもやはり、有頂点にはやりたっていた気持ち、はぐらかされた苦味はなだめにくかった。それは、仙台を出た車窓に遠く眺めたあの灯が、しばらくは私の心を魅きながらやがて無名のまま、視界から消えてしまった、あの遠くうつろいゆくものにあまりにも執着し過ぎた後悔にも似た感情であった。

私は気を取り直して座を立ち、小部屋の机の下、書籍の山の間から、大判のアルバムを抜き出して来た。

そこにはキャビネ判に引き伸ばされた数多

くの女たちの、さまざまなポーズが貼りつけられていた。すべてが公表をはばかれる種類のものであることは言うまでもない。あらゆる羞恥を強制された美女たちのさまざまな表情がそこにはあった。おそらくK氏の好みにかなった選ばれた女たちばかりなのであろう。姿も顔もみな人並みにすぐれて美しく、対象に選ばれた女の数の多さにも眼を見張られるものがあつた。

それらに心を動かされなかった、と言えば嘘になろう。しかしアルバムも最後になったあたりに、突然出現した彼女の一連の写真を眼にした時の胸のときめきにくらべれば、それまでの写真など、ものの数ではなかった。私ははやる心をおさえながら台所から八分ほど入った一升びんとコップを運び、一杯グイとやってから、あらためて写真をじっくりと鑑賞し始めた。

それは彼女が次第に裸にされてゆきながらさまざまな形に縛られた様子を順に追って撮ったものであった。

まずスリッパ姿で簡単な後手縛りのものが数枚ある。横坐りのもの立ったもの、全身像上半身だけのもの。どれも私が今背を向けている窓に立ててあるガラス障子を背景にして

ギコチない表情。スリッパは胸と裾にフリルのたっぷりついたドレッシイなもので、これが彼女を幼なく見せている。スリッパの裾の長さから推測すると、彼女はミニを着ていたことがわかる。中に一枚だけ三面鏡に向かっているのがある。後手にくくしあげられた背中をこちらに見せ、表情は鏡に写し出されている。おそらく生まれて始めての自分の縛られたポーズを鏡で見させようという、K氏の意地悪さから出たものだろうが、写真そのものとしてはあまり力のあるものではない。鏡に写った彼女の照れたような口元は、むしろK氏の意図に反するものではなからうか。

次に、パンティとブラジャーだけになった彼女の、両手をガラス障子の上の欄間に吊られた立縛りのポーズが数枚続く。彼女の照れた表情は時に伏し目になって羞恥をのぞかせる。形よく張った腰を覆うパンティはおそらくピンク地に白い小花を散らしたもので、やや野暮ったいブラジャーと対照的に、いかにもなまめいたムードを出している。この吊り縛りは始め足をくくらずにあって、爪先立ちになっているのだが、後のものになるとそんな姿勢で腕にかかる力をゆるめることに疲れたのか、かがとを降ろし、腕が逆になっすぐ

に伸びてしまっている。遂にブラジャーが取り払われる。両手は頭上にくくったままだから、ゆるめられたそれは腕を伝って頭上にたぐし上げられ、手首の縄にからめてある。足首が縛られたのは、おそらくブラジャーを剥ぐ直前だったろう。くくられた足首をねじるようにして左膝を前に曲げて腰をひねり、次にパンティーが剥ぎ降ろされるのを拒むような恰好を無意識にとっている。両腕を頭上に捧げた恰好なので、乳房は上に吊られてやや平べったくなっている。みごとに均整のとれた体だ。

柱が登場するのはその次である。パンティだけの姿のまま柱の所に押し立てられた彼女は、まず胸に縄をまわさない後手縛りにされる。そのかわり脚の方は腕と同じように柱をはさみ込むように縛りつけられる。この乳房と腹とを突き出した恰好になる羞ずかしいポーズに、彼女はカメラから顔をそむけ脚を内股にしようとして爪先に力をこめている。この閉じようとする脚の力をはばむために、脚のいましめは嚴重をきわめている。

やがて足のいましめは解かれた代りに、腕の方は今度は乳房にまで縄をまわしてあらためて入念に縛り直される。そして私があれほ

ど胸に秘めて旅の道連れにして来た写真がある。私の推測はほとんどあやまっていなかった。足元の布切れはこうしてキャビネに引き伸ばされたものを見ると、パンティにまぎれもなかった。こうして一糸まとわぬ姿にされた羞恥に両脚をよじり合わせた彼女に、次にどのようなポーズが強制されたか。

まずK氏のやったことは、足首を縛り上げて彼女から羞恥をかくす自由を奪うことであつた。そしてその姿は左から右から正面から幾枚となくカメラに収められた。彼女は始終顔をそむけた表情をきつくして羞恥に耐えている。ここに彼女は女子大生という肩書きもピアニストという教養も、すべて失い、ただの女としての生き身をあからさまにさらけ出している。しかしそれで終わったわけではなかったのだ。

およそこの場に不似合いな金属製の脚立が持ち出される。それを水平になるまで開いて彼女の足元に横たえる。丁度梯子を横たえたような恰好になる。K氏はニヤニヤしながら身をかがめて足首のいましめを解く。

「さ、あんよを開くんだよ、お嬢さん」とK氏が言ったかどうかは知らない。が、そのようなポーズを取らされるまでに、羞恥

の呻きや身悶えがあつたろうことは想像にかたくな。彼女は脚立の横木に開かされた足首を縛りつけられたのだ。足首の間かくはおよそ一寸五分。くちくちと、爪を立てた。

彼女は白いのどを見せてのけぞっている。腰をよじるようにして引き、膝を内側にねじるようにして、少しでも羞恥をカメエの眼にさらすまいとしている。乳首が固く突き出てその鋭い影が乳房の肌に落ちてゐる。そこで写真は終つていた。地獄の闇、地獄の闇、酒の酔いで、私の眼はチラチラも始めていた。そのチラつきが写真の彼女の身悶えとも

告白

サド開眼

有川 章

哀れな女、ため子。オレの妻である。だがしかし、全くの「名だけの妻」で実体は「おさんどん兼モデル」である。といつて、ハダカにして、ひつくくったり、ブラ下げたおしてぶっ叩くためのモデルではない。ぶっ叩くのは彼女のほうで、つまり、オレのマゾに奉仕？ させるためのモデルなのである。

「わが妻、ため子」は、三十三才で色黒、容貌きわめて悪く、精神薄弱、つまり白痴に近い女なのだ。強いてとりえといえば飯炊き、

錯覚された。私はいつしか、自分がこれらの写真が撮られた現場にゐることを意識の外に追いやつて、再び写真の世界に没入してゐる。うとしていた。しかしその写真も、今やあの一枚の写真だけを手にしてはいた時ほど私の想像をかきたててはくれなかった。想像の余地はほとんどなかった。もしあつたとすればあのポーズの後には何が起るだらうか、というところだけであつた。何が起るか、それは想像ではなくて、少なくとも一枚の写真によつてかきたてられた様なほのぼのとした想像ではなくて、下司のカンタリに過ぎない

掃除ぐらいのことで、他は何もできない。三十三才という年齢はいわば爛熟期であるが、性欲すら起らないらしい。もつとも「女は受け身」だから、オレのほうから誘導してやれば……いや、とんでもない。考えただけでも吐気がする。ただオレと妻との間の性的つながりといえば、「オレのマゾ」がその役目を果たしているだけにすぎない。女に責められる、ということにしか快楽を覚えられないオレも、普通の人間が相手ではとても自信はない。内気がじゃましてテレク

ものであつた。私はそんなカンタリは中止して、眼の前の写真に気持ちを集中するように努めた。いよいよ眼を開くとき、はきかき

もう二時ほどに過ぎている。大地の轟きをおぼせる騒音は「果てる所なく続いていゐる。そのふせ深夜の静寂が身にじみるよふだつた。酒はもう三分の六ぐらいに減つた。眼はチラチラするくせに、頭のシメは冷たい牙え渡っている。そのシンが足搔くようにイライラと何かをまさぐり、求めてゐるのを見据ながら、私は更に酒をあつた。いよいよ中

ささのほうが先にたつ。白痴に近い無感覚な女、ため子が相手なればこそ、平気で溺れこみ夢中で悶えることが出来るのだ。文藝的珍しく積うた雪を見ているうちに、オレは強い誘惑を覚えた。いかにも冷たそうな真白な雪が、燃え上つたオレには絶好のシトネに映つたのだ。早速、ため子呼んで仕度をさせにかかつた。いよいよ文藝的、文藝的

オレはプレイ？ の時いつもため子には六尺鞭をさせることにしている。「フンドシのお玉」というアバズレ女のイメージだ。このアバズレが、鞭打ち、吊り、足蹴り、水責め等の責めを受けて、マゾの満足に浸ること

が目的なのである。

しかも悲しいことには、この「フンドシのお玉姐さん」の動作表情は全くのゼロ。バカの一つ覚えで、オレが教えこむのに苦労したセリフのうち「くやしいか。ザマみる」の「コシ文句？」を、文字通りの棒読み式に口はしるだけで、ムードも何もあつたものではないのである。しかし、オレとしては仕方ないことで、絶対にため子の顔を見ないで、自分自身に「ムネンだ、ザンネンだ」といいきかせて、もがき廻り、苦しみ抜いて「マゾ」の桃源境に飛び込んで行くようにしているのである。

命ぜられたまま、ロボットのように動き、オオムのように「くやしいか。ザマみる」だけくり返す「稀代のサド女、フンドシのお玉」……。少しでも、その感情を現わしてくれば、とプレイ？ 毎に思うのであるが、所詮は「望み得ぬ夢」と諦めていた。

白雪皚々……とまではゆかないが、白く装いつくした雪の庭が呼ぶようでオレは渾一本になるやいなや飛び出した。

ドッと倒れ転がったオレの裸身が、氣もちよく雪形をつくる。凍りつくような冷たさが、オレの身内の燃え上りに益々油を注ぐ。

やはり寒さは感じるらしい。フンドシのお玉が、色の黒い肌に寒いぼを立てて、オレ

の傍に、ぼそッと、つつ立つ。

「蹴るんだ、力一杯」

そり身になった大根足が、オレの脇腹に当るのに調子を合わせてゴロリと転がる。

「そうそう。もっと強く！」

数回、転がったが物足らないので皮鞭をとって来さす。ため子は、割合に力はある。

ピッピッ、と唸りを生じてとんでくる鞭は足蹴りの数倍の威力があり、オレは本当の呻きを洩してノタ打った。

「くやしいか。ザマみる」

テーブルコーダーが一週転する。まるでムード壊したが仕方がない、我慢しよう。

雪中責めを受けられるチャンネルは、そうそう望めるものではない。存分に楽しむべきであらう。ため子には気の毒だが、済んだらすぐ風呂で暖めて、あつたかい物でもごちそうしてやろう。

いつもの筋書き通り、オレの渾はムシリ取られ、所かまわぬ鞭の雨にノタ打ち廻っていたのだが、転げた拍子に眼にとびこんできたため子の渾に、思わず顔を忘れた。

プレイ用に締めさす、いや、締めてやる渾は、いっつも洗いたてのものである。しかも、

彼女はボソッとつつ立っているだけで、雪がつくともない筈なのに、明瞭な汚れが認められたのである。オレはドキッとして、プレイ中は絶対に見ないというタブーを破り、フ

ンドシのお玉の顔を見上げた。だが、もしやという直感を裏付ける表情はなく、いつに交らぬ、ポヤーンとした顔付である。しかし、眼のうるみだけは、常に見られぬものと感じとれた時の嬉しさ。

哀れな女「ため子」……この白痴女に、せめて本能の一つである性の悦びが開眼されたら……。勿論、サドに開眼してくれることをオレは望む。オレを責めることに性を感じ取って欲しいと願う。しかし、この時の嬉しさは、嘘いつわりなく、ため子自身のことを想ったの嬉しさだった。性欲すら覚えないうらしい女ほど哀れなものはあるまい。それが、明らかに受感の徴候を現わしているらしいことに對する祝福の嬉しさだったのである。

もしこれが、雪に全裸身をまみれさせて転げ廻っているオレによつての受感であれば、オレのマゾにとつて、正に画期的な福音であるが……と考えたのは、その、彼女のために嬉しいこと、と思つた後に湧き上つてきた希望であつたのだ。しかも、その可能性は充分である。現にプレイ中で、オレを鞭打っている最中なのだから……。あの文句を……。オレは、涙ぐみ想いで、ため子の渾に目をこらして見た。その背中に鞭がまた、思わぬ呻いてつゞ伏したオレの背中を、のんびりした声が落ちてきた。……（終）



M
の 傾 斜

壺^こ
中^{ちゅう}
の
園^{その}

2

真 砂 十 四 郎

4

三か月がまた三か月もたって、彼女が店に勤めるようになってからとうとう半年もたつてしまいました。

夏もすぎて、初秋を迎えたある夜のこと、郁子が私に話があるというのです。

私が掃除し終るまで郁子は店の椅子に腰かけてポツンと待っていました。「さあ、すんだ。で、話というのはなんだい？」と彼女の前に対面した私に「あたし、ここ、やめたいと思うの」と言うのです。

これにはドキッとしました。やめさせるつ

もりの郁子に、ドキッとしたものもありますが、そのときはドキッと吃驚する私になりはてていたのです。「なんでやめるのか、その訳は？」ときく私に、郁子の言う理由は、どうやら同僚の峯子にあるようなのです。

「あたし、嫌なのよ、あの人。文句ばかり言つてサ」

文句言われるのは当たり前なのですが、彼女の言い分によると、勤務中、峯子はことごとく彼女につらく当るそう。「あたし、辛抱しきれない」のだそうです。

「それでも峯ちゃんをよく働かし、このお店の先輩でしょ。あたしなんか、かないっこないわ。だからあたしがやめようと思うの」

これには私も困りました。

「ちょっと待ってくれよ。それはつらいだろうけど、辛抱できないかなア。僕がなんとかとりはからうからサ」

「イヤ、あたしイヤよ。あんな人、一しよにとても働けないわ。あたし、今月の末までここで働くけど、十月からやめさせてもらいます。その間に誰か他の人さがしといてちょうだい」

彼女の真意をききただしますと、結局郁子がやめるか、峯子がやめるか、とても一緒に

は働けない。だけど峯子は前から店にいる先輩であり、私よりずっと峯子の方が働き者であることは自分でもわかっていて。だから私がやめるより方法がないのだ……というのです。

私はぐっと返事につまりました。郁子をやめさせたくないのです。といって、峯子をやめさせることは……考えてもいなかったことでした。

「よし、しばらく待ってくれ、考えるから。二、三日うちに返事をするからね。それまでは今までどおり来てくれよな」

郁子はうなずいて、店を出ました。

その晩、私は目がさえて眠ることが出来ませんでした。理性はあきらかに峯子が優位で郁子など問題ではありません。しかし、私のとじた瞼の中にのしかかってくる映像は、峯子でなく、郁子の方なのでした。

「サテ、えーと、いったいどうしたものかなえーと……」

私の頭の中に峯子と郁子が比較されながら登場するのですが、コンピュータの答えなら一も二もなく出てくる結論に対して、私はとっ、おいつと迷いこむのでした。

峯子がやめたら商売には打撃だ。しかし、

その商売とはなんだ。これで生活しているのか。生活費が稼げているのか。貯金でもふえているというのか。どうせ内職じゃないか。

峯子一人のときはともかく、郁子と、二人も従業員をかかえて、経営は赤字とまでいかなくとも、ほとんど收支ぎりぎりという状態じゃないか。そんなら仮りに峯子がやめたとしたらどうなるか。店の評判は多少落ちるし、従って収入も減るかもしれない。しかし峯子がやめたら月三万円ほどの支出が減るし、結局いくぶん収入が減るとしても、人件費減で差引き儲かるかもしれない。儲からないとしても、とんとの成績なら今と同じじゃないか。收支の問題ばかりでなく、私の労働量もこれはふえるかもしれない。しかし店の掃除などを全部私が引受けるとしても、どれだけ労働量になる。たいしたことはないじゃないか……。

頭の中が左へ左へと傾いてゆくのです。

それから二日後、私は郁子に私の決心を打ち明けました。

「峯子をやめさせることにした。しかし、人はふやさないから、郁ちゃん一人でやってくれないか。仕事といってもご承知のような状態だから、たいしたことはないと思う。君が

来なかった前でも峯子一人で結構やれていたんだから、郁ちゃんにも出来ると思うんだ。そのかわり僕も大いに手伝うからね」

郁子は黙ってきいていましたが、ニッコリとうなずきました。

「じゃあ、君はやめないで、店にいてくれるんだね。そのかわり、ずっと来てくれるんだよ。僕もそれだけのことは考えるから……」

うん、うんとうなずいて店を出た郁子を見送って、私はホッと溜息をつきました。峯子に退職を言渡すのがいかにもつらいのです。しかし、甲をとるか乙をとるか、決心した以上しかたがありません。

それから数日後、私は峯子をよんで、店が儲からないこと、人手を減らさねばならないこと、しかし郁子は私がこの店を出すとき資金を出してくれた義理のある人から頼まれた娘で、簡単にクビに出来ないこと、などと、あることないことくどくどと説明して「これは少ないけど」と封筒に包んだ何がしかの退職金を峯子の前に出したのでした。

退職金まで目の前に出されて、今さら言うようもないのでしよう、峯子は私の説明をうなずきながらきいていましたが「わかりました。ではそうさせていただきます」と引下っ

が簡単に入ってゆくのをよく見うけるが、郁子だって同じことだろう。昔はホテルなどというものがなく、夏の海岸の浜辺に引上げてある小舟のかげなどを利用する若い男女があったが、今どきは何処へ行ってもホテルがある。教養もないし、品性もいただきかねる郁子が、実直に身をまもっているわけがないじゃないか。私の結論はそういうところに落ちつきました。

しかし、そうだからといって別にどうということはありません。私にとっては、むしろそういう女体の方が好ましいのです。

それから以後、私はますます郁子が好きになりました。

..... 6
.....

閉店時間後までお客がたてこんで、それからあのかたづけなどで遅くなったある日、「ああ疲れた」という郁子に「なんだったら今晚泊っていったらどうだい。おなががすいたし、二人でめしでも食おうや。料理は僕がしてやるし、今日は一つ、郁ちゃんをお客さんとして大いにサービスしてやるよ」と、試しに私は、さそってみたのです。

「そうねえ、どうしようかしら」

と彼女は迷っているようでしたが、

「サービスしてくれる……？」

「ああ、大歓迎。ウエルカムでサービスしてやるよ」

「でも、どこへ寝るの？」

「そうだなア、お客さんだから二階の六畳を提供するよ」

「一緒の部屋じゃイヤよ」

「もちろん。そうだな、僕は次の三畳の方に寝るから、安心しろよ」

「じゃア、泊ってゆこうかしら」

というぐあいだ、初めて郁子は私の家へ泊ることになったのです。

私は電気釜でご飯を炊き、冷蔵庫の豚肉と玉葱とキャベツをいためてポークチャップのようなものをつくり、ビールを一本添えて彼女と二人で食べました。

「案外いけるんだな」

器用にビールを飲む彼女のコップに、私はさらにつぎたしてやります。

「あたし、強いよ。洋酒だって平気なの」
娘同士ではあまり縁のない実相を彼女は暴露してくれぬ。

二階の六畳と三畳つづきの、六畳の方に客用蒲団を出して彼女の床を敷き、私は次の間

の三畳の方に自分の蒲団を敷きました。

「僕の浴衣だが洗ってあるからいいだろう。」

サア、この浴衣が君のネグリジェだ。どれどれ、僕が着せてやろう」

と、ビールの酔いでほんのりあかくなった郁子へ、スカートを脱がせるいつもの習慣にカモフラージュして服を寝巻に着かえさせようとしたが、ブラウスとスカートまではすんなりまかせていた郁子も、さすがにスリッパ以下になると

「イヤ、あたしがするから、あんた、あっちへ行ってよ」

と私の手を払いのけました。私は彼女から「もう泊るの、イヤ」と言われたら大へんですから、ポンと額を叩いて、さりげなく手をひっこめました。

「オヤオヤ、これは失礼。じゃア僕は次の間へ引下るからね。ゆっくり寝て下さい。枕もとに水、いらんかい？」

「いらんかい」

「では、お休みなさい。またあした……」
私は三畳の間で満ち足りた気持で眠りにつきました。

翌朝、目がさめた私は、そっと襖のすきまから郁子の部屋をのぞきますと、彼女はまだ

ぐっすり眠っています。

よし、よし、お目ざめにならない間に、朝めしの支度とするか……私は急いで寝巻を着かえて階下におり、流し台にそのままになっている炊飯容器を洗って再び米をいれてスイッチを押し、一方、小鍋に味噌をいれておつけの用意。冷蔵庫の生卵を二つ、一個ずつ小鉢におさめ、炊飯の間に大急ぎで顔を洗って彼女のお目ざめを待ちました。

大急ぎで立ち働いたのですが、時間の余裕はたつぷりありました。彼女が起きて階下へおりてきたのは、陽も高くあがった十時をすぎておりました。

「おはよう。よく眠れたかい」

「うん、眠れたわ。いま、何時？」

「まだ十時をちょっと過ぎたところだ。洗面の用意はしてあるよ。ハイ、これ」

彼女は黙って洗面台の前に立つ横から私は「ハイ、歯磨と歯ブラシ。新しいのだから使ってください」と差出すと、彼女はちらっと私をべつとして歯ブラシを受けとり、歯を磨きはじめました。私は彼女の横に立って、彼女の動きを見まもりながら「ハイ、コップ」「はい、タオル」と次々に差出して彼女の用をはたしてやりました。

「この歯ブラシ、使いいいわ。これ、私用の歯ブラシにしておこうかしら」

「うん、それがいいね。きちんと洗ってしまっておくからね。これから君が泊ってくれるときは、これを出すことにするよ」

うなずいて彼女は、拭き終ったタオルを私に返しました。

「家の方はどうする？ これから帰る？ それともここで朝飯を食べてゆっくりしてから店へ出るか……何処か呼出しの電話でもないのかい。あったら僕から電話するから」

「ううん、いいのよ。あとからそう言ったらいいの」

アルサロに勤めている彼女の姉だっていつも無断外泊するのでしょう。まずまずルーズな家庭です。

「もう、このままお店へ出るわ」

「ああ、そうかい。それならゆっくり朝飯でも食べよう。用意は出来ているから」

味噌汁と生卵と漬けものの朝食を郁子と私は、ゆっくり食べました。

その後、一週間に一度ぐらいの割で郁子は「あたし、きょう泊るわ」と言ってくれるようになった。

「おっ、サンキュウ、ウエルカム」と、私は

たちまち朗らかになり、閉店後は郁子の身のまわりのこと一切、彼女が何一つ身体を動かさなくてもすむように、私はコマ鼠のごとく立働きました。

だらしない郁子のことですから、家では母親に文句ばかり言われて暮しているのでしょうし、それより女王のようにしていられるこの店の方が、彼女にとってはおかたにいい気分でもあり、いわば勤務宿直のようなものであることなら住込みになってほしいようなものですが、サテそゝでは郁子も勝手がわるからう。ま、当分は、彼女の自由意志にまかせて、現状で満足するのが無難のようです。

私は内心皮算用しながら、せっせと郁子のためのものを買調えはじめました。

ネグリジェ、これはピンクのトリコット生地、地に白いナイロンが二重になった刺繍入り的高级品を買いました。羽根枕と、可愛いアツプリケのついた枕カバー、花模様の座布団、赤い座椅子、お化粧用の鏡、高級石鹸。そのほか、これは郁子がはじめて泊ったとき知ったのですが、彼女が寝間に入ってから吸うタバコの灰皿セット、等々々。郁子の月給ほど

の金額がたちまち飛出してしまいました、もちろん自分から好んで買い揃えているのですから文句はありません。

泊りも二度、三度と重なるにつれて、郁子は遠慮がなくなってきましたが、それと同時に、ますます私をなめてくるようになりました。郁子の蒲団のあげおろしなど、もちろん私がしてやるのですが、スカートとかストッキングなど、いつもそのへんに脱ぎすてたままですし、これは私が彼女の寝室から引下るとき、きちんとたたんで揃えておいてやりま

す。ところが朝はまた、脱いだネグリジェが蒲団の上に放りっぱなしなのです。まことに困ったもので……というところですが、実は私がいつも先回りして始末してやっているのですから、彼女もついつい私にまかせるようになるのはこれは自然のなりゆきで、当然かもしれません。

最近の私の「御神体」は、サンダルシューズからこのネグリジェに変わりましたが、郁子が泊ってくれる日は、もちろん彼女が生きた御神体です。出来ることなら、その御神体を直接あがめ奉りたいことは山々なのですが、しかし彼女だって若い娘ですし、人形ではありません。徒らに私が猪突猛進して、彼女に

嫌悪感を抱かせることはつつしまなければいけませんので、寝間に入った彼女に対しても私は「ではお休み」と極めてさりげなく装って部屋を出ます。襖を閉じて、次の間の三畳に引下って、サテ、それから其処が私の礼拝場所になり、彼女の寝ている六畳が御神殿になるのです。

私は音をたてないように彼女の寝間に向かって正座し、蒲団の中で、しどけなく両足をひろげて寝そべりながら、タバコを吸っている郁子に対して、とばりをへだてて土下座します。

「きょうの佳き日、わが願いきこしめされ給いて御降臨をたまわり、まことに有難くも恐れおおいきわみでございます。御尊きが上にも御尊き郁子さまの御玉体拝し奉り、もったいなさにひれ伏す思いでございました。何卒、御やすらかにお休み下さいますよう、郁子さまのおおみすがたを伏し拝みつつ、はるか、下よりかしこみ、かしこみて申し上げます」

と、口の中で唱えて、うやうやしく頭を下げるのです。普通の人からみたら「馬鹿々々しくも馬鹿々々しききわみ」ですが、そうして礼拝してから床の中に入ると、なんだかス

ーッとしたような爽やかな気持ちになるのですから、まったくもっておかしなものです。

7

秋もふけてきました。

郁子が泊る夜は、私はいそいそとして店も早めに閉めてしまいます。郁子は二階へ上って、私が用意した赤い座布団の上に坐り、足をなげだして座椅子にからだをもたせかけ、テレビを見ています。私は店の掃除をすませて、電気釜で御飯を炊き、夜食の仕度をするのが約一時間。以前は階下の調理場で食べたのですが、近ごろは「上へ持ってきて」と郁子が言います。私は大盆の上にすべてを調べて二階へ持ちはこび、テレビを見ながらの食事がすむと、再び食器を階下へ持っておりて流し台に重ねておく。それで大たい十一時ごろになります。

就寝は十二時ごろですから、食後の一時間ほどの時間を私は利用しました。

「郁ちゃん、供せいごっこ」っての、知っているかい？」

「なアに……。知らないわ」

「温泉なんかで芸者をあげて遊ぶときなど、よくやるんだがね。ジャンケンで負けた方が

勝った人のお供をするのさ。野球拳っての知ってるだろ。野球ウすウるなら、こういう具合にしやさんせ、ドドンがドン……って、二人でジャンケンして負けた方が着物をぬいでいったりする遊び。あれと同じなんだ。『供せい、供せい』と言いながら、二人でジャンケンして、一方が負けると、『何になって供せよ』と言うんだ。すると勝った方は『奴になつて供せい』とか、『犬になつて供せい』と言うと、負けた方は供奴の形をしたり、四つ匍いになってワン、ワンと言いながら勝った方のあとへついて回るんだ。それで座敷を一回りすると、また『供せい、供せい』とジャンケンするのさ」

「ふーん、面白そうだけど、あたし負けたらイヤだわ」

「勝ち負けは時の運さ。わかったら一ぺんやってみようか。さ、ジャンケン……」

瞬間的のジャンケンでは、まず彼女はハサミを出すことは研究済みです。調子につられて手を出した郁子はハサミで私はカミ。

「あっいけねえ、負けちゃった。ええと、何になって供しよ？ 何になって供しよ……」

「何か言わんかいな」

「あらア、何がいいだろ、ええと……」

「犬になつて供せい、はどうだい？」

「犬になつて供せい」

「よし、ご命とあらば、ぜひもない。ほら、ワン、ワン、ワン」

私は四つ匍いになつて彼女のあとをお供して座敷をひとまわりしました。

「さ、もう一ぺん、ジャンケンポン」

彼女は最初ハサミで次がカミとは一応研究しておいたのですが、百パーセント思わくどおりにはいきません。私が勝つこともあります。そんなときは『兵隊になつて供せい』とか『兎になつて供せい』とか簡単などころでお茶をにごしておきます。で、郁子が勝ったときをねらつて

「ええと、何がいかしら、ええと……」

と迷う郁子に

「馬になつて……はどうだい？」

「馬になつて供せい」

彼女はこっちの誘導にすぐ釣られてしまいます。

「よし、さあお馬だ」

私は彼女の前に四つ匍いになつて背中を提供します。

「しかたがない。さあ、お乗り……」

とまどっている彼女に、私は

「さあ、さあ、お馬だ。お馬だったら乗らなきゃならないじゃないか。ひと回りぐらい平気の平左さ。さあ乗った、乗った」

たたみかける私に、郁子は思いきったようにドスンと私の上にまたがります。

「ヒ、ヒーン」

と私はひと声いなくて、六畳の座敷を回りはじめました。

こうして数回ジャンケンをくり返している間に、私はお馬を何回もつとめるようになりました。ミニスカートはまたぐのも簡単ですが、両横から出ている彼女のたくましい足の素晴らしさには、馬も頭にきてしまいます。タオルのまん中を口にくわえて、両端を首からまわして、乗っている郁子に持たせ、郁子が引っぱる方へ回つては匍つてゆくうちに、彼女も面白がつて「ドウ、ドウ」と、ふと腿で、私の脇腹を蹴ったりするようになります。

「このへんで、どうじゃ？」

「もっともっと供せい」

しまいにはジャンケンを無視して、彼女は私を馬にしたまま三回も四回も回らせますので、さすがに重みで腕が動かなくなり、郁子に乗せたままへたばつてしまいます。彼女は

S.C.R. (性問題相談室) 案内

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

私の上にまたがったまま私の頭を平手でピシヤ、ピシヤと叩いて「ほら、もっともっと供せい」とお尻をゆさぶります。私は「うーんこれは参った、参った」と言いながら、再び勇気をふりしぼって腕と膝をあげ、よたよたと座敷を回ります。

タオルの手綱は、まん中を私がくわえていますので、彼女が右でも左でも引っぱった方に否応なく私の首がまがります。彼女の意志のまま、右へ回ったり、左へまわったり、あるいはクルリと一回転したり……。食堂ガールや女店員をしていた、高校も出ていないミィーハ嬢に、大学出のインテリで、彼女の雇主である私が馬にさせられて、座敷をハアハア吐息をつきながら匍いまわるのでした。

郁子はどっちかという大柄な方で、一六〇センチを越しているかもしれせん。同じ一六〇センチの私より、靴のヒール分もはいつていまいしょうがだいが背が高く、体重も五五キロ以上はあるでしょう。こういう娘にまたがられて座敷を何回も匍いまわるのですから、私もへとへとになってしまいます。しかし、このあとまで残る重量感は、その夜の私の「御神体拝礼」に、今までにない荘厳感を加えてくれました。

(つづく)

転 向

その夜、下目黒の怪邸は灰燼に帰した。折からカラカラ天氣が続いて乾ききっているところだったから、たまらない。消防活動は辛うじて類焼を喰いとめただけで、例の建物は焼けるにまかせられたのである。焼跡から男三人、女一人の死体が発見された。男の一人は、せむしだった。

この時点では誰も、この邸と世田ヶ谷とを結びつけて考える筈はなかった。しかし、ここにも、もう一つの動きが始まっていた。

学生運動の退廃化した側面として、マリファナの流行があげられる。学生たちに、この麻薬を売りさばいている下手人を内偵していた警察当局は、早くからジャンヌをマークしていた。そのジャンヌが時々訪れる蔡の家も当然、司直の目をのがれるわけには行かなかった。それをたぐって行くと、美少女林美玉が網の中に入ってきた。それでも、まさかこの少女が国際麻薬シンジケートの女ボスであることは考えも及ばないことであった。

林美玉を追うと、当然、世田ヶ谷の家も蔡樹理にも捜査の手が及んで行く。蔡樹理が青帮の人物であることは知らないとしても一応

の嫌疑を避けることは出来ない。それとなく見張りがつけられる。

シンジケート側は、これを奇貨とした。虎穴に入った林美玉である。かえって当局の動きを蔡樹理が疑わしくなるように牽制するとは造作もなかった。

何回かタレ込み情報や陽動的な事件が出てくると、麻薬捜査官たちも本気で蔡樹理を追うようになる。

蔡は自ら麻薬シンジケートと闘う立場にありながら、かえって麻薬容疑をかけられるという皮肉な結果となった。そして、丁度、下目黒の邸が焼けた翌日の早朝、令状が出され



て家宅搜索に踏み込む予定になっていたのだ。
った。

一方、ジャンヌの仲間たちも彼等独自で彼女をさがしていた。いつ警察にパくられるかわからないので、皆、その身の上を心配していたのである。二、三の幹部には林美玉とすることも、世田ヶ谷の住所のことも詳細にしらせてあった。ところが警察官を買収して聞き込みをやっていたレポ情報が、早朝の手入れを教えてきた。電話をしても危険だからというので、この際は大勢揃って行って万一の場合にはジャンヌを救出しなければならぬと学生らしく一本気に思いつめたのである。

—○—

前号まで「有明をつけねらう麻薬シンジケートの一味は、彼の秘書野沢洋子を誘拐し凌辱を加えた。有明が救出を図ったときは既に手遅れで、洋子は舌を噛んで自殺してしまう。相手のボスは有明の変名だった蔡の家に潜入していた美少女林美玉だった。これにジャンヌこと女子大生の小林敏子がからむ。敏子は美玉とレス関係が出来て、そのまま美玉の手下となっていたのである。麻薬組織から敏子の手を通じて斗争資金がカンパされていた。」

まだ人々が寝静まっている早朝、ヘルメット姿の学生が新宿からの一番電車に乗って、小田急経堂駅におりたのは相当目に立つことであつた。人通りが、それ程多くなっていないう内のこと、丁度、蔡の家に乗り込もうとしていた警察のパトカーとトラックが差しかつたところへ鉢合わせをしたのだから、たまらない。狭い道だから、あたかも学生たちが、それをさえぎるように思われた。一方、学生の方にしても、警官が彼等を不当に弾圧しようとしているかのように錯覚したのである。

誰かが、石を投げた。ホンの偶然のような一石が案外、大事件になることがある。突発的に乱斗になってしまった。静かな屋敷町だったが、たちまち蜂の巣をつついたような騒ぎになる。

しかし、いつの場合でも装備のすぐれた警察側の優位は動かし難い。次第次第に追いつめられて行き、最後に逃げ込んだのは蔡の寓居だった。頑丈なブロック塀で、庭も広かったから結構、バリケード代りになった。

学生たちは、ここで息を吹きかえたように、又もや大声を出しはじめた。あたりは弥次馬で立錐の余地もない。ジャンヌの子分と

いうからには女子学生も多かったから、それだけ群衆の同情を買ったのかも知れない。弥次馬の中には、学生に味方して石を投げる者も出る始末だった。

—○—

悲劇の行なわれた怪邸から、有明が連れ戻ったのは、キリキリと縛り上げられた林美玉だけだったのである。

これも縛られたままのジャンヌの前に、林美玉の身体を邪怪に投げ出しながら、有明はこういったものだ。

「ジャンヌ。この林美玉は、おまえの姉さんを苦しめぬいたばかりか、なぶり殺しにしましたのだぞ」

このひとことが、ジャンヌをしてコペルニクス的な転回をさせた。すなわち、敵が味方に、味方が敵に変わったというわけになる。

しばらく声をはなつて哭くばかりだったがやがて泣き濡れた顔をキッとあげて、

「殺してやる！」

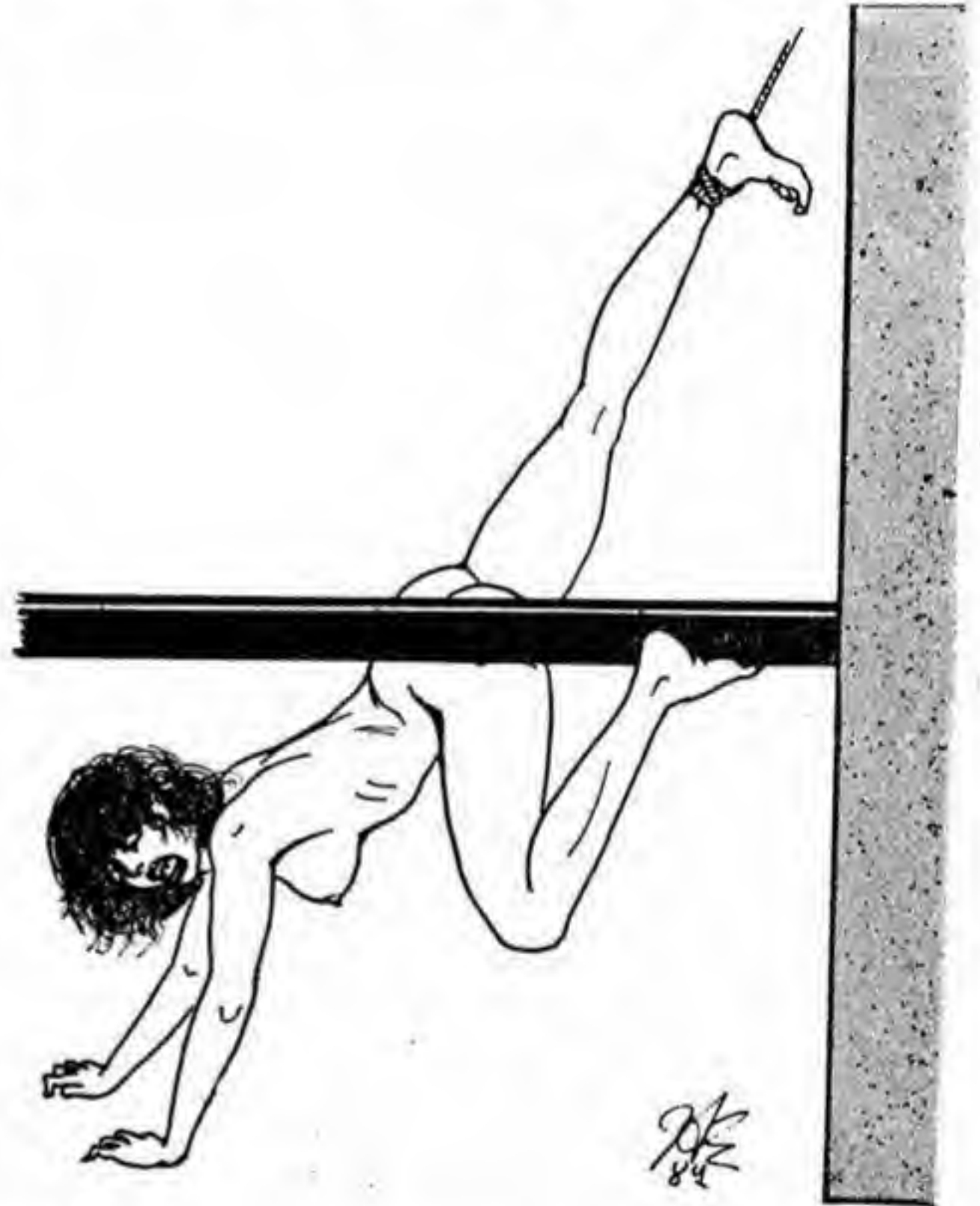
と叫んだ。

この辺に有明の、ずるさがあつた。実際、林美玉によって辱かしめられ、舌を噛んで自殺したのは野沢レイ子だったのに、ジャンヌには実の姉、敦子だと説明している。もっと

さかのぼると、野沢レイ子を誘拐したとき身代りとなって死んだのが、本当の小林敦子だという秘密がある。だから、ほんものの小林敦子を殺したのは有明自身なのだ。しかし、今有明がそれをいいさえしなければ誰も真実を知らない。むしろ、世田ヶ谷の怪邸で焼死体となつてしまった哀れな女の名は野沢レイ子と名のつていたけれども、本当は小林敦子だったといつても差支えないのである。今の有明には後者をとつた方が、ジャンヌを味方につけるために、遥かに好都合だった。

こうして、ジャンヌこと小林敏子は林美玉に対して復讐心を燃やし、有明の側に寝返つたのである。

「サア、もう君は自由だ」



ペリペリとテープが引きはがされて行く。うぶ毛がひきつれる痛さ、その痛みも、もはやジャンヌには感じられなかった。

手足が解放されるやいなや、ジャンヌは林美玉に飛びかかつて行った。

さすがの林美玉も恐怖の悲鳴をあげた。自分のしたことがいいわけも出来ないものであるだけに、ジャンヌがおそろしかったのである。よりによって囃りものにした有明の秘

書がジャンヌの実姉だったとは。かつて互いにその肉体のすみずみまで知り合っていた仲だっただけに、瞋恚の鬼と化したジャンヌの所業は、隠惨なまでに林美玉を責めることになる。

例の呂親分が加えたサディスティックな拷問さえ、耐え忍んだ林美玉である。こんな細い身体がと、信じられないほど強靱で、しなやかだった。おそらく本土で何か特別な訓練を受けた故かもしれない。外部から加えられる力の拷問には不感症といつてもよい位だった。

その林美玉が、どうにもならない弱点があった。それはクスグリに弱いということである。特に秘部に加えられる柔軟な刺戟には死ぬほどの反応を示してしまう。しかも、どんな状況下でも差異がないというのが特徴である。

レズ仲間だったジャンヌには、それがよくわかっていた。しかも、ジャンヌは学生運動家として、いろいろな機会にリンチを受けたり、又、リンチを行なったりした経験を積み重ねていた。そんなわけで、ジャンヌの行動には、ためらいが見られなかった。

セントラルヒーティングの配管が入り組ん

でいる地下室の天井に、あり合わせのロープをひっかけて林美玉の右足を高々と吊り上げる。中途まで引きあげたところで手足のいましめをほどいてしまっているから女の手でも楽々と引きあげられるのである。股が引きさかれそうになる苦痛、林美玉は引かれまいとして床上一メートルあたりを横に走っている排水パイプに自由な方の左足をひっかけてリキんでみたけれども、それがかえって悪い結果となった。左足が支えになって上体が横に浮き上ったのである。床を支えていた手が宙に躍った。

こうした姿がジャンヌに一つのアイデアをあたえてしまった。

ロープを固定したジャンヌは、再び林美玉にとびかかって、着ているものを何から何まで、むしりとってしまう。片足を逆吊りされていては大した抵抗も出来ない。アッというまに、剥き玉子のようにスベスベした林美玉の裸身が、あますところもなく曝される。

「アイヨー」

林美玉が泣きさげんだ。

右手首をくくった、もう一本の細引が天井のパイプにひっかけられて、キリキリとしぼられて行ったからである。足のロープと手首

の細引きとが通された位置は、互いに部屋の両端に近い。つまり右手、右足共に斜め上方に吊り下げられたわけで、嫌も応もなく横大の字の恰好になる。更に左手首、左足首が、それぞれ紐で床に固定された。

苦悶する林美玉と大わらわで活躍するジャンヌとを等分に見ながら、有明は無表情に立ちつくしていた。

「ギャーッ」

今度こそ、ありったけの聲が口を突いて出てくる。見ると、ジャンヌのしなやかな指先が触手のように動いて、林美玉の最も弱いクグリ責めをしはじめたのである。あるいは強く、あるいは弱く、又、時としてベルを打つようにテンポを早めたり、そうかと思うともどかしげにうねる白い太腿をジラすようにノロノロと、ジャンヌの指は尺とり虫のように這い廻った。

みるみる全身から滝のように汗を流した林美玉は、刺戟の加わるたび毎に絶叫し、四肢を引き吊っている綱やロープをひきちぎろうとするかのような勢いで身もだえをするのであった。しかし、もとよりガッチリと結びつけた縄目は、ゆるむ気配さえない。

硬直した乳首から、ポタポタと汗が床に落

ちていた。普段より一まわりも大きくなったように見えるバストは、ブルンブルンと揺れて、油汗に蔽われた柔肌が磁器のように光って見える。

嵐のような衝動の前に、手足を横に吊られた痛みどころでなくなってしまったのである。うか。ホンの数分も、たたないというのに、林美玉の動きは正に狂人のようになってしまったのである。特に力のかかる右の手首と、左の足首は擦りむけた皮膚が更にコスられたため血が噴き出して来ている。

何をワメこうが、哀願しようが、これも頭にきてしまったジャンヌの耳には、入りようもない。昂奮した彼女はバンドのドラマーよろしく、全身で拍子を取りながら、あらゆる急所をたえ間もなく追求して行く。

矢もタテもたまらなくなった林美玉の内臓から、汗はおろか小水はおろか、遂にはピクピクと五体がおこりにかかったようになってあらゆる体液が洩れ出してしまう。それは、あたかも酒を入れた羊の皮袋が破れて中味が噴き出て行くように見えた。

何度かの繰返しがあつて、最後の悶絶が行き過ぎてしまうと、さすがのジャンヌも疲れきって責め手をゆるめた。

息もたえだえになった林美玉は、ウワゴトのように蔡の名を呼んだ。もう、敵味方の区別も忘れてしまったらしい。あるいは恩讐を超えて蔡の助けを求めようとしているのであろうか。

有明が進み出て、林美玉の髪を掴み、その顔を近づけながら、

「しっかりしろ。自業自得だとあきらめるがいい。おまえはこれからの一生、したことの償いをさせるからな」

と中国語でいった。そのゾツとするような声の調子は、有明ではなくて蔡樹理のものであった。これにはジャンヌもおどろいて棒立ちになってしまう。

何と蔡と有明は同一人物だったのである。秘密結社の人間には、いくつもの顔がある。

蔡も有明の顔の一つだった。

うつすらと目を開いた林美玉が、それでもかすかな声でささやいた。

「蔡のおじさん、タ、ス、ケ、テ」

—○—

やつのことで学生達を排除した警官隊が蔡の家に入ってみると、中はモ抜けのカラであった。手伝いの婆さんだけが、ちぢみあがってオロオロするばかりで、何の手がかりも

つかめない。巧みに疑装された抜け穴は結局発見されなかった。

その頃、厳重な警戒非常線を、外交特権を示しながら悠々と通って行く有明の車は、もちろんホテルOを目ざしていたのである。トランクにはジャンヌに代わってジュークボックスに呻吟する林美玉が、かくされていた。改心して有明に服従を誓ったジャンヌは助手席にいる。

脱 走 兵

これまで二十回以上もダラダラと繰返してきた誘拐劇も、この辺で終りに近づいたことになる。原子力潜水艦ネプチューン号が航海するところ、世界中のあらゆる場所で必ず若く美しい女性がさらわれて行く。行方不明とか失踪とかいうと世間を騒がせるので、余程の時でないと同じような直接手段はとらないことが原則だった。むしろ、野沢洋子やマーサ・アマビスカのように替え玉を使って事故死に見せかける例の方が多いくらいだった。したがって、有明が目をつけた美女ともなれば、有名人でもあれ無名人でもあれ、それがいなくなることで自体、相当の話題にならざる

を得ない筈であるのに、誰もいくつかのケースを結び合わせて、考えることが出来なかった。わずかにインターポールのピエール捜査官が不審に思い、新津を招いて協議した事実があるにすぎない。

新津も、身をもって体験したことから、何としても得体の知れない敵のペールをはごととヤッキとなったものだが、その都度、失敗し、今や有明の手中にある。

ネプチューン号の今度の航海で捕獲した女性の頭数は信じられない程の数に達した。少数の例外を除いて、すべて真ッ裸に引き剥かれ、巾、高さ共80センチ、長さ1メートル60センチしかない「セル」の空間に、カイコ棚のようにして格納されるのだから、狭い潜水艦の中でも前部と後部の魚雷室、不要のミサイル室などを改造して五百近くのセルを用意することが出来たのである。

だからといって、この物語りがはじまってからの捕獲者全部を一回に運ぶことは到底、不可能だったということも知っておいていただきたい。ネプチューン号は地中海を出たとき既に満タンに近かった。そこへ、アラビア海での例の三十六個の「ドラム缶搭載物」を積み込んだのである。したがって、有明達が

ホンコンで活躍している間、一度、彼等の基地へ戻って荷揚げと補給を行なってきたことは疑いもない。

そこで、この物語りの本命は、この基地、つまり有明が苦心して築き上げた一大王国の有様を逐一、ご披露して行くことにあったということも、あらためて認識しておいていた

だきたいと思う。この点からいえば、今まで
はホンのエピソードとして、どうして有明達
がその人的資源を地上から求めているかを述
べてきたにすぎない。

—○—

さて、世田ヶ谷にある蔡の家が警官隊に襲
われた翌日、東京港には有明所有のヨット、

「希望」号がガボンの国旗を
ひるがえしながら入港して来
た。非公式ながら政府の要人
と経済援助についての協議を
成功裡に終えた有明友之助は
帰途を自分の持船「希望」号
に托して私的な航海を楽しも
うとしている。と、すくなく
とも、うわべは、思われてい
た。

例によって彼の荷物はガボ
ン大使館の証明つきだから、
全く検査がなされなかった。
いくつかの荷造りの内部には
彼の蒐集した生きている「標
本」が眠らされていた。その
うちの一人が林美玉であるこ
とは、いうまでもない。

ジャンヌはといえば、納得づくのことで正
規の手續をして出国することになった。ビザ
はガボン大使館によって発給された。

中一日おいて「希望」号は無事出航した。
そして、更に三日後ネプチューン号と再会す
る。その朝、よく風いだ海面に大きなゴムボ
ートを浮かべた有明は、再び麻酔薬を嗅がせ
た美女達を木箱に入れて、それに移乗したの
である。今度はジャンヌも木箱の中でねむっ
ている。その数、しめて六個であった。

ゴムボートを残して、ヨットは予定の航路
を、どんどん走り去ってしまった。機密保持
のため、「希望」号のクルーには、ネプチュ
ーン号の姿を見せたくなかったからである。
夕方になって、やっと浮上したネプチュ
ーン号に収容された。

—○—

ここまでは、まことに順調であつたけれど
も、ネプチューン号では大問題が持ちあがつ
ていた。アマゾン女兵の一人が脱走したとい
うのだ。二日前の深夜、熊野沖でひそかに捕
獲品を収容中、闇にまぎれて泳ぎ去ったらし
いということしか判明していない。その夜は
艦内待機の番で、下番のため早目に就寝して
いたので、誰も気付かなかったのである。翌



朝になって当直に起きて来ないから調べてみるとモヌケのからだだったという。そのとき、艦は既にもう、遠く紀州沖を離れていた。

この物語りの冒頭で、新津謙介を巻き込んだジョセフィーヌ・フリーエールの脱走事件があった。そのときはすぐわかったので、波止場で全裸のまま、かくれていたところを収容することが出来た。第一、ジョセフィーヌの場合は囚人だったから、逃亡を企てたのも理由がうなずけないこともない。しかし、今度の場合は数々のテストの後、立派に宣誓して任官した正規軍の将校である。よりによって、それが脱走したのでは秩序が成り立たない。

報告を聞くや否や、有明は直ちに予定を変更して、日本に引き返すことを命じた。それと同時に日本にも地下組織を作っている青帮の部下達に暗号で命令が出された。草の根を分けても逃亡しているアマゾン女兵、肉体番号B二〇三号、俗名杉本美和子を探し出せという内容であった。

「希望」号も呼び戻された。奄美大島東方百キロの海上で再びネプチューン号から移乗した有明達は「希望」号を全速航行させて、鹿児島に向かった。

二日後、鹿児島に入港するや否や、有明とジャンヌだけが上陸する。ジャンヌが急病にかかったというフレ込みである。あたかも、一味の者が鹿児島市内で開業していたから、丁度、好都合だったからである。ジャンヌは特別室に入院した。有明は城山ホテルに泊まって毎日ジャンヌを見舞うことになった。というのは口実で、ジャンヌの特別室が秘密捜査本部とでも、アジトとでもいえるような機能を發揮しはじめていることはいうまでもない。

〇

一週間目にジャンヌこと、小林敏子は全快退院した。その間、「希望」号とそのクルーたちは再入国と出国の手続を全部終了していたから、直ちに出航した。ということは、脱走兵の逮捕が完了したことを意味するのであろうか。

「希望」号が、沿岸のレーダー網を脱したところでネプチューン号と再会、有明とジャンヌが移乗したところまでは前回の繰返しだった。

ところが、その日の夕方、調布の飛行場から飛んだパイパー機が小笠原方面に向かいながら、突如、右旋回して行方不明になるとい

う事件があった。チャーターをしたのは東京のキャバレー王といわれた金東一。日本名を金子一郎と称する韓国系の実業家で、小笠原の観光開発の利権をとり、一仕事を張ることになっていたのである。そのレセプションに参加するため、よりぬきの美人ホステス四名を連れて乗り込んだという次第。

自衛隊や海上保安庁の懸命な搜索の結果、海上で機体の一部と金の漂流屍体だけが発見された。落下傘で降りたらしいが、救命胴衣がなくて溺死したものと推定された。こうしてパイパー機の遭難は確実なものとなったが四人の女と操縦士の遺体は遂に発見出来なかった。おそらくパイパー機と一緒に沈んでしまったものという判断がなされ、搜索は打ち切られた。

以上が新聞やラジオ、テレビで報導された限りの事件のあらましである。しかし、その真相は、ご想像の通り、例によって有明一味の多彩な誘拐作戦の一例が示されたにすぎないのであった。ホステスの一人が秘かに潜入した青帮の女スパイだったといえ、あとの三人の運命がどんなものになったかは、すぐおわかりになる筈だ。操縦士は殺して機体と共に沈めた。

潜水艦の内部とは到底、思えない程、豪華な一室だった。くるぶしまで埋まる程の絨氈が敷き詰められ、周囲の壁には素晴らしいゴブラン織の壁掛けが下っている。そして、ペルシャ風の調度を、やわらかい間接照明が快適に照らし出していた。

この部屋の主は、いうまでもなく、有明友之助であった。昔、ローマ人が着ていたような純白の寛衣を、ゆったりとまとっている。隣に坐っているのは、新しくお気に入りになったジャンヌである。彼女は一糸もまとっていない。彼女、すなわち小林敏子は、おどろく程早く、有明の生活様式に馴れた。艦の中では皆が裸だから、かえって裸にならない方が奇異に見えた。

有明にしてみれば不慮の死を遂げた彼女の姉、敦子のこと、又、その名によって死んで行った野沢洋子のことなどが重なり合って、余計、不憫さを、つのらせていたのである。

彼女には、かつて学生運動の斗士、和製ジャンヌ、であったというようなイメージはどこにも残っていなかった。逆に、彼女の性格の中にあるM的な、というよりはサディスティックといった方が適切かも知れない、ある

リビドーが、この生活にピッタリ合致していたのであろう。そのためにこそ彼女は喜々として有明の足下に、自分の白い裸身を捧げたのである。

チャイムが鳴った。

「誰か」

有明が聞く。

「星、でございます」

エミー司令の声である。

「お入り。ご苦労だったね」

有明がいいながら、傍のボタンを押した。下座の扉が音もなく開いた。同じような装飾で統一された控えの間があつて、扉口に星恵美子、すなわちエミー司令が正坐していた。彼女も勿論、全裸である。扉が開くや否やハッとし伏すのへ、

「かまわないよ。さあ、こっちへ入って来なさい」

やさしく有明がいった。

「ありがとうございます」

顔を伏せたまま、そうお礼をいって、這うように膝行して入る。

よく見ると扉口の床上50センチばかりのところに紫の飾り紐が横に張られていた。有明以外の者は何人といえども、この紐の下を這

ってくぐらなければならない、定めだったのである。

「ご報告申しあげます。第四八号作戦は予定通り終了いたしました」

「よろしい」

といいながら、ジャンヌの方に向いて、

「おまえは自分の部屋に帰っておいで。用があつたら呼ぶから」

まだ正式に許されていないジャンヌに聞かせるわけに行かない。

「はい。では失礼いたします」

従順に一礼してジャンヌは扉口を去った。儀式通り有明の方へ向き直って、後ずさりながら紐をくぐって出るのである。

扉の閉るのを見て、エミー司令がいった。

「捕獲した三名のうち、一名は確かにB二〇三号でございました。あとの二名は二等扱いでセルに収容いたしました」

「自由奴隷の脱走は、その許された自由の故に一層きびしく罰せられなければならない。帰国するまで取りあえず〇号重拘束にしておけ」

有明が厳命した。

(未完)

カット・野江三郎



名物おんな

か細い肩に重くのしかかるゴムマントをはためかせ、今宵もネオンにいろどられた夜の巷をさまよい歩く京子だった。

「恥辱にまみれた悪夢の一夜から数週間後のことだった」

赤や、黒のペンキで看板がわりの広告文にいろどられた黄色いゴムマントは、サイケデリックなカラーリングがサンドイッチ・ガールとしての京子にうってつけだった。

——ゴムヒズム・シリーズ(2)

——続・雨の昼下り——

京子受難記

菅原敏夫

此の特異なゴムマント・スタイルで毎晩、客引きしている京子の存在は、この界隈で評判の名物女になっていた。

夕立があったせいか酷く蒸し暑い宵の口をゴムマント・スタイルに酔いしれているかのよう、その表情は恍惚と輝いていた。噴きでる汗をものともせず、ゴムマントの中に隠された自分だけの秘密に陶醉しきって……。へゴムマントの中では鎖がガチャつく金属音とゴムが触れ合う摩擦音が不協和音をかなでた。

止めどもなく噴きでる汗、まつわり付くゴムフード。濃厚にメーカーシップされた京子の顔は化粧がはげ、ツケマツゲがズリ落ち、口紅も変色しグシャグシャに乱れていた。

嘲笑を浴び雑踏の中を歩き廻っている京子は、自分自身の運命を変えた数日間の出来事を回想していた。

——混濁した意識のなかで臀部に鈍痛を感じ、うっすらと眼を見開いた私。うす暗い裸電球をバックに、皮革ベルトを握りしめた政子と一面識もない男が立っていた。床一面に

排泄した汚物にまみれ、ウジ虫のようにのたうち廻っている不様な私を平然と見下ろしていた。そして二人は私の身体にゴムマントを着せかけ、その上からロープをかけ、汚物にまみれた床を引きずり――

と、そこまで連想した京子は、三人連れの酔っぱらいにからまれ、現実には引戻された。

「よォー！　ねえちゃんヨ。遊んでやっか？　ヘッヘヘヘ……」

「このとおり痛めつけてやろうかッ？　えエー、ヨォー！」

男達は、京子をグルリと取囲み、ゴムマントに記されたキャッチフレーズを指先でなぞったり、つまんだりして、なぶり者にするのだった。

「どうぞッ。お好きなようになさってエ！　打つなと蹴るなど、御存分になさいませッ！」

と、京子の口からは異常とも思える答がハネ返ってきた。

へ京子の生活環境は、リンチの一夜を境に何もかもが急変した。夢想までした自虐心が現実となって芽生え、「ゴムヒスト」としての血が、煮えたぎる心の動揺を押えることはできなかった。

京子は、三人の酔客を案内して宵の巷に消

えて行った。

「――私が意識を回復したのは間もなくだった。身体がゴムマリのようにはずみ、ゴツゴツした堅い壁に打ち当り苦痛を感じたときだった。真暗闇の狭い箱の中で転げ廻っている現状が判断できなかったが、次第に眼が暗闇になれてくると共に、排気音まで耳に入り、車のトランクルームに押し込められていることに気付いた私だった。――

どれほど時間が経過したのかわからなかったが、次第に車のスピードが落ち、やがて停車した。そして、突然トランクキャビネットが開けられ、暗闇から白昼に引きだされた私は眼をしばたたき間の抜けた金魚のように口をパクパク開け、新鮮な空気をむさぼっていた。そんな私をズベ公達は砂ぼこりの舞う庭を引きずっていった。――用水路に放り込まれ、一枚ずつゴム衣が引剥がされ、ズベ公達の嬌声と共に洗濯されたぶざまな私」

Act I

宵の口だというのに店内は満席に近い酔客で埋まり熱気が渦巻いていた。全開しているクーラーは何の効果もないほどだった。

ゴムマントを引剥がされた京子は羞恥に打

ちのめされた表情で壁に寄り掛かっていた。

そんな京子からミチは、手カセと足カセを連結している鎖をはずし、黒い総ゴム製、胸当り前掛を着用させていた。

その胸部には白色ペンキで大きく「京子」と、ネームがしるされていた。

「お姉サマー、これ持って行ってエッ」

と、政子はカウンター越しにオーダーを乗せた盆を突き出した。

たるんだ鎖をガチャガチャ引きずりながらラバー・コスチュームに押し潰されそうな鈍い足取りで運ぶのだった。

「何をボヤボヤしてるのオ。早くしなさいヨッ！」

と、奥のボックス席から叱責が情容赦なく飛んだ。

「お客さん、すみませんネエ。ホントに、やんなっちゃうワ、のろまなんだから」

と、知子は男達に愛想笑いを浮かべた。

やっこのことで運んできた京子だが、オーダーを卓上に移すのが容易なことではなかった。手カセで拘束され、そのうえ二本指のゴム手袋をはめた不自由な指先では、盆を片手で支えることは不可能だった。

へここ迄運んでくる間、ただ水平に突き出し

た二本の腕の上に乗せていた盆が何度となく滑り落ちそうになったほどだった」

「ホラホラッ、落ちるじゃないッ！ バカねエ、跪かなきゃだめヨオ」

「落としたら罰金ヨオ！ わかってるのオ？ 京子お姉さまッ」

どうしたものかと、途方にくれていた京子は二人に言われるまま、その場に跪き総ゴムのテーブル・クロスがかけられた卓上と盆の面を水平に保ち、胸部を前に突き出して盆を卓上に押しやるのだった。

「そのくらいでいいから、サッサとお相手しなさいヨ。お姉さまのお客さんでしヨオ」

二人用ソファの真ん中、二人の男に挟まれてビールを注ぐ京子だった。

「スゲェー店だなアー……」

と、京子の前に坐っている男は、異様な室内装飾と特異なラバー・コスチュームを着用した京子に眼を瞪り、好奇に似た声を張りあげた。

へ黒で統一した室内はゴムがふんだんに使われていた。床は全て黒い総ゴムがジュウタン代りに敷き詰められ、壁にはラバー・コスチュームや数種類の皮革鞭、拘束ベルト等が雑然と装飾されていた」

「チョット、それ見せてくれヨ」

と、京子の隣の男は、壁に掛かっている鞭を指差した。

「俺にも一本取ってきてくれヨ」

と、もう一人の男もすかさず叫んだ。

「こりゃア、スゲェや。本物じゃネエカ」

「痛てエだろうなア、こんなんでヒッパタかれたらヨオ……」

ミチの持って来た数本の鞭を替る替る手に取り、感心している男達の様子をジッと観察していた知子は、卓上に転がっている一本を取りあげるや、京子の突出した乳房めがけて打ち下ろした。

「ヒイエーッ……」

避ける暇もなく、まともに鞭を浴びた京子は、思わず低く呻いた。

この余りにも突発的な出来事に驚き、一瞬呆然とした男達だった。が、冷笑を浮かべた知子にホッとしたのか、ゲラゲラと野卑な笑い声を張りあげるのだった。

「どーオ？ 鞭の味、試してみない？」

と、知子は男達の顔をうかがう。

「本当かア？ それ」

「もちヨ。こっちだって商売ですもん。だけど、お勘定は別ヨッ」

「そりゃア面白そうだなア。一丁、やったるかア」

「だけどヨオ、本当にやってもいいのかア」男達は、まだ半信半疑の様子で京子と知子の顔を交互に見較べるのだった。

「本当でしょう、京子お姉さまッ」

と、知子は遠慮している男達に代って問い質した。

「どうぞ御勝手に……」

と、京子は媚るように哀願した。

このやりとりをカウンター越しに窺っていた政子は、ニツと北叟笑み、スペシャル・メニユーをとりだすのだった。

「どのコースになさいます？」

と、知子はメニユーを男達の前に広げた。

へメニユーには料金別にそれぞれのコースが仔細に記載されていた」

やがて、商談が成立し、京子はフロアーに引きずり出された。

この奥まった一角は、鎖の暖簾で仕切られていた。

へ男達のオーダーは、半吊り、鞭打ちのAコースだった」

フロアーに立ち竦む京子の頭上から、重々しい金属音を軋ませ、一条の鎖が下がってき

た。その先端に付属しているカギ型のフックが眼前に迫った瞬間、鎖は停止した。

時計の振り子のように揺れ動く鎖を、切なげな表情で注視している。そんな京子に黒い総ゴム製のゴムグツワを装着し、後頭部に付いているベルトを締めあげるミチだった。

「くやしかったら何んとか言ってみなッ」

と、言いざまに知子は、手にした皮革鞭で臀部を二つ三つ、ヒツパタいた。

ダラリと半吊りの京子は、鞭打ちの反動で振り返り、一斉に注視する男達の表情を追い求めた。ゴムグツワから覗いている瞳は、次に起こるべき何かを期待しているかのように羞恥と陶酔が交錯し、恍惚と輝いていた。

「それじゃア、ごゆっくりネッ。せいぜい可愛がってあげてエー……」

知子とミチは男達に愛嬌を振りまき、鎖の暖簾をくぐり抜けた。

「京子お姉さま大分うまくなったワネ」

「そりゃアそうヨ。今日で十日めだもん、も才覚えてもいい頃ヨッ」

知子と政子は、カウンターに向かいあって冷笑を浮かべ囁き合っていた。

鎖のカーテンをとおし、派手に聞こえてく

る鞭打ち、責めたてる男達の荒い息づかい。そして鎖のガチャつく音と共に京子の陶酔しきった呻き声が、ゴムグツワから微かにもれていた。

この異常なムードは、他の客達のサディステイックな好奇心をかきたてるのに充分だった。効果はてきめんに現われ、好奇心をかきたてられた酔客達は次から次へと連鎖反応を起こし、京子を指名したのだった。

特訓

瞬く間に数日が過ぎ、今宵も、獲物を求める狼の群に我が身を投じなければならなかった。借金返済の手段とはいえ、連日連夜見知らぬ男達に弄ばれ、痛めつけられた身体を休める暇もなく、身心共に疲れ果てた我が身をムチうち、媚を売る京子だった。

「——用水路に没した瞬間、これ以上生き恥を晒すことに耐えられず、心の片隅で秘かに『死』を期待したにもかかわらず、こうして受難の道を歩まねばならなかった私」

『どうしてエ？……どうして、こんな酷い目にあわなければならぬのかしらッ』

全身余すところなく、鞭打たれている京子は、その苦痛に悶え自問自答するのだった。

『しょうがないワネー……こうするより他ないもん』

三年前に借りた十万円が、現在では利子を含め百二十万円になっていた。しかも、こうして受難の日々を送る間、元金に対し十日で一割の高利がついてまわった。

「——真夏とはいえ、総ゴム肌衣のみの着用だけで毎日を過ごさなければならなかった。その奇異なスタイルで客に接し、出入商人のまえに晒された私。——炎天下を防水服とゴムコートに身を包み、町中を買物して歩かなければならなかった私」

『しつこいお客だワア。早く終りにしてくれないかしらッ』

京子は、常連客の一人に独占され、すでに三時間近くも責めさいなまれていた。

『このままじゃア、またシゴカれるワア』

京子には、開店から閉店までの五時間に十人の客をつかまえることが強制されていた。しかし、それは不可能なことだった。

ここ数日間、連日職人の出入が激しかった訳が今になって分かったような気がする京子だった。それは、政子の情夫、石神のアイデアで常連客の中から数人をリストアップし、

会員制のシークレット・クラブを企業化したことだった。そのための改裝作業だった。

地下室の改裝は大がかりなものだった。

へ天井には、無数のスポットライトと数個のフックが埋め込まれ、チェンブロックが引掛けられていた。壁には全面鏡がはめ込まれ、床は全て黒い総ゴム製ジュウタンが敷き詰めであり、二つのステージまで造られていた。

全ての改裝工事を完了し、異様なムードを

湛えた地下室で日課の体罰を受難している京子は、すでにゴムジュウタンの上に長々とノビていた。なおも、ズベ公達は情容赦なく皮革鞭を浴びせ、踏みにじるのだった。

石神がダンボール箱を重そうに抱え、地下室に降りて来たのは丁度そんなときだった。

「おいッ、手伝ってくれヨ」

石神は、重々しい音をたて、ダンボール箱を放りだした。

「随分痛めつけたんだナア……チットは大切にしろヨ、商売道具なんだからヨオー」

石神は、キャメルに火をつけ、うまそうに一服し、かたわらにうずくまっている京子と政子を見較べ、ニヤッと類笑んだ。

ズベ公達に手伝わせて運び込んだ数個のダンボール箱を前に、石神は、中身を説明しな

がら梱包を解くのだった。

へ箱の中から取り出されたものは、数種類のラバー・コスチュームと鞭、そして一着の拘束ベルトだった。

京子の身体から胸当前掛とゴムコートが引剝がされ、石神の指図どおりにラバー・コスチュームが装着されていた。

最初に装着されたものは、合成ゴムの拘束ベルトだった。

へ深く切り込まれた股間からヒップ・ウェストラインを締めあげ、バストを拘束し、両手首迄一体となって延び、手首の先は袋状で先端に鉄リングが付いていた。

落下傘ベルトに似た形状の拘束ベルトは、貞操帯と宙吊りベルトも兼ねていた。

ダーク・グリーン防水服の上から装着されたオレンジ色の拘束ベルトが色鮮かに浮きあがり、締めあげられた防水服は京子の肉体美を象徴するかのような立体感があった。

壁にはめ込まれた鏡に写る自分の姿に京子は、その拘束美に陶醉し、その眼差しは恍惚と輝いていた。

陶醉境をさまよう京子に、なおも特異なラバー・コスチュームの数々が装着されていた。黒色胸当パンタロンが、純白七分袖キユ

ロットスーツが、そして、有終の美を飾るが如くズン胴の黄色い鞭打ちスーツが装着された。

へノースリーブの鞭打ちスーツには、長さ調節のアジャスターベルトが胴と裾先の二個所に数本付き、胸部から膝迄の前面と肩から臀部に至る後面に、二枚の白い当てゴムがボタ止めしてあった。

京子は、奥の第一ステージ上の赤鳥居から下っている鎖に拘束ベルトのリングが引掛けられ、両手吊りに悶えていた。

床から三十センチの空間に宙吊りされているにもかかわらず、鞭打ちスーツの裾はステージ上にまつわりつき、シワだった。

宙吊りに悶え、特異なラバー・コスチュームに陶醉している京子の心には、先程まで渦巻いていた羞恥と陶醉の相反する闘争心は吹き飛んでいた。

客席の椅子に跨がった石神は、ステージ上で行なわれているリハーサルに鋭い視線を向け、台本片手に演出家気取りでズベ公達を指図していた。

「遅いなア……どうしたのかしら」

政子は、苛立ったように腕時計を見た。

時計の針は、十一時五十分を指していた。

不安を覚えたのか政子は、電話にかじりつ

くのだが、受話器からは相手を呼び出す一定間隔音がはね返ってくるだけだった。そして受話器を置くと同時に、表でベンツ特有の重々しい排気音がした。

「石神は、ベンツのリヤドアが入口に重なるように横づけした」

待ち侘びた表情で政子は、リヤドアを開け、ヒステリックな態度で荒々しく毛布を引剥がした。

「フロントシートとリヤシートのわずかな隙間に、京子は俯伏せに寝かされ、その上に毛布が掛けられていた」

政子は、ゴムフードからはみ出ている髪の毛を掴み、引きずり出すのだった。京子は、その激痛に耐えかね、自分で車外へ出ようと試みるのだが、ゴムマントが邪魔で身を振るのが精一杯だった。

「政子は、石神を京子に盗まれたような嫉妬心に駆られていた」

自慢の口髭をなぜながら入って来た石神はブスツとした政子を見るなり、急に親密な笑

顔を作り奥の間に誘い込んだ。

一方、京子は、知子とミチに濃厚なメイキヤップを施されていた。

タバコの煙と熱気で噓せ返える地下室は、プレミア・ショーとあって盛況を呈し満席の状態だった。そんな客席の一つ一つを丁寧に挨拶して廻る石神は、自信ありげに振舞っていた。

「このシークレット・クラブの名称は『互夢クラブ』と呼称され、五名の正会員と各一名のビジターで構成されていた」

やがて、定刻の午前0時と共に、燦然と輝いていたシャンデリアが消され、スポットライトの照明だけになった。そして、防音装置が施された地下室いっぱいに激しく反響する鞭の音をバックに、階上からゴムマント・スタイルの京子が、知子とミチに鞭打たれながら登場するのだった。

頭上のスポットライトに照らされ、客席の間を縫うように、第一ステージへ引きたてられて行くのだった。

「ゴムヒスト」"としての被虐ムードは、演出効果満点で、興奮に包まれた客席から一種異様などよめきが起こった。そんな客席を見回

した石神は、してやったり、とばかりに北叟笑んだ。

「こんなカモから巻きあげるのは訳ねエナ」と、石神は、一人言をつぶやいた。

そして、御機嫌を回復した政子に投げキッスを送り、階段の方へ行きかけた。

「じゃあなッ、後はまかせたゾ」

「あらッ、もう帰るのオ？」

政子は、石神の方へ歩み寄った。

「後は簡単サア、昨日のとおりやりやアいいんだからッ……だいたい俺がこんなところにいるのが間違いだヨ、そうだからオ？ 客だつて俺がいたんじゃアやりにくいもんなッ」

石神は、興奮に包まれた客席とステージ上の京子に視線を向け、うなずくように階段を上っていった。

ステージ上の京子は、ゴムマントを引剥がされ、特異な肌着姿を晒していた。そんな京子にラバー・コスチュームが一着ずつ、ゆっくり時間をかけ客に見せつけるが如く装着されていった。

マイルス・デヴィスの「ラウンド・アバウト・ミッドナイト」をバックサウンドに、恥辱にまみれた防水服が、拘束ベルトが次々に装着されていった。政子は、そのラバー・コ

スチュームの一枚、一着に解説をアナウンスすることを忘れなかった。

ある一日、充分に休養した京子にとって、心身共に充実した正常な意識のもとで受難している、現在の恥辱的行為に耐えていくことは苛酷なことだった。しかし、羞恥に悶える京子に対し、客席の反応は、冷酷非情なものだった。

厭応なしに装着されるラバー・コスチュームの数々が、京子の小さなハートを余計に締めあげた。

「モタモタするんじゃないヨ。このゴム気遣いッ！」

知子は、ブーツの先で突きあげるように臀部を蹴り飛ばした。

ステージからフロアーに降りる階段の最上段でモタついていた京子は、この一撃で前のめりに階段を転げ落ちた。

期待していたとはいえず、余りにも突発的な光景に驚いたのか、一瞬、水をうったように静まり返る客席だった。しかし、その静寂も長くは続かなかった。

苦悶と恥辱に打ちのめされた京子の表情の中に、燃えるような被虐美が漂っていた。

小突かれ、鞭打たれ、客席の一つ一つを自己紹介して廻る京子だった。

そんな客席の一つに呼ばれ、拘束ベルトのリングを後手に、無理矢理、ビールをラッパ飲みさせられていた。

「ウー。キューッ……ク、クルシイ……もう勘忍してエー」

こじ開けられた口にピンがねじ込まれ、苦悶の表情もあらわに、のたうつ京子は、目を大きく見開き、自分をいじめて楽しんでる一組のカップルを凝視するのだった。

「なかなかいい飲みっぷりじゃネーカヨ。エエー！ 京子ヨー」

と、男の方が、京子を以前から知っているような口振りで冷笑を浴びせた。

京子は、その聞き覚えのある声に驚くと同じ時に、うしろ暗い過去に打ちのめされ、一瞬顔を閉じた。

スポットライトを浴び恥辱の影を投じている自分とは、対照的な暗い客席の一点を凝視するのだが、強度の近視であるが故に、はじめのうちは明暗の壁に隠れた男の顔を判別することは不可能だった。しかし、次第に暗闇に馴れるに従って相手の顔の輪郭がつかめ、ボヤけた瞳を細めることによって焦点が合っ

てくるのだった。

「ヘエー。この人が京子さんなのオ？」

と、連れの女は、男に囁いた。

「まあなッ。トボケてるけど間違いないヨ」

「それじゃ私が思い出させてあげるワヨ」

女は、ワイングラスを京子の顔面めがけ振りかけた。

「あアッ……ヒドイ、酷いワア」

避ける暇もなく、まともにブランデーを浴びた瞬間、チラッと見えた女の顔にも見覚えがあった、なおも、続けざまに浴びることによって、過去のいまわしい記憶が呼び起こされるのだった。

「男は、三年前、京子に横恋慕した新田次郎であり、女は当時、次郎と婚約していた浜子だった」

朱色に塗装された第一ステージの鳥居から宙吊りにされ、全身余す所なく激しい鞭打ちを浴びている京子だった。

足腰立たなくなる程、全身に酔いがまわった京子は、ゴムにしびれ、鞭に悶え、ゴムヒストとしての快楽の陶酔の境に遊んでいた。唸る縋りゴム製の鞭は、特殊なものだった。へ握りの先端にゴム管が接続され、その末端

には特殊なポンベが取り付けられてあった。握りから先の打つ部分には無数の小さい穴があげられてあり、打つ毎に圧迫された鮮血色の内容液が噴出するようになっていた。

「それエー」

「ビシヤッ」

「ホイきた」

「バシヤッ」

かけ声も勇ましく前後から情容赦なく鞭を振り続ける秀子とジュンだった。

「ウーッ……もっと、もっとたたいてエーヒイッ……オネガイ、私の身体をメチャメチャにしてエー」

苦痛を伴わない被虐の極致をさまよう京子は、身をくねらせて鞭の痛打を哀願するのだった。

宙吊りに悶え、鞭打ちに躍動する肢体。

色あざやかに数十条の痕跡を残し、鮮血色に染まる鞭打ちゴムスーツ。

『あー。ウッ……ドウシテ、ドウシテナノヨオ』

「ゴムヒスト」京子は、その一打毎に呻き声を発し、陶酔の極致に悶えていた。

顔面に、まつわり付く直線的な黒髪が恥辱的行為を誘うが如く乱れ、印象的だった。

ステージ上では、プログラム中、三番目の「丸太渡り」が開始されようとしていた。

第一ステージと第二ステージ間には、満々と水を湛えた水槽があり、水中に四メートル程の長さの太いパイプが一本渡されていた。パイプの直径は二十センチ程で、本体はグラスファイバーだった。周囲にはフォームラバーが五センチ厚で巻き付けてあり、その上から部厚い総ゴムが張り詰めてあった。

京子は、滑車から下った一本の鎖に身を託し、水面下二十センチに渡されたパイプの上を渡り始めるのだった。

ゴム張りパイプの表面は滑りやすく、足元の力を抜いて拘束ベルトから連結された頭上の鎖に体重を分散させるのだが、一メートルも進まないうちにラバー・コスチュームに足を取られ、両足がパイプを挟んだ状態で滑った。その途端、鎖に全体重がかかり、ストッパーがはずれた。

へある程度の重量が鎖にかかる滑車のストッパーが自然にはずれるようになっていた。ガラガラと、鈍い音を発し鎖がのびきり、下半身は吸い込まれるように勢いよく水中に没入するのだった。

跨ったかたちの重量を受けたパイプは上下に激しくしなった。その反動で京子は水面上に放り上げられ、横っ飛びにもんどりうって水面にたたきつけられるのだった。拘束ベルトのリングを水面上に残し、水中に没した京子は、鎖の先端に結び付けられたゴムロープが延び、髪の毛を引絞る激痛に悶え満身の力を振り絞り、懸垂の要領で、やっと水面上に顔を出すことが出来た。

鮮血色に染まった水面上にポツカリと顔を出し、官能的な表情で陶酔している。そんな京子の耳に入るのは、興奮した客席のざわめきと喚声だけだった。

『……あーッ、ウー！……オネガイ、もっといじめてエー』

京子の被虐願望は、すぐに叶えられた。

モーターの回転音を響かせ、京子の身体は綺麗に洗いあがったラバー・コスチュームと共に、その全貌を水面上に表わした。

水面上に吊られた京子は、両腕から急激に懸垂力が抜けていくのを覚え、ガククリと力尽きた。その瞬間、ゴムロープが延び、髪の毛が引き絞られた。激痛に耐えかねた京子は延びあがろうと両腕に力を入れるのだが、すでにその余力はなく、水面上を揺れ動き、の

たうち舞っていた。

数分間、そんな状態で吊り下げられた京子は、ゆっくり第一ステージ上へ空中を滑走していった。

へ滑車にセットされたモーターの回転で自動的に鎖を巻き上げ、二本のレールに挟まれた台車を摺動していた。

京子は、十数回同じ行為を繰り返した後、やっとのことで第二ステージに到達することができた。

散々、痛めつけられた京子は、黒い総ゴムが張り詰められた三・三平方メートル程のステージ上にグッタリ身を横たえていた。知子とミチは、そんな京子を引き立たせ、ゴムグツワとゴムマントを装着するのだった。

やがて、強烈なビートのきいたゴー・ゴー・リズムにのって、ステージ上せましと踊り始める京子だった。水に濡れ、ベッタリとまわり付く黒髪を振り乱し踊り続けるのだが、全身を包む酒酔と、ゴムヒストとしての陶酔感から、全身の動作が鈍り、テンポの早いリズムについて行けなかった。

この苛酷なゴー・ゴー・ダンスを少しでも怠けようものなら、待っていましたと云わんばかりに四方から鞭が飛んできた。

冷水に清められた身体がうそのようにホテリ、全身から滝のように汗が噴き出た。それにも増して、息苦しいゴムグツワ、重くのしかかるラバー・コスチュームの数々に、のたうち、悶えていた。

それでもラバー・コスチュームをはためかせ、踊り続けなければならぬ京子は、何回となくゴムマントの裾に足を取られ、くずれた体勢を整えるために、ダンスを中止せざるを得なかった。しかし、そんなことには関係なく鞭が唸り、その度にバランスをくずし、一メートル下の床上に転落した。そして、また鞭に追われ、ステージ上に這いあがる京子だった。

へ恥辱と陶酔にのたうつゴー・ゴー・ダンスはLP盤の両面が終る迄、延々と続いた。

排泄行為を終えた京子は、鮮血色に染まった鞭跡も痛々しく赤鳥居から逆さ宙吊りに放置されていた。羞恥と陶酔、そして蓄積された疲労感にうちのめされ、微動だにしないかった。そんな、ステージ上に小動具がセットされていた。

やがて、逆さ吊りから解放された京子は、鳥居の前にセットされた円形の台上に立たさ

れ、両足を広げ固定された。そして、頭上から下った鎖の先端に水平に付属している鉄パイプの両端に、両腕を広げて拘束ベルトのリングが引掛けられた。

第二ステージには、バッテリーマシンがセットされていた。

こうして、今夜のプログラム中でもっとも注目すべきハイ・ライトであり、フィナーレを飾るにふさわしい「標的ゲーム」の幕が切られて落とされようとしていた。

鳥居から総ゴムシートのネットが張られ、ムチ打ちスーツの当てゴムが裏返しにはめられた。

へ前後二枚の当てゴムの裏面には、両乳房の部分と上腹部及び下腹部、背中と臀部にそれぞれ標的のマークが印されていた。

政子は、客席を廻り、オーダーを取ると共に、ゲームの内容とマシンの使用法を説明していた。

へ十人の客がそれぞれ一人十球迄のリミットで発射でき、十発の球はトマトとタマゴの二種類の中から自由に選択できた。

「プレイボール！」

と、政子は、御愛嬌にアナウンスし、電動スイッチに手をかけた。

スイッチを入れた瞬間、京子の両足を固定した台がゆっくり回転し始めた。

延々四時間以上も責め抜かれ、疲労困憊の極に達している京子は、防禦する術もなく客の冷笑を浴び、なすがままに恥辱的行為を受難していた。

マシンと、標的である京子との距離は五メートル余りで、発射される球が標的を捕えるのは百発百中だった。情容赦なく至近距離から飛んで来る、半ば腐りかけたタマゴと、熟れたトマトが狙いどおり命中した。命中する度に潰れたタマゴとトマトの飛沫が全身にべったり付着し、スポットライトに照らされたラバー・コスチュームは、異様な光沢を放し輝いていた。

「ク、クエーッ……モット、もっといじめてエー。オネガイ、メチャメチャニシテエー」と、京子は、叫んだつもりだったが、ゴムグツワで完全に口を封じられ、声にならなかった。

恥辱的羞恥から逃避したいばかりに陶酔を求めていた京子の願望を満たすが如く、恥辱の紅白球は、情容赦なく顔面から胸部へ、そして、背中から臀部へ、と集中的に狙い打たれた。

やがて、羞恥と陶酔が入り交った「標的ゲーム」が終り、客へのサービスとして命中個所に同数の鞭打ちが客自身によって、いつ果てるともなく延々と続けられた。

「真夏の夜の悪夢は、定期的に週末の一夜をいりどり、京子自身の精神と肉体を蝕んだのだった」

転 売

数カ月を経た現在、京子自身の日常生活には、何んの変化も起こらなかった。

人間として全ての権利を剝奪され、犬猫にも劣る家畜同様に虐げられ、牛馬の如く酷使された日々を送った。そこには、人間としての存在価値はなかった。

北国の冬は早く、すでにすぐそこまできていた。シベリアおろしの寒風が吹き荒れるなか、初冬の柔らかな日射しを背に、京子は二台の車を洗車していた。

京子にとって、毎日が過密なまでのスケジュールで詰まっていた。

午前中は雑用、午後から派出受難婦、夜はホステスとしての日課であった。日曜は定休

日であるにもかかわらず京子にとっては、休養することは許されず、雑用奉仕で終始し年中無休の状況だった。

凍るような冷水は、指先の感覚を麻痺させて洗車を妨げた。現在の京子にとっては、あの強烈な真夏の太陽を浴び、汗にまみれて洗車した日の事が懐しく想えた。

「こんな冷めたい思いをするんなら、まだ暑い方が良かったナア……でもッ、あの頃は随分いじめられたナア」

京子は、一人言をつぶやきながら数カ月前の日々を想い起こすのだった。

「炎天下の洗車は、科せられた日課の中では比較的楽な仕事で、息抜きの一時だった。しかし、少しでも怠けようものなら、いい口実とばかりに見張り役のズベ公達に鞭打たれるのが常だった。——罰として室内温度が五十度以上に達している密閉された車内に放置された私」

京子は、放心したように手を休め、過去の想い出に浸っていたが、突然背後で唸る鞭の音で現実を引き戻された。

「ビシヤッ」

「なにサボってるんだヨオ！ このゴム女」
「バシヤッ」

「そんなにブツ飛ばされたいんなら、こうしてやらアー！」

「バシッ」

京子は、無抵抗のまま秀子とミチに鞭打たれていた。

無残に打ち据えられ、泥水の中で悶絶している京子は、二人によってガレージの中に引きずり込まれた。そして、鉄骨にセットされた滑車から下る三本の鎖によって、拘束ベルトの背と胴、両足首から身体を水平に保った状態で三点吊りにされた。

ヘトツプの水洗いは、常に宙吊りの状態だった。

京子は、屋根の上を「女郎グモ」の如く這い廻りベントのトツプ中央部を洗っていた。

へ砂塵を巻き上げ、山道を疾走して行くステーションワゴン

秀子は、楽しむかのように軽快なハンドル捌きでパッセンジャーシートのみちと雑談していた。荷台では、黒い総ゴム製バッグに詰め込まれた京子がゴムマリのようにはうんどし左右に転げ廻っていた。

へ総ゴム製バッグは、一センチ厚の丈夫なものだった。その形状は、スリーピングバッグ

に似たもので、京子の全身をスッポリ包んでいた。

ゴムバッグはほとんど密閉に近く、顔の部分に開けられた数個の吸気孔からわずかに入る空気をむさぼるように吸い込む京子だった。激しくバウンドし、左右の側壁に打ち当たられ、吸気孔から苦痛を訴える呻き声がかすかに洩れていた。

『あウーッ！ 痛ッ、痛いワッ』

へ砂塵を被り、薄汚れたステーションワゴンは、メインストリートから外れ、細い脇道へ入って行った。

半ば失神状態の京子は、放り落とされたような鈍痛を臀部に感じた。

「ギュッ、ギユウ」と、階段の角で擦れ合う不気味なゴムの摩擦音を、静まり返った地下室に響かせていた。

二人は、ゴムバッグの先端に付いているリングを天井から下っている鎖に引掛け、宙吊りにした。

「遅いワネー。今日は誰なのオ」

と、秀子は腕時計を見ながらミチの顔を見た。

「金曜だから新田さんじゃないッ」

「それじゃあ大変ネ。あの人、とってもしつ

こいもん……それに、陰険だしネ。いやアーな感じヨ」

大声で苛めたつもりだが、何んの反応も示さない京子の態度に物足りない二人は、ベルトで締めつけられ突出した臀部を鞭打った。袋詰めめ京子は、鞭打たれる度に揺れ動き、その動きは次第に大きくなり、ブランコのように揺れていた。

臀部を鞭打つ秀子。

ハネ返って来る胸部を打ち返すミチ。

二人の暇つぶしの玩具として、袋詰めめ京子は鞭打たれ、宙をのたうち舞っていた。へ「袋ダタキ」とはこのことであつた。

宙吊りのゴムバッグを締めつけている数本のベルトが緩められ、チャックがひき開けられた。同時に京子は、ゴムバックからもんどり打って滑り落ちた。

俯伏せに悶絶している京子の臀部に、片足を乗せている次郎と浜子だった。

「だらしのないネ。もうノビてるワッ」

と、浜子はブーツで踏みにじった。

「これじゃア使いものにならねエナ」

次郎は、髪の毛をつかみ、京子の表情を追いながら浜子を見上げた。

鳥居から両手吊りの京子を肴にビールを酌み交わす次郎と浜子だった。

「御用がありましたら、ベルを鳴らせて下さい。上に居ますから。……どうぞ御ゆっくりお愉しみ下さい」

丁重に挨拶しながら、未練がましくチラッと振り返る秀子とミチだった。

宙吊りの京子の口にビールをネジ込んだ次郎は、恥辱に歪む表情を鑑賞しながら冷笑を浴びせ、楽しんでいた。

「どうだアー、ビールの味は。ええ、うまいだろオ？ ヘッヘヘ」

「クウッ……ウウッ」

首を左右に振り、咽ぶ京子から、空になったビンを抜き取る次郎だった。

「……ひッ、ひどいッ。次郎さん！ もう勘忍してエ、お願いッ」

と、必死に哀願する京子の眼前に二本目のビールをチラつかせる次郎だった。

「……あの時のこと、まだ恨んでるのオ。そ

うなのオッ？ 次郎さん！」

「兄貴と張り合ったことかッ？ あんなことはもう忘れたヨ。けどなア、女房は忘れてないらしいぜッ」

と、次郎は京子の背後に眼をやった。

京子の背後では、数本の鞭を選び素振りしている浜子だった。

京子は、過去の忌わしい想い出に打ちひしがれていた。

「……複雑な二重三角関係がその始まりだった。京子は性格的に穏健で『お坊っちゃん』

タイプの新田一郎と恋愛関係にあったが、此

の地方きっての旧家である、新田家の家風か

らして、どこの馬の骨ともわからないズベ公

風情の京子を、長男一郎の嫁に迎える筈がな

かった。それでも京子との愛に生きた一郎は

勘当同然で生家を飛びだし、京子と内縁関係

に入った。しかし、その幸福も、長くは続か

ず、一年後ヤクザ同志の争いから、あっけな

く他界した。その一郎の死が妊娠中の京子に

もたらされたのは、出産後だった」

京子は、甦った暗い過去を振り返り、自責

の念に駆られ、悶え苦しんでいた。

「あの子どうしてる？ 次郎さん教えてエ、お願いッ！」

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんが、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

「もう三つだもんなア。俺のことをパパって呼ぶし、女房のことだってママって呼ぶ。本当にかわいいぜ」

《天涯孤独のイバラの道を歩んできた京子にとって扶養能力も、生活環境もない当時のことから出産と同時に生家に引き取られた、京子にとって、たった一つの生き甲斐である亡夫一郎の分身を取り上げられたことによって一時は生きる望みさえ失ったが、我子の成長を自分の眼でたしかめるまではと、今日迄生き抜いて来たのだった》

「どうだ、会いたいカッ……まあ、そのうち会わせてやるサ」

「でもッ、こんな私じゃア……」

自己嫌悪の念に駆られ、苦悶の表情もあらわに身悶えしている京子を、次郎は、なおも苛め抜くのだった。

「どうせ、この店もオッ潰れるんだろオ？」

「えエーッ！ それホント？ 次郎さん」

「なんでエ、オマエ知らねえのかア。石神のダンナが夜逃げしたッてえじゃねえカッ」

京子は、次郎の言ったことを信用し、喜んでいいのか、悲しんでいいのかわからなかった。

へいつの日か再び自由の身になることを望ん

でいた京子にとって、最早、次郎の恥辱的な罵声も耳に入らず、浜子のふるう鞭打ちの苦痛すら感じなかった。

背中に、臀部に、胸部に、激しく皮革鞭が唸り、ムチ打ちスーツの上に、鞭跡も生々しく喰い込んでいた。

ミゾレ混りの冷雨に打たれ、トラックの荷台を転々としている京子は、寒さのためか、これからも果てしなく続く恥辱のためか、全身を激しく痙攣させ身悶えていた。運転席の次郎と浜子は、そんな京子を窓越しに振り返り、いたずらっぽい冷笑を投げかけた。

単なる噂と思っていたことが、一週間を経た今、現実となったことに当惑している京子だった。

ゴムマントを激しく打つ雨音に耳をかたむけているうち、次第に意識が遠のいていくのがハッキリ感じられた。

京子が束の間の自由を喜んだ経緯は、こうだった。

《風俗営業取締法違反で、店が営業停止処分になり、そのうえ、悪いことに脱税が発覚した。遅かれ早かれ、こうなることを予期していた石神は、今迄稼ぎ貯えた現金と、互夢ク

ラブの会員から預かっていた保証金を詐取し持ち逃げした。そのため、表面上の責任者であり、名義上の経営者であった政子が全ての責任を負う結果となった。しかし、支払い能力のない政子にとって、税務署は当然のことながら全ての動産、不動産を差し押えた。一方、会員達からは、保証金詐欺の名目で告訴された政子だが、仲裁に入り示談にしたのが、新田次郎だった。次郎が四人の正会員の保証金返済額四百万円を肩代わりした。次郎は、その代償として、京子の身柄譲渡を要求したのだった》

峠は、すでに雪に変わっていた。

タイヤチェーンを巻いたトラックは、サイドスリップし急坂道を喘ぎながら登って行くのだった。

ゴムにくるまれた一個の荷物として、買われて行く京子は、雪にまみれ荷台の上を転げ廻っていた。

へ京子に科せられた受難の道は、雪の原野に果てしなく続いていた。



ニッポン・ハラキリ

碧眼畏怖録

中 康 弘 通

畏怖の念が、かなり働いていたことは否めない。

明治百年で、日本文化に貢献した外人の叙勲が昨年、行われた。もちろん外人の渡日・

滞日は、遠くさかのぼれば限りがないにしても、いわゆる紅毛碧眼の連中が、どんどん入国して来たのは、なんといっても黒船以来である。

そして、外国にも日本語が原発音をローマ字のまま表わして伝わった言葉の代表的なものに、フジヤマ、サクラ、ハラキリがある。

フジヤマ、サクラは外面的な美もあるだけに、外人にも受容され易いが、ハラキリに至っては、外語化するまでに、好奇の眼、また

の多きを数えた、という挿話がある。

近代では、第一次欧州大戦に際し、西部戦線のある要地を守っていたドイツの一将軍が作戦上、撤退を命ぜられたとき、洋刀をもって割腹し、その責を償った。彼は日露役当時従軍武官として乃木將軍に接し、將軍の人格に打たれて尊敬していたところ、後年、將軍が切腹して殉死を遂げたことを知り、一層、崇拜の念を深めていたからである。

また太平洋戦争の末期、内蒙古の一青年が短刀で割腹を遂げ、憂国の素志をあらわした事件が当時の紙上に見えたから、ご記憶の向きも少なくないと思う。

是らのほかは、市井の事件として、発作的

では、外人は切腹しないのであろうか。この疑問に対して、いくつかの事例がある。

医学史の面から見ると、妊婦が難産に苦しみ、みずから、いわゆる帝王切開の手術を自身に加え、胎児を取り出したという話柄は、一切ならず海外ニュースで挙げられている。

しかしこれは、いわゆる「切腹」とは外見こそ近似していても、本質的には異なっている。

文字どおりの切腹の例では、中国も漢の初期に、田横という士が青島において腹を切った。するとその部下も殉じ、その数が五百人

に腹部を傷つけて自殺を計る例が海外においても必ずしも皆無ではないが、その本質として、わが国に伝わる切腹の精神とは、異質なことは、いうまでもない。

では日本人の切腹について、外人の著書に残る記録を調べてみよう。

まず相当古い記録として、「日本西教史」の例であるが、関白秀次の賜死に際し殉じた少年を描いている。

一六五九年秋八月ノ初メニ当リテ、太閤ノ使命到来シ、関白及侍者若干名、悉ク割腹ヲ命ゼラレタリ。此ノ使命ノ恰モ雷撃ニ等シク、憫然ノ至リニシテ、主従平日ノ希望スニ尽キ、直ニ自尽ノ準備ヲ為セリ。第一ニ此ノ愁歎スベキコト、一劇ヲ演ゼシハ関白ノ従者十九才ノ少年ナリ此ノ人剛勇ノ者ナレバ、関白ノ面前ニ於テ一小刀ヲ握リ、自ラ腹ニ刺シ、鮮血混々ト湧流シケレバ、関白ハ其ノ苦痛ヲ憫ミ、自ラ佩刀ヲ拔キ、厚ク忠死ヲ賞シテ其ノ首ヲ刎セリ。

是ニ次デ一人ハ十六才一人ハ十八才ナル従者伴ニ其ノ腹ヲ割キ流血泉ノ如シ。関白ハ又同ジク之ヲ刎セリ。其ノ次ハビュスユルトト称スル人ナリ。一刀ヲ腹

ニ刺シ而シテ猶ホ足レリトセズ、幾度モ之ヲ搔廻シ流血席ニ溢ルル時、関白之ヲ視テ一刀ヲ拵ゲシガ、其ノ首ハ忽チ地ニ落ちタリ。(下略)

叙上は、関白秀次に殉じた美童不破万作、山田三十郎、山本主殿らの最期を伝聞したものであろう。

下って、江戸時代には「紅毛雑話」という文献がある。森島忠良が天明七年に記したものの。その巻二に次の一節がある。

○ 切腹の事

キューレルと言へる蛮人、西何某に問て曰、日本の刑法に、士人罪を犯したる時死を賜れば、人の手をおろすをまたずして自ヒ首を取て腹を切ると伝聞せり。誠に然るや否やと。何某その偽ならざるよしを答ふ。キューレル舌を巻て曰、日本の人氣かくまで猛烈なり。外国には見も聞もせざる事なりと云しとなん。

こうした批判は、乃木將軍の殉死に際しても、ひとしく称讃的な論調となつて表わされる。

大正元年九月十七日付朝日新聞によれば、香港電報十六日発として、

斯る壮烈無比の最後は武士道の権化日本

サムライの典型として世界の讃嘆する所なり。

と記しているし、同一紙面の天声人語欄もまた、次の如く外国紙を引用している。

倫敦の急進主義新聞デーリーニュースが乃木大將の死は、近代的懷疑論者にサムライの信条を復活せしめんとするものであるといったのは、自分の立場を離れて公平に観ている。

これまた決して否定的見解を伝えたものではない。

二

こうした「切腹」の実相が、いい伝えや聞き書きの類いでなしに、彼らの碧眼に映じたままを記録されたのは、何といつても神戸事件をもって嚆矢とするであらう。

神戸事件は、周知のごとく、備前藩主池田侯の隊列を外人が横切つたという、風俗習慣への不馴れに由来した不幸な発端からの事件である。

備前藩砲兵第三隊長滝善三郎正信は、手槍で無礼の外人に一撃を加えたので、外人側は責任者の処罰を要求してやまない。そこで正信が切腹することになった。慶応四年二月九

日の夜、兵庫南仲町の永福寺に於てである。備前藩では切腹の形態について二論があった。

一は、外人の正視し得るものでなし、短刀を腹に擬するとともに介錯せよ、という論。

今ひとつは、正式の切腹を遂げさせ、武士の本懐とすべし、という論であった。

結果論的ではあるが、この場合、後者が正しかったことは、すなわち日本武士の切腹が外人に深い感銘を与えたことは、以下に引用する、当時検分に当たった在日英国外交官の手記に徴しても明らかであろう。

まずミットフォードの「往時の日本」から「日本武士の悲壮なる切腹」の一節を引く。

又もや一礼終つて善三郎は、上衣を帯下まで脱ぎ下げ、腰の辺りまで膚を露わにし、仰向けに倒れることなきよう、型の如く注意深く両袖を膝下に敷き入れた。これは貴人は必ず俯伏して死ぬべきものとなつていたからである。彼は思入れあつて前なる短刀を確と取り上げ、嬉しげに、さも愛撫するばかりに打眺め、暫し最期の一念を凝らすよと見えたが、やがて左腹深く刺し、徐かに右に引廻し、刃を一度廻したのち少し切上げた。

この凄じくも痛ましい動作の内、彼は顔の筋一つ動かさなかった。短刀を引き抜くとき始めて苦痛の色が顔に露われたが、少しも声に出さなかった。

このように詳細に記録されている。

一方、アーネスト・サトウも又「一外交官の見た明治維新」(岩波文庫版)に「腹切」の題で、次のように記している。

両腕を袖から引っこめて双肌を脱ぎ、長い袖の端を両脚の下にひいて、からだがあうしろへ倒れないようにした。こうして、臍の下まで裸となった。それから、短刀の切先近くを右手に握り、胸と腹の上をなでてから、できるだけ深く突き刺して、右のわき腹までぐいっと引いた。だが、下腹に帯をしめていたので、私たちには傷が見えなかった。これをやり終わると、彼は頸にうまく刀が当たるように頭を仰向けながら、ひじょうに注意して上体を前へかがめた。

この事件はこうして海外にも紹介され、日本武士の切腹の典型として、武士道研究に欠くことの出来ないものとなった。後年、新渡戸稲造博士の著書「武士道」(英文)にも、ミットフォードの手記から原文のまま引用さ

れ、海彼の認識を新たにさせている。

ここに興味を魅くのは、サトウの文章である。英本国の新聞紙上で、キリスト教徒が死刑執行に臨席したことの非を責められたとき反駁し、ジャパン・タイムズ(横浜)が事実を歪曲して本国に報道したことを論難して、次のように綴っている。

腹切がいやな見世物だという理由で、それに臨席したのは恥だというのが、私はむしろ自分が全力をつくして実行させたこの刑罰の立会いに尻ごみしなかったことを、かえって誇りに思っている。腹切はいやな見世物ではなく、きわめて上品な礼儀正しい一つの儀式で、イギリス人がよくニューゲート監獄の前で公衆の娯楽のために催すものよりも、はるかに厳肅なものだ。この罪人と同藩の人々は私たちに向かつて、この宣告は公正で、情けあるものだと言ったのである。

さらにサトウは、堺妙国寺における土佐藩士の切腹に言及し、執行中止命令により九名が助命されたことに對し、仏国人十一名の死に對し十一名の死をもって終わることは、正義というより復讐を行うものであるとまで、極論している。とまれ、腹切が厳肅な儀式だ

というサトウの見解は、外人としては極めて冷静でまともな見方だったと思える。

ミットフォードもまた、先に引いた文章のあとの方で、次のような見解を記している。

茲に儀式は終了し、我々もまた寺院を辞した。実にその儀式たるや悲痛莊嚴なものであったが、是は因より死そのものの本質より来る必然の締結であるかも知れないが、一にはまた高貴な人々が殊更なる威容と尊大さを以てするその態度、及び更にはその場所や時刻という外面的要素が附加えられ、以て全儀式の上に独自の特性を附与するに至ったものであると察せられる。

一方に於て酸鼻といわんよりは、むしろ恐怖をさえ感ぜしめらるる底のものでありながら、他方切腹者の雄々しくも男性的な態度、弟子たる者が恩愛深い己が師に対し、弟子としての最後の務め（筆者註 介錯することを指している）を果そうとする、美しくも崇高な心理に至っては是また深い驚異と感銘とを禁じ得ぬものがある。

これを要するに、実見したが故にサトウもミットフォードも、切腹において崇高悲壮な

武士道精神の象徴を見出だしたものといえよう。

三

史実から切腹の精神を採り出した外人も少なくない。

たとえばフランスの軍人で作家ピエル・ロチは、その著「秋の日本」（角川文庫版）に「サムライの墓」を記し赤穂義士をとり上げている。但しこの文章は、赤穂義士の史実をかなり不正確に聞かされた、としか思えないのは事実である。

仇討の本懐を遂げてこの不実な人間の首をアカオの墓前に供えてから、彼らは裁きの座に自首して出た。彼らは切腹を命ぜられた。それは彼らの予期していたところであった。で、彼等はお互に抱き合った後、なつかしい藩主の墓に近い、とある御堂の階の上で、みんな一しよに切腹したのである。

というように。が、

このハラキリというのは、これらの人々が名誉を重んずる士の採るべき恐しい方法によって、各自の短刀で腹を切り開いて死んだという意味である。

と「切腹」の理解へのアプローチを試み、更にこの章を結ぶに当って次のように記す。

この物語は、詳しく知っている者にとつては実に美しい。それは英雄的行為の、褒めても褒めきれぬ榮譽の、超人的な忠誠の、実に驚くべき物語である！

この物語は、小賢しい墮落した今日の日本人を知ってみると、まるで古めかしい謎のように不可解である。それは崇高な騎士道的な、ある偉大な過去の觀念を喚起してくれる——そうして同時にわたしにひどく冷笑したこの近代の日本の上に一種尊敬の影をわたしに代って投げてさえくれる。

わたしは、ここに眠っている四十七人の英雄たちに新鮮な花々を持ってこなかった。いや反対に、わたしは彼らの盟主の墓の上に置いてあった花束から、一本の花を抜きとって、そしてそれを持ち帰ったのである——フランスにまでも。——けれどもこのことは、逆のかたちで彼ら一人残らずの思い出のために捧げた、やはり同じ敬意^{オマージュ}なのである。

こういう解釈は畢竟「切腹」という行為のヒロイズムを理解せずには、出来ないことで

はあるまいか。

その四十七士の墓に親しく詣でた一アメリカ婦人の見解もまた、日本人にとって一つの示唆である。竹内逸氏が昭和29年1月から百回にわたって夕刊読売新聞大阪版に連載された「女さまさま」の中で、第五回「泉岳寺の墓碑」がそれである。

竹内氏がたまたま泉岳寺に立寄り、来合わせた四十五才位の夫婦とその息子らしいアメリカ人に、赤穂義士についていろいろと求められて説明した時の挿話で、大石主税に関する部分を引用させていただく。

「十四才？ 十四才！ 十四才のボーイが腹を切ったの？ 可哀想なことをしたのね！」

彼女はハンカチを取り出して鼻を伏せた。吾々も彼女の声が余りにも悲愴だったので悲しくなったし、線香の灰がポロポロと落ちる。

「ヒドイわね。そんな子供になぜ腹を切らせたの。誰か止めてやる人はいなかったの」

そこで拙者（竹内氏）はそのワケを話した。万一フラチを働く者が出ると、折角の義挙を傷つけるからと、そのワケを

話した。

「それは尚更ヒドいわ。フラチを働くか働かないか判らないじゃないの。それをフラチを働くモンと決めて殺してしまうなんて、僅か十四才の子供……噫！ ナンという無慈悲……」

もう彼女の頬は涙で濡れ切ってしまったし亭主の肩に額を押しあてて泣いた。

（下略）

竹内氏の簡潔な文章によってもその場の情景は容易に想像できる。そしてここから得られるものについて考察を加えてみよう。

日本人ならばたとえ女性であっても、主税が十四才で切腹した事実に対し、一概に無慈悲とのみは感じないのではないか。なぜならわれわれは過去において、極端な例であるかも知れないにしても、八才もしくは九才で切腹した少年のあったことを記録にとどめている。武家時代の道徳律は、少年に対しても責任行為能力を認めていたといえよう。そしてかかる事実をわれわれは単純に、既定の事実として受け容れているからである。アメリカの女性なるが故に、過去の事実といえども、その現在性において把握し、批判していることに、われわれもまた、注目すべきではない

であろうか。

彼女の驚きと悲しみの所以を要約すると、イ、十四才の少年が腹を切ったこと
ロ、かかる無惨な情景が看過されたこと
ハ、少年といえども死刑に処したこと、
以上の三点に絞られる。

しかし第一の点については、当時もはや切腹は全く儀式化し、前後の作法において故実を重んずるばかりで、実際に刃を腹に加えることは少なかった。ことに赤穂義士の場合、作法どおり腹に切先を触れるか触れないかで介錯の刃を受けたものがほとんどすべてであって、主税もまた例外ではない。

第二、第三の点については、切腹は名誉保持の刑罰であったから、主税のような少年にあつては、むしろ純粹に受け容れられたに違いないし、また当時の文献によっても、違いなかった。

こうした思考の経緯を、前記のアメリカ婦人に求めるのは無理であるかも知れない。

ルース・ベネディクト女史が第二次世界大戦後に著わした「菊と刀」は、「日本文化の型」と副題されているだけに「切腹」についても一つの省察を示しているのだが、そこに「四十七士物語」として、赤穂義士の史実と

「忠臣蔵」とを融合した一つの説話を挙げる
ことによつて、義務と義理のディレンマを解
剖してみせた。

この著書の中で、外人の「腹切」観に関し
て、最も女史の鋭敏な觀察を挙げるとすれば
第十章「徳のジレンマ」を同書に拠ってみる
ことが必要であろう。殊に「史実から発展し
て劇化された四十七士劇の発端が、賄賂のテ
ーマから色恋のテーマに変えられている、と
いう女史の着眼は、日本の文芸作品における
一つの宿命を改めて考えさせるに充分であろ
う。

「四十七士劇」つまり「忠臣蔵」については
ほかにドイツ婦人の感想が伝わっている。岡
田章雄氏著「明治の東京」（桃源選書）によ
ると、明治四十四年に歌舞伎で判官切腹の場
を観たマリ・フォン・ブンゼンの文章に、次
のような個所がある。

私には切腹の場面が忘れられない。

（中略）

型通り歴史その儘にその場面は始まる。
それは宮廷の庭で行われる。ちらほらと
花をつけた木々のある部分が、長く拡げ
られた白布で区切られている。裁判官は
彼を有罪と認め、切腹の判決を下した。

これは自殺に対する正式の名称である。
ヨーロッパ人のよく知っている「ハラキ
リ」という言葉は下品で、教養ある人は
用いない。この舞台は最高の舞台芸術を
示していた。その趣味と様式感とに加う
るに、すべての衣裳や道具に端正と品位
とがあった。

（中略）

やがて翼のような袖のついた、立派な白
絹の式服を着けたあの大名がふたたび登
場した。とても青白く、とても優美で、
この世の人とは思えない。

（中略）

今や死に対する心構えができた。オーケ
ストラ席から黄銅の鐘の沈んだ響きが単
調に鳴り渡る。浅野が静かに、莊重に最
後の言葉を述べると、侍臣たちは跪き、
二人の家来が彼の上着を緩めた。——そ
こで幕が降りた。

しかし舞台の幕はまだ私を包んでしまわ
なかった。私の目にしたものは、完全な
悲劇であり、完全な美であった。

歌舞伎における腹切場のなかでも典型的な
儀式としてのそれを見せるこのシーンを、彼
女は完全に理解したようである。彼女は更に

案内者に質問し一つの悲劇を知る。

叔父は祖父の邸で切腹をしました。革命
（明治維新）の際、父は官軍に属してい
ましたが、その弟は將軍の部隊の隊長だ
ったのです。將軍の部隊は敗北し、高級
將校たちは自殺（切腹を意味している）
を宣告されました。祖母は彼のために最
後の入浴の仕度を整えました。それから
まるで掟で定められた切腹の検視人の前
でするように、彼は祖母の目の前で切腹
にとりかかったのです。……彼女は真の
サムライの娘でしたから、それを見守っ
ていることに堪えられたのです」……

彼女はこの実話にも恐らく強く深い感動を
覚えたのではないか、そう想像されるが一切
感想めいたものを、ここには記していない。
あまりにも生々しすぎて、感想に至らなかつ
たのであつたらうか。なおまた余談ながら、
維新の際のこういう実話はかなりあったと思
われるにもかかわらず、明確な文書としては
伝わってはいない。敗者の行為は常に埋没す
るものなのであろうか。

四

歌舞伎における腹切場について、とならば

小泉八雲の一文を逸してはなるまい。日本びいきで一生を松江に送った彼の「心」(岩波文庫版)には、次のような話が見える。

武家特有の礼儀作法にいたっては、とくにいっそう厳格であった。腰にたばさんでいる小刀は、だてやもてあそびの品ではない。そういうことは、子どものうちから堅く教えこまれている。その小刀の使い方とか、あるいはまた、武士の掟がこうと命ずるおりに、どうしたら遅疑するところなく、わが一命を即座に断つことができるか、そういうことは、折にふれて、いちいち実証をもって見せられるのである。

「こは、しんじつ、そちが父の首級なるか」と、ある大名が、ある時、七才になる侍の子に尋ねた。その子は、とっさにその場の事情を胸に悟った。いま、自分の目前にすえられてある、血のしたたり流れている首は、じつは自分の父の首ではない。主人は先刻から騙されているのである。が、自分としては、この上なお重ねて騙しおおせなければならぬ。そこで、その子は亡き父がそこに在すがごとく、うやうやしく、子としての愁嘆を

顔にもしぐさにもまざまざとあらわしながら、その首級に一礼すると見るや、いきなりがっぽと、腹を掻き切ってしまった。この見るもむごたらしい孝心のあらわれを見て、さすがの大名の疑いも、たちどころに氷解した。そのおかげで、道ならぬ罪を犯したその子の父は、首尾よく、城下を逐電することができたのである。この子どもの美談は、いまでも、日本の芝居や音曲に仕組まれて、永くうたわれている。

右は「保守主義者」と題する章から引用したもので、この章は、一武士が少年から成長して維新に遭遇し、海外に渡航し、やがて帰国するまでの心理経過を描写し、日本人にとってきわめて示唆深いものがある中にも、特に右に引いた部分は「近江源氏先陣館」を思わせる内容を持っている。

歌舞伎はたしかにその重要な要素の一つに「切腹」を含んでいるし、法制とか史実とかの、ナマな素材と違って、人情すなわち人間の心理を描き分けるものであるから、当然外人にも理解されやすい、とまではいえないにしても、理解の端緒をつかみ易いマテリアルといえよう。

従って古くは川上音二郎、近くは法村・友井バレー団が、欧米を巡演して演劇やバレーに切腹の型をとり入れ、外人の好奇心をそそったのも当然かも知れないし、例の歌劇「お蝶夫人」においても、日本人の女流歌手が海外でお蝶夫人を演じ、あるいは白刃の型を切腹の法式で演じたり、また、演じることを要請された、というのも当然かも知れないのである。

外人には少年の切腹が特に深い感銘をもたらすらしいことは、叙上の挿話で幾分うかがえるところであるが、かつてイタリーの指導者であったムッソリーニは、白虎隊の悲壮な最期に感動して使節を派し、忠魂碑を会津の地に贈った。同じく白虎隊について、もと学習院で教鞭を執ったドイツ人リヒアルト・ハイズ教授の著書「日本忠勇物語」には、教授が白虎隊士の墓前に立って少年たちの忠烈を偲ぶくだりが力をこめて書かれており、いかに教授が武士道精神を理解し賞讃したかを明らかにするものである。

古い日本の精神によって薫育されて少年達は斯くの如く考へるのであった。一人残らず真の武士として振舞い若年乍ら、自らこの世を棄てねばならぬ時が来たこ

とを感じていた。——斯くて彼等は即座にこの丘の上で潔く武士の最期を遂げる固い決心をしたのであった。

少年達は顔面蒼白となり血の色を去った唇を固く噛み締めて、死に即くのであった。成人も及ばぬ強固な意志を顔面に表わし眉毛一本動かさずに最期の用意を整えるのであった。——両膝を地につけ上半身を踵の上に載せた。次に子供らしい肌を脱ぎ、両袖を膝の下に敷き上半身を幾分前屈みにした。之は瀕死者の上半身が不覚にも後の方に倒れるのを防ぎ、必らず前方に倒れる様にする為めの心遣いからであった。

少年達の裸半身は皮膚の色艶々しく、この世において最後に受ける太陽の光を浴びて発熱たる光沢を示していた。併し彼等は臆て切腹し、出血の為次々に倒れ、五体は冷却し、遂に硬直する運命にあったのだ。

彼等は各々鋭利な九寸五分を眼の前に置き、彼等の為めに今や最後の奉公を為す短刀に恭しく叩頭した。次に作法通り之を取り上げ、徐ろに且莊重に鞘を抜き払い、一心を込めて額に戴いた。これが日

頃愛用した武器に対する最後の挨拶であった。臆て恐ろしい最後の瞬間は来た。

彼等は自殺の動作を出来るだけ短時間に仕遂げなければならなかった。

それは、切腹する者に対し友情と愛情の最後の発露として介錯の勞を取って頭を刎ねることにより、断末魔の苦悶から速やかに彼等を救ってくれる人を持たなかったからである。

若年ではあるが沈勇成人を凌ぐ彼等は、手元確かに剃刃の様に鋭利な短刀を横腹に突き立てた。

切腹の常則に従って左から右へ切り進め次に軽く切り上げ、開いた傷口から刀を抜き取った。

これでも未だ意識を失わないものは絶命を早める為め血刀を直ちに喉元に突き刺すのであった。

ハイゼ教授はまた「永遠の若さ」「不滅の花のような若人」の形容で白虎隊を賞讃している。遺言して遺骨を飯盛山の一角に埋めさせたほどに、教授は武士道と切腹の精神をよく理解した外人であったのであろう。

最後に締めくくりとしてバジル・ホール・

——送金についてお願い——

○従来、ご注文に利用していただいております「切手代用」は、都合によりまして、今後は一切お断りします。現金書留、小為替、もしくは振替にてお願い致します。

チェンバレン（英人）の「日本事物誌」（東洋文庫版）から、腹切の項の一部を摘録しよう。

はらきり
切腹は数世紀にわたって日本人の好きな自殺手段であったということをごここに述べる必要があるであろうか。切腹には二種類——義務的と自発的——があった。前者は政府が与える恩典で、この結果、武士階級の犯罪者は、一般の死刑執行人に引き渡されることなく、自分で死を選ぶことを許されるのである。死刑囚に時と場所が公式に通知され、役人が派遣されて、その儀式に立ち会う。この習慣は今ではなくなった。自発的切腹は、絶望的困難に陥った人間が行なったもので、また、死んだ主君に対する忠義心から、或いは、生きている主君の誤った行為に抗議するためにも（もし他の抗議が無駄で

う。かくして、この習慣は武士階級、言

わたっているのに、日本人自身はほとん

「日本小百科事典」と称しても過言では

チェンバレンが言っているように、好むと好まざるとにかかわらず、古い日本はいつまでも若い日本の心に宿ることであろう。

とある。しかし、チェンバレンが記したような理解が、今日の日本人の気持にもあるのであらうか。明治百年のあいだの外人が日本に示した理解は、今から四半世紀前の夏、日本人自身でさえが、放棄しようとしたものではなかったらうか。

以上、外人の“切腹”観について、資料となる重要な文献を引用解説してみたが、他日これが契機となって、日本と日本人がより深く外人に理解されるためにも、新渡戸博士の「武才道」に続く名著の執筆されることを念ずるのも、また筆者の秘めた祈りである。

▽賞金△

入選作品	一席	1篇	五万円	10篇
入選作品	二席	1篇	三万円	10篇
入選作品	三席	1篇	一万円	10篇
入選作品	四席	1篇	五千円	20篇

▽内 容△

一、特異な風俗文獻誌を標榜する本誌の内容にふさわしい力作を、読む雑誌としての新しい脱皮を企図する本誌の内容充実のため、広く読者の間から懸賞募集いたします。

一、S並にMは勿論のこと、各種各様のフエティッシュ一般、女性切腹、男性切腹、男女性美、女相撲、女斗美、生首狂崇、変装、妊婦嗜好、見世物奇態珍聞、奇習珍奇風俗、風俗文獻紹介、同性愛、アブラブ等をはじめとして、その他古今東西に亘る特異風俗に関する題材を広くとりあげて下さい。

一、広範囲に大いに新分野の開拓による力作を歓迎します。特に従前本誌にて余り扱っていない分野の傑作をお待ちします。

▽規定△

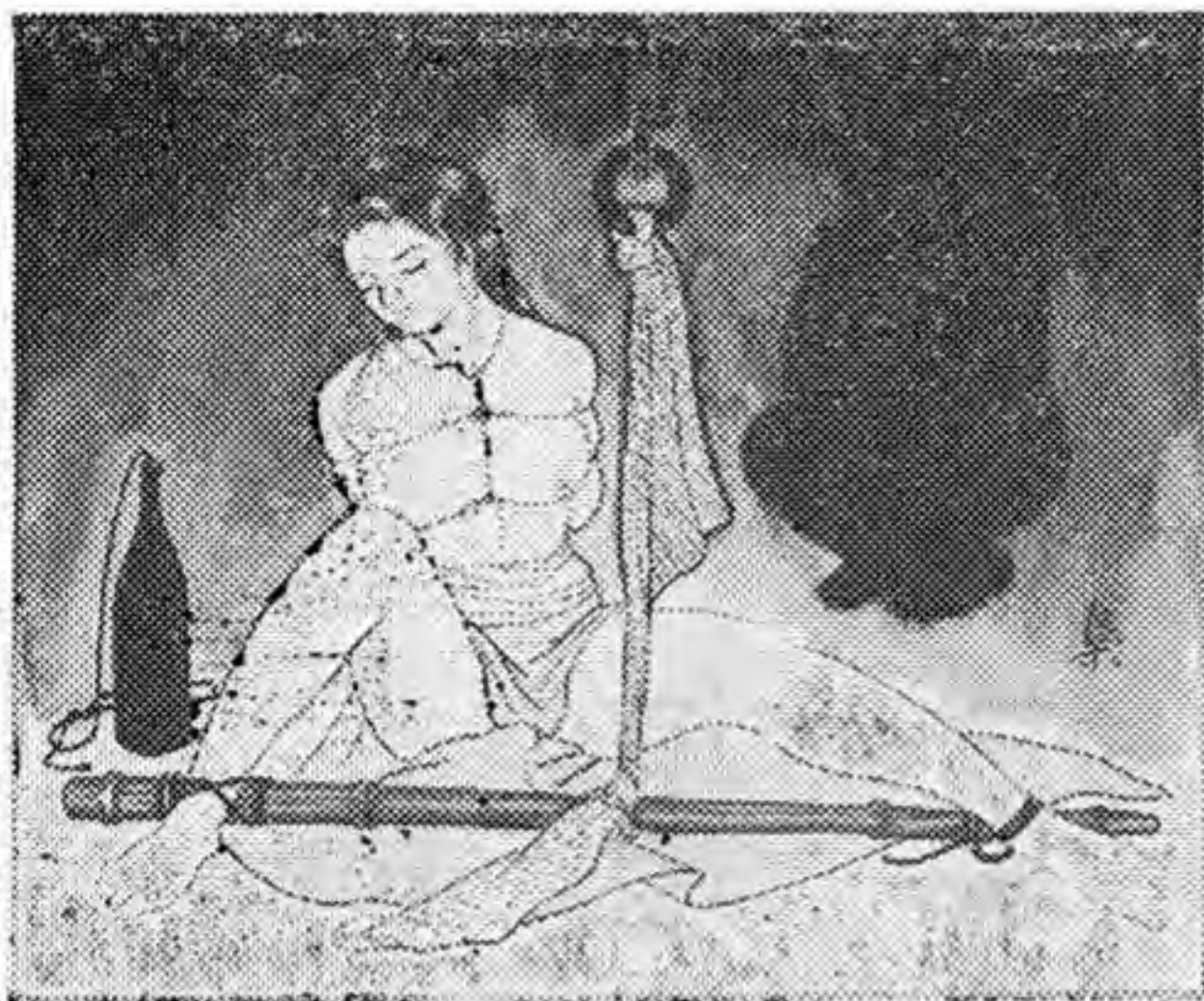
一、形式は創作、小説、読物などのフィクションも結構です。し、又自らの体験による告白や手記、見聞記、実見談でも結構です。更に論説、意見、エッセイ、感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲など、如何なる形式でも最もお得意のものをを選び下さい。

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品に限ります。作品中に引用部分があれば、その出処（作者、書名など）を明記願います。以上の枚数は四百字詰原稿用紙換算にて三十枚以上二百枚まで。必ず二百字詰又は四百字詰の原稿用紙をご使用願います。入選作品は順次次の誌上に発表いたします。一、懸賞応募原稿は、他の一般原稿と区別するため第一頁に「懸賞」とお書き下さい。一、ご投稿の原稿は原則として返戻は致しませんので、コピーしておいて下さい。一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書函第41号、暁出版株式会社、奇ク編集部懸賞原稿募集係宛。必ず郵送（第一種郵便）によつて下さい。直接の訪問は固くお断りいたします。す。採否は誌上発表を以てご承知願います。

読むためのシナリオ

異譚・三億円事件

風 流 極 道 軒



カット・辻

梶太郎

1. 国分市恋ヶ窪の林

上館、中田、下村の三人に、赤沢が、念を押す、

「決行は、明十二月十日午前九時二十五分準備は万端手落ちなし。あとは計画どおりの遂行あるのみ。いいな」

三人、大きくうなづく。

下村「赤沢さん、雨でも？」

赤沢「雨であろうと嵐であろうと、作戦計画は生命をかけて完遂する、責任を果たし得なかった際は、自決！」

下村が、ニヤッと肩をすぼめる。

中田「すぐにこれなんだから帝国陸軍少佐殿は、いやになっちゃうんだ。何かといえ

ば、やれ自決だ切腹だのと。たかが三億円……（フウーンと自分で呻って）三億円か、三億円ねえ」

上館「日本犯罪史上最高の金額を堂々と奪取する、血一滴ながさないで……こりゃあやっぱり赤沢さんのような、ビルマ、フィリピンをかけめぐった陸軍の参謀さんでなくっちゃあ考えられませんや。その日のために、二年も前から中田君に工作させたんですからねえ……二年も前から」

武蔵野の西の空に、真赤な夕陽が沈もうとしている。

赤沢「明日……明日は、やるぜ……」

四人、かたい覚悟の顔を見合わせる。

2. 府中市・府中街道

府中刑務所の高い塀。

——三億円奪取事件の現場——

走ってくる現金輸送車。白バイ、白ヘルメットの下村が車をとめて何事か囁く。あわてて車をおりる関山運転手ほか三人の銀行員。運転台にのり込む下村、走り出す車……あわてふためく四人。

3. 現場から四軒はなれた林の中

カローラで待ちうけている上館。そこへ下村の運転する現金輸送車が近づく。ジュラルミンのケース三箇をカローラに運び込む。二人とも皮手袋。

走り出すカローラ。緊張する二人の顔。

4. 小金井市本町・本町団地

カローラがとまる。三菱コルトが、すべるように近づく。赤沢がおりてくる。上館と下村が大きな旅行カバン四つをそれぞれ両手にさげてコルトに乗り込む。

周囲を警戒しながら、誰も見ていないのをたしかめて車に乗り、アクセルを踏む赤沢、クラクションを三回、鳴らす。

下村、上館、ハツとする。

赤沢、もう一度、警笛を誰も気にとめないのを確認すると、北に向かって車を疾駆させ

て行く。

5. 中央本線国立駅前

コルトからおりる上館と下村、

上館「やあ、どうも、有難う」

赤沢「今度は、いつですか、半年後かな。」

又、きてくださいよ」

行きかう人々。これらの会話にも、車にも全く関心がない。

駅の構内に消えて行く二人。赤沢、平然と口笛をふきながら車にのり込む。

6. 恋ヶ窪の、とある墓地

あれはたまた墓地で、人気は全くない。

赤沢家先祖代々之墓

とかかれた墓穴から、出てくる赤沢。

パアッ、パアッと手を払うと、ホッとしたように曇った空を見上げて、始めてニコッと笑い、呟く。

「人に将たる器とは、秘密を守り得ることにあり……統帥綱領」

7. タイトル——「異譚・三億円事件」

裸で縛りあげられている赤沢の妻・律子。

そばで、同じように縛られている赤沢。海老

責めにされている中田の妻・美智子。

ショーツ一枚の姿で、天井から吊り下げられ、ローソクの焰で、いたぶられている下村

の恋人・景子。

六人の男たちに手足を持たれ、叫喚し悶えている上館の妻・順子。

以上をバックにして、キャストが銀幕に描かれていく。

8. 多摩丘陵

雪が降っている。

9. 多摩丘陵

桜の花が咲き、人々が、戯れている。

その中に、赤沢と上館・中田夫妻の楽しそうな顔も見える。

10 極東商事会社屋上

昼休み。バレーボールに興じている女子社員達。

それを眺めながら、上館が、

「赤沢さん、あれからもう百二十五日、ぼつぼつ……」

赤沢「まだ早いぜ」

上館「もう五十万や百万くらい大丈夫でしょう。警察の奴等、必死になって府中だ日野だ小金井だと調べていますが、からっきし智恵がねえ……」

赤沢「それというのも我々が、れっきとしたサラリーマンだからよ。十年も真面目につとめていりゃあ疑う余地はなからう」

上館「（こわばった口調で）赤沢さん、ブツ

は大丈夫でしょうねえ、ブツは。……まさかあんたひとりで……」

赤沢「じょうだんいうな。俺ひとりで使いきれ金じゃあねえ」

上館「いったい、どこにかくしたのですか。それだけでも、せめて、私にくらいは」

赤沢「二年待て、二年待ちゃあ、百万、二百万は、分けてやらあな」

上館「分けてやる？……分けてやるとは何ですか。一緒にやったんですぜ、我々は」

赤沢、ニタツと笑いながら、

「まあまあ、そうとんがらずにさ。とにかく二年待つことだな」

11 東京都江東区・喫茶店「コケシ」

上館と下村が話し合っている。

下村「上館さん、どうにかしてくださいよ、結婚するんですから。その資金に、百万くらいは先に呉れたって悪かあねえと思うんですがねえ。……今の仕事じゃあ、月に三万にもならねえんで」

上館、じいっ——と考え込んでいたが、

「ひとつ、中田とも相談してみるか」

下村「あ、ありがてえ！ これで景子ちゃんと、ハワイへ新婚旅行に行けるぜ」

上館、遠縁にあたり孤児である下村を、あ

われむように眺めている。

(上館の声——女房こどもにも、ひとことも洩らすなと赤沢さんは言うが、この下村はまだこども……新聞にでているモニタージュ写真はカッコイイが……現実の下村は)

12 国分市のあるスナック

ボーナス支給日その他を知らせる役目を果たし、その後も何喰わぬ顔で従来通りつとめている中田と上館が、何かひそひそと話し合っている。

13 極東商事・屋上

赤沢と上館。上館が、

「赤沢さん、とりあえず私たち三人に百万円ずつ分けてくれませんか。中田も下村もそう言ってます。もう、待ちきれねえって。それに下村は、結婚資金がどうしても要る……せっかく苦勞して盗んでも、何の役にもたたねえって、ばやいてますぜ。……大した金じゃない、ねえ、赤沢さん」

赤沢「ダメだ、ここまでするまでやってきたんだ。あと一年や半年、待てねえってことはないだろう」

歩き出す赤沢、追いつがった上館が、
「どうしても要るんだよ。ねえ、いいでしょう、赤沢さん」

その声が高かったので、あちこち眺めていた女子社員が、ふり向く。

赤沢、ハツとする。そして、眉をひそめながら上館を見つめ、こっそりと、
「百万だけだぞ、百万だけ……」

14 喫茶店「コケシ」

下村と景子、笑いあっている。

景子「そうなの、えらいわねえ。競輪ってそんなにうかるものなの。わたしもやってみようかしら」

下村、いい気持になって、次々と、カクテルを注文する。

「ご機嫌じゃあねえか、ええ、下村」

と、ちかよってきたのは、この辺に根をはる羅南会の兄哥株の六車である。

六車「ミス江東の景子ちゃんをものにしたうえに、ハワイまで新婚旅行に行こうたあ、おめでたも度がすぎるぜ、なあ、下村」

二度、三度、競輪場で顔を合わせた仲、

六車「それに、おめえ……どこの競輪場でいっそんな目を拾ったんでい……まさかおめえヤバイことをやったんじゃないかあねえだろうな」
下村「(あわてて)そ、そんな。兄哥、俺はなにも、そんなことを……」

六車「……あるさ、あるよ。そのツラにちゃ

あんとかいてあらあ。さあ、こいよ。くるんだ！ ドロを吐くんだ！」

景子、おろおろしているなかを、相当、酔いの廻っている六車、惚れている景子を奪われた嫉妬心も手伝って、ずるずると下村を喫茶店のそとへ連れ出す。

たちまち、人だかり。六車の弟分、大場と箱田が現われる。

脱兎のように逃げようとする下村。追いかける三人。

つかまって、ひきずられて行く下村。

15 羅南会本部・地下室

猛烈なリンチを受ける下村。

六車「吐くんだな、下村。いってえどうしておめえが、ポケットに二十万もの金を持っているんだ！ おい！」

大場、下村のポケットからとりあげた札束で、下村の頬を撫でながら、腹をなぐりつける。半死半生の下村、それでも、

「知、知るもんけえ、俺が、ひとりで稼いだ金よ……知、知るもんけえ……」

ニタツと笑った六車、

「言わせて見せるぜ、どうあってもな」

大場、箱田をうながして、外へ出る。

16 同・廊下

大場「（六車に）そいつは面白え、あの景子のヌードが拝めるんですけえ、ヘッヘッヘ」箱田「けど、いいんですけえ、兄哥。景子ちゃんは兄哥がホレているスケ」

六車「可愛さあまって憎さが百倍……あの女郎、もう英夫のやつと他人じゃあねえ、ヨツニカラマレタ（強姦された）か、進んで抱かれたかしらねえが……くそったれ！ 構わんしよっぴいてこい！」

「合点、合点、承知のすけ」

二人、大はしゃぎで、とび出して行く。

17 極東商事・屋上

赤沢、上館に、

「大丈夫だろうな。決して一度につかうんじやあないぜ。こだしに、二、三万円ずつ……な。下村にもしっかり言っておけよ」

上館、ニヤツとうなずき、

「大丈夫ですったら、赤沢さん」

18 南羅会本部・地下室

下村、天井から皮を剥がれた豚のように吊り下げられている。

蹲まった景子のまわりを箱田、大場、六車たちが取りかこんでいる。

のっそりと立っている片眼、片足の代官正明、羅南会の参謀格である。

六車「（景子の頬をつつきながら）おめえのレコが強情だから、痛い目に逢わにやあならねえな、景子」

景子「六車さん。どうして、どうしてこんなことを！」

六車「そいつは、こっちが知りてえことよ。おい、始めな。おっとと……その前にこの豚野郎のお目々をさまさせてやんな」

大場、バケツの水を下村にぶちかける。

やっと目をあける下村。あたりを見廻す。

六車「強情はるからこんなことになるのだ。よく眺めな！ ほれ、見ろったら！」

下村、景子を見つめる。

下村「景……景子ちゃん……」

大場「なんでえ、景子ちゃんだって……甘ったれるねえ！」

箱田と大場、二人がかりで、景子のスーツをぬがせ、スカートのホックを外し、うすいピンクのスリップの肩紐をひきちぎる。

右手を大場、左手を箱田が、つかまえ、

大場「起ちなよ、景子」

景子「下村さあん！ 下村さあん！ イヤです、いやよ。こんな、こんなこと、イヤ！ 六車さん、お願い。やめて！ ねえ、やめてったら！ 六車さん！」

六車「(ぶっきら棒に)もうおそいね景子。俺をふった罰だぜ。さっさと、素っ裸にひん剝かれてしまえ! とつくりと鑑賞させて貰わあ」

大場、箱田、景子をたたせる。

する、するっと、ずりおちるスリッパ。

箱田「スリッパとは、ずりおちるものと見付けたり!……か」

興奮を押えるための、てれかくしのジョークのようである。純白のブラジャー、ショーツ、黒色のストッキング……。

クラクラッとするほど、美しく豊かな肉付きの景子の女体。

正面にたった六車が、「景子! 景子!」

と絶叫する下村の前で、

「ひんむかせてもらうぜ、すっ裸にな」

こんもりと隆起した乳房の谷に、ごつごつした右手をあて、ひといきに、ブラジャーをひきずりおろす。

「アレッ! イヤ。イヤだったらあ!」

弓のように反り、海老のように曲る景子の両手を、しっかりと捕えてはなさぬ大場と箱田。

「暴れるなっことよ」

と、六車は、景子の前にかがみ込むと、ス

トッキングを、左、右とぬがせて行く。

すらっと、アルニールをぬられたあとのような冷たさが、景子の全身を走る。

六車「吊りな、英夫のまんまえてよ」

大場と箱田、狂ったように暴れる景子の両手首を揃えて縛ると、天井の滑車にとおして吊りあげる。

「アレッ! アウ、オオッ! イヤ!」

悲鳴のなかで、景子もまた、皮を剝がれた羊のように下村の前、一米の所に裸体を曝け出す。

下村「や、やめてくれ! 云う、何でも云うから、やめてくれ!」

必死の叫びに、六車、ニタツと笑い

「ことわるよ、下村さん。ここまできてやめたんじゃあ、男のコケンにかかわるぜ。(景子に)こうなるのも運命だよなあ、景子ちゃん。あんたは俺のものになるように、なったのさ。じゃあ、ぼつぼつと御開張を……下村! よおく見とくんだな、女が、恋人のまんまえて、赤裸にされる瞬間を!」

六車、そろりっと左手をのばすと、青色のショーツに手をかける。

ピーンと、はりつめる景子の肉体。

「イヤ! イヤヨ!」

激しく景子が叫ぶのと同時に、六車は、ショーツを、ぐいっ、ぐいっ、ひきずりおろす。そのショーツを、ぴたりっとあわされた太ももが支える。

六車「じたばたするねえ。この下村にゃあ、自分からすすんで、全部ながめさせたというじゃあねえか……」

六車、かがみ込んで景子の両膝に手をあて無理にひらかせようとする。

甘ずっぱい景子の匂いが、六車の鼻をくすぐり、

六車「た、たまらねえや、景子ちゃん!」

両膝をついた六車、景子の足に抱きつく。

「兄哥、ずるいぜ」

大場と箱田がそれぞれに手を出し始める。ブルン、ブルンと豊かな乳房がゆれ、体が前後左右に激しく動かされる。

箱田「た、たしかに、たま、たまねえや」

三人の男たちは、飢えた男たちが、剝身の玉子にむさぼりつくように景子をなぶる。

「もう、よかろうぜ」

代官が、始めて声を出した。

「六車、女を嬲るのはあとにしろ。それよりこっちのお兄さんの話というのをきこうじゃあねえか」

やっと景子から手を離す六車。

下村「(わめく)云うもんか、こんなにまでされて云うもんかあ。さあ、殺せ、殺してくれえ！」

代官、片目を不気味に光らせて、

「面白いことを云うじゃあねえか。白状しねえって？ ワッハッハハ……人間ってけだものはね、下村君とやら……必ず、必ず白状させられるものよ」

代官、室のすみからローソクをとり出すと箱田と大場にわたす。

代官「じっくりと、じっくりとな。一番、柔らかい所を……」

箱田、ローソクに火をつけると、下村にちかよる。

代官「バカ！ 男じゃあねえ、女だ！」
あわてて、景子の方にローソクを向ける。

景子の恐怖におびえた顔。

焰を、のびきったその腕の、腋の下にちかよせて行く。

「ヤ、ヤメテッ！」

絶叫する景子。大場は、背後から、真白い尻に、青白い焰をちかよせて行く。

「ヤ、ヤメテヨオ！ ヤメテ！」

景子、身動きひとつできない姿で、金切声

をたてる。

代官「云わねえかい……下村さん」

四本のローソクが、景子の裸身のまわりをうごめく。途端、下村が、

「や、やめてください、云います、なにもかも……」と、ぐったりとなる。

代官「何をやったんだ、チンピラ！」

下村「……三億円……赤沢……」

男たち、ぎくっとなって顔を見合わせる。

19 同・奥部屋

羅南会々長興田得資、代官の話をきいている。

興田「それでその赤沢というのは、代官さんあなたの戦友だと云うんですかい」

代官「戦友？……フッフッフ……私の身体がこんなになったのも、赤沢の奴が、裏切ったからなので」

20 ビルマ戦線

昭和二十年七月末——。敗走する日本軍、担架にかつがれている代官。追撃する英・インド軍。赤沢、軍刀をぬいて叫ぶ、

「負傷兵は、放置せよ。日本は必ず勝つ。その日に備えて、健全な兵は一刻も早く撤退。

新しい戦場に向かう。負傷兵は捨てろ！ 捨てるんだ！」

空を舞う敵機、降りそそぐ銃弾。

猶も担架をはなそうとしない四人の兵を、軍刀の背でなぐりつける赤沢。

「つづけ、俺につづけえ！」

四人の兵、代官に挙手の礼をすると赤沢につづいて馳け出して行く。担架の上で代官、

「赤沢……とうとう、お前もか」

轟然とうち込まれる砲弾。

21 羅南会本部・奥部屋

政界の黒幕と噂の高い大島共栄がゆったりと座椅子にようっている。興田会長が、

「先生、では、そのように」

大島、うなずく。

興田「で、男の方は片付けるといたしまして女のほうは、赤沢を始めみな女房持ちのようで、幸いこどもはひとりもおりませんが」
大島「女たち、美人か」

興田「へえ。乾分たちに下見分させたところではなかなかの美人揃い。特に上館の女房という奴は、新珠三千代そっくりとかのふるいつきてえくらい的美女さうで」

大島「フッフッフ……大事な貴道具。赤沢たち金のかくし場所を吐かせるもってこいの道具じゃ。それに、久しぶりに、あぶらっこい責め場をみてみたいもの」

興田「ハッハッハ……また、例の先生の悪趣味がはじまりましたな。そのあとは……」

大島「羅宝明……」

興田「（手を打って）香港に売り飛ばす。こりゃあ一石二鳥、いや三鳥、四鳥ってところですね。こたえられねえ」

二人、傍若無人に高笑いをする。

22 上館の家

玄関に車がとまり、セールスマンのように入っていく大場と箱田。数分後、妻の順子を両側から支えるようにしてでてくると車に乗り込む。発車。

23 府中市郊外

人通りの少ない道を歩いている中田の妻・美智子。車がちかより、二言・三言、運転手と話していたかとおもうと、ドアがあき、なかにひきずりこまれる美智子。

24 東京・大島共栄の別邸

すべり込む車。よろめくようにでてくる順子。箱田と大場に抱きかかえられるようにして玄関に吸い込まれる。

25 同・大島別邸

すべり込む車。六車ともう一人の男（乾分の半次）に、かつがれて玄関に運び込まれる中田の妻美智子。気を失った横顔が美しい。

26 同・大島別邸・別棟

広大な庭の片隅、うっそうとした立木にかこまれた二階建ての建物。大島が金にあかしてつくったいろいろのしかけがあり、部屋には、それぞれ、「強姦の間」「海老責めの間」「車裂きの間」「凌辱の間」などの名がつけられている。

27 同・「人妻裸控えの間」 はだかひか

失神状態から正気を取りもどす順子。

六車「気がついたかい、奥さん」

順子「ここはどこです、そして、あなたは」

半次「さあてな。それは次第にわかってこようぜ。その前に、裸になって貰いやしょ」

順子「な、なんですって！」

六車「この部屋はな、裸控えの間、責め場につれ出される前に、神妙に裸で控えてるって部屋よ。それ、半次、やんな。構うことあねえ」

半次「へえへえ、へ……こいつはたしかに別嬪よ、新珠三千代に似てますぜ、すこしやせてるようだけど」

半次、おどろかかると柑子色とうじの銘仙の襟に

手をかけ、

「まずは、乱しておかねえと……」

と、ぐ、ぐうっと大きく胸をただけさせて

しまい、順子が胸元に手をやったすきに八寸名古屋帯に手をかけて、帯締めといっしょにぐぐぐっと三振り四振り、ゆるんだ帯のはしを持って、力まかせにひっぱったものだから順子の身体がバランスを失って、白い膝頭を見せてひっくり返る。六車がのしかかるようにして帯を外し正絹の伊達巻きをぬきとり、「どっこいしょ！」

と、順子の身体を二回三回、回転させて、銘仙の着物を剥ぎとると、つづいて、うす桃色のひとえの長襦袢もいっきに両袖をぬがせてしまった。

半次「へえへえへえ……女盛りのこの体臭。

こたえられませんか、奥さん」

六車「半次、上半身剥身むきみにしろ。俺はひとつこいつで……」

半次が、必死で抵抗する順子の肌襦袢の赤い紐をプツリンときって、双肌をぬがせる。ピリリッと言音おとごえがして、袖が破れる。

半次「奥さん、暴れねえってことよ。おっと、かきむしろうたって、そうはいかねえぜ」

六車の手でポロライドカメラのシャッターが三度、四度、おろされる。

六車「相当なアバズレだな。こんなに反抗す

るとは思わなかったぜ。半次！ ふん縛っちまいな」

半次「おっと合点、承知のすけ！」

麻縄をとり出した半次、大きく肩で息をしながら部屋のすみに後退した順子を眺めて、「こりこりっと肉の乗った、いい体をしてま

すぜ、兄哥。早く、抱きてえもんで……」

六車「お前が抱くのは十日のちだろうよ。先ずお偉方が（六車、身も世もないように悶えている順子のそばに片膝をつき、クンクン、肌の匂いを嗅ぎながら）この匂いを賞味あそばして、そのおあまりをこちとらが頂戴……まあ、それまでに少しやあ役得にあずかるくらいはできようが……」

六車と半次、淡牡丹色の湯文字一枚の順子の両側にべったりと腰をおろすと、白足袋を脱がせ、左右の腕を、ぐいっと背後に回し、荷造りでもするように二人がかりで順子を緊縛して行く。

28 同・「本丸」

別棟中央の本丸と名づけられた部屋。大島共栄が財界の大立物、久富、萩森、浅井たちとスクリーンを眺めている。カラーで、「人妻裸控えの間」の状況がうつし出される。

呼吸をのむように、半次と六車が、順子を

縛りあげる光景を眺めている。

29 同・「拷問準備の間」

美智子が、大場、箱田、それに代官の三人にかこまれている。

美智子「いったい何の目的で妾を……」

箱田「三億円よ。……三億円はどこにある」

美智子、げげんな顔。

大場「知らねえとは云わさねえぜ、奥さん。ネタあもうあがっている。吐きな、早く」

美智子「存じませぬ」

箱田「早く吐きなよ。亭主のやったことを女房が知らねえ筈はなからうよ。吐かねえと恥かしい目を見なくちゃあならねえぜ」

美智子、唇をかねて、首を左右に振る。肉

づきのよい頬がふるえている。

代官「ほんとに知らねえのかも知れねえ。女こどもに洩らしたら失敗するということを赤沢の奴、身にしてみ感じてやがる」

箱田「するてえっと、この阿魔は……」

代官「そうだな。（一寸考えていたが）ともかく、裸に剥きな」

箱田と大場、手に唾してとびかかると、ブラウスを外し、スカートのチャックをおろしスリッパの肩ひもをねじきると、アッと云うまに、ブラジャーまでむぎとって、うす紫色

のパンティいちまい。代官

「吊るんだな。そのうち、とっくりと拷問させて頂く」

箱田と大場が、ガチャリツと美智子の両手首に手錠をはめると、天井の滑車につながる鎖の一端にそれを固定し、滑車を廻す。足の爪先が辛うじて床につくところまで、一本の皮を剥がれた杉の棒のように、吊り下げられた美智子の、むっちりともりあがった大きな乳房を、指先ではじきながら、六車、

「よく肉がのってるなあ、こいつは本縄かけるにやあもってこいの身体よ。ぐいっぐいっ」と縄が面白えほど喰い込むだろうよ」

と、美智子の裸身をくるくる廻しながら、吟味するように云う。

もう観念したように、しっかりと目を閉ざし、罵られるままになっている美智子。二十九才の女体の匂いが、「拷問準備の間」にむんむんするほどたち込めていく。

六車「さあ、大場、次の仕事だ。この女の身につけていたものを亭主の所へ持って行け。順子のもいっしょにな。それにヌードの写真も持って行ってやんな。どんな亭主でも、かけつけてくるだろうよ。（美智子に）なあ、奥さん、今からここへ御亭主をよび出してさ

し上げましょうぜ」

美智子の双眸から涙が二筋、三筋、頬を伝わり、板の間をぬらした。

30 同・「本 丸」

スクリーンを見つめている男たち。

大島「では、ぼつぼつ出かけますかな。とびきり上等の女たち、責め甲斐もあるうというもの」

男たち、興奮した顔でうなずく。

31 中 田 の 家

夜、十一時。玄関にとまる車。中田、でて行く。六車、ニヤッと笑って、

「中田さんだね、これに見覚えはねえかい」

ほうり出される美智子のブラウス以下。

六車「奥さんはいま、可哀そうにパンティいちまい、しかも、男たちに囲まれて」

半次「きれいなお目々から涙をながしてよ」

中田「な、なんのことだね、こ、これは！」

六車「まあ奥さんをたすけたかったら、一緒にくることだな」

32 上 館 の 家

上館が大場のつき出した写真を見ている。

「こ、これは、順子。いったい！ 君たちは何で、何の理由があつて女房の順子を」

箱田「理由？ フッフ、理由はきてくれりゃ

あ判るさ。早くしねえと、旦那さんよお、あなたの可愛い奥さんは、今頃、最後のお湯文字のいちまいもひんむかれた赤裸で、男たちにかこまれてヒイヒイ、キヤアキヤア云つてるかも知れねえぜ」

大場「(ドスのきいた声で) くるのかこねえのか！」

上館、チラッと不安な表情を見せて、電話の方へ目をやる。

大場「電話は、よした方がいいぜ。俺たちにやあ、警察もなにも恐いものはねえんだ」

33 大島別邸・「処女拷問の間」

羅南会の十数人の乾分、竹内、岡田たちに囲まれて、拷問にかけられている景子。下村英子が、叫喚するたびに、より激しく責められる景子。男たちは、楽しんでる。せせら笑いながら、景子を吊り下げ、吊り上げ、海老責めにし、三角木馬にかけ、台上で弓のように反らせ、もう、見境もなく、鞭りつづけている。景子の肉体は、それでもなお抵抗をやめない。

岡田と竹内は、ステッキを二本持ち出すと七、八人の乾分たちに手足を押えさせ、同時に、淫虐ないたぶりを開始する。もう全身のいたる所に男たちの手垢が、汗が、唾液が、

ぬりたくられ、惨めに汚れきっている恵子。

34 同・「凌辱の間」

羅南会々長興田と大島が話し合っている。会長「大島さん。カモがネギを背負って参りましたな」

大島「吐かせる自信はあるのか」

会長「おおありですよ。それに、羅宝明が二人の乾分とともにきましたよ」

大島「今度は何の仕事だ」

会長「例のクスリの販路拡張と女だそうで。帰りに四、五人は欲しいそうです」

大島、ニタツと笑って、

「四人はできたってわけだな」

興田会長も笑い返して、

「さて、今日、明日中にも吐かせませんと。……参りましょう」

35 同・「人妻仕置の間」

正面に幕。二十畳くらいの部屋に、浅井・萩森・久富、それに、香港からきたばかりの羅宝明と乾分の金徳成と張仲君。半次以下十数人の乾分たちが、黒めがねをかけたり、仮面をついたりして坐っている。やがて、電灯がきえて、ライトが、幕をてらす。カンカンと木の音が入って、幕が開く。

ほの暗い舞台。なにやら、白いものが正面

に見える。と、スポットライトが、それをうつし出す。(おおっ!)というどよめきがおこる。正面、そこには順子が、無惨なポーズを曝していた。

べったりと桧材の舞台に、尻をおとし、左脚は、大きく伸ばして、足首、膝、太ももと三カ所をがちりと縛られて、その縄の端を天井に吊られ、右脚は、膝をたてて、その膝に、真紅な縄、同じように天井に吊られている。こりこり、つとひきしまった上半身は、正式な高手小手縄がかけられ、猿ぐつわのない端麗な顔を、うつむき加減にして、責められる人妻の哀れさを、足の爪先にまであらわしかすかに息づいていた。

箱田が登場する。

「奥さん。いよいよ夫婦対面の場だぜ」

瞬間、順子が激しく身悶えると、

「イヤ! イヤです。や、やめて、そんなひどいことは!」

最後まで、反抗をやめぬ気色ばんだ顔である。

箱田「今更いやとは云わさねえよ、なあ。他人の前じゃ、ほれこんなに、ここまであからさまに(かがみ込んで、順子の胸から腹へと指先を這わせ)してるじゃないか」

「キャアッ! イヤ、イヤヨオ! ヤ、ヤメテヨオ!」

絶叫する順子。

36 同・「本 丸」

大島と興田会長、それに代官三人の前に、ぐるぐるまきに縛られた上館と中田。

スクリーンにうつる順子の拷問図を見ている。呆然とする中田。上館が、叫ぶ、

「や、やめてくれ! やめろ!……」

会長「云うんだな、中田、三億円はどこだ」

上館「知らん! ほんとに知らんだ!」

会長「そうかい。じゃあ、見な、見るんだ」

スクリーンにうつし出される順子。

左脚をじょじょに高く吊られ、右膝も上へ上へと吊りあげられ、膝をのり出すだけでは

なく、ついに舞台の上にあがり込む久富たち

黒山のような男たちのなかで、ひとり、真白

い肉体をふるわせつづける順子。その女体を

カメラがあます所なくうつしつづける。

会長「上館君、吐いたほうがよかあないか」

大島「中田君とやら、次はあんたの奥さんの番だぜ。ふっくらと肉ののったいい女じゃあ

ないか。吐かなきゃあ、僕がいたたくぜ、最初

初にな。そのあとで、縛られたまま、みんな

に回される……このようにな」

大島、スクリーンのチャンネルを廻す。

「処女強姦の間」とかかれた標札。男の背がうつり、次に女の顔。

上館「景子、下村の恋人の景子!」

大島「ご存知の様子だな。それ、それ!」

岡田が、のろのろと景子からはなれる。待

ってましたとばかり、画面に出てくる竹内。

景子の手足を押えつけている四、五人の乾分たち。

吊られたままの下村英夫の叫び疲れた姿。

中田「や、やっぱり、下村が……上館さん、

下村が、奴が、トチリやがった!」

上館、ゴクンと唾をのむ。

会長「景子は、可哀そうに、乾分ども十数人のおもちゃにされる。上館、吐かねえと、女

房の順子も、このざまだぜ!」

スクリーンには、景子がぐったりとなっ

ている姿が映る。

大島がチャンネルをもとに廻す。

順子が、逆さに吊られている。

そこへ、ひき出されてくる美智子。途端、

中田「知らねえ、ほんとに俺たちは知らねえ

んだよう、赤沢以外は。やつが、ひとりで、

どこかへかくしやがったんだ!」

大島「ほんとうだな、上館」

上館、うなずく。

代官「会長、いよいよ、この俺に仕返しの手
ヤンスが廻ってきたようすな。赤沢の奴。
じゃあ、ひとつ走り行ってきましょう。会長
は、大島さんたちの接待をたのみますぜ」
背広の上からピストルをボンとたたいた代
官、片目を妖しく輝かせる。

37 府 中 街 道

深夜、疾駆するニュー・コロナ。代官と岡
田、竹内がのり込んでいる。

38 赤 沢 の 家

赤沢夫婦、寝入っている。玄関の錠前を何
の苦もなくはずす岡田。侵入する三人。

物音にきづき起き上った赤沢の頬にピスト
ルが突きつけられ、代官が、

「赤沢、久しぶりだなあ」

赤沢「き、きさまは、代官！」

代官「あのとき……ビルマでなあ、きさまが
見捨てたばかりに、俺は、このざまよ」

片目、片腕の代官正明、ニタツと笑う。

赤沢「な、なに用で、こ、ここへ」

代官「三億円」

赤沢「な、なんだって。……知らねえ。俺は
何も知らねえ！」

代官「その顔には知っていると書いてある」

その間、岡田と竹内は、赤沢の妻律子を押
えている。

代官「とにかくきて貰おう！ たて！ 歩け
い！」

赤沢、ピストルをつきつけられてはどうに
もならない。

「よし。承知した。だが、女房には関係のな
いことだ。俺、ひとりで行く」

代官「そうはいかねえ。見りゃあ、なかなか
の女、まだ三十を少しでたばかりにしか見え
ねえな、もう四十だというのに」

赤沢「なんで女房の年まで、知っている？」

代官「計画をたてるにあたりでは、綿密周到
にして、その機密を絶対を守るを要す——統
帥綱領。お互いに帝国陸軍の将校よ、それ位
のこたあ調べてあるぜ。おい岡田、そのまま
でいいぜ。着物などきせなかつたって、その
なまあつたけえままで連れてきな」

三人にかこまれて、玄関の車に押し入れら
れる二人。

39 大島別邸・「車裂きの間」

四十畳敷きくらいの板の間の部屋。中央に
一米高さの食卓を思わせる真黒い台があり、
その上に横たえられている美智子。

猿ぐつわをはめられた中田が、そのすぐそ

ばで、天井から吊り下げられる。

箱田「よお、旦那さん。奥さんの姿はどうで
い。見直したかい。いよいよ、最後のいち枚
を景気よくはぎとってやるぜ」

美智子は、もう口をきかなかった。唇をか
みしめて、屈辱に耐えていた。そのけなげな
横顔を指でつつきながら、大場が、

「奥さん、じゃあ、あお向きになってもら
うじゃないか」

美智子、怨めしそうに大場をにらむ。

大場「早く云われた通りにしねえと、こちら
でやらせてもらうぜ」

美智子、観念したように、半回転して仰向
けになり、乳房を両手でおおおう。

大場「手をどけな！」

美智子、そろそろと手を乳房から離す。そ
して云われるままに横に伸ばす。

箱田「今度は、脚！」

美智子の、ふつくと肉ののった脚が、た
めらいながらも従う。大場、ニタツと笑って
「さあ、どなたさんか、この美しい人妻のパ
ンティを、亭主の見てる前でとってやって下
さい。どうやら、女もそれを待っているよう
ですぜ」

浅井、久富、萩森の三人が、同時にすすみ

でる。

大場「三人……三人がかりですかい。いいでしょう。美智子……喜びな、買い手が三人もついたぜ。そこで、お願いするんだな」

大場、美智子の耳元で何事かひくく囁く。

美智子「（一声鋭く）イヤ！」

大場「そうかい、いやかい。それじゃあ、ほれ、みなよ。お前の亭主を、こう……」

大場、乾分のさし出したドスで、中田の耳をそぐまねをする。

大場「それとも鼻か、腹か……いっそ一思いにおめえの大事なものを切りおとしてやろうか……（威圧するように）冗談じゃあねえぜ俺あ、やると思ったらやるんだぜ。さあ、十かぞえてやらあ、その間に、云うんだ、みなさん方におたのみ申し上げるんだ！」

美智子、大場が数えるのを、じいっと聞いている。

（なんでこんな目に。夫が何かをやった……いったい何を、この人はしたんだろう……それにしても、妾が、妾がこんな目に合わされるとは！ 畜生！ ちくしょう……）

大場「やるぜ、美智子！」

「待、待ってえ！」

美智子が叫んだ。

『この人を殺すのだけは、やめてえ』

大場「そうこなくっちゃあ。俺だって血を流したくはねえ……さあ、云いな。俺は気が短けえんだ！」

美智子「（ためらいながらも）お、お願いいたします。ど、どなたさまか、妾、妾を裸になさって下さいまし。パ、パンティを……（こみあげてくる恥辱を、押えかねて絶叫する）どなたでも、勝手に、勝手に妾を、どうにでも、するといいわ！ 早く、早く取ってよお！」

半分、泣きながら叫ぶ美智子を、淫らに見おろしながら、大場、

「さあ、浅井さん、久富さん。御存分に」

浅井たち三人顔を見合わせる。次に、夫の中田をみる。疲労の極に達しながら、妻が、いよいよ一糸まとわぬ素裸にされる……それを一米もはなれていないところで眺めさせられる中田のどたんばの怒りが、赤く充血した眼に燃え上る。

浅井「ご亭主だそうだが、御気分はどうですかね……あなたの可愛い奥さまは、ほれ、今、私のこの手で」

浅井たち三人、パンティのゴムに手をかけると、するするっと、いっきに取り去る。

美智子「ア、アッ！ オオ……」

思わずはねおきて、台上に蹲まる。真黒い台の上に、真白い美智子の全裸身が妖しく映える。

両膝をかたく合わせ、体を丸くしている。

箱田「おきちゃあダメさ」

躍りかかって、つき倒すと、乾分たちといっしょに両手首に縄をまきつけ、それぞれの部屋のすみの鉄輪に結びつけてひっぱる。

箱田「車裂き……」

大八車の車軸と車輪をひき出してくる、右左の足首に太目の縄を縛りつけ、車軸にとおして固定する。

箱田「限度まで、この女の力の限度まで引っぱってみましょう」

もう、三億円なんかどうでもよい——人妻を、夫の目の前で凌辱する征服欲に、箱田と大場の目が輝いている。

乾分たちの手で、車輪が、右へ、そして左へとところがって行く。

次第に、はりつめてくる縄。引き伸ばされたふとももの静脈がうき上り、苦悶の叫びをあげて悶えつづける美智子。楽しげにからかう数人の男たち。

美智子「お、お願い！ た、たのむから、や

やめて頂戴！ は、はり裂けて、死んでしま
うわよお。おおっ！ や、やめてったら！
た、たのむから、おおっ！ お願ひ！」

40 大島別邸・「人妻輪姦の間」

二十畳、真新しい備後畳がしきつめられて
いる。緋毛氈がいちまい。

淡牡丹色の湯文字姿の順子が、海老責めを
うけている。そのまわりに円陣をつくって浅
井たち、酒をのんでいる。大島、興田会長の
姿も見える。羅宝明が、無表情な顔で坐っ
ている。順子の夫の上館は、パンツ一枚にされ
て、これまた緋毛氈の上に、爪先だけがつく
ように天井からぶら下げられている。猿ぐつ
わ……全身に鞭をうけて、みみずばれの醜く
ぶざまな恰好である。

箱田「女の裸はこたえられねえほど美しいが
どうもこう男のヌードという奴は、きたねえ
もんだな」

大場「しかしこの旦那、女房がおもちゃにな
るところを眺めてえらしい。変わった奴よ」

羅宝明「コノ人ノ奥サンデスカ」

乾分の金と張も面白そうに身を乗出す。

会長「いかがです、羅さん。この女では？」
羅「イイデス。コノ女ノヒト、タイヘン、美
シイ。コノ張仲君、縄、カケタガッテイル」

会長「どうぞ。存分にして下さいよ」

羅、張に目配せをする。張、はりきってと
び出し、海老責めにされている順子の縄を解
き始める。縄目から解放された順子、はね上
るように、吊られた夫に縋りつく。

張「ダメアルネ。ワタシノナワ、ウケル」

大場から渡された真黒い縄を手にして、順
子の首に、くるくるっと巻きつけ、（アッ！
アア……）とのけぞる右手首を捕えて三巻き
すると、

「コチラヘクルヨロシ！」

と、縄をたぐって、順子をひき寄せ、右足
首へからませる。そして右手首と右足首をひ
とつに縛りあげ、左手首と左足首も同じよう
に、からませて、縛りあげた上で、金といっ
しょになって、二つに折られた順子の両膝に
太い棒をとおして固定する。こうなってはど
うしようもない順子である。

真赤になった顔を、前やうしろに振りたて
て、いくらかでも苦痛をのがれようとする。

羅「ダメアルネ。大島サン。コノ女ノヒト、
ワタシ、最初ニイタダクアル。御主人ノマエ
デスコシヨロコバサル。ヨロシカ」

その姿に刺激された羅宝明は、大場の返事
も待たず

「オオ、カワイイ奥サン」

と、云うと、順子を担ぎ上げ、別室、「人
妻恍惚の間」に姿を消す。

41 同・「本 丸」

大島、興田会長、代官の三人の前で、いも
む、いのように投げ出されている赤沢夫婦。

紅梅色の縮みゆかたの寝巻きからとび出し
た律子のふとももが、熟れきった女体のなま
めかしさを妖艶にまきちらしている。

大島「赤沢さん。三億円はどこにある！」

赤沢「知らんな、そんなものは！」

会長「はほう、これでもかい」

興田会長が、スクリーンのスイッチを入れ
る。そこでは――

上館が、パンツひとつで鞭打たれている。
興田が、ニヤツとしてチャンネルを廻す。中
田がうつる。その眼の前で、車裂きにされて
縋りつづけられている美智子。

赤沢の顔が、絶望とも憤怒ともつかぬ表情
にゆがむ。

大島「ネタはあがってる。吐きな、ここには
三人しかおらん。なあ、赤沢」

スクリーンに、駿河問いにかけられ、こま
のように回転している下村の醜い姿。その下
で、景子が、十何人かの乾分に囲まれて、い

し、やの顔をゆがめる妻を眺める赤沢。

絶望的ないたぶりが、律子に加えられ、

「おっ！ おおっ！ ああ！ アッアッアアア！……ウ、ウウッ……」

という律子の呻きが、ガラス上の体の動きと共に赤沢に伝わる。

ガラスが律子の体温で、汗で曇ってくる。

会長「大島さん、この分じゃ、時間がかかってしようがねえ……関係者全員を集めましよう」

チャンネルを廻す大島。

「人妻輪姦の間」では、美智子と順子が向かい合わせに縛られて、箱田たちの騷りものになっている。

「処女拷問の間」では、身動きひとつしなくなった景子のまわりで、六車たちが酒をのんでいる。浅井、久富、萩森の三人は、そんな景子をまだ、おもちゃにしている。

大島「浅井さんたちにはもう帰って貰いな。三億円の件は、ふせておくんだ！」

と、代官に命じる。

穴倉の赤沢の頭脳に、三億円奪取の場面や計画した場面が、うかび上る。そして、強く唇をかみしめ、（くそったれ！ 俺は、金輪際、吐かねえぜ。吐くものか！）

43 同・「女体屈服の間」

大島、興田会長、代官、それに兄哥株の箱

田、六車、大場に半次が居並んでいる。ソファには羅宝明たち三人。

コンクリートの壁の鉄輪につり下げられている赤沢、上館、中田、下村の四人。

片隅に景子、縄ひとすじかかっていないがもうぐったりとして、立ち上る力もない。

大島たちの正面に、背中合わせで、たち縛りにされているのは、美智子と順子。天井の滑車に両手を吊られている。

大島「赤沢君、どうしても吐かぬとあれば、奥さんの生命は保証しないぜ」

天井の滑車からおりた縄に、右足首だけで逆さに吊り下げられている律子。

大島「火責め、水責め、指を一本ずつそぎおとす。どうかね、赤沢君」

赤沢、答えない。

大島「困った男のう……」

六車と大場、律子のむき出しのふとももを青竹でなで廻していたが、代官がいきなり投げ出すようにいい出した。

「大島先生、こりゃあ、駄目ですぜ」

何か思い当たったらしい。

代官「こいつら、責められるのを楽しんでやがるんで……。よし、いよいよ、ビルマ式

拷問という奴を始めるか」

代官、赤沢にちかよると、

「お前が、俺を見捨てたばかりに、俺はビルマの土民につかまってさ、この身体……仕返しをしてやるぜ！ 赤沢！」

代官、ドスを取り出すと、赤沢のよこに立って、

「男でなくしてやらあ、さあ、五つ数えるうちに、三億円のありかを吐いちなえ！」

（一、二……三……）と数え始める代官。

沈黙。

突如、赤沢がくるったように叫ぶ。

「や、やめてくれえ、たのむ。金は、金は俺の家の近くの墓地のなか……」

大島たちいっせいに顔を見合わせて、両肩で、ホォーッと大きく呼吸する。

代官、ニタツと笑って、

「じゃ、会長、この四人の始末は、わたしがつけましようぜ」

44 京 浜 国 道

深夜、疾駆する二台のカロラ。赤沢、上館、下村、中田の四人が、麻酔薬をかがされて眠りつづけている。

45 熱海市郊外・錦ヶ浦

夜の闇のなか、赤沢を始め三億円事件の主

犯四人が、断崖から次々とつきおとされる。代官「あばよ。蒸発する人間はゴマンといふし、身元不明の水死体は二千に近い。あばよ赤沢……あばよ……」

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたたいという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるには大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用はお断り)振替

波の音がわずかに乱れて、落ちて来たものを呑みこんだことを示す。

「人間、あんまり欲を出しすぎるといけねえってえことがわかっただろうが、もう手遅れ

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたします。御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

になったなあ。今度生まれてくりやあ、よく気をつけなよ。分不相応は禍いのもとしてえことをナ。……よいしょと……重いナ、おめえは。……ソラッ、……じゃ、冥土のオニさんよろしくナ」

最後の一人も闇に落ちて行く。

46 大島別邸・応接間

大島、興田会長、羅宝明の三人。

三億円の入った大きな旅行カバンが四コ。

大島「三億円か……たいした金じゃあねえなあ。せいぜい大臣の椅子がひとつか、ふたつハッハッ……ハッ」

興田会長「ないよりはましでしょうよ。それに一石四鳥でしたからなあ」

羅「オンナノヒトタチ、コンヤ、ミンナハコピマス。例ノトコロ、タノミマスヨ。ヘッヘッヘッ……」

三人、顔見合わせて笑う。

47 伊豆半島のひなびた漁港

沖に停泊している貨物船の灯がまたたく。なりをひそめた小船がちかづく。

舷側からおろされる縄梯子……腰縄をうたれた、律子、順子、美智子、景子が、のぼって行く。その白い素足。



文学の汚辱

マゾヒストM氏 の肖像

とKK誌

新宿町人

その純文学雑誌とは「文学界」45年4月号であり、作家は倉橋由美子。題名は「マゾヒストM氏の肖像」

本文の冒頭に引用した「だれだかわからない人物」とは、あきらかに「沼正三」であり

「K」という雑誌とは、わが「奇譚クラブ」そして「長篇小説」とは、「家畜人ヤプー」であることは、うたがいない。

この文学界は、東京では、三月八日の日曜日に、書店に並べられ、その日の朝日新聞の朝刊には、大きく、四月号の発売広告が掲載された。

朝日新聞は自社で制定した、広告倫理規定がきびしく、いわゆるエログロに類する広告は、拒否されるのが建前である。なのに、堂々と「マゾヒスト」をタイトルにした新刊広

告をパスさせたことに、私は、まず興味を抱いたのだった。

そして二十八ページにわたる同作品を一読して、あたらしく、目の開く思いをした次第である。

なぜか。

本格的、サド・マゾ時代来る、とかSM小説、SM作家の出現など、わがKK誌が、いまから十八年も前の、昭和二十七年ごろから手を染めた、SMのジャンルに、いまや、マスコミが、追従し、一流作家が、大衆雑誌はいうに及ばず、このような、純文学雑誌にまで、作品を発表する時代が来たからだ。

「文学界」は株式会社文芸春秋の発行になりつい昨年は、これも同社から発行されている「別冊文芸春秋」に、梶山季之の「ミスターエロチストの告白」という、堂々三〇〇枚の大作を、一挙に掲載した。

「その後しばらくして、だれだかわからない人物が書いたといふ長篇小説がある小さな出版社から出て評判になった。もと「K」といふ雑誌に連載されてゐたものであり、これはマゾヒストによるマゾヒストの小説である。私はこの作者があつたM氏であることを疑はない」

これは、一流純文学雑誌に発表された、ある女流作家の、九〇枚におよぶ巻頭を飾る力作の、末尾の、五行の文章である。

説明を加えよう。

こと、SM文学にかけては、わが奇譚クラブは老舗として認められてよさそうだが、こうなる前は、SM文学などは、異端視され、一部好事家の、文献誌としての存在ですら、なかった。

だが、時代の変化は急テンポである。

人間の追及としてのSM文学は、いまや真剣に、マスコミにとりあげられはじめたのだし、このことは、うたがない事実なのである。

倉橋作品の書きだしは、

「何か柔らかくて不定形のものであるやうな人間、たとへば犬や豚（それも、糞便を食ふ賤しさという観念の肉化としての）や、椅子や便器その他の家具、要するにさまざまの人間以下のものに自由に變形させられることのできる人間がこの世にゐるだらうか」

と、さすが、ズバリ、マゾヒストというものの概念を定義づけている。

主人公M氏には、沼正三氏のおいが濃いが、しかし、△パンニャ△という、この小説の主要舞台をなす喫茶店の、カウンターの内部に寝そべり、ウェイトレスの足の下に、踏まれてうめく、精薄同然のあわれっぽい男性、というのは、私が見聞している範囲では沼正三ではない。実在人物ではあるが――

もちろん「あわれっぽい男」のモデルだと

思われる人物を、知っている私だから、これだけは、断定できるのだが、作者は、複数のモデルをダブらせて△M氏△という主人公をつくりだしたのだから、いくらモデルのセンサクを試みても無意味だ。

創作とは、そうしたもののなのだ。

それよりも、私の目は、この作品の骨格を形成する汚辱マゾの生態に惹きつけられる。

冒頭の糞便を食うとか、椅子、便器、そして犬、豚との表現。そして、さらに「鞭で打たれたり、緊縛されたり、逆吊りにされたりさらには浣腸されたり、女の尿を愛飲したりする話が、それらを愛好する人間の手記といふ形で（ある種の雑誌に）、掲載されてゐるが」と、描き、作者は、これにつけ加えて、「実際にその種のことを私たちの目のとどかぬどこかの密室で行はれてゐるのだらうか」と疑問を投げかけている。

そして、「足をなめさせる」とか「人間の形をした大きな舌」とか「白痴だから、お嬢さまのおしっこでも飲ませていただければ」とか、ケンランたることばが、つづくのである。

それのみでなく、主人公のM氏は、文中の女流作家（架空人物だろうが）の嘔吐したものを食べてみたいと、本気で考え、ご主人さまの命令なら便器になりますと言う。

別の場面ではT子という、いとこの女子大

生が、このM氏に一度だけだが、自分の尿を飲ませ、充分、嘔んで吐きだしたものを食べさせたりしている。

とにかく、このM氏の行動は徹底しており志願した女主人の自宅の、便所の前の板の間に平伏したというのだ。

マゾヒストM氏とは、なにものか。

作者の言にしたがえば、彼は、ある官庁の役人で、現在はその省の外郭団体のある研究所の主任研究員として出向している身。専攻は土地問題で、論文を発表しており、頑健な長身の、端正、温厚な、いかにも役人らしい感じの人。マゾヒストとしては終始マスクをかぶり、文学にも知識の深い人、と、いわゆるイイ線をゆく人物のようだ。

私は、およそ十八年に及ぶ本誌の読者である。はばかりながら、いわゆる文献誌としての本誌の真価を正しく理解する一人である。

いずれにせよ、ひとつの月刊誌を、十八年間、二〇〇冊を越ゆる歳月を一貫して講読するのは、なみ大ていなことではない。

それにもまして、発行者の血のにじむ努力は、筆舌につくしがたいものであることは容易に想像できる。

しかるに、KK誌によせられる社会の評価は、そも、いかにあったであろうか。

いわく――エロ雑誌。

いわく—グロ雑誌。
いわく—変態雑誌。

心ある書店の店主は、内心熱烈に支持しながらも、心ならずも、店頭に置くのをはばかり、コソコソと、さながら、非合法的な刊行物のごとくに本誌を売り、買うほうもまた、人目をはばかり、嚴重にカバーをかけたうえで、逃げるように買い求め、自宅に持ち帰るや家族の目をぬすんで、夜陰ひそかに、気をつかいつつ、ひもとかねばならなかった。

これが、過去の、本誌であった。

憲法によって保証されている筈の、言論、出版の自由は、卒直にいつて、本誌には、与えられていなかったのではないだろうか。

おそらく熱心な読者は、本誌の存在価値はたかく評価しながらも、自身が、読むことを他人に知られることには警戒しただろう。それは、まったく誤解と、偏見と、悔りに満ちたものであった。

一流の出版取次ぎ会社が、取扱いを拒否したというウワサも聞いている。約二十年のながいあいだ、KK誌は、陽のあたらぬ場所にこっそり花を咲かせていた。

このまま、陰の生活をつづけるのが、KK誌の宿命なのか、などと私は、考えたものであった。

そのような、地味な存在だったKK誌だが

しかし、心ある人々は、この日かげの花を見ずてはいなかった。

すなわち、一流の作家、大学教授などの文化人が、こっそりとKK誌を読み、そしてアメリカのキンゼイ研究所でも、文献として本誌が、永久保存されつつあるとも聞く。

世のなかに、無用、有害なものだったら、本誌の刊行はつづけられなかったであろう。

だがKK誌は、みごとに、世界一流の文献誌として、生存したという事実を、私は誇りをもって記録したいのである。

本誌を飾った、ぼう大な手記、研究、記録は、そのまま後世にのこされるだろう。

町の書店には、一世の奇書と評される「家畜人ヤプー」が一本にまとめられ、すでに初版、売切れ。再版が、どこの書店でも、容易に手に入られる状態で、並んでいる。

皮肉にも、この書には「成人向け」のマークはない。

だが、その「家畜人ヤプー」を生み出したのは、まぎれもなくKK誌なのである。

成人向指定の雑誌にのった小説が、誰にも買えるのは、まったくおもしろい現象と思うのである。

さて、「マゾヒストM氏の肖像」を書いた

倉橋由美子氏は、どんな作家か。

さんねんながら私は、そのへんの情報にはうといので、作者の経歴、文学作品、年令のいっさいを知らず、どんなお顔のひとも知らない。

だが、おそらく、才女であり、知的な美しい人と想像する。

その女性が、汚辱マゾと取り組み、足掻め椅子、さては嘔吐を食べ、人間便器へと進むマゾヒストの生態を、リアルに追求したのはやはり記録されるべきだと信ずるのである。

女性は、通常、とくに汚辱マゾの話を書きう。私のいままでの見聞では、そうだった。

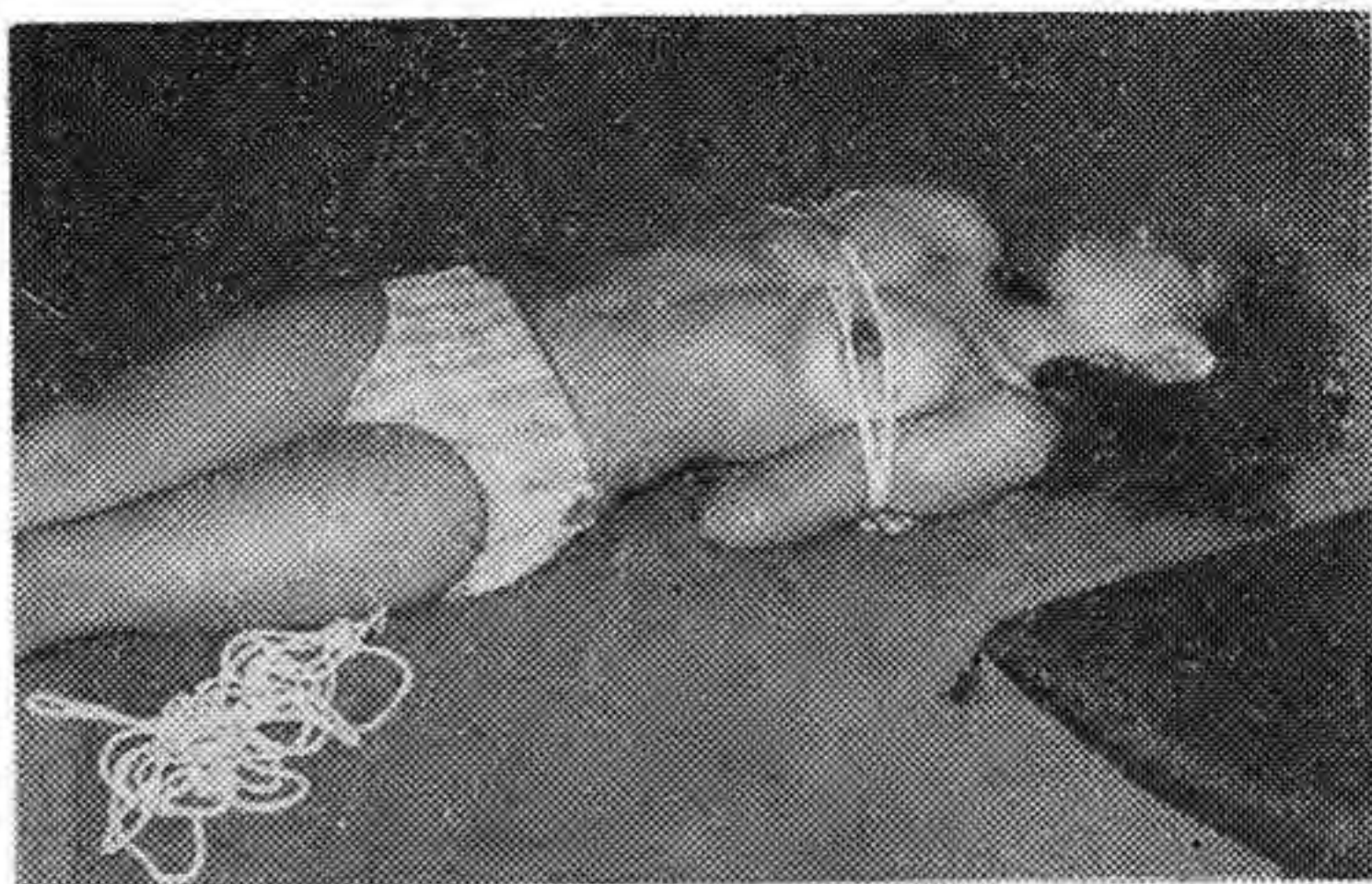
それを、この作者は、あえて、素材にえらび、まぼろしの人と言われる、沼正三という人物に、やや、なにかの接触があったかのような印象を、文学として発表したのは、興味を超えた、勇気ある創作態度だと私は思う。

おそらく、三月の文壇に、この作品は、大きな波紋を投げるだろう。

そして、重ねて言うが、ここにいたる道程に、わがKK誌が、きわめて大きな役割を果たしたことに、より大きな意義を見出すものである。

まさに、サド、マゾ時代は迫った。

× × × × ×



読後感など

山中のプレイ場

千部好夫

ムランともいうべきでしょう。ナマの迫力を感じました。文章のみごとさはもちろんのこと、十枚近くの写真に富佐子夫人の悦虐に悶え、むせび泣くさまが手にとるように感じられ、私自身がその場に居合わせているような思いでした。これから毎号、塚本先生の活躍をお願い申し上げますと共に、関谷富佐子様も、ファンの前に益々マゾの本能をさらけ出して下さいますようお願いするにはいられません。

奇クを背負って立っている、といっても過言ではない辻村先生の「カメラ・ハント」は毎号、私が、最も楽しみにしているものなのですが、川路叢子さんには、大変感激しました。これぞマゾの極致。女の本能をまざまざとみせつけられた想いがしました。このように素直に本能をさらけ出せる川路さんは、まったく素敵な方です。羞恥責めに燃え鞭打ちに狂いのうち、まさに責められるために生まれたような人という感じですが、その演出をなされている辻村先生には、まことに頭の下がる思いです。健康状態があまりおよろしいほうではないとか。しかも、ご自分のお仕事の合間をみての活躍で、毎号の誌上を飾って下さることは、並の者で出来ることではな

私、貴誌を読み始めて数年ですが、その間に買い集めた旧刊のものも相当にあり、すでにミカン箱に納まりきれなくなりました。とにかく、強い風当たりの中で、こうして出版され続けていることに、マニアとして感謝の他はありません。

二月号には、団先生の「花と蛇」が休載されていて、いささか残念でした。近ごろマンネリ化してきた傾向も感じますが、やはり休載は淋しく思います。

しかし、その穴を埋めたのが、塚本鉄三先生の「妖精を鞭打つ」でした。まさに代打ホ

いと思います。

最近号に、先生の「カメラ・ハント」に対する批判が云々されていましたが、こんなことは全くその投稿者個人のわがままで勝手なものねだりだと思えます。どうか、あまり気になさらず、ご自愛の上、我々ファンのために、いつまでもご活躍下さいますようお願い致します。先生の長年の功労は、まさに勲章ものと思います。

保藤久人氏の「魔性のもの」は数少ないレズ小説に近いもので、結構でした。ただ欲をいえば、もう少しネチネチした責め場面があれば……とも思いますが、そこがやはり、その人の個性というものでしょう。いずれにしても楽しかった読物です。

○

十人十色とはよく云ったもので、人それぞれ異った趣味があるらしく、私は、女性への羞恥責めの他、浣腸、バイブ、ローソク責めなどが好きで、レスビアンや妊婦などにも興味の深いのですが、ネクタールマニアといわれる小水愛飲については、心から愛した人のものなら、肯けないこともないのですが、トルコ嬢やバーのホステス等、誰のでも……となると理解できかねます。

更に、切腹や女装となると、いよいよわからなくなります。

いままで、このようなページは殆ど目を通すことなくミカン箱入りとなっていました。しかし、それでいいのではないのでしょうか。人それぞれ、自分の好きなページに酔い、胸ときめかせて、次号に期待をつないでさえいれば……。

○

私の見聞記をチョット……。

今年の夏のことですが、私は近くの山へハイキングに行きました。普段はワリと人出のあるコースなのですが、暑さのためか、その時には人影もなく、コースの近くで一人の女性が生写しているのを見ると、思わず声をかけてしまったほどヒソソリしていたのです。その女性も、あまりの静かさに人恋しさの気持があったのか、初対面なのに気軽に応じてくれたのでした。

私はそこで早めの昼飯にすることにして、一緒に弁当をひろげました。

女性は、いつもそこで写生を続けているということだったので、それからの私は、暇をつくっては出掛けるようにしたのです。おかげで親しくなれましたが、いろいろ話をして

いるうちに、意外なことを聞いたのです。彼女（英子）の山通いは、スケッチだけが目的ではなかったのです。

五月のある日、写生の最中に必要を感じ、ハイキングコースを外れた山の中へ、用を足しに入っていくと、横手のほうから人のうめき声と、何か物を打つような音が聞こえ、こわごわ近づいて覗いてみてびっくり。そこにはなんと、全裸の女性が木の枝に跨がされて縛りつけられ、男がその女性をムチ打っている姿があった。驚いて、用も足さずに逃げ帰ったものの、どうしてもいのかかわからず、いつでも逃げ出せるようにスケッチ用具をまとめていると、女の笑い声がして、人が降りてくる気配。そして、草木をかき分けてコースに降り立ったカップルはまぎれもなく、先程の二人。ヘンだなと思う間もなく二人は、仲良く手を取り合って、談笑しながら去って行った。

それから数日して、又、その男女に行き合ったので、今度は好奇心でのぞきに行った。すると、前と同じ場所で二人は抱き合い、キッスをしながら男が、女の衣服を脱がしかけているところだった。

二人は、木立の陰からのぞかれているのに

は気付かぬふうで、全裸になった女は、木の枝に跨がされるのも、縛られてゆくのも当り前のようにじっとして、男は、葉のついた小枝で、縛りつけた女をくすぐったり叩いたりし始めるまで声一つ立てなかったが、その内に、だんだん最初に聞いたようなうめき声が起こり出し、男は女に何か訴えられるとロープを解いて抱き降ろし、後は、男女のおさまりのコースに入った。

以上が、彼女、英子から聞いた話の要点です。そして、その後も、何回か目撃し、いつの間にか、その期待のために、彼女はその場

所で、写生を続けるようになったというのです。

私は、自分好みのことですが、英子の話があまりにもピッタリし、調子がよすぎるために信用しかねる気持で、その場所に案内してもらいました。

ハイキングコースから相当に入った所に、本当にそれらしい場所があったのを見た時の私の気持……。直径三十センチほどの松の木の周囲が、二メートル四方ぐらいに亘って雑草類がきれいに踏み倒され、その松の木に、地上二メートルほどのところから枝が出て、

その岐点近くの皮がめくられています。鼻を近づけてみると、たしかに一種異常な臭いがありました。英子の話は、まんざらの創り話ではなさそうに感じとれた時の私のドキドキするような亢奮……。

それから私の山通いが、よけいに多くなったことは当然です。

しかし、時間の関係か運が悪いのか、現場に変化はたしかに認められるのですが、残念にもまだカップルの居る時に行き合わせることが出来ないのです。

漠然とした書き方ですが、その男女にとっては充分思い当たることでしょう。もしこの文が誌上に載せられ、そのカップルのどちらの方がお読みになることがあれば、是非、私にも見学させて貰えるようお願い出来ないものでしょうか。あなたがたは、私の彼女にもう見られているのですから……。

○

同封しました写真は、スケッチをしていた女性、つまり英子です。九月に入ってから始めてデイトらしいデイトをした時に縛ったものです。彼女と私とのその後のことは、また改めて綴ってみたいと思いますが、今回はこの辺で……。

☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム(筆名)を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に對しましては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対し、しめても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

三回分載 (下)

女

めぎつね

狐

光
谷
東^と
穂^ほ

麗しいペット

八年前、暴力学生三田村康二に、うまうまとだまされ、うら若い女の身に、あまりにもむごい羞ずかしめを受けた浜田正子は、婚約者の三田村誠一から口ぎたなくのしられたその日、世間の耳目をのがれて蒸発した。それから三年、流々転々、みずから肉体を刻み、汗と脂を糧とする悲しい日をかさねたが、自虐的な日々、三田村兄弟への仕返しを胸底に秘め、力強く生きぬいていた。と同時に、それが正子の天性的な資質だった。

たのか、苦難の逆境にもてあそばれながら、ふしぎにも彼女のからだは、歳月の経過とともに麗しいおんなの輝きを増していった。

当時、彼女を食いものにしていた、やくざな男は、この美質に目をつけ、彼女の肉体を神戸の密売組織へ売りとばしてしまった。

三日後には、自分の肉体が香港かシンガポールへ向けて、ひそかに輸出されるのだと知った正子は、どうせない命なら、と覚悟をきめて組織からの脱出をはかった。が、即座につかまり、一糸まとわぬはだかにされ、後ろ手に堅くいましめられたまま、野卑な男どもの見世物になった。



それでもくじけず、丸はだかのまま脱けだそうとしたがふたたびつかまり、こんどこそはと、彼らの凄惨な私刑を覚悟した。

ところが、どたん場になって意外な男が現われ、彼女は恐ろしい組織から救出された。その男、中国人の広玄羊^{こうげんよう}は、表向きは香港の貿易商だが、実は密輸・密売ルートのボス的な存在で、性格的にも奇矯^{ききやう}の人、いわば、一種の傑物だった。

広玄羊は、その夜のうちに正子を車に乗せて、大阪市内のマンションへ連れていった。正子が、ナイトクラブヘメイト・Mのマダム、みな子に会ったのはその夜が最初だ。

変わり者だと自称する広玄羊の愛人で、彼をパトロンにしているみな子も、グラマラスな肢体のなかに女怪的なものを秘めた、桁はずれに多種多様なアブ好みであった。

正子はヘメイト・Mのホステスになったが、それは表向きのこと、実際は広玄羊の好みにより、みな子を相手に、愛玩用のレスピアンとして扱われ、馴致されていた。

しかし正子は、倒錯的な性を少しも、いとわず、広玄羊の見つめるなかで、緊縛された裸身を投げだし、みな子の手にゆだねた。

女同士の戯れには、これまで正子が知り尽した汚辱的な感覚とは異なり、心の安らぐ甘い陶酔がひそんでいることを知り、しだいにみな子の巧緻な、わざと溺れていった。醜悪な男の正体を知り、男への失望感が彼女の心に大きな作用をおよぼしたのかも知れない。

二年後、広玄羊は香港の自宅で急逝した。みな子とともに新しいマンションへ移った正子は、ある夜の戯れのあと、いまわしい自分の過去を、くわしく、みな子に教えた。

「可哀想にそうだったの。実は広から言われていたのよ。力になってやれ! とね。マコは偉いわ。よくがんばったわねえ。KB織物なら関係者をよく知っているわ。あしたから

さっそく連中を探り、適当にあたしがお膳立てをしてあげます。精いっぱいおやりよ。その代わり、すべてあたしにまかせてちょうだいね。マコのからだも……よ。ねえ!」

愛らしいメス犬に化身した正子に唇をつけて、優美にあえがせながら、みな子はそのとき、以前からひそかに慕いつづけた男、KK化学の中原巧三のことを思っていた。

復仇への賭け

毎月一度、十日ばかりの短いあいだが、中原と正子の接触は順調につづいていた。

会う機会がかさなるにつれ、中原のマコへの思いは、いや応なしにつのり、みな子の黙認をこれ幸いと、大阪に滞在中は、かたときもマコと離れるのを惜しむようになった。

すこし無謀だと思いつつ、マコを旧知の婦人だといつわり、一度ならず二度までも、会社へ呼び出したりすることさえあった。

そんな、ある夜のことである。

「お願いがあるの。きいてくれますか?」

マコは、甘ったれて中原にささやいた。

「なんだい、あらたまって。言ってごらん」

「あのね……」と言いかけ、マコは鼻をクス

ンとならして、はにかんだ。

「何を言っても笑わないと約束してエー」

「ああ、いいとも。決して笑わないよ」

「会社の秘書課に、南川純子さんとおっしゃる、かわいいおかたがおいでですな」

「ああ、いるよ。なかなか感じのいいコだ」

「あのひとに、ぜひお会いしとおすねん」

「会うって? なにか用かい?」

「ヤボなこと、お訊きにならないで……。あのかた、わたしの好きやったおひとと瓜ふたつです。ほら、いつか会社へおうかがいしたとき、一目見るなりドキンとして、もう忘れられしまへん。ああ、羞ずかしい……」

意表をつく声に度胆をぬかれ、中原は啞然として、あきれきった目でマコを見た。

「あきまへんか。あのひとを思うと……」

「ここが痛む! というしぐさで胸をおさえるマコを見て、中原は笑いだした。」

「あのコはあかん! まだはっきりと聞いていないが好き男がいるらしい。その相手は三田村といってな、むかしぼくが世話になっ

たひとの次男坊だ。調査部の主任で将来有望な青年なんだよ。ぼくの部下だし、ぼくは親

代わりの立場だからね。近いうちに、ふたりの気持をきいてやろうと思っている。彼には

立派な兄貴もいるんだ。兄は、やがてKB織物の部長になるはずだ。兄弟そろって優秀な人物だし、その弟が愛しているらしい女だとすると、いくらマコの頼みでも、簡単にウンと言うわけにはいかん。困ったな！」

「どうしてもあきまへんか！ 決して無茶なことはしまへん。キズつくこともおへん。わたしらのコトはあんたはんもおかたお察しどすやろ。それに、こんなこと言うのはおかしおすが、デリケートなおんなの感覚を、すこしはお知りになったほうが、おふたりがいっしょにおなりのとき、おしあわせと違いますやろか。わたしは片輪も同じどす。そやけど普通のおかたは決して溺れはりまへん。おなごには、やっぱり男はんがいちばんどす。ねえ、たった一度でよろしおす。それでも無理は申しまへん。あのひととふたりだけで三泊四日の小旅行をさせてほしいの」

中原が初めて見る、マコの真剣なまなざしだった。哀切きわまりない憂愁が表情にただよい、中原をひどくおどろかせる。

マコの願いはどう考えても常識を逸脱している。不倫ともとれる倒錯的な人間の愛だ。

しかし中原は、マコの真心にうたれた。

「もしもマコの願いをかなえてやったら、マ

コモぼくに……くれるかい？」

「ああ、あのコト！ わたし、男はんとならお人形みたいどっせ。あんたはんがお気の毒ですの。それより、あのひととわたしのコトを、そっとお見やしたらどうどす。すこしは変わった刺激剤やと思います。それに、わたしの願いをきいてくれはったら、わたしも生きた女になるよう、一生懸命、努力します」

「生きた女？ 努力って、どんなことだい」

「さあ、どうしましょう。初めは和楽器の独奏なんかかええと思えますけど……」

「和楽器？ 楽器の独奏——？」

「多分、へたくそやと思いますが……」

マコは、つつましい微笑を浮かべた。

ぬめぬめと光る紅い唇と、きれいに並んだ白い歯を、中原は、じっと見つめた。マコが言ったコトは、彼の気持をそそった。

「それから、あのひとに会えたら、わたし、きっと燃えるやろうと……。時間と場所をお知らせします。会ったあと、あんたはんと、そのときならすこしは女らしゅうなり……」

「会ったあと、だいてもいいのかい？」

紅を散らせて、マコは小さくうなずいた。

中原にとって、戦慄をさそう誘惑だった。

長いあいだくすぶりつづけた官能の火が、に

わかにはげしく燃えひろがっていく。

実際に、きょうまでは掌中にしながら、ただ鑑賞用にすぎなかった珠玉が、自分のほうから手を差しのべ、確実にふところへとびこむ気配を見せているのだ。濃厚な魅惑に勝てず、中原は年甲斐もなく頬を染めていた。

「清水の舞台からとんだつもり——。マコ、正直に言ってそんな心境だよ。よし、南川純子のことは約束しよう。だが条件つきだよ」

「どんな条件どす。無茶は、いやどすえ」

「マコの独奏を、いまずぐ聞きたいな。契約成立、支払の約束手形として……だ」

「不渡りになったら、かないまへんがな」

「じゃ、先付小切手だ！ そうだな、話の順序や都合もあるから、三日後でどうだい」

「ホンマ？ ああうれし、このとおりどす」

ふいに起きあがり、両手を合わせるマコ。

「ぼくを拜んで、それでごまかそうたってダメだよ。ちゃんと契約は実行してもらってから。それから、もうひとつ……」

「いややわ。まだなんか条件がありますの」

「マコのすべてが見たい。いかなかな」

「イヤッ。そんは羞ずかしいこと——」

「何もしない。見るだけならいいだろうが」

「そんなことを言うて、わたしのストリップ

「ショーを鑑賞しやはる、おつもりどすやろ」
 「はっきり言えば、そういうことになるな」
 「いややわ！」正子はじっと中原を見た。
 思いはべつのところを遊飛している。とうとう念願の三田村兄弟への復仇の道が、いままさに第一関門をひらこうとしているのだ。
 「よろしおす。あのひとのこと、約束してくれはったお礼やもん」

正子はうすいガウンのホックをはずした。
 「いややな。やっぱり羞ずかしい。いっそのこと、手をくくってくれはりますか？ そしたら隠すこともできまへんし、あきらめます」
 「変な趣味だな。マダムの好みかい？」
 怪しみもせず、中原は女の手をつかんだ。
 正子の心はむやみにふるえ、胸芯がうずいた。からだを投げ出して賭けたサイの目に、勝利の女神がふり向いてくれたのだろう。
 「おねえさん。ありがとう。おかげで——」
 みな子の協力に深く感謝し、内心のよろこびを秘めて、正子は、中原へ唇をよせた。暖かくくるむ、浅く、深く。

清純なイケニエ

KK化学・大阪支社の秘書課員、南川純子

は、東京本社・中原常務のお客として、二度ばかり会社へ訪れてきた浜田夫人のことを、「なんという美しいひと——」と心からそう思った。優雅な夫人の容姿がころよい記憶となつて、胸の奥深くにとどまっていた。
 しかし、Rホテルの一室で親しく言葉をかわそうとしたとき、相手の気品に圧倒され、妬みまじりの劣等感を意識し、急に自分のことが、みすばらしく思えた。けれども、
 「ああ、うれしい。よく来て下さったわ。どうもありがとう。ほかの方はイヤだなんて、常務さんにご無理を申しましたの。だってあなたは、さすがに若さがいっぱいあふれて、とってもステキなもの。いいわねえ、お若いひとは……わたくし、うらやましいの」
 まっさきに齒切れのよい讃辞を浴びせられて、真赤になり、うつむいてしまった。
 「このかた、すばらしい貴婦人だわ——」
 そっと自分の胸へささやく。

純子は中原常務から、浜田夫人のことを、大切なお得意先のひとだと教えられていた。きのうの朝、突然、中原常務に呼ばれた純子は、浜田夫人が京都に滞在中、夫人のお供をして名所案内をするようにと、願つてもない特別社用を命じられたのである。

この日、夫人は「東山巡り」を希望、二二〇〇ccの軽快な車を、自分で運転した。

駅前を東進して三十三間堂に始まり、豊臣秀吉ゆかりの智積院・豊国神社から、清水寺・高台寺へ、さらに青蓮院・永観堂を回り、行楽客にまじって平安神宮の庭園を鑑賞し、まだ陽も高いころホテルへもどった。

「疲れたでしょ。ずいぶん歩かせたもの」「いいえ、奥さまこそ。行く道が車の洪水ですし、それに私の案内がヘタですから……」
 「アラ、また奥さまだなんて言う。そんな呼び方はいやよ。姉と妹、その約束でしょ」
 車中はずっとより、並んで歩いた道すがら、何度も夫人にそう言われて、そのたびに純子は、羞じらって顔を赤くしている。

「もう一度、正子って呼んでちょうだいな」「は、はい！ 正子おねえさま——」

「そうよ。忘れちゃいやよ。さ、ここへいらっしやいな。あなたの髪の毛、すごくきれいな。わたくし、レディのおぐしをととのえるのが大好きなの。梳かせて下さらない？」

なぜだか純子は、いやだと言えなかった。女性の中には、ときには自分の髪を他人にいじられるのを悦ぶひとがあるが、たまたま純子も、そんな好みをもつひとりだった。

まして彼女は、自分の心が不可解なほど浜田夫人に傾倒していたから、たまらない羞ずかしさはあったが、不愉快ではなかった。

つつましくすわった純子の後ろへ立ち、正子は彼女のヘア・スタイルをくずした。ストレートにすると、先端は腰までとどいた。

たばねた黒髪を片手に、豊かな量感を愉しみながら、そっとかがんで顔と顔を並べた。

正子はあでやかな笑顔を見せた。魅入られたように純子もはにかんだ微笑を浮かべる。大きな鏡面にふたつの女の顔が、それぞれの優美な個性を生かして麗しく映えた。

正子は、さりげなく、純子の肩へ手をまわした。そのあたりにも若さが充満していて、やさしく抱くところよくはずんでくる。

「姉妹って言うより、まるで女同士の恋人みたいね。わたくしって、変な女かしら」

正子の指が微妙に、うなじを動き、鏡に映る相手の表情のなかに、すこしの乱れも見のがすまいと、深沈とした瞳で、追いつめていく。

神秘的な正子のまなざしにとまどい、純子は、かすかなおびえをにじませながら、うつすらと頬を染めた。まぶたがふるえ、可憐な含羞が表情をいろどる。

その一瞬を狙い、自然な動作で頬をすりつけた正子は、す早く、純子の唇を盗んだ。

驚愕した純子のからだはげしく躍った。

ウツ、むむむと、唇をフタして、迫ってくる正子の顔を両手でさえぎり必死に逃げる。

「アッ、いやッ。なにを、なさいますのッ」

顔面蒼白にした純子は、キツとした目で正子をにらみ、夢中で唇を拭いつづける。

彼女の全身は総毛立っていた。不潔感よりも、人の道にはずれた不倫な行為だという思いが先だち、夫人のことが許せなかった。

その寸前まで、真剣な気持で、こんなお姉さんがあればいいのに！ と思っていたので彼女のおどろきと狼狽は、なおさらはげしく夫人に裏切られたような気がした。

「ごめんなさい。かんにんしてね。あまりにもあなたがかわいいので、つい……」

ていねいに素直な心でわびながら、正子はやさしいほほ笑みを忘れず、そっと近づく。

純子は羞恥と苦渋をなげき、困惑しきった面持ちで、あわてて後ずさりした。

「奥さま。いやです！ 私には、もう……」

「知っています。あなたにはフィアンセも同様なお方がいらっしゃることを——。でも、それとこれとはまたべつよ。ねえ！」

「いけません。お赦し下さい。奥さま……」
(ああ、可哀そうに。ふるえている——)

と、正子も、素朴な純子に胸をうたれる。

正直に言っ、人の情けを知る正子は、こんな無慙なことをしたくなかった。ふしあわせな女は、自分ひとりでたくさんだった。

とは言え、なめ尽した八年間の辛酸を思うとき、精魂を傾けてきた目的を貫くために、心を鬼にして非情に徹しなければならぬ。

その名のとおりに、純情ひとすじに生きてきたおとめの純子を、なんとしてでも屈服させて、イケニエにしなければならぬのだ。

「お、奥さま。私、きょうはこれで失礼させていただきます。あす、朝早く参ります」

思い悩み、混乱した自分からのがれるように言う純子に、正子は哀感をただよわせた。

「あら。わたくしをひとりにして帰ってしまったの？ いまのことで怒っているのね。だって悲しいわ。夜までごいっしょできると思っていましたのに。どうしても帰るの」

落胆はなはだしく、いまにも泣きだしそうな顔をする浜田夫人を、純子は、半ばばう然として見つめていた。中原常務の口ぶりから察して、この夫人の機嫌を損じてはならないのだ。仕方なくあきらめた純子は、夫人の言

うとおりにしようと思った。

※

ふいに人の気配がして、純子は湯舟のなかでからだを堅くした。疲労は美容の大敵だと言つて無理にすすめられ、お湯のなかへ、からだを浸してから間もなくのことだ。

「すこし狭いようね。でもごいっしょさせてちょうだい。お背中を流してあげたいのよ」

正子は、いや応なしに割りこんでいった。

片隅に身を縮めた純子は、おどおどしながら上目づかいで夫人のようすをうかがった。

いくら見ても、令夫人のしぐさは底ぬけに明るく、天真らんまんて悪気がない。禁じられた異常な行動だと、心のどこかでしきりに

ささやくのだが、高尚な夫人の容姿が、ともすれば純子の心に、奇妙な妥協をうながしつづける。本当に夫人の裸身は美しすぎた。

たとえそれがアブノーマルな行為だとしても、真心のこもる愛であれば、すげなく拒みとおしてはいけないような気もするのだ。

けれども彼女の本能は、なにものかにおびえておののきが走る。瞳を暗くした純子は、いっそう、からだを堅くして手足を縮めた。

「さっきはごめんね。かんにんしてね」

純子の目の前に、麗しい美肌が、なんのた

めらいもなくひらいていた。知らず知らず、

彼女は羨望をこめたまなざしでうっとり見とれ、そんな自分の感覚にあわてふためき、ま新しい羞恥にカッとのぼせて目を伏せた。

その一瞬が、ほんのわずかな隙であった。

正子は、藻草のように湯水にただよう、梳きほぐした純子の黒髪を驚づかみにした。

ヒューッという金切声も気にせず、力まかせにお湯の中へ頭を押しこむ。死にものぐる

いに手を伸ばした純子は、湯面を叩いて正子の腕を払いのけようとした。はげしい音といっしょに湯しぶきがあがり、半透明の湯水の中で、女体は苦しうにあばれまわる。

底のほうから気泡が湧いてきた。

正子は落ちついて髪を引きあげ、争い、必死に反抗する純子の手を、空いた片手で軽くいなし、吊りあげた目を妖しく光らせ、真赤に染まった純子の苦悶の表情をのぞいた。

「どう！ わたくしの言うことをきく？」

（窒息！ 溺死！ ああ苦しい。殺される）

純子は、まさに死の恐怖に直面していた。だが、無意識のうちに正子を拒み、狂ったように全身に力をこめてもがいた。

正子はふたたび、腕に力をこめた。

純子の顔はふかぶかと沈み、黒髪の裾が、

海藻のようになよなよとひろがる。

情け知らずな上げおろしが何度もつづき、純子の顔が真赤なバラの花に似てきた。表情は、花びらの襲（ひた）いのようにしわんでいる。

口からゲーと苦しみの湯水を吐き出し、鼻からもタラタラと流れた。失神寸前の状態だが、強引に髪をつかまれ、毛根をひきむしられるような恐ろしい痛苦が覚醒をうながし、惨とした苦しさばかりが心身をいたぶる。

「か、かんにん、も、もう、ゆるして……」

ようやく哀願の声を絞り出し、その間も、ゲーゲーと、湯水を吐いて苦しみもだえる。

洗面（じゅうめん）つくって泣きじゃくる純子を、正子は懸命に抱きあげ、ベッドの上へ放りだした。

純子の胸は荒く波立ち、鼻や喉の奥ばかりか、みぞおちまで痛むらしく、ゲー、ゲー、と空嘔吐をくり返し、涙とよだれで顔じゅうが汚れた。もがきくるしみ転々として、やがてぐたつと全身の力を失ってしまった。

正子の動きが急に活発になった。弱りきった相手には、どんなことだって容易だった。手首と足首をべつべつにくくり、紐の端を四方へ引き、女体を「火の字」にひろげた。

ストッキングで唇を割り、最後の作業が終わって、さすがにフーッと吐息が出た。

瞳を冷たく、白い生きものに変身した女体を見おろし、とたんに正子は慄然とする。

忘れもしない。いま目の前におんなの羞恥をあばかれているのは、純子ではなかった。その姿こそ、八年前の、あさましいわが身の屈辱のポーズそのものである。あのとき、無造作に汗を拭った康二の姿が、まざまざと正子の脳裏によみがえってくる。

額にじむ汗を拭いながら、正子は、自分はいま、あの日の康二と心理状態まで似通っているのだらうと、おのずと苦笑がもれた。

立場こそ異なるが、実際に、八年前の情景が、寸分たがわず再現しているのである。

「南川純子！ あなたには気の毒だけど、いまから三日間、昼も夜もそのまま暮してちょうだいね。手も足もくくられたその格好で……よ。その代わり、あなたのお世話はみんなわたくしがしてあげます。お食事は、赤ちゃんみたいに食べさせてあげるし、オトイレだって心配しなくてもいいの。わたくしあなたがかわいいのよ。本当にからだじゅうモリモリと食べてしまいたいほどの。だから安心してわたくしに甘えてちょうだいね」

正子の瞳はつややかな光を放ち、ゆっくりと純子の全身をなめまわしていく。

たましいをゆるがす恐怖の中で、めくるめく羞恥と屈辱に耐えかね、皮膚をふるわせ、筋肉を硬直させて絶え間なくおののき、はかないうごめきをくり返す純子の素肌へ、正子は緩慢な動きで纖手を伸ばしていった。

おとめのもだえ

むくつと頭をもたげ、掛け具をはぐった正子は、純子の顔を上からのぞきこんだ。

半ば虚脱状態の純子は、軽くまぶたを閉じ愛らしい口もとにきれいな歯が光っていた。胸のあえぎが少しずつ静まろうとしている。可憐なその表情に、正子の頬がゆるんだ。

「おなか、すいていない？ 純子——」

かすかに目をあけた純子は、正子の笑顔をみるとハッと目を閉じ、顔をそむけた。

瞬間首すじから胸もとまで、淡いくれない色がぼやけたようにうつろい、楚々としたおんなの羞じらいは、正子の心に、ま新しい哀憐の情をいだかせる。つと唇をよせ、まだ幼さをとどめている果実を口に含んだ。

ア——と一声、静まっていた胸があえいだ。「すねたふりをして口をきかないのなら、もっともといじめてやるから。いいのね」

「かんにん……ああ、お水をちょうだい」
「またお水なの。そんなにお水ばかりたくさんので、あとで困っても知らないわよ」

ア——と、目をぱちりとひらいた純子は、急にうろたえて首を左右にふった。

「ほしいのでしょ。お水が——。はい！」

水さしに口をつけて、いっぱい含んだ正子は、純子の唇へピタッと押しつけ、少しずつ口移しの水を流しこんでいく。のけぞった純子の喉が、ゆるやかに何度か動いた。

やがて真夜中に近い。正子が、いましめた純子を自由にあやつり、それから六時間ばかり時を経ているが、正子の口から水を吸う純子の姿が、彼女の変貌ぶりを明示している。

そのあいだ正子は、みな子の教えを忠実に守り、真心をこめ、知るかぎりの技巧を純子にささげて、ひたすら奉愛に熱中したのだ。

純子は涙にむせび、猿ぐつわの下からはげしい抵抗のうめ声をあげたが、やがて、汗にまみれて、おえつをくり返したあと、狂ったようにからだをふるわせて哀泣した。

残酷にして美しい正子の動作は執拗をきわめ、深奥から燃えあがる妖しい炎の感覚に理性を失った純子は、とうとう、のたうち乱れてあえぎはじめた。純子の、おんなとしての

崩壊は、その瞬間に訪れてきた。拒絶を忘れた全身が不可解な歓喜を表現していく。

清新なおとめが惑乱するさまを見とどけた

正子は、純子の口から猿ぐつわを除いた。

「お、お水。お水を下さい！」と、それが生まれ変わったおんなの第一声であった――。

「夕方ケーキを食べただけだもの、純子はおなかぺこぺこなはずよ。そうでしょう！」

夕食のとき、いくらすすめても純子はおかしく拒み、ひとりで食事をする正子の横顔を、けわしい目で、じっとにらんでいた。

「食べさせてあげるから、ねえ、おあがり」

「ほしくないのです。それより……」

純子の顔が情けなそうにゆがんだ。

「どうしたの？ まだ、怒っているの？」

ぐらぐらと首をゆすり、純子の目が、せつなそうに正子へささやきかけてくる。聞かなくとも、純子の言おうとしていることは、正

子には、手にとるようによくわかっていた。

「なになの？ 遠慮しないで言っただらん」

「おねえさま。私、あの……私……」

「はい。なんでしよう、お嬢さま！」

「お願い！ 手と足を、解いてエ――」

「ダメよ。このままという約束でしょ」

「でも私、ああ、いやッ。痛い……」

「痛いつて、どこが？ ここ、このへん？」

「ア、よしてエー。あの、オト……」

身も世もあらぬ風情で足をつっ張る純子を見て、正子はクスクスと笑いだした。

「アララ。そうだったの。気がつかなくてごめんなさいね。すぐに楽にしてあげるわよ」

「すぐって？ このままなの。いやだア」

「ダダをこねると放っておくわよ。いい？」

しくしくすすり泣く純子をしり目に、正子は、ビニールの布をひろげて敷いた。

「さあ、どうぞ。なるべくゆっくりとねえ」

正子は床に跪ずいた。あらかじめ予期して純子のからだをずらしてあるので、上体がか

がめると丁度ころ合いの位置になった。

「おねえさま。あなた、まさか――」

頭を起こし、目を丸くした純子は、からだがばかりか声までワナワナとふるわせている。

「そのマサカなの。純子のことを本気で愛したわたくしの、これが精いっぱい真心なのよ。純子は清浄なもの、わたくしよろこんで

いただきます。そんな顔で見ちゃ、いやッ」

この性的異常者に似た正子の動向も、実を言えば、筋書きのひとつだったのである。

※

みな子の助言で、はかりごとをくわだて、

三田村兄弟に対する報復の手段として、南川

純子を利用しようときめた夜、戯れのあと、

みな子は、ふと真剣な表情で正子を見た。

「ほんの短時日で、純情なおとめを納得づくで屈従させようなんて、言うは易いけど、実際は大ゴトなのよ。暴力をふるって降参させるのなら簡単だわ。でも、そんなのはダメ。

心服じゃないものね。マコが命を賭けるといふ気構えだったら、成るか成らぬかはべつにして、あることを教えてあげます」

そして、みな子はクククと笑い、正子の耳へとんでもないことをささやいた。それは、

正子がキモをつぶすようなコトだった。

およそ人間が玩味すべきでないモノを口にすること。だから人間的な思念を放棄し、動物的な感覚に耐える覚悟をなさいと言うのだ。

「はっきり言えば、人間以下に成り下るってこと！ 非常識とはいってもおろか、気違いじ

みた行為ともとれるし、心理的な抵抗がはげしくて、きっと泣くわよ。汚れるってことよ

り、ひとりの人間としてたまらない没落感を味わうだろうと思うの。でも、ある意味で言

えば、人間の真実とは、そういった極致的な

ふんぎりのなかから芽ばえてくるのじゃないかしら。逆もまた真なりという、あのデンで

いくのよ。ひとつの行為によって熱愛ぶりを相手に悟らせるのだわ。こんなことを！ そんなにしてまで私を！ と、相手が感激したら成功だけど……。たいていの場合、相手が若いコならびっくりして怖気づいてしまう。不潔という観念だけで、逆に憎悪の対象になることだって多いわ。それをうまく誘導し、抵抗なく相手の心をもみほぐすには……」

「これよ！ と、みな子は動作に熱をこめた。『まず前哨戦！ わかるでしょう、マコ！ 誠心誠意惜しみなく愛を与える。奉愛のかぎりを尽して、おんなだけが持つ微妙な悦びを相手の感覚へ植えつけることが肝心だわ。十分に燃えたたせ、感動的な余情のぬくもりがさめやらぬうちに……それがコツなの。一度ためしてあげようか？ 相手のひとからそうされたとき、どんな気持がするか、自分の感覚で知ってみるのも悪くはないでしょ』」

そのようなアブノーマルな嗜好が、みな子にあったのかどうか？ しかし正子は、嗜好はともかく、みな子にはその経験があるはずだと思った。というのは、みな子に隠していたが、正子自身、経験済みだったのである。

その頃すでに亡くなり、早や過去の人になろうとしている広玄羊！ 異常好みで、つね

に趣向をこらす中国人に直接、口へそそれがれ嘔吐感に苦しみながら、涙とともに、しまいまで飲みつづけたことがあったのだ。

みな子はそのとき自分から言ったとおり、正子のモノを吸い飲み、以後、しばしば自分のモノを正子に飲ませるようになった。正子は、そのつど異和感に苦しみ、そして馴れていった。と同時に、人間という奇怪な動物の内側には、いかなる変異にも順応することができる、不可解な部分があることを知った。

※

正子はいまそれを行なおうとしていた。純子に対する実行行為は、正子にとって真剣勝負にひとしく、異常の観念は心になかった。

唇をつけ、むさぼろうとする正子の姿を、純子は、目じりが裂けるほど見ひらいた目で見た。自然な欲求を、泣きたい思いで告げた直後、驚愕に価する奇怪な現象を見たのだ。

純子は、自分が錯乱しそうな気がして、真底、おびえた。だがその一方では、自分のような女にまことを尽そうと、優雅な貴婦人がみずから求めて人倫を無視し、背徳的な汚辱にまみれようとする、その姿に感動した。

夢ではない。現実の出来事なのだ。見なくとも彼女の感覚がその事実を知っている。

（これが真実の愛、その証しだろうか？）ふとかすめたこの感激は、おんな心を強烈に刺激し、純子は思わず小さくうめいた。小刻みなけいれんが休みなくつづき、むせび泣き、力の萎えた純子の肢体は、はしたなく四方へ伸びた。

ウワ言のように何かを口走り、放心状態の純子にいつそう熱烈な愛撫をくり返した正子は、純子にからだを押しつけていた。

可憐な戯れを甘く味わい、正子の耳は、純子の舌たらずな声をこころよく聞いた。

忍び寄る影

何事によらず「覗き趣味^{のぞ}」というのは、社会の通念から言っても不都合なことである。

まして他人の情事を「覗く」となると悪趣味もはなはだしく、下劣漢のそしりも受けかねない。しかし「覗き趣味」ほど人間に普遍化している興味点は、そうざらにない。好奇心をみだし、刺激剂的な要素が十分にある。

中原巧三も、その誘惑には勝てなかった。ことに女と女が妖しくからみ合う情景は、その形態を脳裏に遊ばせるだけでも、快適な

興奮に心がはずんでくるのだった。

マコが教えた時間、Rホテルを訪れた中原は、室内に女の姿が見えず、妙に静まっているのをいぶかりながらも、妖しい場面を予想し、足音を忍ばせてベッド・ルームをのぞいた。とたんにどんぐりまなこを光らせ、ぼう然と足を釘づけにしてしまった。

光彩に照らされたベッドに、女がひとり、奇怪な形で花恥ずかしく咲きひらいていた。首から上、すっぽりと布をかぶり、からだもフィッティングなドレスにつつまれているが、五体のすみずみに及ぶおんなの急所は、そこだけが随意にえぐられ、ものの見事に、女体の輝きと美しさが誇張されていた。

しかも華麗な装飾がほどこしてあり、目にもまばゆい優麗な鑑賞物に変化している。

赤と白と黄色と——。幽谷から芽ばえた三色の菊の花は、色もあざやかに生き生きと咲き薫^{かお}っているのだ。

おお、マコ！ 不覚にも中原はうめいた。人の気配、男の声を耳にした女は、布の下からくぐもったうなり声をだした。哀愁のおえつがあとへつづき、強靱な紐で四肢を縛られ、手足をひろげて張り付けられた肢体は、自由な部分が、爬虫類さながら、くねくねと

妖しいうごめきをくり返している。

一瞬、中原の理性は穏当な思慮を失い、分別を忘れた感情は極度に乱れた。欲情ばかり鬱^{うづ}勃^{ぼつ}として、血氣盛んに官能をゆさぶる。ついに自製の糸もプツンと切れてしまった。

女が南川純子だとは知らず、確かに中原は判断をあやまったが、それも無理ではない。

つい先日、彼は初めてマコの赤裸な肉体を見た。そのとき腿の上部にある赤い痣^{あざ}に目をとめ、すぐく魅了されたものだが、ベッド上の女にも同じ赤痣があったのである。

「デイトのあと、あんたはんに……」と言ったマコの声が、彼の情火に油をそそいだ。

彼は理不尽にも純子を襲った。煌々^{こうこう}とした光におそれをなしたが、それも束の間、情念は急速に高まり、毛穴まで数えられそうな明光の中で、喜悅のうめきをもらしていた。

あらかじめ工作した場所にひそみ、ようすをうかがっていた正子は、厳肅な決定的瞬間を望遠レンズでとらえ、よろこびにふるえる指さきでつづけさまにシャッターを押した。

周密な、くわだてである。確率に自信はあったが、こうまでうまくいくとは夢にも思っていなかった。純子の顔は隠れているが、それは前もって同じ場所から撮った純子の苦悶

の表情と、巧みにすぐ替えればよい。正子は目に見えない、なにかに成功を感謝した。

ころあいをみて正子がルームへ行くと、室内は破壊的に混乱していた。可憐な花は、無残にも花びらを点々とこぼして狼藉の名残りをとどめ、一切が終わったあとであった。

「アッ！ 可哀想に、なんてことを……」

小躍りしたい復讐の快感をひた隠して、さめざめと泣く純子にとりすがった正子は、キズついた肌をやさくしいたわり、言葉鋭く中原の行為を責めなじるのだった。

「間違いだとはいえ大変なことをした。慚愧^{ざんき}の至りだ。どうすればいいだろう、マコ！」

さすがの中原もぼう然とし、暴走した自分のハレンチさに恥じ入り、日ごろの豪氣さを忘失して、取り乱したように頭をかかえた。

意氣消沈する中原に対して、正子は、自分の胸中に秘めた、もくろみを小出しにした。唯一の善後策であるかのように、順序よく、問責の声を織りまぜて説き伏せていく。

「一切わたくしにまかせて下さいまし。そうすれば、八方円満に納めて差しあげますわ」

中原も純子も、ただうなづくばかりだ。

が、純子はそのとき、浜田夫人のふたつの呼び名と、常務との関係に不審をいだいた。

中原もまた、方策を説くマコの叡智と、計画の正確さに、ふと疑惑を感じた。

ふたりとも何かに気づきながら、それを詮索する心の余裕もなく、念頭にあるのは、それぞれ自分自身の処置だけだったのである。

※

KK化学・大阪支社の調査部主任、三田村康二は、その日、突然舞いこんだ角封筒の中身を見るなり、ぼう然と自失し、一瞬後、くずれるように腰を落としてしまった。

前々日、彼は中原常務に呼びつけられ、かつてないほどはげしい叱責を受けている。

南川純子に託した重要な調査資料が、常務の手もとへ届いていないというのだ。純子に尋ねると、常務の代理だという女のひとに、間違いなく渡したと言って泣きだすのだ。

ひそかに愛する女性の不注意よりも、康二は自分の失策の重大さに恐れ、狼狽した。

このしくじりの波紋は予想以上に大きい。

中原常務や兄の誠一にまで被害をおよぼすのはむろん、最悪の場合は会社に莫大**ばく**な損害を与え、自分もまた背任の罪を問われ、検束されることにもなりかねない。丸々二日、彼は懊悩深い日を過ごしている。それが――《調査資料(秘)文書、確かに頂戴しました。ご

用の節は別記指定日に。ご存じの女より》

という、筆あともみずみずしいわずかな文字と、同封してあった数枚のフोटで、相手のことも、すべての理由も判然としたのだ。

フोटの半数は、自分の旧悪を物語る暴行シーンだし、残りのものも類似的な、中原常務と純子との、赤裸々な形態の映像だった。

康二は、八年という空間が一気に縮み、あらゆる現象が同化したのかと錯覚するのだ。

あらためてうつろな瞳を文字とフोटへ移し、康二は、自分が寸分の身動きもできない立場へ追いこまれたことを、痛感する。

正子の手紙は、すてておけば最悪の状態になることをにおわせ、彼のとるべき道を暗示している。正子の指図に従うよりほか、解決の方途を見いだすことは、不可能であった。

復讐の構図

「あら、お久しぶり！ ご立派におなりですこと。いまのあなたを見て、そのむかし、悪徳の暴力学生だったなどと、想像もできませんわよ。身勝手な変わり身ができるものね」「そう言うあんただって！ いったいこれはなんの真似です。いたずらはおやめなさい」

康二はにがりきった表情で、ポンと封筒を放り出し、けわしい目で正子を睨んだ。

「それを見て、おわかりにならないの？」

「よく個人の問題じゃない。会社という大きい組織に影響するんだよ。冗談はよしたほうがいいと思うな。あんたのためだ！」

内心の不安を隠し、康二は怒気をみなぎらせ、高飛車に正子を圧し伏せようとする。

「あらま、わたし、あなたを脅迫しているつもりなのに、あなたはわたしを恐喝なさるのね。おもしろいわ。勝負をしましょうよ」

「相も変わらず気の強い人だ。その写真はまだネガがあるんだよ。世間へバラ撒こうか。純子のことだって不法監禁で訴えてやるッ」「どうぞご自由に。わたしは平気よ。こちらこそその写真を会社中へお配りしましょうね」

「勝手にしろ。人のことはどうでもよい。ばくの用事は文書を奪い返すことだけだ」

「他人事ですって、まあおどろいた！ 愛するひとや、親代りも同様な常務さんのことはどうなってもいいの？ わが身だけがかわいいのね。下劣な人だと百も承知ですが、これほどとは思いませんでした。卑怯者！ お帰りのさい。顔を見てもヘドが出るわッ」

憤りも新しく正子はキッと唇をかんだ。

「帰るもんかッ。書類はどこにあるんだ！」
 のっけからケンカ腰の康二は、スキあらばつかみかかろうと形相けわしく迫る。が、正子は平気な顔で、会心の微笑を浮かべた。

「とうとう本性を現わしたのね。わたしが憎いでしよう。どうかしら、こんどこそ息の根が止まるまで、いま一度わたしを虐めてみない？ 遠慮しなくてもいいのよ。八年前、あなたに殺されたと同じだから惜しい命じゃありません。でも断わっておきますが、このまま日限がくると、あの書類は確実にある会社へ届けられます。そうなたらあなたはもちろん、誠一さんや常務さんも身の破滅です。あなたは人殺しだけはしないというご立派な主義でしたが、いっそのこと、わたしを道連れに無理心中でもなさったらいかが——」

蒼白な康二の表情がにわかにくずれ、醜くゆがんで引きつった。はじめの勢いもどこへやら、意気を喪失して腰を落とした。正子を仰ぎ見た目には哀願の色が浮かんでいた。

「おや、どうなさったの？ 急に元気がなくなつたようね。あなたの威勢はいつも負け犬の遠吠えだわ。そのくせ、弱い者にはすぐにかみついてくる。意気地なしッ。弱虫！」

辛辣な言葉を浴びせられても、なんの抵抗

も示さず、康二はがっくりと頭を垂れた。

「そのとおりだ。本当のぼくは弱虫なんだ。甘やかされて気ままに育ち、ほしいとなると見境がなくなってしまう。いまさら言っても信じてもらえないだろうが、最初にあなたを見た瞬間、ぼくはのぼせあがった。たまたま好きだった。そのひとが兄貴の相手だと知って嫉妬にくるい、カッとなってしまう。赦してほしいというのは虫がよすぎるが、いまのぼくは、どんなに軽蔑されてもいいから地位と名声とがほしい。与えられた道を踏みはずすことの愚かさを知った、というより、安逸をむさぼることに馴れた情けない男だ。頼むから助けてほしい。お願いします——」

突然、正子の心の中を、言い知れぬ味気ないカラッ風が、冷えびえと吹きぬけていく。八年間、骨身を削る思いをして、苦難に耐えてきた結末がこんなことだった——と。

（こんなくだらない男のために——。いや、心をゆるめてはいけない。負け犬は、いつかはまた牙をむくわ。赦してはならないのよ）

自分をいましめ、正子は冷たく男を見た。

「本当！ それがあなたの正味だったの？」

「どうすれば赦してもらえるのだろう」

「私の言う条件を守り、約束をしたなら」

「どんなことでもする。だから頼みます」

いま正子の眼前にいるのは、血気盛んな青年ではなく、知性豊かなエリートでもなく、飼い馴らされて尾をふる犬も同様だった。

※

「あなたはむかし、人間の顔をしたケダモノだったわ。でもいまはシッポを垂らしたヘナナな犬よ。犬らしい姿を見せてちょうだい」
 正子と康二、ふたりはベッド・ルームへ場所を移していた。正子はベッドへ腰をおろしエヤレリーズをにぎっている。床にすわった康二の姿を、カメラが冷酷にとらえていた。

「下劣な男！ あなたは弱肉強食の世界に住む野獣だわ。爪を磨き、牙をむきださないよう、永久につないでおく必要があります。あなたは犬よ。犬なら犬らしくシッポをふり、あたしの足のうらをなめてごらんよ」

「なめたらあの資料を返してくれますか？」

「忠実に条件を守り、実行したらね。いやならしいのよ。さっさとお帰りなさいな」

正子の声をうなだれて聞き、康二は、つと手を伸ばしておんなの足をとろうとした。

「ダメ！ 犬らしく四つん這いにおなりなさい。手を使わず、十分に舌を伸ばして……」

さすがに屈辱感に耐えかね、康二のからだ

は、^{おこり}癪に罹ったように小刻みに慄える。しかし、彼をうながす最終的な思案は、やはり保身の願望ばかりだったのだろうか――？

人間のたましいを置き忘れ、恥も外聞もなく、正子を見守る中で舌を伸ばしはじめた。

「これでよろしいか？ もう赦して下さい」

ぬめぬめと、いやしく唇をなめずり、康二は妙に熱っぽいままざしで正子を仰いだ。

「以前、わたしの足がきれいだと、そう言っ
て褒めて下さったわねえ。ほしいのでしたら
ご存分に。その代わり全部、脱いでちょうだ
いね。背広を着た犬なんて、おかしいわ」

がくつと震慄する康二を見おろし、正子の
冷笑が声高らかにひびいた。

無念の齒がみをして、康二は脱いだ。

男の首を紐で締め、その端をにぎって、

「そうよ。これで本当に犬らしくなったわ」

四つん這いの男に足をなめさせながら、正
子の手は、あわただしくシャッターを押す。

「南川純子さんのこと！ 何事も一切不問に
して、生涯交わらず愛しつづけること。これ
が第一の条件です。すこしでも純子さんをい
じめたらこの写真を公開します。純子さんは
わたしの妹ですから、よろしいね」

康二はみじめポーズのまま、無気力にうな

ずく。いまの彼には、正子の声すべてが、磐
石の重みとなつてのしかかってくるのだ。

「第二は、わたしのこと、だれにも口外しな
いように。これは浜田正子への誓いですよ」

「ああ、誓う！ 絶対に口外しないよ」

「もうひとつ！ これはすこし大役です。で
も、あなたなら簡単なコトでしょう」

「なにをしろって、いうのです？」

康二は、表情に不安と焦慮をないませ、陰
気な目色で、おじおじと正子を見あげた。

「明後日、誠一さんが奥さまご同伴で、大阪
へ視察にいらっしゃるそうですが、そのとき
あなたはお兄さんには内緒で、なんとか口実
をつくって奥さまを誘い出し、わたしの指定
する場所で行きからぬ行為に及ぶのです」

「なんですって――？」

電撃されたように、康二はとびあがった。

「そ、それ……そんなこと、できない！」

低くうめき、康二は死人の顔色になった。

「できないことはありません。あなたはケダ
モノだから、自分の地金を出せばいいのよ」

「赦して下さい。頼む！ それだけは……」

哀願というより、むしろ悲鳴に近い。破滅
を自覚してやぶれかぶれのヤケ半分、康二は
すさまじい目つきで正子を睨んだ。

捨て鉢な康二の心機を、す早く見ぬき、正
子は、嘲弄するようにニヤニヤ笑った。

「そんなに心配しなさんな。お芝居だわ。わ
たしの代わりに三田村家へ嫁ぎ、部長夫人に
なるひとへの、わたしの精いっぱいはいやが
らせよ。遊びだもの、それならいいでしょ」

「――？」

「でも、いくらお芝居でも真剣にやらにやダ
メです。以前のあなたがお得意だった暴行シ
ーンを再現するの。むろん肌もあらわに、あ
わや！ というところまでいかなくちや無気
味なもの。わたしは隠れて見えています。監視
つきでは気分がでないかも知れませんが、し
ぐさが中途半ばだったら書類は返しません。
納得できる状態にコトがすすんだら、わたし
は書類を入れた包みを置いて退散します。と
にかく一歩手前までは確実にやるのです。服
を脱がしパンティをはぎとり……。そのあと
あなたは、悪い女にだまされて大切な資料を
紛失したいきさつをくわしく説明し、三田村
の家を守るためには仕方がなかったと、床に
両手をつき、奥さまにおわびをなさい。奥さ
まのお赦しが出るまで真心をこめて……。い
かが？ 解決の道はあなたの決意ひとつよ」
丸裸の男は、哀れっぽい涙を流していた。

悦楽のシンフォニー

「マコ！ お前は本当に女狐だったな。人間をたぶらかす悪い女狐——」

悪い狐——。そう言いながら中原の声音に悪意はなく、妙に甘ったるい。

このところ、変貌めざましいおんなのからだに、彼の五感はずきり満足していた。それにこんどの思いがけないミスについても、隠密裡に手ぎわよく処理した才智に感じ入り、いやまして、いとおしさがつのる。マコというひとりの女に、彼は、すべての情熱を傾注した。柔肌はしたたるような若さがあふれ、しめっぽく手の平へ吸いつく。おさえると、からだじゅうがはずんでくる。快い感触だった。

正子もまた別人のようになった。いまでも執拗な愛撫をくり返す中原をいとわず、逆に全身をしなければ、相手に迎合していくのだ。

「そのとおりです。みんなをだまし、うまいことごまかしてしまいました。どうやら、八方無事に納まりそうやおへんか。ホホホ」正子は、身も心も、マリのようにふくらんでいる。勝利の、うま酒に酔っているのだ。

この瞬間、同じ時刻に、マンションのベッ

ド・ルームでは、誠一の妻と康二とが、必死の闘争をくりひろげていることだろう。

（包みの中が、ただの紙切れだと知ったら、あの男、たまげるだろうな。だまされたと、怒り狂う康二の顔を見てやりたいわ——）

正子が横取りしたことになる極秘文書は、初めから中原の手もとにあった。正子が持っていた封筒の中身は、白紙の束だ。

無抵抗な純子を犯した中原は、自分の非行を糊塗するため、純子とともに納得づくで正子のすすめに従い、巧みな方策をたてた。

このとき、加害者の中原よりも、むしろ被害者の純子のほうが積極的だったのは言うまでもなからう。純子は、浜田夫人に愛されることを、よろこびはじめていたのだ。

しかし純子はもとより中原も、正子の後ろに、みな子がいて、蔭で糸を引いているなどとは夢にも知らず、まして正子の目的や、三田村兄弟との関係など知るよしもなかった。

正子のくわだて、その筋書きを追うと、あすの朝、絶望と挫折感で錯乱気味の康二に向かい、中原はつぎのように言うはずだ。

「康二君。さすがだな。きみの懸命な努力の甲斐があって、資料は無事にもどったよ。ゆうべ、女のひとが届けてくれた」——と。

懸命な努力——。中原常務はかわいい部下へのねぎらいのつもりが、康二には、肺腑をえぐる痛烈な皮肉の声と聞こえるだろう。

もうひとつ、正子はマンションのベッドの周辺へ、精度のよいマイクと三台のテープ・レコーダーをひそかに装置してきた。

（おしまいのほうの、康二の訛言は消してしまおう。そしたら、あとは部長夫人とその義弟と、ふたりが奏でるすばらしい復讐のメロデーになるわ。私を売女とののしった三田村誠一への、最高の贈りものにしよう——）

そして私は？ この浜田正子は——？

（業界の実力者、中原巧三を後ろ楯にして、片方の手をマダム・みな子にゆだね、もう片方で南川純子をとらえ、放さないでおこう）陶酔に似た正子の思いは、果てしなくひろがる。

「ああ、聞こえるわ。美しい音楽が……。本懐とげた証しのシンフォニーかしら——」

「ええッ。なにが聞こえるんだい？」

「ホッホッホ。和楽器と洋楽器の競演なの」

「なんだい？ なんの話だ！」

「なんでもおへんの、ひとりごとや……」

いきなり反転した正子は、和楽器の演奏を行ないはじめた。

〈終〉



娘相撲物語

(20)

花の女斗美たち

奮斗士 好太 (カットも)

吉永さんとの練習が終って別れた夜、私は吉永さんの話していたわが校の相撲部のことを思い浮かべていました。

十月初めのある日。一年ぶりでF高校の門をくぐりました。一年前のあの時と同じ、新人対抗戦のためです。でも、今年の私は、試合をするのではなくて、新人たちの付き添いとしてやってきたわけです。

あの日、私たち新人は、皆胸をドキドキさせ、ソワソワ、フワフワで何を話してもさっぱり身が入らず、足もとさえしっかりしない

みたいな感じでやってきたのでしたけれど、今年の新人たちはどうでしょう。ふだんとちっとも変わらないような顔つきで、ワイワイガヤガヤと人気スターだとかヒットメロディだとかの話を、にぎやかにやっているのです。まるで、ピクニックにでも出かけてきたみたい。度胸がいいのか、何かが足りないのか、それとも、昨年の私たちが、純情すぎたともいえるのでしょうか。引率の榎本さんもたまりかねて、とうとう

「あんたたち、遊びにきたんじゃないのよ、

これから試合をやるんですよ。すこしまじめになっテッ」

と叱りつけます。叱られたばかりは、それでも神妙になって、もっともらしい顔で歩くのですけれど、そのうちに、誰かが「プッ」と吹き出すとたちまちゲラゲラ笑い出して、しばらくは止まりません。人並みはずれて大柄な娘たちがゾロゾロ歩いているのさえ目について、通行する人たちがジロジロ眺めている、ワアワア騒ぎながらなのですからたまりません。そのへんに寝そべっていた犬までが

びっくりして起き上がり、げんそう顔で見つめる仕末。

「真剣味が足りないわヨ。これでもし負けたら承知しないから。帰ったら四股ふみ一千回させるわヨ。いいわね」

榎本さんににらまれて

「わあ、そんなの無理だわ。勝敗は時の運っというじゃないの」

「負けたって、私たちだけの責任じゃないと思うわ。指導の方法だって問題だし」

「そんな理くつを並べたってダメよ」

榎本さんも、押されきみながらマネージャーの威厳を保っての防戦です。けれども、この子たちにしても、本心は、やはり試合に対しての不安や興奮に落ちつけない気持だったにちがいないのです。

「あきれた人たちねエ。負けるのまでひとの責任にしようっていうの？」

「そうじゃないけど……。でも、あたしたち、まだ、ぶつかりがいこくらいしかやってないでしょ。だから……」

原さんにいわれて、考えてみると、なるほど、私たちの練習は、春の敗戦のショックやさしあたり、来年に重点を置くという気持もあって、この子たちの指導の方は、すこしば

かりお留守の気味があつたかもしれません。

「でも、そんなことは、いいわけにならないわヨ。相撲は押しが基本なんだから、あんたたちぐらいの時は、よけいなことを考えてないで押すことが第一ヨ」

榎本さんは強引に、そうキメつけます。

「だってエ……」

紺野さんが何かいいかけるのへ

「だってナニもないの。じゃアあんたは、押しの型が完全に身につけてるの？」

榎本さんは重ねてそういうと、まだ何かいいたそうにしている紺野さんをジロツとニラむのでした。

完全かといわれますと、私たち二年生にしても、また三年生の人たちにしても、そうだといえる人なんかいないでしょう。紺野さんは丸い頬を一層ふくらませて沈黙です。

やがて、見おぼえのあるF高の校門。自分が試合をするのでなくても、思わず身がひき締まる思いです。

控え室に入って、榎本さんが打ち合わせに出て行ったあと、やはりこの子たちはソワソワと落ちつきのない態度を示し始めるのでした。おとなしい朝野さんは、腰をおろしたまま目を閉じて黙りこくってしまいましたし、

原さんは、白い顔を紅潮させて、天井を見上げたり壁を見つめたり、時々深呼吸をしたり……。一見落ちついているのは例の南さんでした。彼女は相変わらずのんびりした動作で窓から庭の花壇を眺め、そして、クルリとふり返って落ちつきのない仲間たちを楽しそうな様子で観察？ したりしているのでした。

「さア、したくしてちょうだい」

その時、打ち合わせから戻ってきた榎本さんが、そういいながら入ってきました。「選手」たちは、いっせいに色めき立ちます。

「いよいよ出陣。」「選手」たちのいでたちを整えてやらなければなりません。

ソワソワと落ち着かないこの「選手」たちのおしりをたたくようにして、マワシをつけさせます。

何しろ、みんなノボセ気味とあって、ほとんど一度ではキチツといきません。

前の端を儉約しすぎて、後ろの端が余ってしまつて、どうにも格好がつかなかったり、せっかく、キチツとうまくいって、ヤレヤレと思つたのに、前の端を折りたたむのを忘れていて、本人は気がつかないですましていたり……。とにかく、手伝う方も、手伝ってもらう方も、しばらくの間は大さわぎ。

でも体格がいいだけに、この子たちのマワシ姿は皆リッパなもので、青い選手用のマワシも、ピッタリと身についています。

「さア、できたわネ」

と、榎本さんも

「これで、その格好の半分くらいの勝負ができればたいしたもんなんだけど……」

「ワア、失礼しちゃうワ、あたしたちそんなに見かけだおしかしら」

「新人対抗戦なんかじゃなくて、選手権大会ならいいと思ってるのに……」

マワシをつけて、どうやら気持も落ちついたらしく、相変わらずのへらず口が出るようになりました。

「あら、失礼。じゃ、これからゆっくり、あんたたちの実力をおがませていただくワ」

「まかしといてエ」

おちやめさんが、前ミツをポンとたたいて大見栄を切り、笑いがわきました。

この、ものおじしない新人たちは、この日の試合でも、そのやんちゃぶりをフルに発揮して堂々と戦ってくれたのでした。

結果からいえば三対二で、昨年の私たちに引き続いたの敗戦だったのですけれど、一番々々の勝負はすこしの見おとりもなく、むし

ろ勝ち負けにこだわらない伸び伸びした戦いぶりは、F高勢の消極的な相撲ぶりと対照的で、ほんとに気持のいいものでした。こうした新人戦などでは、勝ち負けの成績にこだわることより、自分の持ち味を出せるかどうかの方がよほど大切です。そして彼女たちは、この試験に見事合格したのでした。昨年の私の姿と引きくらべて堂々たるものです。

ことしのF高の新人たちは、目立って大きい人は見当たりませんでしたけれど、アンコ型二人、筋肉型三人の陣容は、粒がそろっていて、よくきたえられたという感じでした。それにくらべると、私たちの新人陣は、よくいえば個性に富んでいるのでしようし、悪くいうならテンデバラバラ、そのバラエティーのある体つきと同じように何ともまとまりのない寄せ集めといった感じなのでした。キリリと締め込んだマワシ姿だけは一人前ですけど、統制のとれたF高側の動作にくらべて何となく頼りない感じ。

まず、先頭を切って原さんが土俵に上りました。相手のひとは身長こそ原さんに劣りますが、ガッチリした体つき。浅ぐろい肌の色もたくましそうで、色白の原さんが一層弱々しく見えます。原さんもさすがに頬を染め、

唇を堅く結んで緊張の表情。そんな姿勢でチリを切る原さんの白いおシリをいろどる青いマワシの、鮮かさが目にしみます。こんなキレイな原さんを先頭に立てるのはちょっと痛々しいくらい。でも、原さんはがんばりました。立ち上がるなり相手の人は頭を下げて鋭く突っこんできます。その肩口を両手で突っぱって出足を止める原さん。でも相手はあくまで姿勢を低く、原さんの突き出す手をかいくぐって突進してきます。顔を真っ赤にしてけんめいに突き返す原さん。でも、その白い体がだんだんそり身になって、とび込んだ相手の人は抱きつくようにしてもしろ差しを果たしました。でも、あまり深く組みすぎたために一気に寄れません。相手の人の肩越しに伸ばした原さんの手がようやくマワシにかかり、両上手をひいたところでひと呼吸。こうなると身長で原さんが優っているだけにどちらが有利とはいえません。ひと息した原さんは両上手からの強引な吊り。原さんとしてはこの手しかありません。

「ガンバレッ！」「もうひと息よッ」「そこよッ、もうすこしッ！」息をこらして見つめていた両方の土俵下から声援がとんで、ようやく、対抗戦らしいふんい気がもり上がりま

す。

足巾を広く、ぐっと腰を落とした原さんの真っ白なおシリから太腿にかけての筋肉がプリプリと緊張し、ガッチリと引き合ったマワシがズリ上がって、むき出しになった腰のあたりが薄赤く染まっています。ピンク色に紅潮した原さんの肩越しに見える相手のひとの顔も真っ赤。技の上ではまだまだ未熟なふたりですけど、そのすばらしいファイトは、いかにも新人同士らしく、なんのかけひきもない真正面からのぶつかり合いです。けれども、その色白の肌がほとんど全身ピンクに染まった原さんのスゴイファイトにとうとう相手のひとのつま先が土俵をはなれました。型どおり横に運んで土俵ぎわ。よく不利な体勢をはねかえして気力の勝ちを得た原さんに、相手のF高側からも拍手が送られて、彼女は紅潮した顔に大きなひとみを輝かせながら土俵を下りてきました。激しい吊り合いにすっかり乱れたマワシが、彼女の勝ち姿を一層引き立てています。私たちの祝福をうけた原さんは、しばらくは激しい息づかいで言葉も出ませんでした。そのうちによろやく呼吸をととのえて、

「ああ、苦しい…」

と、やっとひとこと。そして

「ホラ、まだ指がのびないワ」

と、小鳥の足みたいに指が曲がったまま、ブルブルとふるえているのは、勝った興奮のためばかりではないようです。

この原さんのすばらしいファイトは、私たちをスゴク勇気づけ、逆にF高側はややひるんだ色が浮かびました。第一陣の勝敗は、ですからほんとうに大切なのです。続いて朝野さんが土俵に上がります。おとなしい彼女も原さんのファイトに刺激されて、日ごろのひかえ目な感じはすっかり消えてキビキビとした態度で礼を交し、チリを切ります。まだ子供っぽい体つきですけど、今日はそのスミズミにまで力が入っていて、見ちがえてしまいうくらいに頼もしい感じ。美ぼうが緊張と興奮とで一層美しさを加えて、ポツと赤味のさした頬のあたりなど何ともいえません。朝野さんより二まわりくらいも大きい相手のひとは、すっかり固くなって、見るからにギョチない動作です。首がないみたいに見えるほどの両肩の肉づきや、ポテポテとしたおなか、すこし巾広ぎみに締めているマワシさえもすっかり埋まり込んでしまっている腰のまわりの厚い肉、動作のたびにプリプリと揺れる両

方の胸のふくらみなど、そのポリウムは相当なものですけれど、彼女の体つきには、ただふとっているというだけで、決して鍛えられたたくましさ、いったものはないのです。ですから、そのポリウムにびっくりはしても、たとえば、私たちの小林さんから受けるような圧迫される感じは全然ないのでした。

「ウワア、大きいのが出てきたワ」と、いつてはいても、夏休みの間中、小林さんや、麗華女学院の前田さんたちから十分に練習をつけてもらった私たちの目には、ちっともコワイものには見えないのでした。

「脂肪のカタマリってとこネ」

榎本さんまでがそんなことをいい

「あのオッパイ、スゴイ大きさ…」

「ウン、でも、ああいうのは、かんじんの時だめなんだって」

「かんじんな時って?…」

「あんまり大きすぎるのは、赤ちゃんが出来てもお乳が出ないんだって」

「ヘエ…」

「そんなこと、どうして知ってるの?」

「ウン。ねえさんがそう言ってたワ」

「ホントかしら…」

私は、あまり豊かでない自分のふくらみを押さえながら、榎本さんのいうことを半信半疑で聞くのでした。すると、なんだかそのへんがムズがゆくなってくるのでした。

「これもイタダキだワ」

榎本さんは、もうすっかり安心したような顔つきです。

「あのデブちゃん、すくんじゃってるんじゃないかしら」

「朝ちゃん、張り切りすぎてムリしなきゃいけないけど……」

「大丈夫ヨ、あの子、落ちつきがあるから」

私と榎本さんは話し合いながら、土俵上の朝野さんの後ろ姿を見つめていました。

自分よりふたまわりくらいもちがう相手に対して、ちっともおおげず堂々とふるまう朝野さんの態度は、そのために、かえって相手のひとよりも大きく見えるほどなのでした。まだ、肉づきの十分でない肩から腕のあたりや、プリンと形がよくて、ほんとにかわいいおシリまでがピリピリと緊張して、緑のマワシが彼女の若さのあふれた裸体美を最高に引き立てていたのでした。

相手のひとは、この朝野さんのりりしさにすっかり呑まれてしまったような型で、視線

もオドオドと落ちつかず、マワシのあたりに手をやったり、足もとを気にしたりして、私たちの気のせいとか、最初から逃げ腰みたいに見えるほどなのです。

立ち合い。朝野さんは鋭く突進し、相手のひとは、仕切った位置から、一步も進むこともせず、その朝野さんの突進を受けました。パチンと音がするほどの朝野さんの激しい当たり、相手のひとは一、二歩後退……。でも、さすがに重量の差でしょうか、何とか朝野さんの攻勢をくい止めます。ふたりともガツチリとマワシをひき合って……。最初は朝野さんのもの差しかと思ったのですけれど、組み手は右四つなのでした。

こんなふう、おたがいマワシを十分に引きあっては体格の差は争えません。いくらファイトで相手のひとを圧倒している朝野さんでも、長びいては不利。相手のひとの顔にホッとしたような表情が、浮かんだようでした。でも、朝野さんの攻勢はすこしも休みません。彼女は右下手のマワシを離すと相手のわきに当てて、その上手を切ろうとします。けれども相手のひとにも必死です。太い腕でガツチリと握ったマワシはそれこそ死んでも離さないつもりでしょう。朝野さんはまた右下

手を取り直しますと、今度は、その下手を引きつけながら強引な外がけに出ました。見ていた私たちが思わず「アッ」と声を上げたほどの無理な技なのでしたけれど、相手のひとの弱気がそうだったのかその無理な攻撃が意外に効いて、グラリと腰が崩れ、朝野さんは相手のひとの大きな体にまるでしがみつくような格好で足技の強襲を続け、みるみるうちに土俵ぎわ近くまで追いつめて行きました。

「そこよ、そこッ！」

「ヨシッ、勝ったッ！」

私たちは腰をうかして声援し、朝野さんの勝ち名乗りを疑わなかったのです。

土俵ぎわまで攻め込んだ朝野さんは、そこでかけた足を外し、ひと腰落として寄り切りの体勢に入ろうとしました。相手のひとは絶体絶命、俵にかかとを乗せながらのやけっぱちみたいな、振りまわし。ところが、体重のない悲しさというのでしょうか、そこまでの無理な攻撃に上体が伸びかげんになっていた朝野さんの体がフワリと浮いて、アッという間もなく左足のつま先が俵の外へ……。もっともそれとほとんど同時に相手のひとのかかとも俵を踏み切ってはいたのでしたけれど、残念ながら朝野さんのつま先の出た方が早い

ことは誰の目にも一致していました。

「フワア……」

ため息とともに腰をおろす私たち……。でも思い切り残って存分に相手を苦しめた朝野さんの、土俵を下りてくる顔はいつものように美しく、敗戦のかげを止どめていないようでした。

「朝ちゃん、くやしがらなきやだめヨッ！」

と榎本さんが逆にハッパをかける有様。

「すみません」

やっと小さな声でいう朝野さんは相変わらずつつましい笑顔でしたけれど、急にその目からツツと光るものがあふれ、彼女はあわて顔を伏せてそれをかくしました。

まだ胸が大きく揺れて、白い桃のような左のふくらみの下が激しい動きを見せているのです。やはり、顔では笑っていても、一番くやしいのは彼女自身だったのです。

「よくやったわ、さあ汗をふいて……」

榎本さんからタオルを受け取った朝野さんは、それで汗と涙をいっしょにぬぐうと、さっぱりした顔を次の土俵へ向けました。

三番手は高見さん。でも、今度の新人戦で一番貧乏くじをひいたのはこのひとのようでした。相手のひとはF高軍新人随一の長身。

それに男のひとみたいなゴツゴツした体格。

筋肉の引きしまった体に、やや巾せまくしたマワシをキリッと締め込んだあたりはほんとうに強そうな感じです。私たちの新人軍の中でいちばん子供っぽい高見さんにこの相手がぶつかったのは全く不運でした。せめて南さんか今野さんあたりなら体格からいってそうヒケはとらなかったでしょうに……。

立ち上がり、突っ込んでくいださがろうとした高見さんは、たちまち強力な両手突きで体を起こされてしまいました。すかさず右の上手、左の下手がガッチリとマワシを引いて高見さんは下手はとれたものの、右の上手は完全なアソビです。相手のひとのからだにもとどかないでむなしく空気をつかむばかり。

「勝負にならないわね」

「相手が強すぎるわ」

「彼女、カアイソウね」

私たちがささやいているうちに、相手のひとは、両マワシをグッと引きつけ、けんめいに抵抗する高見さんの両足の間へ右足を一歩踏み込みますと、目のさめるようなやぐら投げ。ものの見事に宙をとんで、高見さんは土俵中央へたたきつけられました。

嘆声、ため息のようなどよめき……。相手

もわからないほどそれは強烈な勝ちっぷり。

「……」

私たちは顔を見合わせるだけ、息を呑む思いです。

「スゴいわねエ」

「ウン。でもエミちゃん、今日はちょっとヘンだわね。ちっとも動かないじゃないの」

「そういえばそうね、彼女まさか……」

私たちがヘンに思うように、高見さんのふだんはお茶目な彼女の性格どおり、機敏な相撲ぶりが特長なのでした。

いくら相手のひとの腕力が強く、動けなかったからといっても、彼女の表情からは、何かやろうという気持は、薄かったようでしたし、第一立ち合いからして、あんなフワツとした、まるで相手につかまえてくださうというような立ちかたなどしない人なのです。

「あとで聞いてみるワ」

榎本さんがいいました。

でも、とにかくスゴイひとが出てきたものです。これで一対二、形勢逆転です。

「ヨシッ。このかたきはあたしが――」

次に土俵へ上がる紺野さんが、手につばをつけて立ち上がりました。

名前を呼ばれるのも待てないような張り切

りぶりです。ちょっとハレぼったいような、一重まぶたの目をいっぱい開いて、もう顔を赤くして興奮しています。いささかポッテリした体つきですけど、腕ちからには自信もあり、わが新人軍一番のポリュームからくる馬力もあります。

「ポンポン」と二、三回横ミツのあたりをたたいて景気をつけてから土俵へ上がります。陽気な彼女らしい演出！。でも、あんな段ちがいな負け方をしたあとでは、このくらいの張り切り屋さんがいないと気分的に押されてしまいます。

土俵へ上がってから、紺野さんは、両手の先をブルブルと振ってみたり、前ミツをグイと押しさげてみたり、肩をゆすったり、ちっともじっとしていないのでした。

「あの子、いつもあんなに落ち着きがなかったかしら」

「張り切った時のクセなんですよ」

「アガってるんじゃないの」

榎本さんは、ちょっと心配そう。

肉づきのいい丸い肩と、巾の広い背中。パンと張った腰。ポリューム十分のおシリがプリプリと揺れ、たくましい太腿がプチプチと脈動しています。何となく勝てそうな感じ。

外股でノシノシと歩くクセも、ふだんは女の子にはあまりふさわしいものではないのですけれど、こんな時には、何か頼もしい感じがします。

けれども、相手のひとみななかの強敵。背は紺野さんほどはありませんが、ムッチリした肉づきは今野さんに劣りません。肩のあたり、胸のあたり、そして腰のあたりの張り切った感じは、いかにもパワーがありそうにみえます。

立ち合い！。紺野さんはやや立ちおくれ。相手のひとはうまくとび込んできて、もろ差しにくいさがりました。紺野さんはちよっとそり身になりましたが、両腕でかかえて力まかせの振り投げ。腕力に自信があるというだけあって、低い体勢の相手のひとへ傾きかけそこで攻撃がストップ。でも紺野さんの絶対不利は変わりません。土俵をややつまった紺野さんとは何かマワシをとろうと懸命に手をのばしますがなかなか指先が届きません。でも何度目かにやっと右手の指先がかかり一枚マワシながら、どうやら上手がとれました。そして、二枚、三枚と指先でさぐりながら、ようやくの思いで完全に引くことができました。けれど、相手のひとの低い体勢のほとん

ど肩越しに引いたその上手は、タテミツに近いほどの位置で大して効果はなく、気休めといってもいいくらいなもの。

「まずい相撲になっちゃったわネ」

「どこまでがんばれるか……」

榎本さんもシブイ顔。勝負をあきらめたような口ぶりもムリはありません。

頭をつけ、両方の前ミツをガッチリと引きつけて理想的な体勢となった相手のひとは、下から下からと基本どおりの攻め方で紺野さんを追いつめます。

歯をくいしばり、眉を寄せ、真っ赤になつてこらえる紺野さんの悲愴な顔——。ズリ上がった前ミツと伸びてゆるんでしまった前ブクロが彼女の苦戦を象徴し、いつもはゆったりと実り豊かな表情のおながに激しく波を打っています。乳房の谷間のあたりにくい下がった相手のひとの顔も真っ赤。なにしろ腰のあたりに抱きつかれたみたいな体勢なので、から、紺野さんがネバったところでとうてい勝ち味はない相撲なのですけれど、土俵へ上る前の彼女の言葉どおり、勝負を捨てない態度は立派なものでした。

一息してマワシをとり直した相手のひとは勝ちを決めるべく寄り立てます。

「ア、やられちゃう……」

「チェッ、ザンネン……」

私たちが唇を噛んで、敗戦の一瞬を見つめた時、土俵ぎわで必死にこらえた紺野さんは両手で相手のひとのマワシの結び目あたりを引いたかと思うと、最後の力をふりしぼってグーッと持ち上げたのでした。

「キャア！」

と私たちは歓声をあげ、相手側の土俵下からも驚きの声があがりました。

スゴイ力！ まるで人間クレーンです。相手のひとの足が土俵から三十センチくらいも上がり宙に浮いたのです。けれど、さすがの紺野さんの馬力もここまで。とうとう力尽きた彼女は腰くだけのような格好でドッと寄り倒され、審判の手は相手のひとに高々と上げられました。

くやしさを顔中に現わして土俵を下りてくる紺野さん。今日もとけ落ちそうなマワシも気にせず取り口の言いわけです。

「もうすこし早くマワシに手がかかれば何とかできたんだけど……」

ハアハアと荒い息づかい。ムックリとした胸もとが激しく上下して豊かなおなかの太波が見ていられないほどでした。乱れきった

マワシは肌についた一枚だけを残しておなかの上へムザンにズリ上がってしまい、前ブクロは伸びきってはずれそうになっています。

「よくがんばったワ」

榎本さんも、この紺野さんの奮闘のあとを目にしてはさすがにおことも出ない様子。

「とにかくあんたのバカ力にはあきれたワ。

おせじにも出来のいい相撲だなんていえないけど……。もっといいねいにやらなけりや……」

汗をぬぐいながらうなづく紺野さん。そして、乱れたマワシを整えている彼女の傍らを

最後の一人、南さんが土俵へ上がりました。

先陣の原さんがせっかく貴重な勝ち星を上げてくれたというのに、後が続かず、三連敗して、一対三とこの対抗戦の勝敗はきまっ

てしまったあとですけれど、それはそれとして個人々々の力を試す舞台としての、土俵へ上

がったひとたちは真剣です。

今野さんよりひとまわりほど小さいけれどボツテリした感じの彼女と対照的に、からだ

の線がキリッとして、ピチピチとした肌のツヤの美しい南さんです。いつもは津野さん

にお叱りを受けるユルフンも、今日はキリリと一分のスキもなく締め込んで、クリッと丸い

おシリが一層魅力的な女力士ぶりです。熟し

切らない果物みたいにコリコリした感じのかわいらしい胸のふくらみ、ハジけそうなくらいの太腿の張り……。ひざ上二〇センチくらいミニでもはいたらスゴク似合うでしょうに……。見るからに若さがふき上げてくるような南さんです。

「あの子、あんまり妙な負け方しなければいいけど？」

当てにしていた紺野さんが負けて、榎本さんはちょっと弱気になった様子。折り紙つきののんびり屋だけに、私も南さんの相撲ぶりは安心して見てられないようです……。全くどこまでも気をもませる南さんなのでした。

立ち合いは相手のひとの方が早く、でも、南さんの立ち合いも、のんびりやの彼女とは思われないくらい素早いものでした。

突っぱり合い……。小柄ですけれどキビキビした相手のひとの突き上げ攻撃に南さんはやや圧倒されて後退。「ガンバレッ！」思わず声が出ます。この声援に、力を得たのか、

南さんは相手のひとの腕を、思い切り払います。タイミングよくきまって、のめりかけて

危く立ち直るところを、今度は南さんの攻撃

……。ふたりの激しい斗志のぶつかり合いに両

方の土俵下から声援がとんで、俄然熱気がわ

きあがりました。あくまでも離れて勝負をつけようという相手のひとに対して、南さんもマワシにこだわらず、真正面から突き合い、押し合いで、戦う態度はほんとうに見事でした。パッと腕をはじかれて、思わず横を向く南さん。すかさず飛びこんだ相手のひとは一気に押し立てて土俵ぎわ。『キャァ』と悲鳴をあげた私たちでしたけれど、次の瞬間どこがどうなったというのでしょうか。思わず目をこすりたくなるような事が起こったのでした。土俵ぎわへ攻めこまれていた南さんと追いつめていた相手のひとの体がクルクルともつれたと思ったとたん、南さんは、何と相手のひとのうしろへ回って、しっかりと抱きかかえてしまっていたのでした。

形勢逆転……。歓声と悲鳴と、そして笑い声がまじり合ってひびく中を、南さんは背中からかかえ込んだ相手のひとの前マワシのあたりをしっかりと握って、抱き上げるようにしながら土俵ぎわへ。そうはさせまいと、絶対のピンチにも勝負を捨てない相手のひとは、前マワシをとった南さんの手をなんとかはずそうと懸命の表情。前足をふんばり、後ろからかかえている南さんにもたれかかるようにして最後の抵抗を試みているのでした。審判

のひともさすがに笑いをこらえていますけれど、ふたりが真剣なだけに、見てる方からすればかえってユーモラスに見えて、私たちは安心すると同時にこみあげてくる笑いをおさえることが出来ずに、笑い崩れてしまったのでした。やんちゃ坊主がつかまえられて、なんとかその手をふりはなそうとしてダダをこねてるような、この勝負の幕切れは、そこへ行くまでの前半戦が見事な熱戦だっただけによけいにおかしく、私たちは帰りの途中でも誰かしらが代わる代わる思い出し笑いで吹き出していたのでした。

「何を笑ってるのッ」

と、南さんは口をとがらせて

「あたしの勝負を思い出してるんでしょ」

と、不満そうです。

「必死だったのヨあたし。それを笑いものにするなんて」

「ごめんなさいネ、でも、あんたがふざけてたっていったるんじゃないのヨ」

と、榎本さんも笑いをこらえながら

「あんたがおかしかったんじゃないかって、相手のひとの格好がおかしくって……」

と、そこでまたこらえていた笑いが止まらなくなつて、みんながドッと笑い崩れるので

した。

夕方近くなった風が、興奮した頬を気持ちよくなでてくれます。

「さア、どこかでお茶でも飲んで行こうか」

榎本さんの提案に

「サンセイイ！」

「ごちそうさまア」

みんなの声が弾みましたが、紺野さんひとり、うかない顔。

「あんた、どうしたの？」

私にきかれた紺野さんは

「えエ、あたし、おなががすいちゃって……」

どうせなら食堂の方がいいんだけど……」

ゲラゲラ笑うみんなの顔を、それでもチョ

ッピリ恥かしそうに見ながらそんなこと言うのです。

「あんたがあんな馬鹿みたいな相撲でバカ力出すからよ。帰ったら、あんただけ四股ふみ

一千回、してもらおうから……」

榎本さんに叱られて口をとがらす紺野さんに、また賑やかな笑いが湧くのでした。

そして、その日、念願の二人だけの申し合いの約束が、吉永さんと私とで交されたのでした。

(未完)

まそひすむす・てらぷていくす (3)



『カテーテル』

泉 一郎

前回は、高橋美保子なる一女性が診察に訪れ、その診察の情景を延々二十枚にわたって書いた。というものの、実際に診察に要した時間は十五分位であるから、略々読む時間に匹敵すると思うが、雑誌の刊行が、一カ月に一回であるために十五分の診察が一カ月に引き延ばされるわけである。特にまそひすむすに關係のないような診察の様子を長々と書くのはどうかとも思ったが、それには、一寸したわけがある。

第一回の文中(45年2月号)で、まそひすむす・てらぷていくすの説明をくどくどとしたが、その中で「M・Tは医師が患者を、医療という行為を用いて責め、患者がそれによって愉悦を覚えるというのではない。医師は極く普通の診療行為をしているのに拘らず、患者が一方的に、嗜虐的となることを云うのだ」と申し上げた。したがって医師側から見れば、そのつもりで見なければM・Tかどう

かわからないわけである。この患者は、苦痛のある検査や手術をよく我慢するなあと感心するのが関の山である。しかし、M・Tということを念頭においてよく見れば、診療中に恍惚状態になっているのを観察することさえできるのである。しかし、医師はことさらにM・T者を満足させようとしているのではなく、あくまでも、ビジネスライクに行動しているのだということを説明するために、あのように長々と診察の状況を書き並べたわけである。

さて、問題の美保子嬢である。二日たってまだ症状かなにかあったらもう一度来るようにといったものの、私はもう忘れていた。患者さんには申しわけないが、一人一人覚えていくことは到底不可能である。かなり重症であるとか、特別の關係にある人ならばとにかく、単なる膀胱炎では、私の気掛りの対象にはならなかった。ただ一つ、脱ぎっぷりのいいことだけが印象に残っていたといわねば嘘になるだろう。

最初に彼女が私の診察室を訪れてから丁度一週間目、つまり同じ曜日の同じ時間、彼女は再び待合室の同じ場所に坐っていた。そこで受付では、最初の日と同じようなやりとりがあり、看護婦嬢は昼食に出かけ、診察室で

は、彼女と私とが二人だけで向かい合うことになったというところまで全く同じである。芝居ならば、第二場、一週間後の同時刻、同じ場所というわけである。登場人物も全く同じとなれば、道具方も楽でよろしい。

ただ異なるのは、先週は、診察室に入ってきた彼女は何かもじもじとあたりを憚るような気配が見えたが、一週間経った今日は、そのような様子は少しもなかったことである。普通二回目の診察の時は、医師の方から、

「その後どうですか」

というような問いかけによって始まるのであるが、彼女の場合はそうでなかった。私が何も云わないうちに、というよりは、問いかけの言葉が口まで出かかった時に、

「先生、もう一度診察をお願いします」

といいながら衣服を脱ぎ始めた。私に質問を発する機会を与えない鮮かな脱ぎっぷりである。見る間に先週と同じようにブラジャー一つになって、さっさと診察台に横になってしまった。左手で、かくすべきところはかくし、眼は閉じている。裸身のいけにえが供え物の台に横たわったという感じである。

先週も彼女の態度にはたじろいってしまったが、どうも普通の娘さんと違うようである。と考えたら、私も少し落着いてきた。

「その後どうですか」

「尿の方はよくなりました。でも、これでも大丈夫かどうか心配なのです」

「よくなったというのは、何回も用を足したり、残っている感じがなくなったと云うことです」

「はい」

「薬は、きちんと飲みましたか」

「はい」

「その後五日の間、別に変わった症状を覚えてようなことはありませんか」

「何もありません。調子がいいので伺いませんでした。でも、膀胱炎は完全に治しておかないと、何回でも、再発すると聞きましたので」

「よくご存知ですね。膀胱の中の細菌が完全になくなるまで治療をしないと、普段は何でもないのですが、疲れたり、冷えたり、尿をこらえたりすると再発します。今日も、もう一回、尿を調べてみましょう」

「お願いします」

といって、無造作に左手をはずした。そも、こういうような診察は、患者さんの方でためらうのを説得してようやく診察することさえあるのに、彼女の場合は全くその逆である。

「膝を立てて、脚を開くのです」

この言葉は、実は彼女の口から出たものである。このように積極的な患者さんは医師にと

っては面倒がなくて有難いのである。何のためらいもなく、彼女は膝を立て脚を開く。外陰部異常なし。尿道に異常なし。処女膜異常なし。

「いいようですね。異常はありませんよ」

「でも先生、尿の方はよくても、婦人科の方に、ひろがっているようなことはないでしょうか。少し痒いような気がします」

「そちらも、外から診た範囲では何ともありませんよ。これ以上のことは婦人科の先生にお任せしないと。それにあなたは、まだ処女ですから、婦人科的な診察は難しいでしょう」

この時、彼女は一瞬びっくりしたような顔をしたのを、私は見逃がさなかった。

「さあ、診察は終了です。服を着なさい」

といったが、

「先生」

といったまま、動かないではないか。私も何か異様なものを感じて、彼女の顔を見た。すると、彼女は右手を眼のあたりにあてて、涙ぐんでいるのである。

「どうしたのですか。何か痛かったの」

「……」

「恥ずかしかったのですか」

「いいえ、先生。私、うれしいのです」

声もききとれない位に涙ぐんでいる。これは一体どうしたのだらう。こんな診察を受け

て嬉しいとは。さてはこやつ、いよいよ少し変態だな、と思ったので、

「何か事情がありそうですね。よければ伺いましょう。兎に角、服を着なさい。そして、尿の検査をしますから、トイレで尿をとってきて下さい」

「尿の検査には、トイレで普通のように、とってもよいのでしょうか。前に私の知っている人が、同じような病気の時に、尿が汚れると、バイ菌がわからなくなるからといって、何ですか、ゴム管で直接膀胱から尿を取って頂いたとか聞いていますけど」

このことは前にも聞いたことだが、何もかもよく知っている人だ。こちらは遠慮しているのに、そんなに云うなら一つカテーテルを使うか。看護婦は帰してしまっただけで面倒だが、ご希望に応じてやろう。

「本当はそれが一番正確なのですが、あなたそんなことは、いやでしょう」

「私は構いません。充分、検査して下さい」

「じゃあ、そういうことにしましょう。消毒するのに一寸、時間がかかりますから、服を着て下さい」

これで、服を着なさいというのは、三度目だ。それにしても着たがらない娘である。依然として、ブラジャー一つで診察台に横たわっている。

診察の時は全裸の女性を見ても、何とも思

わないが診察が済んでから、いつまでも裸でいられたら、それも肉付きのいい若い娘さんの裸身を眼の前に陳列品のように見せられては、目ざわりでいかな。

「さあ、早く着なさい」

少し語気を強めたいい方に、彼女もやっと起き上り、パンティとスリッパだけを着た。

「さあ、ここに腰掛けて……。何か特別な事情でもあるのですか。さっき、あなたは泣いていましたね」

「実は、私が処女だと聞かされて、安心したのです」

「というと、あなたは自分で処女でないと思っていた……。男性と体の関係があったのですか」

「いいえ、そんなことはありません」

「それならどうして処女でないと……」

「友達にいたずらされたのです」

「それは以前にも伺いましたが、あなたは、そのイタズラの時に、処女膜を破られたのではないかと心配していた。ところが診察の結果、処女膜は完全であるということ嬉しかったというわけですね」

「はい。でも、もうあんないたずらは、こりごりです。そのために病気になるたりして」

「そうなんです。本当の男女間のセックスはもちろんの事、ペッティングや、あなたがされたようなことは、それ自体は決して悪いこ

とではありません。しかし、皮膚の表面とちがって、局部は抵抗力が弱いので、特に尿道は雑菌に弱く、すぐに炎症を起こします」

「炎症の時に、そのまま我慢すればどうなるでしょうか」

「あなたのような、膀胱、尿道炎の場合、運がよければ、細菌は尿に洗い流されて自然に治ることが多いでしょう。しかし、何しろ小用が近くなるのを恐れて、水分を飲むのを控えてしまうことが多いので、かえって逆効果となり、炎症は慢性化してしまうことがよくあります。それから、膣の方のいたずらでは粘膜にすり傷が一ぱいできます。幸い自浄作用といって、少々の細菌は自分の力で殺菌しますが、若し細菌が強かったり、自浄作用の弱い人は、やはり炎症を起こし、ひどい時は子宮を経て、腹膜炎になることも、ありますよ」

丁度その時、消毒器の水が沸騰してきた。「さあ、消毒ができたようですから、尿をとりますでしょうか」

私は消毒器のスイッチを切って、中からネラトン7号というカテーテル、試験管、ピンセット等を取り出し、これも消毒済のトレイ（器具を並べる盆）に並べた。ネラトンカテーテルというのは、やや硬いゴムで作った長さ三十センチ程のゴム管である。7号という

のは太さをあらわし、直径約4ミリである。号数の大きいもの程細くなるのである。一方の端は丸くなっており、先端から4ミリ位のところに側穴があり内腔に通じている、この丸い先の方を尿道を通して膀胱内にいれ、尿を取るわけである。今から行なおうとするような検査のために無菌的に採尿したい場合や膀胱が麻痺したり、前立腺肥大で尿が出なくなった場合に排尿させる目的に用いるのが目的である。

美保子嬢は再び診察台に横たわっていた。相変わらず同じ姿勢である。私は器械を診察台の横においた。

「ではもう一回、脚を開いて膝を立てて下さい。そうそう。そうですね、腰の下に何かいれましょう」

内科ではこういう時に不便である。婦人科の診察室では、こういう処置がやりやすい診察台（内診台）というものがあるので、その上にねかせれば万事OKである。何か適当なものとは見渡し、静脈注射の時に使う肘をのせる枕を見つけた。高さも丁度手頃である。「腰を、少し浮かせて下さい。台をいれますよ。はい、腰を落として。脚をもう少し開いて。そうそう。そのままの姿勢をつづけて下さい」

私はピンセットに滅菌した綿球をはさみ、

消毒液をつけた。外陰部の消毒をするわけである。これは、カテーテルに外陰部の細菌がつかないためと、外陰部の細菌をカテーテルで尿道に押し込まないためである。

大ていの患者は、この時にだんだんと脚を閉じてしまうので、仕事がいよいよもののである。ところが美保子嬢は身動き一つしない。むしろ逆に一層開いてくる感じである。ただ呼吸が次第に激しくなるのが感じられた。顔はやや紅潮している。話の上では承知していても、どんな事をされるのか、体験の上では未知であるものへの不安がそうさせるのである。……しかし、これは、その時私がそう思っただけの事であった。後から思いあわせれば、これは実に彼女のM・Tの状態のあらわれであったのだ。

さて、いよいよカテーテル挿入である。カテーテルの尿道内に入る部分には手で触れることは許されない。ピンセットでつまみ上げたカテーテルの先端をキシロカインビスカスという麻酔剤のどろっとした液の中に浸す。これは滑りをよくするためと、痛みをやわらげるためである。

「では、少し痛いかも知れませんが我慢して下さいね。我慢できない位痛ければそういつて下さい」

作業を開始する。

「痛いですか」

「いいえ」

静かに押してゆくと柔らかくつき当る感じがする。ここで尿道がゆるくカーブしているからである。ここを通過する時に少し痛みがある筈である。

「少し痛みますよ」

「はい」

という返事があるかないかに、ぐっと押し進めるのがコツである。ここでためらったりすると、かえって痛いのである。

「あーっ」

と叫び声をあげて、二、三回首を左右に振ったと思うと急に息づかいが激しくなった。そして、手をばたばたさせようとする。

「どうしたの？ ひどく痛かった？」

「いえ。痛いのは一寸ぴりっとしただけですけど……。もうおしまいですか」

「そう。もう痛くないでしょう」

カテーテルの一方からは、尿が流れはじめた。最初の少しを膿盆にすて、消毒した試験管にうける。きれいな淡黄色の液体が試験管に入ってゆく。八分目位までたまった時に、試験管に、これもやはり消毒したゴム栓をす。尿は膿盆の中に流れつづけている。五十分C Cもたまると、流れがおそくなって、やがて止まった。

「少し、いきんで下さい」

また少し流れ出る。この場合尿を膀胱内に残しておくことはよくない。私は左手を恥骨結合のすぐ上に当て、軽く押して見る。また少し出てきた。これでよし。

カテーテルを抜去するのは簡単である。更にもう一度、尿道口に消毒液を塗って採尿は終りである。

「はい、終りました」

私は、器具を片づけにかかった。診察室の一隅にある流し台に器具をいれ、消毒液を満たす。後を振り向くと、彼女は診察台に寝たままである。しかもカテーテル操作中と同じ姿勢をして。顔は横むきに壁の方へむけている。紅潮した口もとからは、はあはあと荒い息づかいがきこえ、両手は苦しうに胸のふくらみをおさえている。足先が少しびくびくとふるえているようである。

ショックでも起こしたかと、一瞬ギクリとした。体質によってはキシロカインを粘膜に塗っただけでショックを起こすことも何万回に一回かは有りうることである。それにしても顔色は赤い。さっと歩みよって脈搏を見てもショックとは逆に、よく緊張した脈が力強く打っている。一分間に約九十、やや頻脈。ようやく私の気は、しずまった。

「どうしました。苦しいの？ 痛いの？」

「ウーン、アー」

と低いうめき声を発しているだけである。

「もう検査は終りましたよ。さあ、起きて服を着なさい」

「先生」

と叫んでガバと起き上ると、診察台に腰かけたまま、いきなり私に抱きついてきた。

「先生、私もう処女でなくなったのね」

そういったかと思うと、私の白衣の丁度みぞおちのあたりに顔を埋めて、肩で激しく息をしている。

「え？」

私は一瞬どきりとした。この娘、何をいい出すのか。私は彼女を押しつけながら

「あなたは何か感じがいらしていますね。カテーテルで処女膜を破ったとも思っているのですか」

「……そうじゃないんですか」

「カテーテルは尿道の方であって、処女膜や腔には無関係です」

「でも、一瞬チクツと痛……」

「それは、尿道がカブっているために、カテーテルがつかえるからです。医師は、患者さんの体を不必要に傷つけるようなことはありません。安心なさい。さあ、服を着て。今日の検査の結果は、三日後にわかりますからその頃もう一度来て下さい」

流石に、私の語気におされてか、今度は、素直に衣服をつけ始めた。そして一礼をする

と無言のまま診察室を出ていった。

以上が彼女、高橋美保子の第二回の診察のてん末である。しかし、この日、昼飯をとりながら、私は彼女の不思議な行動をいろいろと考えすぎたので一体何を食べたのかわからないくらいであった。露出狂なのだろうか。それとも私に何か下心があつての行動なのだろうか。それにしても、カテーテル操作によるあの興奮状態は一体何を意味するのだろうか。三日後には、もう一度来院することになっている。今度こそは、じっくりと観察をしよう。対話もしてみよう。何か下心があるのだったら大変なことになりかねない。というのは、某産婦人科の医院で若い娘を診察したら、その兄という男から「俺の妹の下着を脱がせていたずらをした」といってすぐまされた事件があったからである。婦人科診察に、下着をとらせるのは当然のことであって、むしろそのような診察をしない方がおかしいのであるのだ。因縁をつけようと思えばいくらでもつけられるのが医者の仕事である。こんな手合だったら大変だ、とも考えたりした。しかし、変だとは思ったが、まそひすむす・てらぶていくす、とは思いつかなかった。

(未完)



孤独から遁れて

辻村

隆

孤独から遁れて

神戸近郊に住む伊藤圭子さんには、非常に悪いことをした思いで、苦い悔恨にしめつけられている。彼女が二月号の読者通信欄で、SMプレイの願望を、私や同好者の方々に呼びかけられ、編集部気付の私への私信が回送されてきた時、度々言うように娘の結婚のことでテンヤワンの折だったから、返事も出さずその俚になっていた処、半月許りして、又、綿々たるお便りを頂き、つい多忙の余りかねて数度、人を介して連絡のあった、兵庫県飾磨市のU君を簡単に葉書で紹介したのであった。

結果はサンザンで、彼女が「SMプレイへの反省」という手記で、四月号の奇クサロンに発表された通りである。私の紹介だと言わないで欲しいと念を押しておいたため、彼女は編集部の紹介という風にして書いたのがイケなくて、先日も鹿児島あたりのファンの方から、奇クはそれぞれの紹介の労をとらないくせに、伊藤圭子さんとプレイした、S強烈生(U君)という男性には紹介したのかと、えらくお叱りをいただいたそうである。どこへどう波紋が拡がるか知れたものでないと、私の一言一句が妙なところで引っ掛か

ってしまつて苦笑している。

この事実を究明するため、U君に電話して大阪のキタの喫茶店まで呼び出し、いろいろと詰問したら、平身低頭でアタマを掻いて、つい若気のいたりで逸つてしまい、すぐ後悔しているんだと、もう一度、彼女との仲のとりなしを懸命に頼んでくる始末であった。

私はU君のことを一概に笑えない気持ちになった。有馬の温泉旅館の密室めいたムンムンする部屋で、若い男と女が、一対一になったならば、或いはU君ならずとも、ついフラフラとして、誘惑にかられるのは当然であった

かも知れない。彼は伊藤圭子から連絡があったからというもの、毎夜碌々眠れぬ夜が続いて、床につくと、SMプレイのあれこれの幻想にとり憑かれて、一日千秋の思いで待ち焦れたそうである。それが、いざとなるとすっかりアガってしまって、思いもかけぬカタストロフの無惨な結末となった次第であった。

(四月号、伊藤圭子『SMプレイ』への反省参照)

文句をいうつもりで会ったのが、慰めるような結果になり、果ては今ひとたびのデートを頼まれて、割り切れぬ気持ちで分かれたのがオチである。

U君の弁解を兼ねて伊藤圭子の住むマンション宛に手紙を書いたのが二月の下旬――。

折返し三日後に速達が届く。普通便でよいものを、速達にしたところに、彼女の思いつめた私への気持が感じられて、私はやっと重い腰を上げる気になったのである。神戸のポートタワーを背景にとった一葉のフォトが私の手許にあった。やや下膨れ、おむすび顔のごく平凡なOLタイプの女性である。彼女の手紙に同封してあった、この一葉のフォトの顔を頼りに、阪急電車六甲駅で会うことを約束。又ぞろ同好者の羨望と軽い嫉視を買うか

かも知れない――そんな想念がフト私の心をよぎった。

× × ×

万国博開催をあと数日に控え、何となく街は慌しく、ハイウェイも国道も車の浪にどったがえしている。停滞のうんざりさを考え、折からの鬱陶しい雨空に、車をあきらめて大阪梅田より阪急電車を利用することにした。特急が停車しないので、西宮北口で各駅停車に乗換え、揺られてゆく。荷物になるので、愛用の黒の革袋には、カメラ、ストロボと数



条の細縄を押し込んできただけであった。ウィークデーの火曜日だから、恐らく伊藤圭子は会社を休むに違いなかった。

約束は午後一時だというのに、電車の都合で、約十五分早く、六甲駅に到着する。

ホームに降り立つと、待合ベンチに坐っていた女性が、つと立上って近づいてきた。軽く頭を下げて、

「あのう……」

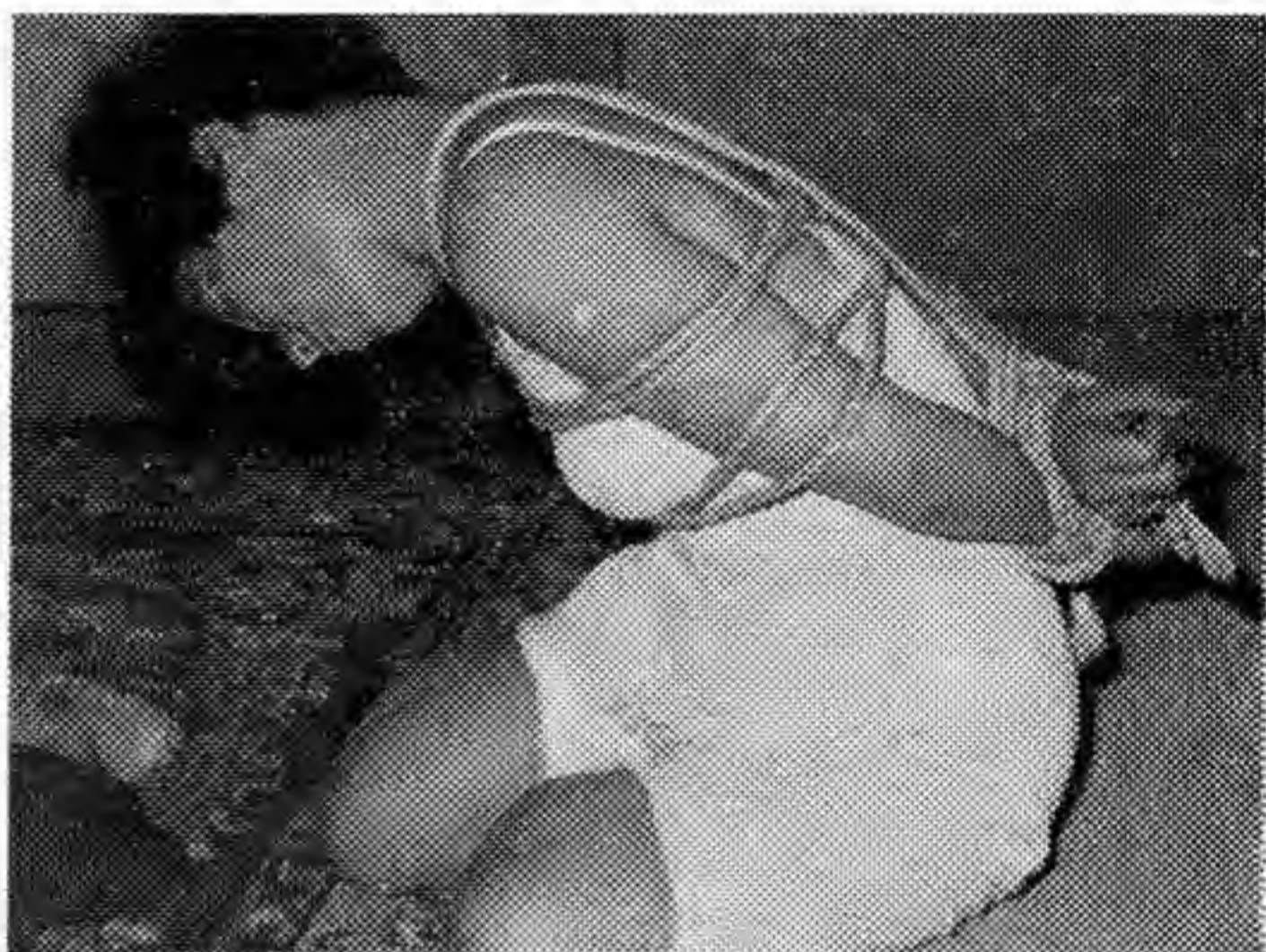
と口ごもる。

「伊藤さんですね」

紋切型の口上に、大きくうなずいて、パツと彼女の頬に紅葉が散った。

褐色のレインコートに身を包み、防寒ブーツを履いた、いたって平凡な雨の日の通勤タイプであった。頭髪は短かめに切って、無雑作に七三に分け、白粉気もなさそうな素顔に近い容貌で、これがマンションに独り住まいするタイプピストかと、まったく予想もしなかった素朴なタイプに、送ってきたポートタワーでのフォトの先入観念はあったものの、私は思いがけない意外さに、うたれたのであった。悪くいえば、六甲の雰囲気にもふさわしくない野暮ったさである。

風の吹き抜ける山麓のホームに、ぼんやり



佇んでいても始まらないが、初対面のせいもあるうが、彼女は一言も発せず、うつむき加減に、ハンドバッグの革紐をいじっていた。私の発言を待っているのだろうか。

「お食事は？」

「ハイ、済ませてきました」

「どうしましょう。神戸へ出ましようか？それとも大阪がいい？」

「わたくし、どちらでも構いません。でも何か思いつめた口調に、

「でも、何かあるのですか？」

「あ、う、厚かましいでしょうか。わたくし辻村さんのお宅へお伺いしてはいけないでしょうか？」

「えッ、これから？」

「ハイ、お差支えなかったら」

「どうしてなんです」

「ハントなさった方々のフオトを拝見させていただいたり、いろいろ、お話を伺いたいのです。御迷惑でしょうか？」

「いや、迷惑じゃないけど」といったものの、しからば、プレイの方は一体どうなったというのだろうか。

折から入って来た梅田行の電車に、私達は兎も角、乗り込んだ。数分ならずして忽ち逆戻りである。時計を覗くと恰度一時。デートの約束の時間に、私達はあっさりと出会って再び大阪へと目指していた。

車中で余り立入っても喋れないし、どこか喫茶店へでも行き、話はそれからだ。

マンモスホーム梅田駅に到着して、地下へ潜れば梅田三番街の、フランスムードの繡酒なプロムナードが華やかに開ける。

地下に川が流れ、キラキラとコインが水底に沈んでいる。人は、これをテレビの泉と呼ぶ。甘いラテンの調べが何処からともなく流れ、愉しげに頬をすり寄せて語らう若者の群れが、円型の透明硝子ごしにのぞける暗い五彩にいろどられた洒落た喫茶店に、私達も亦吸いこまれるように引寄せられていった。

「すごいいい雰囲気ですわね。噂にきいていましたが、来るのは始めてです」

伊藤圭子は、サイケ調めいた嶄新なムードに酔ったかのように、しきりに硝子ごしに川の流れに集う若者の群れを目で追っていた。

「ロマンチックなムードですわ。何か羨ましいみたい……」

そんな羨望めいた呟きに、私はフト伊藤圭子の孤独さを感じた。この娘はどうして孤独なのだろう。確か二十六才ということだったが、それまでに恋人の一人もなかったのだろうか。何が彼女を孤独にさせるのか――。

この一見、極く平凡に見えるOLの彼女に何か人に言えぬ秘密があるのではなからうか――。フトそんな疑問を感じて、いきなり核心に触れても警戒するかも知れぬので、さりげなく遠廻しにきいてみる。

「伊藤さんは確か和歌山県だったとか書いて

おられましたね」

「ええ、和歌山市から数キロ離れた、海南市なんです」

「じゃあ、神戸までの通勤は大変だったでしょう。どうして、そんな遠くへ就職したのです？」

「おなじ英文タイプのお仕事でも、和歌山市内の会社にくらべて、神戸の外人系の貿易商社は、ぐんと待遇がいいからですわ」

「でもマンションでの一人暮らしでは、反って高くつくんじゃないんですか」

「結局、余り変わりませんわね。でも海南の母の家には、いたくないんです」

「どうして？」

私の矢継早やの質問に、伊藤圭子はフツと軽い警戒の色を泛かべて黙ってしまった。何かいいたくない理由でもあるらしい。

一寸気拙い雰囲気の流れで、私はコーヒを啜って、煙草に火をつけて啜える。

一見平凡そうに見える、この女性の、シンは案外しっかりしているのかも知れない。私は話題を変える。彼女は自身のプライバシーのことより、初対面の私にプレイとしての対象しか考えていないように思われたからである。会っていきなりプライバシーに立入るの

は、たしかにまずい手段でもあった。

「貴女の読者通信で、かなり反響があったそうですね。編集部の話では八通ぐらい、貴女を望んできたとかいってましたよ。しかし、編集部としては仲介とか紹介の労をとらないのが立前ですから仕方ありませんけどね」

「でも、私宛に一人も呼び掛けの便り掲載されていませんわ。どうしてでしょう」

「別段他愛があるわけじゃないが、何しろ毎月百通近く寄せられる読者の便りですから、偶然にそうなったのでしょう」

「それならいいんですけど、私みたいな女、皆様興味ないのかしらと思って、ガッカリしていたのですわ。でも誌上だけのお便りの交換じゃつまりませんわね」

「私がうっかり紹介したU君にガッカリしたそうで、何か悪いことしたと思っています」

「あの時カッとして、あんなお便りを編集部に書きましたけど、あれを読まれたUさんがきつと怒っていらっしやると思いますわ。日が経つてくると、男としてそれが当たり前みたいに見えるのです。でも今更もう、お目にかかる気にもなれませんし」

伊藤圭子は、一人暮らしのマンションの生活が、ともすれば自由に走れ過ぎる環境のた



め反って必要以上に、我が身を守ることによって、自分の殻の中に閉じ籠っているように思えた。一旦羽目を外せば、底無し沼に陥込んでゆくような、我が身の自制心がきかなくなることを懼れているようでもある。それが、年頃の年令の、何ということのない焦りと相俟って、いよいよ孤独の世界へと追いつ

やっているようであった。

恋人をつくり、気軽なボーイフレンドと青春を謳歌したい癖に、マンションの独り暮らしにつけ込まれた時、二十六才の今日まで、大切に持ちつづけてきた自分を、見失ってしまったのが怖かったのではなからうか。

それでいて、秘かに胚胎した、Mの快虐へのアバンチュールを求めて、大胆にも読者通信へ呼びかけたり、私へも再度に亘って私信をよこしてくる、不可思議な、不安定な心境でもあったのである。

折角紹介してやったU君とのデートでプレイ半ばにして逃げ出した心理も、追及してみればSMプレイを、余りにも幻想的に美化し男女のSMプレイというものを、相手の意志を無視し、自分本位のM性のみをみたとしたらそれでよいという甘い考えに立脚した行動のようであった。

初体験の彼女に、より以上のものを求めるのは酷であるとしても、結果的にはそうなることぐらい、二十六才の年令をもってして考えれば分かり過ぎるくらいのことであった。

煎じつめれば、SMプレイといっても、所詮はセックスの前戯的なものに繋るのであれば、幾分逸ったとはいえ、U君の行為を無下



に非難も出来ないのは、そんな単純な綺麗ごとでないことを、私自身一番よく知っているからである。

愛に性急の余り、新婚初夜の新郎が、つい逸り立って失敗するのにどこか似ていた。数度のデートで、或いは、よきSMの対象とな

り得たかも知れないのにとすると、伊藤圭子が二十六才のこの年まで、処女を保持し続けたのならとも角、そうでないとすれば、孤独から遁れ得るチャンスを目から放棄したようにも思えるのである。しかし、これは私の憶測に過ぎない。勇を鼓して、読者通信に一筆をのせた彼女の心裏には、私の思いも及ばぬ複雑な女心が、秘められているのかも知れなかった。

「あとう、わたくし先程お願いしたこと、ダメでしょうか？」

おずおずと彼女は問いかける。

「私の家に来ること？」

「ええ」

「差支えないけど、あなたも変わった人ですね。夫婦プレイの方や、男性の同好者の人は別だけど、カメラ・ハントの女性で、私の家への訪問を希んだのは貴女が始めてですよ」「奥様に悪いでしょうか？」

「そんなことを気にする家内じゃありませんが、フォト撮るのでしょう。プレイの……」

「辻村さんのお家でもいいんですよ」

「そりゃまあ、構わないけど——」

言葉を濁し乍ら、その時、私はフト伊藤圭子のずるさに気づいたのである。家内のいる



私宅でのプレイが、ホテルの密室でのプレイにくらべて、遥かに安全であることに思いをめぐらしての希望であることを――。

若い女性と一対一で、座敷の一室でプレイすれば、如何にももの分かりのよい荆妻といえども、そこは女、やはり気掛かりになって、耳をすましたくもなる心理である。私の心は大いにブレーキがかかり、暴走することはなかに違いなかった。一つには、日頃のコレクションをみられ、そして安全度の高い雰囲気プレイを要望している……。これは仲々、一筋縄でゆかぬ怜悯な女性だぞと外見の野暮ったさに引き換え、私は内心、心をしめざるを得なかった。外資系の会社の英文タイプス

トを勤めるからには、それ相当の、頭の働きたと、知能指数の高さがなければ、到底つとまらない筈である。確かに人間は、外見だけですべてを判断してはならない。

伊藤圭子の場合、その怜悯さと、賢さが、反って彼女を孤独へと追いやっていていることを恐らく彼女自身は気づいてはいなかった。世の中にバカな女ほど可愛いというのは、正にその心理をついていて妙であった。

少々、チョンでもパーでも、どことなく可愛い女というものは、男性にとって魅力がある。マリリンモンローの圧倒的だった魅力もどことなく一本芯の抜けた、パーのよさであり、中年男の琴線にくすぐる奥村千代の魅力も、甘言にコロリと参りそうな、何となく脆い、やや白痴的な可愛さがあるからであろう。

伊藤圭子は、男心にアツピールするものを持っていない。それは男性を、たえず警戒する眼で見ると、さかしさがそうさせたのかも知れない。女さかしうして牛売り損なう――そんな格言

が、フト浮かぶ奇妙な、よそよそしさであった。それが、やや婚期を逸した今まで、独身でいたという、一つの根拠のようにも思えるのであった。

喫茶店で向かい合っていて、優しい女性と何とはなし窮屈に感じる女性とがある。彼女は、ややその後者に属していた。その癖、トレビの泉の淵に群がる若いカップルに、羨望の眼を送るところに、彼女自身、どうしようもない、偏重した性格が潜んでいた。

「じゃあ、兎も角、家内に家の都合をきいてみましょう。多分いいとは思いますがね」
重苦しい雰囲気打破するように立上ると私は受話器に歩く。

息子は会社勤め、末娘は高校で、留守は家内一人きりだから、今更きく迄もないが、突然前触れもなく連れ帰った時の、家内の反応を考えて、ダイヤルを廻す。今日のハントの件は、あらかじめ家を出る時、告げてあるから、女性同伴で戻ってもどうってこともないが、そこは妻権尊重的一幕である。

手短かに斯々如々とわけを告げると、妙なもので、反って女心は安心するのか、ホテル代が助かってええやないのと快諾である。夫が若い女性とアベックホテルで何をしている

か分からないのより、遥かに、気がラクらしい。

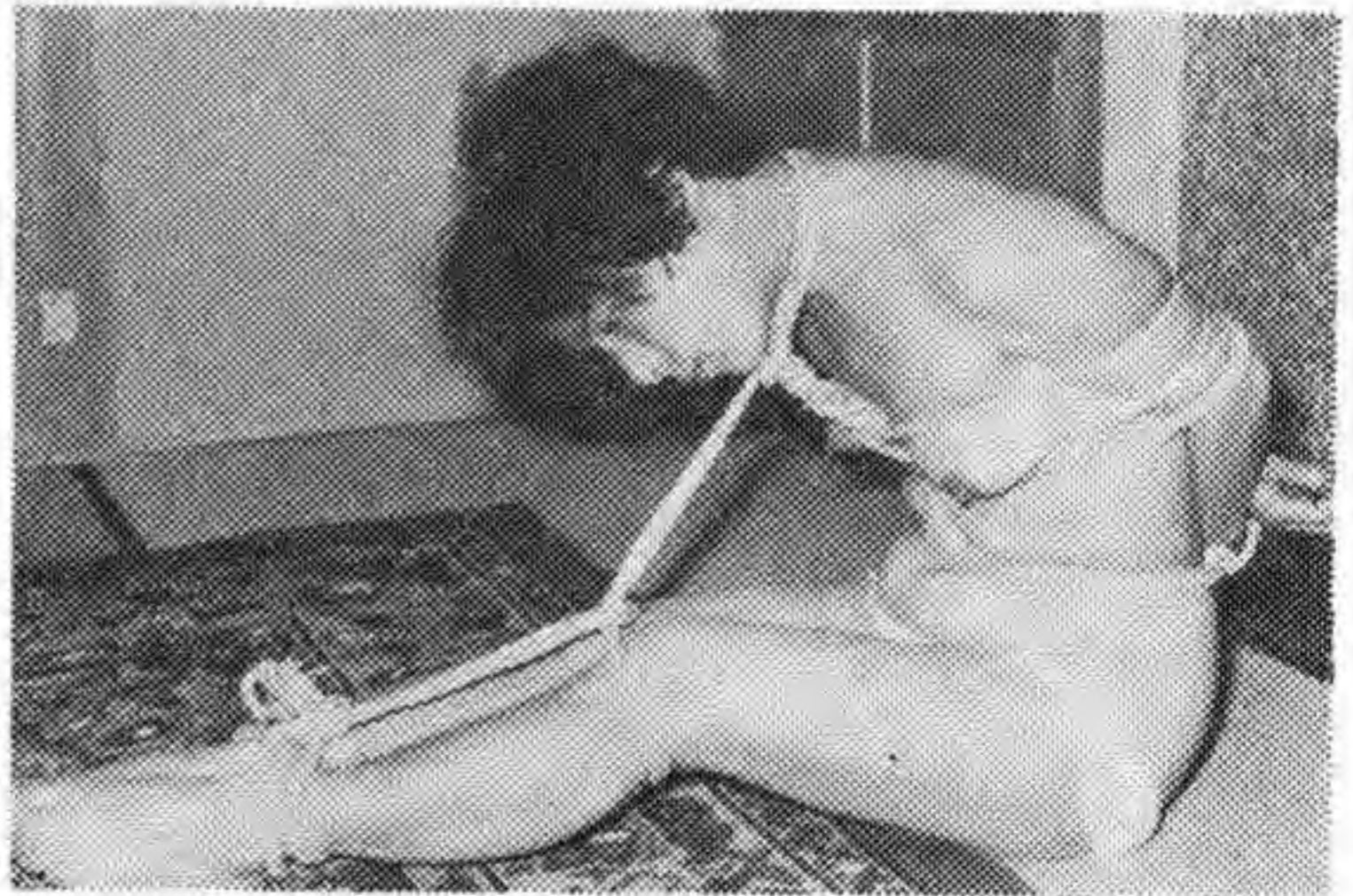
二十数年の猟奇探求で、それが唯一の道楽と今更、半ばあきらめてはいるものの、女房にとっては、悩みは果てなしというのが、案外正直な心境かも知れない。自分でいうのもヘンだけど、それだけに、私は人一倍の愛妻家であり、恐妻家でもある。好きなことをやっつての恐妻家も可笑しいが、特定の一人の女性に、いつまでも心を残さないプレイボーイ精神が、妻にとって、唯一の救いであったのだ。そうした妻の心の反響が、私のハント女性に、毎月の如く変わってゆく一つの証左でもあった。

夕食は？ と問う妻に、そこまで気を使わなくてもいいさと電話を切って、席に戻る。

「じゃあウチへ行きましょう、いいそうだから——」

「無理いつて済みません。でも本当にいいのかしら、何なら、この近くでも構いませんかよ」

いいという反対の言葉が口をついて出ている。まるで私の心を試そうとしているのか——。(好きなようにしろ!)と怒鳴りつけなくなる気持をぐっと押えて、私は伝票を掴



むと立上った。

× × ×

果たしてどの程度、プレイに、フオートに協力してくれるか分からない女性に、秘画をみせるのは勿体ない気がする。

氷山の一角——。謂わば奇クのハントに掲載されたような、無難なフオートや、東映の映

画で緊縛指導したフオートなどみせてお茶を濁していた。

たしかに伊藤圭子は不満げな面持だった。しかし、初めて会った私への遠慮と、女の口から求めるハシタなさがブレーキとなって、それ以上のものを求めることを躊躇している様であった。

家内が紅茶を運んできて私を目顔で呼ぶ。立上って部屋を出ると、

「ツンとした娘ですのね。どこの人？」

ときいてくる。思いはおなじなのかと、かいつまんで話すと、

「それで婚期おくれってるんやわ。やっぱり女は愛嬌ないとあきませんねえ」

と呟き、その癖、野暮ったい彼女に、内心ほっとしたような顔になって出ていった。

どのハントの女性にも、褒めすぎて書く辻村隆は、フェミニストで、女性をすべて美化するといわれているのに、どうしたことか、私は伊藤圭子に対して、よからぬ印象ばかりを書き続けてきたようである。少なくともその時点においては、私は伊藤圭子よりそうした印象しか受けなかったのは事実である。

それも、これも、すべてが私の推考や憶測であれば、それにこしたことはない。

しかし、数十分ならずして、それが私の大きな誤算であることを認めずにはいられなかった。初対面の私に対し、一見そうした態度をとった彼女の心境が、緊張と不安と、羞恥の前触れの、己れの心との相剋であることに気づかなかった、私は、確かに迂濶でもあった。

女心を充分に知悉したつもりが、案外デリケートな女心を解さなかったようであった。コレクションを見終わった時、彼女は自分には眩くように、

「怖かったです、男の人って誰でも……」

でも辻村さんは、私の無理な願いを聞き入れて下さって、初めての私を、快く家に連れてきて下さいました。辻村さんのプライバシーの秘密が、すべて私に分かるのを承知で。ハントで読む辻村さんって、どんなスゴイ方かと思っていたのです。それだけにお会いしたい反面、懼れていたのです。御免なさい」

「いや、いいんだよ。説明の手間が省けたからね」

「私、白状します。独身でいますけど、本当は処女性を喪っているんです」

キツとした顔付になって彼女は判っきりといった。



「どうってことないよ、私には関係のないことだもの。どうしてそんな告白をするの？」

「きいて下さいますか？」

「ああ、いいよ」

「父は戦死して、戦後母一人で、私達三人の娘を育ててくれたのです。私は三人姉妹の末っ娘でしたが、姉が養子を迎えて、やっと家

庭が明るくなったと思ったのも束の間、それは出来心と思いますが、夏の寝苦しい夜中、義兄が私の部屋に忍び込んできたのです。

姉が勤める、或る公共団体の慰安の夏季旅行で、二泊三日で伊豆、伊東方面に出掛けた留守が、義兄をフト悪魔にしたのだと思います。ぐっすり熟睡していた私が、フトうなされたように胸苦しくなって、眼を醒ました時は、もう抜きさしならぬ状態でした。必死に抵抗し、声を立てようとしたのですが、タオルケットを頭にかぶせられて、ぐっと押えつけられ、息もたえだえの苦しさには抵抗をやめました。母の心配や、姉夫婦のいさかきを懼れて、私は黙っていました。もう一緒に生活するおどましさに、短大時代のお友達の紹介で、職場を遠い神戸に変えたのです。たった一回きりのあやまちでも、私の胸には生涯きえぬ深いしこりが残りました。男性不信はその時からです」

ホッと吐息して伊藤圭子は顔を赤らめた。私は暗然とした気持で、唯うなずくのみであった。彼女の瞳に、始めて女らしい羞恥が浮かび上り、ささやかなまめかしさが頬をよぎり去った。彼女は尚も言葉をつづける。

「義兄は一時のあやまちをスゴく悔いて、わ

わざわざ神戸の私の職場を訪れ、どのようにでも気の済むようにしてくれと頭を下げましたが、幾ら謝られても、一旦失った私の処女性は二度と戻りません。決して金であがなうつもりではないがとって、姉に内緒で、どう工面したのか二十万円の札束を、生活のたしにと無理矢理、置いて帰りました。しかし帰りがけに、義兄がフト洩らした一言が私の胸につきささったのです。(圭ちゃんが、あの本のファンとは知らなかったよ) って。びっくりして(見たのネッ)と詰問すると、弱々しくうなずいて(ウン、男には興味あるものね、結婚して以来、買わないけど、ボクも以前、数度買ったことがあるんだよ) といって肩をすくめて出てゆきました。奇クを始め風奇や裏窓を、麗々しく本箱の棚にうかつにも並べておいた私の失態でした。それが義兄を刺激したのか、姉不在の淋しさか、それは分かりません。でも女だてらにこうした本をよむ私を、禦し易いと思ったのじゃないかと思えるのです」

返事のしようもなく、私は重苦しげな表情を懸命に保持し、もっともらしくうなずいていた。無言は雄弁に勝る——。この際、チヨカチヨカと言葉を挟むより、重厚に構えてい

た方が、彼女は話し易いのではないかと思えた。

「女心って、とても微妙なんです。肩を落として帰っていった義兄が、急に慕わしくなりトボトボと日暮れの路上を遠のいてゆく義兄の後ろ姿を、私はアルミサッシの窓越しに、じっと涙を浮かべて見送っていました。あれ以来、一切便りもなく、あの忌わしいことも家族中、誰一人、知らずに済みました。そして、姉は今年の正月、男の子を産みまして円満だそうです。円満だという噂をきくにつけ愛憎交々に、私は取り残された孤独をかみしめるようになりました。孤独さに耐え切れなくなつて、お仕事の帰り途、元町界隈を独りで歩き廻り、いっそ苦い酒でも飲んでみようかと思つても、独りぼっちではその勇氣もなく、そうかといって、社内の男性に誘われても、又ぞろ二の舞を踏まないかと警戒心が先に立ち、今では、まるで男嫌いのようにすらいわれています。そして私は、ますます孤独に陥ってゆくのです。どうしようもない佗しい心に、ついフラフラと、あんな便りを奇クに書いてみたのです。辻村さんなら分かつてもらえそうに思いましたから、いいオジサマとして……。けれど会っては下さらずUさん



を紹介され、怖々出掛けたら、やっぱり体を求められ、こんな素姓の分からぬ人に身を任すくらいなら、会社でいつも親切にしてくれ、UやKの方がいいぞと、突飛な妄想に走って遁げ出したのです。ああ、すっかりおしゃべりして、何だか胸がスツとして

サバサバしましたわ。ハントにありの伝書いて下さっても結構ですよ、何もかも……」

語り終わって、彼女は羞らしいの笑顔を泛かべた。書いていいという口裏には、或いは義兄が読むかも知れないという、そこはかとなき思慕の情を私は、ありありと感じた。始めての男が忘れられないという鉄則からすれば姉の夫に対し、彼女はどのようなでもないジレンマに苦しみつつ、今も尚、そっと深い慕情を抱いていることを彼女の言外に感じとり、憎しみが愛に変わった時、最早、孤独の陥穽に嵌り込まざるを得なかったその心情に、私は急速に哀れさを覚え始めたのであった。内潜するM性と共に思慕が醗酵して、露悪的な観念に走り、それが、読者通信に繋がって、念願が実現したという次第であろうか。

「苦しんだね」

「分かって下さる？」

「分かるよ」

「辻村さんのお嬢さん、お二人共、結婚なさったそうですけど、おいくつで？」

「昭和二十二年生まれと二十三年生まれの年子だよ」

「お若いのね。私なんか次の姉が、やっこの春、婚約したの、お見合で……。でも姉は



初婚ですけど、相手は再婚よ。現実はきびしいですよ。働かねばやっていけない私達の家計ですもの……。二番目の姉は私と年子でひとつ上なの。私だって早く身をかためたいと思いましたが。でも姉をさしおいて出来ななし、誰も余り構ってくれないもの、自分で探すより手がないんです。そのうち、そのうちと思ううち、年ばかりとって、段々あせってくるんです」

「孤独の殻を破って、朗らかになって御覧、年齢なんか問題じゃない。きっと男性の方から求めてくるよ」

「自分で自分が情なくなるんです。私の職場は、かなり派手なんです。その中でパツとしないのは私だけ。私より年下の方が、どんな相手を見つけて結婚して行くんです。堪まらないんですよ、この気持」

淋しい、そのくせ焦立たしい顔付で、伊藤圭子は、半ば投げやりのように言うのであった。ハイミスの嘆き、短大卒という教養からくる選り好み——それが、いつしか彼女の婚期を自分自身で遅らせているようであった。

彼女の長い告白で、思いがけぬ時が流れていった。いつしか私の胸底には、伊藤圭子に対する先入観念が払拭されて、同情を混えた愛憐の念が芽生えつつあった。

「いい工合に、部屋が暖まって来たよ。その気になれる？」

「誰も来ません？」

「家内は茶の間で、この七月に産れる予定の長女の赤ん坊の、初孫の顔を想像しながら、ベビー服を編んでるよ。心得えているから、誰も離れ座敷までは入って来ない。大丈夫だよ」



「急に羞ずかしくなってきたわ、いざとなると……。男の人の前でハダカになるの、生まれて始めてですもの」

「洋間の方へでも遠慮してようか」

「いいんです。いっそ、辻村さんが荒々しく私を、暴力的に振るまって、ぬがせて下さった方が……」

「やり易いというんだね」

彼女はコックリとうなずく。話し終わった今、急激に初期の目的の、被虐への願望が目覚めてきたのであろう。私が無理矢理、脱がせてゆくことによって、それが例え馴れ合いの行為であったとしても、彼女の本能をゆさぶる心には、暴力によって己むを得ず脱がされ、いたぶられてゆくという、被虐のもっと

もな心理過程が働いていた。

「襲われる女——そんなカットを撮れば面白いんじゃないかしら」

既に被虐に転換した心は、彼女にこんな言葉する吐かせるのであった。

「いいんだね。じゃあ三脚にカメラを据えてレリーズでとってゆくよ」

「暴れてもいい？」

「ああ、ウンと真剣に暴れて御覧。その方が私もやり甲斐がある」

承知万端のプレイ劇のポイント・マイムの始まりである。家だから、道具立ては揃っていて都合がいい。二台のカメラに、それぞれストロボと長尺レリーズを装填する。一方のカメラは電動捲上げだから、近づけて連続シンがとれるし、もう一台は広角を使用することにした。

流石に彼女の表情に、さっと緊張の色が流れた。肚を決めたものの、火照った頬を押えるようにして、気羞かしげに媚を含んだ瞳が

私の手許をみつめている。微かに覗ける皓歯が怯えたように震えていた。

「いいかい、じゃあ、やるよ」

笑顔で近づいて、彼女の前に立ちはだかると、矢庭に濃紅の丸首セーターをぬがしにかかる。それが擬態か本気か、圭子はいいやとはげしく体をゆすって拒み、その癖、両手はセーターの脱ぎ易いように、高く挙げていた。セーターの下、薄い肌着のボタンをはずしにかかる私の手の感触に、むっちりした胸のふくらみが、ありありと伝わってくる。身悶えする圭子を背後から羽搔いじめにするようにして、手早く一条の縄を胸にかけてゆく。

「いや、いや、よして……」

弱々しくあらがう声が、彼女の羞恥と、初体験のプレイに対する、みずからに云い聞かせる最後通牒でもあるかのように、私の耳に響いた。

心では切々とプレイの快虐を求めながら、それが自分の意志によるものではなく、S的男性によって無理矢理、虐げられてゆく——そうした場面をひたすらに設定して、彼女自身の心に納得させている素振りであった。

私の懷ろから遁れようとする彼女を押えつ

け、私も亦、彼女の演技に合わせて、それらしく、暴力めいたものをふるわねばならなかった。そうした緊縛への道程が、圭子自身の心を陶醉へと導いてゆく最良の手段のように思われた。

無理に振じ上げる迄もなく、彼女の両手は私の意のなりに背後に回っていた。いきなり全裸にしてもよかったが、繊細な女心を考慮して、最初の段階はシュミーズの上から上半身を後手に縛り上げる。紅潮した頬が微かに震えて、彼女は犇と縛り上げられた、後手の縄目、胸のいましめの味を、かみしめているようであった。

「どこか痛い？」

「……………」

無言で首を振る。

「ほんの序の口だからね。これから、じわじわと虐めてやるから……………」

わざとそんな口をききながら髪の毛を掴んで、顔をゆさぶり、力をこめて引っ張って体を倒す。うっとりとして被虐の快感に酔ったかのように、彼女は一言も発しない。唯、微かな甘い吐息がハッハッと洩れ、しきりに唇を舌舐めずりして、鼻を鳴らした。生唾をのみ込むようにしているのは、激しく襲ってきた、

未知への被虐の想念に、のどが哽れ果てているせいかも知れなかった。

横倒しになった俣縄目から盛り上ったふくらみが、大きく、波打っている。圭子は、今、被虐の淡い願望が

叶ったものの、抱きつづけてきた想念や幻想と、判っきり我が身を束縛している現実との谷間に立って、極度の緊張と不安と、未知の快虐の悦楽への限界に途惑っているかのようであった。

そうした不安定な彼女の浪うつ心を充分考慮に入れて、私は彼女にのしかかってゆく。シュミーズの上から、ふくらみに触れるとピクツとした肌の動揺を指にじかに感じて、それが、私の情念のほむらに油をそそぎかけてゆく。ねじ上げるようにして驚嘆みにする、ああと大きく呻いて、圭子は俄破と軀をのけぞらせた。

「あっ、いやッ、よして…………いや、それだけは……………」



オーバーな表現でのうち、そのくせ、めらめらと女のなまめかしさが顔一杯に燃え上って、呻きが、悦虐の境地に拍車をかけていった。

スラリと伸びた両足を抱きかかえるようにして、手許の縄で素早く足首を揃えて縛ると俯伏せにさせて、両手首の縄にぐいと引っ張って連結させる。緊縛につれて、女の悦虐の度合が比例して昂まってゆくのを、私は眼下に、ありありとみつめていた。

シュミーズ、パンティ着用、こうしたごくありふれた縛りなど、真実って私の心を動かすには至らなかった。唯、伊藤圭子が、やや潔癖めいた女性だけに、S強烈生なみに逸り立ったように思われてはシャクである。



私たるもの、表面は悠々迫らず構えていなければならぬ。ストロボを光らせ、心ならずもこの着衣の緊縛をカメラに納めてゆく。さて、縛ったものの、この先、もうどうしようもないポーズであった。いさぎよく脱いでもらうか、パントマイムを続行して、脱がして

ゆくか――。

私はフト心理作戦をとる気になってみた。この俣しばらく放置しておいて、彼女が果たして、どのような反応を示すかを確かめてみたかったのである。

私は、おもむろに数歩引退って、部屋の傍らに押しやった座敷机に向かい、煙草に火をつける。ファンターの栓を抜き、瓶ごとラッパのみにゴボゴボと液体を口中に流し込んでいった。

二分、三分――五分。縛られて転がっている圭子の瞳に、やがて、ありありと不審の衝動の色が浮かんできた。

黙ってみつめている私に、物言いたげに口を動かしたが、自分からは口をきらず、何か私が言うのを待ちうけているようであった。根負けしたのか、圭子は心持ち怒りをこめた調子で、

「どうしたのです、いつまでもこうしてほっておいて。私……」

「ああ、どうもシニエーズをつけた俣じゃ気分がのらなくてね。どうしようかと思っっているのさ」

「変ですわ。いつもハントなさる辻村さんらしくないですね。私、脱がないといった覚

えありませんわ。どうしてそんなこと仰有るの？」

「でも、縛るとき、しきりに、イヤ、イヤといったじゃない。だから、これ以上、脱がせて、怒って帰られたんじゃと、勝手に気を廻してね」

「そんな意味じゃ……」

分からないのかと、圭子は一寸恨めし気な表情で、じっと私をみつめた。気を変えようにファンターを一本、栓を抜くと瓶をもって立上り、打ち伏している圭子に近づく。

「フフ、分かっているんだよ。一寸いじめてみたくなってるさ。さあ、のませてあげよう。ノドが渴いたんだろう」

「ウーン、意地悪……。私、どうしようかと思いましたが。抱いてのませて……」

パツと表情を輝かせて、甘える口調で私を見上げる。圭子自身、意識せぬうちに、堅い心の鎧を脱いでいた。縛った俣で、肩をかかえて半身を抱き起こし、ファンターの瓶を口に傾けてやると、彼女はゴクゴクとのどをならして旨そうにのんでいった。唇の端から洩れた液汁が、あごを伝わってポトポトとシニエーズを濡らす。

「ああ、おいしかった。スゴくノド渴いちゃ

って、どうしてかしら」

「昂奮していたからさ」

「始めてなの、こんなこと……」

「脱がしてやろうか？」

黙ってうるんだ瞳がうなずく。素早く縄を
といていって一分もかからない。

私が脱がすまでもなく、彼女は自から肩か
ら外して、シュミーズをずり下げていった。

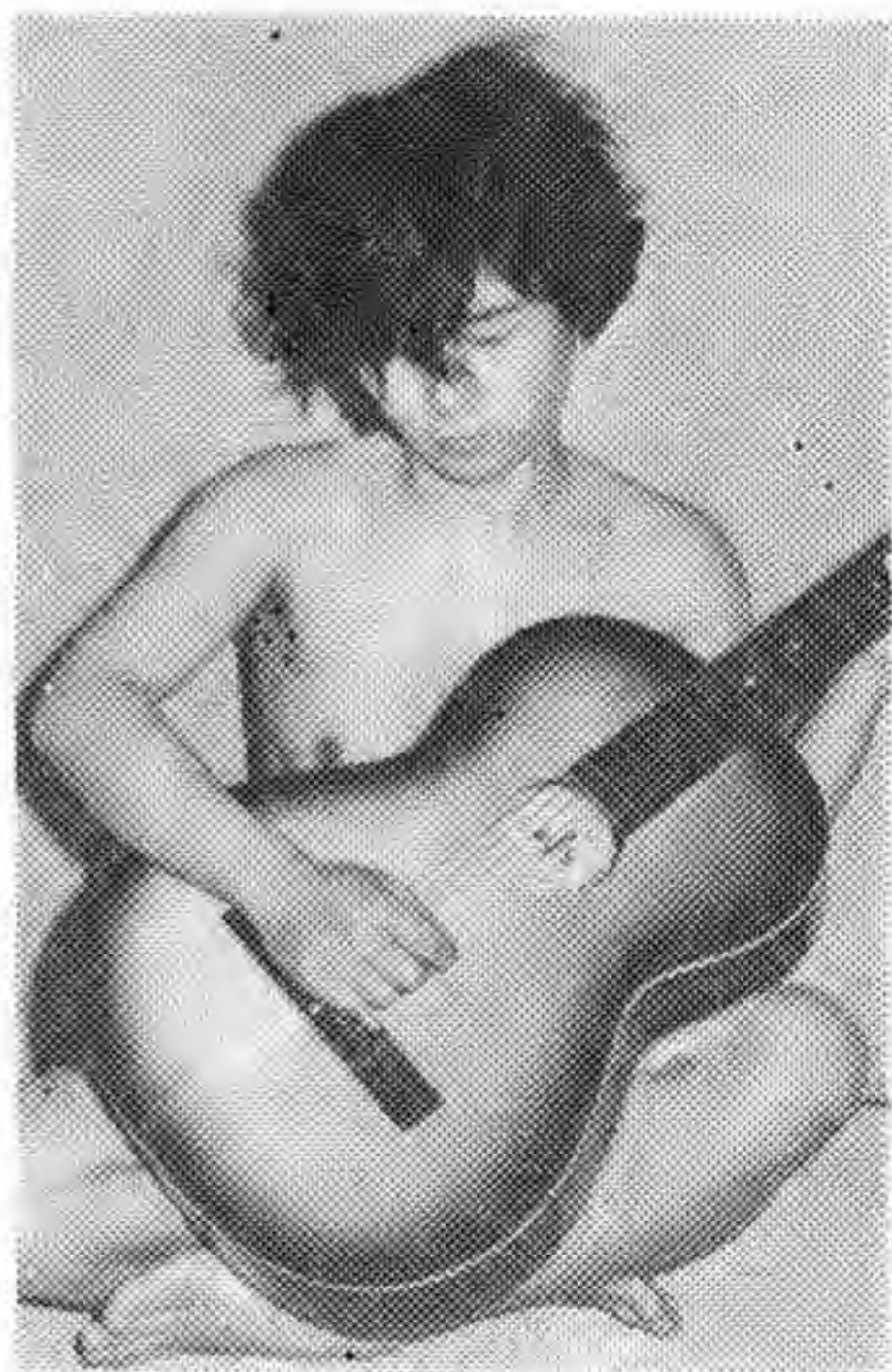
冬ものの長めのズロースを引き下げて全裸を
期待したらもう一枚、下にパンティを穿いて
いる。まさに用心堅固というところか。それ
を引き下げかけたら、彼女の手が、きつく私
の手を押えた。

「やっぱり羞かしいわ。これだけつけていて
いけない？」

「いいさ、じゃあ縛るよ」

無理強いせず縄を半折して、首縄をぎりぎ
りよじり、八の字に乳房を挟んで、胴でX型
に縄を分け、両手を背後に縛り終わる。

今の私の心境では、縛ること自体がプレイ
ではないのだ。勿論プレイへの過程ではあっ
ても単なる緊縛のフォトを撮る、ひとつのポ
ーズに過ぎないように思えるのである。しか
し圭子にしてみれば、こうして縛られること
自体に、Mの快虐を感じていた。それは女体



を飽くことなく追求し続けて、緊縛の飽和状
態を感じている私と、初めて裸身を緊縛され
る、不安とアバンチュールにおののく、若い
女心との、大きな精神的な、ギャップであっ
た。初めての圭子にしてみれば、今こうして
異性から縛られること自体に、激しいMの血
をたぎらせ、被縛の裸身を曝すことに、疼く
ような、被虐の願望を見出しているものであ
った。

首縄に一本の縄をつないで、上半身を屈曲
させ、あっさりと膝にかけて両足首を結ぶ。
圭子の顔に、愉悦に似た表情が泛かんでい
た。オーソドックスな、こうした緊縛のボー
ズこそ、圭子が心に秘めて眺めてきた、数々

の女性のポーズに通じていた。
かつては半ば羨望と羞恥で見て
きた、又読んできた奇巧のハン
トの主人公が、今自分であるこ
とを肌で確かめて、縛られてい
る自分自身に陶醉しているかの
ようであった。

私は、わざと荒々しく女体を
足蹴にする。不自然なポーズで
ゴロンと倒れ、微かに女は呻吟
する。臍下ぎりぎりまで押し下
げたパンティが、私の心をいら立たせるよう
に目触りになってきた。背後に回ると、ぐっ
と引下げられて剥き出しになった双臀が、か
たちよく盛り上って、稜線の切れ目が、布で
辛うじて隠蔽されている。思わず平手でパシ
リとおしりを叩くと、ピクンとうごめいて、
「ひどいわ」

と小声で呟くようにいう。矢庭にパンティ
に手をかけると、衝動にかられて、ぐいぐい
と引き下げてゆく。

「あっ、よして。いや、いや、羞かしいわ」
女体を怯えさせて、輾転としながら、媚を
含んだ拒絶の口調は、内心そうした行為を予
期していたかのように甘く響いた。くろずむ

稜線の奥に眼を凝固させ、尚も軽くパチパチと、いたぶりの平手打ちを尻にくらわせつつける。うっすらと赤らんだ臀部が妙になまめかしく、気愧しさが尚更に女の悦楽の念を昂ぶらせて、被虐の愉びを燃え上らせてゆくようであった。屈折した腿と腹で、必死に挟みこんで締めていたパンティが、私の強引な力で膝一杯まで引き下げられ、それでも、緊縛の方法が、唯一の防禦の手段でもあるかのように、彼女は一層、腿に力をこめて、隠蔽に果かない努力を払っていた。頭かくして尻かくさずとはこのことか。屈折すればする程はみ出すように臀部に凝集するくろずみが、私の眼を、まざまざと射るのであった。

そのポーズの俛、ぐいとうつむかせる。膝頭とひたいでバランスをとって、否応なく屹立する双臀が、蠱惑的な魅力を放って、膨大に私の瞳に迫っていた。その俯瞰の妙に、いっしか私は妖しく乱れ始め、嗜虐の快感がヒタヒタと心を浸潤させていったのである。私の手は逞しい、汚れを知らぬ双臀にかかる。その手に力がこもり、息を嚙んで、めくるめく思いで引裂いていったのであった。

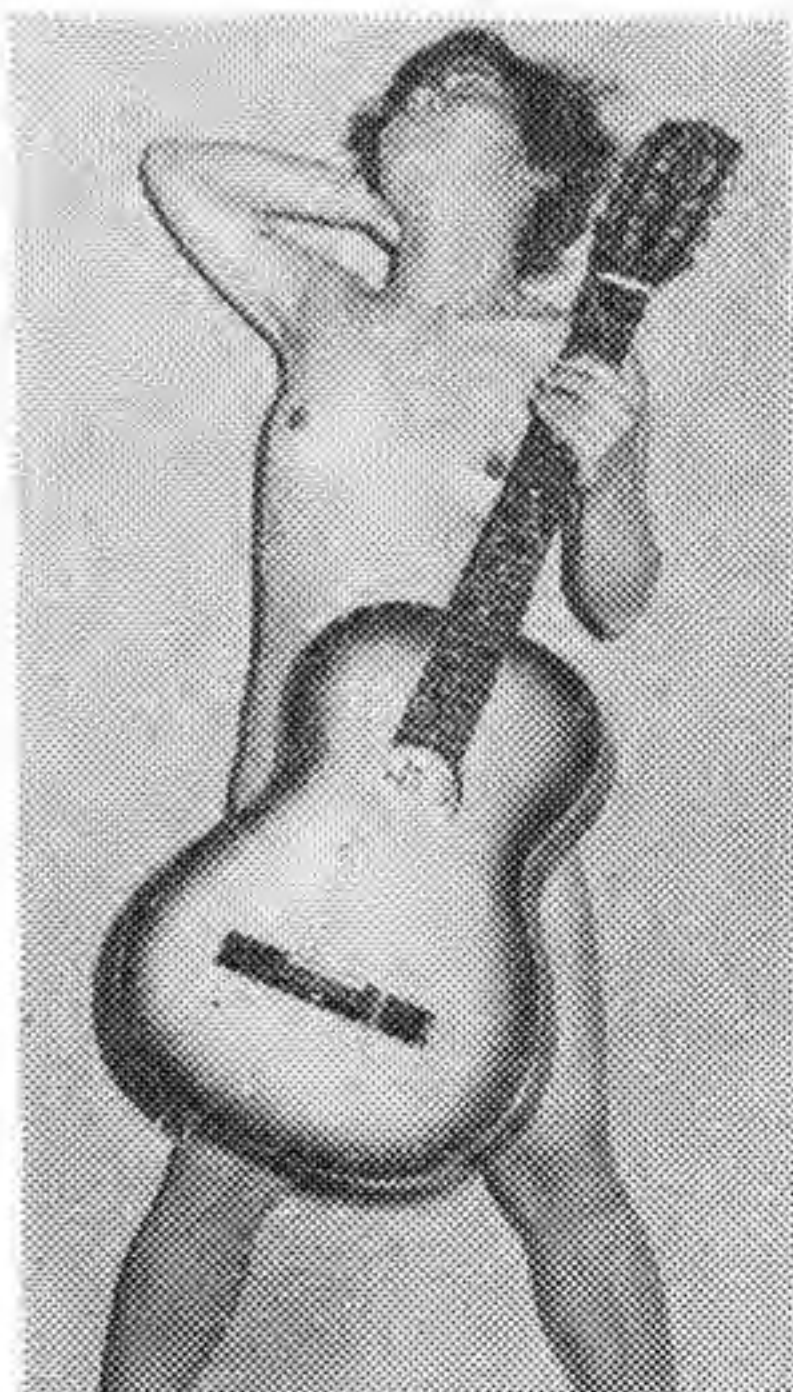
床の間につらなる嵌め込みの整理ダンスに

紅白の布地がかなりの量押し込んである。娘二人の、婚礼の荷を出す時、トラックに積込む嫁入道具にかけた布地である。長女の場合は、この目出度い紅白の布地を折半して返還してきた。二女の嫁ぎ先は布地全部を返還してきた。十足(二十反)に近い布地が用済みで眠っているのであった。

数米ずつに切断してゆけば、相当量の禪が出来るかも知れない。この紅白の布で、今年の夏は越中禪を沢山つくって、禪一丁で暑い夏を禪で過ごせたらラクだがと妻に冗談めかせて、そんなことをいったら、みっともないからおよしなさいとたしなめられた。軍隊当時重宝した禪がそんなにみつともないものとは思えないのだが、妻に云わせれば、田舎のオッサンめいて、いやだというのである。

私は禪を使った女斗美の趣味は、さしてない。しかし今、何故ともなく、この伊藤圭子に、二人の娘の婚礼の荷を飾った布で、禪をさせたくなったのである。

乱雑に積み上げた紅白の布地の中から、白い布をぞろぞろ引っ張り出した私を見て、伊



藤圭子は何をするのだろうか、怪訝そうにみつめていた。膝までずり下げたパンティは解縄と共に、ちゃんと元の位置に納まっている。

目分量で、三米ぐらいの長さにして引裂くと、

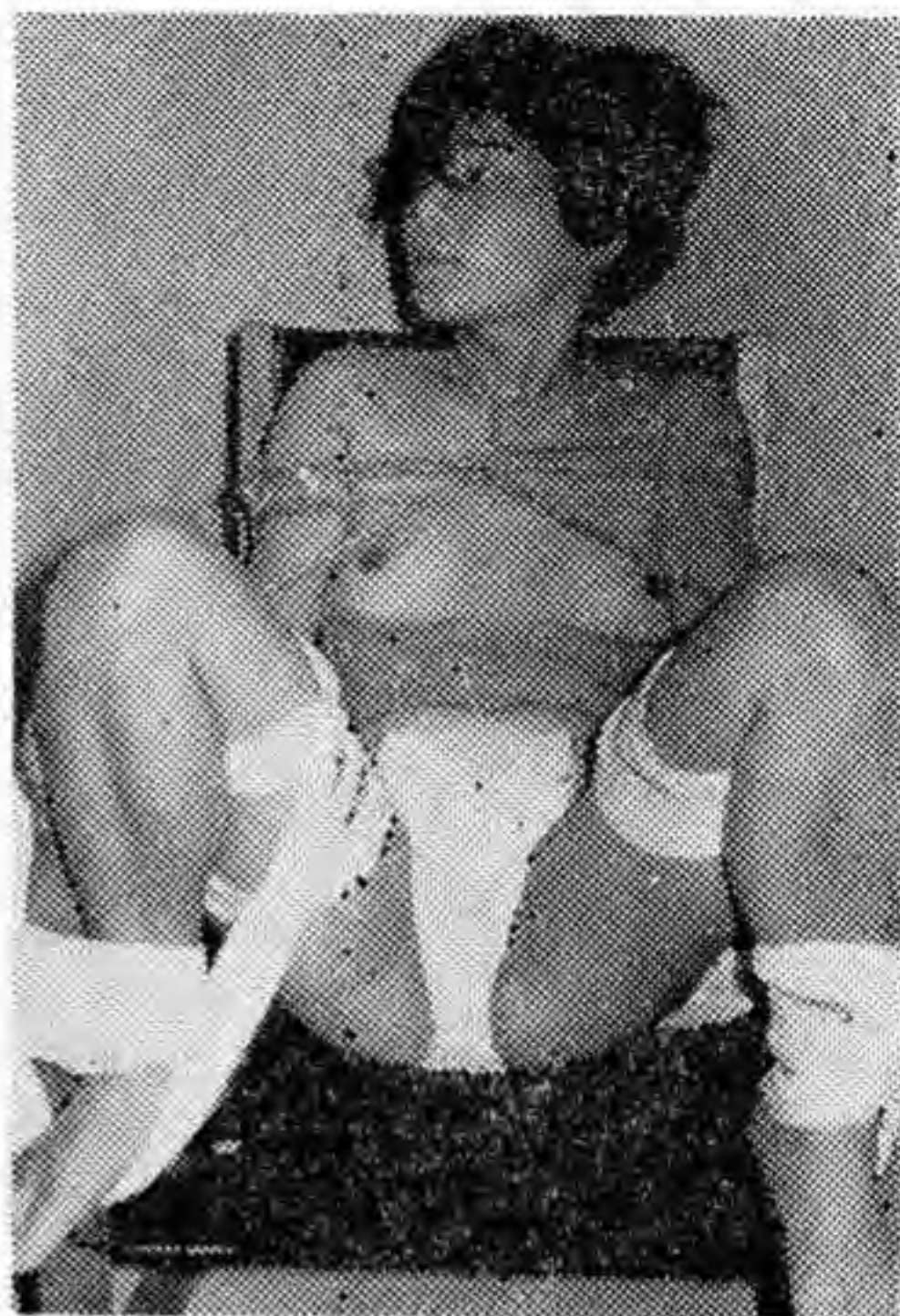
「隣の間へいって、これを禪にしてしめてもらんよ」

と差出す。

「私、どう結ぶのか知らないんです。女がするなんておかしいですわ」

「女斗美だよ。昔は土俵四股平さん、今なら芦浦素舞夫さんが、毎月あきもせず、せっせと書いている」

「さして関心がないから読んだことないんで



す」

「いや、実は私もだ。でもパンティの代りにこれをさせてみたいんだよ、かしてごらん。ほら、こういう工合に……」

ズボンの上から、締め渡して見本を示してみせる。

「何だか恥かしいなあ」

彼女はその布を胸の辺りで抱きかかえ乍ら戸惑っていた。

「さあ——」

私のすすめで、無然とした態度で隣室の洋間へ消えていった。襖越しに声をかけて、「長いめに切ったから、全部巻きつけないで

余らせておくんだよ」

「ハイ、でも仲々うまく結べませんのよ」

「手伝ってあげようか」

「ええ」

襖を開くと、さっと冷気がよぎる。座敷をしめきって石油ストーブを燃やしているからこの部屋は温かいが、襖一重隔てた洋間は意外に冷たかった。

肩を抱くようにして、連れ戻してくると、既に前部を蔽って、半ば巻きつけたユルフンを、私はぐいと吊り上げるようにして締めつけていった。余った布で後手に縛る。

寝かせ、起こさせ、横たわらせて、数枚ずつカメラに納め、先程のように、膝頭と頭を支えにして、尻を高々とあげさせる。先刻は両足を揃えてのポーズなので不安定でぐらついて、最後にはバランスを失って横倒れしたが、今は、両足を一杯に開かせているので安定していた。開いた両腿の間から、圭子の逆さの顔がくっきりと覗け、カメラのファインダーに向かって、ニッコリと微笑みかけてき

た。それだけ、圭子に心のゆとりが出来たしるしであった。股覗きする自分の、こうした羞恥のポーズに、思わず赧らんで、顔を綻ばせたのかも知れない。

タタミに長々とねそべって、低いアングルから、私は被写体を狙った。低く構えれば構える程、双臀はさながら小山のように私の眼に映じた。きつく双臀の谷間を蔽った褌が、安全なかくれ蓑と知ってか、圭子はこの大胆なポーズにも、さして愧らしいの色も見せなかった。そのうち何が可笑しくなったのか、急に声を立てて大きく笑い出し、いきなり勢いよくバターンと横ざまに転んだ。その拍子に部屋の隅に立てかけてあった、長男のギターが、圭子の体に直立して、ビビーンとギター音はずませて、彼女の顔の上に倒れてきたのであった。あわてて、ギターを元通りにした。どうしたの、いきなり笑い出して。痛くなかったか？」

「ウーン、少し……。こんな恰好していたら去年の秋、会社の慰安旅行で、天の橋立に行った時、股のぞきしていた課長が、あまりオシりを開いたものだから、私達の前で、ブーッとおとしちゃったの。それを思い出したらおかしくて、おかしくて、独りでに笑えてき



たの。フッフフ、ああ、おかしいわ」

尚も笑いこけて、とめどなく彼女は転がった。笑った。孤独にうちひしがれていた彼女が、明るさを甦えらせて笑っている。皓い歯を一杯に覗かせて笑っている。笑みを満面に湛えた、伊藤圭子は、まるで別人のように私の眼に新鮮に映じた。それは思いがけない驚きであった。

私もつられて思わずニヤニヤと笑った。急に彼女とのこれからのプレイの時間が愉しく思え出してきたのである。笑いは奇妙な親しさを生むものである。それがまさか、こうした禪姿の股のぞきポーズによって開眼されよ

うとは、このポーズを望んだ私自身すら、夢想だにしないことであった。

伊藤圭子の笑いは未だ止まらなかった。

「いってやろうか、圭子ちゃん自身、ひょっとして、プーンとやったんじゃない？」

「ウソ、ウソ、ホホホ、いやーん、恥かしい」

私はごく自然に、彼女を圭子ちゃんと愛称をこめて呼んでみた。彼女は気づいていないまでも、既に今の雰囲気は彼女のともすれば固くなりがちな、緊張しがちなプレイへの不安を一気に吹き飛ばしたことは確かであった。

「あーあ、おかしかった」

やっと真顔に戻って彼女はきまり悪そうに体を起こそうとした。手を貸して抱きおこし「何だか、急にリラックスしたみたいだね」「ええ、慥かに気分的にラクになったようですわ」

「それが本当の圭子ちゃんの姿だよ」

気易く呼んだ言葉に、始めて気づいたのか

彼女は戸惑った顔になり、少し言い激んで、「圭子ちゃんなんて呼ばれたの、久し振りですわ。家ではそう呼ばれてましたけど、会社では苗字でしょう。何だかとても辻村さんが親しく思えて来ました」

「オジサンって呼んでもいいんだよ」

「いえ、やはり辻村さんの方がいいんです。何ならセンチって呼びましょうか」

「センチといわれる程のバカでなし……それでもいいよ」

打解けた気持になって、

「どう、晒布だから痛くないだろう？」

「ええ、ちっとも……」

「じゃ、ことのついでに、もう少しこの白い布で縛ってやろう」

「お嬢さんの嫁入の荷の布なんでしょう」

「御名答」

「早く結婚したいわ、私も……」

チラリ本心を覗かせ佻しい顔付になった。

首からタスキにかけ、胸から腹へと白布で縛ってゆく。これは緊縛ではない。しかし、縄ばかりつかって来た私にとっては、新鮮な感覚を与えた。

その時、廊下に人の気配を感じ、妻の足音が近づいてくる。今頃どうしたのだろう。部

屋の入口越しに、妻はチョット、と呼ぶ。圭子はハッとしたように立ち竦む。

「どうしたの？」

入口を細目に開けて、顔を覗かせると、仕事の電話がかかったというのであった。大急ぎで母屋に戻る。電話をすませて行きかけると、妻がうしろから声をかけて、

「縛ってはいりますの？」

と、きく。

「ウン、婚礼の荷の白布でね」

「まあ、あんなの使って……」

あきれた風にいって、

「一寸のぞいていけない？」

「愧かしがるやろな。別段どうってこともないが、少しだけなら」

「ウチでこんな時間、余りありませんものネ参考にしますわ」

微妙な発言をして、妻は足音を憚るようにしてついてくる。入口の戸を細目にあけた俤立ち竦んでいた圭子に近づくと、ゆっくりとほどいてゆく。細目からそっと覗いて、妻は足音を忍ばせて立去ってゆく気配を感じた。やはり女心で、何となく、気になるものらしい。彼女は流石に敏感であった。ちゃんと目敏く見て取ったらしい。

「奥さん、いらっしゃったようね」

「やはり気になるのだろう。若い圭子ちゃんみたいな美人と二人でいることが」

チョッピリお世辞を混えて、はぐらかしたが、圭子は外のことをいった。

「辻村さん、今でも奥さんとプレイなさるんですか？」

「時偶、気が向けばね——。年令と共に飽和状態になっても、時には怠惰に流れる夫婦生活にカツを入れないと、段々疎遠になるんだよ。夫婦プレイが円満を維持する私の持論からしてもね」

「私も結婚するんだったら、そんなプレイに理解のある人と一緒にになりたいですわ」

それは圭子の偽らざる本心かも知れなかった。かつての緊縛第一号の川端多奈子しかり一時代を画した梨花悠紀子又しかり。一度味わった被虐の快楽は、ノーマルな夫婦生活の単調さに夫の知らぬこととはいえ、或る種の物足りなさを覚えることは紛れもない事実であった。所詮は内潜する心

の問題であっても、あらわに云い出せぬ悩みを、世の夫婦の何パーセントかは内蔵している筈である。性格の不一致という理由で、離婚に走る前に今一度お互いを確かめるのも、一つの手段ではなからうか——。

いつしか私はスラスラと、圭子の肌からすべての布を剥ぎとって全裸にしていた。一糸まとわぬ姿にされて、呀々と思った圭子は、しかし最早、私の眼前から隠そうとはせず、その姿を肯定していた。急速に触れ合う親近感が、圭子から羞恥のヴェールを剥がしていったに違いなかった。私もさりげなく振る舞う。握った布で、今一度、彼女の全身の束縛を手早く試みつつあった。



猿轡の布が首を這い、直線にのびて股をくぐって両手を縛り、別の白布が、ヒタヒタと胸から足許まで、ぐるぐる巻きに肌をとり巻いていった。こうした白布の束縛が嶄新な感覚となつて、柔肌とけ合つて、何か快いムードをつくり上げていった。横にかかえて倒し、背後にころがし、たゆとう女体は右に左に傾いて、いつしか快い呻き声が、くぐもつて激しく私の耳朶を打ち始めていた。

足指で、盛り上った胸のふくらみを踏みにじり、果ては全身にかかった白布を握って吊り下げ、敷物の上にドサリと放り投げる私であつた。伸びた白布がゆるみ、ずれ下つた個所から、羞恥がのぞけていた。

「どうだ、これがプレイというものさ。もっと苛めてやろうか」

目がうなずいている。快楽の陶醉にひたつた女体は、ひたすらに、より以上の激しいプレイを求めているようであつた。

むき出しになつた両の乳房に、二本の小型パイプが同時に唸り出した時、圭子は身も世もあらぬ悶えを露呈して、うっすらと眼尻に涙すら泛かべて、愉悦の声をこらえ性もなく絶叫の悲鳴に変えていった。

×

×

×

ポロン、ポロン——。裸女の爪弾くギターが、きれぎれに譜もなさず流れていたのが、いつしか「禁じられた遊び」らしくなり同じ繰返し調子をのせて、それらしく聞こえてくる間、私は洋酒棚から、とっときのオールドパーをとり出し、小さいワイングラスへストリートに注いで、チビチビ、なめながら、物頼いひとときを、圭子のなすが俤にさせていた。時々、手許のカメラをとり上げては、軽くポーズを注文して、このギターを弾く娘を愉しげに、みつめていたのである。

合の手口を挟んで、

「どこで習つたの？」

「退屈だから、お友達のを借りて、勝手に弾いてるんです。だから、ちっとも上手くならないんです」

慥かに、彼女自身言う通り、弦を押える指先は、たどたどしく、爪弾く指は途惑っていた。それでいて、一向にやめようともせず、「禁じられた遊び」は、いつしか「新宿の女」らしく変わり「影を慕いて」に移

つていった。何でもやりたい年頃で、聞き囃りで弾くだけが、孤独から遁れる圭子の手段であつたようである。唯、何となくギターを抱えているだけで、孤独を忘れ去ろうとしていたのかも知れなかった。そこはかとなき哀れさが漂う。

グラス二杯のオールドパーをのみほして、私はやおら立上ると、隣室から椅子を持出してくる。

壁に面して椅子を置き、圭子を手招く。ギターを立て掛けて近づいた彼女を椅子に坐らせ、斑ら縄を首縄にして胸をしめ上げ、椅子に固定していった。



両足を白布で肘掛けに開いて手首共々ぐるぐる巻きにしめつけてゆくと、圭子の顔に、ありありと激しい羞恥が泛かび上った。椅子の冷たい感触に眉を顰め、無言の反撥を眸にあらわにみせて、私の行動を非難するようにじっとみつめるのであった。それは云わなくても分かってゐる。羞恥の開股ポーズに繋がる連繋動作であることを、圭子は早くも気づいていたからである。敷物の上に転がっているパイプがその個所を狙う時、取乱すであろう自分の姿を想像して、譬えようもない気愧かしさに、娘心はおののいているようであった。そのくせ、一旦開花した、快楽の花は、散り際を惜しんで、燃える思いで、期待を抱いて、心を昂ぶらせているのかも知れなかった。既に乳房への洗礼で、我を忘れて取乱し歎息した自分が気恥かしく、それを紛らわすようにとったギターの爪弾きが、微妙に変化する女心の形態上の現われでもあったのか。

徐々にはあるが、プレイが否応なく、セックスの琴線に触れ、Sといい、Mといい、それらが最終は肉体の快楽につながる事を、圭子は身をもって悟った様子である。

羞恥のヴェールを剥がしたとはいふもののこの肢態は、彼女にとって、余りにも赤裸々

で耐えられぬものようであった。

「お願い——何かで蔽って……」

一縷の望みを託して、圭子は懇願する。うなずいて、だらしなく巻きつけた白布の端を縄に挟み込んで押し込み、越中樞のような恰好にして私は引返す。それが唯一の防禦になったのか、やっと、圭子の表情は柔らいでき

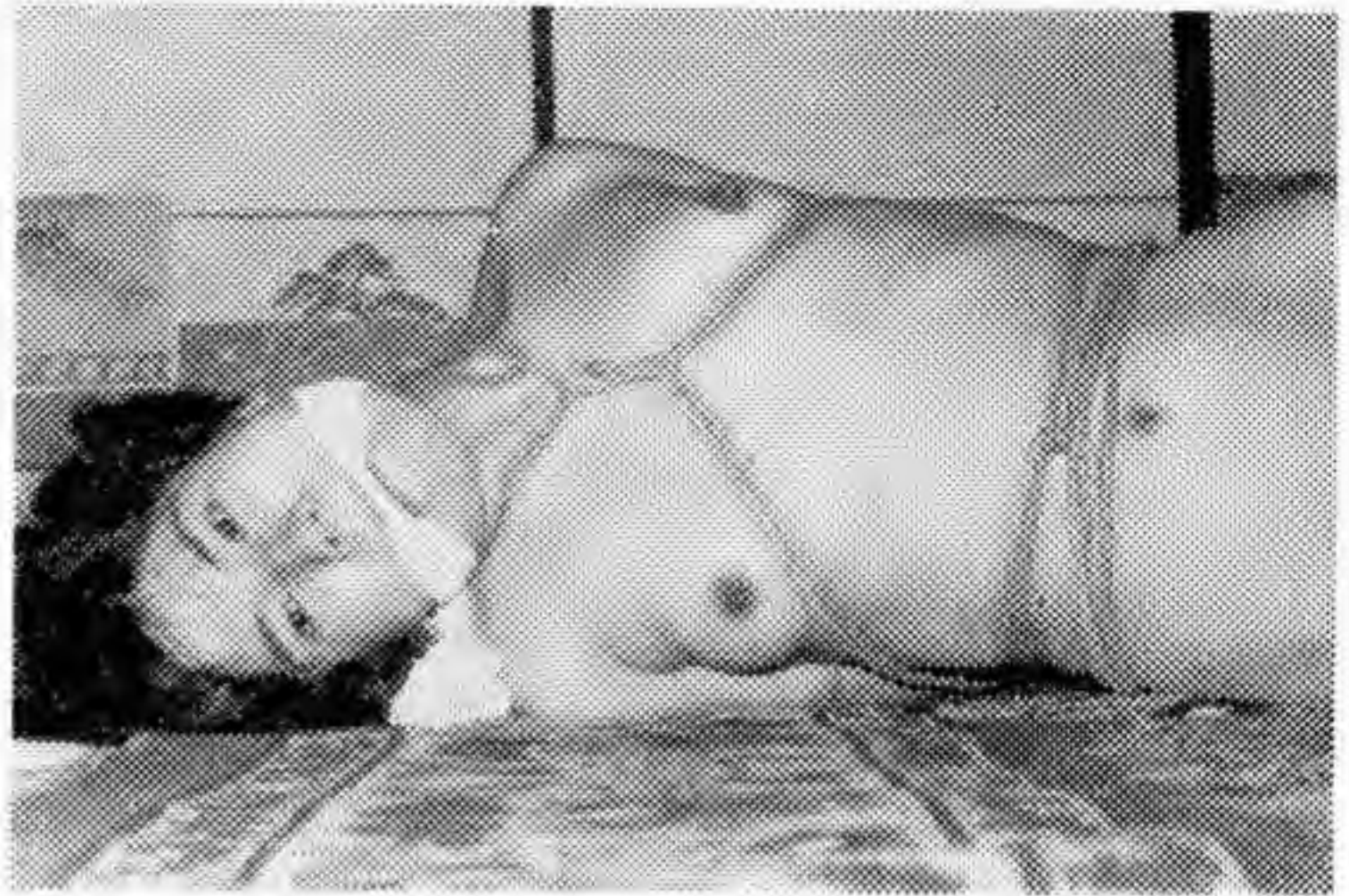


た。むき出しのポーズは、初体験の圭子にとって、余りにも堪えられぬ、みじめな肢態に思えたのであろう。

(何も急ぐことはない——ここは私の家なのだ。彼女みずから求めて飛び込んだのなら、ゆっくりと愉しめばいいのだ)

ともすれば焦って、早く欲望の虜にさせようとする私の行動を、辛くも自制させて、余り芳ばしくもないポーズに閃光を走らせ、早々に布をとくと、彼女は素早く両足を固く閉ざすのであった。

両手を前で縛り、肘掛けにしっかりと固定させると、掌の隙間に黄金のローソクを挟み込む。その行為は、先日、秋山氏がやったのを無意識のうちに真似ていたようであるが、秋山夫人にくらべ、何となく差があることを、私自身、認めぬわけに行かなかった。積極的のみずから行動し、演技する秋山夫人と、初体験の伊藤圭子と比較するのは酷である。しかし圭子には又それなりの、素朴な味わいがあった。ローソクが倒れぬよう、しっかりと押し込み、ライターで火を点じる。赤くゆれる蠟芯をじっとみつめる彼女の瞳に、淡い翳らしいの被虐の想念がゆらいで流れていた。徐々に溜る蠟涙をこぼすまいとして、いつしか



瞳に真剣さが溢れてくる。

この、いけにえの聖女に似た圭子に、私のストロボは容赦なく走った。

近よって、膝頭に両手をかけ、じりじりと引離そうとすると、反射的に力をこめる。体が思わず揺らいで、呀っという悲鳴と共に、ツীবと蠟涙が、掌に流れ落ちる。執拗に又

ぞろ私はくり返す。尚も力が、はね返る。そのしっかり締めつけた腿と腿の間に、別にもう一本のローソクを挟み込み、点火する。微かに全身を顫わせて、彼女は必死にローソクを倒すまいとして、この予期せぬローソク責めに耐えていた。意地悪い想念がメラメラと燃え上り、フオトを撮るために蔽っていた白布をとり除くと、心持ち突き出た腹部すれすれに、更に一本の太いローソクを追加して直立させたのである。

燃え立つ三本のローソクの、油くさい匂いが次第に部屋に立ちこめる。一つ間違えば肌を灼く、危険な三本のローソク責めに、圭子の表情に、パツと恐怖の蒼褪めが走った。脛下すれすれに、微かな熱を伝えて、焰は赤く垂直に伸びている。蠟涙が溢れて、次々と尾を曳いて、根元へと落下しはじめる。

「ああ、熱い……。やめて、辻村さん、ゆるしてエー——」

びっくりするような悲鳴を挙げるや圭子はいきなり手掌の間のローソクを吹き消し、呼吸の届かぬ脛へのもどかしさに、早く早くと呼びつづけるのであった。

カメラを措いて近づくと、二本のローソクを吹き消してやる。別段バタバタする程のプ

レイでもないのだが、おっかなビックリ顔の圭子は、やれやれという安堵の表情を泛かべて、大声で叫んだ、自分に照れ臭そうであった。肘掛の縄を外して、椅子の束縛から解くと、抱えるようにして立上らせる。

休む間もなく、細目の斑ら紐が圭子の肌に纏わりついて行く。首から、たすきに乳房の下へかけ、簡単な縛り方で襖に面して立たせる。縄がきつくないので圭子は、おっとりとした表情にかえっていた。

いつしか彼女は無意識のうちに、カメラアイを意識するようになっていて自分に気づいてはいなかった。ファインダーから覗く私の眼に、すっかりかたさのとれている圭子の、こころもち愉しげにみえる肢態が、まざまざとのぞけていた。それは私への信頼感と、緊縛馴れからくる、未知の不安の除去によるものに違いなかった。

圭子は私のいう俣のポーズを易々としてとってくれた。横たわったポーズにも、あえて隠そうとはせず、在るが俣に振舞い、私が足を折るようにいうと、

「フフ、ハント用なのね」

と口を挟む余裕すら、あった。リラックスした心は、こころもち私に、ほほえみかけて

いるようでさえある。

「どうしたの。何か嬉しそうじゃないか」

「これがハントなのね。縛られて、何もかもみせてしまえば、別段どうってこともないんですわね。何だか、もっともっときつく縛られてみたいような気持——」

「えらく心境の変化を来したんだね」

「自分独りで固い殻の中へ閉じこもって、誰も何とも思っていないのに、勝手にみじめな気持になっていったんだあーって、フトそんなことを考えていたんです」

「……」

無言でうなずくと、勢いにのって、

「孤独なんて、自分でつくるものですよのね。」

自分は孤独だと思うから孤独なのであって、他人が私を孤独にしたのではないということ、今やっと分かった気持です。もっと明るく愉しく、人生を過ごさないと、自分が損だってこと……」

彼女は、こうしたプレイの合間に、一つの人生への達観をしたようであった。全裸を曝して、彼女なりの陶醉にひたって、フト生甲斐めいた悟りを開いたらしかった。孤独から遁れた伊藤圭子は、今こうして見ると、始めて六甲のうそ寒い駅で出会った数時間前にく

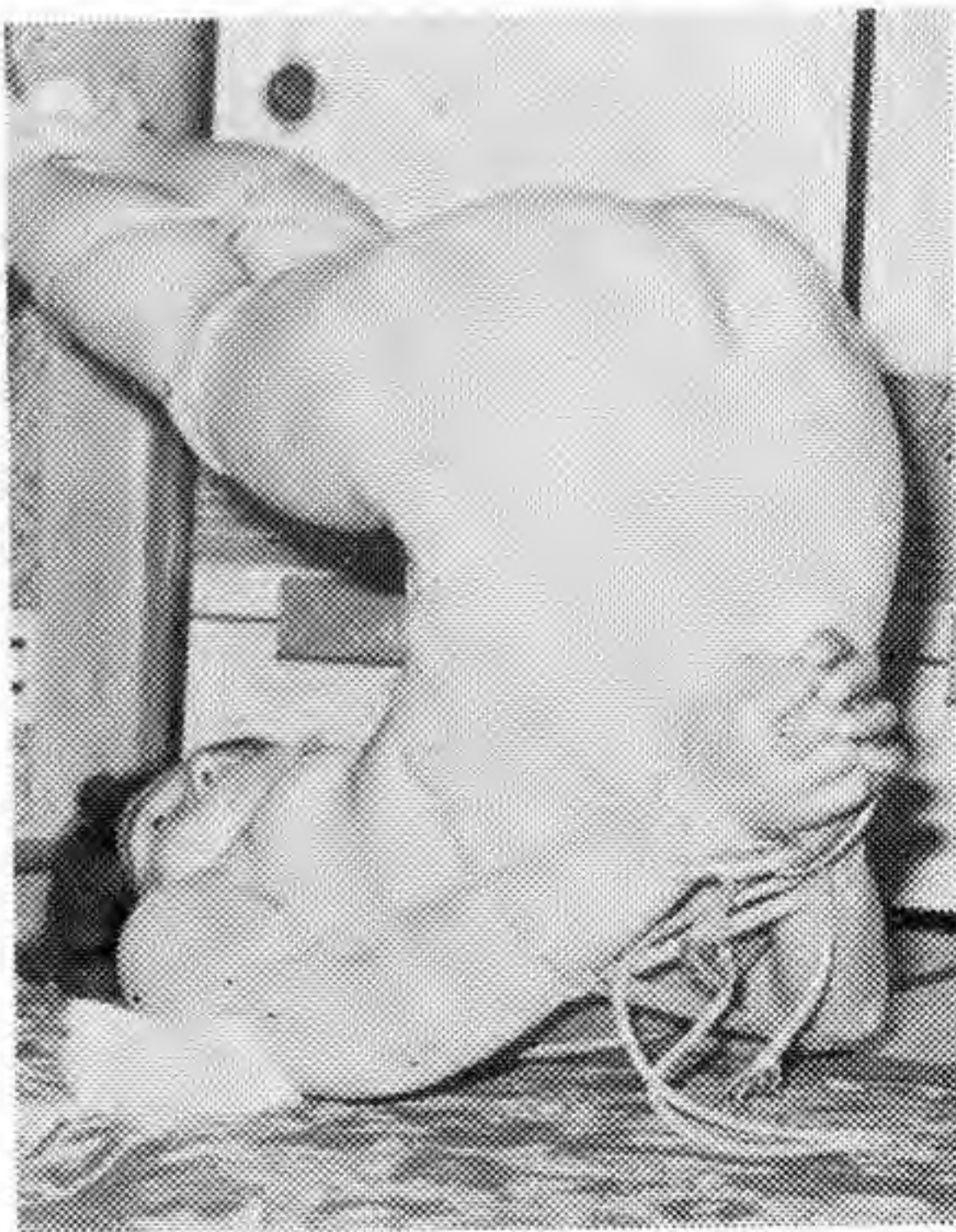
らべて、見違えるばかりに

明るく変貌していた。理窟っぽいハイミスめいた印象は、こうして縛られて横たわる彼女からは微塵も感じられない。徐々に胚胎し、内攻していた被虐への願望が、一気にふっ切れて、それと共に、圭子自身の、ともすれば孤独に陥りがちな心も亦、これを転機に百八十度転換し、飛躍していったことは、圭子にとっての大きな収獲であったかも知れない。

「そうだよ、それに気づいただけでも、今日こうした、ひとときを持ったことはよかったと思うよ」

「ええ、確かにその通りです。辻村さんという、私の理解者が出来たことが、私にとってとても嬉しいんです」

「有難う——。でもSMのプレイなんて、所詮は理窟ぬきでいいんだよ。何となく苛められたい気持と、虐めてみたい気持——勿論、私の持論の、愛情を伴うという前提の上に立



ってのことですね。縛ってフォートを撮るのも、謂わばそのプレイへの前提、ハントの過程の証明に過ぎないよ、フォトなんて——。本当のプレイの実態は、筆では描けても、フォトではうつしとりにくいのが本当だよ。いやペンですら、露わに描けないところに、実際のプレイの妙味があるのじゃなかろうかね。その時の心の動きによって、心のおもむく尽に千変万化するプレイの妙——、そんなものは所詮ありの尽、発表する性質のものではないかも知れない、ということだね」



「セックスじゃないんでしょ？」
 「そう、単なるセックスじゃないさ。しかし男対女のプレイに、セックスの介在しないことは不自然じゃないだろうか。被虐の快楽にしばれて、その次に、求めるものは何だろうか。嗜虐の欲びに酔い痴れた男性が、女体に求めるものは何だろうか——。それは論外の

ことかも知れないが、愛情が伴えば伴うほど自然の結びつきは、究極はそこへ到達するのだが、ごく自然に思えるのだからね」

「分かります、その仰有る意味が……でも」
 「でも、そこまで割り切れないというのだから。当然ですよ。今日、始めて出会った私とあんただもの、心が熟し切っていないからだよ。身の保全を懸命に計り乍らチョッピリ被虐願望のアバンチュールに足を突っ込んでみたい、そんな気持なんですよ、あんたは」

「……………」

「SMの深い測のほとりに立って、ちょいと足をつけてみて、その測の快さを知ったものの、泳げる自信の出来ていないあんたは、ドボンと飛び込むだけの勇気がない。SMの測で悠々と泳ぐ私の手招きで、どうしようかととつおいつ、迷っている——。しかしまあそれでいいんだよ。手をとってSMの泳ぎを教える私は、しんどい。独りで泳げる自信が出来たら飛び込んで、という処だね」

才女は、私のもっともめいたSM論にうなずいていた。いつしか眸は、妖しくキラキラと、まるで宝石を鑲めたかのように、輝き始めていた。緊縛された唇、横たわる裸身がややかにヌメリを帯び、惜しげもなく曝した

下半身は、私を求めるかのように、これみよがしに露呈していた。それは、まったく無防備の姿として私の眼に映じ、媚を含んだ眼の色が、次へのプレイを期待して、蠱惑的に光っていた。それはプレイの深奥を求めて、只管に耽溺してみたい、彼女の願望のあらわれの姿であったように私には思えた。

肚を決めて、別の一本の斑ら縄をとり上げて近づく。この際、もう饒舌は必要でなかった。両足を揃えて手早く縛り、白布を短く引裂いて、唇を開かせて猿轡をはめる。期待に疼く、表情の底に、最早、不安の色はなかった。カメラを三脚に据えてセルフタイマーをかけると素早くかけよって、両足首を握るなり、ぐいと大きく女体を彎曲させる。アウウッとかまされた布で奥で呻きがこもり、縛られた両手が空を掴んで、肘に力がこもる。

私は数度、このポーズをアングルを変えてカメラに納めた。豊かな双臀が屹立して、俯瞰する、私の眼に灼きつくように火照っていた。尚もぐいと力一杯、押えつけると上半身がすっかり離れて、辛うじて頸筋で均衡を保った女体が、強烈な彎曲責めに喘いでいた。羞恥を塗り取るように私の体重が両足にのしかかる。荒々しい嗜虐の血をたぎらせて、疼

くような感触が私の胸をくすぐる。

愛撫に眼を瞑った俤、伊藤圭子は苦しげに鼻孔をふくらませて翻弄されていた。

女体をぐるりと一回転させて手を離すと、バランスのとりようもなく、女体は横ざまに倒れる。

金色のローソクに点火し、倒れ伏した圭子に近づく。胸の隆起に指先に力をこめ、蠟涙の溜ったローソクを傾けてゆく。一滴、又一滴——蠟涙が乳房に点滴されて、黄金色にうつすらとかたまって行く。眉を顰め、激しく動悸して、呻きを殺す圭子の赧らんだ頬に、眼尻に、悦虐の陶酔が、よぎり始める。

裸身を竦ませ、身悶えし乍らも、焰を近づけてゆく私に拒否の態度を示さなかった。

斑々と固まった蠟滴が、圭子の胸の辺りを醗く、しみだらけにしていた。

フツと火を吹き消し、手をやって、こびりついた蠟骸を払い落とし、私は黙って足縄をといて行く。

抵抗を忘れたかのように、彼女は私のなすが俤になつていた。SMの論議のあとに、突如としておとずれた強烈なプレイに、彼女は反抗の気概すら失ったかのように、潔く、この蠟責めを甘受し、しかも尚、その続行を冀

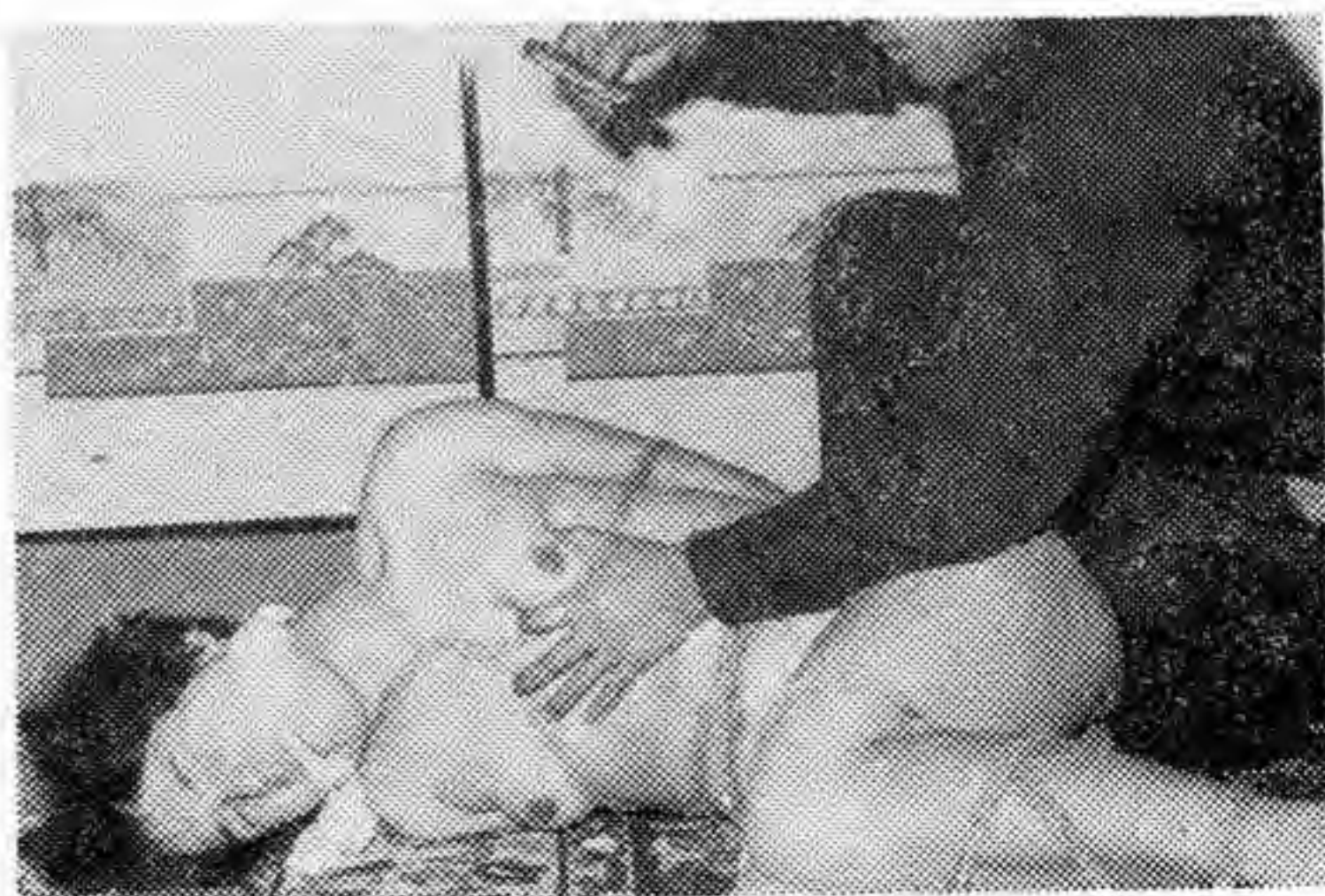
うかのように、気持を昂ぶらせていた。レリーズを伸ばし、決定的瞬間をとるべく、圭子の頭上の辺りに引いてくると、私は再び、両足首を握って開股気味に弯曲させてゆく。股も裂けよと私は腿を左右に拡大させ、ぐいぐいと押さえつける。足許のゴム球を踏むと、パツと閃光がきらめき、ジジーと電動捲上カメラは一コマを確実に送っている。

押えこんで馬乗りになると、手許に転がっていた蠟燭をとりあげ、屹立した臀部に立てる。点じた火がゆらめき、蠟濁の螺旋が滑り止めの役目を果たして、その個所で安定している。馬乗りから降りて、手を足首に持ちかえ徐々に弯曲をつづけ、傍ら私は跪ずいて、しっかり眼をつむって快楽の苦悶にふける圭子の顔に自分の顔を近づけてゆく。鼻孔と猿轡の口辺から洩れる、吐く息は熱っぽく、甘酸っぱい体内の匂いを私の鼻に鋭敏に送りこんだ。

ひたいに、眼に頬に、裂かれた唇に、私の唇は、軽いくちづけをつづけて行く。

直立した蠟芯はゆらめき、喘ぐ女体を微かに顫わせて、女は呻吟し、愉悦に歓聲を洩らした。

故なき涙が一筋、ツーツと圭子の頬を伝って



流れる。辱かしのあとにくる愉悦に戸惑った、伊藤圭子が心ならずも流した一しずくであった。

× × ×

最近、買い換えたばかりのミニカ70の小型車をあやつって、私と圭子は都心の混雑を縫って走っている。カーステレオから流れる、



藤圭子の女心を唄う、ブルース調の艶歌に、彼女は虚脱状態に似た放心のかたちで聞き入っていた。

緊張と不安と孤独から遁れ、私の離れ屋で過ごした二時間足らずのプレイに、めまぐるしく変貌した女心をいとおしんでいたのかも知れない。

蠟燭を取去り、猿轡を外して、縛った圭子を抱擁した時、彼女のきれぎれに咬いた熱い囁きが、今もありありと私の耳朵に残って消えない。

口籠りつつ囁いた愛をこめた言葉を、私は無然としてきいていた。

そうなりたいくせに、何かなってではならな
い心の抵抗を感じて、私はしばし凝然と抱擁
を続けた後、めまぐるしく思考を働かせてい

た。それは我が家という、或いはという気の許せない配慮が、冷たい感触となって、私を一匹の欲望の虜にさせなかったようにも思われた。皮肉にも、彼女が希んだ私の家なるが故に、彼女の願望はむなしく中絶されたのである。軽いペッティングで私は終わった。そう、それでよかったのだ。究極はセックスだと口説き乍ら私自身セックスに走らなかったことを後悔していない。激情のおもむくままに、ひたと我が身を投げ出そうとした圭子に

してみても、冷静になった今、いとおしいものを失わなかった安堵に、ホッとして、プレイの後味を愉しく噛みしめているかも知れないのである。私には飽和状態の満足感が充満していた。野暮ったく、保身に汲々としていた孤独な彼女の口から、その行為を求める言

葉を吐かせたところに、SMのプレイヤーとしてのいうにいわれぬプライドを感じたからであった。

チラホラと視界をよぎる粉雪の、夕暮れの外界は冷たかったが、ほのぼのとスチームのきく、狭い車内は、私達二人の心を標榜するかのよう暖かだった。

ミナミの盛り場——。モータープールへ車を格納すると、私は思わず、丸首セーターの襟を立て、圭子の腕をとった。

春宵の粉雪舞うペープメントを足早に歩いて、既にネオンのまたたき出した食道街へ、私達是一目散に急いでいた。華麗にはなやぐ伊藤圭子の、その瞳には、もう微塵も孤独の蔭はなかった。

—(おわり)—

「浣腸」は最後の宴？

大川 昌 弘

SMプレイの具体的な方法が、各個人の嗜好等によって、千差万別になるのは、ごく自然的な現象と云えるのでしようが、なかには

私などに全然理解の出来ない種類のものもあります。例えば女性の鼻をひん曲げたり、鞭打ちのあげく、その返り血を浴びたりするの

は気の弱い私などには、体質的にも余り興味がありません。

しかし、羞恥責めの多くは、本来羞恥に泣くのが好きな女性にとって、強烈な刺激剤として充分利用価値のあるプレイだと考えられます。だからと云って、いくら女性が本質的にマゾの持主だとしても、「浣腸責め」の場合、マニヤでもなければ、充分飼育されていない女性に、最初から試みるのは困難だと思います。

例えばそれが親しい間柄の女性だとしても、「浣腸責め」と云うものが、本来女性の羞恥心を計算に入れたプレイであれば、それだけ危険率も多いわけです。

それについて、辻村氏が四月号「童女浣腸譜」にて、いみじくも書いておられました。

『強制的な浣腸の結果、奈加子が怒っても、もうそれが最後となってもよい気持が私の心を支配していた。女体くまなく緊縛フットをとりまくった奈加子に対して、残るのは、この羞恥にまみれた浣腸のプレイのみのように思えるのであった』

これが男としての正直な気持でないでしょうか。何もSMプレイに限らずとも、ハント

した女性の総てを知りつくした後、最後に男の興味を支えるものは、その女性の最もハレンチな行為を強制してみたいと云う原罪的な欲求なのです。

強制的に、或いは合意的にでも、注入される我慢出来ずに全裸で便器にかけ上り、排泄の姿態を観察されると云う一連の行為は、マニヤの女性にとっては恍惚の一瞬であり、未経験の女性にとっては、否人格的な羞恥の一瞬であると思われます。

そこには天下の美女も高貴な地位の女性も差別なく、排泄と云う動物的な行為を展開する外ありません。ベッド上において、如何なるハレンチな行動も平然と行う淑女でも、この時ばかりは、便器の上で、あられもなく羞恥に身をよじり乱れるものでしょう。ましてカメラなどで、撮影されているとなると、女性にとっては羞恥責めとしての一種の極限状態になると考えられます。

私が最初に浣腸を試みたのは、数年前前に交際中だった、ある未亡人との最後のデートの時でした。この欲求不満の女性とは半年の間、神戸のホテルなどで、時々、逢ったのですが、逢えばかなり協力的に次々と新しい刺

激を求める女性でした。しかし、彼女に対する興味が殆ど感じられなくなった私は、その日、イチジク浣腸を用意して出かけました。

新開地近くの、西日が明るく室内を照らす中で、彼女は全裸でアクロバットを演じ、私の希望を入れてアームチェアに逆さまに体をおきました。その彼女に、私は、彼女にもよく見える様にして、イチジク浣腸を二つ連続して使用してやったのです。数分後、じだんだふんでトイレにかけ込んだ彼女の、必死にこらえていた様子は、今迄の彼女とは全然異なった、何か追いつめられた動物を想わす様に落着きがなく、乱れに乱れていました。

それ以来、彼女とは逢っていませんし、その後新しく出来た女性との時もそうでした。現在、別の彼女とデートを重ねていますが、いつしか別れなければならぬ時が来ると、私は薬局でイチジク浣腸を買い、又、浣腸器を用意して出かけることでしよう。

幸か不幸か誌上に登場されるような浣腸好きな女性は私の前に未だ現われないので目下のところ「浣腸」は最後の宴となるもの、という感じがして仕方がないのです。

カット・堀 真彦



告 白 小 説

被 虐 の 旅

(2)

由 利 美 千 子

能登の西海岸は松本清張のスリラー小説の舞台になってから、観光客がふえたという。

鉛色の海は死体の一つや二つ、のみこんでいそうに暗く、重い感じがする。

能登金剛とよばれる富来町の海岸は巨岩が並んで私の死刑執行人のような顔つきをしていた。

「靴をぬぐんだ」

彼は、いった。

「さあ、あのとっ端までいってみよう」

ゴツゴツした岩は、素足ではとても歩けそうもなかった。

「何をぐずぐずしているんだ。早く歩かないと、ここでケープをとってやるよ」

彼は言った。

ケープの下は裸身と同じだった。ただ、赤い腰巻と縄にいろどられている。それをまだ自動車道路に近いここで、あらわにされることは耐えられない。

私は岩の間の土の所をよって、さきへ進んだ。枯草が油気のない老婆の髪のように風にゆれていた。時折、強い風がケープの裾をまわって、縛られた手の先をみせようとした。私は囚人のように縄をかけられていたが、

後手に縛ると、ケープの上からそこがふくれて、おかしい形になるので、両手は体にそってたらしただま腰に縛りつけられていた。

「能登金剛、関野鼻」と書かれた十字架のような標識が、ななめに曲って立っていた。雪まじりの雨に観光客の姿はなかった。

「記念写真をとってやろう」

彼は、いきなり私のケープをもぎとるようにとった。風が赤い腰巻をとばしそうに、吹きすぎた。私はいくら人影がなくても、誰か来たらどうしようと、あたりを見まわした。それにおかまいなく、彼は車をおりる時、手

にさげてきたボストンバッグから、別の縄をとり出した。

「さあ、その標識を背にして立つんだ」

そういわれても、私は誰かに見られそうな恥かしさで、へなへたと、その標識の下へ、うずくまってしまった。

すると彼は私の手首に縄を結ぶと十字架のように横に板をうちつけて「海中公園」と書いてあるのに縄を引いた。私は土の上へ坐ったまま、片手だけ「海中公園」の板の端へ釘で打たれたように、ぐるぐるとまきつけられた。片方の手も又、同じように反対の端に固定されるのに、ひまはかからなかった。

私は「関野鼻」という標識を自分につけられたような恰好で、海を背にして縛りつけられた。もがいたら、標識がぬけて、標識ごと海へ落ちそうな岩の突端である。

裸身にみぞれが冷たくあたり吹きぬける風の強さに私の肌は鳥肌たっていた。おまけに長い髪は標識のうしろの木の小枝にからみついて、自分の髪の毛で私は身動き出来なくなってしまった。

誰が、この能登の海を背景に、さらし者にされている女がいることを、考えられるだろう。

「かんにんして、まるで、さらしものみたいで……」

私が言ったのが悪かった。

「そうだ、キミは、さらし者だ。立て、立つんだ」

そういわれても、坐ったまま手を上へのばした恰好で縛られている私が、どうして立てるだろう。

「立て、立つんだ」

彼はそういうと、私の髪の毛がまきついてある木の、別の枝を折って手にもつと、そのさきで私を突っついた。

「立てないわ」

立てという方が無理である。私は折っているひざを、やっと立てひざのように坐り直した。しかし地面についている腰を、どうやってもちあげられよう。

「立つんだ」

彼は小枝を、ところきらず突っ立てる。

乳の下を、ぎゅうっと突かれ、思わず

「ああー」

とうめくと、次は脇腹――。

「ううッー」

と、齒をくいしばる。

そんな私の姿を想像出来るだろうか。

腰巻一つの裸身に囚人のように菱形に縄がかけられている。それだけでさえ、みじめなのに、両手は十字架にかけられたように、なかばひろげられ、木の札に縛りつけられているのだ。

ひょうひょうと風が鳴ってすぎ、海はごうごうと音を立てて荒れ狂っている。

「立てないのか、この足はどうしたんだ」

彼は邪険に小枝で私の太腿を突いた。

「あッ」

と私は折角、立てた膝を又、ペチャンと、もとに戻し、土にすりつけてしまった。

「立てよ、立てといったら立てよ」

彼は容赦しない。小枝で、ぐりぐりと腿を突く。

私は又のろのろと膝を立て、腰をあげる努力をした。

もう寒くはなかった。

そのために彼は、こんな仕打ちをしているのだろうか。突かれた所が、ほてって痛かった。その痛さと、立とうとするために力をいれるので、額に油汗がうかぶほどだった。

遠く観光バスらしいクラクションの音がしなかったら、私はまだ関野鼻の木の棒に背をこすりつけていなければならなかったろう。

○
彼は人がくると思ったのか、木の札に結びつけてあった縄をといた。どんな縛り方をしていたのか、まるで魔法を使うように、すぐとけた。どうして私は金縛りにでもなったように動けなかったのだろう。

彼は私にケープを着せかけてくれた。しかしまだ私の髪の毛が小枝にまきついていて、彼がそれをとってくれる間、私は再び寒さにおそわれ、ガタガタとふるえ出した。

「車へ帰りましょう」

私は哀願するように言った。車の中は温かいし、毛布もある筈だった。

「折角、ここまで来たのだ。あのさきまで行こう」

彼は髪の毛を小枝から離してくれたが、海中につき出している岩の突端を指さした。

みぞれは降ったりやんだりしていた。

足もとにくだけて散る波も不気味だし、雲と波とのきれ目がなく、沖の方まで重くうねっている海も恐ろしかった。

奥能登という言葉にロマンのひびきを感じた私だったが、ここはたしかに囚人のくる所にふさわしい。彼はこの風景の中に、ぐるぐる巻きにされた女を、みたかったのだろう。

「寒かったら、あたたかくしてあげるよ」

「もうかんにんして……」

彼が、あたたかくするという方法を思うと、もう私の体は、ほてってくる。そして、不思議に逃げ出してしまえない、何かを感じるのだ。私の血の中にも、異常なものがあるのだろうか。

岩といっても松の木もはえているし、灌木もはえている。しかし、岩は岩なのだ。断層をみせた瘤のような岩がごろごろしている。

つまり、いくつかの岩の間に土砂がかたまり半島のように海の中へつき出して、それが恰度、鼻のようなので関野鼻という名がうまれたのだろうか。

はだしの足に松の枯葉が痛かった。

自然についている道から少しそれて、大きな松がはえていた。根もとは何という草か、坐ったら、すっぽり体を包んでしまいそうに丈高く、ザワザワと風にゆれていた。

その松の木を拷問の柱にしようとしている彼の目を見た時、私の体の芯に何かが走ってすぎた。

「こっちへくるんだ」

いやといっても無駄である。

私は先ず枯草の繁みに膝をつけて、手をう

しろへ回さなければならなかった。

「さあ、これで本当の囚人になった」

彼は私を後手に縛り、二の腕にも縄をかけると、満足そうに私を見た。

どんな囚人だって囚衣を着せられている。

素肌を縄をかけられることはないだろうに……私は海に恥かかった。何千年、何万年の昔から、この岩に打ちよせている波は、こんな女の裸身を見たことがあるだろうか。

きびしかった昔の掟の中で、姦通した女がこんな風に縛られて、カラスの餌食にされたことがあったかもしれない。

旅人も通らないこの海の中へつき出た岩の松の木に縛りつけられて、放っておかれたらよってくるのは虫か鳥か……。蟻は体中を走りまわるだろう。そしてカラスは黒いかたまりとなって、空を舞い、息絶えるのを待つだろう。

もしかしたらこのあたり、昔は満潮になると、海の中へ没したかもしれない。身動き出来ぬように縛りつけられて、足もとから少しずつ、少しずつ潮がよせてきたら、どんな気持がするだろう。いっそ一ぺんに水に浸ってしまえば苦しさは一時ですむ。しかし、首すれすれに水につかっても、水の中へ没しな

つたら息は続く。顔にかかる波に、海水をのんでしまふだろう。何度か海水をのみ、鼻の穴の中から流れこむ海水にむせんでも、縛られた身をよじるだけだ。

やがて潮が引き、太陽が濡れた体をかわかしてくる。それと同時に、塩水をのんだ咽喉は渴き、飢餓と共に体の中から苦痛がおこってくるだろう。

「ああ」

と、私は溜息をした。

文字に書けば長いが、そうした思ひは一瞬頭を横切って通ったのだ。

彼が私を松の木に縛りつけた時、私は言った。

「このまま放ったらかして、帰っちゃ厭よ」
それは彼に、私をいじめる方法を教えているようなものだった。

「うん、それもいいね、この天気じゃ、ここまでする人もないだろうし、もし、あってもこの松の木にまさか人が縛られているとは気がつかない。助けをよべないように猿ぐつわをしておこうか」

「厭！ 厭！」

私は激しく首を振った。

恐ろしい。このままおかれるなんて恐ろしい。

い。

「一晚中ここにさらし者にされていたらどんな気がするか、味わってみるのも悪くないだろう。一日ぐらい何も食べなくても死にはしない」

彼は冷たくいう。

「厭！ 厭！ 何でもする。だから、ここへおいておくのだけはかんにんして」

私は言った。

「何でもするって、どんなこと？」

「何でも……鞭で打ってもかまわない。枝につるしてもかまわない」

「そんなの平凡だよ、何でもするってうちにはいらない。じゃあ、猿ぐつわはかんばんしてやるよ、どうせ、こんな姿を人にみられたくないだろう、ついでに首に縄をかけてあの枝にしばっておこう。ますますみじめな恰好になるからな」

「かんにんして」

私はいったが、縛られている身は何をさしようとかばめない。

新しい縄が私の首にかけられた。彼女は私のさきを上の方の枝へ放りなげて通した。

「ああ……」

と、私はうめいた。一瞬のどがしまるよう

に思えたのだ。しかし、彼はあまり強くひかず、ゆるみをもたせて、縄のさきを私の足首にかけて結びつけた。これで私はうずくまることも出来なくなった。

うなだれた首のつけ根から一本の縄が上へ引上げられている恰好は、首をくくって息絶えているようにもみえるだろう。

「さあ、こうしておいてやるから、ゆっくり海の色でもみているんだね」

彼は車の方へ帰ろうとする。

「厭！ おいていかないで！ 厭！」

彼の姿を追おうにも、振りかえることも出来ない。本当に行ってしまったのだろうか。私の視野には海しかない。

「厭！ おねがい！ おいていかないで」
私はとうとう泣き出してしまった。涙が頬を伝い胸の縄を伝う。身をふるわせて泣く私を縄が支えているのだ。

「先生！ いかないで！」

私は泣きながら絶叫した。

○

彼は私が泣きながらもだえている姿を、私の視野からはずれた所で見ていたらしい。縛られた女の姿を見ながら、ひとり何をしていたのだろうか。

私は松の木に肌をすりつけ、動くと言がしまるのをこらえながら、縄からぬけることを試みたが、それはただ、ザラザラした松の木で肌をすりむいただけに終わった。

「大分、荒れてたね」

彼が冷たい微笑をうかべながら、再び姿をみせた時、私はほっとした。

「先生のバカ！」

私は言った。声が甘えていた。

しかし彼はそれを知りながら私の言葉尻をとらえる悪い癖をやめようとしなかった。

「覚えておくんだよ、ボクをバカなんていったら、どんなお仕置きが待ってるか。それにキミはどんなことでもするって言ってたね。それをたのしみに今の所はといてやるよ。自分のいった言葉を忘れるんじゃないよ」

彼は言ったが、私は何でもいい、ここからのがれられればいいと思った。蟻やカラスの餌食になるのはごめんだった。

しかし彼は手を自由にしてくれただけで、胸や腕にまきついていて縄をといてはくれなかった。私は依然として囚人だった。

しかし、車へ戻って、ケープの上から毛布をはおり魔法瓶に入れてきた熱いお茶をのませてもらうと、やっと人心地がついて、海に

見せた狂態は単なる遊戯だったように思われてきた。

いつか、みぞれもやんで、厚い雲の間から一条の陽がさしてきた。

「きれいだわ」

私はやっと風景を美しいと思える人並の心を取り戻した。能登の屋根瓦は特産のものだときいたことがある。一枚一枚が美しく薄陽の中で光ってみえた。

車は海に沿って走り、やがて輪島に近づいた。輪島塗で有名な町である。ここは又海女でも名高い。

サイジという、男の用いるモッコフンドシ一つで海へもぐるという話を私は案内書で読んだのを思い出して彼にいった。

「モッコフンドシが……」

彼は興味深そうにつぶやいた。私は又彼によけいなことを教えたようだ。

「ボクは赤い腰巻一つで海へもぐるのかと思っていたのに、そうじゃあなかったのか」

彼は私に赤い腰巻をさせたのは、能登を旅するのにふさわしい衣裳と思っていたのだらうか。歌麿の絵に、海藻のような髪をなびかせて、腰巻をしぼっている裸身の海女の図がある。それをこの能登の海で再現しようとし

たのだろうか。

それにしても縄はよけいなのだが、彼は縄をかけられている女身をより一層美しいと思っているのだろうか。

海女も腰に綱を結んで海へもぐる。これを生綱いきづなといって、親や夫が舟の中でそのはしを持っていてのさそうだ。

彼は雑貨屋の前へ車をとめると、ひとりで店へ入っていった。

（フンドシを買おうとも思っているのだろうか）

私は彼が私に輪島の海女の恰好をさせたがっているのがわかった。しかし、そういうものを雑貨屋で売っているとは思えない。多分海女自身が木綿の布で手作りで作るのだろうと私は思った。だから、彼が雑貨屋へ入っても収穫はないものと安心していった。

しかし、店を出てきた時、彼は小さな紙包みをもっていた。

（フンドシがあったのだろうか……？）

私は不安になったが、わざと知らん顔をしていた。

彼は私の顔をみて、ニヤッと笑ったが、子供がイタズラする材料をみつけた時のように目が光っていた。そんな時彼はやっぱり好男

子というのか、美男子というのか、魅力に満ちていた。

私たちは、曾々木海岸に宿をとることにした。

私は、やっとセーターを着ることを許された。それでも、素肌にかかっている縄をとってはもらえなかった。それは私が彼の囚人であるこの旅の間中、続けられるのだろうか。

しかし、男もののハイネックのセーターは縄をかくしてくれたし、その上にケープを着れば縄とは名ばかりのものになった。腰巻もスカートにはきかえることを許された。

まだ日が暮れるには少し間があった。

私たちは時国家を観に行くことにした。

平清盛の妻の弟がここに流されたのだという。その時忠の息子時国の子孫が住みついて古い大きな家を構えている。上時国家と、下時国家とあるが、観覧料をとって一般に公開している。大きな柱、太い梁……。

彼ごのみの台所を私はだまってみていた。

床の間や、美しい彫刻のある欄間のある部屋よりも、彼が一番気に入ったのは、黒光りしている太い柱と、むき出しになっている梁だと思った。

それにしても、縁の柱も一本一本が仕置柱

になれるし、角材をすきまをあけて並べてある縁先は、もしその上に坐らされて、重石のせられれば、すぐにも責め場になりそうだった。

部屋の柱にしても、障子や襖を両側へあければ、柱はまるまる一本の仕置柱になれるのだ。

昔の人が、人を責めるためにそんな準備を考えて建てたのではない。ただ、現在の建築の様式では、柱が一本丸々孤立する建て方は少ないのだ。まして棟木や梁がむき出しになっていることも少ない。

彼が見まわしている視線を追いながら、私も又、この家に満ちている責め道具——それは普通の人が見たら、何の変哲もない柱でも——それを見る二人にとって意味のあるものをながめ廻った。

古い駕籠が縄で天井の梁にぶら下げられているのを見た時、私は自分がそこに縄でぶら下げられている幻さえみたのである。

私も又、いじめられることの好きな女に変身しつつあるのだろうか。

○

宿は静かだった。

風呂場は別になっていたので、私たちは若

い女中さんに案内されて家族風呂へ入った。やっと私は縄をといってもらえた。けれど、まだ縄をまとっているように、縄目の筋が残っていた。

「当分、銭湯へはいけないね」

彼はからかうように言った。

「多分、あしたの朝までに、もう一寸この旅行のスタンプが君の体におされるよ」

「何をしようというの？」

「それは出てからのおたのしみ……。昨日お風呂でいじめたから、今日のはかんべんしてやるよ。せいぜい温まっておくといいよ」

何をしようとしているんだろう。

どんな目にあわされるのだろう。

それは恐いような妖しい期待だった。

海が近いのに漁はないらしい。どこでどれたものかマグロのおさしみの色のかわっているようなものが食膳にのせられていた。

しかし品数だけは豊富にそろえてあった。思えば昼食もろくろく食べていなかった。

もし、この夕食を目の前にして、柱へ縛られてしまったらどうしようと、部屋を見まわした。

幸いこの部屋には床柱がなかった。床の間はついていたが、幅のせまい装飾的なもので

違い棚のような戸棚につながり、テレビが置いてあった。

「キミの考えていることはよくわかるよ。床柱がなくても、縛りつける所はどこにでもあるよ。この卓の脚でもいいし、テラスの椅子でもいい。しかし、今日は先ず夕食を食べよう。ボクも腹が空いた」

私はいそいそと、私のスーツケースからヘネシーのブランデーをとり出した。彼の好物である。

「いつの間に用意したの？」

彼は目を輝かした。

「しかし、こういうことをすると、キミはよけいに苦しまなければならないんだよ。僕は女への愛情を僕独特の方法でしか表現出来ないのだから……」

彼は言った。

「君を可愛いと思う。そう思うとよけいじめたくなる……」

「いいのよ、いじめても……」

私は小さく言った。そういう言い方をするのが恥かしかつた。それはまるで、普通の恋人が深く通じることを催促しているのと同じびきをもっていた。

「こっちへおいで」

彼はいうと、手をのばして私の髪の毛をギョウツとつかんだ。そしてぐるぐると巻くように持って引張った。私は生えぎわの毛がぬけるかと思う程痛かったが小さく「あっ！」と言っただけだった。

彼は私の髪を思いきり引きながら唇をかさねた。それは苦痛の陶酔の混った甘美な接吻だった。

女中がごはんをはこんできたので、それはそれ以上に発展しなかった。

「このあたりには、面白い方言があるんだろう？」

彼は女中にきいた。足音で不意に二人が離れた余韻をごまかすためだったのだろう。

「はい、観光バスでいうそうですけど、お客さん達はお車で来なさったから、きいてないんですね、アチャマア カイダレニ チョッパズイテ タンボ チャカマエタ——何いうてるかわかりますか？」

「いや、わからん、それ日本語？」

「はい、アチャマは子守、カイダレは縁側、チョッパズイテはかがんでというような恰好をいうのです。タンボはトンボ。子守が縁側にひざまずいてトンボをつかまえたというのです」

「フーン、でも、あんたは一寸もなまりがないね」

「そんなことありませんけど、学校で標準語を教わりましたから……」

なごやかな夕食だった。

嵐の前の静けさともいえるのだろうか。

女中が夕食の膳をさげて、寝床を敷き、枕元の水を用意して去っていった時、私の胸はドキドキと鳴り出した。このままゆっくり眠らせてくれる彼ではないことを、私は知りすぎていた。

「さあ、裸になるんだ。全部とるんだ。そのかわりフンドシをしてやる」

「フンドシ？」

「モッコフンドシのかわりに荒縄でフンドシをしめてやる」

「そんな……」

「キミは何でもさせるといったらう。さあ、全部とるんだ」

モッコフンドシというものがどういふものか見たことはない。しかし、縄のフンドシなんてあるだろうか。

彼は太い荒縄をとり出した。きつとさっきの雑貨屋でもらってきたのだろう。

「かんにんして、そんな……」

いくら何でも、ひどい。

「そうか、おとなしくしないんだね、じゃあまず、おとなしくさせてからにしよう」

彼は別の細引をすばやく私の胸にかけた。湯上りに着ていた宿の丹前の胸をおしひろげるぐらい彼にとって何でもない。

上半身を裸身にして後手に縛ると、部屋とテラスの間の欄間へその縄をかけた。私の上半身はもうもがきようがなかった。彼が私の丹前をぬがせてしまうのは、わけのないことだった。

「パンティはかんべんしてあげよう。ボクもそこまで見る権利はなさそうだ」

彼はいうと、薄いナイロンのパンティの上

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

から荒縄のフンドシをかけた。縄の毛ばだった繊維が、チクチクとやわらかい肌を刺戟した。

欄間に手を吊ったのは、フンドシをつけさせるためのものだったのだろう。彼は細引をゆるめると

「何だっけ、チョッパズか……チョッパズケ」

と、私の背を押した。

私は縛られている身も忘れて笑ってしまった。荒縄のフンドシをかけた女に「チョッパズケ」は、どうにもおかしかった。

「笑ったな」

彼はいうなり、手にもっていた細引のさきで、ピシッと私の背を打った。

「あっ！」

思わず悲鳴をあげて、反り身になってさけようとする、肩に、胸に、細引の鞭が走った。

縄目の痕とは別に私の白い肌に赤い筋がえがかれた。

「どうだ、いい気持だろう。自分の姿を見たか。さあ、立て、姿見で見せてやろう」

私は彼に縄尻を引かれて、よろけながら、部屋の隅においてある三面鏡に自分の姿をう

つしてみせられた。

それはみじめな姿だった。荒縄のフンドシは赤いこしまきよりも私を、とらわれた動物のようにみせていた。

「いいものがある」

彼は鏡台のわきの手拭かけをとると、私の頭からそれをかぶせた。それは首かせをはめられたような恰好だった。

「さあ、チョッパズいて部屋の中をまわるんだ」

私は、もう笑わなかった。

彼は後手に縛った縄尻と、手拭を持って、馬でも追うようにせきたてる。私は膝をついてぐるぐると部屋の中をまわった。前のめりになると、彼は手拭かけの枠を引っ張った。

「もう少しむずかしくなるよ」

彼は後手の縄のはしを足首に結びつけた。私は膝までの人間のように、立つことも坐ることも出来なくなった。

「歩け、歩くんだ」

彼は首かせのような枠を引いてうながす。私はヨチヨチと膝で歩く。

「よし、今度はいいというまで、ひとりで歩け」

そういうと彼は、おかしい私の姿を見なが

ら、煙草に火をつけた。

「どうした、止まってしまうと、火をつけるよ。いいか。ボクはそういう女のみじめな姿を見るのがたのしいんだ。よかったよ、能登へきて……。フンドシとチョップズクのを教わったからね。どうした。歩けないのか。いうとおりにしないと火をつけるよ」

私は必死に歩いた。

「もっと早く……もっと早く廻るんだ」

「私は敷いてあるふとんのまわりをぐるぐると追いかけるように膝でまわった。膝が畳ですれて火傷をしたように痛かった。

無理なポーズで、無理に筋肉に力を入れていたせいか、急に太腿が痙攣した。

「あっ、痛っ！」

私は横に体ごと倒れてしまった。

「どうしたの？」

「腿がつれて……」

「すぐ直るよ」

彼は足の結び目をほどこしてくれた。

私は横倒しになったまま、荒い息をついていた。

「もう寝かせて……疲れた」

「弱音をはくのか。何をされてもいいといったじゃないか」

「でも……もう動けない」

「じゃ、動かなくてもいいよ、動かなくてもいいようにしてあげるよ」

「どうするの？」

私は又、彼が何をしようとするのか恐かった。いくら若い私でも、昼から……いいえ、昨日からの責め折檻で、体が崩れそうにだるかった。

「ゆっくりさせてあげるから、その椅子に腰かけなさい」

私はテラスの藤椅子に腰をおろした。縄のフンドシがチクツとした。

外から見えないようにカーテンを引いてあったが、椅子に腰をおろして、深い息をする、と、波の音がきこえた。

そうだ、海が近かったのだ。

私は、ふっと思った。

「まだ寝るには早い、ヘネシーもまだ残っている。ここで、のもう」

「ええ。じゃあこの縄をといてくれるの？」

「それはまだだ。もう少しみせてくれ給え、これがボクの愛し方なんだ」

彼は私を藤椅子に縛りつけた。

それが彼の愛情というなら、私は彼の愛情にぐるぐる巻きになることに満足しよう。

しかし、ただ、藤椅子に縛りつけることだけで満足する彼ではないことを知っている。

彼はヘネシーの瓶をとってくると、コップへそれをついだ。そして、別のコップに水を満たしてくると、それを私の頭にのせた。

「コップの水をこぼしてはダメだよ」

彼は、いった。

私は、とうとう又動けなくなった。

それなのに彼はヘネシーのブランドーを私の唇に近づけて「飲め」という。

しかし、首を動かさずにどうしてそれが飲めるだろう。

「飲め、飲まないか」

彼はギュウツと私の二の腕をつねった。

「あっ」

と、その痛さに、私は首を動かしてしまった。冷たい水は私の頭から肩にかかった。

「こぼすと、お仕置きだよ」

彼は二つのコップに水を入れてきた。

「さあ、胸をそらしなさい」

私はうしろへのけぞるようになされた。その胸と肩の間へ彼はコップをのせた。それは、まるで曲芸のような恰好だった。

「苦しい」

私は訴えた。

縛り随想 “大きな魚” 早 木 夢 二

ひと頃は、ずい分遊んだので、深いつき合いをした女の数も相当になる。

そんな女たちに、例外なく縛りのアタックを試みたことはいうまでもない。成功した女もあれば、失敗した女もある。失敗した女とは、まもなく別れることになった。

全く単純な割り切り方で縛られるかどうか、私の愛情のパロメーターであった訳で、そのために、かなりひどい仕打ちになったこともないではない。しかし又、中には私を軽蔑し罵って、自分から去っていった女もいるのだから、広い目で見ればあいことといえるであろう。

その女にとって縛りを知ることが幸せであるかどうかは判らないし、これは又どうしようもない業であるといえようが、彼女たちが今幸せに暮しているか、彼女たちにしてみたら、行きずりの私がつけっ放しにした炎が不完全燃焼をしているような、心満たない日々を送っているのではないかと思って、時々、ふっと申し訳けない気持ちになるのである。

先方は案外、私のような変態野郎と別れてサバサバしているのかも知れないが、拷問プレイを終わって、身も心も満足し切ったように

菱縄の喰い込んだ裸身を、余情去りがたしとうごめかしている慶子を見てみると、こんな生活を拒否した女が幸せである筈はないと我ながら呆れるほど、そう思い込んでしまっただけで、そんな女に対して仕返しでもしているような快感を覚えるのだ。

中には、すっかり、縛りの世界に浸り込んで、私を顔負けさせるようなプレイの醍醐味を味わっている女もいるかも知れない。そうだと、私は何か償いでもしたようなホッとした気持ちになる。出来るなら、そんな女と再会して、お互い欲も得も忘れた境地で、縛りを楽しんでみたいと思うのである。

虫のいいことを言いなさんな。私の縛りはあなたで覚えたんじゃないよ。

私の虫のいい願いは、そんな一言で、けし飛んでしまうだろうが、火をつけた、そもそもの下手人は私であることに間違いない。

何と言われても、私がそつと下ろした芽が意外に大きく育っていることに満足して、彼女の縛りをここまで育てたという誰かさんにいささかの妬心をいだきながら、私流の菱縄股間縛りを施し、ふと釣り落とした魚の大きさをボヤきたくなるかも知れない。

「かんにんして……」

骨が音を立てて崩れるような気がする。

「これを口にくわえろ」

彼はいつとりに行ったのか、洗面所にあつたコップにまで水を満たしてきて、私の口をあけさせてその上へコップの底をのせた。

「やめて、かんにんして」

という言葉は、獣がほえているような変なひびきで口から出てくる。

「いいね、面白いポーズだよ」

彼は私の苦しみをよそに、ブランドーをなめるようにのんでいるらしい。らしいというのは、私は身動きしたら、三つのコップの水をあびることになるし、あとに又、どんなお仕置がひかえているかと思うと、微動も出来ないのだ。

口をあけ、わけのわからないうめきをあげ彼の目の前にさらし者にされている。いつ許されるともわからない、責め苦だった。

たしかに、痛い目にあっているわけではない。ただ縛られて、のけぞらされて、コップをのせられている。それだけなのだ。

動きようがないから静かだった。

シーンとした夜のしじまの中で、私の息だけが荒かった。



カット・春川ナミオ

わが半生記……

M の 道 程

並 原 新 一

私が始めてM的体验をしたと憶えているのは、六才頃のことだから、私のM生活もずいぶん長いことになる。

それは、小学校へ上っていたかどうかはつきりしないが、私はいつものように、雨戸を閉めて歩くお手伝さんについて、はなれ座敷に來た時だったと思う。うつ伏せにねころがって、彼女の仕事ぶりを見ていた。殆ど閉め終って、あと二枚か三枚になり、夕方の暗さと共に座敷の中は暗くなった。幼少の時のは

るか遠い日の記憶なので、たしかなことはい出せないが、私はその時、何のきっかけもなく、目の前を動き廻るそのお手伝さんの足の下にふまれたと思ったことはたしかだったように、何のためらいもなく彼女に、背中の上に乗るように言った。勿論、彼女は断ったが、しつこくせがむ私に根負けしたのだろう。おそろおそろという形で私の背中に足をのせた。どの程度踏みつけたのか、その時にどういったのか、あとの状況は憶えていない

が、とにかく、私のM的体验の第一歩であつたようだ。

同じ頃、私は、今持っている女性の放尿に対する関心の芽ばえを感じている。庭のすみの方で一人、何かして遊んでいた時のことである。

同じお手伝さんが急ぎ足にやって来て便所に入った。無意識のうちだったが、私の遊んでいた所は丁度、汲取口のすぐ近くだった。やがて中から聞こえてくる烈しい音に私はび

っくりした。自分とはあまりにも違うその烈しさは、幼ない心の中にも印象的にひびいたようだった。

同じ年頃のもう一つの思い出として、廊下を拭き掃除しているお手伝いさんのお尻の匂いを嗅いだことがある。ひざをつき、お尻をもち立てて廊下を拭いていた彼女について廻ったのだが、その時の強烈な臭気を今でもおぼえているような気がする。

以上三つのことが、幼ない日におけるMの芽ばえであったように思われる。

少年時代

小学校に上り、少年期に入ってから、いくつかのM的行動が記憶の中に存在する。

三年生の時のこと、秋も深いある日、担任がUという女の先生で、算数の練習問題を出して、出来た者に黒板に答を書かせていた。

私は何となしに、先生をながめていたが、何故か、そのスリッパに包まれた先生の足が気になる、その足の下にふまれている教壇の床のことが気にかかった。先生は中々の大柄で体重も六十キロ以上はあっただろうか。そこで私はいたずらを思いついた。それは休み時間に女の子たちと校庭の野菊をつみとって机

の中に入れてあったのを、先生の足にふませることだった。皆は一生懸命に問題をやっている。先生も生徒に書かせている黒板をみている。私はそっと音のせぬよう前に出て、二三本の野菊の花を先生の右足のすぐ横においた。先生が足を横にやれば、その花は当然この足の下にふまれる運命にある。私は席にもどり、じっと息をこらして、次の一瞬を待った。

一人の生徒の解答をみ終った先生は、次の生徒へと移るため移動した、ああその瞬間。私のおいた花は完全に先生のスリッパの下にふみしかれた。私は一瞬息をのんだ。何故だか自分にも分らない。しばらくたって、先生は、更に次の生徒の方へと移動した。右足ののけられたそのあとには、果してべしゃんこにふみつぶされた無残な花の姿があった。私は訳のわからぬ胸のときめきを覚えた。今から想像してみると、自分がその花になって、女性の重みによってふみつぶされたい、ふみつぶされる時の恐怖と苦痛を味わいたいと願う気持ちが、どこか心の奥深くにあったのではなからうか。

少し年も進んで、小学校五年生の時。これも学校での出来事である。私の組は今日でい

う男女共学組で、当時、私の学校ではこれを男女組と呼んでいた。男子、女子の数はほぼ同数であったが、ある日、休み時間も終わって児童たちが教室へ入って来た時だ。私は、女生徒たちの席の通路に仰向けにねころんで、女生徒に自分の体をまたいで通るように言った。大抵の女の子たちはいやがった。地方の小都市でもあり、今から三十数年も前のこと約半数は和服であった。いやがるのが当然だろう。でも中に数人勇敢なのがいて、平気で私の体をまたいで通っていく子がいた。まだ性というものを知らぬ当時の私としては、ただ女にまたがりたい、またがれるという屈辱感を味わいたいという気持ちであったようだ。私が始めて女性の下穿きに接し、その匂いを嗅ぎ、それをなめたのが、同じ五年生の時で、これは今でもはっきり記憶の中にある。

その頃、私の家に、父の会社の同僚が急に転勤になったとかで、その娘さんを預っていた。女学校があと一年ということで転校もよくないということになった。その年の秋、十一月頃だったと思う。私は風呂場の前を通りかかったが、丁度その娘F子が風呂に入ったところらしく、脱衣場の戸が半分ほど開き、タオルかけに何か黒いものがかかってい

るのがみえた。それが黒いメリヤス製のズロースだった。(当時の女学生はみな黒いズロースを穿いていたようだ)他の衣服はかごの中にに入れてあったのに、どうしてズロースだけをひっかけておいたのか分らないが、それは丁度私の顔の高さの所にあった。その頃は今のように意識して女の下穿きを求めるなどは考えなかったけれども、こうしたふとしたチャンスから、それに接することになったのである。私はそれを手にとって拡げてみた。現在では、殆どみられない型で、すががゴムでしまり、股の部分が男物のズボンのように十字にぬい目のあるものだった。私は無意識に鼻をあてて匂いを嗅いでみた。甘ずっぱい匂いにまじって、アンモニアの分解した強い臭気が鼻にしみ通った。私は更に裏がえして内側の匂いも嗅いだ。その臭気は表より一層ひどかった。そして私はなめてみた。ピリツと舌をさすようなしげきと、かなりの塩からさが感じられた。生地が黒いので、その汚れの程度はあまり分らなかったが、大分長く穿いたものようだった。その時はそれだけで終り、ひきつづき彼女の汚れたズロースを求めることはしなかったが、私のフェチの目をさませた原因の一つになっていることは事実であろう。

中学に入る頃から、次第に性的な興味も深くなってくるわけだが、中学時代からハイティーン年代にかけては特記すべき体験もなくただ、一、二度、姉のズロースの匂いを嗅いだことがあったが、それ程の感激も起こらなかったようだ。

ただ、この頃「おんな」という言葉を非常に意識するようになり、又「ふむ」「ふみつける」「ふみつぶす」或いは「またぐ」「またがる」などの言葉をきいたり、みたりすると興奮した。特にこれらの言葉が女性の口から出されると一層胸をたかぶらせた。

又、大きなお尻の女性が椅子に腰掛け、重みでぐっとめりこんでいるのを実際に見たりそんな写真や絵、あるいは女性が自転車にまたがっているのをみた時などは、やはり胸がおどった。

私の中学時代の半ばごろから戦争がだんだん烈しくなり、そんなことに心を向けているひまがない程、日本人の生活は大変な時代がつづいた。いわば私のM体験も一時ストップの形となったようだ。

すべてが配給制度になったその頃、町内の

世話役からチリ紙の配給が伝えられて来た。その連絡に来た近所のおばさんが、「女の方にはチリ紙の特配があります」と言ったことが印象に残っている。女性がオシッコしたあと、紙を使うらしいことを知ったのもその頃だったと思う。

青年時代から今日まで

悪夢のような戦争は、ようやく終了した。昭和二十年から数年間、日本国民は敗戦による戦時中以上の苦しい生活を送った。しかし一方、性の開放はせきをきったように全国に広がり、いわゆるエロ、グロ、カストリ雑誌が街に、はらんした。

少し時代は前にもどるが、私が女性の放尿に意識して興味を持った動機は、まだ戦時中のことであった。その頃、私はある私立の中学(旧制)に勤めていたが、ある日のこと、一生徒の母親が学校にたずねて来て、帰る時に、私に「御不浄はどちらでしようか」とたずねた。丁度私も行きたいところだったので案内した。旧制の男ばかりの中学校の便所である。とかくやぼったく、あまりきれいではないし、ムードなど更にない。私は少々恐縮しながら大便所の方に案内した。女人禁制で

はないが、この便所は女性に使用されるということは滅多にないことである。彼女が入った便所の向かい側の小便所で私も用を足した。その時、衣ずれの音（彼女は和服を着ていた）につづいて、やがて聞こえてきたのが実にすさまじい音だったのである。それまでも女性の便所での音は何度もきいてはいたのだが、こんなに勢いよく、烈しい水音は初めてといってもよかった。彼女は四十にはまだ少し間のありそうだったが、非常に大柄でよく肥えており、仲々若く見えた。大分こらえていたとみえて、はげしい流れはしばらくつづき、やがて紙の音、チリ紙も今日のように上質のやわらかいのが充分にない時代のこと、何の紙かしらぬが、ガサガサ、ジャリジャリと大きな音を立てていたが、やがて出てくる気配に私はあわててそこを立去った。しばらくして彼女は学校から出ていった。夕方近くで、生徒は誰もいないのを幸い、私は再び便所にひき返し、先刻の彼女のあとを窺った。悪臭の中に交って、そこにはのかな女の匂いを感じとった。滅多に女性の訪れることのない中学の便所、そこにたった今、若いグラマー女性が入り、すさまじい放水音を響かせた。便器は果して何を思っただろうか、な

ど想像しながら、便槽の下をみた。その真中のあたりに、一かたまりの白い紙、まちがいはなく彼女が使った紙だ。女性の、ふくよかなやわらかい肌につれ、その残滴を吸った紙の一かたまり。私はしばらくながめつつ、色々な空想にふけた。こうしたことがあって、次第に女性の放尿に興味を持つようになり、今日に及んでいる。

さて、再び戦後の時代に移って、昭和二十四、五年頃だったと思うが、私の勤めていた旧制の中学校も、新制の中学校、高等学校として再出発し、男女共学となった。もとが男子校だっただけに、女の子の入学は少なかったが、高校の方では三分の一あまりの女生徒が入ってくるようになった。先生もこれまでのように男ばかりでなく、若い女の先生も何人か採用された。こうして学校は花の咲いたような、はなやかさを持つようになった。

この頃から私は、女性の体臭に関心を持ち始めた。幼ない日に、お手伝さんのお尻の匂いを嗅いだ覚えはあるが、本格的にそれを求め始めたのは青年期の、この時代であった。そしてそれと同時に女性のお尻の下に敷かれるということにも強い魅力を感じるようになった。まず私が目をつけたのは、高校の女生

徒たちの勉強椅子（机と一組）の上におかれた座ぶとんであった。授業が終り、生徒たちの帰ってしまったあとの、しんとした教室のあちこちにおかれた色とりどりのはなやかな座ぶとん。教室も女生徒が入るようになってから非常に美しくなった。

私は、女生徒たちの座ぶとんの一枚一枚を手にとって、そのへしゃげ具合、そしてその匂いをしらべた。高校生も上級生になると、もう一人前の娘で、お尻も中々大きい。その大きいお尻の下にしかれる座ぶとん。一日に数時間もお尻の下敷にされている座ぶとんを手にとってみることは、当時の私にとって非常に興味深いことであった。持主である生徒の体格と座ぶとんのへしゃげ具合。その頃は今のようなエバースソフトはなく、すべてが綿入りのものだったから、長い間の重圧によってぺしゃんこになるのだった。当然のことながら、体の大きい生徒の座ぶとんはひどくへしゃげていた。そこに私は女性のお尻の重みに征服された座ぶとんの姿をみるのだった。次にその臭気だが、共通して言えることは年代があまりちがわない二十才前の乙女たちのそれは、一般に甘ずっぱい匂いということである。一口に女性の体臭といっても、お尻

の前後で違うわけだが、椅子の上におかれ、お尻の下にしかれる座ぶとんの臭がされる匂いは共通している。しかしその共通した匂いの中にも、やはり個人差がかなりあるのは仲々面白い。やはりきれいな好きの生徒のはあまり匂いも強くない。これは下穿きを度々とりかえるからであろう。反対に座ぶとんが非常にくさくなっているのはあまり下穿きをかえないためだろう。匂いの一番強いのはまだあたたかみの残っている時である。放課後、私は時々生徒たちと教室で話し合ったことがあった。その時、彼女らはそれぞれの座ぶとんに坐る。(自分のとは限らない)そして時間をかせぎ、彼女たちが帰っていった直後の、あたたかみの残っている座ぶとんを手にとり匂いを嗅ぐ。それは実にすばらしい香りであった。

座ぶとんは女の先生方のも嗅いだ。若い先生たち——それは成熟しきった女性の——のはちきれんばかりのお尻の下にしかれた座ぶとんの匂い。それは、乙女たちのそれとはちがった一種濃厚な香りであった。普通、セクシアルな意味では方面違いといえよう。ただ私の場合、単にその匂いを求めるというだけでなく、お尻の下にしかれてその重みにべし

やんこにつぶれる、と同時にくさい目に会わされるといふ、M的な気持が強かったのである。

もちろん、女性本来の匂いにも又、別な意味においてひきつけられる。一般に女性は異性をひきつけるための一種の芳香を放つものとされている。たしかにそうである。しかしそうした芳香に値する匂いばかりではなく、不潔になると悪臭を放つようになる。病的な悪臭は胸がわるくなるが、健康な若い女性の匂いは非常に魅力的である。私は、女性の肌に直接密着してその臭気を吸いこんだパンティはもとより、その上に穿く長ズロースやスラックスの当該部の匂いはこの上ない芳香に思える。実際女性に穿かれたスラックスは非常にくさいし、又、女性に乗られた自転車のサドルなども強い臭気を含んでいる。こうして私は今もなお、女性の匂いを求め、座ぶとんやスラックス、自転車のサドルなどの移り香を嗅いで自己をなぐさめている。

私が女性の穿き汚された下穿き類にひかれ始めたのもこの頃からである。小学校五年の時に女学生のズロースを、又、中学生の頃に姉のズロースの匂いを嗅いだことはあるが、

その後チャンスもなく何年かたったある年の春、親戚の従姉が数日泊りがけで私の家に来た。彼女は私より二つ三つ年上で、その頃、三十を少しすぎた位で、幼稚園に通う子供を一人連れて来ていたが、私が外出先から帰ると彼女は丁度、風呂に入っていたことがあった。子供はすでにねていたし、うちの家族たちもそれぞれ床に入っていた。私は風呂場の戸の外にある彼女の衣服類をふとみた。上衣スカートなどにまじってスリッパに丸められたショーツを発見した私の胸は早がねを打った。以前に二、三度ズロースを手にした時は別にそれほど興奮しなかったが、この時はやはり意識してのことだったのだろうか。大げさにいうと、ぶるぶると手がふるえるのをおぼえる程であった。裾にレースのついた綿メリヤスであった。私はまず表から目標個所を点検してみた。女性のショーツは股布が二重になっている。まだ、新しく真白だったが、一部分だけ少し変色していた。私はその汚れの匂いを嗅いだ。ツーンと鼻をつく臭気、これこそ女の匂いであった。以前の女学生のズロースの時とは違った匂いである。ついで私は裏返してみた。その汚れは非常にひどく、相当広い部分が何かしつとりとめった感じ

だった。臭さは表の比ではなかった。まさに強烈な臭気だった。女の穿いたショーツはこんなにもひどく汚れ、くさくなるものかと思うくづく思った。なめてみる。ピリツとした塩からさ。その夜、皆がねしずまってから再びその汚れたパンティを洗濯物の中から取り出して自分の部屋に持ち入り、ショーツが穿かれた時のことをあれこれと想像し、もしショーツに生命があったら、自分のおかれている運命をどのように思っただろうなどと空想にふけりつつ、その香りの中に、溺れこんでいた。

その後も、女性の汚れた下穿きに接するチャンスは何度もあり、その汚れ具合や、臭気についていろいろとしらべたが、やはり若い女性のものの方が魅力的であり、望ましかった。

た。デパートなどの女性下着売場で、山とつまれた色とりどりのショーツをみる時、これらの一枚一枚が、どんな女性に穿かれ、どのように汚され、どんな匂いがかがされるだろうかと想像し、又アパルトなどにブラッとはされた洗濯物の中にあるショーツをみては、あれはどんな女性に穿かれたのだろうかなどと想像することはたのしいことである。

私が「奇ク」に初めて出会ったのは、もう十五、六年前になるうか。何の気なしに手に取って見た時のおどろき、ショックは今でも忘れられない。そこに自分がMであることを発見した私は、しばらく胸のどうきもおさまらず、気持をおちつけるのに時間を要した。その夜はすみずみまで読んだ。そして男性マ

ゾが自分と同じような性格にあるのをみて、ある種の安心感さえ覚えた。世の中には自分とよく似た男も居るのだ、と。それ以来、今日まで「奇ク」は私からきりはなすことができない存在となり、どれほどなぐさめられているか知れないと思う次第である。

女性の放尿についての私の関心は前に少しのべたが、関心の焦点はその激しさであり、その放尿音であり更にあとのチリ紙へと発展する。女性の激しい水音は、いやが上にも私の胸をかきたてる。一度でもよいから若い女性のすさまじい放尿を顔一面に浴びせられたいと願いつつも、今日までそのチャンスにめぐまれていない。だが、何とか工夫してびんに受けて飲んだことは数回ある。しかし、時間のたったのは全然だめで、直接口に受けることが理想ではあるが、あのような激しさでは、チャンスがあったとしても全部飲みこむことは恐らく不可能だと思う。誌上にはよくネクタール拝受で、こぼさずに全部飲んだとあるが、どうも不思議に思えてならない。ところで、用足し後の紙について——。このことに私は非常な興味を持っている。放尿音もさることながら、紙の使われる音はとて

天星社刊

《限定版グラビア写真集》 在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」 一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集「女王様に飼育される日々」 一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

も楽しい。やわらかい紙はソフトタッチな優雅な音。クレープのかかった紙だとジャリジャリという音。いつかもあるトイレで、チャシか何かを利用していいらしい、ずいぶん大きな音が聞こえたことがあった。

女性が紙を使うことに、私は女性の残酷さを感じる。使う方の女性にすれば全く当りまえであろうが、紙に対して何の配慮もなく無雑作に使い捨てるところに、私はM性を感じるのである。そして私は、使われたチリ紙を今までに相当数あつめて、その実態を調べてみた。このことは、数年前の「奇ク」に掲載して頂いたものでここでは省略するが、それらのチリ紙の一つ一つを、こまかくしらべるのは、とても楽しいことである。

一番実感的だったのを一つあげると数年前のこと、あるチャンスから一人の若い女性がトイレに入るのを見、私もすぐ横のトイレで用を足したのだが、彼女は手に数枚の真白なチリ紙を持って中に入った。私はドキドキさせる交響楽ののち聞こえる紙の音。じっと聞耳を立てたのはいうまでもない。やがて彼女は急ぎ足に出ていった。待ってましたとばかり、誰もいないのを幸い、私はそのボックスに入る。水洗ではなく、前の方半分が受け皿

のようになっていて便器に残された一かたまりの紙。まさにこの上ないおくりもの。おどる胸を抑えるのに苦労した。紙は丸められもせず、使われた時の形のまま残されていた。私は注意深く扱う。四枚重ねたのがそのまま裏のザラザラした方の真中辺りがねじれたようになつていた。だ円形に湿地帯が出来、ころもち、まだ温かみさえ感じられる程だった。私はその時の状況、彼女の手にとのようにつつまれ、どのように使われたかなどと想像し、もしも自分が、チリ紙だったらどんな気持だっただろう、などとも考えてみた。

なる。私は、女性の大きな重いお尻に、鼻も口も完全にふさがれて、息もできず苦しむもだえた末、その臭気をいやというほど嗅がされたい。女性の臭気がいかに強烈であるかはそのお尻にしかれた座ぶとんや椅子、穿かれたスカートやスラックスなどでも、よく分かる。その強烈な匂いを私は直接、いやというほど嗅がされてみたいのである。一般には、「くさい」とされているその匂いは、私にとっては、まさに芳香なのである。

今まで相当数の使用済紙を集めたが、その一つ一つは、まことに十人十色、私には、まさに貴重な価値がある。

第二は、女性の身につけた衣類に対するフェチである。女性の肌、特にお尻に密着した下穿き類、又間接的に穿かれたスカートやスラックスなどの匂いを求める。

以上、長々と私の過去、歩んで来た道を思いつくままに綴って来たが、これらのことから私のM性は大体、次のようになると思う。

第三は女性の小水に対する関心で、これは女性の小水そのものより、放尿動作に対するものであることは、この一文にも述べた通りである。若い女性による勢いのよい音は、私の胸を昂ぶらせ、顔一面に浴びせられたいと思うものである。

第一に、女性のお尻の下に敷かれ、精神的な屈辱を与えられると共に、その重みによる肉体的な苦痛をも味わいたい。特に私の願ひ求める所は顔面騎乗にある。これは完全に征服されることを意味し、特に顔を尻に敷かれるということとは最大の恥辱を受けることに

第四に、私は女性の用足し後のチリ紙を求める。これは先の女性の放尿に関係があるがチリ紙に対する女性の一種の残酷性を感じるのと共に、あくまでも受身にあるチリ紙の立場に立って考えるM性である。



オレと云う人間は、読むのは大好きだが、書くこととは大の苦手である。字も余り知らないし、文を作ることなど面倒くさいからだ。

しかし、オレは書かすには居られない様な気持ちにかられてきたので、やむなく書く気になった。間ちがった字や、ヘンなところがあつたら奇クの方でいいように訂正して呉れ。

オレは悲しいことに今は病身である。ムチ打ち症というやつで、十一月頃追突されて、首の骨がおかしくなりやがって、まだよくならない。相手がええとこの奴なので相当見舞金を持って来て呉れたので、何とか寝て暮せるが、やっぱり男のオレが働かないと家計は

告

白

乳房の刺青

和泉五郎

苦しい。今はオレの愛する女房のヤツが一生けんめい、働いていてくれる。二才上の姉さん女房で、オレの為には献身的である。女房の名は弥栄と云う。可愛い女だ。

オレが船乗りしていた頃、港で知り合い、どういんにてごめ同様にして得た女だ。オレは仕事の都合で、一度、船に乗ると、短くて一カ月、長い時は半年以上も帰らぬ時があるので、その間に逃げられたり、浮気されぬよう、オレは遂に思い切って、弥栄の体にイレズミをしてしまった。今は後悔している。しかし、その時のオレは夢中だったし、弥栄もオレに惚れこんでいたから、何でもオレのいいなりになってくれた。最初は腋の下に、ち

っぽけなオレの名の頭文字をローマ字で彫り込んだ。

船乗り仲間ではよくやることだし、正直いって、オレの或る個所にも彫ってある。次にオレは弥栄が浮気しないよう、剃毛してローマ字を彫り込んだ。毛が伸びたら分らなくなる。これはオレの愛情の表現だ。しかしよく考えてみれば、隠れてしまえば意味がなくなる。オレはそこで、遂に思い切って、弥栄の一番よく見える、しかも女の急所といわれる乳房に刺青を彫ることを決心したのである。

そのことを告げると、ヤツはすぐく反対した。風呂にもゆけぬというのだ。その時オレ

は、風呂ぐらい作ってやる気で、毎日毎日、長い間かかって口説き、とうとう弥栄を口説き落とした。

オレは奇クの連中がいうサジストの方である。ただそのままイレズミしては面白くないので、弥栄の手足を四方にくくりつけ、身動き出来ぬようにし、叫び声や、うなり苦しむ声が外に洩れぬよう、口の中いっぱい布をつめこみ、かたかくたく猿ぐつわをはめ、いよいよイレズミにとりかかった。

一ぺんにほって、熱が出たり、苦しんでも困るから、ぼつぼつと彫って、右の乳房の八重桜が三日間、左も三日間かかり、乳と乳との谷間の菊に浪をあしらったほりものは一カ月ぐらい休んでからやり始めた。しかしオレが航海にゆくことになり、浪は中途半ばでとうとう未完成になってしまった。余程痛かったのか、航海から帰って、続けるといったら何でも云うことをきくから勘忍してくれというので、もうそのままになってしまった。

オレがガキの時から、ほかの課目は全然ダメだが、絵をかくことだけは好きで、よく勝手な絵をいろいろ書きつづけてきた。それが役に立ったのだ。家におる時など、奇クの絵を参考にしたり、『花と蛇』や『カメラハン

ト』の文を想像して、いろいろとどぎつい絵を描き、独り楽しんできた。オレの手文庫には三百枚ぐらいあった。オレがチョイト小股の切れ上った女と、横浜で浮気した時、弥栄は腹立ちまぎれに、全部焼いてしまい、又、オレがチョコチョコ写真をとりだめたのも、ネガもろとも全部焼いてしまいやがった。

この時ほどオレを怒らせたことはない。オレは三日三晩、責めつづけ、鼻血が出て体中も血だらけで死にそうになるまで弥栄をいじめつけてやった。惚れた女でも、この時は腹がムシヨウに立った。

力まかせになぐりつけたので、弥栄はそれから一カ月ぐらい、体中が青ぶくれに、はれ上ってうめいていた。

三日間というものの、弥栄の体から縄のきれ目はなく、オレは人間の考えつく、あらゆる方法でくくったり、吊り下げたり、殺さない程度にいじめつくした。

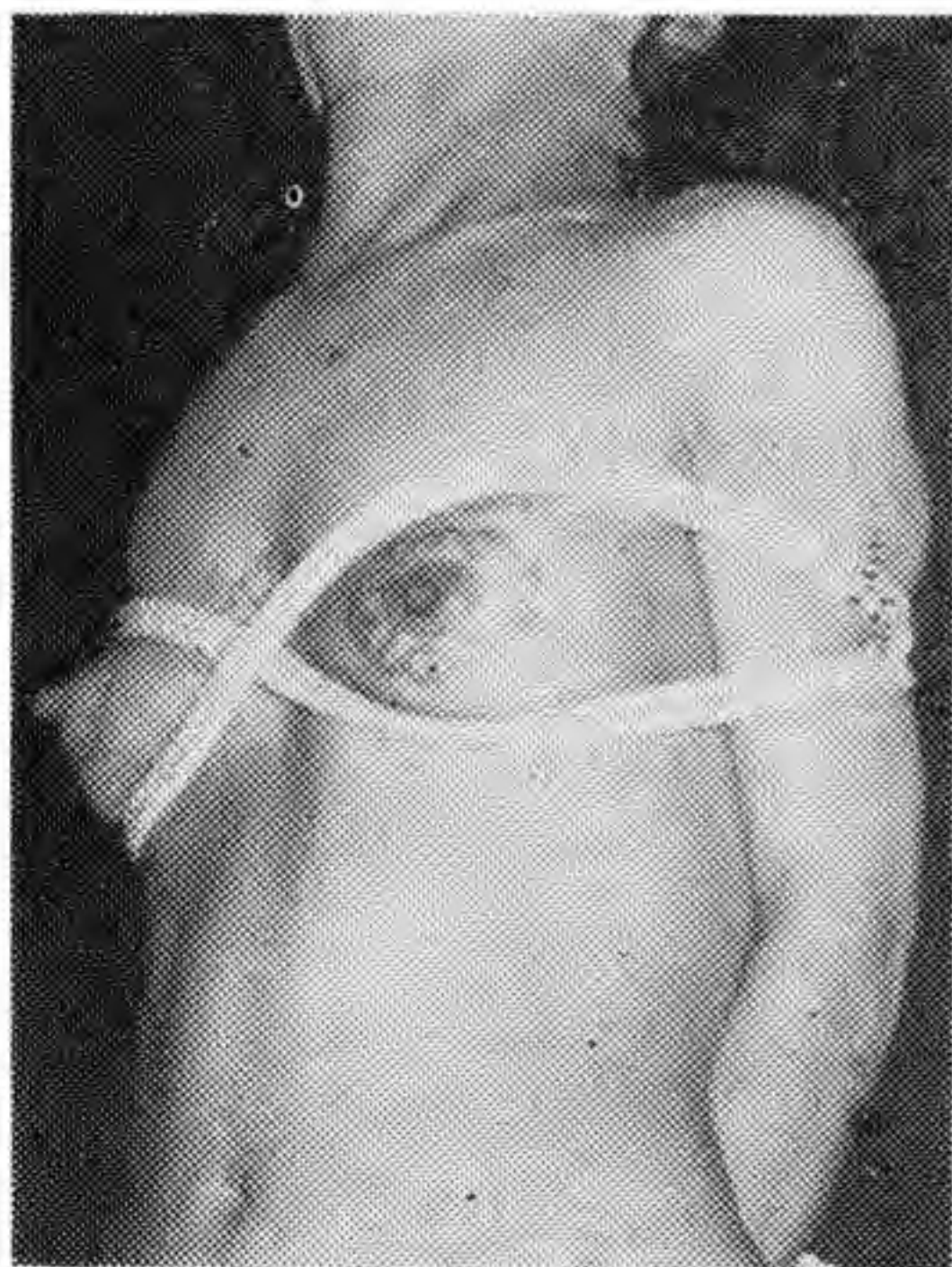
泣いて、オレみたいな男にしぶづいてきた弥栄も、それが運命とあきらめて、オレのやることを喜んで受けるようになった。

オレはある男の為に借金をせおい込んで、ニツチもサッチもゆかなくなり、ハマを逃げ

て神戸にきた。せまいボロアパートの一室を借り、世間の目をさけて、運転手をやっていた時、ヒドいめに合ったのだ。

オレがこんなことを書く気になったのも、弥栄の体が年ごとにおとろえて荒れてゆくからだ。乳房にいれずみしてもう六年たつ。二十三才で彫ったが、来年は三十の年増になる。

オレが悪いのか、女が悪い



のか子ダネもなし、二人暮らしの気楽さだ。どちらも過去のある体だから、もう子供は出来ないだろう。心配するな、荒れた暮らしでもオレはヤクザじゃない。体が傷ついて、ひとり床にねていると、やり切れなくなつて、毎月の奇クが唯一のたのしみで、はじからはじまで読み漁ってしまう。オレの好きなのもあれば、気に喰わないものもある。

奇クは幅広くのせているから仕方ないが、辻村隆の『カメラ・ハント』などオレには面白い。奴は、羨ましい人間だ。よくあれだけ次々とプレイ出来るものだ、あきれたり、つくづく感心したりする。しかし何十年つづけてやるだけに、どこかエライ奴だ。

オレは浮気は時々したが、サジストとしていじめてきたのは弥栄一人だ。オレの気のむくままに、どうにでもなつてくれる可愛い奴だからだ。金で女を買っても、オレがそのことをほめかすと、きまってヘンな顔をしやる。オレはそれが気に喰わない。一度だけ真似ごとをやってみたが、イヤイヤの、しょうことなしのつき合いが、すぐオレの頭にカチンと来て、クソ面白くもねえとやめてしまった。

オレがムチ打ち症になる前に撮った弥栄の

写真を発表する。何でも凝り性の方だから、カメラもかなり凝つて自分で現像や焼付ぐらひは、やれる。

オレがこんな読みづらい告白を書く気になつたのも、一つは弥栄の、まだ若さの残っている体をカメラ・ハントして書いてほしいからだ。塚本鉄三でも辻村隆でも構わない。忘れていたが『この女と』で、一時、よくカメラルポを書いていた山本一章でも構わない。ヤツのルポもオレのたのしみだったからな。

このイレズミが、映画のように肌に書いたものかホンモノか、誰でもいい、オレ以外の人間に確かめてもらいたいのだ。それと、もう一つ。後遺症が残って、或いはこの僥自由のきかなくなるかも知れないオレの代りに弥栄を撮ってほしいことだ。オレと弥栄のプレイは、もうゆくところまでゆきついた感じだ。オレのねがひは、オレのしている前で、弥栄をいじめ、弥栄を緊縛し、弥栄とプレイしてほしいのだ。

病床にいと、心ばかり逸つても体がいうことをきかない。体がきかないから、なおさらイライラする。オレが下手な文を書く気になつたのもそのためだ。元気なオレならオレが欲情すれば、いつも責められたが、今のオ

レの体では、どうすることも出来やしないのだ。オレは可愛い弥栄一人をやつて、狂いような気持で、独りたえられはしない。近頃は数時間なら、じっとしていたら起きていられるようになった。このオレに代つて誰か弥栄をいじめてくれはしないだろうか。オレの前で——それがオレの今の切実なる願いだ。厄介者のオレがいては邪魔だろうか。

弥栄はオレの気持を察して、そのことはオ一ケーだ。近頃、働きと気苦労で大分やせている。体がヒンジャクだからとヒゲしているが、細い女ほどいじめられたいタイプの女だとオレは知っている。その点、オレのひがめかも知れないが、弥栄はMの理想タイプだ。

オレのアパートまで来てくれたら一番いいが、何しろ六帖一間に道具をおいてあるからせまい。車でオレと弥栄を迎えに来てくれてどこかへ連れてつてくれりゃ尚さらいい。勝手なことばかり書いて許してくれ。病人の寝言だと思つて、腹を立てないでくれ。

しりめつれつな告白であつた。編集部でよみ易く直して呉れ。そのうちオレが今コツコツまた書きはじめているSの画を送る。奇クサロンにでものせてくれたら幸いだ。

んでいく。

珠江夫人は、先程までの激しいあがきはもう見せず、自分の運命を知悉したように固く眼を閉ざし、順子の責めるままに身をゆだねてしまった。

「そうよ。そんな風に素直にならなきゃ。じやあ、これから腕によりをかけて、すばらしい気分浸らせてあげるわ」

順子は、調子に乗って珠江夫人に攻撃を続行する。

「ね、あんた達、一寸よく見てごらんよ」

順子は、珠江夫人を責め上げながら、友子と直江を傍へ呼んだ。

「まあ、凄いわあ」

友子と直江は眼を瞠って、今はもう何の抵抗もなしに責めを受け入れている珠江夫人を凝視するのだった。

先程、自分達が責めた時、あれほど頑強な抵抗を示し、かなり強烈にいたぶって見たつもりだが、屈伏のかけらも示さず、気質的にこういう凌辱を嫌悪し、肉体そのものが受けつけぬのではないかという、つまりマゾ的には不感症では、という疑いも起こったのだがこれは何という事か。まるで、悦楽の蕾を満開させたように一切を変貌させ、順子の責め

を甘受しているのだ。

ベテランの手にかかれれば、貞淑な女も、こんな風に落花微塵になるものか、と友子と直江は呆れたような顔つきになる。

何よりも二人の女中が驚いたのは、秩序立った優雅な生活に明け暮れし、美貌と貞淑さと気位を兼ね備えていた珠江夫人が、悦楽の極致に立ったように拗ねて悶えるように固定された四肢を慄かせたり、さも切なげな荒い鼻息を立て始めている事であった。

「こりゃ立派に静子夫人の後任が務まるぜ」

鬼源が眼を細めて、媚めかしい身悶えをくり返す珠江夫人を眺めている。

「たいしたもんだ」

急に珠江夫人は、べっとり脂汗を浮かべた美しい額を切なげに曇らせて、むずかるように首を振り始めた。同時に麗わしい太腿の筋肉がブルブルと痙攣し出す。

「遠慮しなくていいのよ、奥様」

順子は嗜虐の興奮に酔い痺れながら、残忍な眼を光らす。

——ああ、神様。——珠江夫人は、卑劣な男女の環視の中で敗北する事の恐ろしさに、思わずカチカチと歯を噛みならし、ぐっくらえた。

だが、順子や川田達の攻撃には、いちだんと拍車加わる。

「許、許して——」

ほざくように叫んだ珠江夫人は、ベッドに固定された全身を硬直させ、引かれている二肢を反り返らす。

苦しげに何か言葉にならない言葉を口走った珠江夫人に対して、順子は責め具のボタンを押した。

肉体が炸裂するばかりの衝撃に全身を激しく痙攣させた珠江夫人は、大きく首をのけぞらせる。相ついで起こる発作に翻弄された珠江夫人は、大の字の肉体をブルブル震わせ、そのすさまじい光景に友子と直江は啞然とした表情になっている。

「すさまじいファイナーレね」

順子は、銀子や朱美と並んで、珠江夫人を指さしながら笑いこけているのだ。

「だが、随分と手数をかけさせやがったな。え、折原夫人」

川田と吉沢は、がっくり顔を伏せている珠江夫人の頬を指でつく。

珠江夫人は、自分の意志を裏切って、これら野卑な人間達の眼前でみじめな敗北の姿を露呈させてしまった口惜しさと羞ずかしさで

生きた心地もなく、ただ、シクシクとすすり上げていただけだ。

順子は静かに責め具を離し、そのおびただしい珠江夫人の敗北のしるしに改めて眼を向けると共に、一度に溜飲が下がる思いで、

「随分と我慢なさっていたようね、奥様。でも無理ないわ。三十才といえば女盛りなんですものね」

そして順子は次に、ねじるように顔を伏せている珠江夫人の熱い頬を両手ではさみ、

「フッフ、よく顔を見せて頂戴。奥様」

と、夫人の顔を正面にすえ、柔らかい睫毛に涙を一杯浮かべた、さも口惜しげな表情をしげしげと見つめるのである。

口惜しい屈伏の余韻が遠ざかり、やがて、珠江夫人は熱っぽく潤んだ瞳をぼんやりと見開いた。

「御気分はいかが。何とかおっしゃってよ」

順子は、品位のある繊細な珠江夫人の鼻先を面白そうに指で押す。

「お願いです。縄を、縄を解いて——」

珠江夫人は、物悲しげに睫毛をそよがせながら、声を慄わせて順子に哀願する。

「あら、このぐらいで何を云ってんのよ。これから明け方まで少なくとも五回はスパーク

して頂くわ」

珠江夫人は順子にそう浴びせられると、再び眼を悲しげに閉ざし、顔を伏せ、白い肩を慄かせて嗚咽し始める。

「ああ、一そ、一思いに殺して。ね、殺して頂戴っ」

これ以上、卑劣な男女の眼前でなぶりものにされる気力はなく、珠江夫人は哀泣しながら口を開いた。

「何云ってるんですよ。千原家のお嬢さんだって、間もなくこういう特別調教を受けるんですよ。先輩の方がそう取り乱しちゃ、みっともないじゃありませんか」

順子が云うと、つづいて鬼源がどすのきいた声を珠江夫人に浴びせかけた。

「俺達はな、お前さんの肉と心をここで完全に作り変えて立派な商品に仕上げようと努力してるんだ。まだ、わかんねえのかよ」

川田も吉沢も、大の字にされた珠江夫人につめ寄って凄んだり、叱咤したり、批評したりするのだ。

「ね、川田さん。土蔵の地下にいるお嬢さんをここへお連れしてよ」

順子が川田に云うと、珠江夫人は、ハッとされたように眼を開いた。

「千原流生花の後援会長、折原夫人がこんな無様な姿を曝してしまった事を、お嬢さんの眼でたしかめさせるのよ。これからの参考になると思うわ」

「待って、待って下さい」

外へ出ようとする川田を珠江夫人は必死になって呼び止める。

このようなみじめな姿を美沙江に目撃されるところと毛穴から血が噴き出るような戦慄を覚える珠江夫人であった。

「ここへお嬢様を連れて来るのだけはやめて下さい。それだけは、お願い、大塚さん」

激しく狼狽し、大の字につながれた四肢を揺さぶってそう叫んだ珠江夫人は次に黒髪を揺さぶって号泣し始める。

「じゃ、素直に俺達の調教を受けるといふのだな」

鬼源は弱味につけこんだように珠江夫人につめ寄った。

「よっ、返事をしねえか。悦んで調教をお受けします、とはっきり云ってみな」

鬼源に乳頭を指ではじかれた珠江夫人は、すすり上げながら、小さい声で

「悦んで、悦んで調教をお受けします」

そう云うと、再び、顔をねじって号泣する

のである。

「よし、その言葉、忘れるんじゃないぞ」

鬼源は満足そうにうなずくと、ぼんやり傍に突っ立っている友子と直江に声をかけた。

「今度は、さっきみたいに手古ずる事はねえだろう。しっかりやんな」

と、責め具を友子に手渡すのだ。

暴力使用者が、今までの使用人だった友子と直江であると知ると、さすがに珠江夫人は動揺して、口惜しげに白い歯をカチカチ噛み鳴らす。

「うちらが相手となると、なんでそう固くなるの、え、奥さん」

友子は、鬼源に方法を習って、ガスの上にミルクの鍋をかけながら、ベッドの上の珠江夫人に云った。

「ミルクはぬるい方がいいの。それともあつい方が好き。ね、奥さん」

直江が今度は夫人に声をかけるのだ。

女中の手でなぶられるという屈辱に珠江夫人は、ひきつったような表情を見ている。テーブルの傍の椅子に坐って一息入れている川田や吉沢達は、ゆっくりと煙草の煙を吐き上げながら面白そうに、その光景を眺めているのだ。

「さ、準備は出来たわ」

友子は責め具を右手に持ち、直江をうながして、ベッドの上へ足をかけた。

「そんな口惜しそうな顔せんといてよ、奥さん」

直江は早速、夫人の頬や乳房を強く、また優しく両手を使っていたぶり始める。

裏切った二人の女中の指先を感じると、その嫌悪の感触に裡からたまらない口惜しさがこみ上って来て、全身がひきつり、麗わしい太腿の筋肉がピーンと張るのだったが、拘束された四肢は逃がれる術もなく、彼女達の為すがままとなってしまうのだった。

いや、それだけではなく、先程、口惜しくも異常な焰を一度激しく燃え立たせてしまった生身の肉体は、女中二人のいたぶりの前に残り火をかき立てられ、次第に抵抗力は溶け潰れていく。

「えらそうな事云っても、やっぱり奥さんも女やわ」

「どうすんの、奥さん。こんなにおとなしゅうなって、御主人に申訳ないと思わへんか」友子と直江はそんな事を口走りながら夢中になって、今はもうところ構わず夫人をいたぶり、

「さ、次はこれよ、奥さん」

その瞬間、珠江夫人は、艶々しい雪白のうなじをくっきりと浮き立たせ、顔を大きくのけぞらせたが、うっとりとした瞼を閉じ合わせた珠江夫人の顔は世にも美しく照り輝くように見えた。

「うまくいったわね、フフフ」

銀子と朱美がガムを噛みながら、のぞきこみ笑い合う。

珠江夫人は、女中二人の攻撃に応じるかのように柔らかい全身をぐったりと投げ出す様子まで遂に見せる事になったのだ。

「友子さん、待って、ね、待って」

突然、珠江夫人は激しい涕泣を洩らしながら、おどろに乱れた黒髪を更に揺さぶって叫んだ。

「何やの、奥さん」

友子は、ふと攻撃を中断して、大きくあえぎつつける珠江夫人の汗ばんだ美しい顔を見上げる。

「私は、私は、もうどうなったっていいわ。でも、お願い、お嬢様を、お嬢様を助けてあげて——」

謔言のように珠江夫人は口走るのである。「今更、何を云ってるのさ」

と、見物している銀子が吐き出すように云った。

「千原家のお嬢様も、クモの網にかかった蝶々と同じ運命なのよ。お嬢様のこれからの事は一切、私達に任せておきやいいのさ。あんたが何も心配する事はないのよ」

銀子はそう云って、今度は友子の腰をつついた。

「さ、グウの音も出ない程、責め上げてやんなよ。あんた達の次は、あたい達が責める事になってんのだから」

友子と直江は愉快そうにうなずいて責めを続行する。

苦悩とも悦楽ともつかぬうめきをあげ、珠江夫人は固定された四肢を反り返らせた。

美沙江と自分とを奈落の底へ突き落とした憎い二人の女中の責めで、崩壊して行く姿を晒さねばならぬ珠江夫人の苦悩は如何ばかりか。それを思うと大塚順子は痛快でたまらず胸を轟かすのである。

「ねえ、大塚夫人、一寸、見て」

朱美はクスクス笑いながら、順子を手招きして呼び、夫人を指さした。

友子の残酷な責めに反応して苦悶している女——そこにはもう貞淑で教養のある博士夫

人の面影など微塵もなく、被虐の妖氣にむせた一匹の雌に過ぎなかった。

見物に加わる鬼源の口元に意地の悪い微笑が浮かぶ。見世物に引出しても、この女は、充分男客達の官能を痺れさせるだろう。また今後の調教次第では静子夫人同様、森田組の優秀なタレントになるかも知れぬ。そう思うと鬼源は無性に楽しくなるのであった。

やがて、珠江夫人は、先程よりも更に激しく、つんざくような声を張り上げた。

恨みでも返す気分で、友子は血走った眼つきになり、責めの仕上げボタンを押す。

珠江夫人は、全身をのけぞらせるようにして、絶息する時みたいな異様なうめきを上げると、がっくりと首を落とした。

遂に自分達の軍門に珠江夫人を降したと感じると友子と直江は歓声を上げた。

甘酸っぱい濃厚な体臭を発して、優美な太腿を何時までも波打たせている珠江夫人を好奇な眼で貪るように見つめる順子は世にも嬉しそうな顔つきになる。

「フッフ、今まで使っていた女中さん達に、こんなぶざまな姿をみせるなんて。全く奥さんもいい気なものだわ」

しかし、珠江夫人はもう口をきく気力もな

いまで打ちのめされている。

もう口惜しさも羞ずかしさも、そこにはなく、友子や直江の射るような視線の前に屈伏を余儀なくされた筋肉の一切を投げ出ししているのだ。

鬼源も川田も、珠江夫人の感受性の豊かさに改めて驚くのだ。

「まだ明け方までにや大分、時間があるぜ。こつてりと呻かせてやるからな」

鬼源は、がっくりと首を横に落とし、放心したように小さく口を開き、眼を閉ざしている珠江夫人に云ったが、

「これじゃ、ちっと可哀そうだな。一度、きれいにしてやんな」

と、友子と直江の顔を見る。

珠江夫人は、その時、深い溜息をつくようにして蘇ったように柔らかい睫毛をそっと開く。未だ夢の中を、さ迷っているような朦朧とした瞳を上げると、そこに友子と直江のニヤニヤした顔がのぞきこんでいるのだ。

珠江夫人は、白い頬を桜色に上気させて、さも恐ろしげに、彼女達の視線から眼をそらせた。

遂に、この女達の手にかかり、再び、生恥をかいってしまった屈辱感が、じわじわ胸にこ

み上って来て、珠江夫人は、頬を慄わせ、絹糸のような繊細なすすり泣きを始めるのだ。

友子と直江は、楽しそうに口笛を吹きながら鬼源に命じられた仕事にかかる。

敗残したみじめさを一層みじめにさせるような友子達の仕事ぶりに珠江夫人は、魂まで震わせるような哀泣を洩らすのだった。

「こんな風に親切にしてあげてんのに、何も泣く事ないやないの」

「そやけど、奥さん。そんなきれいな顔してゐるくせに、相当なものやわね」

友子と直江が仕事をすませると、鬼源が云った。

「じゃ、十分の休憩で、次は、銀子と朱美が始める」

「よしきた」

銀子は友子から責め具を受取った。

「次は面白い方法だ。いいか、奥さん。天井の鏡をはっきり見ながら、責めてもらうんだぜ」

鬼源はそういって、壁に垂れている紐を引いた。

天井に張られてあったカーテンがさっと左右に割れて、大きな鏡が姿を現わす。それはベッドに縛りつけられている生贄の全身像を

はっきりと写し出していた。

あっと、珠江夫人は思わず反射的に紅潮した顔をそらした。

みじめな、あられもない大の字につながれた自分の全身像を、ふとその鏡の中に見た珠江夫人は、まともにそれに眼を向ける勇氣はなかったが、

「いいか、銀子達の調教が仕上がるまで、上の鏡から眼をそらすんじゃないやねえ。云う事を聞かねえと、すぐここへ地下の美沙江を引き立てて来るからな」

鬼源はブルブル優美な肩を慄わせている珠江夫人に鋭い声を浴びせかけたのである。

奴隷の食事

地下室の小さな窓から朝の光がほんのりと差しこんで、たった一枚の毛布にくるまって横たわる静子夫人の白蠟のような美しい寝顔をかすかに照らしている。

昨夜、飽く事を知らぬ千代や鬼源達のいたぶりを受けて心身ともに疲労し切っている静子夫人は、死んだように身動きもせず眠りつづけているのだ。

やがて、静子夫人は、かすかに寝返りを打

ち、ふっと眼を開いた。

そして、無気力に薄暗い牢舎の四囲を見廻すのであった。

——また、夢を見たわ——静子夫人は、伊豆にある別荘で一夏過ごした当時の夢を見たのだ。

海に見えるベランダへ出た夫の隆義と並んで立ち、広大な庭園を眺めていた日の夢であった。

晴れ渡った空の下庭園には、真紅のサルビアの花が燃えるように咲き乱れ、また海を背景にして白いマーガレットの一团が波を打っていた。

「ね、貴方、バラがないと淋しいわ。今年からバラも植えましょうよ」

と、静子夫人は夫にねだり、それをどこへ植えるか場所を調べるため、庭へ降りる。

美しい花の咲き誇る庭を歩き、ふと緑の木の下へ来て、上を見上げると、小枝に一匹の蛇が巻きついていていた。夫人は驚いて元来た方へ引返そうとすると、うしろの木にも、横の木にも、いや美しい花叢にも太い胴周りの蛇が一面にとぐろを巻いている。夫人は悲鳴を上げて走った。蛇共は、先の割れた赤い舌を出して追って来る。

夢から覚めた夫人は、ほっとして、額に浮かんだ汗を拭いた。

しかし、現実のカビくさい、孤独と暗闇の牢舎を見ると、どのような恐ろしい夢であるにせよ、それがたった一つの楽しみであるとさえ思える。

やがて、ここへ今日もまた自分の肉と心をバラバラに打碎く為、調教師が現れるのだ。それを待つだけが夫人の日課なのである。

今日は、どのような調教を受けるのだったつけ、と静子夫人は、物悲しげな瞳で、厳重な錠前がかけられた鉄の扉をじっと見つめている。そして、今頃、ここへ誘拐された折原夫人や美沙江達はどうしているのだろう、と二人の身を案じ、次に、京子や美津子、小夜子や桂子の運命を考えるのだった。

夫人は、そっと上体を起こし、縄の痕のついた白い両腕をいたわるように抱きしめるのだ。

普通なら、もう現われる恐ろしい調教師達はまだ姿を見せない。

今日一日は、このまま休ませて欲しい、と夫人は彼等の現われぬ事を祈りたい気持ちになった。

しかし、その期待は空しく、賑やかな笑い

さざめきの声と一緒に何人かの足音が響いて来る。

静子夫人は、おろおろして、起き上り、毛布を折り畳んで隅へ置くと、その場に膝を折って坐った。地下室へ来訪者があった場合、そのようにして行儀よく待つよう鬼源から教育されている。

両手を交錯させるようにして胸の隆起を隠し、両膝頭をぴったり合わせて小さく夫人が坐った時、談笑しながらドヤドヤとやって来たのは千代に和枝と葉子、それに春太郎、夏次郎の五人であった。

「ホホホ、行儀よく待っていたわね。感心したわ」

千代は、薄暗い牢舎の中で、艶々と輝く優美な裸身を正座させている静子夫人を頼もしげに鉄格子の間から見つめて、

「昨夜はおそくまで珠江夫人の調教にかかっていたので鬼源さんは寝坊しちまったのよ。予定より一時間もおくれたけど、さ、今日もしっかりお稽古しましょうね」

千代はそう云って、春太郎達に眼くばせをした。

ガチャガチャと錠前が春太郎の手で外される。

「さ、出て来て頂戴、奥様。顔を洗ってお化粧をすませたら、すぐに鬼源さんの部屋へ行くのよ」

春太郎と夏次郎にうながされて、夫人は、そっと立上り、腰をかがめて牢舎から出て来るのだった。

「お稽古に入る前は、もっと楽しそうな顔をしなきゃ駄目よ」

千代は、伏眼し、頑な沈黙をつづけている静子夫人の冷たい横顔を見て含み笑いして云った。

地下室の階段近くにある洗面室で歯を磨き顔を洗い、簡単な化粧を夫人がすませると、春太郎と夏次郎があらかじめ用意していた麻縄を持って背後から近づいて来る。

静子夫人は、もはや催促されるまでもなく自分の方からゆっくりと両腕を背に回して手首を交錯させるのだった。

それにキリキリときびしく縄がけした二人のシスターボーイは、たぐった縄で、豊かで水々しい夫人の乳房の上下へ二巻き三巻きと巻きつけ、きびしく縛り上げていく。

「今日はまた新しい勉強を、鬼源さんがさせて下さるようよ。しっかりがんばってくださいなきゃあ」

千代は、後手に縛り上げられた静子夫人の見事に充実した美しい裸身を眺めながら、ホクホクした思いになってそう云うと、

「さ、お歩き」

と、縄尻を取って、優美で息苦しいばかりに悩ましい量感のある夫人の双臀を軽く平手でたたくのだった。

華やかに着飾った中年女達に背や尻を突かれながら、素っ裸の静子夫人は、緊縛された身をよろよると歩ませていく。

「そんなに悲しそうな顔してちゃあ駄目だよ云ってるでしょ。いくら云ったらわかるのよ奥様」

地下の階段を豊かな双臀をゆらしながら歩んで行く夫人のさも悲しげな横顔を見た和枝は、舌打ちして、夫人の耳を引っ張るのだ。

「ね、千代さん」

二階の長い廊下を、鬼源の部屋へ向かって歩まされる静子夫人は、ふと、切長の美しい瞳を哀しげにしばたかせながら、千代の方を見た。

「何なの、奥様」

千代は冷やかな口調で意地悪そうな視線を夫人に注ぐのである。

「今日は、昨夜の疲れの故か、頭痛がするの

です。お稽古は午前中だけにして頂けないでしょうか」

千代の気分を害する事を恐れて、気弱な口調でそう云ったのだが、

「図々しい事云うんじゃないよ。一寸、こちらが甘く出りゃ、あんたはすぐにつけ上るんだから」

という邪怪な云い方を、千代はするのだ。

「こっちも、あんたをこの道の大スターにしてやろうとして色々骨折ってるのよ。それなのにお稽古をさぼろうなんていう量見は気に喰わないわ。鬼源さんに頼んで今日の調教は徹夜で続ける事にするからね」

静子夫人の二重瞼の美しい瞳にキラキラと涙の露が光り出す。

「フフフ、云わなくてもいい事を云って損しちゃったわね、奥様」

春太郎と夏次郎は、悲しげな夫人の横顔を見て笑い出すのだ。

鬼源の宿舎になっている二階の一部屋を春太郎がノックすると、寝不足で土色の顔した鬼源が顔を出し、引き立てられて来た静子夫人を見て、ニヤリと黄色い歯をむき出した。

「そうだ。今朝はおめえの調教が一番手だったな。まあ入りな」

昨夜は、折原夫人の調教で、こっちはろくに眠っちゃいねえんだ、などと云いながら、鬼源は夫人の縄尻をとって中へ引入れた。

「ここへ坐りな」

鬼源は、夫人を坐らせ、縄尻をベッドの脚につなぎ止める。

「川田の兄さん、起きねえか」

鬼源はベッドの上で軒をかいている川田の肩を揺さぶった。

昨夜、おそくまで折原夫人を責めさいなみその責め疲れた体をここへ運んで鬼源と川田は一緒に眠ったものらしい。

「何だ、もうこんな時間か」

川田は寝呆け眼で腕時計を見ると、あわてて起き出した。

ふと、ベッドの脚に縛りつけられ、小さく縮んでいる静子夫人に気づいた川田、

「へへへ、相変わらなすきれいだね、奥さん」と、夫人の頬を指でつついて、シャツを着始める。

千代達は、乱雑になっている部屋の中を取片づけて

「ホホホ、鬼源さん。昨日約束した通り、今日からこの奥さんには朝食代りにたっぷり特製ジュースを、御馳走してあげる事にしたの

よ。よろしく願いますわね」

「ああ、わかってますよ。奥様の美容と健康のため、川田の兄さんと俺とが、交代で奥様に飲ませてやる事にしましたからね」

川田はクスクス笑いながら、赤ん坊の前垂れを持って来て、うなだれている静子夫人の顔を持上げ、それを首にくくりつける。

「ミルクを御馳走になる赤ちゃんだから、前垂れをつけねえとな」

それを見た千代や和枝達は口を押さえて吹き出すのだ。

冷たく冴えた夫人の象牙色の頬が次第に赤味を帯びてくる。

「ハハハ、赤ちゃんの前垂れなんかつけると

馬鹿に、可愛くなったじゃねえか、え、奥さん」

鬼源と川田は、そんな静子夫人の左右にゆっくり腰をかがめて、ゲラゲラ笑い出すのであった。

(未完)

山本五郎さんに捧ぐ

裾の乱れ

牧

高

志



カット・室井亜砂路

横文字が日本国中やたらに氾濫するこの世の中に、伝統とはいえ、今更、古風な和服姿などに生涯こめて、とりつかれるなんて、と言われそうですが、もうこれ以上、かくしやうのない女の裸体姿よりも、表裏共に一層カラフルな女のきものの姿態は、ご指摘の通り一種、特別の味合いがあるようです。

日本民族の起源は遠くヒマラヤや南洋から

であっても、インドや南方原住民が腰に巻く布片は、われわれが今日、見る日本女性のお腰巻とは遥かに違うものなのです。まして長襦袢なんてものは、日本を措いて何処にもありません。従って、きものとは江戸時代に芽生えて、ほんの一世紀位で完成した、立派な芸術品だと思っていますが、第二次世界大戦を契機として、五月号にあなたが掲示写

真の大振袖姿は、も早や演劇以外には絶対見られないものになってしまいました。

一方、私は物好きからとは申せ、着物、即緊縛を寄稿するのは、日本中、広しといえども奇クを措いてはありませんので、多分に我田引水的なことばかり折に触れて綴り、また画にしてきた訳であります、今回はからずも同志を身近かに得たような気持で、あなた

の文ならびに挿入の写真三葉を、しみじみと拝見した次第です。

感じとしては、短篇ながら私のとや角、出る幕ではなさそうですね。心から感服致しました。どのような、ご職業かは存じませんが三十点に及ぶ衣裳は、よしんば仕立上りのものを買い集めるにしても、また新規に誂えるとすれば尚更、大変なものです。どっしりと綿でふくらんだ打掛けは、東京なら浅草あたりの古着屋で根気よく出物を探すか、さもなければ日本舞踊の衣裳屋にしかない筈です。神経質であればある程、長襦袢は絶対、一越物の緋縮緬でなければ承知出来ない。下に締めるお腰巻は、赤のメリンス、裾除け（蹴出し）は同色のデシン物とし、帯締めは白の太丸ぐけ、でなければ少なくとも写真撮影の対象物にはならない。となると準備するだけでも一苦勞という訳です。

その上、モデルが奥さまとなれば、あの重いカツラを被って、分厚い衣裳の袖を無理やりに後ろに回し、手首を重ねて縛る、それも恐らく、あなたを含めた男性というものは、手心を加えていい加減に縛るだけでは満足出来ず、徹頭徹尾、本縛りをなさったに違いありません。誠に失礼ながら、奥さんの苦悶される顔が目に見えようです。

挿入の写真は、いずれも左手から撮られた

もので、帯から下の着物には下腹部にかけてきもの独得のひだが数条見られ、往年の漫画家、田中比左良氏が好んで描いた姿態と同じで、大変好ましいのですが、出来れば、今少し、縛られた奥さまの右足をひっ込めて、反対に左足を出し、白の比翼の開いた裾の間から、緋色の長襦袢を全面的に押出した方が、無残の中にも色っぽさが一段と盛上ったのではなからうかと思えます。

この長襦袢という衣裳は、故人の名優花柳章太郎丈の言葉を借りるまでもなく、そのものズバリの一枚姿は、たとえ吉原や島原の花魁であつても百パーセント男の気を引くものとは限らず、反対に場合に依つては、ひどく嫌悪を催す恐れが多分にあるので、お示しのように立ち姿であれば、ひざのあたりから長三角形に末広く陳展するのが、もっとも艶めかしいといわれております。その点、初めから上手に作為すれば最早や私のいうテーマ「裾の乱れ」とはいえないかも知れません。

写歴十年に加えて、ポロライドカメラの使用は、眼の玉が飛び出るような高価なフィルム代さえ我慢すれば、家庭内カラー印画が秘かに娛しめ、それを十二分に駆使する、あなたが誠に羨ましいのですが、何はさて置き、カラーフルな和装のきものなればこそ、撮影された作品を是非、手に取って拝見したいも

のです。同じ撮影でも、動く8ミリの方は、コダックのスーパーカーカラーフィルムに越したことはありませんが、国産品では和服にあり勝ちな中間色の描写に問題があるようで、私はそのような場合は出来る限り、原色に近い柄物を選んでいきます。ただ、ここで注意しなければならぬことは、良俗を害するものは現像後お返しが出来ないという条文を、どのようにして明確にワイセツ物陳列ではないと判定させるかであり、大いに苦勞する次第です。セルフタイマーに代わる遠隔リモコン操作器も、8ミリ撮影機に取りつけられる昨今です。ですから、愛する奥さまを後手に縛るあなたをふくめての一幕物——いふなれば、一種の家庭生活のプレイ物としてシナリオを書き、エンドマークの直前に縛ったあなたと、縄を解かれた奥さまの仲よく何々大笑する一シーンを加えれば、万事OKフリーパスでフィルムはあなたの手元に返ってくる事でしよう。

このたびは未見拝眉こそ致しませんが、お声を掛けて頂き誠に感謝に堪えません。

和服着用が日ましに減っていく昨今、何処にあなたがお住まいなのかは存じ上げませんが、志を同じくする同好の者として今後共、よろしくご交宜下さいますよう、勝手ながら編集長のお許しを得た上で、さしずめ誌上で文通、寄稿させて頂きたいと思ひます。

カット・春川ナミオ



A

雨戸が半分開けられて寝巻姿の三田が顔を出した。いい天気だなあという表情で空を仰ぎ、明るい陽の光に眩しそうに目を細めた。

電気釜のスイッチをいれ、汚れものを電気洗濯機にいれてから、三田は部屋の掃除にとりかかった。めずらしく妻の葉子が起きてしまったから布団を庭にはす仕事が出来てしまったが、かたづけることが好きらしい三田はくるくると家と庭を往復する。

葉子は起きぬけの顔を化粧もせず、だて締めもしていない長襦袢を、ただ手で前をおさえたまま、髪をくしゃくしゃにさせて、ぼんやり廊下に片膝ついている。

朝食の仕度も、布団のあげおろしから部屋の掃除も、洗濯も夫の三田がするのがあたりまえで、葉子は女主人のような顔をしてハイライトを吸っていた。

しじみ売りが来ても納豆売りが通っても、声をかけたり、あわてて追いかけたりするのは三田で、葉子はまるで他人事のように知ら

青春の陥穽 (7)

新妻飼育法

芳野眉美

ん顔をしている。

追いかけてきた三田を振り返って、納豆売りのおばさんは三田にいった。

「だんなさん、寝巻の前がはだけているよ」
一度にいろんなことをするものだから、なりふりを、かまっていられない。

「そうかい」

と気にもしないで、納豆を受け取った。
「だんなさんは年に似合わず元気だね」と、じろじろ見られて気がついた。

三田はパンツもステテコも穿いていなかった

たのである。脱がした犯人は妻の葉子にきまっている。三田が熟睡している間、葉子は知らぬ間に浮気封じをしたのに違いない。

個人営業のタクシーを一日乗り廻し、交通事情の悪いアスファルトジャングルとの戦争に神経をすりへらし、帰っては、色気違いの女郎グモみたいな妻の葉子の相手をさせられその上、妻の仕事までさせられるのだから、一度眠ってしまったら何を、されてもわからない。

まるで死人のように動かない三田の精気を奪う趣味が葉子にはあるらしかった。

納豆を買ってもどつてくると、隣家の大崎が葉子と話をしていた。葉子は、あいかわらず片膝を立てたままで、はだけた長襦袢の裾から、まっ白な内股が見える。そればかりでなく、夫の三田の浮気封じの残りさえ覗いていた。

大崎は三田に朝の挨拶をし、
「御主人はマメですね。いつも感心しています。ぼくには、とても真似が出来ません」

と愛想をいい、
「奥様に惚れていますね」

と葉子にも愛想をいうのを忘れなかった。
三田が台所に行き、ネギを切る音が、こつ

こつと聞こえると、

「妻から聞きました」

と大崎は声をひそめて葉子にいった。

葉子はニヤリとして大崎を見た。

「ぼくにも、その勇とかいう奥さんの奴隷を見せてくれませんか」

勇に会わせてくれ、とはいわないで、大崎は、見せてくれ、といった。始めから勇を玩具あつかいにしていた。

「三田が出掛けたらね」

と葉子は小声でいい、

「葉子にも見せてほしいのがある」

と大崎に媚びた。

「なんでしょう」

「奥様を飼育しているところを見せてちょうだい」

「いいですよ」

楽しそうに大崎はいった。

「奥さんさえよろしかったら、ぼくら夫婦と三人で遊びましょう」

「いいわ」

「そうそう。犬を一匹、忘れてはいけませんね」

大崎のいう犬とは勇のことである。二人は顔を合わせて笑った。

朝食の仕度が出来たらしく、三田が葉子を呼ぶ声がした。

「じゃ、またあとで」

葉子は意味深なウイंकを大崎に送り、

「奥さんが好きになったらしい」

と大崎は露骨な声をだした。

「早く奥さんの裸が見たい」

朝早く、大崎が三田の家を覗いたのは意外だった。

大崎の妻の絵里子に、葉子の愛玩用動物の勇を見せれば、かならず絵里子は夫に話をするのに違いないとは思ったが、こうも積極的に出て来るとは思ってもいなかった。

引越しをしてきてから、大崎はきつと隣家の葉子の奇妙な存在に興味を持っていたのかもしれない。浮気をする女、男好きの女には、えてして男が集まるものである。

食卓の納豆を見て、

「あんたはネバネバが好きだねえ」

というはがらかな葉子の声が響いてきた。

「大崎さんは今日は休みかい」

「そうらしいわね。有給休暇を取ったらしいわよ」

三田もたまには休みたいのだろうが、休むと、かえって葉子に責められて、休みが休み

でなくなり、むしろ外にでていたほうが、サウナやトルコに入れて、身体がやすまるらしかった。

三田が庭に干した洗濯物は、三田の下着類が多く、あまりパンティなど穿いたことのない葉子のものは少なかった。

掃除洗濯の嫌いな女は妻の資格はない。どうみても葉子は妾のタイプであった。

出勤前の車の掃除にとりかかった三田を、葉子は便所の窓から呼んだ。

「あんた、ちょっと来て」

「何か用かい」

「紙がないのよ」

「よしよし、持っていてやるよ」

車の掃除の手をやすめ、いそいそと三田は紙を持って便所の戸の前に坐った。

「あけてもいいかい、葉子」

「ちょっと待って」

三田を便所の前に待たせたまま、

「うん」

と葉子は可愛く息ばってから、内から戸を開けた。

便器をまたいだままの尻をもたげ、

「ふいて」

と紙を持って四つ這いになっている三田に

いった。三田が鼻を鳴らした。

B

三田の車が見えなくなると同時に、待ち切れずに大崎が姿を現わした。

「奥さん」

縁側に坐って足をぶらぶらさせている葉子に、息をはずませて近寄った。

「気が短いのね」

「そうとわかると気が落ち着かないんだ」

葉子は両手をうしろにまわして上体を支え縁側の端に両足をかけて、思い切り足をひらいた。

「ほしいのなら、あげるわ」

長襦袢の裾がすっかりはだけて、ふくよかな内股につけられたキスマークがあざやかに浮かび、大崎が目を見張らせた。

華奢で繊細な葉子の二つの足がぐっと持ち上げられて大崎の腰を抱いた。

三田の家は、大崎の家のように石塀で囲まれているわけではない。いくら工場の廃墟と雑草の茂った空地、広い畠に囲まれているとはいえ、家の前を人が通るかもしれないのである。

「奥さんも気が早い」

葉子を抱きながら大崎は、つぶやいた。

「意外と大胆ね」

「奥さんの魅力に負けたんですよ」

大崎は、尻を朝から外気に触れさすようなはしたないことはしなかった。その点、男は便利である。

葉子は長襦袢の下には何も着ていない。

可愛い、ふくよかな乳房をどうされても、縁側に両手をついて、ふんばっている葉子は両足でしか大崎を抱くことは出来ない。

「ああ」

と葉子は呻いた。一瞬、大崎の妻の絵里子が、憎らしくなった。若くていい男で、テクニクもうまい大崎に毎夜、抱かれている絵里子が、しゃくだった。

大崎は無言で葉子を責めたてる。

葉子の丸い乳房に齒型がつき、

「ううっ」

あまりの激痛に葉子は呻いた。大崎は浮気の証拠を平気で葉子の身体に残していた。

ブタ野郎が帰って来て、この齒型を見てどう思うかなと、葉子は夫の三田の顔を思い浮かべた。

まさか、隣の大崎の極印とは思えない。

「乱暴ね」

葉子は大崎にいった。

「女は乱暴にあつかったほうが面白い」

「男だって同じだわ」

セックスカウンセラーの奈良林祥博士と、社会心理学の石川成城大助教授の八妻の性行動Vというレポートを見ていたら、面白いことに気がついた。

A夫人の報告書は、着衣、正常位、照明ナシという言葉が並んでいる。

B夫人の報告書は、裸体（体位は別に気にしていない）明るい照明、という言葉が並んでいる。

ところで、前戯の項に、性器相互接吻と書かれてあるのが、ところどころに見られる。

B夫人だと思うのが自然だが、これを記入したのはA夫人のほうである。

そして、オーガズムを感じているのも、A夫人のほうであった。

明るい照明の下で、おたがいに裸体になり多彩な体位であったとしても、スポーツみたいに、さらりとした関係があるというわけであらう。

あまりにもまともなA夫人のほうが、じつくりと女の快感を味わっているわけである。

葉子もどちらかといえば、SEXをスポーツみたいと考えているのかもしれない。

三田や勇を責めたてるだけでは、完全なオーガズムまでには達しまい。前戯の一種にすぎない。

とどめというものが男には必要であった。今にも死にそうな葉子の呻き声が、明かるい陽の光の中で、誰はばかりことなく続いていた。

「奥さんを見てみると、妻がまるでネンネだ」とよくわかる」

感じ入ったように大崎がいった。

その瞬間、葉子は大崎の妻の絵里子が、どうしたのか姿を見せないのに気がついた。

会社を休んだ夫が、隣家に来ていることぐらい知っているのに違いなかった。夫を呼びにくれば、夫と葉子の不倫の有様をあからさまに見てしまうわけであった。

「奥様は」

葉子は大崎に聞いた。今まで絵里子のことを少しも気にしていなかった自分がおかしかった。大崎があまりにも堂々として葉子に近づいてきたせいかもしれない。

「絵里子のことには心配しなくてもいいよ」

「だって、お迎えに来るかもしれないよ」

「それは大丈夫。歩けないようにしてあるから」

大崎夫妻のSMプレイはもう始まっているらしかった。

「昨夜から続いているんだ」

こともなげに大崎はいった。

「見たいわ」

と葉子は嘆息をついた。大崎の新妻の飼育ぶりが気になった。

「その前に、約束のものをを見せて下さい」と大崎が笑いながらいった。

C

葉子は鏡台の前で髪を直し、化粧をしてから新しい単衣に着がえた。美容院か風呂に行く時にしか着がえず、家にいるときはほとんど長襦袢一枚というだらしない葉子だが、大崎の家に行くとなると、隣家とはいえ長襦袢一枚というわけにはいかなかった。

大崎はだされたビールを飲み、ハイライトをゆっくり吸いながら、にこにこして葉子の化粧を見つめていた。

不意に、葉子の夫の三田が帰宅したとしても、おじゃましています、と一言でかたづけ

てしまうと思われるほど、大崎は落ち着いていた。三田をコキユにしまったことなど少しも気にしていないようであった。

葉子は、そんな図図しい大崎に、主人を気にする弘や勇と違った新鮮な感じを受けて、好感を持った。

どちらもS的な、攻撃的なところが相通じるのかもしれない。

「早く、奥さんが飼っているという雄犬を見せて下さい」

と大崎は葉子をせきたてた。

「その畳をあげて下さらない」

「あっ、穴の中に閉じ込めてあるのですか」

大崎は妻の絵里子から、戦争中の防空壕に勇がほうりこまれているのを聞いて知っていたのだらう。

畳を一枚はずし、床板をとって床下を覗き込んだ。

「いませんよ」

不満そうな声で大崎は葉子を振り返った。

「あら、何もなかった？」

「炭俵があるだけです」

「その中よ」

「えっ」

大崎は炭俵の上のほうを、足をのばして蹴

飛ばした。

炭俵が、ゆっくりと穴の中に倒れた。

あぐら縛りにされた勇の足が炭俵の底から見えた。

「いつから、この炭俵の中に詰め込んであるのです？」

興奮して大崎は叫んだ。

「三田が帰宅する前よ。昨夜の、十時頃かしら。三田が遅かったから」

「そろそろ、十二時間になる」

大崎は防空壕の跡に入り、炭俵から勇を引っ張り出した。

うしろ手に荒縄で縛られ、あぐら縛りにされた上、犬の首輪をはめられて、首輪の鎖を足首にかけられ、海老責めにされた全裸の勇が、冷たい床下の穴の中にごろんと転がっていた。

勇の目と口には、大きな絆創膏がべったりはられて、視野と言葉を奪っていた。

「これは、きつい」

大崎は穴の中から首をのばして、鏡台の前で、おめかしに余念のない葉子にいった。

「顔をよく見せて下さい」

「いいわよ」

大崎は勇の目から絆創膏を、はぎとった。

眉を引っ張られて、勇の顔が、ゆがんだようであった。

大崎は勇の絆創膏の猿ぐつわもはぎとってやった。勇の口から小さなパンティが吐き出された。

「そのパンティ、奥様のよ」

と葉子が大崎にいった。

「妻から聞きました」

勇の唾液でべとべとになった妻のパンティを大崎は、ひろげてみた。かなり汚れが、ひどいのは、大崎がわざとトイレで妻のお尻をふかせたからであった。

「おやおや、奥様ったら、みんな話してしまふのね」

「白状させるのが趣味ですからね」

「奥様のすてきな匂いを噛みしめていれば、半日ぐらい穴の中に閉じ込めておいても平気でしよう。だから奥様におねだりしたの」

「奥さんのは」

「あまり穿いたことがないのよ」
くすつと葉子は笑った。

「水」

と勇が、か細い声をたてた。

「なんだって」

と大崎が勇の口に耳を寄せた。

「水を飲ませて」

「奥さん、水ですって」

と大崎が葉子にいった。

「くんできましたようか」

「いいわ」

葉子が穴のふちに立って下を覗き込んだ。

「それじゃ、勇の顔が見えないわね」

まるで自分のヘソを舐めるように海老責めにされた勇が、半分、気を失って、口だけが水を求めて金魚のようにパクパクさせているのを、大崎は心配そうに覗き込んでいた。

「ひっくり返して、勇の顔を上にして下さらない」

「ほどかなくて大丈夫でしょうか」

「平気よ。葉子に殺されたって、うれしそうに顔をしているわよ、勇は」

かなり強烈な男性飼育法であった。

大崎は勇の髪をつかんで勢いよく、うしろにひっくり返した。

葉子は畳のへりにかがみ、

「勇、水を飲ませてやるよ」

と、うつらうつらしている勇にいい、

「穴から、どいて」

と大崎に声をかけた。

大崎は穴から畳の上に飛び上った。

葉子は中腰になり、着物の裾をからげた。

「あっ」

と大崎が叫んだ。

葉子は、穴の中の勇の顔めがけて、勢いよく放尿したのである。

あらためて勇を炭俵につめこみ、顔だけをだして、まるでやどがりのように床下に転がし、残飯を集めたバケツを突きつけて、
「腹がへっているのだろう。これでもたべてもうしばらく、ここにおいで」

と葉子は床板をしめ、畳をきちんと敷いて穴を密閉すると、大崎を促した。

D

大崎が葉子を家に案内したとき、夫婦の間には布団が敷かれ、絵里子は深々と布団に半分、顔をかくしてやすんでいた。

「あら、奥様。どこかお身体でもお悪いの」

大崎はニヤニヤしているだけで答えない。

枕もとに立ち、

「絵里子、お隣の奥様が、お見舞にいらして下さったぞ」

といった。びっくりしたような絵里子の目が葉子を見上げた。

「お風邪でもひいたの、絵里子さん」

葉子は半分がっかりして絵里子の枕もとに坐った。絵里子が病気では大崎夫婦と三人でプレイをするわけにはいかない。

床下の炭俵に詰め込んである勇でも半殺しにしてやろうかと考えた。

葉子は絵里子のひたいに手を置き、熱をみてみた。別に異常はない。

掛布団のかげから絵里子の口をおおっているものが、ちらっと見えて、葉子は大崎の顔を見た。

さっきから絵里子が一言も答えないのが、おかしい。

葉下は、そっと掛布団をあげてみた。

「まあ」

絵里子は、ガーゼで猿轡をされていたのである。

「バレたか」

大崎は笑いながら掛布団をめくった。

全裸の絵里子が綿ロープで、足から胸までまるで独楽のように、びっしりと全身を縛られていたのである。

ふくらみきれぬ小さな乳房をロープは無惨に押し潰し、幼なさがぬけきれない、あどけない顔が、困惑と羞恥にみちて葉子を見た。

「隣の奥さんに拡張器を見られてしまったの

だろう。そんなに恥ずかしがることもあるまい」

大崎は楽しそうにいった。

金だけの、羞恥も興奮も忘れたプロと遊んでも、少しも面白くなかった大崎が、新妻の死にたくなるような羞恥に悶える姿を見て、はじめてプレイの醍醐味を知ったようであった。羞恥のともなわない女のM化は、つまらない。

金属性の拡張器が、幼い華奢な、からだつきにしては、女らしい肉づきの尻から腰に、かけられてあった。

「はずして見せて下さない？」

と葉子は、大崎にたのんだ。大崎はうなずいた。

絵里子の全身に巻きついてたロープを、下半身だけほどこき、鴨居にロープをかけて吊るせる状態にした。

大崎はカギを取り出すと、拡張器につけられている錠をはずして、拡張器を取った。

かなり太い栓が、絵里子の尻にあった。

「膝を立てるんだ」

鴨居にかけたロープを引っ張り、絵里子の上体を浮かせると、大崎は後手に縛られて前につんのめっている妻にいった。

絵里子は、ゆらゆらしながら、夫が処女地の開拓の具合を調べやすいようにした。

「そうだ。それでいい」

新妻の従順振りに、大崎は珍客を迎えて、かなり満足したようであった。

大崎はいろいろなサイズの栓を取り出し、葉子に説明しながら、いちいち実験してみせた。

蒸しタオルで腫れぼったくなっている柔肌をむしながらのことだが、実験台はたまらない。

「ねえ、本当に出来るの」

と葉子は、大崎に、きいた。

「できますよ」

「やって見せて」

「うむ」

と猿ぐつわの下で絵里子が呻いたようであった。何か、いったのに違いない。

葉子が絵里子の猿ぐつわをといいた。

「何かおっしゃったの、奥様」

「――」

「三田さんの奥さんが、拡張器の結果を知りたいとおっしゃっている。絵里子も喜んでお見せするだろう」

「いや」

と上半身を吊るされた新妻は叫んだ。

「そんなこと、いや」

「あら、ちっとも恥ずかしがることなんかないのよ、奥様」

と葉子は絵里子にいった。

大崎が服を脱いだ。裸の夫婦を目の前にすると、一人だけ着物を着ている葉子のほうが急に恥ずかしくなったから妙であった。

蒸しタオルの湿布と、マッサージと、クリームの潤滑油が大崎の手で用意された。

「いやったらいや。奥様の前ではいや」

絵里子は泣き叫び、上体を激しくゆらして抵抗した。

「うるさい。静かにしている」

大崎はうしろから妻の髪をつかみ、勢いよくうしろに引っ張った。

「いたい」

絵里子のあごがあがって動かなくなった。

「奥さん、こいつの髪をあばれないようにつかんでいて下さい」

と、大崎が葉子にいった。

「かわいそうだわ」

「いつもは、もっとおとなしいのになあ」

「そりゃ無理よ。私が見ているのですもの」
「とにかく、つかんでいて下さい」

大崎は無理やり、妻の髪を葉子に、にぎらせた。

「ごめんなさいね、絵里子さん。あばれるからいけないのよ」

ぽろぽろと涙を流している絵里子に葉子は優しくいった。男を責めるのと違って、どうも勝手が違っていた。ぐぐっと大崎の手に力が入った。

「あ、あっ」

と絵里子が叫んだ。

「痛い」

と大崎が、どなった。

葉子は絵里子の髪をはなして、大崎の側に寄った。結果をこの目ではっきりと見たかった。

くくくくと絵里子はのどをふるわせて悶えた。

「だめ、やめて」

次の瞬間、絵里子は再び、もうれつにあばれだした。

大崎が苦笑いしてはなれた。

「浣腸と似ているらしいんだ」

と大崎は葉子にいった。

「浣腸ですって？」

「先に本物の浣腸をして、腸内を清潔にして

おかないと駄目なんだ」

「それじゃ、浣腸をしましょう」

と葉子は大崎にいった。

「それだけは、かんにんして」

と絵里子が、うなだれながら哀願した。

大崎が三〇CCのシリンダーを持ちだし、グリセリンをいれ始めた。

「お客さまのお申し出だ。静かにしているんだぞ」

「いやいや。それだけは絶対いや」

怒った大崎は、やにわに絵里子の髪をひとまとめにしてロープに縛り、鴨居から吊るしてしまった。

「これなら動けまい」

更に、大崎が穿いていた靴下を丸めて絵里子の口中に詰め、大きなガーゼで嚴重に猿ぐつわをした。

「これでよし。さあ、浣腸をしてやるぞ」

シリンダーが不気味に光った。

大崎は二度、浣腸を繰り返した。

浣腸をしたことのない敏感な絵里子の身体は、すぐ反応をしめしだした。

絵里子は息の詰まる様な思いと、目がかすみはじめて、一気に全身の力が脱けていくような気がした。

下に置かれた便器が激しく音をたてた。

「うう」

猿ぐつわの下で絵里子は呻き続けた。

同性の目の前で強要されたことが、死ぬほど恥ずかしかったのに違いなかった。

異臭が鼻をつき、あわてて大崎が便器の中のものをトイレに始末しに行き、葉子は窓を少しあけて、ぐったりと天井から吊るされている新妻の幼い身体を見つめていた。

「もう許してあげて」

と葉子は大崎にいった。

「おやおや、なんと気の弱い」

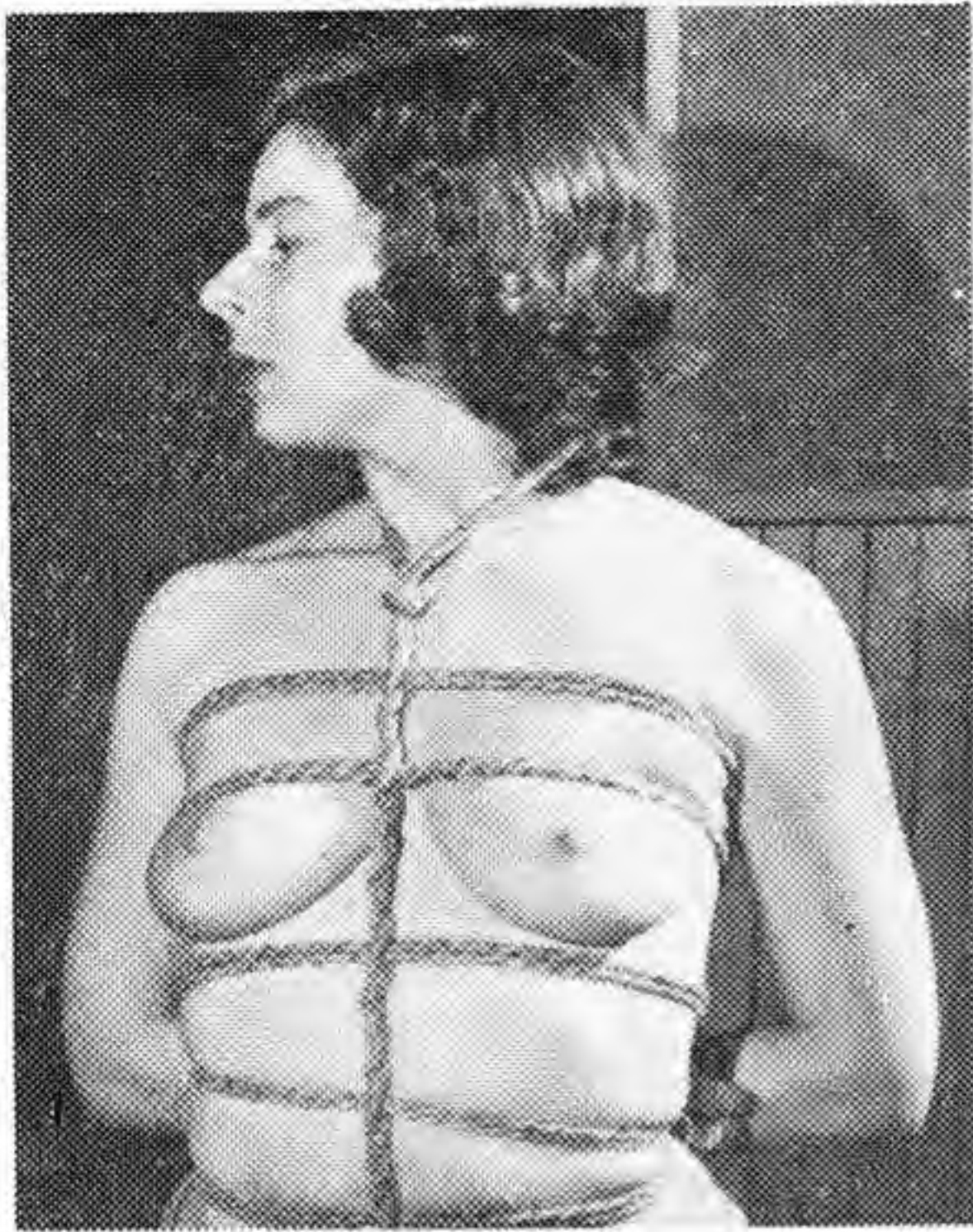
「男なら何をしたっていいけど、何も知らない絵里子さんじゃ、急にいろいろなことをしようとしても、ちょっと無理よ」

大崎は笑って、うなずいた。新妻にあまりショックをあたえて、あとで寝込まれたら大変だと思ったのに違いない。

「奥さまを洗ってあげて」

大崎にいい、勇のことが急に心配になった葉子は早々と大崎の家を出た。

炭俵詰め勇を、あまり長時間、床下の穴にとじこめておき、頭がヘンにならたら、それこそ大変であった。



金^{きん}髪^{ぱつ}碧^{へき}眼^{がん}の美^び女^{じょ}を縛^{しば}る

ハカ
メ
ラ
・
ル
ポ

塚^{つか}

本^{もと}

鉄^{てつ}

三^{ぞう}

本誌四月号で私は「見果てぬ夢の物語」という一文を載せてもらった。

その、最後の方でハ関谷富佐子さんからの便りが来たVということを書いた。

実は沢山の助手の方々の応援を得て素晴らしい緊縛フオトを作成しようと張りきっていた矢先だったので私は関谷さんからの手紙の封をわくわくした思いで切った。

☆

お手紙なつかしく拝見させて頂きました。何時もあの時の事を想い出しては、うっとりとするの過ぎるのを忘れております。

この前のお手紙でお約束しました通り、来週に又御逢い出来るとのことですが私の方の家族に急に長期療養を必要とする病人が出来ましたので、しばらく外出することが出来なくなりました。まことに残念でございますがしばらく休ませて戴きとうございます。

しかし身体の方は暇でございますので、もし御よろしければ私の体験から生まれました色々の事を文章にしてみたいと存じております。又、私と同嗜好の女性の方とも文通したりして、私の考えていることを験してみたり

確かめてみたいとも考えております故、よろしく其の折は御配慮下さいませ。

此の間の写真の中で、もしや見られるのが撮れておりましたならば、記念にアルバムに残したいと存じますので、御都合のよろしい時に御送り頂けないでしょうか、御願い申し上げます。勝手なことばかり申し上げましてどうか御許し下さいませ。

又御会い出来る日を楽しみにして待つております。

先ずは御返事かたがた御詫びまで

かしこ

☆

関谷さんからの手紙の内容は折角大いに期待していた私の心をしばせるに充分なものであったが、それにも増して彼女からの手紙の簡潔な文章の素晴らしさ、美しい文字には、思わず手にして、うっとりさせられた。

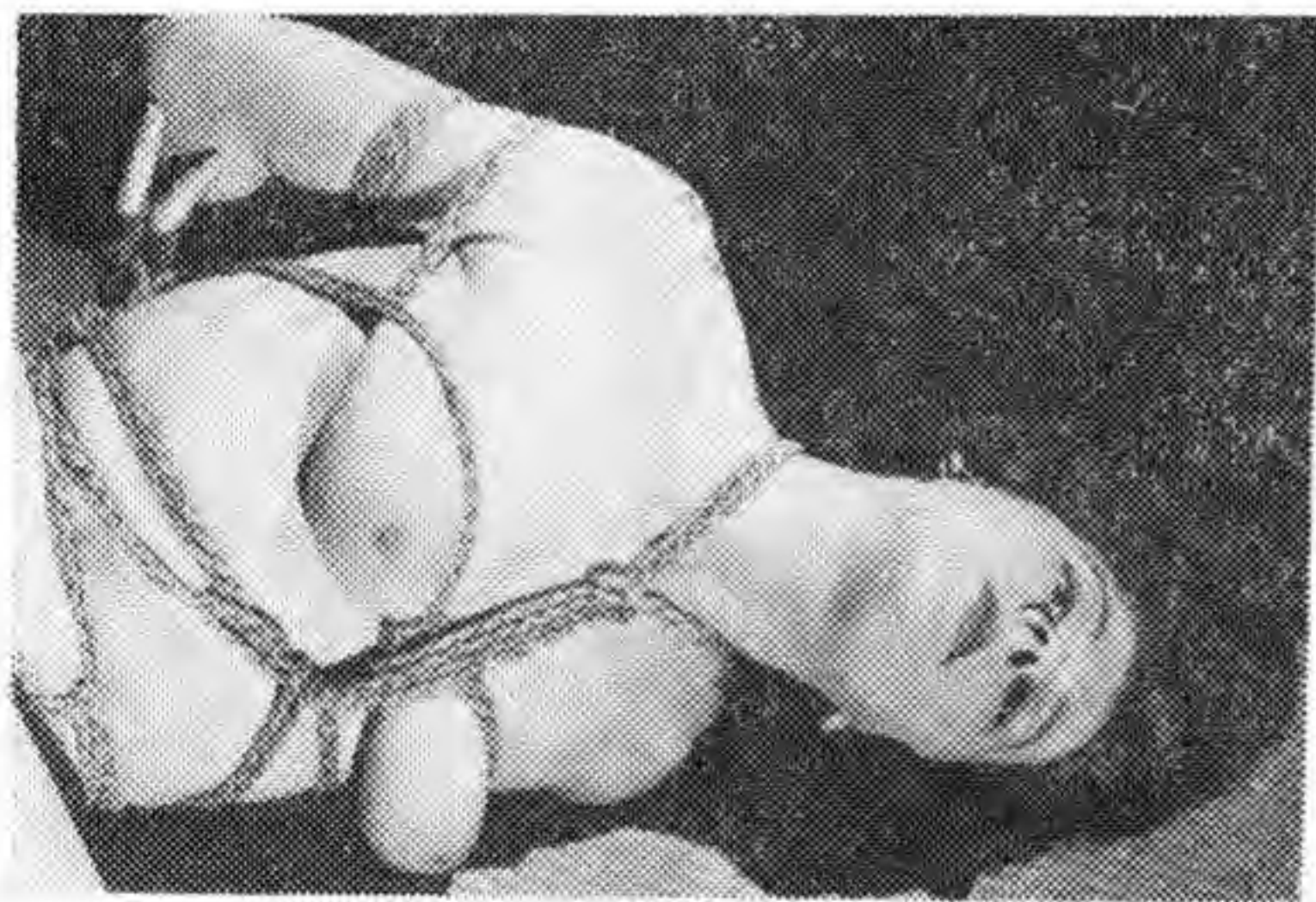
私は早速、気に入った写真を選びだすと共に、都合がつくようになったら、すぐ便りを呉れるようにと書いて手紙を出した。

さて、今回の助手募集のことで、私は沢山の友達を持つことが出来た。近くの人、遠くの人、そしてさまざまな職業にたずさわる人たちであったが、皆胸襟をひらいて語り合え

る人ばかりであった。

その中で仮りにA氏としておこう。A氏はもう二十年近くも小学校の教師をしておられて、その道ではベテランであるが、緊縛写真の撮影についても中々造詣が深く、私も大いに教えられるところが多かった。

A氏の愛用されるカメラは三十五ミリの旧



型だが、この機種をよく活用されて傑作を多く作られているのには驚いた。引伸機を持っていないということでライカ判の密着焼を自分で作って、コレクションされていた。

結果的には保存するのにカサ張らず非常に便利であり費用もライカ判の密着焼では薬品や印画紙にしても極めて安価で出来るという点は有利である。だが、いざ鑑賞する点になるとライカ判では如何にも小さすぎる。折角の傑作が台なしであると思った。

A氏によると、私達のような薄給の者にとって費用がかからないということは大きな魅力である。他人に見せるわけではないので、自分で鑑賞するときはルーペで拡大して眺めると結構楽しめると言っていた。もっとも私が借用したネガでキャビネ判に引伸して見せたところ、密着焼とは違った抜群の迫力に、撮影した彼自身が驚いていた。

なにしろ、十何年かにわたって、こつこつと暇にまかして撮り溜めたネガだけに、眺めるだけでも中々大変である。全部伸ばすとしたら手間も費用も大変だろう。

モデルは、彼の説明によると殆ど水商売の女性が多かった。中には教え子の娘さんや親しくなった家庭婦人も混っていたが、むしろ



それは特異な方で、アルサロなんかの女性が着衣や裸体で縛られている写真が大半を占めていた。無口に近いA氏は縛り写真の撮影の苦心談は余り語らないのだが、それらのコレクションを眺める眼を見てみると、如何にも楽しそうで羨ましい位だった。

私も自分の撮影した千数百枚の写真をA氏に見せたが、彼は撮影のデータ、特にライティング等に深い興味を示し、縛り方などについて多くの質問をしたが、写真を欲しいということは一言も口に出さなかった。A氏は写真撮ること、そして、自分の撮った写真を眺めて想い出に耽ることに楽しみを見出しているようであった。全裸にして縛った女性に

である。彼は完全な鑑賞主義者であり且つ体験派、実践派でもある。

コレクションは相当持っているが、全部他人の作品であり、自分では撮らない。従ってカメラの助手としては適当でないかもしれないが、縛りの助手としては優秀な人材といってもよいだろう。

細引きといった細手の紐で豊満な女体の柔肌に喰い込むような縛り方が好きだといったが、彼の希望は撮影の場面に立合って、自分の手で女体を縛ってみたいというところにあるらしい。今までプレイは何回もやったが写真に残しておかなかったのが残念だともいっていた。B氏の話の聞いていると私の方

とらすポーズについても彼は中々精しく、カメラアングルの変化によって如何に美しい写真が撮れるかという点に関心を持っていることは私も同感するところが多かった。

B氏は、開業医である。裕福で金に不自由はしないが暇がない口

が写真係をやらされそうで、とんだ助手志願者だと思った。

C氏は——もうよそう。こんなことを書いておってもきりはないし、第一読者の方々も興味を示されないだろう。

関谷さんからの便りで気落ちしていた私に編集部から川路叢子さんを撮影せよとの話があって、このことは五月号で八片えくぼのマリアVとして書いた。川路叢子さんについては辻村氏がいずれ『カメラハント』で第二回目の分を書かれるそうなので私としては、彼の麗筆に期待することにしよう。

編集部から、お前も最近少しは人気が出たんだから「書け、書け」とやかましく言ってくる。しかし私は至って物ぐさで自分の名前を売り出したいなどとは、いささかも考えていない。気が向けば熱中しても書くが気が向かなければ机に向かう気もしない。

そんなとき、耳よりな話が入ってきた。私の家の数軒先に徳田圭之助という将棋仇があった。あったというのは、今は引っ越してしまっただけで、そこにはいないからである。

徳田氏がまだ私の家の数軒先に居を構えていた頃である。私が例によって塀もない裏庭で柔軟体操をやっていると、犬を連れた徳田

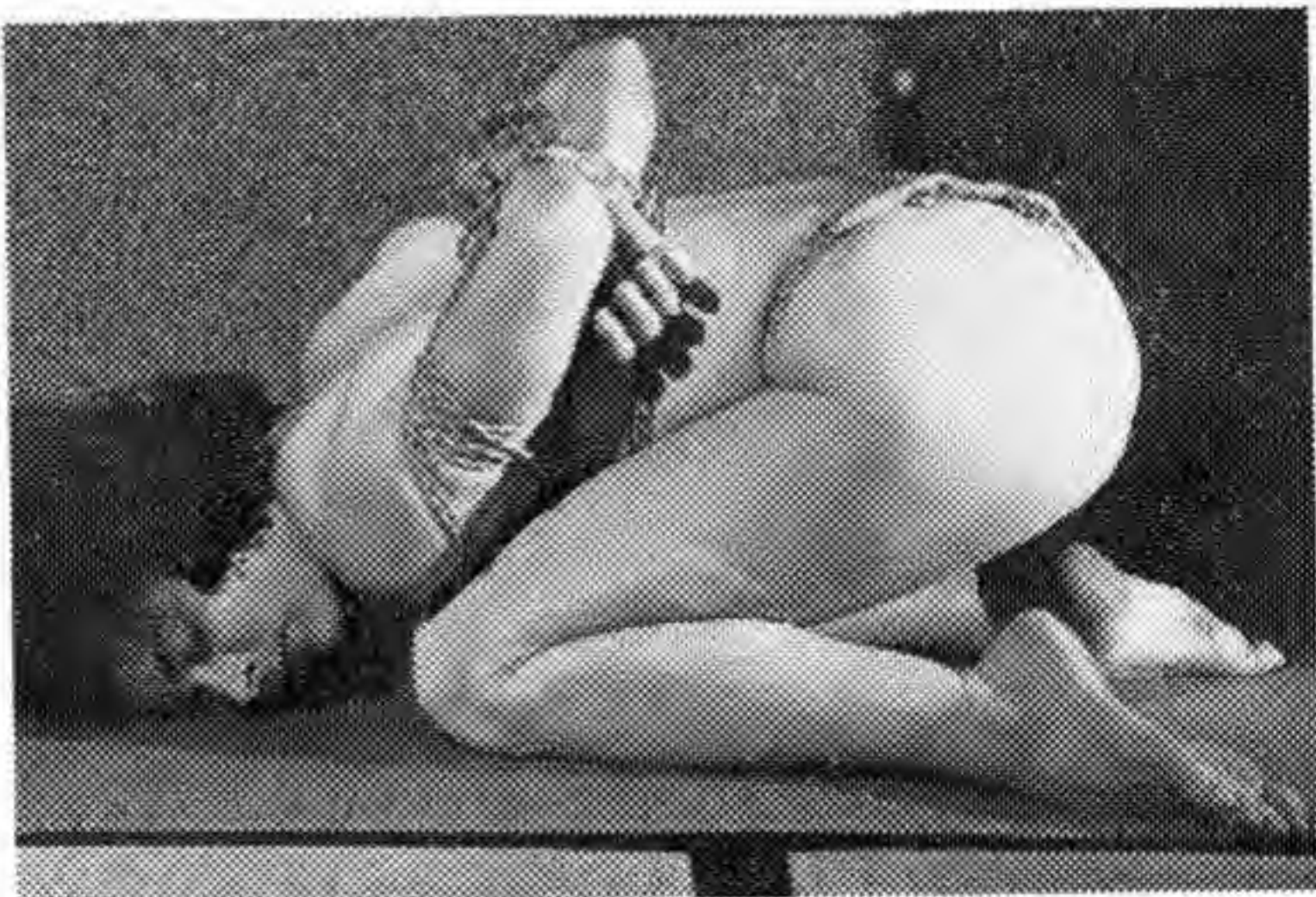
氏がやってきて言葉をかけた。今まで道で出会ったとき挨拶する位の間柄だったが、この日は「中々お精が出ますな」ということから「時に貴方は碁や将棋はおやりになりませんか」という話になった。

どうやら楽隠居で暇を持て余している風であった。私は一介の素浪人でとても楽隠居の身分ではないが、勝負事は飯より好きときてゐるから、この誘いに早速のった。

こういったとき、宮仕えしていない者は至って気楽である。朝っぱらから徳田家の十帖の間にでんと将棋盤を据えての対戦とは相成った。指してみると、これは又なんと、どんぴしゃりの好敵手なのだから驚いた。

私は大体、じっくり銀櫓やぐらなんかで玉を囲んでから、理詰めで一步一步敵陣を攻略するのが好きである。どちらかといえば持久戦型というのか、そういう型に持ち込んでしまえば相当な実力を発揮出来る自信があった。

それに引きかえ徳田氏は齡に似合わず、急戦法が好きで、私が完全に玉を囲ってしまわない間に、飛車、角、銀、桂などを総動員して一挙に私の陣営を破ってしまうのだ。そんな時、余りのあっけない負け方に、私は負けた気がなくて「もう一番」ということにな



ってしまふ。だが、私の陣営に殺到した攻撃軍が私の必死の防戦に息切れしてしまうと、私は伸びきった徳田氏の駒を途中で寸断して豊富な持駒で攻撃する。そうすると、何しろ徳田氏は自玉を囲っていないのだから、あっという間にあっけなく詰んでしまうのだ。「ああ、もう一息だったのに、もう一番」

ということとで駒を並べはじめてゐる。勝ったり負けたり、戦法は急戦型と持久戦型と違ふのだが、腕の方はどうやら五分と五分。昼飯も忘れての熱戦を展開させてしまった。

それからというものは、お互いに誘ったり誘われたり、将棋狂いみたいになってしまった。徳田夫人はまことによく出来た人で、嫌な顔一つせず、笑顔で迎えてくれるのだが、いつもいつもということになると気がとがめて仕方がない。それで徳田氏の行きつけの料亭で落着いてやらかそうということになり、電話をしておいてもらって、そこで落ち合った。

ところが料亭の女将、何をカン違いしたのか気をきかし過ぎたのか、若い芸者二人を侍らせて準備をしておいてくれた。

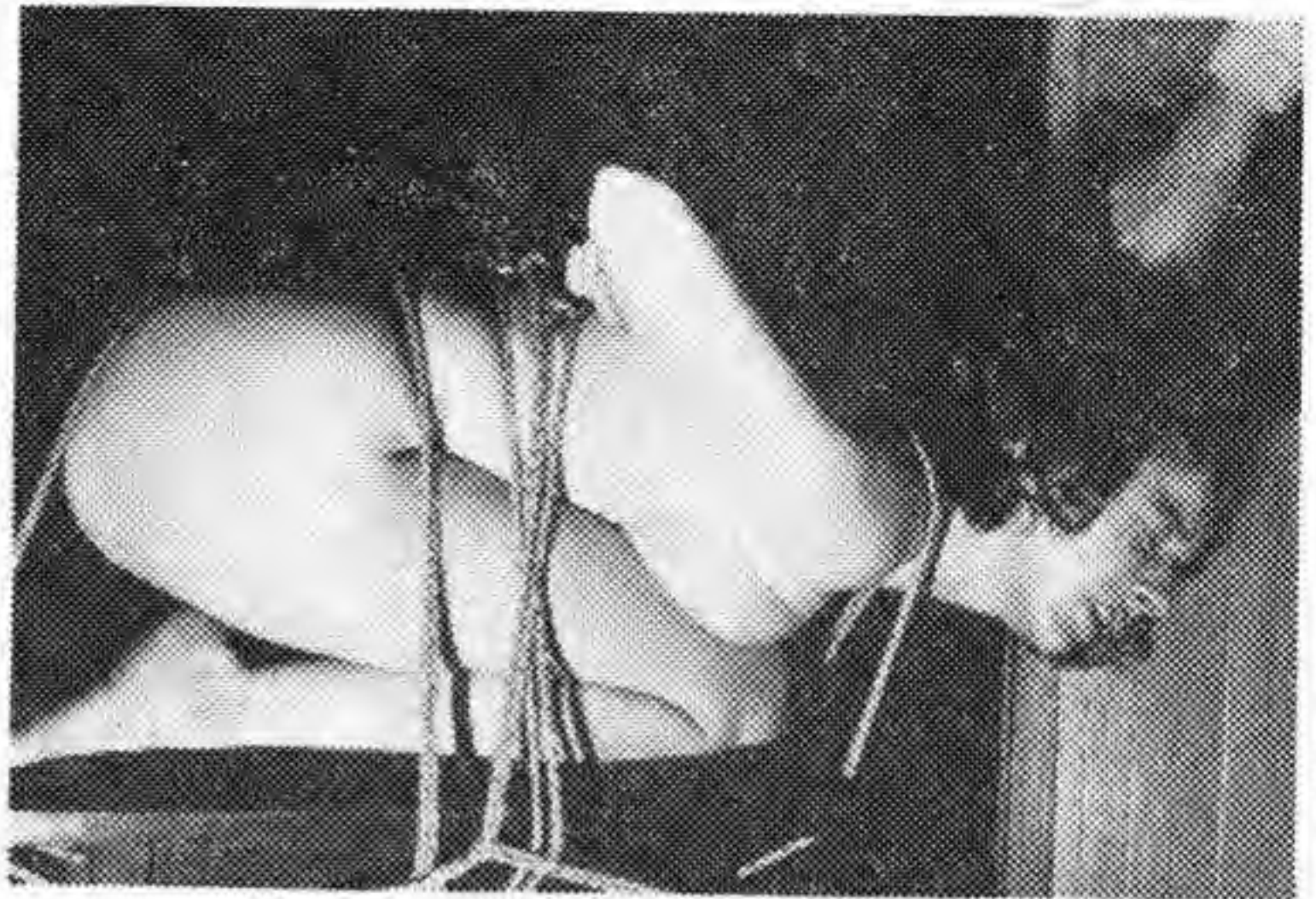
その晩は片手に盃を持って芸者に酌をさせながらの対戦と相成ったが、私達二人が余りに将棋にばかり熱中するものだから芸者の方が怒りだしてしまった。

「私達を呼んでおきながら、将棋ばかり指して馬鹿にしているわ」

というのだ。

「チップをはずむから黙って見ている」

と徳田氏が言ったが、将棋なんか知ってい



るわけがないから、この観戦は駄目である。首に腕を回したり頬にキッスしたり、膝を抓ったりして盛んに挑発していたが相手にしないので、とうとう二人共、帰ってしまった。そんなに親しくしていた徳田氏なのだが、昨年の暮に、千里丘に一年がかりの新築が完成して転居してしまった。

新築祝いの日、私は彼の家を訪れて木の香も新しい豪壮な家を見せて貰った。

北摂の山々がくっきりと線を描いているのを澄んだ空気の中で眺めることの出来る南向きの明るい洋間は、まるで外国映画に出てくるスイスの別荘のような錯覚を起こさせた。

私の家から彼の新居は直線距離にして一軒余り、目の前に竹藪などがあって昼間は万国博会場を望見することは出来ないが、夜ともなれば、明るい光茫が夜空の雲に映えて、ああ、あそこが万博の会場かと方角を確かめることが出来る位の近さである。しかし道は、うねうねと曲りくねっているので車で走っても、二十分はかかる。

流石に彼が私の家を訪れることは転居以来なくなったが、毎日のように電話がかかってきて、色々の口実を設け遊びに来いという。勿論、将棋をやるためである。

私が小耳に挟んだ耳寄りの話というのは、徳田家で万国博の民宿、それも外人の民宿をやるというのである。そうなれば若い外国婦人がくるかもしれない。

英語を話せるという条件にも徳田氏だったら合格である。洋風のベッドを具えた明るい洋間、洋式トイレ、広いタイル張りの浴室に

はシャワーも備えてある。至れりつくせりの一流ホテル並みの新築の家を開放しようというのであるから外人の民宿希望者にとってはまことに福音である筈だ。

その第一陣がサンフランシスコから来る白人女性だったので、私は大いに興味を持った。舞台の上の白人女性を眺めたり、駅なかで出合う外人女性を見近かに眺めることはあっても、日常生活をする白人女性の姿を見ることが初めてであるからだ。

大体、五日の予定で三日を万国博見物に当てあとの二日を京都や奈良の観光に当てたいというような希望だと徳田氏にきいたので、その日程の間に私も徳田邸を訪問して、具さに彼女たちの挙動動作を見たいと思った。

そういった私の頼みに対して、徳田氏は快諾したばかりか、何だったら、ずっと私の家に泊って、出来たら京都や奈良の案内もしてやったらどうだとまで言ってくれた。

私は徳田氏と違って英語ペラペラというわけにはゆかない。ピジョンイングリッシュもいいところである。大体外国語の会話というもの、少し位話せても、傍に自分より遙かに上手な人がいては口が動かせないものである。だから徳田邸に於ては、徳田氏に通訳し

でもらうのが速道である。しかし、もし仮りに車の中で二人っきりになることが出来たとしたら、私の英会話もかなりいい線が出せるかもしれない。

徳田邸からは万博会場の北口まで完全舗装の道を歩いて五分ぐらいだから、万国博見学者の宿舎としては、最も地の利を得ているといつてよいだろう。

今年は日本列島の上に寒気流がどっしりと居据っているとかで、三月になつてもまるで真冬のように寒い。名神高速道路も八日市から養老のあたりまで、積雪や凍結のため連日のように速度制限やチェーン携行をラジオが呼びかけている。

関西では『奈良のお水取り』がすめば、寒さもやわらぐと言ひ伝えられているが、今年はそのお水取りがすんでも一向に暖くならないのである。待望の万国博開会式の日も粉雪の舞う、うすら寒い日であった。私は十一時から開会式の模様をテレビで見た。

翌十五日は一般公開の初日である。丁度日曜日と重なって相当な人出だろうと想像されたが蓋をあけてみるとコンピュータ予想とは違って二十七万人とかの入場者数だったそのである。風も強く寒かった。私は依頼され

た仕事を持っていたので大阪市内まで出かけたが、市中は万国博のポスターやワッペンが貼りまわされている割には静かであった。

愈々第一陣が到着した、という電話を徳田氏が私にいられてくれたのは、十六日の午後になつてからであった。着くなり荷物を置いて万国博の見物に出かけたということである。限られた日程だから一時間でも惜しいという

気持はよくわかる気がする。

十六日、十七日、十八日が万国博の見学で十九日、二十日が京都奈良見物。費用の都合で日程はこういった程度だそう。

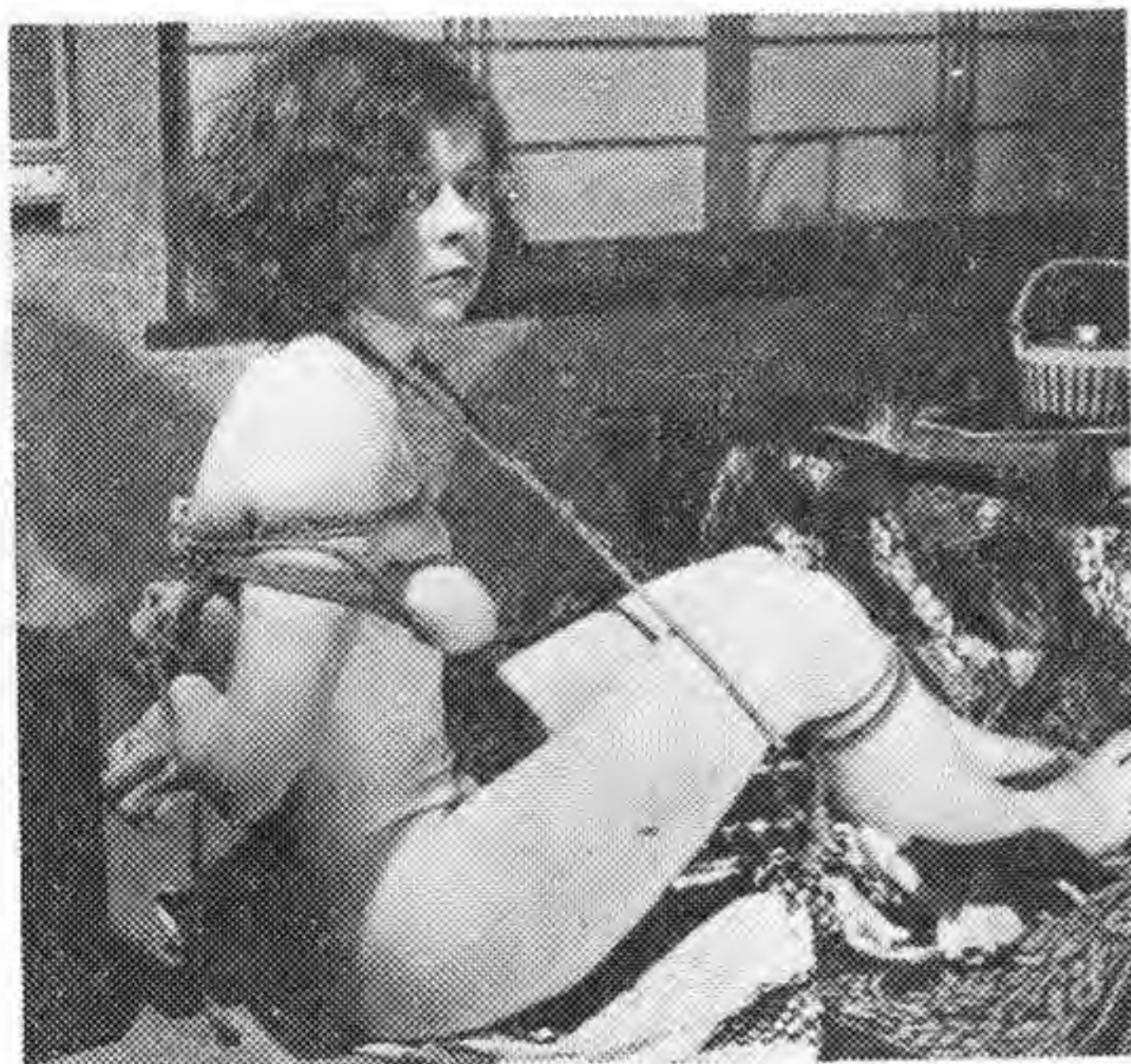
私は夕食もそこに終えて早速徳田邸を訪ねた。例によって将棋盤を挟んで熱戦をくりかえしたが、その合間というより将棋を指しながら遥々万国博を見るため日本を訪れた異邦人のことを徳田氏から聞いてみた。

「写真に撮れるような若い女性はいるかい」

という私の質問に、徳田氏は、大有りだよと自慢げに答えてくれたのには、大いに気をよくした。しかし、その夜は疲れているとかで私の期待に反して彼女たちは出てこなかったたので顔を拝むことは出来なかった。

十八日の夜になつて、私は徳田氏が口説いてくれたシーラー・ケニーと呼ぶ二十三才の女性に紹介された。

彼女は房々とした金髪、それにライトブルーのひとみがきれいに



澄んでいゝ一七五センチはある長身の美人である。

東京や大阪の街には興味はないが、京都と奈良は是非見たいと思つていたので本国を出発するまで、パンフレットや案内書で十分予備知識を得てきたというのである。もし時間が足りなければ奈良は省いても京都だけは、どうしても見たいという熱心さである。

十九日と二十日の両日、私が彼女を古都案内をするなら、二時間ぐらいならモデルになつてもよいと言つてくれた。

私はロイヤルホテルから英文の京都奈良案内書を貰つてきたのを彼女に与え、二日間を費して案内役をかつてでた。

奈良は飛鳥の石舞台、法隆寺、東大寺、あとは猿沢池や春日大社などドライブで過ごし時間がないので一路、京都へと向かった。

「おおワンダフル」

大げさなゼスチュアで感心している彼女をせかしながら、三千院、苔寺、清水寺、金閣寺、天竜寺、嵐山、詩仙堂なんかを訪れた。

彼女は京都案内のパンフレットを参照しながら熱心に見学していた。平安神宮の前を通つて南禅寺では駐車場に車を置いてから広い寺内を散策した。ようやく黄昏が迫つてき

て寒さがじわじわとオーパーを通してしみ込んでくる気配である。

二日に亘る古都見学も終りに近く私達二人は、すっかり疲れてゐた。南禅寺を出るとすぐその純日本風の旅館をわざわざ選んで休憩することにした。如何にも古都京都にふさわしい落着いた数寄家造りの部屋である。

彼女は今まで見学してゐたお寺の延長のような気持なのか、何の抵抗もなくついてきたが、私の目的は写真の撮影にあるのだから、さて、どのようにして縛りのきつかけを掴もうかと考えると心は落着かない。

部屋に入ると女中が風呂の準備をしてくれたので先ず彼女に入浴を促し、その間に私はひそかに撮影の準備をしておいた。

浴衣をつけさせてビールを注いでやると、浴後で咽喉がかわいてゐたのか、立て続けに三杯、一気に飲み干した。中々よい飲みっぷりである。胡瓜巻きを白い指で摘んでは美味しそうに食べてゐる。



さて、一息ついたところで、

「私の撮りたい写真は、素裸になった貴女を日本式に縄で縛ったポーズである」

と説明すると、「おお」と大仰にびっくりしたような表情で顔をしかめたが、

「日本の風習がそうであり、且つあなたがそれを欲するならば……」

ということでもOKしてくれた。

私は白人の女性を、こんなに身近かに手にとって眺めるのは初めてである。まして縄で縛るといふのも生まれて初めてである。

シーラー・ケニーは鼻筋が通つた彫りの深い顔立の持主で、まさに異邦人といった感じが濃厚な女性である。それに碧眼というにふ



さわしいサファイアのように澄んだつばらなひとみが、日本人の女性には到底見ることの出来ないエキゾチックな雰囲気を全身から発散しているのだ。

浴衣を剥いで両手を背後に回した。

白人の女性の手を握るのも初めてである。

一七三センチの長身なので脚がまことに長い。それは勿論のことだが、腕も又身体に相

応した長さを持っている。捻じ上げると驚く位柔軟で何の抵抗もなく肩口まであがってゆく。後手にした高手小手縛りの好きな人には涎のたれそうな腕の上りようである。

後手首を縛った縄を首へ回して引き絞ってみたい衝動にかられたが、でも最初の最初から余り手荒なことをしては、なにしろ女尊男卑のお国柄のことだから、若し駄々をこねられでもしたら、折角の写真撮影もおじゃんになってしまうので、そうなるは大変だと思って、そろそろと縄を掛けてゆく。ブロンドという髪色はこんな毛髪なのか、房々とカールされたやわらかな毛並が西洋人形のように美しい。

ふと、私の眼は、それが当然のように、彼女の前の毛を注視していた。毛髪と同じ色の毛が霞のようにもやっている。

毛髪を染めていないという証拠は、前の毛と比較して見るのだとよく言われるが、こんなに近々と手にとるように眺めることが出来るのも初めてである。

黒髪と違って遮蔽度が低いので奥の方が透けて見えている。

肌は白人と呼ぶだけあって勿論抜けるように白いのは当然だが、日本人の女の肌の白さとは比較にならない。ライトを当ててみると白く輝いているといった白さである。

白色人種の女の肌の白さが、黄色人種とは格段の差を持っているのを、私は自分の眼ではっきりと確かめることが出来た。

肌が白いばかりでなく、大層柔らかい。悪くいえば何かぶよぶよしているようで、縄が喰い込むというより、むしろ陥没してしまうのではないかと思う程だ。

シーラーにしても、こんな純日本風の部屋で日本式に縄で高手小手に縛られるのは、生まれて初めてだろう。

床の間を背景に坐ったポーズを二、三とらしてみる。脚が見事な程長いから、坐ったポーズとなると如何にも脚を折っているといった感じで、なんとなくきこちない。

ライトを逆光で当ててみると、金色に輝やくうぶ毛が浮き上って見事である。顔を近づけてすかしてみると、只単に白いと思った肌には意外にも、うぶ毛が密生しているのだ。白人にはソバカスが多いものだ。それが肌

が白いだけによく目立つのだが、シーラー嬢の肌にはソバカスが見当たらない。陶器のように冷たい感じがするくらいシミ一つない白肌で、こんなにうぶ毛があるとは思議だ。

ごろりと畳の上へころがしておいて、真上から狙いをつけ、更に畳すれすれのローアングルでシャッターを切る。足の方へ回り頭の方へ移り、さまざまにカメラアングルを変えてみる。彼女は何が起こったのかといった表情で、動きまわる私の方に視線を向ける。

顔を畳から離して持ち上げるように言うと素直に従った。仰向けになった顔面の中で、一きわ高い鼻が異様に目につく。西瓜の種のような鼻の穴が日本人放れしている。

ツンとつき出た高い鼻は横顔で眺めるときは、まことに可愛いものであるが、鼻の穴の奥の奥までさらけ出したような、仰向けの顔を真上から狙いをつけられては、流石の美人も台なしである。私は彼女の美貌を踏みにじめるようなポーズを、どんどんとって行きたい衝動にかられた。

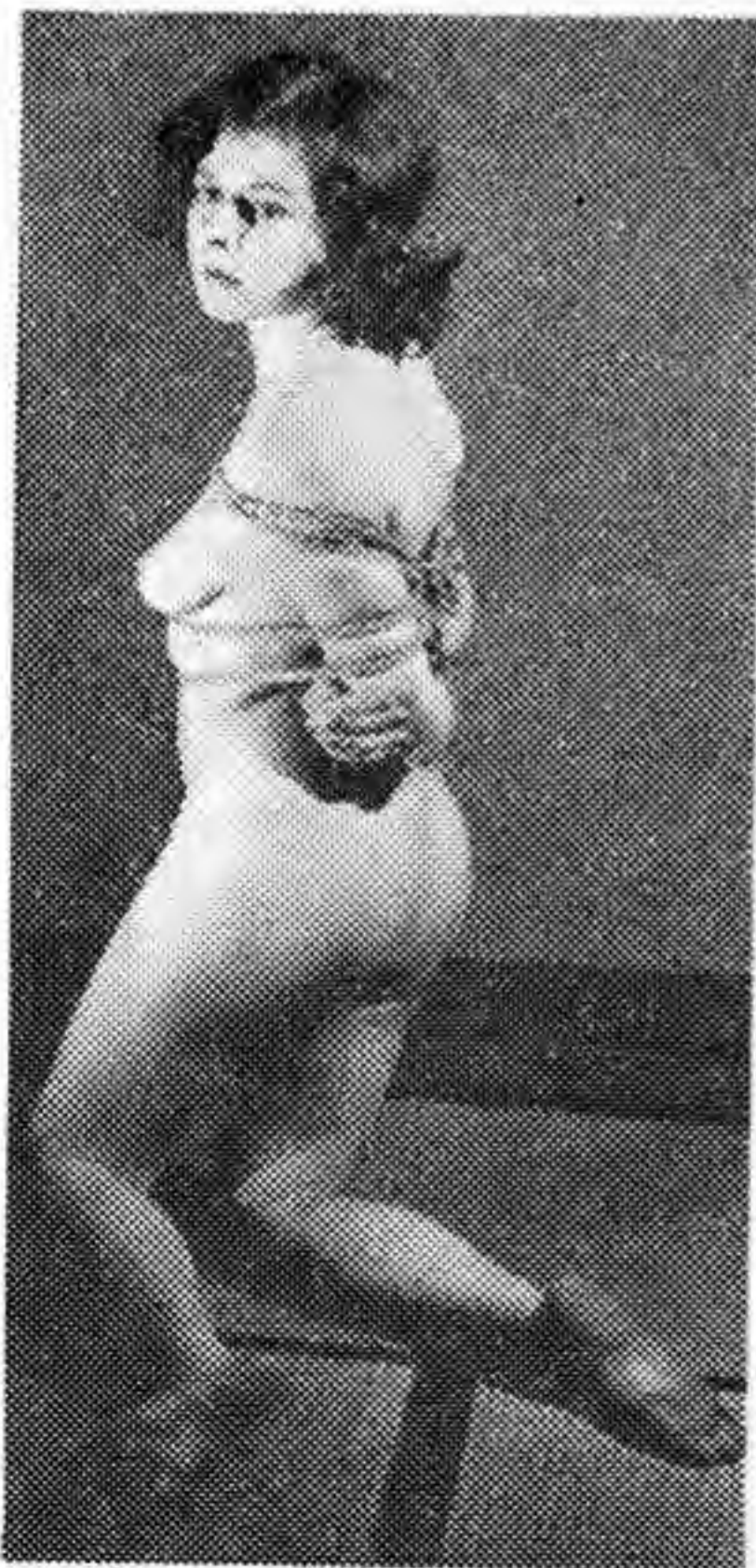
右へ転がし左へ転がし、ライトの範囲内から逸脱すると再び元に戻したりした。縛った両手首が背中の下敷になって痛たそうだったので「痛くないか」と尋ねたが「痛くない」

という返事だった。見た目では痛くない筈はないのだが、きっと辛抱しているのだろう。フィルム二本費消したところで縄を解く。

次は立って両手を挙げて縛ったポーズ。特に表情をつけているわけではないし、素人なので演技もなし、私の貧弱な会話ではその指導も出来ないで、ありのままなのだが、時には、びっくりする位美しい表情が出る。

両手を挙げて縛られているので疲れてだるくなってきたのか、もじもじと臀部をゆすり出した。そのウエストからヒップにかけての表情が素晴らしい。暫く放置しておいて、シャッター・チャンスを掴まえる。場所があって周囲から狙えれば面白いと思ったが、狭いので残念である。

縛られた両腕の間から、チラリチラリとこちらの方を不安気に眺めている表情が可憐である。諦観と不安の入り混った複雑な心境が顔面は勿論のこと、白い全裸の女体の中に、



ありありと窺うことが出来た。

限られた時間に幾ポーズもの変った写真を撮りたいたので、彼女を休ますわけにはいかない。解いては縛り直し場所を変えては撮影を強行していった。アメリカではお尻を叩いたり革具で拘束したりということが、よく行なわれているそうだが、白人女性をこのように日本式に縄で縛るといふのは珍しい試みであろう。坐るといふ習慣のない彼女を胡坐に足を組ませて海老縛りを試してみる。

縄を掛けたり解いたりする度に、私は殊更必要以上に彼女の肌に触れてみた。こんな機会はそう度々あるものではない。お尻をさすることも出来るし、乳房を握ることだって出来る。縄と縄に挟まった乳房を掴んで引っ張

り出すといった動作も、至極自然に行なうことが出来る。普通こんなことをやったら、どやしつけられるかもしれない。股間縛りという便利な縛り方があるから、ふんだんにお尻をさわることも出来る。

長身が二つ折りになる海老縛りには流石の彼女も苦痛の表情を示した。この縛り方は時間が経つにつれて益々苦しくなるのだ。

私は彼女の全身の表情の変化に注意して具さに身体各部の動きを観察した。顔面は勿論のこと、後手に縛られた指、それにぐっと反った足の指、緊張した太股、臀部、私は嗅ぐ



ように鼻を近づけて微細な動き一つも見逃がすまいと凝視した。

我々と人種の違う白色人種の若い女性だけに、シーラーの全裸の肢体は珍しくもあり興味もあった。暫く角度を変えてシャッターを切ってから、ごろりと横に転がした。二の腕が体重の下敷になり縄が締まったので一入苦悶の表情がひどくなった。それにも増して彼女の羞恥の部分が、あからさまに空気に触れて風通しがよくなったので、それをかくそうと必死になって身悶えしている。

とはいっても、なにしろ両手両足が縄で自

由を奪われているので、どうしようもない。今はもう、痛さを訴えて縄を解いてもらうより仕方がないのだ。そうした彼女の全身の変化を十分観察し終えてから、私はおもむろにシャッターを切った。

室温がようやく高くなってきて、むんむんとした熱気が私の額に汗をにじませた。

私はシボリを22にしてアップで彼女の身体の各部を幾枚となくフィルムにおさめた。

縄を解いても、彼女はぐったりと畳の上に伸びたように身体を横たえたままである。黒味を帯びた畳の上に、そこだけがホワイトの絵具で刷いたように彼女の裸身の白さが輝くように浮かび上っている。私はフィルムを入れ替え終って彼女を上から見おろした。

白い肌にくっきりと残った縄の痕が痛々しく目に映じてくる。だが、ここで伸びてしまわれては困るのである。

「疲れたか？」

私は立ったまま縄を手にして言った。

「疲れたけれど、あなたが更に望むのなら、私はやってもいいのよ」

と頼もしく返事してくれた。そこでテーブルと椅子のあるベランダへ追いやって、正座したポーズ、仰向けのポーズ、それに椅子を使って十数枚撮った。ここは場所が狭いので、ライトを固定するところがなかったたので、配光が思うように出来なかったのは残念だったが△責め△の味は少しは出し得たと思う。

固いテーブルの板の上に長い脚を折って正座した彼女を縛ったときは、少し可哀そうな気もした。こんなことを書くと、いささか失

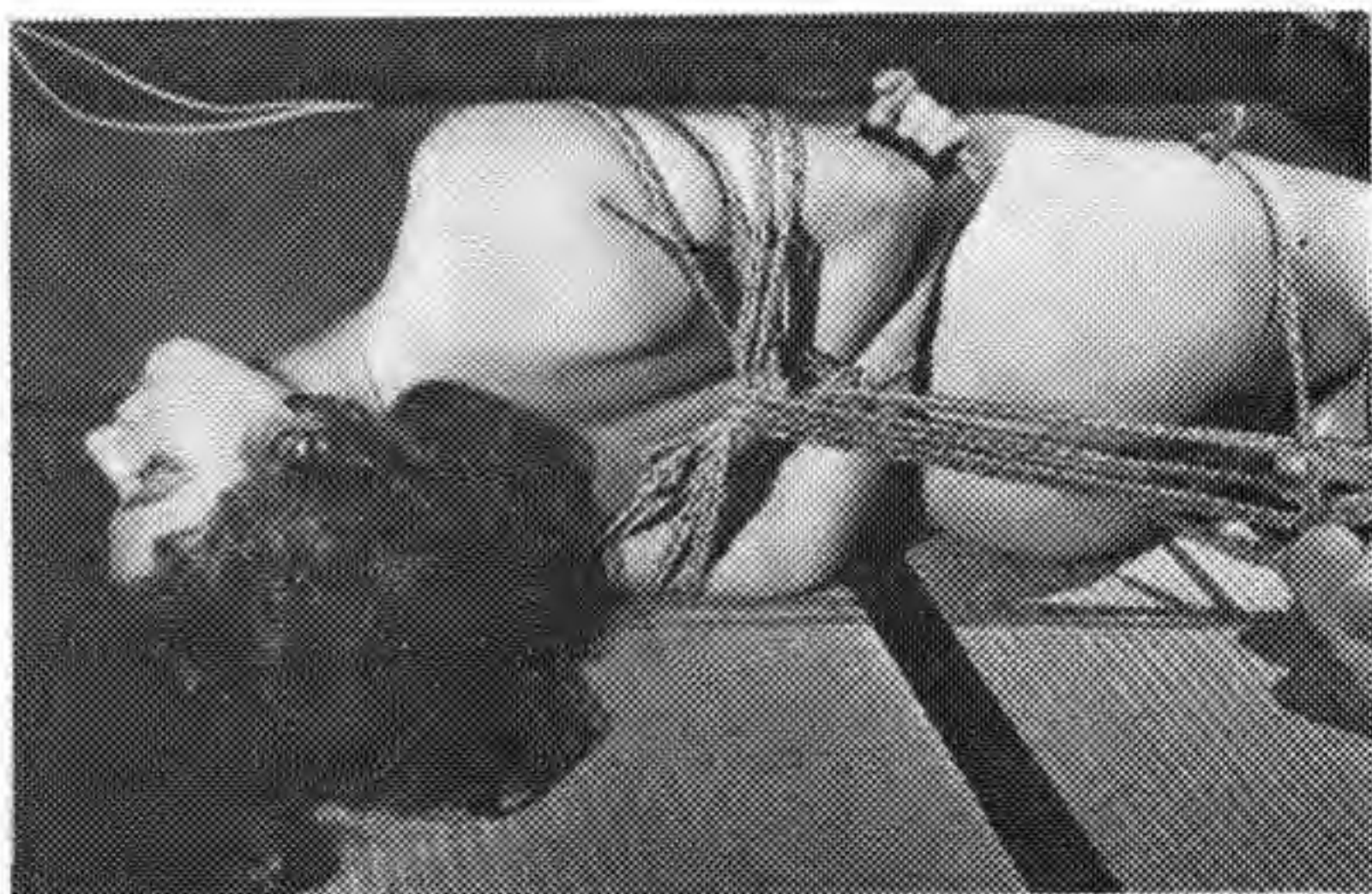
礼に当るのだが、どこから見ても美女というにふさわしい彼女ながら、身近かに直接縛り上げていると動物的な臭気がしてならなかったのである。エキゾチックな美しく整った顔立ちは遠くから眺めているのだったら、映画スター並みの美貌であるのだが、こうして近くで眺めていると脂っこい体臭からして、日本娘とは異質なものを感じるのである。

縛られて私の指定するポーズをとったときじろっと青い目をすき透るように光らせて、流し眼を放つ彼女の表情の中に、娘らしい面影をみつけて、少しは哀憐の心が起きた。

今まで十数人いやそれ以上もの日本の女性を縛って写真を撮ってきたが、やはり白人の女性が対象となれば勝手が違うのは当然である。平常親しく接していないだけに、異質なものを感じてしまうのだったが、写しはじめ二時間余り、やっと私も白人女性の濃厚な肌に馴れてきたようである。

テーブルと椅子を使つてのベランダでの撮影は彼女に多大の苦痛と忍苦を与えた割には写真的効果を発揮することは出来なかったが、白人女性に日本式縛りのなんたるかを判らせるのに、いささか役立ったようだ。

私は彼女を縛ったまま縄尻を持って歩か



せてみた。すらりと伸びた長い脚、ぐっとくびれたようなウエスト、洋服を着て歩かせたら、さぞかし素晴らしいスタイルであろうと思われる彼女も、全裸で縛られて歩かされている姿は哀れであり、殊に下半身が不安定で如何にも、なやなよとして危なげである。

私は部屋の中をぐるぐると引き廻しながら横から前から、彼女の全裸の肢体を熱心に觀賞した。抜けるような肌の白さは当然のことながら、大理石のような二本の脚のつけ根に煙のように霞んで見える金髪の毛は、珍しくて仕方がなかったので幾度となく前へ回っては熱心に観察した。

私が咏嘆の言葉を放つても、それは彼女にはわからないので、何度も前に回ってくる私をその度に不安気に顧る、その表情、殊に横顔は、ぞっとする程美しい。

鼻が高い。鼻筋がよく通っている。

青い目。ライトが当たると宝石のように輝くひとみが、何を思っているのか、私にもわからないが、いつも不安気で疑問をもったままなざしである。

何か物言いたげな口もと。しかし、この日本のハレンチ野郎に何を言っても解しないだろうと、じっと辛抱している風情。

それをいいことに、私はさんざん彼女の全身を視線でいたぶりながら歩きまわらせた。

「少し寒いわ」

と彼女が言い出した。さつき余りの熱気に私は暑くてたまらず、暖房をローに切り替えていたからである。

ここで休憩、縄を解いて浴衣を羽織らせ、炬燵に入ってもらおう。

フィルムを入れ替える。

約束の二時間は、とっくに過ぎてしまったが、もう二度とあるかわらない絶好のチャンス、このまま逃がしてしまう手はない。

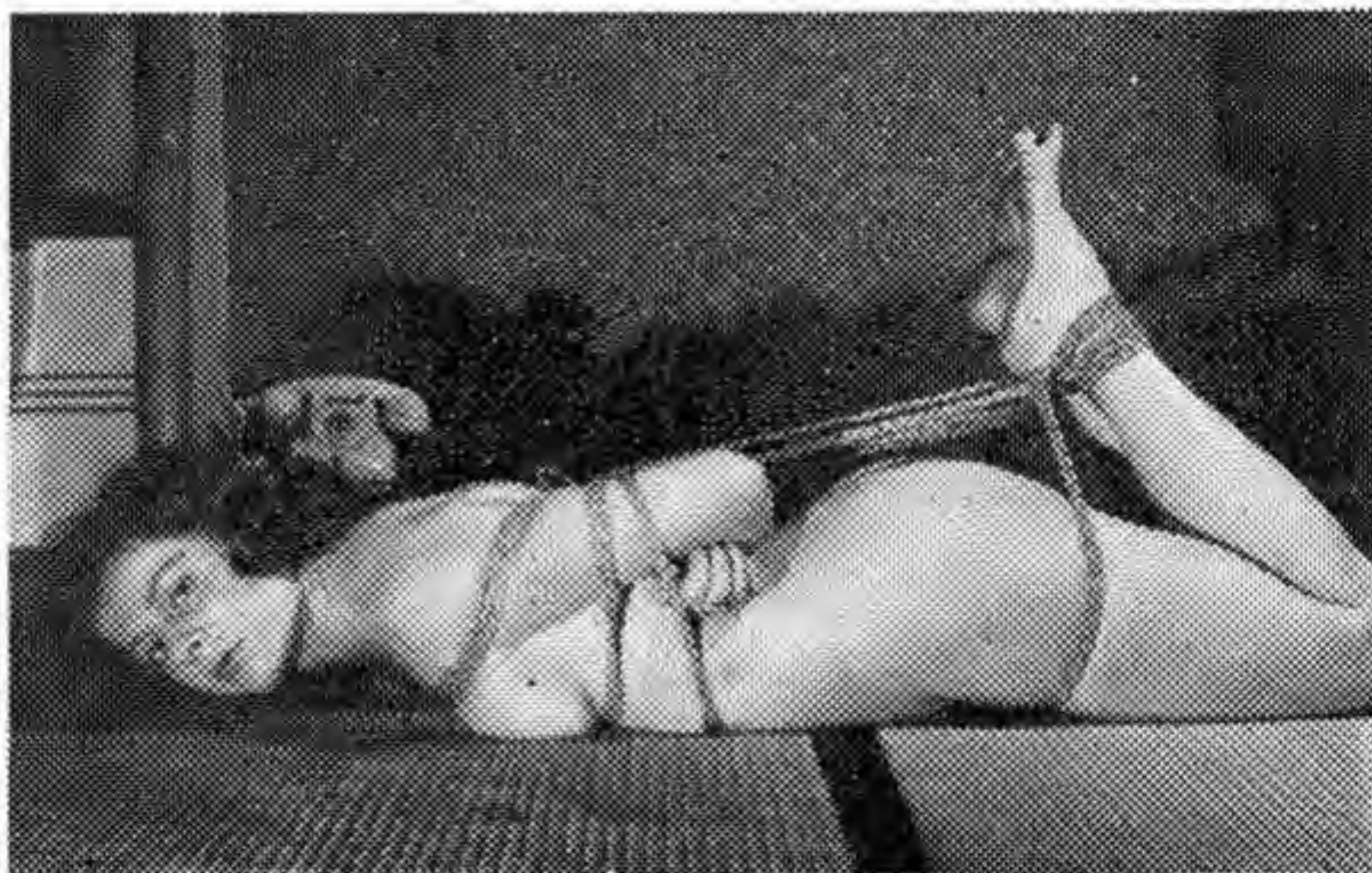
暖房をハイに切り替える。

ライトの位置を変えながら、見るともなしに炬燵の蒲団の中に身体を入れていた彼女の方を眺める。派手な赤い花模様のホーム炬燵の掛蒲団で両手両足をかくしているの、あらわれている部分の肌が一層生々しく電光に映えている。実際、素裸で引き廻している時よりも、このように蒲団で身体の一部をかくしている方がなまめかしく見える。

時間がどんどん経過してゆくのが惜しい。私は黒ずんだ麻縄をとりだしてしごいた。

この麻縄は太さも手頃であり、よく締まるので私の愛用しているものの一つである。女体には痛さは厳しいかもしれないが、この麻縄はよく締まり、それに肌とのコントラストも非常によいのである。

シーラーの両手首を背中中で組合わせて麻縄を掛け、二の腕から胸へと回し、乳房もくびれよとばかり力一杯締めつける。トゲトゲ



の麻縄は真白い肌にとって、横暴なばかりに強いアクセントである。ぎゅうぎゅう締めつけていると、一旦は背中に高々と挙っていた両手首が目に見えて下ってきた。

ドス黒く汚れて、その上ささくれ立った麻縄が真白い柔肌に喰い込んで強烈なコントラ

ストを示している。シーラー・ケニーにしても、こんな厳しい日本式の縛り方をされるとは夢にも考えていなかっただろう。

余った縄を首に回し、合わせて揃えた両膝と連結して、長身を二つ折りになるように縛り上げた。手荒らに掛蒲団をはねのけてシャッターを切る。

背後から目を近づけてみると、金色のうぶ毛が頸筋から肩口にかけて光っている。

白人女性の肌というものは、こんなに白いものなのか。

私は興味を持って再び彼女の全身を眺めてみた。

投げ出した足、太股。

太股の白さがまた格別なのだ。日本人の若い女性の肌の白さとは違っている。やはり黄色人種の肌とは違っているのだ。

シャッターを切り終わると、私は太股の白さを確かめるように掌でさすってみた。

両手で抱いて転がす。

二の腕に巻いた縄がぐっと肌に喰い込み、彼女は痛さに顔をしかめる。

鼻が高くて円らな青い目、典型的な北欧系の美人のタイプであるシーラー・ケニー。

今、私の目の下に後手高手に縛られ、しか



白人の若い女性を自由気ままに弄ぶことが出来る物珍しさに私は酔っていた。

正面から、側面から、そして彼女の顔の上に跨るようにしてハイアングルから狙ってシャッターを切った。

言葉の通じないところは動作で示して、私はこまめに動きまわって、彼女を起こしたり転がしたり向きを変えたりした。

カメラを置いてポーズを変えさせているうち、いつの間にかカメラが蒲団の下敷になってしまっていた。

麻縄が両の手首に痛々しく喰い込み、二の腕の縄の痕は赤く腫れている。

お尻をほりだして横臥したままのシーラー嬢は、もうすっかり疲れ果てた体である。

私は縄を解くふりをして、お尻の割れ目から漸次視線を前に移行させて、縛られた白人女性の肢体をゆっくりと観賞した。

抱き起こして頸に手を回し、左手で膝を揃

えて縛った縄を解きにかかる。背後の鏡台に彼女の後手に縛られた背中が映っている。

撮影が完了したことを告げるように、私はシーラーの裸身を締めつけている縄を解き放った。勿論目を楽しませることを忘れずに。

白くて柔らかい肌。

縄から解放されたシーラーの裸身を私は改めて抱きしめた。

十九日、二十日の両日に亘っての奈良京都の見物に同行したことが、二人の間に心に通うものを生じさせたのか、或は彼女の警戒心を薄れさすことに役立ったのか、そんな私の無しつけない行動にも、彼女は拒むどころか、却って自由になった両手で抱擁してきた。

雨戸の外を吹いている風の荒いことを、私は今になって気がついた。

樹々をゆする夜風の音が、ひゅうひゅうと如何にも寒々としている。

縄、コード、照明器具、カメラ、タオル、靴下、コップ、浴衣などが、足の踏み場もない位散乱している部屋を横眼で眺めながら、私は今、一体何時ごろなんだろうかとふとそんなことを考えていた。

京の夜は、春とはいえ底冷えする寒さの中に、しんと更けていった。

も両膝と首まで連結されたみじめな全裸の姿を晒しているのだ。

私が動くたびに彼女は不安そうな顔つきで私の方を眺める。私が何を仕出かすか警戒してみた、まなざしである。

じっと私の方を眺める青い目、澄んでいてライトに輝くような光を見せている。

そんなことに向にお構いなしに、私は彼女の全身を舐めるようにしてシャッターを切った上で、金髪を驚づかみにして顔を仰向かせ、頬、耳、顎、咽喉、と次第に下の方へ視線を走らせていた。



—— 思 い つ く ま ま ——

S・M・P 雑考

三

条

剛

カット・神戸狂四郎

五月号の小竹一浩氏の「S・M日記」の中で「S・M・P」なる略号を見て、余りよく使われている言葉であるだけに見逃がしやすいのが奇妙に新鮮に映り、興味を覚えたのは私一人であろうか。

そもそも「S・Mプレイ」なる言葉を使い出したのは、奇クの重鎮辻村氏であると記憶している。元々、辻村氏がカメハン連載の初期に盛んに用いられた用語であるが、S・M・P等の略号化されるに至ったのは、このS・Mプレイ化現象が一応安定した形で定着した結果であろうと推察する。

全くの初期の段階ではサディズム、マゾヒズムのイニシアルで「S・M」と云う略号が使われ出したものが、単に「S・M」とだけズバツと言いついてしまうことに、心理的抵抗

を感じるS派、M派の紳士方より、もっと人間的な言葉に置き変える作用が働き、S・M行為自体、高度な遊び (play) である事から (常に一般精神異常者と体質的な違いがあるのだと言う認識に立って) この様な言葉が繰返して使われ、今日に至っている筈である。「S・M・P」の持つ意味は、この種の世界を異端視する人々に対する防波堤の役割をする略号になるかと思われる。これからは小竹氏に習い、私もS・Mを語るでは無く、S・M・Pを語ると訂正するつもりである。

S・M・P化現象を最も安定した形で取り入れられるのは、何と云っても夫婦間であろう。辻村氏の様に、ハントした女性との、数多くのS・M・Pの機会を持てる幸運な方も何人かいらっしゃるだろうが、大抵の場合は前者の方

々であるはず。

後者の方は、定着化と云うよりも刹那的なものに陥りやすく、多分に危険と浪費に脅かされる事から、奇クに登場する告白文や体験談は前者の占める割合が多大な訳で、そこに多く読者と同一世界の人間であるという近親感が生じる。

勿論「カメラ・ハント」の素晴しさは例えようもなく、前人未踏の偉業樹立に活躍されている辻村氏に何の不満も無いのだが、所詮それは我々とは一線を引かれる方法、取材される方法も、我々と手のつながりようの無い世界である。

一方夫婦間のS・M・Pは、始めの内は寝室で前戯的なものとして取り入れていたが、年と共に本格化して、プレイの主軸を用具を変え

る事から変化を見出したり、(自作のものを借りたりする)場所の変化を求めたり、屋外への移動化を試みる。又、一元的にプレイを済ませたら、それでおしまいと云うのではつまらない事から、フオート撮影の併行化を計り、プレイの余韻をフオート作成に寄せて来るタイプも出て来る。

こうしたSMPの当事者が、次の手を打つて来るのはSMP現象を不定期なものから定期的なものとし、パートナーの拘束時間を決め、いわゆる、奴隷タイムと云われるものだが、その時間内の身体的及び、心理的なものへの加虐行為が行なわれるのである。

又、身体への簡単な拘束状態のまま街頭へ出る事により、S派はM派の心理的苦痛を見る事によって満足する。

肉体的な苦痛を与える(ムチ打ち等)ものと違って、こうした心理的な責めは智的遊技に近いものであり、S派、M派共に平和な社会の中で反社会的な行為を行なっている異和感で身がふるえるのである。

こうしたプレイを行ない得るのはパートナーの心理と肉体的条件をよく理解出来ている当事者間でなければ出来ないという点で、これが夫婦間SMPの特有、最大のものである。

唯、残念なのは、この種の場合フオートの併行化が無理な為、プレイ中のフオートに変

わって、帰宅後(前)のフオートであきらめなければならぬ点である。しかし、今後夫婦間のSMPの愛好者達は、一度はこの種のプレイへ行き着く事は間違いないであろう。

これに反してハント派は、多大の軍資金とチャンスが必要とする事から、特定の人を除き、屋内での一時的なセックスを伴うプレイに終始する事であろう。従って、未知の女性がM派で、S派の男性とSMPの一時を持つ場合には、それ相当の覚悟がいるものと解する。

第二の伊藤さんを出さない為にも、又、そうした犯罪行為が新聞種にならない為に、同好の諸氏の自重を望みたいものである。

元来、S派と自認する男性は、フェミニストが多く、軟派である。残酷趣味で非情なタイプの男性は、S派ではなくて、無頼派なのである。

従って、M派の女性とSMPを望むS派の男性は、たいがい気の好い男であろうと思うのであるが、しかし所詮軟派であるだけに、万一、事件が起きる様な事があれば、まず十中八九まで奇クのような出版物がいけないとされるのではあるまいか。この事が、私には一番気がかりなのである。

善良なる多くの奇クファンの為にも、一人の問題者をも出してはならない。SMPを行なう者は常に相手のよき理解者であらねばな

らないのである。これは、夫婦間SMP行為者にも同様な事が云えるのである。パートナーがいかに愛妻だとして、無理は絶対に禁物であろう。

この意味で、奇クが読者通信欄を設置してはいるが、直接仲立ちをする事が無い事は、大変物足りないようでも、良い事だと思う。同傾向同種の某誌の如き紹介欄を持つ事の無い様、今後とも希望したい。

その代り、と云っては気がひけるが、奇ク誌独自の企画を立てては如何なものであろうか。万国博開催で私も上阪し、三、四日間を送るのだが、こういう機会に、読者の希望者を募り、一夜、SMPの会を開催してみるというような企画は出来ないものだろうか。これ迄私的な会合は何度となく開催されている由。なんとか具体化されることを、希望してやまない。

話を元にもどし、初めの内は熱中出来た夫婦間のSMPも行き着くところ、決まってマソネリ化を嘆く。

それもそのはず、二人きりで何年間もやっていては、いかにプレイに変化を求めても、どうしても、同じような事の繰り返しになり、新鮮さに欠ける憾みがある。

新鮮さを求める段階で、自然のなりゆきのように複数化を思いつく。二人より三人、三人より四人と……。

この傾向は特に、S派の男性よりM派の女性に多いのではなからうか。被虐心は見られない欲望が多であるだけに、夫から他人へ他人からより多くの人々へと移行する。S派の責めのテクニクより、恥ずかしめられた願望の方が強く押し出されてくる。

苦痛を伴う制裁的なプレイよりも、露出的な屈辱心に訴えるものの方へ、M派の女性は傾いて行くのではないかと思う。そして面白い事には、こうした願望がエスカレートしていくのは、概して家庭が安定している人々であると言う事である。プレイを楽しむという事は、家庭が不幸な状態の時に出来るものではないからであろう。

——こうして複数のプレイの洗礼を受けるとS派の男性は積極的になり、夫婦の交換プレイを願望し、適当な相手獲得に乗り出すのである。この場合、あまり技術的なものにこだわることなく、単に自分の愛妻を他人の手にゆだねて観賞する。それ自体で燃え上がる。勿論、相手のパートナーを、自分で責め得ることで昂ぶりを覚えるのは当然であるが……。

この種の傾向は、単にセックスだけの場合は、映画にもなり話題になっているのだが、SMPの場合は、夫婦交換とは云ってもセックスを伴わないものが多く、SMP終了後の激しく燃えた情熱は、自分の妻に、あるいは夫に向けられるものになるはずである。時と

して、このパートナー交換の条件が、S派夫婦が、M派夫婦を同時に調教すると云う異形が生ずることも考えられる。

こうした場合、S派の男性がM派の女性を両人の監視の中で責め、M派の夫が眼前の妻の被虐行為を見せつけられる事に、より異常な昂ぶりを覚えて、ついにはS派の女性の足許にひれ伏すのではなからうか。

こう云ったケースは格別に目新しいものではなく、むしろこの種のケースの方が、夫婦交換のSMPの条件を満たすのに好都合で、さして時間を必要とせず簡単に決まるのではないかと思う。

S派の男性とM派の女性のコンビネーションの交換希望は、潜在的願望としてはおそらく最大なものであらうと思われるが、実際面では男性の都合により成り立たない場合が多い様に考えられる。

総じて言える事は、交換SMPは公開の可能なプレイヤー（演技者）のそれと違って、やはり隠花性植物の持つ、秘め事的色彩が強く、テクニクの効いたものより屈辱性の強いものが好まれ、時としてプレイが現実を飛び越え、見事な虚構の世界を創造し出すのではないかという事である。

そこには人間性のむき出しの姿が見られることだろう。社会的な身分や分別が取りはらわれた、ナマの人間の姿があるに違いない。

これを美しいと取るも、醜いと取るも、その人それぞれである。唯一つ断定出来るように思う事は、SMP愛好者であるなら、きつと一度や二度は、そうした世界を覗いてみたい」と云う願望を抱いた事はあるだろうと、容易に推察出来る事である。

ところで五月号の編集後記を読んで感じたことだが、読者からの投書が紹介されている「SMを伴った春本を期待している」「能動的に振舞いたい警察があるので止むなく本誌で我慢している。そのつもりで、赤裸々なものを載せろ」……等々。

私はこれが正常なる激励であり、要望であるのだろうか？ と思う。

彼らは本質的に思い違いをしているのであると断言したい。これらのことは奇クとは縁の無い無頼者の発言だといわざるを得ない。

こんな投書が、一種のS行為で「同感を覚えます」等と、苦しまぎれに言っている編集部がM派なのか、と考えてみても、全く開いた口がふさがらないものである。しかし、さすがにⅡつまりSM自体がまだまだ奇異視されていると見るべきで、徒らにSEX謳歌の波に同調するのはどうかと思えますが如何？Ⅱとかわし、締めくくられていることにその本意が読みとれた思いがして安眠したものであるが、まさに心ない軽薄無暴な読者の策謀に乗せられることなきように願いたい。

創作

レスビエンヌ

林 たけし



カット・小川茂正

左近亮子の初恋の相手は、毛利千枝子と云って、M女子高校のクラスメートである。千枝子は現在二児をもうけていて、三十才の峠にさしかかった肌には、時とするとうっすらシミが浮き、彼女の二十才前後の輝くような美貌を知っている亮子をして、すぎ去った時間の早さ、おそろしさを、しみじみと感じさせるのであった。

○

亮子は高校当時、どことなくボーイッシュで、さわやかな感じだったので、クラスの人気者であった。女高生にありがちの憧れや思慕を寄せて、交際を求めてくる者も多かった

が、彼女はその誰をもかえりみることなく、ひたすら千枝子の、どこか憂愁をたたえた美貌に傾倒していた。

亮子たちのグループは、毎月かかさず宝塚歌劇を観に行く、いわゆるヅカファンばかりであった。

彼女たちの乙女心を切なくするような憧れのスターがいて、夢のように美しい舞台にその人が登場すると、もうみんな我を忘れて拍手で迎え、「マッちゃん!!」「テリー!!」などと黄色い声をあげるのである。ほとんどの者が男役びいきであったが、亮子は自分が中性的であったせい、どちらかと云うと男役に魅かれることはなかった。当時はローランサンの絵のような感じのするYさんと云う女優のスターに熱を上げていた。しかし他の仲間たちのように熱狂的になることもなく、むしろ彼女の関心はグループの千枝子の方により多く向かい、こまごまと気をくばって千枝子の世話をやき、彼女と一緒に過ごせることの方が嬉しかったのである。

そしてある時、亮子はグループの者に気付かれないように、「千枝ちゃん、一度あんたと二人きりで来たいなア……」と、それとなく誘いの水に向けてみた。すると、「ええ、

うちも亮ちゃんとなら……」と返事があり、次の観劇はグループに内緒にして、二人だけで来ましようとプロミスが成立してしまったのである。こんな他愛ないプロミスが何となく秘密めいて、亮子は胸がドキドキと波立ちこれが初恋と云う感情ではないかしら、と思うのであった。

観劇の日はいよいよ激しい雨であったが、時間通りに二人は落合い、電車にのった。豪雨の日曜はさすがに混雑もなく、二人はゆったりと坐ることが出来た。しかし電車を乗り替えるとやはり宝塚行の人たちで一杯であった。やむなく二人はドアの辺りに、身体を寄せて向かい合った。

亮子は、「よう降る雨やねえ、せっかくのデートが台無しやわ」と云って千枝子の瞳をのぞきこんだ。紺のレインコートが、一そう色の白さをひきたてる千枝子の顔は、くちなしの花のように清らかで、どことなく湿っぽくうっとうしい車内に、一際すがすがしい感じを漂わしている。

千枝子は、花がまるで綻びるように、音もなく笑って返事はしなかったが、青いほど澄んだ瞳が同意を語って亮子を見返した。その時亮子は、突然胸の奥が疼くような感じがし

て、たちまち上気してくる自分の頬に手をあてた。そして雨傘に少し体重をかけ体内に湧き起こってくる不思議な情熱、それは思いきり千枝子を抱き締めたいと云う、とんでもない欲求であったが、その嵐のように襲いかかる情熱を抑えるのに苦労したのである。抑えれば抑えるほど、胸苦しくなる熱い塊を何とか潰してしまいたい、亮子は身体の向きを変え、窓外に眼をやるのであった。

丁度、電車は逆瀬川鉄橋にかかっている。

銀色にしぶく雨は、川上から泡立ち逆巻いてくる濁流に斜めにそそぎ、飛沫^{ひまつ}をあげてとけていった。少し風も出て来たらしい。「この分だと、帰りは相当に荒れそうやね。天気予報、よう聞いてきたらよかった」と亮子はつぶやいた。千枝子も心配そうに、「大丈夫かしらん？」と、同じように激しい雨脚の行方を眺めていた。

「よう降りまんなあ……。これで梅雨も上がるのかいな？」「雷はんが鳴らなまだ上りまへんやろ」などと、年配の婦人が二人、声高に話し合っている。やがて駅近くになると、人々はそろそろと入口に集って来た。亮子は他人の濡れた傘やコートが、できるだけ千枝子に触れないように、手を廻して彼女の身体

を庇っていたが、いつもは何気ない自然なエスコートが、何故か今日は特に意識的になると思うのであった。

歌劇の昼の部は終わったが、まだ四時前である。しかし風が強くなり、雨がますます激しく、台風の接近など噂する者がいて、場内には不安がたちこめていた。途中で停電騒ぎもあったりして、夜の部の公演が危ぶまれていくほどであった。「帰りの電車、無くなるかも知れへんよ」「えっ？ そらえらいこっちゃ！」などと、人々はウロウロと案内所の辺りを歩き廻っている。戸外はまるで夕方のように鉛色に変わり、芝生の立木が今にも折れそうに傾いて、悲鳴をあげながら自然の暴威に耐えていた。

亮子はふと、このまま本当に台風が来て、電車が無くなり、千枝子と泊ることが出来たら、素晴らしいなあ、と空想してみた。するとその思いは次第に大きくふくれ上り、空想ではなく現実に、どうしても彼女と一夜を共にしたい、と云う願望に変わった。そして何がそのように彼女を馳り立て、その言葉を平然と口にさせたのかわからないが、「千枝ちゃん、今夜、泊らへん？」と云ってしまったのである。

千枝子は一瞬ぽかんとした。意味がよくわからぬ、と云った様子で、「どうしても神戸に帰られへんかしら？」と心細そうに聞くのであった。「そら、帰ろう思うたら帰れるよ。けど、神戸に着く頃もっともっとひどうなって、降りてからタクシーが無かったらどうなる？」と亮子は云った。亮子の家は青谷であつたし、千枝子は千枝子で長田の山の上だったから、タクシーが若しつかまらないとどうすることも出来ないのである。

「そうやねえ……どうしようかしらん？」千枝子は本当に困り果てた様子で、すがるように亮子を見た。亮子は、「うち、前に東京のお友達がお家の人と観劇に来て、一緒に泊った旅館を知ってるのやけど、ほら、あの川向うの『清流館』云うところ、見える？ あそこへ行ってみえへん？」と云ってみた。

川向こうには観光客、観劇客相手のかなりデラックスな旅館が立ち並んでいる。対岸の大劇場側から眺めると、水嵩が増して、もう半分くらい見えなくなったその石垣に書かれた清流館の文字を指差して、「な、あそこ、見えるやろ。ねえ、行こうよ、思いきって……」と熱心に誘うのであった。

しばらく思案していた千枝子が、決心した

ように、「ほんならもう亮ちゃんに、何もかもお任せするわ！」と返事した。その声は、亮子を天国へ誘うような響きを湛えて聞こえて来た。亮子の心はわくわくと弾み、足はまるで宙に浮いたようである。今はもう完全に恋と呼べる感情を抱いている人と二人きりで、夜を共にすると云う欲びが、亮子をすっかり有頂天にしまった。単純な欲びに加えて、何か未知なる世界が開けそうな期待があつた。

政府登録、公社指定、何々協会推薦、などと書かれた銅版が玄関の横にかかげられ、格式高いその旅館は、普段なら紹介も予約もない未成年らしい女の子を、二人だけで泊めはしなかったであろう。しかし、何しろこの豪雨である。「どうぞ」と云うことになって、二人は静かな部屋に案内された。

部屋に落着いて、濡れた髪や手足を拭き、運ばれたお茶を飲んで一服すると、二人はまず神戸の家に電話を入れることにした。

亮子は、義理の母親を常に友だちのように振舞っていたので、事情を納得させるのは簡単であつた。父の清一は、若手ながら重役の椅子が目前にあつて、上役との付き合い、取引先との宴会などと帰宅はしばしば午前になつ

ていたので、その日もまだ帰ってはいなかった。亮子の幼ない頃から見ると全く考えられないほど変わってしまった父親であつた。社会的地位、時代や家庭の環境の変化に伴う当然の結果ではあつたが、亮子にはそれが不満でたまらなかつたのである。

○

彼女の生母は、もともと虚弱な人だったせいか、産後子癇と云う病気で、亮子を生み落とすとすぐ死亡した。幸い、田舎の農家にお乳の十分にある健康な婦人がいることを、遠縁の者が知らせてくれ、戦時中のこととて、疎開がてらその親類の家に厄介になり、彼女は祖母に抱かれてもらい乳をして育つたのである。そんな環境であつたが、亮子はスクスクと成長して、全く男の子のように腕白で、近所の子供たちの餓鬼大将で通つた。彼女がそのようなになったのは、環境のせい、それとも資質的なものであつたのかわからない。ともあれ清一は、母の顔も、愛も知らずに生きる娘を不憫に思つてか、それはもう亮子を舐めるように可愛がるのであつた。彼女の欲しがるものはどのようなものでも買い与え彼女が行きたがる処へは無理をしてでも連れて行き、男の子のように乱暴して家政婦を嘆

かせても、一度も叱ると云うことをしなかった。

やがて亮子が小学校五年の時祖母が亡くなり、中学に上る頃になって、彼は突然再婚した。その後妻は、健康で養良であると言った。それが取柄の、平凡な女性であったので、彼がどうしてたった一度の見合いで話を決めてしまったのか、縁談をもって来た仲人自身が驚くほどであった。

そして、後添いの房子は、先妻の、しかも勝気で男の子のような亮子を、別に嫌がる様子もなく、よく面倒をみるのであった。何かと云えば反抗し、ことごとに憎たらしい口返事などしていた亮子も、不思議なほど馴染んで、浩一を安心させた。

房子は、母と云う感情よりも、気のおけない小母さん、と云った立場に自分を置き、継子を手懐けた恰好であったが、それでも浩一の再婚は成功したと云えよう。

亮子は勉強好きの優等生に変わり、彼女が高校部に進級する頃に房子に女の子が生まれ美奈と名付けられた。亮子は妹の誕生を大へんよろこんで、お人形のように可愛がったものである。その後も女の子ばかりに恵まれたので、家庭は相変わらず亮子が中心に動いて

いるようなものであった。

○

そんな訳で亮子は自由そのものであり、今夜のような突然の外泊もさしたる障害もなかったのであるが、一方千枝子の側はそう簡単にはいかなかった。

いざ受話器を取る段になって、千枝子は、「きっと叱られるにきまつてるわ。どんな無理しても今夜中に帰って来い云われるに違いないわ。うち、どないしよう、どないしよう。困ってしもたわ」

を連発して、おかしい程怯えるのである。亮子はしばらく考えていたが、「じゃあ、うちが巧いこと云うてあげるから、あんた後から口裏合^{くちあひ}わしてな。親に嘘つくのん、いかにことやけど、嘘も方便、云うことわざがあるわ」と云い訳しながら、受話器をとるのだった。

やがて呼出しのベルが鳴り、亮子の耳に、千枝子の母の少し瘖高い声が遠く聞こえて来た。「あ、小母ちゃん？　うち千枝子ちゃんの友だちの左近です。ええ、今、宝塚ですね、も一人、山本さんと三人で来ましてんけど、あのひどい雨風になってしもうて、そちらの様子は？　あ、やっぱりねえ——。実は

山本さんが、急にお腹が痛とうなって、台風来る云うし、困ってるんです。はア、それ私の知り合いの旅館に無理云うて、お世話になってんですけど、今晚中にとでも帰られそうもありません。いいえ、ご心配いらしません。千枝ちゃんと二人で介抱してますし……。ええ、お医者さん呼んでもろてます。はア、わかりました。では千枝ちゃんと交代します」と云って、額に滲み出た汗を拭きながら、千枝に受話器を渡した。

○

千枝子の両親は、元町通りで大きな宝石店を経営していたが、もと職業軍人であったとか云う父親は、子供の教育は徹底したスパルタ式で、妻にも甘やかすことを禁じていた。それで千枝子は、いつも学校で、「うちの家庭は堅苦しいてかなわんわ。もう少し自由にさしてくれはったらうれしいねんけど……」とこぼしていた。姉が二人、弟が二人いて、賑やかな明るい家族構成であったにもかかわらず、何故か彼女は幼ない時から孤独を好み内向的で部屋に閉じこもり、本ばかり読んでいるような娘であった。

姉たちがそれぞれ嫁いでしまい、次は千枝子をどんな人と結婚させようか、などと今か

らもう気を遣っている両親であったから、何かにつけて千枝子が息をつまらせるのも無理からぬことである。

○

そんな千枝子であったから、今日のようなハプニングはそれこそ大変な冒険で、彼女にとってこの電話もさだめし勇気のいる行為に違いない。受話器を握りしめ、父親に、こんな日に出掛けるのがそもそも間違っている、とか何とか、さんざん文句を云われている千枝子の横で、亮子は少しばかり自分の軽率さと強引さを悔いるのであった。

しかし、障害を何とか乗りこえたせいとか、電話の後の千枝子はぽっと上気した頬を両手ではさみ、いつもの彼女に似合わずはしゃぎ出した。「ああ、嬉しい。何や知らん、無性に楽しなって来たわ。亮ちゃん、どないしよう。修学旅行の時より楽しい気分やわ」と、いたずらっぽくウインクなどするのである。亮子は思わず千枝子の手を取り、きつく握りしめてしまった。

女中が着替えの浴衣を持ってやって来て、「今晚、ひよっとしたら停電になるかも知れまへんので、早いめにお風呂に入っていただきまひよか」と入浴をうながした。

二人はきゃあきゃあどふざけ合いながら、大浴場に向かった。歩きながら亮子は、家族風呂に入って千枝子と二人きりになればどんなに素晴らしいだろう、などと、思うのであった。

脱衣場は半分ほど衣類の入った籠があり、湯気のこもった、わーんと云う反響が伝わって来る。手早く裸になって、二人は中に入ったが、亮子はあらためて千枝子の美しい肌と見事なプロポーションに感嘆した。

白い肌と云ってもいろいろあるけれど、彼女の白さはただ白いと云うだけのものではなく、底にうっすらとピンクの被膜を敷いたような、それはまるで、つややかな中にも何か深いものを沈めた上質の真珠を思わせる感じなのである。

修学旅行の時でも、又海水浴に行った時でも、亮子には見馴れた千枝子の裸身であるのに、今夜は特に新鮮で、美しい、と彼女はまじまじと見つめるのであった。そして又、湯気の中におぼろになりかかった千枝子の胸の素晴らしさに圧倒されて彼女は息をつめた。豊かに盛り上った乳房が、形よくつんと上向きになっていて、先端に小さな桜桃がちんまりととんがっている。日本人にしては高めの

ウエストが、ぐっとくびれて発達した腰部に続いている。そして真直ぐに伸びた脚が、適当に肉づけ、すべては完全に成熟した女性を感じさせていた。

千枝子は、「いややわ、亮ちゃん。ぼおつと突立って、どうしはったの?」と云った。亮子はあわてて、「ん? 何でもないねん。はよ、はいろ……」としゃがみこみ、溢れるお湯をザブザブかぶり始めた。亮子の身体は小麦色に近く、肌理は細かったけれど、何処となく脂肪不足の感じで、胸もお尻も小さいのである。しかし少年のようにしなやかな肢態は、青い果実のような魅力があった。

二人はお互いに背の流しっこをして、こんなところに黒子(こくろ)があったとか、そこはくすぐったいとか云いあったのであるが、他の浴客の手前もあって、そうそうにふざけてもらえず、三十分余りで上ってしまった。

夕食が終る頃、案の定、停電になった。冷房が止まり部屋には蒸し暑さが訪れた。亮子は、女中の用意していった二つの燭台のろうそくをともした。雨戸を鳴らす風と、おそろしいほどの雨音が、二人の耳に聞こえるばかりである。

湯上りのほてった肌を団扇でパタパタやり

ながら喋っていた二人の会話が途切れ、ふっと、しじまが流れた。

亮子は自分の鼓動を耳に感じた。規則正しく、時間を刻むような心臓の働きが、突然激しく乱れてゆくのを彼女は意識するのであった。そして、冷静に、冷静に、と波立つ感情をセーブしながら、亮子はどうしてこのように自分は千枝子に魅かれてしまったのかを考

えようとした。きっと彼女が綺麗すぎるせいなんやわ。そうや、顔は写真でしかわからなけれど、うちのお母さん、美しい人やった……。どこかその面影は千枝ちゃんと似通っている！ うちには亡き母恋いしの感情から彼女に魅かれてるのんと違うやうか？ と自問自答してみた。でも、一寸異常やわ、と思ってもみる。小さい時から美しい同性に憧れはしたけれど、こんな風に胸のときめきや息づまるような情熱なんて感じたことはない。

まぎれもなくその感情が恋だと気づいた時彼女はつとめておし殺そうとした。けれどもそれはますますふくれ上って、もうどうすることも出来なくなってしまうたのを認めるのである。彼女に触れたい、千枝子を独占したい、という真摯な欲望。

同性愛が、精神的な間はまだ救われる。し

かしひとたび肉体的に進展すると、なかなか脱け出すことが難かしくなるのである。それは泥沼にひきこまれるような危険さであったが、若い亮子には、その時まで、その愛が不幸につながる、愛であるとは察知できなかった。若さはえてして衝動的であるし、愛の行方を考える打算もない純粹さがある。

亮子は、つと立ち上がり、向い側に移って千枝子の椅子の肘掛けに左の太腿部を乗せ、手を廻して彼女の頭を抱いた。そして、右手を軽く千枝子の顎にかけて、仰向かせた顔にそっと唇を寄せて、彼女の滑らかな唇に触れたのである。千枝子は、びくっと一瞬身体をふるわせて、「いや！」と、亮子の手を払いのけようとした。しかしその拒い方は、彼女が決して心から厭がっているような峻拒ではなかった。

亮子は、上ずった声で「千枝ちゃん、うちあんたが好き！ 好きで、好きで、死ぬほどやわ」と、云ってしまった。そして「今夜の嵐は、何や運命みたいに思えるわ。二人のために神様が計ってくれはったんやわ。な、そない思えへん？ ねえ、わかってほしいわ、うちの気持。おかしい思わんと、理解してほしいのやわ……」と、千枝子をしっかりと抱

き締めるのであった。ろうそくの灯が、ゆらゆらと微かなゆらぎを見せて、二人の影を大きく天井にまで届かせた。無抵抗に抱かれていた千枝子が、いつの間にか亮子にぴったりとすがりつく恰好になっていた。そして二人は同時に唇を強く合わせてみた。お互いに初めての接吻であった。ただ唇をじっと合わせているだけであつたけれど、それはおそろしく官能的な感じを伴っていた。

部屋の中央に二つ並べて延べられた床の、白いシーツと、裾の方に折りたたまれておかれている麻の葉模様の薄い掛蒲団が、うす闇の中に浮かんでいる。亮子は歌劇の舞台の主人公のように、千枝子を抱き上げ、静かに手前の寢床に横たえた。それから亮子は、何ものかに押しやられるように激情的に千枝子の額から、鼻から、唇に接吻の雨を降らせ続ける。誰に教えられたのでもないのに、自然にそのように行動できるのが不思議であった。蒸し暑さがますますひどくなり、二人の身体はじっとり汗になった。浴衣が邪魔になつた亮子は、あらあらしく千枝子の腰紐をほどき、浴衣の袖から丸い肩をすべらせた。千枝子は「亮ちゃん、あんたも……」と小さな声で云った。

滑らかな肌、^{ほうじよう}豊饒な乳房。それは全く亮子の過去の記憶にはない恍惚と充足と甘美さの入りまじったものだった。生まれながら母を失い早くから他人の乳を離れた亮子にしてみれば、それは当然であつたし、その上、今や大人のリビドが混入しているから、亮子が涙を流すほど感動し、頭の中が空白になるほどむさぼり続けたのも、うなずけるのである。「いや、いや、いやよ。もう止めて……」苦しそうな声で千枝子が喘いだ。彼女はしかし言葉とは反対に、亮子が続けてくれればよいと思つていたのである。千枝子も、この同性によつてもたらされた体験が、これほどに激情の波を湧き上らせるものだとは知らなかった。千枝子は、他人からこんな風にされるのは初めてであつたが、彼女は性来早熟なたちだったのか、すでに中学部の時から性的衝動にかられて自慰を経験していたのである。彼女は初潮をみた時、母や姉から、又学校でも、知識と実際に当たつての具体的な処置などは教えられていたので、あわてることもなかったけれど、やはり、かなりのショックを受けた。もう自分は、これで一人前の女になった、と云う満足感と共に、大人の世界に足を踏み入れる一種の怖れ、不安、と云つた

感情が混合して、多感な彼女をすっかり物思ふ少女にしてしまい、姉弟と話したり遊んだりすることを避け、自分の部屋に閉じこもっているうちに、自らの手で自らを愛撫することを知ってしまったのである。

表面はあくまで良家の令嬢であり、制服の清潔さがよく似合う美少女であつた千枝子が女性オナニスト独特の罪悪感に責めつけられて、たえず悩み続けていたのであつた。今日でこそ週刊誌の氾濫によつて、少女たちの性知識も、驚くほど開発されて、そんなナンセンスはないだろうけれど、当時の千枝子は、もうこんな悪いことは一日も早く止めなければ、うちお嫁に行けなくなる……と真剣に小さな胸を痛めたものである。しかし、やっぱり夜になると誘惑にかりたてられ、独りで悩ましく悶え続けるのであつた。そうした秘密の快楽、後の反省、悔い、自己嫌惡の感情が千枝子をしてどこか憂わしく、ものうげな翳りを漂わせる美人に作り上げていったようである。

思いもよらなかつた激情に溺れきつた二人は、乱れに乱れた。ようやく我れに還つた時二人とも咽は砂漠のように乾いていた。

亮子は水差しを取ってゴクゴクと音を立て

て飲み「ああ、おいし!! 千枝ちゃん、お水あげよう」と云つて、あらたに口に含んだ水を千枝子の唇に運んだ。夢中で口移しの水を飲み、千枝子は、「もっと頂戴!」鼻にかかつた甘い声で云い、抱きついて、接吻を求めたのであつた。二人は眠ることすら忘れていた。いつの間にか雨も止み、風だけが、ガタガタと雨戸を鳴らし、コースを逸れたらしい台風之余波を伝えている曉頃になつて、やっとお互いにまどろみかけたほどである。

亮子と千枝子は、しっかりと手を握り合つたまま、「うち等は、結婚したんやねえ」、「そうよ。今夜は新婚の夜やわ」「いつまでも離さんといてね。棄てたらいやよ!」「あたり前やないの。こないに深く愛しているのに、何で心変わりなんかするもんですか……」などと云い合つていた。この同性愛の逸楽を終始見ていたろうそくの焰が、一段と闇の中にゆらめき大きく瞬いたと見るまに、もう消え去ろうとしていた。

× × ×

その夜を境として二人は、お互いに夢中になつて求め合つた。けれどもたちまち逢引の場所に困つてしまった。まさか市内の旅館を利用する訳にはいかない。さりとて互いの家

を訪問し合っても家族の手前、そうそうに泊ってはいられないのである。恋は何時の世にもままならぬものであり、ましてや同性愛は因襲的な社会の制約や、規制の道徳律によってより阻まれるものである。

それでも愛する二人は、何とか無理を重ねて、宝塚行を頻繁にして機会を作った。夏休中は、キャンプだ、サークル活動だ、などと口実をつけて旅行をした。

そうして、男性的な亮子の方が次第に愛に溺れこみ、学校でも公然と千枝子の姿を追いか求め、たえざる独占と嫉妬に悩まされるようになった。二人の仲はすっかり男女の恋と交わらなくなってしまった。

年が明けて、千枝子はそのまま短大部に進み、亮子は、K大の工学部に入ることになった。女子学生はもとも少ない工学部であったけれど、亮子は理数科が得意で、前からインテリアデザイナーを志望していたので、淋しくはなかった。

亮子は今までのように千枝子にべったりくっついていられなくなるのを悲しんだのであるが、将来のことを考えて健気にも、千枝子と学校を別にしてでも頑張らなければならぬと決心したのである。愛する千枝子と生涯

一緒に暮すためには、まず自主独立する必要があった。

男女同権になって二十年、女性の職場が各方面に広がりつつある現代でも、まだまだ社会的地位にしろ、経済的な面にしろ、男性並みにと云うことになれば、分野はいたって限られている。その点、亮子がインテリアデザイナーを志ざしたのは賢明であった。一種の芸術的才能が要求される職種であるが故に、実力が男女の固有意識を追放する世界であった。そんな訳で亮子は大いに希望をもって勉学にいそしんでいたのである。

やがて亮子が三年に進級した春、つまり千枝子の短大卒業の年であったが、その卒業を待ちかねていたように、千枝子に縁談がもち上った。それは極めて当然のことであり、亮子がかねてから予期し、覚悟もしていたことであつたが、現実には直視してはやはり動揺するものも仕方がなかった。亮子は、「ほんとに千枝ちゃん、巧く断ってくれるのやるね?」とそつてたい逃げられる話なんやね?」とその都度、千枝子に念を押して愛を確かめ、なおかつ「もしあんたが裏切って、結婚なんかしてごらん、うち、きつと殺してやるわ!」とおどかしたりするのであった。千枝子は、「そん

なに心配せんといてえな。大丈夫云うたら、絶対大丈夫やわ。亮ちゃんを裏切らへん。誓うわ!」と真剣な表情で云うのであった。それはしかし、誠に不確かな誓いであつた。

いつの間にか千枝子は、何かと口実をつけては、亮子とのデートを避けるようになってしまったのである。

幾つかの縁談のうち、仲に立つ人の義理にからまれて、ちよいちよい見合いをしていた千枝子が、魅力的で頼もしい男に出合つて正常な結婚や、幸せな家庭生活のイリュージョンを描いたとしても、何の不思議も、又責められるべきものは微塵もないのである。ただ愛の名においてのみ、背信を詰る権利が亮子にあつた。

愛する者の敏感さで、いち早く千枝子の変化を察した亮子は、それこそ狂気のようになつて彼女に迫つた。亮子の知識人としての誇りや、健全な家庭環境が、さすがに刃傷沙汰にまで及ぶことはさせなかったが、それでも亮子は一晩中、千枝子の家の周りをウロついてみたり、友人を使って呼び出しの電話を掛けてみたり、外出先から帰る千枝子を待ち伏せしたり、ありとあらゆる手段を講じて遠ざかる千枝子をひき止めようとした。人が理性

を失って示す、卑劣な、悲惨な、あらゆる見苦しい行動を、彼女も又避けることは出来なかった。

亮子の明朗闊達な性情は、次第に影をひそめ、陰にこもった険しい表情が、彼女を知る人を驚かし、心配させたものである。

亮子を覆う苦しみと憂鬱は、まわりのノーマルな人たち、父の浩一にすら理解できる性質のものではなかったし、もちろん血のつながらない義母の房子においてはなおさらであった。又、彼女も打明ける勇氣もなく、孤独に泣きながら耐えるより仕方がなかった。

亮子は思うのであった。自分たちの愛と云うものは、法律にふれるものではないが、永久にノーマルな社会が認めるはずもない罪悪であり、アンチモウルな存在である故に、人並みな、幸福の得られようはずはないのだ、と。それでは愛する者を不幸の道連れにするばかりで、愛の本質からはずれるではないかとも。愛の本質は、相手を幸せにすることによって自らも幸せになる、と云うことではなからうか、と極めてオースドックスな固定観念を肯定せざるを得なかったのである。そして、千枝子があらゆる面で安定した妻の座を望んで、自分とのアブノーマルな愛を捨てる

ことは仕方のないことである、と諦めに達する時もあった。

ところが又、あの天地も融けんばかりの激しい情熱の埒場や、意識のうすれるような恍惚の時間を思い出すと、彼女は魂のわななくような感じに襲われて、千枝子を恨み、運命を呪うのであった。この沈潜した思念と、激情の嵐の交錯は、つまりは彼女自身の霊と肉の相剋でもあった。

救い難い苦悶から脱出するために、亮子は丁度誘われていた演劇部に入部することにしたのである。

どこの大学の劇研にでもよく見掛けるキザっぽい男子学生を、彼女は何となくこれまで敬遠していたのだったが、つき合ってみると彼らは彼らなりに秀れた資質を備えた男達であった。亮子には、女性的な感情は少しもなかったが、やはり演劇と云うパッションートな媒体が作用してか、彼女はある時、多田と云う四年生と間違いをおかしてしまった。多田には特定の相手はおらず、どちらかと云うとプレイボーイ的で不特定多数の女性を求める部類の男であった。

恒例の全国大学演劇コンクールが行なわれ、亮子の大学が関西代表として東上した時のこ

とである。そのコンクールには惜しくも落選してしまい、部員は東京で自由解散した。多田は、解散パーティーでしたたかに酔った亮子をホテルに連れこんだのであった。

何となく安っぽい、そのホテルの一室で、多田は手馴れた順序をふんで亮子の着衣を剥いだ。「君、なかなかいい身体してるじゃないか？ いつもストラックスはいて、ボーイッシュだからわからなかったけど、うん、とても素晴らしいよ」などと云いながら、プレイボーイらしいからぬせわしなさで求めてきた。その男くさい接吻に亮子は思わず、むうっとする嘔吐をもよおした。そして全身に粟を生じてしまったのである。「厭！ 止めて……」彼女は叫び、その腕から逃れようと跳いた。それはしかし、彼に「そう情念を燃え上らせしめる結果となった。

小麦色の肌が、しなやかな四肢が、あらゆる男の力によって翻弄され始めると、亮子はただおぞましい気持ちに眉を寄せ、総毛立つ不快感と、突き上げる嘔吐感を耐えるだけであった。それは千枝子との、あの夢の中のように楽しい心地とも、波間に漂うみたいな甘美さとも、痺れるような忘我の快感とも、およそ縁遠いものであった。

改めて、千枝子を恋うる気持がつき上ってくるのを覚えた。それと同時に亮子は、自分がどうしても世間一般の女のように、男性に愛されて喜悅できない女であることを自覚しないわけにはゆかなかった。

自然と涙が湧き上ってきた。

おぞましい男の手に、未知の感覚を探り出そうと、真剣になって、無理に自らを叱りつけながら努力してみた。

「わたしは女なんだ」と胸の中で叫び続けて冷えようとする気持をかき立てていた。だが「君、やっぱり初めてだったんだねえ。……ごめんね。後悔してる？」などとひとりでプレイボーイぶって、征服した女はすがりつい

てくるものと思っっているらしい多田に、唾でも吐きかけてやりたい気持で亮子は、

「私、別に後悔なんてしないけど、何やしらん空しい気持やわ……」と云ってやった。多田はその言葉を聞いて少なからずプライドを傷つけられ、撫然とした表情をした。

しかし、その後、なんとか通常の女として悦びを見出せないものかと考えなおした亮子は、大阪に帰ってからまたたび、嫌悪を押えて多田との交渉をもってみた。愛と云う感情は無かったが、自分自身の性情に対する、一種の試験台の様なつもりだったのである。そして何とかして、あの恍惚の記憶の再生をはかろうとしたのであるが、相変わらず最初

〔伝言板〕

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替（切手代用はお断り）にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありまして最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社へ願います。

の時と同じ様に、少しも欲びが湧かないのである。ただただ苦痛と、違和感を覚え、失望するばかりであった。しかも、逆に性的な飢餓感募るばかりであった。多田以外の男とならあるいは、と考えて、幾人かの青年とも試みてみたのだった。だが、結果はみんな、同じことだった。荒々しい男、如何にも男性的であることを誇示するようなタイプにも、ねっとりとした女性的タイプの男にも、どんなに自らが没入しようと務めても得るものはただ失望のみであった。彼女は金にあかしてゲイボーイ遊びもやってみたが駄目だったしレスバーにすら、心をとらえるものはないことを発見した。荒廃した、数年が過ぎていった。亮子はすっかりプレイガールになっていた。けれど、相も変わらず不感症はなおらないのであった。

卒業後の亮子は、堂島のあるビルの三階に独立したデザインルームを持ち、かたわら某デベロッパーの研究室にも籍を置いて、充実した時間の中に別種の生き甲斐を見出すようになっていた。しかし、ふっと心を過る空しさがある。多分、それは彼女の愛と性の不毛がもたらす空虚さであったのであろう。



— 奇クにおける第二の青春 —

五月号 雑 感

松 山 壮 吉

私が奇クを愛読し始めてからもう二〇年程にもなろうか。この間には私の身辺にもさまざまな事があったが、奇クにとってはそれ以上には険しい道だった様に思われる。

もともと比較的狭い層を対象とする採算の立ち難い雑誌なのに、度重なる悪書追放運動とかで痛めつけられ、遂に流通機構からの締出しという処置迄受け、もう駄目になるか、今度は駄目かとはらはらしている中を、難関を乗り越え乗越え、逞しく発展して来たその努力には敬服の他はない。

奇クがSM専門誌として創刊されたのか、発足後暫くして重点が定まったのか、その辺は知らないが、何れにしてもそこには営利事業としての目途があった筈だろう。だがその

後多くの困難に遭遇し、何も悪書の代表になって苦労しなくてもSMを少し水で薄めて通俗好色誌にすればずっと売り易くなる、という判断もあっただろうに遂にそれをとらず、一筋の道を立て通しているところ、単なる行きがかりだけではない男の意地とでも云うべきものが感じられる。男の意地の貫く所、どうやら最悪の時期は乗切って大いに隆昌に向かいつつある模様、誠に御同慶にたえない。内容においてもその通りである。卒直に言つて、SMという新領域の開拓に人目を驚かした一時期が過ぎた後、だんだんと同趣向の繰返しに陥る事は避けられず、年月とともに愈々苦しくなつて、遂にどうにもこうにもならなくなった、完全なマンネリズムの時期が

相当長く続いた様に思う。

読まない前から読後の興味索然たる感が予想される。しかし発刊の時期になると、やはり遠くの店迄行って購入せずにはいられないという、悪女との腐れ縁に似た時期が長かった。SM研究誌の性格からいって、SMの各種のタイプを一わたり書き尽せば、後は繰返えしになるしかないのは知れた事で、雑誌の寿命は、発行者の男の意地が何処迄立て通せるかにのみかかっていると思われた。

ところがその予想は倅にも見事に外れて、最近の奇クは内容的にも余程充実して来た様だ。特に今度の五月号の如きは、従来、月に一・二篇あれば儲け物と思っていた、肉体的興奮さえ感じさせるような佳篇が目白押しで奇クが、不可能と思われた再生を成し遂げ、一つの節を抜いて第二の青春期に入ったことを示している様にさえ感じられる。

むろん私の好みによる判断だから多くの偏りのあるのは承知の上で、五月号の内容についてもう少し詳しく、思いつくままを摘記してみよう。

小説では、まず由利美千子さんの告白小説「被虐の旅」が印象深い。これにはそう変わった責めがあるわけではない。SMとしてはご

く初歩のものに過ぎないが、裏付けとなる体験の存在を素直に感じさせる自然なリアリティがある。発端、最初の夜、ケープの下に縛られて宿を出る、途中で裸にされ腰巻一枚で縛り直される等、次第に感興を高める設定も巧みであり、文章も流麗である。純文学でも女流作家の方が感覚的に巧みな作品を書くものであり、由利美千子さんは、影武者ではなく、前号に紹介された通りの女流であると感じてよい。

私はこの種の読物における興味には多くの場合、二つのポイントがあると思う。その一つは現実性、他の一つは征服される過程である。「被虐の旅」第一回には、この両要素がほど良く満たされており今後の発展が期待される。多くの魅力的な作品も回を重ねる毎にはじめのペースが続かなくなるものだが、この作品があまり期待を裏切らぬ調子で続けば奇ク史上に「由利美千子の時代」を作り得るかも知れない。

SMの世界が未開の西部であった時代には奇クの毎月号が、新世界の開拓報告でみたされ得たのだが、ここ迄来ると、そうも行かない。そこで必要とされるのは、単純なセックスの技法の上に立つ種々の肉付け、上部構造

の変化によって、古来無慮無数の小説が成立し得ている原理に基づき既知のSMの手法の上に立つ変化と肉付けで、さまざまな物語を展開させていく、即ち臨床報告に文学性を与えて行く事も重視していくことである。「被虐の旅」はこの方向での成功作である。

四月号から掲載されている、光谷東穂氏の「女狐」の狙いもそこにあるだろう。しかし「女狐」が専門作家の「小説」としての整ったスタイルを持っている事が、かえって私などには縁遠く、やや興味の薄いものに思われる。「小説」としてはなかなか良い小説なのだ。ヒロインが一旦逃亡し、賭けに負けて心から屈服し美女のペットとして渡される。そういう構成で単純な暴力の犠牲としての暗さを除き、心おきなく、楽しめる形になっている。勘所をよく捕えた、いい作品である。しかしこの方向が拡大していけば、奇クはSM研究誌としての特性を失い、個性の薄いものになっていくのではあるまいか。「文学」ではなく「臨床報告の文学化」……それが一人称であるか三人称であるか、イクオール事実か否かは別としても……という点にかけがえの無い奇クの魅力がある様に思うので、私は「文学化」の指標として「女狐」ではなく、

「被虐の旅」を選びたい。

宇光仙氏の創作「欲びの育つ館」はO嬢の訓練と同巧であり、調教師の大時代なせりふなど、やや硬い面もあるが、二三の部分が少なからず刺激的で、やはり印象の深い作品である。先にあげた二要素の一つ、「征服される過程」のあたえる興味であろう。

芳野眉美氏は一寸した短文にも感覚的な面白さがあるし、作品はいつも粒が揃っており往々すばらしく刺激的な佳篇がある。五月号の「青春の陥穽(6)女郎蜘蛛」は力が入っているが、この人としては特別な佳篇ではない。(こういう判断の基準は簡単で肉体的な刺激の度合にのみ依っている。まず直接的なセックスの反応があり、その後これを理論づけるのは三島由紀夫の言う通り文学批評の始源型であり基本型であり純粋型である)その理由は男性Mはそのままでは「絵」になりにくく、多少別天地的道具立てがいるという事であろうか。現実性と別天地性がどの様に釣合えばいいのか、それは私にも見当がつかねる。それに女王様が少なからず粗野な人物であるのも私の好みではないので、お隣の優雅な夫人の動きに期待が持たれる。

真砂十四郎氏の「Mの傾斜―壺中の園」は

まず靴を磨き、次にスカートをはかせ、という様にだんだんと奉仕を深め、自己を召使の位置においていく、その辺の過程なり感覚なりに面白さがあり少なからず魅力的な作品だが願わくば女王様がもう少し優雅な上等な人物であってほしい。現実から判断すれば、女王様の女性は相当に欠陥のある女性であった方が現実性があるとも言えるのだが、私は、女王様は「毛皮のヴィナス」の様な優美な気品のある存在であってほしいという、少なからず浪漫的で、多分マニアとしてはごく初心な夢を持っているのである。別天地的性格の強いコスチウム・プレイは別として、金銭を目標とするサジスチンに対しては特に抵抗がある。それは私の貧乏性の故であろう。その点で暁マサオ氏の「美しき強奪者」、香川泳三氏の「畏しシヨントメの哀歎」には抵抗があるのだが、幾分の華やかさのある点で前者の方が私の好みに近い。

SMの好みは全く十人十色で、私にとって全く興味のない作品が他の人には最高の作品であるのだし、「批評とは作品を語ることでなく自己を語ることなのである」という小林秀雄の説が、最も端的にあてはまるものであるが、その好みの相違がもっともよく感じ

られるのが、高野原美氏の「朱に染む柔肌―武田氏三代の黒い血」である。私は血を見るのは大体において嫌いであり、人を殺すのも嫌い、陰惨な残虐さも概して嫌い（特に子供が出るのは嫌い）で、享楽としての明るさを持ったプレイを好むものであり、「O嬢」は好むが「刑罰史」は好まないものである。その意味で「血に染む柔肌」は私とは反対の好みに属するものである。

告白の面での充実が又著しい。奇巧はもともと告白に特色があるし、半頁の告白も、その真実性によって百頁の小説よりも強い刺激を与えることが多いのだから、告白の部の充実は何よりの魅力である。

辻村隆氏のSMカメラハントはいつも読み甲斐があるが、今号の秋山夫妻という注目すべき対象を得ての「SMカメラハント・深夜の舞踏会」は格別の充実感がある。衣裳フェチの気味もある私としては、秋山夫人の、黒の丸首セーター、暗赤色の革チョッキ、超ミニスカート、素脚に赤茶色のロングブーツといういでたちや、それを脱ぎ捨てた下にV革のバンドをきりつと締めた姿等も実に嬉しいのである。

辻村隆氏は別格としても、小竹一浩氏のフ

ォトストーリー「私の『SM日記』」、東京YY氏の告白「心理的羞恥責めを好む屋外プレイ」、三条剛氏の「わがカメラ・ハンターSMフォト思いつくまま」、塚本鉄三氏の「川路叢子さんの素顔―片えくぼのマリア」等興味に富んだ実録が並んでいるのが実に嬉しい。私は活字人間で写真自体への興味はわりに少ないのだが、プレイの真実性を保証する資料としてのフォトの存在が嬉しいのである。

東京YY氏の、黒のエナメルハイヒール、皮あるいはエナメルの超ミニスカート、皮ロングブーツ、黒ナイロンストッキング、アミタイツ、銀色ラメ入ストッキング、バタフライ、スキヤンティ等の好みが私と一致するのも嬉しいし、夜、庭木に縛って室内でテレビを見ている。スーパーマーケットにミニの下に何もつけさせずに買物にやる等のプレイ、特に金色のバタフライだけの裸に手錠、エナメルコートを着せブーツをはかせて散歩に出る。タクシーの中で胸元を開くなどのプレイも大いに面白い。羞恥心は責めを面白くする重要な要素だが、プレイを進めていく場合の馴れと羞恥のバランスという問題もやがては生じて来るかも知れない。何れにしても幸福なプレイの一典型として今後も折々にプレイ

の情況など發表していただきたいと思う。

小竹氏の「SM日記」も、鎖をまとい毛糸のワンピース、透明レインコートで食堂に入るプレイ、そしてその後の展開等きわめて興味深い、日常試みておられるプレイの数々をもっと知りたいものである。

大橋美代子氏の「逆吊り記録」和田平助氏「妻を縛る」東一郎氏「拝啓、編集部殿」吉田生氏「新聞報道怪事件に想う」等の短文も何れも強い刺激がある。特に大橋美代子氏のミルクを鼻を通して下へ落とすプレイは興味深い。こういう短文の一篇でもあれば一冊の代価に優に相当するように思っただけだが長文短文とこれだけ並んでいると、同じ一冊でも重み迄違ふ様な氣持がする。

鬼山絢策氏の「M派交友録」も次第に佳境に入るし、梅川幸子さんの、「ゴム雨具拘束衣」も面白い。

岩手信夫氏の「私の執着—おしめ性夜尿症者の生活と意見」は精細に書込まれた報告で資料的価値もあり、こういう報告の紹介にSM研究誌としての奇クの価値の一半はあるように思う。だがおしめとセックスが結合した結果、おしめ無しでは性的興奮が無く、従って、女性に遠ざかる結果になったというのは

岩手氏御本人にとってはやはり不幸ではある

う。止むを得ざる孤独の中での抑圧されたセックスを僅かにSMのプレイで慰めておられる某氏某々氏の如き例もあるが、見ていても暗さがあり、つらい感じがする。孤独の故のSMとSMの故の孤独と各様あるが、出来ればSMを明るく広い場に出して、性生活の幸福を一段と深め変化をつけるものとしたいものである。資料的価値に富んだ体験告白という一種の「金字塔」を建立されたことを契機に、岩手氏が大勇猛心を振起して暫時おしめから離れ、女性とおしめとを仮定上で結合する訓練をされ（多くの男がスクリーンの美女と仮定して手近の女性と寝ているのだから訓練次第と思う）、幸福な結婚生活を作られた上でプレイの一部として次第におむつカバーを導入して、性生活をより豊かにする材料とされることが出来れば、その報告は真に優れた資料になるのではあるまいか。

私も独身時代におむつカバーにも興味を持っており、結婚後にも夫婦プレイの道具として十分活用した経験がある。（もっとも子供が出来て子供のおしめに追われる様になるとおしめプレイの興味は薄くなることは避けられない）岩手氏の御多幸を祈りたい。

告白も小説同様、各人の好みによるものだ

が、東敏男氏の体験告白「私の少年期」は印象的であるが、少し暗い感じが私の好みの線ではないようだ。それにしても各種各様バラエティに富んだ創作や告白で、各人それぞれの好みによって楽しめるのが奇クの有難いところである。

M派の私がSの作品や告白に刺激を感じるのは、人には誰しもSM両性あるためとも、自分をMの立場において享受するからとも解釈出来るが、場合によりその両方にわたるのが事実だろう。無論ストレートにMの方が好みのわけだが、楚々たる美女の縛しめられた姿は美しいが男性の場合は必ずしも美しくないという感覚が私の中にもあるわけだ。従って通常のセックスの場合同様、実行は無条件に楽しいが、活字にして客観化するとよく条件を整えないと品の悪くなる場合もあり、写真にするとさらに難しくなる事になる様に思う。しかし男性Mの層は非常に拡大して来ているから、男性Mの佳篇は今後増加する一方と判断して楽しみにしている。（私もMの告白二篇を採用して貰っているが、読み返してみると至って無味乾燥で、刺激性に乏しい。「文は人なり」で私という人間の面白味のな

い所がよく出ているようだ)

男性S女性Mの告白は圧倒的に多く、フォトストーリー的なものも次々と出るだろう。M派としても楽しみに読ませて貰うことにしよう。

「花と蛇」その他多くの作品に触れていないが、もとより私の好みによる気ままな摘記である。ともあれ、SM層の拡大による告白の充実、臨床報告の文学化という二つの面においての飛躍的な発展と、初期の未開の荒野に始めてトラクターをいれた当時に続く、二度目の青春時代の到来を予測させる四五年五月号を、一読者として、衷心より喜ぶものである。

補 足

どんなに多忙な時でも奇クが郵送されてくると、とにかくその日の中に目を通さねば落ちつかない。今度も年度末の繁忙中であつたがひとわり通読し、その充実ぶりに感激してその印象を記した。その後一兩日、仕事も一区切りついて、早目に床に入り、スタンドの明りで毎夜楽しみながら読み返していると初の印象と大分相違して来た。

と云うのは、はじめそれほど思わなかった「美しき強奪者」「青春の陥穽」「壺中の園」等が、読み返すにつれて益々楽しく刺激的であり描写や構想の卓抜さも分かつて来て充実した五月号の中でもトップにランクした

少年マンガのSM 夢野虹二

最近少年マンガのハレンチ化が話題を呼んでおり、特にヤリダマにあがっているのが、永井豪氏の「ハレンチ学園」(少年ジャンプ)である。私は遅ればせながら、この種の少年マンガを拾い読みしてみたのだが、その結果、永井氏の一連の作品に、単なるハレンチだけでなく、かなり強いS傾向を見出し、複雑な感情にとらわれた。

特にこの傾向が強いのは、「あばしり一家」であるように思える。網走育ちの滅法強い五大家族が大暴れするハナシなのだが主人公は紅一点の美少女、菊の助。この美少女が、毎号悩ましい裸身を披露するほか必ず敵の手にかかってさまざまな恥ずかしめを受け、危機一髪のところを救い出されるのが、見せ場になっている。

「被虐の旅」と並んで少しも遜色のない、むしろ私にとってはより多く楽しめる作品であることが感じられてきたのである。

暁マサオ氏の「美しき強奪者」は、嬌慢な深雪の美しさが印象的であり、靴を磨かせたり、その他ピシリピシリと命令してくるあたり、被征服の進展していくふしふし、はじめて鞭の登場するあたり、読みながら全身の血が騒ぐような魅力がある。描写も叙述も一語も、ゆるがせにしない、しっかりした作品であり、はじめに私のひっかかった金の件にしても、完全な征服の一条件としてストーリーに、リアリティを与えるためにも良い工夫であり、無一文になった後も、生活面でも快楽面でも重用している結末で、いやな後味を無くしている。行き届いた名篇であると思う。

芳野眉美氏の「青春の陥穽」も、実に面白い。腰巻に包まれて縛られ転がされ、妻と青年との戯れを聞かされたり、体の上で戯れられたりする三田の情況は私の一つの理想である。床下につながれていた青年が、新しい女性、優雅な大崎夫人の前にさらされる時の甘い陶醉は、私の感覚にそのまま流れ込んで来るようである。「青春の陥穽」は芳野氏の多くの作品中でも画期的な雄篇になりそうだし

例えば、敵につかまった菊の助が、俯伏せに手足を押えつけられ、衣類をはがれてゆく。初めのうちは、少年を装って乱暴な言葉使いで勝気に抵抗していた菊の助が、いよいよ最後の一枚となると急に女らしい言葉に変わって哀願する。しかし結局は全裸にされて太い木の十字架にハリツケにされる。画面は十字架を背負った少女の裸身を正面からズバリ描き、悪党二人が、長い槍を交叉してみせ、いわゆる「見せ槍」の仕草まで描いている。

このあと、最年少の吉三の活躍で救われるのだが、吉三は姉の裸身にうっとりし、「おねえちゃん、きれいだよ」とカメラにおさめる。全裸ハリツケの菊の助は「イヤイヤ！」と頬を染める。

少年向けマンガも、ついにここまで来たのか！と私は、しばし呆然とした。

美少女、菊の助の受難の数々を挙げればキリがないが、砂浜でビキニ姿のまま片手にロープをかけられ、オートバイで引きずり廻されたり、孤島の岩くつで裸にされ、両手両足を開いて鎖で吊られて鞭打たれてり……。息つく間もない責めの連続であるのだ。

明らかにSを意識し、ヒロインのハダカが、兄弟や親の異常な興味の対象となるな

ど、倒錯的色合いが極めて強いといわざるを得ない。永井豪氏は、いくつもの誌に執筆していられるが、美少女が両手吊りにされたり、鞭打たれる場面はよく出てくるし荒縄でくくられた手首のアップなども、なかなかのものである。

このような永井氏の作品が、爆発的な人気を呼んでいるということは、少年の世界にSが受け入れられているということであろうか。もちろん、同じS傾向でも、大人のような陰湿さはなく、カラッとした乾いた形のものではあるが……。

いずれにしても現在、性に関する考え方が曲り角に來ているといわれているが、少年誌に表われた倒錯の萌芽のゆくえは興味深い。暗い印象に包まれた日陰の花だったSやMに、明朗なスポーツ的感覚が生まれてくれればいいのだが……。

ついでながら、「ハレンチ学園」の映画化が企画されているという。児童劇団の少年少女を使うとすればみものだろう。私は「あばしり一家」の映画化を想像してみるのだが、なかなか楽しい。ボーイッシュな菊の助には、田中万里あたりを想定してみると適役の感じもするが、全裸での責めシーンにどれだけ耐え得るだろうか……などと、美少女マニアの胸がうずく。

五月号はこの作がいよいよ佳境に入ってきたことを示している様である。

真砂十四郎氏の「壺中の園」には谷崎文学的な味が感じられ、これも再読三読して私としての評価は、ぐっと上ったものである。

第一印象と反読後の印象でM派の各作品に相当の差が生じた理由は何故であろうか。

多忙な昼間通読した時には、私はマニアとしての感覚ではなく、通常の生活人としての感覚で対しており、そこで、男性Mは日常生活と断絶した設定でないと素直に入ってきた。それに反して、ゆったりとした夜の時間には男性Mの魅力がぐっと高まり、情況が現実に近いほど興味も強まってくる。こんな解釈も可能だろうか。

プレイと日常生活の間に高い壁を築くために傾注してきた努力が、意外に深部に迄滲透していることを、読後感を文章にしてみたことで確認させられたようでもある。仕事とプレイとの折合いをつけるのはさほど至難の事ではないが、子供達が物心つく時期になると家庭は家庭としてその他に第二第三の生活を形成する力量がない限り所詮、自由な行為も感覚も持ち得ないのが浮世かも知れぬ。ともあれ前記三篇について読後感の補足をする。



連載 アブ紳士行状記

M 派 交 友 録

(6)

△花村崇の巻Ⅱ四▽

鬼 山 絢 策

カット・春川ナミオ

反抗的な奴隷

岩本器械鋳業の専務だと言うから、どんな立派な男かと思ったら、案に相違して、黒皮のジャンパーでオートバイを乗り廻している町のおんちゃん然とした若い男なので、私は失望したのだが、花村の方はもうかなり親しい仲のようである。

岩本の家というのも階下が二間か三間、二階が一間の狭い家で、先ず普通のサラリーマ

ンの家である。

M派の人間だと花村は紹介したのだが、どうも話をして見るとM派ではなく、むしろS的なところも見られるが、いずれにしても知識が浅く、専門的な用語さえ知っていないようなので、私は早々にして退散した。花村は残って、まだ話があると言っていた。

ただひとつ、花村を使って撮影をやるという点だけに興味をひかれた。

その相手となる女は、写真で見ると大して美人でもなく、平凡な女性なのだが、写真だ

けでは分からない。実際に会ってみると存外綺麗かもしれないと思ったりしたが、これは私のスケベなところなのだろう。

だが岩本という男は、一見、好男子だし、しゃべり方もやさしく、愛想がよくて人をそらさぬところがあるから、存外、若い女にはもてるのかもしれない。あの写真の女性の他にも何人もモデル候補があるようなことを言っていたが、どこまで信じてよいのやら、疑惑半分、好奇心半分といった心境だった。

まあそれはそれとして、私の方は由紀さん

と三回目の撮影を日曜日にやるように予定していたから、花村と由紀さんに連絡して、代々木の「桃園荘」という旅館を選んだ。

例によって由紀さんの邸に車で寄った。

由紀さんはその当時流行していたシールのオーバーを着て出てきた。

「何だか、あの男とも飽きてきたわね」

車の中で由紀さんはポツリと言った。

「そうですね。そろそろ新しいパートナーをみつけないければなりませんね。でも、この遊びそのものは面白いでしょう」

「フン………」

由紀さんは美しい顔に微笑をうかべた。肯定も否定もしない笑顔だったが、満更でもなさそうな顔つきだったので、私は安心した。

代々木の駅で待っているはずの花村が、今日は来ていなかった。

私は少なからず慌てた。

まさか花村が約束を破って、来ないようなことはあるまいと思ったが、急に不安がこみあげてきた。

それに今日は大変な人出である。神宮外苑で何かスポーツがあるのだろう。おびただしい乗降客、といっても降りる人ばかりだったが、待ち合わせている人も多く、これでは探

すのも大変である。

あまり車を停めておくわけにもいかないの
で、ともかく由紀さんに降りてもらった。

周囲は若い人達が多く、シールのオーバーを着た由紀さんは目立った。

人ごみの中に由紀さんを立たせておくのも
気の毒なので傍の喫茶店で待ってもらった。

「まずい日に、まずい場所を選んでしまった
な」

と私は後悔したが、喫茶店に由紀さんを送
りこむと、私は一生懸命、人ごみの中を探し
た。

二十分ほど遅れて花村がやってきた。

「困るじゃないか、時間に遅れちゃ」

私は時間をたがえられるのが一番嫌いな
ので、思わず強く言った。

「今日は下痢がひどくて休もうかと思ったん
ですよ」

と花村も怒ったような顔で言う。

何かイヤイヤ来たという感じにもとれるし
「来てやったんだ」というような恩着せがま
しい態度にもとれる。自分から望んでおきな
がら約束の時間に遅れ、それでこんな態度を
されたんじゃないくる。

「もうこの男もあまり使えないな！」

と思った。

縛りのテクニク

由紀さんの待っている喫茶店へ連れて行く
と、さすがに由紀さんには

「どうも遅くなつて済みません。下痢しちゃ
ってね」

と弁解した。

車をひろって「桃園荘」へ行った。歩いて
も直ぐなのだが、何となく人目を避ける気持
があつたからだ。

通された部屋というのが、二間にはなつて
いるが、二畳と四畳半ぐらいの、いかにも狭
い部屋で、これも気に入らなかった。

最初に行った千駄ヶ谷の「花房」という旅
館が豪華だっただけに、いかにも貧弱に見え
私も気に入らなかったが、由紀さんも少し、
おかんむりの態だった。

部屋が狭いと全身が入らないので、非常に
撮りにくい。

由紀さんは、今日は黒いサテンのガウンを
持ってきた。ところどころにランがアクセサ
リーしてあって、素肌をそれをもとくと、非
常に妖艶である。

「お風呂に入らないと寒いわ」

スチームは十分きいていたが、裸に冷いサテンを着たのでは寒いだろう。由紀さんはサッサとバスへとびこんでしまった。

「あすこだけは洗わないで下さいよ」

と私は注意した。由紀さんが風呂に入っている間に写場をセットしなければならぬ。今日は緊縛をやる予定なので5米の麻縄の太いのと細いのの二種類を持ってきた。

だが縛った人間を転がす場所がない。椅子だの小机だのがゴタゴタ置いてある。これを一つ一つ次の間へ運んで、場所をとらぬように高く積みあげた。

やっとベッドの傍に畳一畳半ぐらいの空地ができた。

「重労働ね」

風呂から上った由紀さんは鏡に向かって化粧をはじめた。花村はノロノロしていて、さっぱり動こうとしない。勢い私一人でかたづけや、ライトの取りつけをやらなければならなかった。

花村はトイレへ駆けこんで行った。バスとトイレが一緒になっているので、由紀さんがバスから上がるのを待ち兼ねていたのだ。たしかに下痢しているのかもしれない。

花村に裸になるように言うと、いとも簡単にパンツまで脱いで全裸になってしまった。

私は太い方の縄で花村を縛ってみたが、縄が堅すぎてさっぱり緊らない、縄と縄の間のあちこちに空間ができて、見たところグズグズで、まことにだらしない縛り方だ。

由紀さんが化粧しながら傍で見ていてクスクス笑い出した。

「どうもサマにならん」

私は太い縄を諦めて、細い方にした。

両方とも新しい縄なので、なかなか思うように行かない、緊縛には堅さのとれた古い縄がいいのだと、この時、悟った。

その頃の本誌には縛りの研究などが連載されていて、昔の囚人を縛る本縄のかけ方などが図解入りで出ていたが、とてもそんなところではなく、グルグル巻きに縛るのでさえ、まだ縄に隙間があって締まらないのである。元来、私は腕力のない方だから、こういうことは苦手である。

「どれ、貸してごらんさい」

見兼ねた由紀さんが立って来て、私と交替した。

由紀さんに縄を持たすと、実に手ぎわがよい。

足を投げ出して半身を起こしている花村の胸に縄をひと巻き巻きつけると、背中でキュッと締めた。

「痛てッ！」

と花村が声をあげた。由紀さんは構わず二巻き目をかけると、花村の後から足をあげて花村の首筋へかけてグイと踏みつけた。花村は大きく前に身体を二つに折り曲げた。その背中を足で踏んでグイッと締めあげた。

「うまいもんだなあ、やったことあるんですか」

「まさか、荷造りならやったことあるわよ。荷造りと同じでしょ、こんなの」

私はカメラを構えた。

由紀さんが背中中の足をどかすと、花村は生き返ったように半身を起こす。そこへ一巻き巻きつけるとまたパツと足が上って花村の肩を踏んまえる。サテンの裾が捲れて、豊かな脚がしろく浮かび出る。実にいいポーズだ。

「ちよっとそこでとめて……」

ピントを慎重に合わせてシャッターをきった。

また身体が二つ折りにされる。そこでまた作業をストップさせて撮った。

「いくつ巻けばいいの？」

何回かこの動作を繰り返す間、私はアングルを変えて撮った。

「もう一回、巻いて下さい」

私は寝転がって仰角のアングルを狙った。

由紀さんは最後のひと巻きをキュッと締めると、背中縛った。

「これでいいでしょ」

「痛いなあ、こりゃ」

花村は痛そうに顔をしかめた。縄が腕に深く食いこんでいる。

「このくらいやらなきゃ縛ったうちに入らないじゃないか、文句言うんじゃないよ」

由紀さんは足をあげて花村の頭を蹴つとばした。今日のは相当、力が入っている。花村は仰向けにひっくり返った。

「ああ、そこんこ、いいなあ。もう一度、やって下さい」

あまり早かったためシャッターチャンスを失ったので、もう一度やってもらった。

唐突な行動

後手に縛った花村を仰向けに寝かせ、その上に由紀さんに馬乗りに跨がってもらった。

これは自分の体重の上に更に56キロのグラ

マーな由紀さんの体重が加わるのだから、花村の腕は、かなり痛い。

「痛い、痛い、痛いよ」

今日の花村は、やたらと悲鳴をあげる。

この前は苦痛をこらえて表情さえ楽しそうにしていたのに、今日は最初から痛い痛いと言ふ。

由紀さんは苦しむ花村の顔を見下ろしながら顔へ足を乗せたりして楽しそうに責めている。

「ああ、痛い。腕が折れちゃう。勘弁してくれ」

「うるさいねえ、この口。じゃあ、ラクにしてやるわ」

由紀さんはズルズルと体重を胸の上から前の方に移動させた。

由紀さんの身体の蔭になっていた花村の下半身が現われた。願望の兆しが哀れにピクンピクンとふるえているのが、滑稽に見えた。

それは空しい嘆願の現われなのだ。いかに腕いてみたところで、彼の望みは満たされないのである。

由紀さんもチラと後を振り返って見て、「フフン……」

と、あざ笑った。不逞な様子をひけらかし

ている奴隷が憎くなったのか、由紀さんの責めは強烈だった。

今日は最初から御機嫌が悪いのだ。それが容赦ない苛責となってあらわれた。

腕の痛みがやわらいで、ひと息ついた奴隷は、こんどは真綿で包まれたような息苦しさ、に喘がなければならなかった。

今日の由紀さんは、はりきっているだけにレンズから覗いた表情も最高だった。身体の部分々々にも力がこもっていて、まことに迫力のある写真ができると思った。

だが、そのシーンに入って四、五枚撮ったところで、惜しくもフィルムが付きた。

フィルムを入れ替える間は、いつも休憩することになっているので、

「サア、ちょっと休みますか」

と声をかけてライトを消した。だが由紀さんは、おさえつけた奴隷を許さうとしなかった。

苦しむ奴隷の顔を見下ろしながら、本気で責めている。

苦しがった花村は、私の方を見てパチパチと目でサインを送った。

「ウー、ウー」

と何か言いたげだった。

「今日は、ずいぶん弱虫じゃないの」

由紀さんは、ようやく奴隷を解放した。

「ああ、おどろいた。も少しで、ここへクソを、たれ流すところだった」

と、またトイレへ駆けこんで行った。

由紀さんは私を見て、いたずらっぽく笑ってみせた。タオルで下半身を拭っている。

トイレから出てくるなり花村は、

「あのねえ、こないだの岩本君ね、撮影を是非、見学したいと言ってるんですがね。ここへ呼んでみてはどうですか」

あまりに唐突なことを言い出したので、私は返事に窮して由紀さんを見た。

花村は由紀さんに向かって岩本の素姓を説明し出した。

「ねえ、いいでしょう。場合によっては彼をモデルにして、撮ってもいいじゃありませんか」

岩本という男は、どうも私は気に入らなかったのだが、花村のこの一言に動かされた。「どうします？ 由紀さん、一応会ってみるだけは会ってみますか」

「そうねえ……」

由紀さんは、ちょっとためらっていたが、否定する決断もつきかねている風だった。

花村は裸のまま傍の電話器をとって岩本の所へ電話していたが、

「是非お会いしたいと言ってます、ちょっと行って僕、連れてきます」

いいとも悪いとも言うてないうちに、花村はサッサと洋服を着はじめた。いままで緩慢だった動作が見違えるように敏捷になった。

「こまるわ」

由紀さんが警戒気味に小声で言ったが花村は全然無視して

「大丈夫ですよ、たしかな男ですから。じゃちょっと行ってきます」

アッと言う間もなく部屋を飛び出して行った。

奴隷の計略

由紀さんと私は顔を見合せて笑った。

「ヘンな奴だなあ」

「大丈夫なの？ そのひと」

「まだ若い奴でね、ジャンパーを着てオートバイ乗り廻している専務さんですよ」

由紀さんはベッドへ上って仰向けに寝そべった。

「煙草をとって頂戴」

私がホープとライターをわたした時、グイと由紀さんに手を引っぱられて由紀さんの上に折り重なってしまった。

「鍵をかけてよ」

由紀さんの方が私より冷静だった。

私の情熱が平静におさまった時、ハッと気がついたことだが、今日は、まんまと花村に一ぱいくわされたのではないかと思った。

わざと遅刻して由紀さんを怒らせ、いつもより手荒く扱ってもらい、思いきり責められることも彼の計算に入っていたのではあるまいか。

そしていま突然、座をはずして、由紀さんと私の二人きりにさせる――

これもまた彼の計略のうちに入っていたのではなからうか。

情熱を燃え立たせた女と男を、密室の中に閉じこめておけばどうなるか？

それは花村の推量のうちに入っていたのではないか。

とすると、由紀さんも私も、まんまと彼の術中に陥ちたことになる。

情熱が引き潮のように退いたあとには空しさだけが残る。

私は何となく後めたい気がおこって

「お酒でも飲みますか？」

と由紀さんにたずねた。

「ウイスキーがいいわ」

「どうせこんな旅館にはいいウイスキーはないと思うけど、サントリーでもいいですか」

「しかたがないわね」

彼女の家では最低ジョニー赤かブラック・ホワイトしか飲まない。

電話でウイスキーと肴を取り寄せ、わざと鍵をあけてひと口飲んでいるところへノックの音が聞こえた。

「どうぞ。開いてますよ」

花村が岩本を連れてきた。

岩本は、今日は背広にネクタイをキチンとしめてきた。

「失礼します」

岩本は私に目礼すると由紀さんを見た。

由紀さんはまだサテンのガウンを着たままベッドに蒲団をかけて寝ていた。

「紹介します。岩本器械鋳業専務の岩本君です」

と花村が言う、それを私が受けて

「ああ、こちら倉田由紀さんです」

由紀さんは寝た儘で岩本の一礼を受けた。ちよっと座がしらけた。

「サテと、さあ先刻の続きをやりますか、もう縛りは勘弁して下さいよ。由紀さんに縛られると痛い何のって、腕が折れるかと思いましたがよ。ホラ、ごらん下さい」

花村は上衣を脱いでシャツを脱ぐと上半身裸となった。見ると両腕に縄のくいこんだ痕がついている。

「今度は奴隷の接吻をやって下さいよ」

委細構わずズボンを脱ぎにかかった。だが由紀さんは寝返りを打って向こうを向いてしまった。

「まあ、お掛け下さい」

私は岩本に椅子をすすめた。女中を呼ぶ時に椅子や机を元に戻しておいたのだ。

「ハア……」

と言ったが岩本も妙にかたくなって棒を飲んでように突っ立ったままである。

「どうです。一ぱいやりませんか」

「ハア、イヤ結構です、いずれまた、お眼にかかります。今日は失礼します」

「いいじゃないの、見ていけない？」

花村が引きとめたが、岩本は堅い表情のまま、

「また今度ね、じゃ御ゆっくり……」

入ってきて二分と居なかった。岩本は一礼して出て行った。

「あんた少し出しやばりすぎるわよ。鬼山先生やあたしが承知してないのに、勝手に自分で呼んでくるなんて我がままじゃないの」

由紀さんは花村を叱った。

「だって、あの男だってあなたの奴隷になりたいと言うから、できれば僕と二人でサーブスしようと思ったんですよ。どうです、あの男はダメですか」

「まだいいか悪いか分からないわよ、鬼山先生に決めてもらうわ。何にしても、いきなりこんな所へ呼びつけるなんてひどいわよ」

「そんなこと言ったって僕があなたと始めて会った時だっていきなりじゃありませんか」

「そりゃあなたもあたしも鬼山先生を御信頼していたからよ」

「どうです？ あの男は？」

花村は私に眼を向けてきた。

「そうねえ、どうもちよっと腑におちぬところがあるんでね」

「どんなところが……」

「ちよっと口には言えないけど、もう少し交際して見なければ分らんね」

「そのことは鬼山先生に委せるわ。サア、こっちへいらっしゃい。出すぎたまねをした罰

にお仕置きをしてあげるから」
由紀さんはようやくベッドから半身をおこした。

大 事 件

その後一週間ばかりして由紀さんから電話がかかってきた。

「あの岩本とか言う男はどうかしら？」

「いやあれきりまだ会ってないんですがね、何か信用のおけない感じがするんでね、まあよした方がいいでしょう」

その頃、私には別にモデルの候補者ができていたのでその方の話をすすめたが、それは本篇には関係ないことだから省略する。

花村とも、その後、連絡がなかった。

私も、仕事の方が忙しくなったので、こっちの方面はしばらく御無沙汰し、そうこうしているうちに一年余りが過ぎてしまった。

もっともその間にも春木君とはちょいちょい会っていた。

春木君は花村とは交際しているようだが、春木君の話によると、花村は岩本のグループとだいたい派手にやっってるらしいということだった。

こういうことは野放図に仲間を殖やして行くのは、危険である。若い人の恐いもの知らずで、情慾のおもむくままに勝手な行動に走るの、すこぶる危険である。

由紀さんとしてはもう花村はやるだけやっただけから興味を失ってしまっている。花村からたしか一度連絡があったかと記憶するが、そのままにしておいたので途切れてしまったのである。

ところが――

びっくりするような大事件がおきた。

岩本のグループがワイセツ写真の密売で検挙されたのである。

古い読者なら御承知のことと思うが、当時各新聞に全部報道された。

中には岩本以外にも私の知っている人物が二、三あり、名前だけ聞いている人物も混っていた。

私はその日の新聞全部に眼を通した。それは花村の名前が出ていないかどうかを心配したからである。

だが幸い花村崇（本名はもちろん違う。私は本名の方を探した）の名は出て居なかった。でホッとした。

現在だったらそれほどショックな事件

ではないのかもしれないが、十三年前の当時としては珍しかったのであろう。

その中でも一番委しく報道したのが観光新聞だった。当時の新聞を保存してあるので、新しい読者のために再録してみよう。

変態グループが性の狂宴

痴態写して売る

インテリぞろいの男女一味

「芸苑社」というもっともらしい看板をかかげ、芸術写真とめい打って、集めたモデルの女性と、みにくい性の狂宴にふけたあげく自分達の痴態を撮影した写真を大量に複製、娯楽雑誌の読者文通欄を利用して全国的に販売していたとんだ芸術写真グループの一味十人（男九人、女十人）がワイセツ図書販売の疑いで、さる六月十六日東京目黒署から送検された。

モデルは純然たる素人女で、それも一流銀行員、東京都公務員、その他女子大生などがほとんどで、取調べの係官に「性の満足を得て小遣いにもなる」とうそぶくドライ派。

一味は揃って最高学府を出ており、なかには東大卒、東大教授の息子も居るなど、インテリ揃い、おまけにいずれもが強度の加ギヤ

く変態者で、モデルとの痴態だけでなく、自分の妻や情夫との痴態、変態写真までぬけぬけと売りさばき、さらにモデルに売春させていた疑いももたれており、その驚くべき行状には四カ月の苦心捜査のうえ一味を検挙した係官も啞然としている。

一味は東京都中野区大和町四四二長田アパート内「芸苑社」佐次浩介こと青木義和(25)同相浦和代、門田奈子こと青木的情婦、吉海三代子(27)豊島区椎名町五ノ二二五八写真材料商「愛好堂」小山和夫(31)新宿区百人町二六三山陽荘アパート甲斐仁彦こと無職海後宗良(29)文京区武島町一五有限会社岩本鉱業物産専務取締役、高島祥夫こと、岩本巖(30)台東区松清町四〇日本さく泉工業社長市川忠彦(36)千葉市松ヶ丘六一号、都中央区土木課事務員山田順子こと小田末子(28)都下北多摩郡砂川町大和病院看護婦児玉ハル江こと小俣ハル江(20)北多摩郡大和町奈良橋三八二大和病院看護婦石川幸子(20)などであるが、変態エロ写真の交換でむすびついたもの。

調べでは青木は日大芸術学部演劇科を二年で中退、昭和二十七年熊本県水俣市で結婚、貸本屋と編物業を経営したが、失敗して三十

年九月、鹿児島県大口市に移転、洋服店、編物学校を開いた。この頃青木は編物教師をしていた吉海と同棲、貸本屋「二葉書房」を経営するかたわら芸術趣味の会と称するエロ写真販売の会をデッチあげ、おもに九州一円にバラまいていた。

はじめ情婦の吉海との痴態だけを販売していたが、飽きられたため、次第に新聞広告で集めた女モデルを使用、さらに大もうけをたくらんで本妻を残し、三十一年十月東京にやってきた。

当初中野区新井町五六九庄司方に芸苑社の看板を掲げて「趣味の会員募集」の広告を東京毎夕新聞その他に掲載、さらに新聞、雑誌に「モデル募集」を広告、集まってきた小田末子、小俣ハル江、石川幸子、女子プロレスラーN子、川崎市のM子(20)T子(23)熊本県玉名郡木ノ葉村N子(23)同日通寮内U子(23)女子大生K子(20)ほか五名の女子大生と、自宅および中央線大久保駅前「御苑荘」大田区石川台の「緑風荘」で、一日千円から千五百円のモデル料を支払って関係、同時に情婦の吉海三代子がある場合も撮影するといった変態ぶり。

東大教授の息子

海後 病身から猟奇へ

モデルの中には、神奈川県平塚市の、T子(16)のように、未成年者も混じっており、なかば暴行同様に関係した場面を撮影した分は、特別高価に売りさばいていた。

写真の現像焼付は小山和夫が担当、一組四百円見当で逮捕まで約四十余万円を荒稼ぎしていた。

また海後は東大文学部教授兼教育学部長、日教組の有力なブレイン・トラストといわれる海後宗臣教授の長男で、小学校から昭和二十三年東大経済学部卒業までトップを続けてきた秀才。卒業後太陽生命に入社したが、二十七年肺結核となり、東大病院に入院、三十一年六月退院した。現在新宿区百人町のアパートで静養中であるが、発病と同時にそれまでの秀才コースが大きくカーブしている。

入院中東大病院看護婦W(27)らと関係が生じたところから変態的性格がこうじ、猟奇雑誌「奇譚クラブ」を愛読し、その読者通信欄を通じて青木一味のグループの一員となったが、この前、すでに自己の変態写真を販売していた。

小山も海後同様肺結核療養中。二十年中

大専門部経済科を卒業、広告代理店博報堂に勤務中に発病、東村山の療養所保生園に七年間入院していた。小山の場合も入院中に看護婦と関係が生じ、病体で満足を得られないところから次第に変態的傾向をおびはじめ、関係のある看護婦を交互に連れ出し、ロープその他で相手をしばりつけるなどの変態ぶり。詳細にしるした日記を読みかえしてエツに入り、二十八年二月ごろから日本電話建物KKの外交員らに一枚当り四十円でエロ写真を売ったのが皮切り、三十一年十月ごろから北区西ヶ原で写真材料商を始め、得意先開拓にも使用していた。

岩本巖の場合はそのモデルに意外な女性が登場しており、一流銀行のM本店勤務の女事務員、美容師、学校教師なども居る。

四才で両親に死別、養子となり日大電気工学科を卒業、岩本鉦業物産専務をしている身の上である。

市川は千葉県に妻子を疎開させ、小山のエロ写真のモデルと同様、同時に自分の撮影したものを青木らと一緒に売っていた。

あきれ果てたドライ行状記

目黒署保安係の話

青木ら一味の変態ぶりにも驚かされたが、モデルとなった女性のドライ振り、呆れた行状にはあいた口がふさがらぬ思いがした。

とかく教育程度の高い者ほどこのような変態的傾向を持ちがちで、意外に広い販路は、社会的地位のある人も多く、そのような者が好んでかかるワイセツ写真を手に入れたがる態度は反省さるべきだ。

変態と罪悪

グループの主な人物についてかなり詳しく報道されている。このうち岩本をはじめ佐治浩介、門田奈子は知っているし、甲斐仁彦のペンネームも雑誌でよく見かけた名である。佐治、門田については後に書く。

新聞記事を見ると「変態変態」とまるで変態そのものが罪悪であり、醜い汚らしいものでもあるかのように書かれている。

この事件の場合は法を犯しているのだし、人に迷惑をかけ、モラルにも反したことをやっているのだから悪者扱いされてもしかたがないが、変態行為をしたから罪悪なのだと思います。われがちな記事には不満が残るのだ。

よく女性同志の会話を聞いても「あの人、

変態なのよ」「あらっ、いやねえ……」という言葉をよく聞く。こんなバカな話があるものではない。変態の何であるかを全然知らない。無知もいいところである。

変態と言ってもホモもあればSもあり、Mもあり、その他何十種類もある。Sにしたところでピンからキリまであり、ピンの方は殺人淫楽症という人殺しをしなければ満足しないヤツからキリの方ではちょっと膝をつねる程度で満足するものもある。またSにしてもMにしても痛苦を喜ぶ型があり、その痛苦も精神的なものと肉体的なもの、直接的なもの間接的なものがあり、屈辱を好む方にしても精神的なもの肉体的なものに分かれていて、細かく分類すれば何百種類にも分かれる。

そうなればどこからが変態で、どこからが常態なのか、その線はとても引けるものではない。

常人が変態をダカツのように忌み嫌うのは当然なことで、変態同志だってホモは見るともイヤだ！ 虫が走るといふ人も居る。

人に好き嫌いがあるのは当然であり、嫌いなものを罪悪視するのもいくらもあることで共産党は自民党を罪悪視しているし、自民党はゲバ学生を暴力団かヤクザ視している。

日蓮宗は他宗を邪教視するし、そうなければ他宗の方も創価学会などを邪教視する。

「あいつは嫌いだ。悪い奴だ」と言われて、言われた本人としては嫌われるのはやむをえないが悪人だという点には抵抗を感じるだろう。少なくとも嫌いな人間から悪人だと言われて「そうだ」と思いこむ人はいないだろう。「変態」というのは文字通り、ちょっと変わっているというだけのことなのである。そこにひけめを感じることは毫もないのである。それがこの事件のように、法に触れてしまうと決定的な悪人とされてしまう。その悪事をもって、変態行為まで悪事のように思われる。そこに大きな錯覚があるのである。

私だって彼等と同じような写真を撮った。だが私は、決して悪いことをしているとは思っていないし、法にも触れてないから罰せられることもない。だから、こうして雑誌に発表できるわけである。

ただしこれには厳に守らなければならぬことが三つある。同好の士が集まるにしても、プレイするにしても、写真撮影するにしてもこれだけは絶対に、守らなければならない。

- 一、金銭を収得してはならない。
- 一、相互の名誉をきずつけるようなことを

してはならない。

- 一、他人に迷惑をかけること、またその恐れのあることをしてはならない。

この三つを守っていれば決して罪悪ではない。だがこれは誰しも考える当り前のことである。然し当り前のことができないのが人間でもある。殊に若い人はつい行きすぎて、法に触れたり、他人に迷惑をかけたりする。

現に雑誌の通信欄を通じて交際したり、プレイしたりするのは結構だが、両者の間にトラブルが生じて、それを編集部に尻を持ちこんでくることが多くあるそうである。

これなどは常識を逸していることで、たまたま損害や、迷惑を受けても、自分で解決するのが当然の話である。

シ ョ ッ ク 死

その後、私は花村とは会っていない。だが春木君の話によると、警察に参考人として呼ばれて相当、調べられたらしい。

それは彼がモデルとなった写真が相当あったからで、彼は女性ばかりでなく、岩本から責められる写真も相当、撮られたらしい。

これで彼は大きなショックを受けてしまっ

て、もうあんなことは金輪際しないと言っているそう。

ただ、彼はこの件に関しては、金銭を受け取ってはいなかったから、罪を免れたわけであらう。

その後電話で一度だけ話をしたことがあるが、ことMの話になると、おぞ気をふるったように避けたのには、ずい分変わったものだった。思った。あれほど開放的で、自分がM行為にかけては何でもやったことを自慢していた男が、まるで変わってしまったのである。

勤務先の進駐軍の方も、欠勤が多くなった故か、時代の流れに従ったためか分からぬが整理されてしまったが、もともといろいろな職能のある男なので、現在はある大会社に入社して既に十数年、いまは安定した生活を送っている。しかし「Mの花村」はあの事件でショック死してしまったのである。

私がM派交友録を書く気になったのは、世の中にはこういう奇人も居るということを興味的に紹介すると同時に、それ等の人々の失敗談をも紹介して、後者の戒めとしたい気持ちがあるからである。



SMプレイと愛情

宮脇真知

『SMプレイ』という言葉が本誌上に現われてより久しいが、最近では大衆雑誌や週刊誌あたりにもこうした文句が頻繁に出てくる。

一般の読者たちの間にも、こうした『SMプレイ』といった言葉が理解されるようになったのかと私は驚いている。大体こうした言葉の本当の意味は容易に理解される性質の内容ではないのだが、マスコミによって世間に伝播され、一知半解されて流布されるのを私は恐れる。

一般にSとはサジズム、Mとはマゾヒズムの謂であると簡単に解している。そしてサジズムとは殴ったり蹴ったり縛ったりすること、言いマゾヒズムとは反対に殴られたり蹴られたり縛られたりする

ことを言うと考えられている。

だから『SMプレイ』とは、縛られごっこや蹴られごっこ、或は殴りあいごっこだと思ふかもしれない。ここに掲げたSMプレイと愛情Vという名題について一見奇異の感じを抱くだろう。しかし私の言わんとする『SM』とは、そんなものではない。

男女間の愛情の表現の仕方についてのテクニクの一つとして、『S』とか『M』とかのゼスチュアを示すのであって、それは趣味の問題であり、そこに『愛情』が介在したとしても当然というより『SM』が『愛情』そのものであるといっても過言ではない。異性を縛りたいとか、責めたいとか虐めたいとか考えている者が

あったり、又異性から責められたいとか縛られたいとか虐められたいとか考えている者があったとしても、そこに△愛情Vが介在しないことには、その行為は狂人の狂い沙汰に外ならないことになる。

ここに『SMプレイは愛情表現の一つの方法手段である』という根拠がある。『SMプレイ』の発現に於て当事者間に心と心の触れあい、愛情の交流があつてこそ、はじめ、その本領が発揮されるのであって、単に機械的なSM行為だけであれば、それは『Sプレイ』ではなくて、私刑であり拷問であり報復であるに過ぎない。

如何にSMプレイのように見えておったとしても、その行為は愛情の伴わない欺瞞行為であつて、索漠とした砂を噛むが如き真似事の形骸は到底『SMプレイ』の名を冠するに当たらない。

仮りに△SMプレイVと称するものを試みた人であつたならば誰でも、そこに心の触れ合いが濃厚であればあるだけ、その味合いが格別であるのを経験する筈である。これは不思議に思われるかもしれないが、SMプレイとはあくまで男女間の温い愛情を根拠とするものであって、純粋な愛情のや

むにやまれぬ発揚がSMプレイへと発展してゆくのであるから、また理の当然というものである。

S傾向の男性が女性を責める際「憎いから虐めるのではない」という言葉を吐くのは、△責めVに對しても△愛情Vが不可欠であることを如実に物語っている。

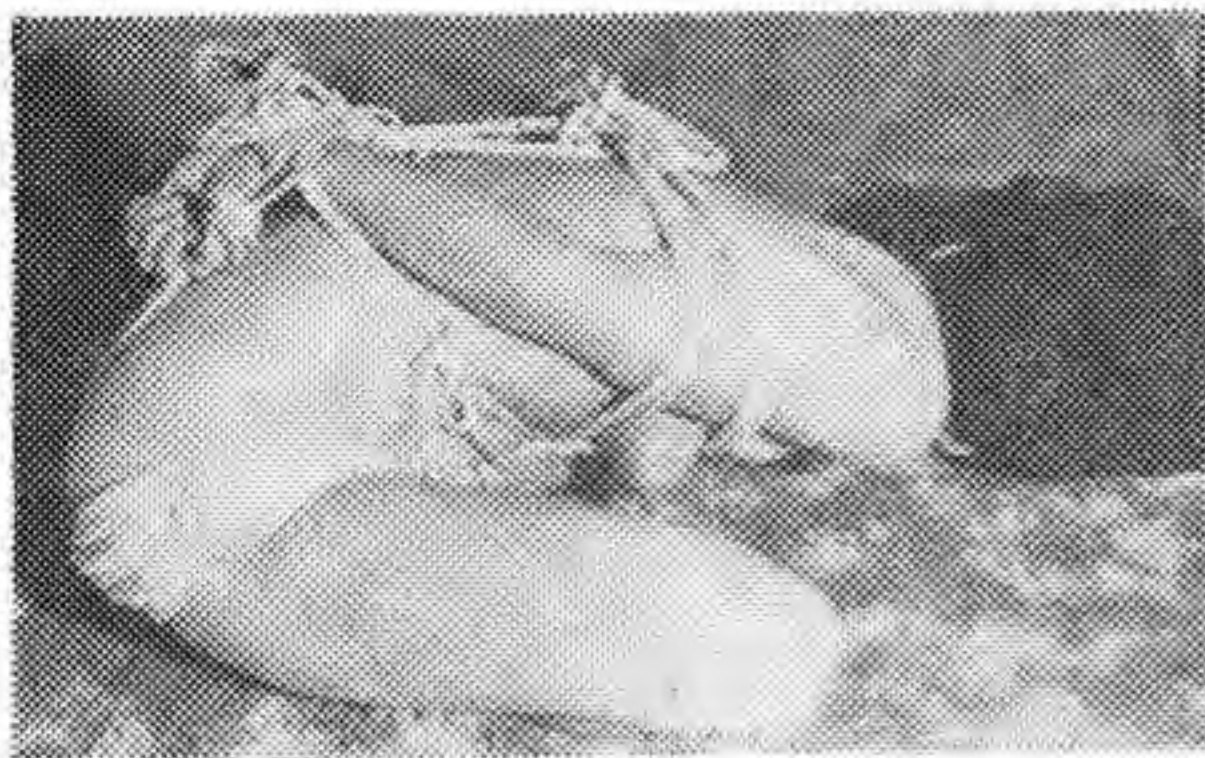
例えば女性から責められたい、辱しめられたい、或は縛られたい鞭打たれたいと願っている男性があつたとしても真実△憎しみVを抱いて前記のような行為をやつて欲しいと願う者はないだろう。

元来、M人士という者は根っからのロマンチストであり、いわば極めて贅沢な思想の持主である。加虐者の側に溢れるような愛情の発露があつてこそ、はじめSMプレイの真髓が発揮されると信じ込んでいる集団なのである。また実際に愛情という絆がないことは、加虐の苦痛や恥辱が絶大な快楽に変化することはないだろう。

M女性の心情にしても同じことがいえるのであって、よし全裸に剥かれて縛り上げられても、そこには愛情の交流さえあれば、『SMプレイ』は甘美な花園で戯れる胡蝶の如き夢幻の境を彷徨するこ

念願の現像 妻と共に 宮城隆志

最近、自分でフィルムの現像を手掛けてみたところ、思いのほかうまく出来たので、早速に念願の妻（昌子）とのプレイの様子を撮り、三本のフィルムをものにしました。まだ引伸機をはじめ、数種の機材を購入しないと駄目なのだが、とりあえず、手持ちのスライド映写機を応用して引伸し、焼きつけてみました。期待しながら見



詰める現像液の中で、うっすらと像が浮かび上って来たときの嬉しさ……しかし、出来上がったフォトの余りよくないのに多少ガッカリもしたが、映写機応用のものとなれば仕方がありません。

それでも、どうやら仕上げたフォトは百枚近くもあり、写真としては不出来でも、わが手に成る作だけに愛着もひとしおです。

十数年の貴誌ファンとして、何とかして自分達のフォトを発表したく、妻と相談の上、発表可能と思える、この二葉を送ります。他

の殆どは、門外不出のものとしなければならぬ写真で、どうにもなりません。

私と妻のこうしたプレイは婚前に始まり、すでに十余年になります。始めの頃は、プレイといっても、軽く形だけの縛りであって、プレイというにはほど遠いものでしたが、最近では、かなり強烈な緊縛プレイが出来るようになっていきます。

もちろん妻の積極的な理解もさることながら、近頃では、いろいろな小道具も考案して、時に応じて使用しています。

組立式、X型の責め柱。

座イスと柱

の組み合わせ

せ開股台。

電動シャフ

ト利用の責

め具。

その他にも

数種あります

が、しかしそ

れらは、一応

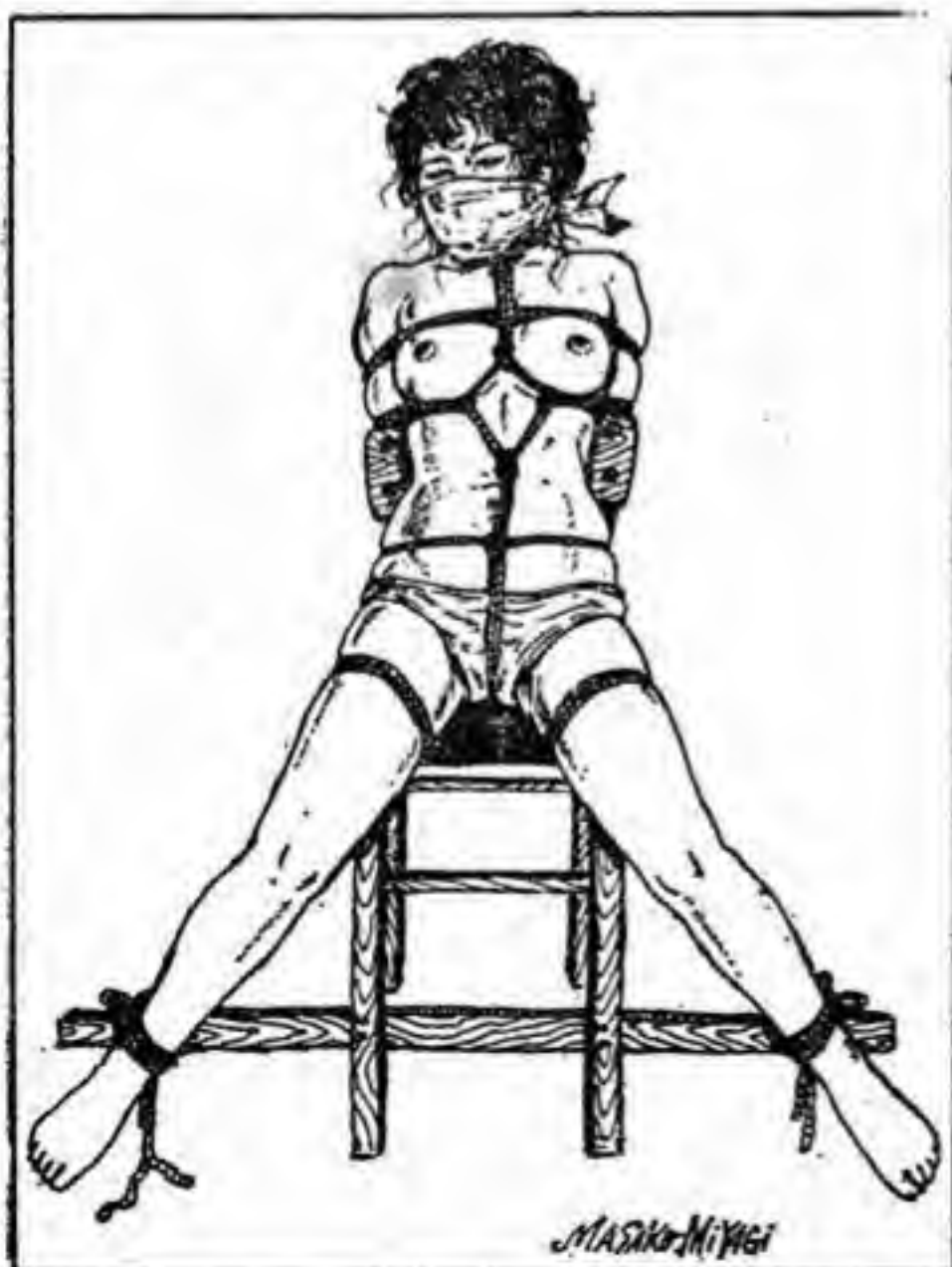
「責め」の小

道具ではあ

っても、本当に

責めるのでは

なく、あくま



でもプレイの楽しみを増すためのものである事に違いありません。それらを使った公開可能なプレイフォトを撮って又、是非、お送りしたいと思っています。

尚、しばらく筆をとらなかつた妻が、また、縛り絵を描き出し、投稿したいような口ぶりですので一部を同封致します。

以前、だいが掲載していただいたておりますが、夫の私からみても更に上達しているように思えますが、どうでしょうか。よければ引続いてお送りしたいと思っていますので、御高評を与えてやって下さい。

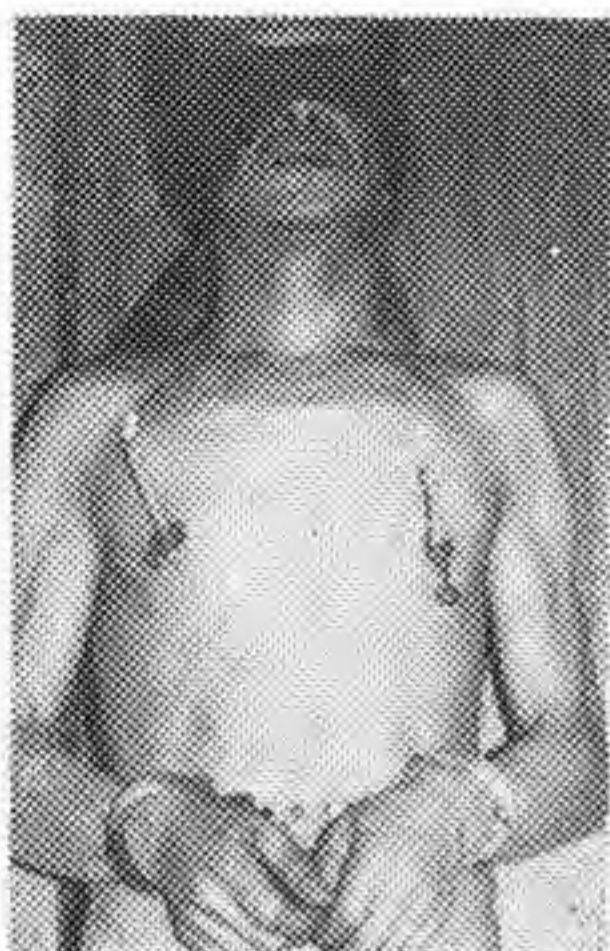


一八第七十二回

辻村 隆

「一寸一言」で大いに私の肩をもってくれた義憤生氏が、私に会うという目的だけのために、わざわざ上阪してこられ、一晚拙宅で泊られ、夜もすがらSM談義に談論風発し、時の経つのも忘れた。初めて会ったにもかかわらず、まるで十年の知己のように語り合えるのも同好のよしみであろうか。

彼が大学当時、始めて奇クを手



にして、もう二十年近くなるとか私のその時、その時の気持で書いたものを、全部分析し、辻村隆文庫を作られたという学者肌の方である。SMのプレイに対する私の観念が十数年来変わっていないということを、彼によって分析の結果価値づけられ、私自身驚いている次第である。好漢惜しむらくは自分の殻に閉じ籠るタイプの方であつたが、もう少し視野を広く持つて戴きたいと思うのである。

× × ×
自虐という言葉がピッタリ当て嵌まる様な人、M七〇生と先日何年振りかで出会った。ピアシングという不可解な趣味にとり憑かれ

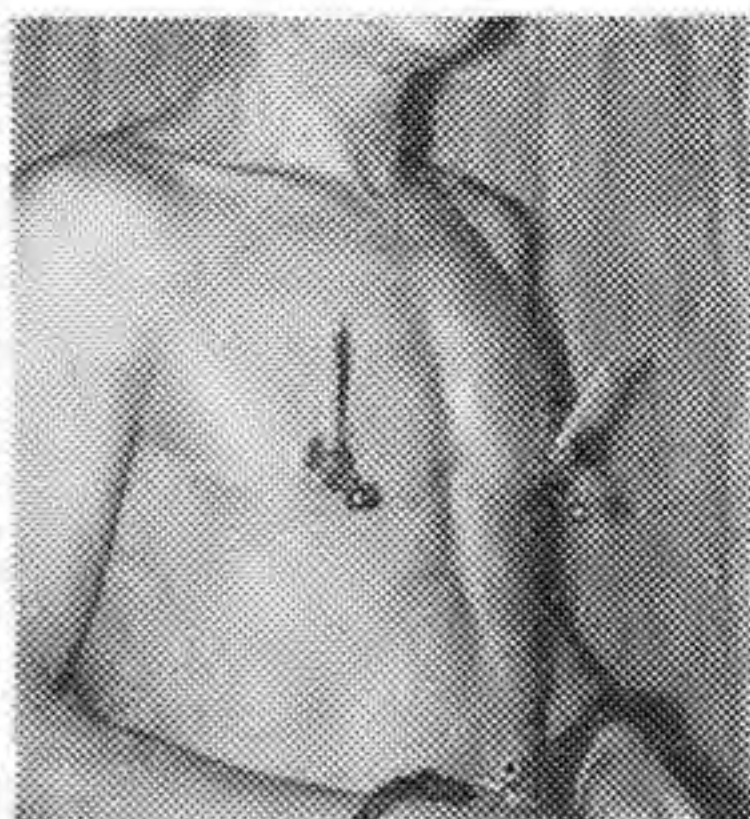
× × ×
執念のように乳首に穿孔を続け、遂にクリスマス用の小ローソクが乳首の穴に立つようになった。穴に鈴を通し、ローソクに火を点じた姿は不気味な倒錯の姿で、私自身に興味からすれば、こうした肉体への傷虐は余り好むところではないが、世の中にはこうした人もあるという実例である。折角の彼の御好意だから、その姿をフォートに納めたが、それ以上はどうしようもない。乳首が連日の玩弄で女性の経産婦のように大きくなり穿孔した辺りから血がにじみ出しているのをみれば、何ともいいようのない感慨にうたれた。

× × ×
M七〇生がクラシック音楽を愛し、ステレオの前で静かに過ごすマジメ人間だけに、どうしようもない内面的な業の深さに意外な感に打たれるのである。

× × ×
素晴らしい女性をハントしてもどうしても発表出来ない場合がある。知名度の高い女性、顔の売れすぎている人、結婚にさしさわることからと、どうしても応諾しない女性等々で、そうした女性のフォートも、もう十指に止まらない。先日、大阪の同好者の会社重役氏と一緒に撮った女性など、そのいい

× × ×
例だ。彼女は某有名化粧品チャームガールで、天性の素晴らしい美貌で、SMカメラ・ハントに錦上華を添えられるものと大いに胸を躍らせ、帰って早速ハント用のフォートをつくり、原稿も二十数枚書きかけたのに、会社重役氏より電話で待ったがかかり、いろいろと頼んでみたが、どうしても都合が悪いというので、諦めざるを得なかった。勿論、ハントされた女性はその行動が、プロでないから秘密の場合が殆どである。緊縛された姿や、プレイの赤裸々さを公表されたら困る場合がしばしばあるのは当然であろう。折角協力してくれた女性達を、ペン一本で不幸せにした時、それは私の責任に負うところが多いだけに、あとは野となれ式のカメラ・ハントは私には書けない。それはもうプライバシーの侵害以外の何ものでもないからである。女性をハントして撮ったら、必ず発表しているように思われ勝ちであるが、個人の意志を十分に尊重していることを知って頂きたかったまでである。

× × ×
書けないケースは、夫婦プレイの場合にも多い。夫婦プレイの行きつくところ、自分達二人だけの



結婚歴少なくとも十年以上は経過しているという夫婦に多い。

私が素顔でTVに出演して以来近所の賢夫人めいた人々がヒソヒソ陰口を交し、表の職業の私と、裏の趣味芸の私を混同して、毀誉褒貶ともである。

女性ハントのプレイヤーなんてケシカラヌ。

プレイではあきたらなくなり、同好の夫婦プレイヤーを求めての連絡が時々ある。その究極は交換プレイにまで進展して、私は傍観者のカメラマンとして、或いは私も亦、プレイヤーとしてその仲間に混って、めくるめく一夜を過ごすことがある。最近の洋画で、交換プレイを描いたものが登場したが奇妙な世の中に、なったものである。こうした夫婦で絶対にいえることは、夫婦仲が非常に良く、心の通いあった相互理解の前提の上に立っているということである。その是非は兎も角、夫婦プレイによって、又交換プレイによって、ともすればだれがちな日常の生活にカツを入れ、倦怠から救っていることは、紛れもない事実であった。それだけに若い夫婦は少なく

と、人間の原罪という点でどちらが罪深いだろうか。

中絶の許容といい、吾人のSMプレイの公開といい、これも移りかわる時世の流れである。いつか又、奇クの発行はおろか同好者も圧迫をうけると共に、中絶行為も亦罰せられる時代が来るかも知れない。そうやって貰いたくはないものだ。賢夫人の私への潜かな侮辱は己れの天に唾する行為では？——と、これはあなたがち私一人の思考でもなさそうである。

長い間鳴りを静めていた塚本鉄三氏が、一念発起して、カメラ・ルポを書き出し始めた。相当に志願してくるM女性を、さばき切れなくなり、私一人では到底無理だし、且つは分譲フォートを主として撮る、客員的の彼と、一匹狼の私との違いであろうか。ましてや私の場合、近頃、追々刹那のプレイの愉しみの方に走り出し、分譲フォート式のもの、つい撮るのが、わずらわしく、幾分非協力的なもの、箕田氏にとっては稍々不満であるのかも知れない。一対一でハント女性とプレイする時、すべての費用は私の個人負担であるとすればつい自分の思いの尽に走

る様になるのも又已むを得ない。面白いのは、同一女性を私と塚本氏とが別々に撮り、ハントした時、その受取る観念がかくも違うものかと一驚する時がある。その好例が、川路叢子さんである。彼の「片えくぼのマリア」を読んで、つくづくそう感じた。確かに彼女には愛らしい片えくぼがあった。私は羞恥に身悶える人妻として表現し、彼は華やいだ饒舌のM女性として書いていた。私に対する故ない懼れが、彼女を無口にし控え目にさせたのか、それとも塚本氏の場合には既に数度目のプレイが、彼女の心にゆとりと愉しみを与え、リラックスさせたのか、それは分からない。川路叢子さんは、時に応じ、すぐく貌変する人である。私が無意識のうちにそうした心理を捉え、「人妻の貌変」としたのは、全くピッタリの表現でもあった。その川路叢子さんから、昨日、便りをいただき、もう一度私と二人きりでプレイしたいとの切々たる願いが綴られてあった。私も今一度会ってみたい人である。一盗二婢の例え通り、人妻とのプレイ——。そこにはチョッピリ罪悪感めいた味わいがあるものである。

早起きの収穫

犬も歩けば~~~~~吉井作一郎

一週間程前の日の朝であった。何時もなら床の中でいびきの真最中の筈がどう間違えたのか、朝の散歩としゃれこんだのである。媒煙で汚れて汚れている東京の空気も、朝早く起きてみると、何んともなくすがすがしいから不思議である。長い堤防の上を体操の真似事などし乍ら歩いて行くと、下の方の水際近くに、何やら赤だの青だの、布切れらしいものが落ちていゝるのが見える。その時は別にさほど気にとめなかったが、何となく近づいて見てびっくり仰天、まさに「あっ、と驚く」何とかであった。それは、まがう方なき女性の柔肌に密着すべき、否密着していた筈のブラジャーであり、ネグリジェであり、そしてパンティであったのである。その他にも落ちていたのだが、判別出来なかった。とに角、これは一体どういうことなのか。多摩川べりで女性の生首が発見されたのはつい此の間のことである。まさかここで凶悪な犯罪があったのでは……。そう思ったら、散歩などという呑気な気持ち

は一ぺんに吹きとんでしまった。辺りをおっかなびっくり見廻してみたがそれらしい様子はない。改めて散乱する下着類の方を見ると、どうやらそれを入れてきたらしい茶色の紙袋を発見した。やれやれ、犯罪があったのではないらしい。安心して私は辺りに人気のないのを幸いに、まずはブラジャーを指先でつまみあげてみた。結婚するまでブラジャーとブラウスの區別が判らなかつた私であるが、その趣味がないからか、別段、何とも思わない。これがオッパイかくしか、位のものである。次いでパンティをつまんでひろげてみた。ピンクのパンティである。私が女性のパンティをつぶさに眺めたのは正直に云ってこれが二度目、最初は女房のものが物干台で青空にはためいているのを見たが、デカイなあと思っただけ。さて、見知らぬ女性の、それも色具合から若い女性のそれと推定されるものを眺めていると、門外漢である私も、何となく妙な気分

になってきた。そして変色した部分を見出すと尚のことであつた。可成り使用したものらしいが、洗濯したばかりと見えてよごれてはいなかったが、何となく匂いを嗅いでみた。残念乍ら、清潔な香り以外はさらになし。最後に白いネグリジェ（どうも舌のもつれそうな言葉である）をとり上げてみた。柔らかいふあつとした感触、オーバーをもつように腕にかけると何だか、しなやかな女性の胸を抱いているような気分である……と、こう書いてくる

と私は如何にも落着き払って、じっくり觀賞したように思われるかも知れないが、事實は急ぎに急いで点検を終えたのである。まかり間違えば下着泥棒にされ兼ねない。辺りに注意を払い、且つ何かを感じとろうとすることは楽なことではなかった。こそ泥か何かの心境と一致するのではないかと思つた位である。幸い人の来る様子はなかったが、私は紙袋を見つめ乍ら、この貴重な(?)ものを持って帰ろうかどうかで大いに迷つた。



イメージ画 『セマイ、オリロ、ハヤク』小川茂正

童女妻に望む

国川 栄一

拾っていくのだから罪にはならないだろう。まさか交番に届ける人もあるまい。しかし女房に見つかったら、それこそ一大事。品行

方正の人格が一ぺんに台なしになること受け合いである。そんな危険を犯す必要があるか。しかし、何となく、惜しい。のどから手が、たとえ金銭のみであっても、モデルである間は、SMの祭壇に登ったいけえに他ならない。この好ましい彼女によって、いろいろの雰囲気をもし出すハント記録を創り出してもらいたいものだ、私は切願する。好ましく得難いモデルは、何度も採用してほしいものである。しかも彼女は、まだ若すぎるくらい



イメージ画

『どうして欲しい?』

神戸・狂四郎

出る程欲しがる人もいることだ。

こんな機会は又とないではないか男は度胸だと、交ちくりんな意思の決断を下して、先ずは紙袋をと若く、今後の成長ぶりに対する期待は、極めて大きなものがある。規範という怪物が自然を奪い、現代の抑圧に狂わせられがちな日常において、倒錯趣味によってストレスを回避したいのは私だけではないと思うが、この童女は、その対象としてうってつけの要素を持つているように思う。

願わくば既婚の奈加子を、未婚の小池美喜に責めさせてもらいたい。さらに、川路叢子を配したハントは望めないものだろうか。境遇の違い、年令の相違、加えてM程度の個人差によって、予測出来ないような、ハプニング的プレイの展開が期待されそうな気がしてしかたがない。

だが、もしその組み合わせが可能だとして、被虐の対象は奈加子に限ってもらいたい。私の望みたところとは、あくまでも悶える奈加子であり、羞恥にまみれる彼女なのだ。マゾの陶酔を経験している責め手によって彼女を導いてやってほしいのである。

思った時であった。

突如として爆音が堤防の反対側から聞こえたと思ったら三人の青年が次々とオートバイに乗って姿を現わしたのである。ユニホーム姿は野球の練習と見えた。しかも彼等は、堤防を乗越ると私の前五十米ほどの所で單車を下りキャッチボールを始めた。やんめるかなである。

勿論、私は遂に一物も得ずして家に向かったのであるが、それにしてもわからないのは女性の心理である。川べりとは云え、さほど人目につかぬ場所ではない。花も恥じらう筈の若い女性がどうして捨てて行ったのか。街には、定期的に塵を処理する車が来るのである。意地の悪い見方をすれば拾わせんがために捨てたともとれる。しかし、お蔭で私は、好奇とスリルに富んだ、朝を体験したのであった。そして私には、下着趣味というものがさらにないことを再確認したのである。もし私が愛好家であったなら、迷うことなく頂載してきたであろうから……。

やはり私には、女性の緊縛美が一番である。奇くより贈られた川路叢子夫人の素晴らしいフォトに目を細める私である。

私のプレイ

佐野みさ子



私の「飼育」されたいと思うM的欲求は、月日がたつごとにつのるばかりで、どうすることも出来ません。先日、主人が仕事で三日間の出張のうちに、私はいけない事と思いつながら、一度プレイをした事のある中年の紳士に、再びお相手をお願いしました。

その紳士は、電気会社に勤める四十六才のお方です。高校生の子供さんがおられるとのこと、このような方となら、私も安心してプレイを楽しむ事が出来ます。

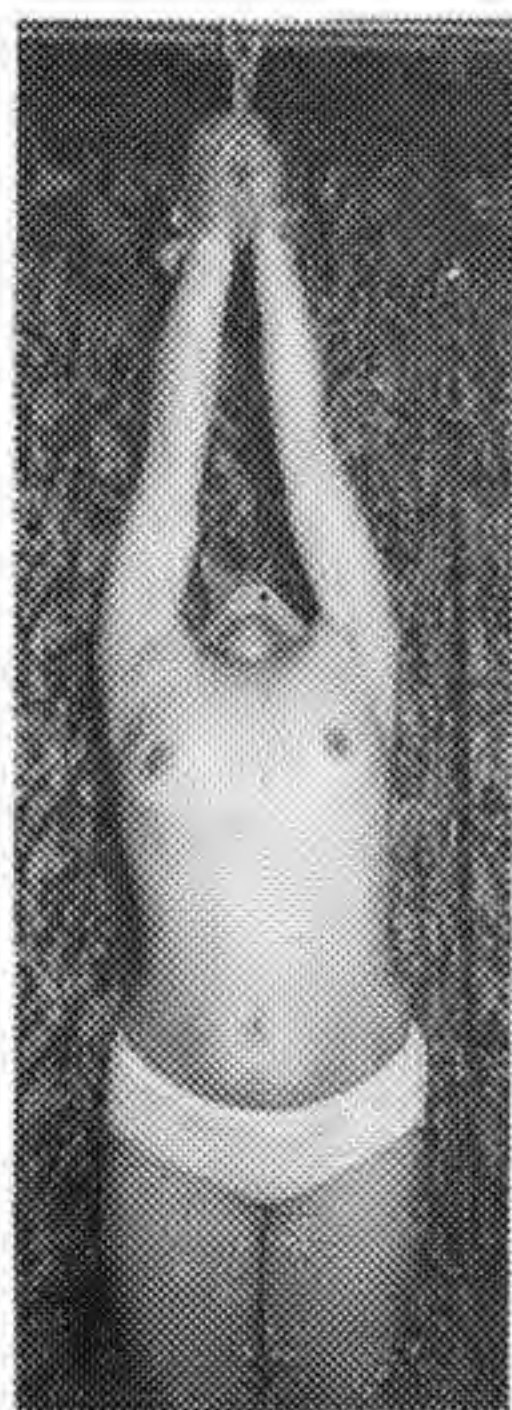
今度は私の主人も出張でいないことなので、箱根のホテルに一泊の予定で参りましたが、少し、がっかりしました。出来れば私は、岩場のかげかどこかで野外プレイをやりたいと思っていたからなのです。野外での縛り写真を写してもらいたかったのです。でもそれ

は、人出が多くてとうとう出来ませんでした。

そのかわり、ホテルで十六時間もの間、私は全裸か又はパンティ一枚の姿で飼育されました。

まず始めにお風呂でのプレイでした。ですが、残念な事にゆげのためにカメラのレンズがくもり、写真は写せませんでした。脱衣場でその方の手で全裸にされた私は用意してきたロープで後手にきつく縛られ浴場に入りました。そこで私は立ったままでの放水を強制されました。

その後には全身に石鹸をたっぷりぬられ、



へちまのたわしで丹念に洗われ、肌がひりひりするまでこすられました。彼は、ここで剃毛をといひ出しましたが、主人がある身です。ので、私は後手に縛られたまま正座して、何回も頼んで代りの屈辱奉仕で許していただきました。

さて、部屋にもどると、又すぐにナイロンパンツ一枚にされ、両手首を縛られてつま先がやっとつく位にして鴨居から吊るされました。そして皮ベルトによるムチ打です。乳房は女の急所でもあるので、プレイの前に「打たないで下さい」と頼んでおきましたからベルトのムチが当たる部分は皮下脂肪のたっぷりある腹部、それに太腿です。部屋は一応防音がしてありますし、テレビも音を大きくしてかけてありますから、少しばかり私が大声でひめいを上げてても安心だと思っています。私は苦痛をじっ

編集部だより

○二月号の読後感を寄せられた読者の方全員に川路叢子さんの緊縛フォートを贈呈するという事を四月号のこの欄に書いたところ、早速多数の読後感を寄せられ大いに参考になった。折り返し全員の方にフォートを贈呈すると共に一部を誌上に掲載した。

○引続いて六月号の読後感を寄せられた方にも、その内容長短に応じて編集部撮影の緊縛フォートを、三枚乃至二十枚を贈呈する。

モデルは左近麻里子、中河恵子、大塚啓子、川路叢子、関谷富佐子、佐々木真弓、長井葉津子、山原清子、一宮百合子、梨花悠紀子などの中から優秀な未発表作品を選び誌上に掲載した分については改めて原稿料をお支払いする。

○塚本鉄三氏のシーラー・ケニー嬢なる金髪女性をキャッチしたとの報に、急いでルポを書いて貰った。本誌上では始めての金髪碧眼女性の登場となった。氏は本職の仕事に支障のない限りピチピチとした新鮮な女性の緊縛ルポを寄稿したいと言っている。ので今後



とこらえているうちに、気が遠くなってくるのを感じ取る事が出来ました。その次に洋服ブラシが待っていて、胸、下腹部、内腿と、ムチの当たらなかった部分をブラシで責められてからプレイを一時中止して食堂に参りましたが、私はパンツ一枚の上にコートだけを着てつれていかれました。もし食堂で何かが起こり、コートを脱ぐような事になったらどうしようという思いが、胸をかすめました。もしパンツ一枚でお腹や太腿にかすかだけれどもムチのあとのついたこの体を見たら、多くの人は私が私刑を受けたと思うかも知れない……そんな事を考えながら食事をいたしました。

食後のプレイはソファの椅子を

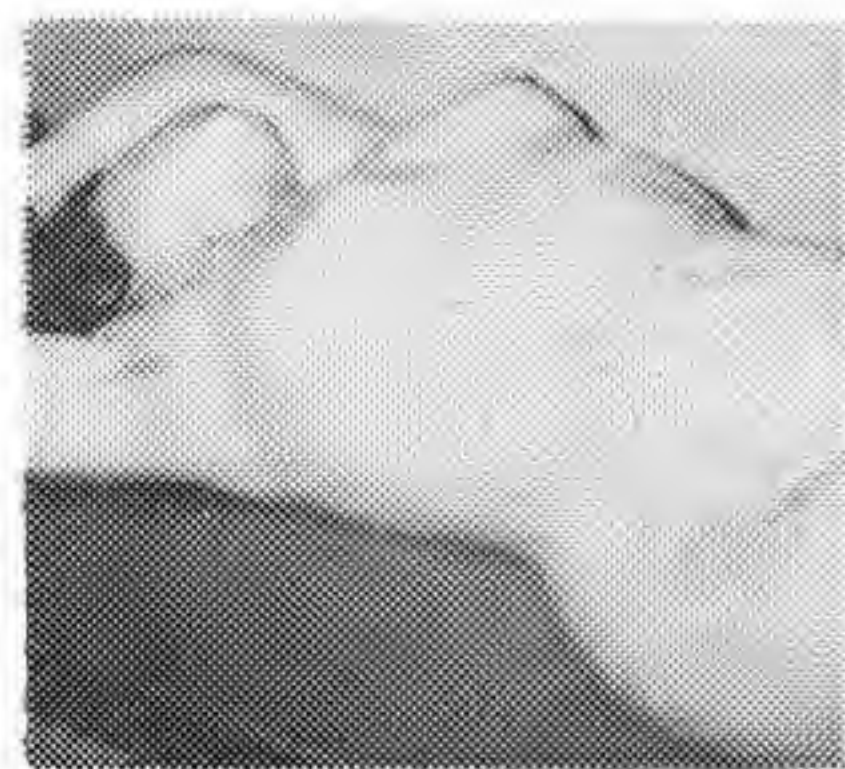
使ってやりました。両手を、やはり前と同じように鴨居から吊られ、身体だけはソファに乗っていましたが、両方の太腿を左右の肘かけに縛りつけられました。このポーズは、女にとって一番恥ずかしい姿で、しかも完全に無防備なのです。こ

こで私はパイプの洗礼を受け、遂に苦痛を覚えるまで責めつけられました。SMプレイもあまり度を越すとヤクザの私刑と同じように感じます。でも、それは今後の飼育いかんによって変わってくる事でしょう。

以上が、だいたいのプレイの様子ですが、このほかに用便責めや犬のように四つんばいで這い廻らされたりして、やっと解放されたのが夜中の一時頃でした。

私はふらふらになり、その場でのびてしまいました。しばらくして気がつくと、その方の横で全裸のままねかされておりました。

……
もしいつの日にか、主人が長期にわたり出張するような時があっ



たら、辻村先生、又は塚本さんのお相手をさせていただきたいものと思っております。体力的には自信がありますので、かなり無理な縛りプレイにも応じられると思います。どうぞ「みさ子」を、静子夫人のように飼育して下さい。これは夢物語になるかも知れませんが、山小屋に一週間位監禁されるといふ状態が望ましいのです。日に何時間かは外へ引き出される（もちろん裸で）……すなわち野外飼育をされるのです。何かと難クセをつけては体罰をくわえられ（その方法は相手の方におまかせして）……私は太陽の下で、Mのよろこびをたっぷり味わってみたいのです。

の活躍を大いに期待してほしい。
○小学館発行の「女性セブン」編集部から同誌に連載中の「なかにし・礼」作『花物語』の文中に本誌連載中の団鬼六作「花と蛇」を引用したいと諒解を求めてきた。早速、団氏に連絡したところ快諾された由返事があった。因みに四月八日号「女性セブン」の『花物語』には「花と蛇」そっくりの場面が展開しているから妙である。
○四月号で「私はどうして、こんな女に？」の懸賞「告白・手記・体験」入選作品を投じた渡部好美さんが本誌のモデルになりたいと志望してきた。辻村隆氏の出勤を依頼したので、いずれカメラ・ハントで紹介されることと思う。
○団鬼六作「花と蛇」の臨時増刊号の発行を望む声が高まりつつあるので決定版として豪華な特集を企画している。近々印刷に着手する予定なので次号には詳細発表するつもりである。
○依頼原稿については原稿と引換えに稿料をお支払いし投稿原稿については掲載誌発売と共に順次原稿料をお支払いしているが、宛先不詳で返戻になったり、住所不明で支払い不能の分もあるので未着の方は編集部宛御照会頂きたい。

奇クへの提案

左京和男

最近の奇クを読み、色々と考えた事です、以前マンネリ化を嘆く文が、よく掲載されましたが、私も七年ほど前から奇クに接して、それを強く感じ、初めて投稿させて頂きましたが、これは奇クの向上を望む読者の希望であり、それだけ奇クへの愛着を持っているからだと思っています。

古い奇クには、発展性と意外性があり、非常に興味がありませんが、このごろの物には、よくない意味でうまくまとまりすぎた感があり、創作の方においても、同じパターンを繰り返すだけで面白さが減ってきています。

普遍的な雑誌などと違って、範囲が非常に狭いのはよく分かりますが、しかし、グラビアを廃止し自粛を徹底すれば、平凡になるのも当然な事かもしれません。

ここで私の提案ですが、以前よく書かれていた誌上座談会だとか緊縛の種類、縛りの順序等をイラスト入りで解説をつけてもらえば参考に成り、楽しいと思います。それに、古い奇クの中にあつた非常に評判のよかった傑作小説な

ど、私達の知らない物も多いと思いますので再掲載していただくことは、出来ませんか。

十二月号の辻村氏のカメラ・ハント回顧も評判がよかったし、それに先日、M小説家畜人ヤプーが出版されています。この際、奇クも一度為されても、よいのではないでしょうか。しかし、長い物は実現が困難でしょうから、短い物からでもお願いします。

最後に一つ、奇クで最も人気のある、カメラ・ハントも長く続いておられますが、ここで辻村氏と反対の立場で書いてみてはどうでしょう。つまり、女性の執筆等によって、Mの立場で色々の人達に責められ、その写真を撮られて、フットと文を、辻村氏のカメラ・ハントと、同じように掲載されれば責められる過程と、その間の心理等が、面白いと思います。

勇気あるM女性がいましたら、是非書いてほしいものです。色々注文ばかりを書きました。が、これも奇クの発展を願う事です。

セクソロジーの位相

北沢耽可

こんにち、セックス・レヴオリューションの波が溜々とおし寄せてきているが、しかしながら、いまだ性観念を根底から覆えさせるまでには到っていないのである。

と謂うのは、すなわち、セックスが、ことさらアンチ・モラル的な暗いじめじめとした陰鬱なイデオロギック支配に桎梏され、したがって臭いものには蓋をするというタブー視されているのである。

むろん、このところ多くのセックスに関する諸出版物が、巷に氾濫はしているが、しかし、それらは依然として、鉄禍、発禁等の制約があり、また一般的概念においてもなにか異端的に取扱っているのが、なによりもっての証左である。こうした一般の社会的風潮はすなわち、とりも直さず性そのものを歪曲し異端視する、前近代的なアナクロニスティックな性観念に他ならないのである。

したがって、ラディカルな問題としては、すべてセックスに関する書籍を、ポルノグラフィイとして法的介入し、取締るところに基因があるのである。性というもの

は、もともと本質的に、そうしたいっさいの法的制圧を受ける対象ではなく、わいせつとか、風俗素乱というイデオロギー自体が、性の本質を歪曲し、却って性犯罪を誘発する弊害となる矮小な人間の誤った視点なのである。

したがって性を解剖し、真摯に究明化するセクソロジーが、やはりおなじように、社会的低位におかれ、色眼鏡でみられているのは慨歎に堪えない。むろん、SMも同様であるが、どうして性の極限を追求することがいけないのか、判断に苦しむものである。

巷間、性の無知や、あるいは性に悩めるひとが、いかに多くクリニクの門を敲きカウンセラーを受けているか。げにセックスは、人間の一生を支配する重要なエレメンタルティックである。

たとえば、性の和合なくして、円満な夫婦生活はあり得ないのである。セクソロジーや、SMに関する諸文献が、社会的地位を喚起し、普遍化させることが、いかに重要なことであるか、あえて提言するしだいである。



.....僕のイメージ画集.....

『日中の散歩』 室井亜砂路

奈加子後援会の夢想

乃 見 対 造

われらが童女のために後援会を発足させたい。現在は単に金縛りの童女妻奈加子だが、まだ十八才の若妻の身、十年も調教すればMの女神の誕生も夢ではない。有難いことには、彼女の頭脳も肉体もまだ教育されていない純白そのもので、理屈っぽい近頃の教養豊かな女共と異って調教次第によってMの世界に陶醉させることがで

きるのではないかと思う。しかもこの少女妻は現在援助が必要である。われわれマニヤは童女を救いたい。一人では問題があるからマニヤの組織を結合させ十人前後の人数で彼女の生活に充分な資金と加えて、彼女の将来のためにわずかでも貯金ができる程度の月々の会費を提供したいものだ。会の目的は耽美的なMの飼育調教

と、童女奈加子の後援である。会合は第一日曜と第二日曜と定め、原則として月二回以上の例会を開く。

奈加子の後援会への義務は、必ず月二回の会合に出席し、調教を受けることは当然であるが、それ以外に毎月一度、会員と自己のために血液検査を会の指示する医師によって受けねばならぬ。会員も相互の健康の為に二カ月に一度は同様の検査を受けるものとする。

本会の禁止事項は会長の承認なく新人を同行すること、奈加子の要求なくしてセックスに走ること、及び、奈加子との個人的交際を行なうことである。

現に一番の重要点である会合における調教についてだが、箇条書きにしてみる。

一、鞭打ち等はせず、羞恥責めを主体とする。
一、緊縛を主題とするが、傷が残らない程度とする。
一、奈加子が求めない限りセックスは禁止。万一奈加子が求めた際にも、会員の環視の中ではない限り禁止する。
一、衣類を痛めた場合には損害を負担のこと。この条件で着衣のままによる調教も可とする。

一、一カ月に一度、必ず会員の手によって体毛の手入れを行ない除却した毛髪は競売し奈加子の収入とする。

一、会の備品は、洗面器、尿瓶及び便器、ビニール大風呂敷、ガラス棒、種々の浣腸器、羽根毛筆、バナナ、卵、パイプ、カメラ、ハミリ、とする。

一、調教の第一の目的は奈加子の精神面の調教にあり、羞恥、従順、献身を知る女らしい女に成長させ、未だ発見されない女性の真の美しさをひき出すことにある。

一、最後に付け加えることは、この会員は金銭によってのみの集まりであるが遊びに脱することを許されず真意からのマニヤ後援会であるため、テストとして、その都度、M女奈加子の神酒、及び固型を食べなければならぬ。

以上、私の夢を述べたが、事実として奈加子の後援会の生まれることを私は待ちわびている。

関谷富佐子さんの撮影の助手に四十人近くの希望者が名乗り出たとか、私の夢も、まんざら、実現不可能でないと信ずるがいが。

短信往来

編集部及び

小山、大橋様へ

渡 辺 好 美

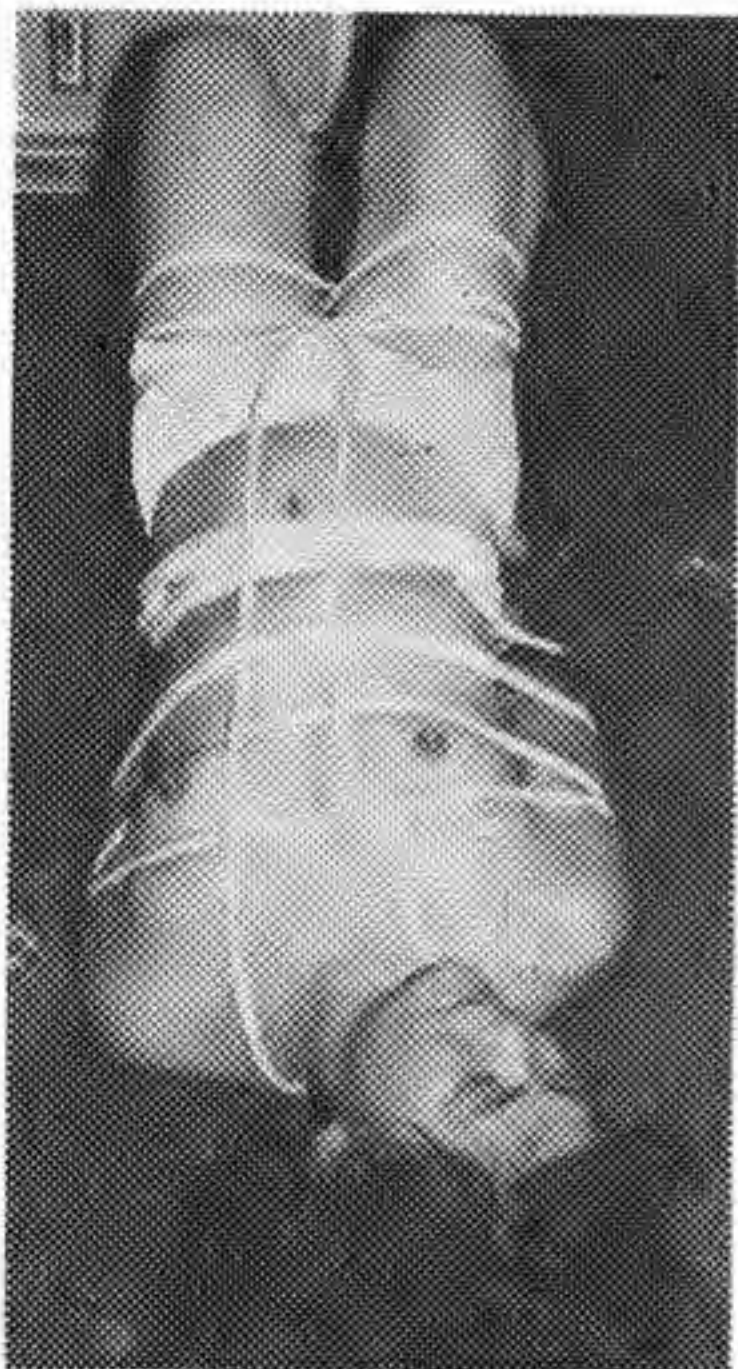
昨年十二月三十一日夜、NHKテレビの紅白歌合戦を見た後、除夜の鐘を聞きながら主人から責めを受け、その時、二十枚ばかり写真撮ってくれました。そうして年が明けたなら、奇クに告白文を書き送ることを約束させられたのでした。

でも、いざ文章を書くとなるとなかなか進みません。何しろ初めてのことなので、何回も書き直しているうちに日が過ぎてしまいました。主人は大変立腹し、十一日から三日間、毎夜苦しい責めを受けてしまいました。やっと出来たのがあの告白でございました。でも、私ごときものの書いたものが活字になるなんて、ゆめにも思っていないませんでしたのに、四月号を買って来た主人が「おい、写真入で出ているよ」と言ってみせてくれました時、全身の血が一度に下



って行く思いでした。とても、はずかしい思いで一ぱいでございます。

でもだんだん日がたつにつれ、奇クに対する信頼感が一段と深まりました。長い間、奇クを愛読して居りますが、あの時ほど、うれしく読ませて戴きましたことはご



ざいません。あらためて御礼申し上げます。

そして、次の二十五日。発売日です。主人の帰りを楽しみに待っていましたところ、主人も私の気持を解ってくれてか、いつもは遅い帰宅なのに、七時頃に帰って来て、五月号を見せてくれたのでした。

読者通信の中に、私に呼びかけて下さる文を発見した時には、ドキッとしました。大橋様、本当にありがとうございます御座居ました。これを機に、よろしくお友達になって下さいませ。小山様、貴女は、さぞ美しい方なのでしょうね。私より十もお若くそのうえ出来るだけ美しく見せる心がけていらっしゃる。私も出来るだけ、そうありたいと思います。でも、もう三十四

才にもなるといけません。それに、田舎者の私は主人を満足させてやれていないと思っています。



それゆえにも、責めだけは、心ゆくまで受けて居ります。

私はまだ、他人様から、責めを受けて居りませんが、出来ますならば、主人の目前で、着ているものを一枚一枚脱がせられ、ロープで縛められ、くすぐり責めや針責めを受けたいと思います。でも、ただ遊び半分の気持では後悔が先に立ち夫婦の間が、とりかえしのつかぬものになるような気がしてなりません。充分、夫婦の愛情を深め、一段と信頼を高め、よりよき人生を送るために、自然に二人

が求める欲求を確認した上でなければならぬと思います。

小山様、大変なまいきを申しましたがおゆるし下さい。それから、貴女は写真撮影も御主人からお受けになっておられますか。も

まだ見ぬ女王様へ

阿尾 仁才

私は、当年とって二十才になる一青年です。外見は他の若者と全然変わらず平気でエッチな事も話したりします。しかし夜一人でいると本当の私の姿になるのです。そして、この性癖は先天的なものだと思ふのです。

私が小学校三年のころ、女性が縛られて猿ぐつわをかまされている絵を見て、これが自分であったら、などと考えたものです。それから私の私は、母の腰紐や帯締めなどで自分の体を縛っては、なんとも言えない気持になったのを覚えています。

まだそのころは、私の性癖がマゾだということを知りませんでした。そして二十才になった現在でも、この性癖は続いております。ただ以前と変わったことは本誌によって慰められ、私のような者で

し貴女のフォトがありましたら私のと交換致しませんか。

大橋様、早速にでもご交際して戴きたく思いますが、何分にも東京と関西では、今すぐお逢いも出来ないと思いますので、文通など

も相手にしてくれる女性、いや本誌には「女王様」と書いてありますが、そういう方がいる事を知って望みを持ち、まだみぬ女王様に對しての奴隷としての奉仕を夢みています。

少し、私の理想とする女王様について書いてみますと、

- (1) 男を男とも思わないで日常いつも軽視している方。
- (2) 自分が、この世で一番美しい女性だと考えている方。
- (3) 気性の激しく、すぐに暴力をふるいたがる(男性に對して)方。

などです。でも、こんな女王様にお会いして、奉仕が出来るのはいつのことやら……。

しかし私は、女王様を見つけて事をあきらめません。町を歩いていて、ふと「あの方はS的性格で

で理解し合いたいと思います。でも、ひやかしゃ、面白半分のお交際はお互いにきつと傷を付け合うだけでしょうから、真面目なマニアの精神にのっとりてお願い致します。

「はいかしら？」と思われるような方に時々出会います。でも内気な私はどうすることも出来なく、勝手に、その女性の奴隷として調教される姿を思い浮かべているだけ。現実には奴隷として奉仕されてる先輩諸氏は、このような私にとっては大変うらやましい限りです。

私のような内気な性格(大勢でいるときは大変活発)の者は、女王様にお会い出来ないものでしょうか？ 町を歩いていて、女性が「ちよっと、あんた、あたしの奴

隷として奉仕してみない？」と声をかけてくれたら良いのに……なんて、いつも考えています。

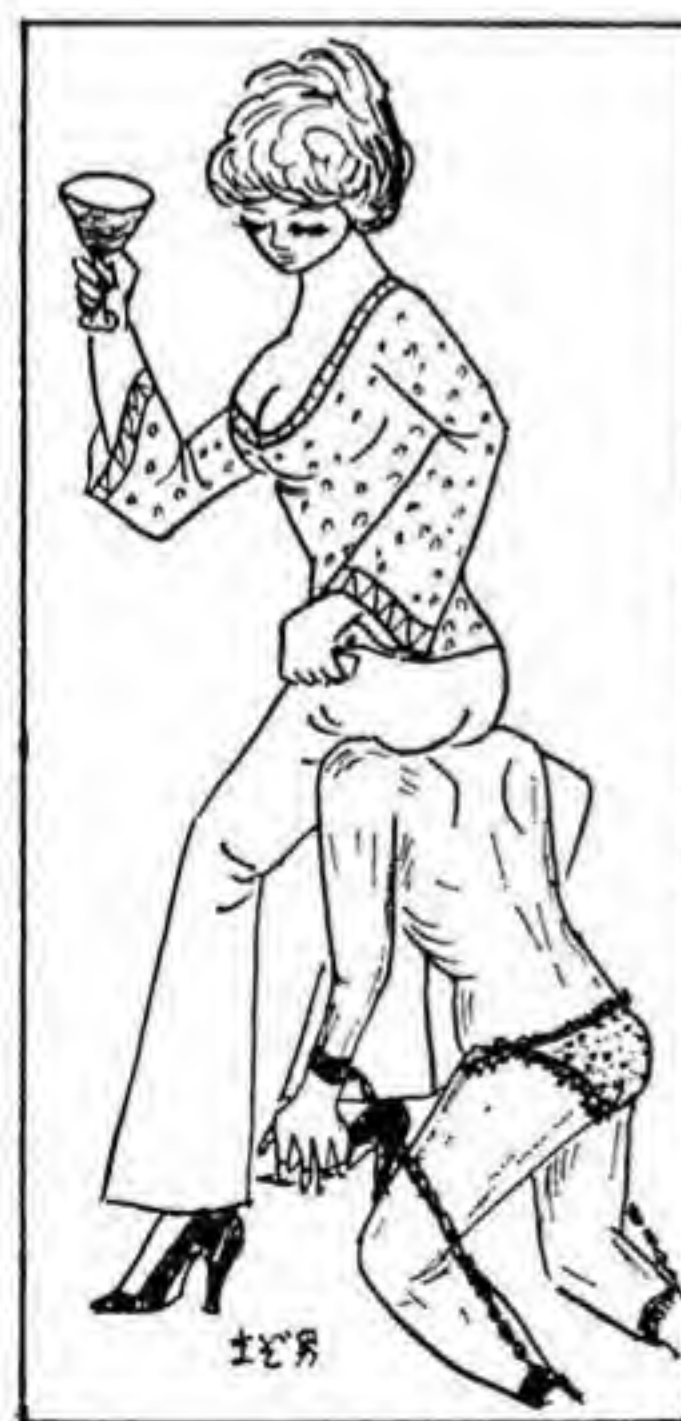
そうしてお互いに充分理解し合えた時、あなたと私のゆめを、こころおきなく現実のものにいたしましう。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

女王様、奴隷として活やく中の先輩諸氏。町で、背の高い、ロングヘヤーの私を見たら、ぜひ声をかけて下さい、お願い致します。このような内気な私は、先輩、女王様にこのようなお願いしか出来ないのです。

どうかこの青二才の私を一人前のM男にして下さい。

まだ見ぬ女王様、なにとぞよろしく。



「椅子」 まぞ男



自由詩

不死鳥に

あやかる

羽真比呂志

俺が奇クを見始めて十年だ。奇クも、その間いろいろに変わったが、人間の持つていたサドとマゾという特殊な世界を世間の非難を物ともせず

マニアのためにその世界を底深く緊縛女性の美しさをどこまでも追究してゆく勇気を讃え俺もマニアの一人として理解者さえあればSMの世界を研究したいそう願いながら

川路叢子の狂態に寄す・・・

松 風 高 志

「カメラ・ハント」は何時も楽しみにしているが、愛読者の女性がハントされる度に思うことは、被虐の願望止み難く、自らモデルを志願しただけあって、他のモデルの時と較べて、何処となくカメラハントの出来映えが違うということだ。

モデルは、美人であればそれにこしたことはないが、それよりもその女性のM気質の方が問題である。私は余り若い女性では、肝心のM気質が未だ充分に固まっていない様な気がする。他方モデル嬢であるから、いくらM気質が固つていても中年過ぎの女性では失格であろう。二月号の川路叢子と較べて三月号の佐倉絹子が見劣りするの、そのせいだと思ふ。

この意味で、川路叢子は大変良かった。太からず細からずの程よい肉付きの女盛りの美体は見応えがあった。辻村氏もさぞかし責め甲斐があったことだろうとお察しする。ハントの文面では、先生もやや、もて余し気味の様子であるが、真実は、御自身と叢子さんのみぞ知るということであろうか。ところで、女性の体は、処女の時と一児を分娩した後とが最も美しいと言われているが、本当の女盛りというのは、やはり、一児を分娩した後をいうのだと思う。川路叢子さんについていえば、やや崩れかけた体の線に、そこはかとなきお色気が感じ取られる。

彼女のエスカレーション振りには、目を眩らされた。脱ぐ迄に見せた叢子の羞恥心と、すべてを晒してから彼女の大胆さとの断層に驚かされたのだが、二十八才という彼女の年令、既に一児の母であり、ソーハ二回という性経験を考えると、彼女の狂態もかえって安定していて、見る者に不安を感じさせない堂々としたものを持っている。典型的な美人ではないが絵になるフェイス。年令から来る落着き、経産婦特有のやや垂れ気味の豊艶な乳房と張りのある腰、腹部の脂肪。こういった状況から川路叢子の裸身に安定感を感じたのは私一人ではあるまい。

二二四頁のフォートの腹部の厚みも、初産と、続く二回のソーハという経験を秘めた結果だと思つて見ると、かえって、迫力を感じて。トイレのポーズも、面白味があつてなかなか良いと思う。身体各所をくの字形に曲げて、縄目のためこれ以上はしゃがめないというところ迄の屈曲ポーズの、表と裏との対照は楽しい。このフォートの彼女のフェイスも艶があつてよかった。排泄、撮影、始末の連続を想像するだけでも楽しい。

写真もさることながら、辻村流の文章にも酔わされる。叢子が脱いで行く過程の描写も今迄のハントとは趣が違つて、また一入面白く読ませて頂いた。それに、極致ともいうべき、本格的失神という事態が発生したのは、カメラハントでは川路叢子が第一号ではあるまいか。SMカメラハントも、いよいよ本格化して来たというべきだろうか。あるいはM女性川路叢子の、すさまじいまでのM性の発露というべきか。辻村氏に迫る叢子の、迫力ある描写は素晴らしいの一語に尽きる。

写真について尚附言すれば、当初の予定で辻村氏がゲストだったのが幸か不幸か、縄が少ないのがかえって、新鮮味があつてよかつ

未だに果たせないが
創作に興味を持つ者として
いつの日にか
SMの世界の真の姿を
書いてみたい。
これが俺の今年の一番の夢だ。
世間じゃ何と云おうと
俺は奇クから離れることは出来
ない。

女性の美しさは緊縛姿だ。

俺の好きなのは全裸だ。

こんな俺の心をこよなく慰めて
くれるのは奇クだ。

こうした読者のいることを
マニアの友としての奇クは、よ
く知って頑張ってくれ。

どんな大きな困難があろうとも
それを乗り越えて

不死鳥のように長生きしてくれ
俺もマニアの一人として

出来るだけ奇クのため
協力することを誓う。

大空を飛ばたく不死鳥のように
奇クよ、いついつまでも

俺たちの目の前から

姿を消さないでくれ

遠い遠い空の彼方から
俺はそのことを祈っている。

限らない
願いをこめて、
切に――。

た。しかし、こういうM性の激し
い女性に対するに小型パイプ一丁
と縄二本というのは、辻村氏共々
誠に、残念。様々の小道具を駆使
して、川路叢子をのたうちまわら
せるカメラ・ハントであって欲し
かった。

<短歌>

艶 夢

星 美代子

もろ腕に骨きしむほど縄噛みて
ゆがみし乳房かすかに慄う

縛られし乳房交互に責められて

その後、四月号で、その一端が
実現されたらしいことを知ったが
尚も、川路叢子のカメラハントへ
の再登場を望み、併せて、彼女が
定着した緊縛モデルとなられるこ
とを願望する次第。体の線の美し
い間に撮りまくって、彼女の残り
しみ渡りゆく痺れぞ懐かし

縄受けてみじめなるらんわが裸
形とどめ置きたしレンズ通して

わが肌に激しく音せし鞭のあと
薄紅の色いとも美し

少ない青春の、名残りの記念塔と
すべきではなからうか。
ぜひとも、編集子の一考、及び
御本人川路叢子さんの御協力をお
願ひしたい。
オネガイシマース。……平身低
頭……。

昨夜見しテレビ女優の姿にもわ
が被縛態劣ると思わじ

悦虐に火照りし素肌に近々と唇
迫り来て夢は醒めけり

幻の縄目の痕をさぐりつつ、わ
が眼うらめどもはや還らじ



S・コレクション

『へ ビ と 花』

豪 城 二

縛り映画鑑賞

私の採点

岡田康彦

『女体断絶』

木俣堯喬

麻薬取引による仲間割れで、隠れ家に連れ込まれた人妻（相原香織）が、裏切った夫の代りに復讐されるという設定。

まず、ネグリジェ姿でベッドに縛りつけられ、はだけた胸元をいたぶられたうえ、コードを巻かれて電気責めにあうシーン。カット数も多く、最近、肥えすぎの感はあるが、相原香織の被虐演技はなかなかの見応え。

翌朝シーンでは、パンティ一枚の高手小手縛りで罵られる。

別の場面で、誘拐されてきた女が、ショー出演のための調教をされているが、パンティ一枚で犬の首輪をはめられ、鎖で引き廻されたり、鞭で打たれたり、皮鞭で首を締めたりされる責め場がある。

クライマックスシーンとして、黒白ショーやサディズムショーをカラーで見せているが、縛りはない。しかし、サディスティックな

雰囲気、相当に迫力を感じ、この種の映画としては上の部といえると思う。（八十点）

『性の解放』

小川欽也

インドネシア人の叔父の莫大な遺産相続をした男（日本人）が帰国して、嫁捜しに幼な友達を訪ねて歩くオハナシ。

この中で温泉町のSMショーの若夫婦が出てくる。パンティ一枚で、前手錠、首には犬の首輪、鎖で曳かれながらの鞭打ち、サディスティックなSEXシーンなどが展開されるが、仲々のもの。

さらに、表向き洋装店のマダムで、コールガール組織のボス役の白川和子がヤクザに捕まり、タップリと時間をかけて着衣を剥がれた上、パンティだけで後手に縛られて罵られたり犯されたりするシーンがある。（七十点）

『濡れた痴図』

武田有生

人妻役の大月麗子が、不倫の現場を夫に見見されて長襦袢をむしり取られ、バンドで鞭打たれるのだが、かなり長いシーンにもかかわらず縛りはなく、ただやたらと鞭打つのみで、情緒も色気も感じられない。もう一工夫も二工夫も欲しいところと思う。（五十点）

『痴漢の復讐』

武田有生



『可愛い女』 志羽利也

セムシ男が、次から次へと女を襲い、殺したうえで犯してゆくハナシだが、女が物置小屋に連れ込まれてベッドに縛りつけられ（着衣のまま）たり、後手に縛られて犯されそうになったり、とお膳立が揃っているワリにはつまらない映画である。往年の一連のSM名場面？ や最近の「女が鞭……」等を描き出した同演出者の作品とはとても思えない。（六十点）

『肉のしたたり』

早坂 紘

富豪一族の遺産相続をめぐる色模様のハナシ。

長男の婚約者（真湖道代）がドライブ途中で暴漢に襲われて、車中や林の中などで争いながら、次

々と衣服を脱がされ、ついに犯されてしまう。その後、林の中に全裸で、胸、足などガンジガラメに縛り上げられ、後手で猿ぐつわを立木諸共にかけられた上、その長男に対する脅迫状を下腹部に貼りつけられる場面が面白かった。

『女子寮情痴図』

ホステス寮に繰り上げられる色模様で、女子大生ホステス（辰巳典子）が中年男とSM遊びをし、ネグリジェ姿で手足をまとめて縛られ、ナイフでつつかれたり、たばこの火で焼かれたりするが、馴合

神酒拝受の図

M・A・M生

五、六年前のある風俗誌に、いまの写真的な構図だ。

床にすわった男の横に貴婦人ふちの女性が立ち、手にしたツボを男の口につきつけている。なにかを無理にのませている。

「夜の用事のための奴隷、マゾヒスト好みの写真集から。ドイツ、ヒルシュフェルト性科学博物館所蔵」

というタイトルから推理するとこれは、まさしく、ネクタール拝受の図とうけとれる。しかし、それは、その前のシーンがなければ、裏付けがなく、文

献としての価値は低い。

ところが、近刊の月刊誌「A」の「現代女性放尿論」の文中に、

ああ、この直前のシーン、すなわち、同一人物が床にねそべり、その男に相対して、女性がツボにまがり放尿中。

五年をへだてて手に入れた二枚のフォトを対比すると、ピタリ。つまり第一景で、ツボに放尿した女性がそれを男にのませるといふ、活人画ができあがったのだ。文献というものは、こういうものののだが、こうして関連のない公刊誌から採った絵画が、ふたたびめぐり会うのは、興味深いものだと思う。



私の夢想
『暴力看護』 東京 赤ちゃん

いのプレイまる出しで迫力なし。

映画の筋としては、それでいいのだろうが、やはり縛りシーンは緊迫感のある演出がほしい。他に林美樹、美也かほる等が出演している。(六十点)

「血まみれの犯行」 木俣堯喬 脱走死刑囚に、人質として山小屋に連れ込まれた運転手、女車掌

前田カオル嬢に……

含羞の蕾

城崎狂介

二つの山が接しあい
一つの線となったところに
かわゆく可憐な
含羞をたたえた花蕾一輪

わずかに慄える可憐な蕾よ
何を語りかけるのか？
わたしの眼に止まった以上
いかに鳴咽の声を挙げて
石けんの溶液をあげたい。

○
ほの白い軟地山の下には
にぶく光るビニール海
溢れ落ちた溶液の点滴が
その海にゆるやかに拡がり

他が痛めつけられるハナシ。

芦川絵理が、着衣強奪されて縄鞭でシバキ上げられ、全裸で、天井から垂らした縄を首に巻かれ、絞首刑にされそうになる。死刑囚には長岡丈二が扮しており、例のオーバーな演技で熱演。他には緑喬子、里見雪江等。(七十点)

冷たいガラスの光がまたたく

○
わずかに慄える可憐な蕾よ
ガラスを恐れることはない
溶液はおまえの肥料なのだ
シリンダーはその肥料を送る
みな、おまえの為のものだ

○
淡紅色に潤んだ可憐な蕾よ
溶液がおまえに艶をあたえた
すぐに開花するだろう
みよ両側にそびえる軟地山が
おまえを祝してうねり始めた

○
わずかに息づく可憐な蕾よ
石けん液は甘いだろうか？
開花の刻と悟っただろうか？
その息づきはまだ欲しい？
いいとも、たっぷりやろう
ガラスの嘴を通して……

〔秘蔵版特選SM資料〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

入墨女賊仰向け木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よひV

全裸入墨女賊拷問折檻

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よせV

女賊答打ち白洲糾問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よゆV

入墨女賊ハリツケ拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よめV

入墨女賊海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よすV

入墨女賊全裸四這い木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よもV

入墨女賊逆さ吊り仕置

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よきV

女賊全裸大の字磔処刑

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よさV

女囚拷問木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もとV

女囚石抱き算盤責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もへV

美人女囚海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もにV

白洲女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もちV

美人女囚答打ち折檻

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もほV

女囚開股羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もぬV

美貌女囚土壇で胴斬り

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もりV

艶美女囚白洲に悶える

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もはV

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なのV

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なむV

女奴隷を弄ぶ二人の女

大手札八枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△きあV

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚・東浦 略号△きすV

灼熱の蠟燭責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚・東浦 略号△きせV

豊満な乳房を責める女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きそV

女奴隷を飼育する美女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きてV

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きとV

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚・東浦 略号△きなV

可憐な牝犬の調教

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めあV

足舐めをたのしむマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めくV

足舐めを強要されたマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めゆV

足舐め訓練を受ける牝犬

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めやV

愛玩用牝犬の生態

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めえV

足首縛りの表情美

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あひV

美しき足首の縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あはV

素足を縛られる快味

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あふV

生ゴムの猿ぐつわに喘ぐ

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△むこV

股間縛り恍惚境場面

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△るねV

鼻責めいたふられ集

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号△るえV

首縄股間膝頭縛り

大手札五枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るそV

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△はねV

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原清子外一名 略号△はたV

乳房責め五態

大手札五枚一組 六〇〇円
山原 清子 略号△てらV

全裸女麻縄強烈縛り

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号△いねV

刺青裸女を踏みにじる

大手札八枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△いつV

洋髪全裸刺青強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いこV

可憐島田鬘全裸縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いみV

黒フンドシ高手小手縛り

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原 清子 略号△ひろV

刺青女体エビ責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほかV

文身女体股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほきV

九月号のカメラ・ハント「飼育の愉しみ」で始めて登場した小池

九月号のカメラ・ハント「飼育の愉しみ」で始めて登場した小池美喜と十一月号のカメラ・ハント「悦虐の昼と夜」で初登場した松山真樹子の二人の美女の写真をマニアの方々に紹介します。十二月号のカメラ・ハントでは小池美喜、の華麗なる戯れ、松山真樹子二嬢のピチピチとした肢体の躍動を描写しています。

△二嬢の連縛▽

大手札三枚組 四〇〇円
小池・松山二嬢 略号△とそV
雪の如き白さの柔肌を誇るマキ

大手札三枚一組 四〇〇円
小池・松山二嬢 略号△とそV
雪の如き白さの柔肌を誇るマキ
と若鮎の肢体に小麦色の肌のミキ
と対照的な二人の美女を後手に縛
り上げたマニア好みの資料。

大手札三枚一組 四〇〇円
小池・松山二嬢 略号△とれ▽
若さの溢れたムチムチとした全

大手札三枚一組 四〇〇円
小池・松山二嬢 略号△とれ▽
裸の肌を惜しげもなく晒して二人
の美女が、それぞれ個性的な美し
い肢体を緊縛にゆだねている。

大手札三枚一組 四〇〇円
松山真樹子 略号△とわ▽
ぽちやぽちやとした真白の柔肌

大手札三枚一組 四〇〇円
松山真樹子 略号△とわ▽
ぽちやぽちやとした真白い柔肌
は皮下脂肪がいかに多そうで縛
り上げた縄が二の腕に喰い込
んで埋没してしまひそうである。

大手札三枚一組
四〇〇円
松山真樹子 略号△とら▽
高々と後手に縛り上げられ無抵抗

大手札三枚一組 四〇〇円
 松山真樹子 略号△とら▽
 高々と後手に縛り上げられ無抵抗のまゝ全裸の肌をさらしたマキはその無防備感だけで異常なまでの昂奮を味ったと告白している。

大手札三枚一組 四〇〇円
松山真樹子 略号△とゆ
咲き誇ったバラの花のような華

大手札三枚一組 四〇〇円
 松山真樹子 略号△とゆ▽
 咲き誇ったバラの花のような華
 やかなマキの肢体は、縹の洗礼を受
 けて一段と美しさを増し、微細な肌
 の皺に至るまで鮮鋭に描出する。

大手札三枚一組 四〇〇円
松山真樹子 略号△とえ▽
みじくも辻村氏が言った真樹

大手札三枚一組 四〇〇円
 松山真樹子 略号△とえ▽
 いみじくも辻村氏が言った真樹
 子のポーカーフュイスが全裸に緊
 縛という非常状態に至っても、そ
 のまま平静を保てるだらうか。

SとMの甘い一瞬
大手札三枚一組 四〇〇円

SとMの甘い一瞬

繩に通う愛情の焰

縄に通う愛情の焰
大手札三枚一組 四〇〇円

かたがた、男に縛られたときは、もうでもな
た途端、マキの表情には極めて美
しい被虐の表情が現れた。

男性が縛ったときはそうでもな
かったのに縛る相手がミキになっ
た途端、マキの表情には極めて美
しい被虐の表情が現れた。

△美女レスボス風景▽

抱擁する美女二人

大手札三枚組
小池・松山二
路号四〇〇円
△とや▽

ボ二
ス人の全小大
の美美裸池手
しい女肢・札
ム互晒山三
ドにて嬢一
を相誰略四
を擁は号〇
高してば〇
にレからや
まスぬ円
で

盛り上げているのは楽しい。

盛り上げてゐるのは楽しい。

柔肌と柔肌の狂態

大手札三枚一組 四〇〇円
小池・松山二嬢 略号△とよ▽

二人とも極めて若々しい白肌と小麦色肌をびったりと寄せ合って

二人とも極めて若々しい白肌と小麦色肌をびったりと寄せ合つて手と足をからめ躍動する若鹿のような肢体はまことに素晴らしい。

大手札三枚一組 四〇〇円

大手札三枚一組 四〇〇円
小池・松山二嬢 路号八となV
カメラハントで紹介されたマキ
とミキは相思相愛の純粹な間柄で

た全裸の二人の狂態を描く。

あるか、カヲヲを前にして燃え上った全裸の二人の狂態を描く。

△塚本鉄三▽

狂乱の一夜の記録

十一月号で塚本氏が久方ぶりに

十一月号で塚本氏が久方ぶりにマゾの女王関谷富佐さんを責めた記事を『狂乱の一夜』と題して掲載したところ大変な評判で、その

鞭に狂う悦虐表情
大手札三枚一組 四〇〇円

こに凄い場面だけ抽出しました。

鞭に狂う悦虐表情

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号△らてV

全裸で後手に緊縛された女体の
臀部を力一杯鞭打てば自由にされ
てゐる両脚をばたつかせて悦虐を

狂う顔と肢体の表情の美しさ。

うねる鞭打ち肢体

定評のある彼女の表情はマゾの

に依つて絶妙の肢体を開陳する。

足吊りの被虐肢体

足吊りの被虐肢体

大手札三枚 一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号△らえV

両足を逆さに吊って臀部を眼前

と西して、さあつでも鞭打つて

下さいという被虐ポーズに炸裂す

美しきマゾの境地

関谷富佐子
略号△らせV

大谷富佐子 一巻
 関谷富佐子 略号△らせV
 後手に縛られた全裸のまままで前
 屈みに突出した尻を乱打された鞭
 打ち好みのマゾ女性はい髪ふり乱

〔申込先〕ここに発表した分譲写

真(申込先)ここに発表した分譲写
 鮮明な直接印刷紙に焼付けた極
 は大阪市の倍野局私書箱第14号天

〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号(むら) 五〇〇円

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号(あけ) 四〇〇円

猪吊り三態

梨花悠紀子 略号(いの) 四〇〇円

責め衣縛り

大手札三枚一組 略号(せめ) 四〇〇円

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号(ねむ) 四〇〇円

後手首の高縛り

玉田美佐子 略号(ねへ) 四〇〇円

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号(ねと) 四〇〇円

全裸脚挙げ縛り

長野 良子 略号(てい) 四〇〇円

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 略号(てへ) 四〇〇円

全裸屈伸縛り

長野 良子 略号(てほ) 四〇〇円

強烈エビ責め

松本アサ子 略号(まと) 四〇〇円

吊り打ち

大手札三枚一組 略号(やり) 四〇〇円

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 略号(ぬこ) 四〇〇円

踊り子緊縛

絹川 文子 略号(りこ) 四〇〇円

月経帯のまま縛り

遠藤百合子 略号(ゆす) 四〇〇円

縄目に悶える夫人

関谷富佐子 略号(ほく) 四〇〇円

髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号(ほむ) 四〇〇円

膨満正面縛り

長野 良子 略号(へな) 四〇〇円

マニヤ全裸緊縛フォト

栗本ミチ子 略号(いな) 四〇〇円

強烈エビ縛り

関谷富佐子 略号(もい) 四〇〇円

乳房責めの苦悶

関谷富佐子 略号(もろ) 三〇〇円

全裸ムチ打ち

関谷富佐子 略号(もた) 五〇〇円

強打に泣く裸身

関谷富佐子 略号(むち) 五〇〇円

裸身の晒し

大手札三枚一組 略号(わあ) 四〇〇円

全裸股間縛

関谷富佐子 略号(せら) 五〇〇円

双胸の強調縛り

長野 良子 略号(そう) 四〇〇円

動感海老責地獄

大手札三枚一組 略号(とう) 四〇〇円

色禪の開股縛り

長野 良子 略号(いふ) 四〇〇円

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 略号(はす) 四〇〇円

乳房しばり

長野 良子 略号(うは) 四〇〇円

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組 略号(うい) 六〇〇円

木馬責三態

大手札三枚一組 略号(もく) 四〇〇円

椅子責めの果て

大手札二枚一組 略号(いす) 四〇〇円

檻に入れられた女

山原 清子 略号(もの) 四〇〇円

浴室の全裸刺青

山原 清子 略号(よな) 六〇〇円

鼻いじめ三態

山原 清子 略号(はね) 四〇〇円

鼻責め万華鏡

山原・鈴木 略号(はた) 一二〇〇円

碧玉裸身緊縛

刑部 典子 略号(のん) 四〇〇円

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 略号(きす) 四〇〇円

灼熱の蠟燭責め

大手札四枚一組 略号(きせ) 五〇〇円

豊満な乳房を責める

大塚・東浦 略号(きそ) 七〇〇円

女奴隷を飼育する

大塚・東浦 略号(きて) 七〇〇円

凌辱されるマソ女

大塚・東浦 略号(きと) 七〇〇円

鼻責め悦楽

大塚・東浦 略号(きな) 三〇〇円

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 略号(なの) 四〇〇円

猿ぐつわにあえぐ裸女

東浦ひかる 略号(なむ) 四〇〇円

全裸の緊縛姿態開陳

遠藤百合子 略号(ゆり) 五〇〇円

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(へか)

浣腸される清子

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(かる)

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 一三〇〇円
山原 清子 略号(かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 一二〇〇円
山原 清子 略号(かに)

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けか)

オシメと下着着脱

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(けひ)

イルリガートル

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原・東浦 略号(かも)

オシメの中へ排便

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けま)

浣腸後カパー装着

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(けさ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(のけ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かね)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かて)

シリントールにて浣腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かち)

アィヌス浣腸補助

大手札四枚一組 七〇〇円
山原・東浦 略号(かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 五〇〇円
山原 清子 略号(うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 五〇〇円
山原 清子 略号(うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬか)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ると)



奇ク最大のファンであると自負している十数年来の愛読者です。たのしみに毎号拝読していて、とても自分の気に入っています。第一、二十年以上も継続して出ていることに絶大な安心感と信頼感を持っています。この種の雑誌は失礼ですが、出たかと思うと、すぐ消えてなくなるものが多い中で、よくぞここまで続いたものだ、と、感心している次第です。細く長くいつまでも奇クの世界を離れないつもりです。モデルのフォトも回を重ねる毎に逐次沢山集ってきて

とても楽しみます。先日の中河恵子さんの立像フォト、とても気に入りました。わくわくする思いで倦かず眺めたものです。

(埼玉・大川容)

ふとしたことから貴誌を知り、以来十年近くも秘かに愛読し続けている四十才の平凡なサラリーマンです。読む雑誌として最近ますます充実してきたことは、まことに嬉しく思います。一月号からの連載「地獄ホテル」が、強烈に印象に残りました。最近、私は夜な夜な、その作品をヒントに次のような妄想にふけり始め、自分でも驚くほどの非現実的な想像にヒヤッとするほどです。「OLや人妻あるいは未亡人を全裸にして生ゴム製のブラジャーとパンティだけを付けさせ、レザー張りのベッドに手足を皮ベルトで固定し、ごくやわらかい特製の鳥の羽根で彼女の全身あますところなく、くすぐり、続いてパイプ責め、それにあきると、こんどは私自身が考案した自動浣腸器なるものでグリセリン浣腸、高圧浣腸責め、再びクスグリ責め、パイプ責めと何度も繰り返すうちに、彼女は狂わんばかりに身もだえ、ついには完全に失

神してしまいます。そして彼女に気つけ薬をあたえ、ホッと我に返ったところで、こんどは逆転劇です。私が裸にされ、いま彼女に似たような事をされます。ああ、すばらしいSMプレイの極致」私はプレイの経験こそありませんがこの妄想でもわかりますように、概して私はSMの性向のほか、ゴムマニヤの傾向もあります。私は妻ある身ですが、妻はこれらの行為には全く興味を示さず、従ってプレイもできず、一人で右のような妄想にふけるだけです。もしも近県に在住の女性で、この孤独な中年の男のお相手をして下さる方がございましたら、お呼びかけ下さい。

(埼玉・佐村次郎)

4月号の佐野みさ子様。ぜひ私とプレイをしてみませんか。私の飼っている小鳥は大変、人になつておりますので、貴女を裸にした上に餌を撒き、小鳥につつかせます。小鳥は餌と一しよに貴女の体をつつきまします。また、床に細い竹を五本ぐらい並べ、その上に貴女を寝かせ、ゴロゴロと芋虫のようにながせまします。更に今度は玉ネギを目のところに持って行き、涙がかけれるまで動作します。これは

肌を痛めない一例ですが、まだまだ沢山のアイデアや道具など用意しています。お便りおねがいします。

(横浜市・竹田正一)

私は本誌を愛読してから、かれこれ十余年。今回、始めてお便りいたしました。私は当年二十八才独身の安サラリーマンです。生来のSを因果と考え、一人、悩んできました。しかし、本誌を愛読するようになり私のような傾向の人が数多くいるということを知り、心強くなりました。私は、かねがねSMプレイを空想していますが未だにその機会に恵まれませんでしたが。ところが4月号で前田カオル様を知り、ぜひ緊縛フォトのモデルをお願いしたいと思っています。貴女を後手に縛り上げ、乳房に縄を廻して絞り上げ、後手と逆めて両足と一つに縛り合わせ、逆海老責めとは如何でしょうか。また貴女はローソク責め鞭打等も好まれるとのことですが、これらを併用したプレイで貴女を満足させることができるでしょう。

(東京・森井近治)

偶然、本誌を読んで以来、大変興味を覚え、毎月、購入しており

ます。四月号より本格的ストーリーに入った「まさひすむす・てらぶていくす」は非常に興味ある文章です。今後のストーリーの展開が楽しみです。「ある混浴場」は私にも類似した経験があり、非常に面白く、読ませて頂きました。その他では「花と蛇」「大噴火」も女性の極限の羞恥の状態を巧妙に描き出している点で非常におもしろいです。それから「地獄ホテル」が休載だったのは残念！SMに関するお互いの体験談を交換いたしませんか。全国の甘美なるSMを理解される女性の方、お待ちしております。

(札幌・安部収二)

東京の未知男様、4月号のお便りありがとうございました。私も夫婦のことについて御関心をいただき光栄に存じます。私の

〇 御送金についてのお願ひ

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、振替等の方法もあります。ご利用下さいます。従来、便宜上受付けておりましたが、都合により「切手代用」はお断り致します。

妻は、縛りや軽い鞭打をともなう羞恥責めにM性の喜びを感じるようです。貴方さえよかったら、機会を作りますから、貴方と一緒に妻をモデルにして縛りを実演したいと思っています。そして行く行くは夫婦合意の上で、交換という華麗なプレイを共々追求していきたいと思っています。今後とも御自愛のうえ、奥様をMに飼育していくよう御健闘を祈ります。

(東京・氷川理太郎)

佐野みさ子様へ。始めてお手紙さしあげる無礼をお許し下さい。

四月号にとりあげられた貴女のプレイの呼びかけを拝見いたしました。今まで、急いで筆をとりました。今まではプレイをしてみたいと思いつつも、年の若いせいかわりに、機会に恵まれません。私はS傾向の二十一才の学生です。プライバシーを固く守る人で、若い者でもかまわないとの由、勇気を出して書いてみました。私のように若い者は貴女から警戒されてしまうのが当然でしょうね。けれど本誌の愛読者として、礼儀は心得ているつもりです。掲載された貴女の写真を拝見いたしておりますと、私は胸が熱くなるような思いです。貴

女の豊かな肌にロープをキリキリと巻いて開股の恥かしい思いをさせてやろうか、それとも……などと一人で空想してしまいます。私の最も好むのは羞恥責めで、貴女の裸身を羞恥と怖れで、うちふるえさせてみたいのです。また辻村氏のカメラハントから得たヒントを応用してみたいとも思っています。プレイの経験はないとしても写真の方は相当、キャリアもありきと貴女に満足していただける

のではないかと、自負しております。どうぞ御応答下さい。

(神奈川・青木正一)

△飼育の愉しみ▽小池美喜嬢分譲写真

本誌九月号のSMカメラハント紹介された純情可憐な小池美喜嬢での緊縛姿態を好事家に限りごらんにいれます。女優とかヌードダンサーにない素人じみた初々しさを彼女の中から見つけて下さい。

全裸正面の縄掛け

大手札三枚一組 四〇〇円
小池美喜 略号ハれるV

羞らうを含んだ幼い膨らみに情容赦なく縄目が喰い込んで素肌がわなわなとふるえている。

柔肌の高手小手縛

大手札三枚一組 四〇〇円
小池美喜 略号ハれるV

鈴川露子様。若さに溢れる貴女の通信に感動しました。ああ、貴女をハントしたい。暖かい爽やかなある日、私達二人は郊外へと車を走らせました。座席の振動に身を任せている貴女は超ミニのため大腿部が全部、見えていて、とても可愛らしいグラマーな足を持った、

後手首を縛られて

大手札三枚一組 四〇〇円
小池美喜 略号ハれるV

瑞々しい全裸の肌を借しげもなく晒らして柔軟な後手首を背後で背負った少女のあどけなき表情。

飼育された美少女

大手札一組 四〇〇円
小池美喜 略号ハれるV

自分の裸身を縛られるという好奇心がいつとはない興味に変化してきた美喜嬢の縛られ姿態。

お嬢さんです。健康そうな頬が心持、上気したように見えるのは、初めてのプレイに私同様、胸をはずませているからなのでしょう。車は瀬戸内の静かな海浜の松林につきまします。「さあ、撮りますよ」あなたは岩の上や木の下で、つぎつぎと大胆なポーズをとります。そのうちに、あなたは乳房責め後手縛りの姿で砂浜に伏せているのです。潮風に髪のはつれをなびかせながら目がキラッと光って、貴女の顔は凄愴な感じをたたえています。何時間かの素晴らしい陶酔の時を過ぎて、帰る時間になります。からだの砂をきれいに洗い落として、そのままタオルごと貴女を抱えて車まで運びます。国道まで出ると行き交う車の十台に一台は、助手席に坐っている貴女を不思議なものを見るように覗き込んで行きます。初めは、はしゃいでいた貴女も、直ぐに泣き出しそうな顔になってしまします。「早くどこかで止めて」相にく、どこにでもある筈のモーターが、なかなか見つかりません。貴女は一生けんめいタオルで身をかくそうとするのですが、小さな湯上りタオルでは、からだ全体をかくすわけにはいかず、太腿や脇腹を露出させて

ているのです。ああ、どうしたらいいでしょうか。私は三十八才の会社員でカメラハントの経験はありませんが、自家現像等、カメラには自信があるつもりです。縛り、浣腸に興味を持っています。鈴川露子様始め四国のSMファンの皆様のお便りをお待ちします。

(香川・西山幸男)

最近、貴誌の愛読者となり、素晴らしい創作や体験記に魅了されています。私は二十八才、会社員ですが、貿易関係の仕事をやっておりますので、知り合いの外国人からSMの文献を譲ってもらったりにしています。私の妻はSMに理解がなく、私も色々努力したのですが、今ではもうあきらめています。私はSですが、どなたか良き女性のパートナーを得て、数種類の外国文献の中から、印象に残る場面を再現してみたいと望んでいます。まだプレイを始めて日が浅いのですが、SMの第一歩から出発して、頂上に登りたいと思っています。理解ある女性のお便りが頂ければ嬉しく思います。

(堺市・寺町順)

岡本嬰子さん。貴女のカメラ・

安井・中河・金原緊縛写真	
大手札印画紙極鮮明焼付フォト	
開股羞恥責めの姿態	
安井喜久子 大手札四枚一組 略号八しうV	五〇〇円
髪吊りで強烈ムチ打ち	
安井喜久子 大手札四枚一組 略号八したV	五〇〇円
片足首引きつけ縛り	
安井喜久子 大手札四枚一組 略号八しちV	五〇〇円
尻立て鞭打ち艶姿	
安井喜久子 大手札四枚一組 略号八しつV	五〇〇円
柔肌に炸裂するムチ	
安井喜久子 大手札四枚一組 略号八してV	五〇〇円
エビ縛りの鞭打ち	
安井喜久子 大手札四枚一組 略号八しとV	五〇〇円
貞操帯着用鞭打ち	
安井喜久子 大手札四枚一組 略号八しやV	五〇〇円
痛打にもかく美女体	
安井喜久子 大手札四枚一組 略号八しゆV	五〇〇円
あぐら縛りの羞恥責	
安井喜久子 大手札四枚一組 略号八しよV	五〇〇円
片脚挙げて晒す裸身	
中河 恵子 大手札三枚一組 略号八とはV	四〇〇円
強烈エビ縛りで苦悶	
中河 恵子 大手札三枚一組 略号八とにV	四〇〇円
膝頭縛り開股竹棒責め	
中河 恵子 大手札三枚一組 略号八とはV	四〇〇円
竹棒開股足首縛り	
中河 恵子 大手札三枚一組 略号八とへV	四〇〇円
股間縛りの裸身表情	
中河 恵子 大手札三枚一組 略号八とちV	四〇〇円
菱縄縛り猿ぐつわの表情	
中河 恵子 大手札三枚一組 略号八とりV	四〇〇円
乱痴戯騒ぎの結末	
中河 恵子 大手札三枚一組 略号八とぬV	四〇〇円
菱縄縛りで床に喘ぐ	
中河 恵子 大手札三枚一組 略号八とるV	四〇〇円
浣腸責めの甘い恐怖	
中河 恵子 大手札三枚一組 略号八とかV	四〇〇円
浣腸液の注入直後	
中河 恵子 大手札三枚一組 略号八とまV	四〇〇円
強制浣腸の各姿態	
中河 恵子 大手札三枚一組 略号八とみV	四〇〇円
浣腸責めの美態開陳	
中河 恵子 大手札三枚一組 略号八とめV	四〇〇円
浣腸を待つポーズ	
中河 恵子 大手札三枚一組 略号八ともV	四〇〇円

脂ののった貴女の成熟しきったお
 軀を拝見する光栄に浴し、その成
 熟をそのまま朽ち果てさすべきで
 はないと思う次第です。4月号の
 写真をもう一步前進させた写真に
 するため私と共に時間をお過ごし
 下さい。貴女の被虐心理を満足さ
 せるようなシーンを撮影してあげ
 ます。男のリンチには男の裸は現
 れませんが女のリンチには殆ど女
 が全裸にされるものです。二月に
 起きた未成年者を含むバーの女の
 リンチ事件は新聞にも載りました
 が女の場合は同性同志のリンチで
 も被害者は裸にされております。
 視覚による性感の少ない筈の娘達
 が同性を丸裸にするのは女の業と
 も云うべき露出願望とリンチその
 ものを性に無意識のうちに結びつ
 けてしまう女の情念が形を変えて
 具象化したのだと考えられます。
 素っ裸にして暴行したからは単に
 なる蹴るだけではまず、新聞
 紙上に発表できない、即ち丸裸に
 した目的が10人の娘達の好奇心の
 中におこなわれたと思われれますが
 女の微妙な心理の綾として注目す
 べきです。貴女が写真を発表した
 こと自体も同じ微妙な心理が強く
 作用したのだと私は思います。映
 画館でのハントより奇クマニヤと

の真面目な交際の方があらゆる意
 味において貴女にプラスすること
 を進言すると同時に、その希望者
 の一人として申出でます。私の企
 画するフォトは例の白い陶器をタ
 オルで栓をして水を満たし、これ
 を用いて色々の屈辱責めを受ける
 貴方の姿を貪欲に写したものであ
 りたいと思います。発表用のフォ
 ト以外は当然、一糸も纏うことを
 許しません。発表用にしまして
 も既掲載のように厚ぼったい野暮
 な色タオルでせっかくの貴女の腹
 部の丸味を駄目にするようなこと
 は致しません。ガーゼと絆創膏で
 おおいます。このため剃毛だけは
 許可願いたいのですが、無理な時
 はサロンパス大型で隠すつもりで
 す。お返事をお待ちします。

(神戸市・兵庫風流粹人)

浅田守氏へ。みたび、奈津子嬢
 の美しきフォトを鑑賞させて戴き
 喜びに耐えぬ、と同時に貴殿の飼
 育調教の賜物か、奈津子嬢もあき
 らめの心境に達したとのこと、今
 後のプレイ如何によっては妖美な
 M女の誕生も可能と期待す。彼女
 の肉体の秘密まで写す程の賞味ぶ
 り羨ましき限りではあるが、せつ
 かくのフォトも焼却の憂きめ必定

大手札印画紙焼付 「緊縛女体美のシリーズ」

両手吊りに悶える女体

大手札三枚一組 略号△もえV 四〇〇円

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 略号△もゆV 四〇〇円

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 略号△もよV 四〇〇円

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 略号△もすV 四〇〇円

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 略号△もせV 四〇〇円

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 略号△もれV 四〇〇円

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 略号△もるV 四〇〇円

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 略号△もてV 四〇〇円

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 略号△もなV 四〇〇円

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 略号△もねV 四〇〇円

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 略号△もむV 四〇〇円

鞭は柔肌に炸裂する

大手札三枚一組 略号△もうV 四〇〇円

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 略号△もきV 四〇〇円

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 略号△もこV 四〇〇円

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 略号△もみV 四〇〇円

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 略号△はゆV 四〇〇円

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 略号△はよV 五〇〇円

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 略号△はてV 五〇〇円

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 略号△はおV 四〇〇円

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 略号△はのV 五〇〇円

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 略号△はひV 四〇〇円

中河 恵子

の行為は徒勞のきわみ。そこまでの調教の実熟せし奈津子嬢ならばMの女神とも云うべき姿態の数々を同好の志のため捧げ供し給え。仮に彼女の秘密を総べて露呈したフォトを撮影したところ、所詮それはごく自然な女体のフォルムであって裸身そのものは最高の耽美という程のものでは無いことは周知の通り。それよりも、むしろ彼女の肉体の一部を隠す、即ち羞恥を著せることによって、彼女の美しい軀全体に「心」を植えつけることだと思ふ。着衣、あるいは隠蔽するだけでは勿論、心を植えつけえない。それに加えて姿態の究極や飼育調教の妙が必要だろうが、私は奈津子嬢ならば貪欲、執拗な調教の果てには、その豊かな乳房も、まろやかな腹部も、みずみずしい太腿も、耽美極まる表情を生むに違いないと確信する。さて、隠蔽の問題だが生ゴムパンティやおむつカバーは月並みでも、やはり捨て難い味があるし、奇を求めらるなら、大人の玩具店で見かけける生ゴム丁字帯で股間を縦に締めあげたり、いかめしい中世風の青銅製貞操帯で固く閉ざしたりするのも一興である。そこまで凝るのが面倒なら、厚紙で風変わりなバタフ

ライや貞操帯を作って当てがうのも面白く、頼りない感じが、かえって奈津子嬢の心や軀を操り、簡単なわりに効果があがるかも知れぬ。次に肝心なポーズだが、1月号において、むちむちした腹部を反らすようにして、丸味を帯びた甘ったるい腰部に枕を挿し込み、人の字型に開いた両肢の間に縦縄を割り込ませ、あまりの恥しさに顔をそむけたポーズは羞恥が甘美に匂うが如きであった。4月号のポーズは縄を強調するためにとった態位のためか、顔を白布で覆ったのが前者に比し、全体の甘さを殺しており、この点遺憾に思ったが、顔を隠さねばならぬなら、顔をそむけるとか長髪を利用するとかで止めたい。SM的耽美を欲するポーズは、立位としやがんだ女体で、この二態位に深い意味での逃げも遊びも存在しないと思う。首に縄を巻かれ、その端が天井の鴨居に伸びる、彼女は全裸を羞じて首を守らず、左手で乳房を押さえ、右手で下腹部を押さえる。後手に緊縛され、開脚して、しゃがみこむ彼女の限界にまっ白なズロースが悶える等々々。奈津子嬢のM意識をうまく演出し定着させねばならぬ。一般週刊誌に本誌以上

開股縛りに喜悅する女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はわV

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はふV

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はほV

悦慮に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はあV

変縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はうV

柱に立縛りてさらす

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はさV

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はめV

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はしV

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はもV

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はむV

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はめV

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はもV

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はさV

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はしV

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はすV

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大島 照代 略号 八はせV

両手吊りであえく女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はゆV

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大島 照代 略号 八はたV

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はちV

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はつV

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はてV

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はとV

なか撮れません。できればいろいろ撮ってみたいと思っています。井風呂さまからのお賞めことばにはかえって恥しいくらいで、とてもあなたさまの足もとにもおおよびません。井風呂さまのフォトを楽しみにしております。そして、もっとと女装責めを中心とした作品をご発表くださるようお願いいたします。また女装同士の責めも取りあげてほしいと思います。こんごの健斗を祈りつつペンをおきます。

(大阪・中村 純)

生まれる以前のあの茶色の混沌そこにSというものが巣を作り始めていたのでしょうか。混沌に根ざす葦の葉の水色のしずく。そのこわれかたが、あまりにもきわどいものだったからでしょうか。物心がついて以来、ぼくは自分のもつ残酷性というものにひかれてきました。縛られた女性をみれば、一つの電気が——緑色の悪魔がぼくの体の中をかけめぐり、快楽の極へと誘います。ぼくは現在二〇歳の大学生です。ロマンチストです。いろいろなことを気軽に話しかけよう。ぼくと交際して下さる女性の方おられないでしょうか。一緒にプレイするだけではない

く、他の面でも理解と信頼にもとづいた交際をしたいと思っています。お願いです、お便り下さい。

(大阪・山崎純二)

小生が「花と蛇」に感激して、初めて奇クに投稿したのは44年の4月でした。早いもので一年たつてしまった訳です。小生がその時に希望しましたヒロインと黒人とのからみも年内に実現し、そうなので飲んでおります。真白な肌をした美しい若奥様が真黒な肌をした醜い黒人ジョーと組み合さると想像するだけでも、耽美のきわみです。静子夫人の仰臥した顔の上に跨るようになって反対のポーズで四つん這いになったジョーの体を、白い両手で支え、ちゅうちゅうと赤ん坊が乳房を吸うように音を立てる。かつての令夫人、遠山静子(26才)の羞恥美と心理を甘く歌いあげて下さる様お願いいたします。又ジョーが高嶺の花と想っていた令夫人を与えられ、まるで日頃の劣等感と虐げに對するいきどおりを夫人の身に暴発させるかのように羞しめの限りをつくすというシーンをご希望いたします。

(神戸市・三木逸郎)

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れやV

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れやV

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れやV

黒縄縛りの媚態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河恵子 略号八れぬV

立縛りにあつた裸女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れぬV

開股された股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れぬV

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れぬV

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やかV

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やかV

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やかV

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やかV

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やかV

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やかV

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円
大塚・東浦 略号八なるV

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
中河恵子 略号八ぬめV

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
中河恵子 略号八ぬめV

八の字の開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しいV

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しいV

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しいV

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しいV

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しいV

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しいV

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しいV

お申込みは大阪阿倍野局私書箱

第14号天星社宛へ願います。

四国、川の江市に住みます女性
でございます。愛媛県にお住まい
の鈴木露子様始め、四国内にお住
まいの女性の皆様の中で、一人さ
びしくプレイなさっている方、又
は三人プレイを好まれる方に、秘
密を守り心ゆくまでプレイ相手が
出来る男性を、私が自信を持って
お世話したいと思えます。興味お
持ちの方がございましたら、お便
り下さいませ。又、フンドシ愛用
なさっている香川県にお住みの吉
倉祐子様。お便り下さるかとお待
していましたが、残念ですわ。
六尺フンドシ愛用なさっている女
性の皆様からのお便り心からお待
ちしています。

(川の江市・越智かおり)

S Mに耽溺する同好の友の寄稿を読むことが私の唯一の愉しみであり、救いでもある。まして、同好の男性に捕えられた美女がS Mの祭壇にその羞恥を悶えさせるが如きフォトを拝見するに到っては五官が痺れ、しばしの憂さを忘れ得る。この意味に於いて、5月号の三条氏のカメラ・ハント登場を心の底から慶ぶ。三条氏の素人たる故の素人臭が他を圧してマニヤの共感を呼び、ショットが持つ雰

困氣に言葉で表現できない深い情緒をおぼえた。その写手が初心な素人であればある程、そのフォトに到るまでの一枚のフォトが、その裏面にかくされた深い認識を生み、更に次の段階への甘美な幻想をはぐくむ。SMが未踏の分野に近いだけに徒らな焦燥は禁もつてあるが、このような素人同志の作品発表によって、現在のSMマニヤの相乗的断絶現象を脱し、マニヤ同志の安堵を見出し幸を確めたいと念ずる。三条氏の彼女の美しさがフェティシズム的視覚を操り、女身の白い布が匂い、造花を散らせたSMの場にフロイト解釈を押し進めれば、花瓶にみたてられた全裸が収縮し悶え揺れる時を想う。草叢にかがみ萎縮する彼女に、必然的プレーの場を認識させられ、太陽の輝きの中に、進る一条の液体を妄想する。木々の間に緊縛された彼女への配慮が彼女の可憐さと優美さを逆撫でに責めあげるための舞台であることを理解する時、茫漠たる青空の下に繰り広げられる責めを空想する。SM自体を奇異され、みずからもその偏見を認容して変態の二字に抑圧され、男性本来の獸性を教養によって歪められているが、せめて

全裸後手柔肌縛り 大手札三枚一組 佐々木真弓 略号△こよ▽ 四〇〇円	乳房強烈膨隆責め 大手札三枚一組 佐々木真弓 略号△こわ▽ 四〇〇円	海老責めに苦悶する 大手札三枚一組 佐々木真弓 略号△こお▽ 四〇〇円	全裸の緊縛全身晒し 大手札三枚一組 佐々木真弓 略号△こる▽ 四〇〇円	煙草責めに喘ぐ女 大手札二枚一組 佐々木真弓 略号△こぬ▽ 三〇〇円	緊縛麗姿に映えるライト 大手札三枚一組 佐々木真弓 略号△こほ▽ 四〇〇円	臀部強調後手縛り 大手札三枚一組 佐々木真弓 略号△ころ▽ 四〇〇円	羞恥に悶える全裸緊縛 大手札三枚一組 佐々木真弓 略号△こに▽ 四〇〇円	ホステスの緊縛姿態 大手札三枚一組 佐々木真弓 略号△こち▽ 四〇〇円	二つ折りで責める女体 大手札三枚一組 佐々木真弓 略号△こへ▽ 四〇〇円	脈打つ全裸の臨月腹 大手札三枚一組 中河恵子 略号△こふ▽ 四〇〇円	臨月腹の革紐股間縛り 大手札三枚一組 中河恵子 略号△こや▽ 四〇〇円	猿轡の臨月妊婦腹縛り 大手札三枚一組 中河恵子 略号△この▽ 四〇〇円	卓上の股間縛り狂態 大手札三枚一組 長井葉津子 略号△こそ▽ 四〇〇円	羞恥の足挙げ責め 大手札三枚一組 長井葉津子 略号△これ▽ 四〇〇円	悦虚責めの女体終着駅 大手札三枚一組 長井葉津子 略号△こた▽ 四〇〇円	片足挙げる鞭打ち責め 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△こら▽ 四〇〇円	柔肌に弾ける惨酷な笞 大手札三枚一組 関谷富佐子 略号△こな▽ 四〇〇円	あぐら縛りの女体鑑賞 大手札三枚一組 佐近麻里子 略号△こえ▽ 四〇〇円	対談用に縛られた女 大手札三枚一組 左近麻里子 略号△こて▽ 四〇〇円
------------------------------------------------	------------------------------------------------	-------------------------------------------------	-------------------------------------------------	------------------------------------------------	---------------------------------------------------	------------------------------------------------	--------------------------------------------------	-------------------------------------------------	--------------------------------------------------	------------------------------------------------	-------------------------------------------------	-------------------------------------------------	-------------------------------------------------	------------------------------------------------	--------------------------------------------------	--------------------------------------------------	--------------------------------------------------	--------------------------------------------------	-------------------------------------------------

するかも知れない。44年6月号にみた幸崎夫人の美しい開股椅子縛り、44年10月号にみた清水悦子の双丘に浣腸施術中の屋外フォート等々過去に示した被虐羞恥美豊かな素人写真の数を想うにつけても今後の素人カメラ・ハンを期待する。かく云う私も若い雌を裸のまま拘束し、フロイト風に紅唇にバナナを含ませ、立位開脚の双臀の隙下に洗面器を配しての撮影発表を意図して目下飼育調教にはげんでいるが、諸兄よ、願わくばSM探美の俎上に躊躇なく獲物を解剖し全裸を紅に染め肉づき良い両腿を震わす数々の反応をフォートと文章に固着させ素人故に許される美の限界に挑戦されたい。異端視され孤独の存在の中にあつて、あの太陽さえ眩しく重たい存在かも知れない我々だが、お互に手を握りあいせめて誌上ででも、三条氏の範に習い、その獲物を写真と文章で誇りあおうではないか。

(大西弘明)

今日は、前田カオル君。今回の君の使命だが、君はすぐに私とSMプレイをせねばならない。私はまだ二十三才の若者だが、緊縛をして浣腸したり毛剃り、鞭打ちな

どをしてあげよう。私はまだプレイ歴はないが、充分に君を満足させる自信がある。東京には、いつも行っているが平日は都合が悪いので日曜日が希望であるのは、当方も大変に都合がよい。日時、場所を当方に早く知らせなさい。なお君は一刻も早くこの手紙に返事を書くこと。もし君がこの手紙に返事を書かないで一生、後悔しても当局は一切、責任を持たないからそのつもりで。なおプライバシーは、絶対守るから、よく覚えていてほしい。最後にプレイの一つを書いてみる。まず君を裸にして、乳房縛り、股間縛りなどをして、その上でオーバー等を着て、散歩などを楽しんでから本格的なプレイに入っていく。もちろん浣腸をして排泄をしないままでもよいし散歩している時に排泄をしてもよい。このようなプレイである。この他にもいろいろ考えている。君の希望も、入れてやるつもりである。では君の返事を待っている。

(横須賀市・小田信夫)

小生、東京へ勤務する二十九才の会社員です。奇クを読む事、五年。好みの傾向は貴女と同じで、理想的なパートナーと思う。時間

及び場所は貴女の希望通り可能。表情豊かで、美しいプロポーションの貴女を、どう責めるかのプランニングを。貴女とは東京駅から三十分の、横浜のあるホテルで逢う。出会って十数分後のため、リラックスするのに、責めの映画の音をテープレコーダーから流す。

これをBGMとして、プレイを開始する。美しい身体を両手づりにして、ゴーゴーで良く使うストロボ照明を、強烈に貴女の身体に当たると早くもSMの幻惑の世界へと、浸ってくる。両手づりのまま鞭打に入る。完全にMとなったカオルを、次に緊縛、そして鞭打ちを加えると、転がりながら逃げようとするが逃げきれずに、逃げようとした罰で押入れを利用した逆さづりで、ローソク責めに入る。すでにテープレコーダーは再生から録音になっていて、カオルの喘ぎが、全て録音されている。カオルの「毛剃を……刺って」の声で、場所移動して、毛剃の所に香水をかけて、それをきれいにするが、次は浣腸といい………香水の香りを台なしにしたため、最後の鞭打ちに入る。だいたい以上であるが、勿論ハプニングは私の好むところであり、何が出るか不明で

ある。又、顔のあからさまでないフォートを本誌へ発表して、先輩諸兄の御批評を受け、今後の参考とする。EDP……フォートは全て堪能を自認するので、外部には絶対出さないから、安心されたい。

(横浜・鈴木容)

拝啓、SCR様。毎月、奇クを読む事だけが楽しみで、それ以外はマージャンばかりしている一学生として悩んでいる事があるので相談します。私は恥かしい事に大学七年生で学生結婚を三年の時にした(もっとも役所などに届けてないが)ダメなグータラ男です。ただ一つのとりえは妻の慶子で彼女が洋服屋でバイトをして私を養っています。私は毎夜、慶子に奇クを読ませ彼女をマゾに教育しようと思うのですが、私に「変態的ね」などとイヤな顔をして奇クを読もうとせず、まいています。でも縛りだけはどうか許す程度で、私が最も興味を持っています。ヌス責めには激しく拒否します。私は、なんとか慶子のアヌス感覚を開発しようと思っていますが、持っている責め具は浣腸器、エネマシリングと細い体温計をガラス棒がわりにしている位で決定的に

次号 (七月号) は五月二十五日に発売いたします

足りないし、責め方も余りよく知らないため、開発はいっこうに進みません。いつも浣腸してからガラス棒がわりの体温計を慶子のアヌスに挿入する位で面白くありません。そこで私は、SCRに対しアヌス責め、アヌス感覚の開発の具体的方法や例を教えてもらいたいと思っております。特に、最近の奇ク誌上でアヌス拡張器だの、肛門鏡、直腸鏡だの責め具が登場しており、それらの使い方や手に入れた方、それらを教えて下さい。又最近、慶子に浣腸とパイプを使って同時に前後をプレーしたのですが、パイプの働きの影響が大きくて浣腸したにもかかわらず慶子は便意がなく、尿意だけが働いて、浣腸液がどうなったのかと、心配しました。そこでアヌスと女性器の関係、更にアヌスはどの程度まで物を入れたり、拡張したり出来るのか、浣腸液の代りに流動物を浣腸器で注入し得るかなど教えて下さい。私が余りしつこいので慶子はおこったようにいやがるので、私が慶子と学校へ行くのを条件に決定的なプレーで慶子のアヌス感

覚を開発してしまおうと思っておりますのでよろしく願います。それから、これは奇クへの提案とどうか希望ですが、縛り、浣腸、排尿などのテーマを取り上げて、その楽しいプレーの、仕方などの一例を具体的に提案してくれば全国のプレー仲間が喜ぶと思いますが、いかがが…… (万年学生)

皆様、初めまして。私は初めて

本誌にお目にかかりました。そして楽しく読ませてもらったマゾ愛好者です。今までにも数多くのSM物を読んでおりますが、これほど生々しく書いた小説などを読んだことがないので。特に五月号の体験告白「私の少年期」を読んだ夜、眠れませんでした。同じところで何を何度もくり返し毎晩、読んでおります。私は、このような趣味なので、次の号が大変待ち遠しいです。私はもともと「やいと」とか、昔からある継子いじめ等の小説や告白が、大好きです。というのは、よく小さい時に年寄りなどに聞かされたり、又継子が継母に馬乗りになられて灸を据えられ

ているのを見てからです。その時継母の裾から、ちらちらと赤いネルの、おこしが見えました。それを見てから、赤いこしまきにとりつかれました。どなたか私をそのようにしてくれる人は居ないでしょうか。どんな辛抱でもします。私は浣腸とか、パンツなどには興味はありません。もぐさとか「やいと」という言葉を聞いたただけで興奮します。ぜひこれからも灸責めなどの絵や小説を載せて下さいますようお願い致します。

(千葉・久保田一夫)

親愛なる小杉様へ。あなたは大変、多くのファンをお持ちですが私もあなたのファンの一員に参加いたします。もっと早くファンになりたかったのですが、何分、筆不精のため現在に至ってしまいました。私もあなたと同様、羞恥責めに興味を持っており、かつてはプレーもいたしました。羞恥責めでも特にアヌスプレーに大変関心を持っております。あなたの文面から判断いたしますと、少なからずアヌスプレーに興味をお持ちのようですね。またアヌスプレー以外の責めにも多大な関心がおありのようですが如何ですか。そこで

私の羞恥責めプランですが、まず人工的に便秘をおこさせてから浣腸をやり、その後イルリにて、あなたの体内を何度も洗滌し、きれいなところまで、あなたに、瞬間まではいきせまんが湯沸しになつていただき、私がホットカルピスをいただきます。もちろんあなたにも試飲はさせてあげます。また口なおしにあなたの神酒を飲んだ後に、あなたは犬の好物、私の好物を私や犬に与えるのです。そして最後にはあなた自身に、にわとりになつていただき、卵を産んでもらって終了です。大変強烈なことを書きましたが、あなたは喜んで下さいますか、それとも尻ごみされますか。しかし、あなたなら、これくらいのプレーは出来ると思います。長々と書きましたが見がありましたら、お聞かせ下さい。あなたのご健康をお祈りしつつペンを置きます。

(北摂・石田生)

下着なしで膝上三〇厘のミニスカート、勿論、下着なしとはノースリッパ、ノーブラジャー、ノーパンティ、ノーシームレスのことと思いますが、かかる服装で散策

する鈴川露子嬢は全くすばらしいM女性です。只、惜しむらくは暖かい日に限られて居ること、厳寒の日も当然この服装でいるのがM女性というものです。若しこの上に私のアイディアになるミニスカートを着けると、よりすばらしいものになることは間違いありませんが、おそらく羞かしくて身に着けることは出来ないでしょう。読者通信によれば、あなたは操に触れない男性を求めておられますが、私の意見では本当のSMプレイをしようとするSM男性であれ

ば心配はない筈です。伊藤圭子嬢は操を失いかけたといっておられました。SMプレイも満足にしない内からセックスを求める様な男性は本当のSとはいえません。私の今までの経験ではSMプレイとセックスとを比較すれば、問題にならない程SMプレイの方が面白く、又SMプレイの最中にセックスを行えば、SMプレイの意慾が減退しますので、私はSMプレイの足をひくようなセックスは行なう気にはなれないのです。しかし鈴川嬢もM女性としてS男性

に条件つきとは恐れ入ったものである程度の危険は覚悟すべきでしょう。若しあなたの条件に合う男性を求めるならば四十才以上の、一流会社に勤める男性を相手にするといいでしょう。例えば、私は過去に女性関係でおどかされたこともあり、あなたが操を気にされるのと同様、対外的なことが気になるものです。私も四国には何度も行っておりますが、南国的で明るく又、情熱的な女性が多いようです。地元の四国では思い切った服装が出来なくても本州で一度

変わった服装をしてみても如何ですか。すばらしい写真が出来ることと思います。(芦屋市・山本隆)

私は四十才になる一商人ですが排泄に興味を持っています。自分でこれを実行するときが一番幸福なときだと思っています。女性の下着をつけてその中へ漏らしたり、オシメをあてて漏らしたり、色々な方法で楽しんでます。同じ趣味のある方と文通やプレイできたら、どんなに楽しいだろうと思っています。(北九州市・服部)

本誌既刊号在庫一覧表

既刊雑誌在庫案内

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、40年に発行のものについては在庫の僅少ななものもありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりますが、今後は三カ月以上予約御注文以外(既刊号は含まず)は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は八小包Vにて発送申し上げます。

昭和41年7月号	(送共三二〇円)
昭和40年8月号	(送共三二〇円)
昭和40年9月号	(送共三二〇円)
昭和40年10月号	(送共三二〇円)
昭和40年11月号	(送共三二〇円)
昭和40年12月号	(送共三二〇円)
昭和41年1月号	(送共三二〇円)
昭和41年2月号	(送共三二〇円)
昭和41年3月号	(送共三二〇円)
昭和41年4月号	(送共三二〇円)
昭和41年5月号	(送共三二〇円)

昭和41年6月号	(送共三二〇円)
昭和41年7月号	(送共三二〇円)
昭和41年8月号	(送共三二〇円)
昭和41年9月号	(送共三二〇円)
昭和41年10月号	(送共三二〇円)
昭和41年11月号	(送共三二〇円)
昭和41年12月号	(送共三二〇円)
昭和42年1月号	(送共三二〇円)
昭和42年2月号	(送共三二〇円)
昭和42年3月号	(送共三二〇円)
昭和42年4月号	(送共三二〇円)
昭和42年5月号	(送共三二〇円)
昭和42年6月号	(送共三二〇円)
昭和42年7月号	(送共三二〇円)
昭和42年8月号	(送共三二〇円)
昭和42年9月号	(送共三二〇円)
昭和42年10月号	(送共三二〇円)
昭和42年11月号	(送共三二〇円)
昭和42年12月号	(送共三二〇円)
昭和43年1月号	(送共三二〇円)
昭和43年2月号	(送共三二〇円)
昭和43年3月号	(送共三二〇円)
昭和43年4月号	(送共三二〇円)
昭和43年5月号	(送共三二〇円)
昭和43年6月号	(送共三二〇円)
昭和43年7月号	(送共三二〇円)
昭和43年8月号	(送共三二〇円)
昭和43年9月号	(送共三二〇円)
昭和43年10月号	(送共三二〇円)
昭和43年11月号	(送共三二〇円)
昭和43年12月号	(送共三二〇円)
昭和44年1月号	(送共三二〇円)
昭和44年2月号	(送共三二〇円)
昭和44年3月号	(送共三二〇円)
昭和44年4月号	(送共三二〇円)
昭和44年5月号	(送共三二〇円)
昭和44年6月号	(送共三二〇円)
昭和44年7月号	(送共三二〇円)
昭和44年8月号	(送共三二〇円)
昭和44年9月号	(送共三二〇円)
昭和44年10月号	(送共三二〇円)
昭和44年11月号	(送共三二〇円)
昭和44年12月号	(送共三二〇円)
昭和45年1月号	(送共三二〇円)
昭和45年2月号	(送共三二〇円)
昭和45年3月号	(送共三二〇円)
昭和45年4月号	(送共三二〇円)
昭和45年5月号	(送共三二〇円)
昭和45年6月号	(送共三二〇円)
昭和45年7月号	(送共三二〇円)
昭和45年8月号	(送共三二〇円)
昭和45年9月号	(送共三二〇円)
昭和45年10月号	(送共三二〇円)
昭和45年11月号	(送共三二〇円)
昭和45年12月号	(送共三二〇円)
昭和46年1月号	(送共三二〇円)
昭和46年2月号	(送共三二〇円)
昭和46年3月号	(送共三二〇円)
昭和46年4月号	(送共三二〇円)
昭和46年5月号	(送共三二〇円)
昭和46年6月号	(送共三二〇円)
昭和46年7月号	(送共三二〇円)
昭和46年8月号	(送共三二〇円)
昭和46年9月号	(送共三二〇円)
昭和46年10月号	(送共三二〇円)
昭和46年11月号	(送共三二〇円)
昭和46年12月号	(送共三二〇円)
昭和47年1月号	(送共三二〇円)
昭和47年2月号	(送共三二〇円)
昭和47年3月号	(送共三二〇円)
昭和47年4月号	(送共三二〇円)
昭和47年5月号	(送共三二〇円)
昭和47年6月号	(送共三二〇円)
昭和47年7月号	(送共三二〇円)
昭和47年8月号	(送共三二〇円)
昭和47年9月号	(送共三二〇円)
昭和47年10月号	(送共三二〇円)
昭和47年11月号	(送共三二〇円)
昭和47年12月号	(送共三二〇円)
昭和48年1月号	(送共三二〇円)
昭和48年2月号	(送共三二〇円)
昭和48年3月号	(送共三二〇円)
昭和48年4月号	(送共三二〇円)
昭和48年5月号	(送共三二〇円)
昭和48年6月号	(送共三二〇円)
昭和48年7月号	(送共三二〇円)
昭和48年8月号	(送共三二〇円)
昭和48年9月号	(送共三二〇円)
昭和48年10月号	(送共三二〇円)
昭和48年11月号	(送共三二〇円)
昭和48年12月号	(送共三二〇円)
昭和49年1月号	(送共三二〇円)
昭和49年2月号	(送共三二〇円)
昭和49年3月号	(送共三二〇円)
昭和49年4月号	(送共三二〇円)
昭和49年5月号	(送共三二〇円)
昭和49年6月号	(送共三二〇円)
昭和49年7月号	(送共三二〇円)
昭和49年8月号	(送共三二〇円)
昭和49年9月号	(送共三二〇円)
昭和49年10月号	(送共三二〇円)
昭和49年11月号	(送共三二〇円)
昭和49年12月号	(送共三二〇円)
昭和50年1月号	(送共三二〇円)
昭和50年2月号	(送共三二〇円)
昭和50年3月号	(送共三二〇円)
昭和50年4月号	(送共三二〇円)
昭和50年5月号	(送共三二〇円)
昭和50年6月号	(送共三二〇円)
昭和50年7月号	(送共三二〇円)
昭和50年8月号	(送共三二〇円)
昭和50年9月号	(送共三二〇円)
昭和50年10月号	(送共三二〇円)
昭和50年11月号	(送共三二〇円)
昭和50年12月号	(送共三二〇円)
昭和51年1月号	(送共三二〇円)
昭和51年2月号	(送共三二〇円)
昭和51年3月号	(送共三二〇円)
昭和51年4月号	(送共三二〇円)
昭和51年5月号	(送共三二〇円)
昭和51年6月号	(送共三二〇円)
昭和51年7月号	(送共三二〇円)
昭和51年8月号	(送共三二〇円)
昭和51年9月号	(送共三二〇円)
昭和51年10月号	(送共三二〇円)
昭和51年11月号	(送共三二〇円)
昭和51年12月号	(送共三二〇円)
昭和52年1月号	(送共三二〇円)
昭和52年2月号	(送共三二〇円)
昭和52年3月号	(送共三二〇円)
昭和52年4月号	(送共三二〇円)
昭和52年5月号	(送共三二〇円)
昭和52年6月号	(送共三二〇円)
昭和52年7月号	(送共三二〇円)
昭和52年8月号	(送共三二〇円)
昭和52年9月号	(送共三二〇円)
昭和52年10月号	(送共三二〇円)
昭和52年11月号	(送共三二〇円)
昭和52年12月号	(送共三二〇円)
昭和53年1月号	(送共三二〇円)
昭和53年2月号	(送共三二〇円)
昭和53年3月号	(送共三二〇円)
昭和53年4月号	(送共三二〇円)
昭和53年5月号	(送共三二〇円)
昭和53年6月号	(送共三二〇円)
昭和53年7月号	(送共三二〇円)
昭和53年8月号	(送共三二〇円)
昭和53年9月号	(送共三二〇円)
昭和53年10月号	(送共三二〇円)
昭和53年11月号	(送共三二〇円)
昭和53年12月号	(送共三二〇円)
昭和54年1月号	(送共三二〇円)
昭和54年2月号	(送共三二〇円)
昭和54年3月号	(送共三二〇円)
昭和54年4月号	(送共三二〇円)
昭和54年5月号	(送共三二〇円)
昭和54年6月号	(送共三二〇円)
昭和54年7月号	(送共三二〇円)
昭和54年8月号	(送共三二〇円)
昭和54年9月号	(送共三二〇円)
昭和54年10月号	(送共三二〇円)
昭和54年11月号	(送共三二〇円)
昭和54年12月号	(送共三二〇円)
昭和55年1月号	(送共三二〇円)
昭和55年2月号	(送共三二〇円)
昭和55年3月号	(送共三二〇円)
昭和55年4月号	(送共三二〇円)
昭和55年5月号	(送共三二〇円)
昭和55年6月号	(送共三二〇円)
昭和55年7月号	(送共三二〇円)
昭和55年8月号	(送共三二〇円)
昭和55年9月号	(送共三二〇円)
昭和55年10月号	(送共三二〇円)
昭和55年11月号	(送共三二〇円)
昭和55年12月号	(送共三二〇円)
昭和56年1月号	(送共三二〇円)
昭和56年2月号	(送共三二〇円)
昭和56年3月号	(送共三二〇円)
昭和56年4月号	(送共三二〇円)
昭和56年5月号	(送共三二〇円)
昭和56年6月号	(送共三二〇円)
昭和56年7月号	(送共三二〇円)
昭和56年8月号	(送共三二〇円)
昭和56年9月号	(送共三二〇円)
昭和56年10月号	(送共三二〇円)
昭和56年11月号	(送共三二〇円)
昭和56年12月号	(送共三二〇円)
昭和57年1月号	(送共三二〇円)
昭和57年2月号	(送共三二〇円)
昭和57年3月号	(送共三二〇円)
昭和57年4月号	(送共三二〇円)
昭和57年5月号	(送共三二〇円)
昭和57年6月号	(送共三二〇円)
昭和57年7月号	(送共三二〇円)
昭和57年8月号	(送共三二〇円)
昭和57年9月号	(送共三二〇円)
昭和57年10月号	(送共三二〇円)
昭和57年11月号	(送共三二〇円)
昭和57年12月号	(送共三二〇円)
昭和58年1月号	(送共三二〇円)
昭和58年2月号	(送共三二〇円)
昭和58年3月号	(送共三二〇円)
昭和58年4月号	(送共三二〇円)
昭和58年5月号	(送共三二〇円)
昭和58年6月号	(送共三二〇円)
昭和58年7月号	(送共三二〇円)
昭和58年8月号	(送共三二〇円)
昭和58年9月号	(送共三二〇円)
昭和58年10月号	(送共三二〇円)
昭和58年11月号	(送共三二〇円)
昭和58年12月号	(送共三二〇円)
昭和59年1月号	(送共三二〇円)
昭和59年2月号	(送共三二〇円)
昭和59年3月号	(送共三二〇円)
昭和59年4月号	(送共三二〇円)
昭和59年5月号	(送共三二〇円)
昭和59年6月号	(送共三二〇円)
昭和59年7月号	(送共三二〇円)
昭和59年8月号	(送共三二〇円)
昭和59年9月号	(送共三二〇円)
昭和59年10月号	(送共三二〇円)
昭和59年11月号	(送共三二〇円)
昭和59年12月号	(送共三二〇円)
昭和60年1月号	(送共三二〇円)
昭和60年2月号	(送共三二〇円)
昭和60年3月号	(送共三二〇円)
昭和60年4月号	(送共三二〇円)
昭和60年5月号	(送共三二〇円)
昭和60年6月号	(送共三二〇円)
昭和60年7月号	(送共三二〇円)
昭和60年8月号	(送共三二〇円)
昭和60年9月号	(送共三二〇円)
昭和60年10月号	(送共三二〇円)
昭和60年11月号	(送共三二〇円)
昭和60年12月号	(送共三二〇円)
昭和61年1月号	(送共三二〇円)
昭和61年2月号	(送共三二〇円)
昭和61年3月号	(送共三二〇円)
昭和61年4月号	(送共三二〇円)
昭和61年5月号	(送共三二〇円)
昭和61年6月号	(送共三二〇円)
昭和61年7月号	(送共三二〇円)
昭和61年8月号	(送共三二〇円)
昭和61年9月号	(送共三二〇円)
昭和61年10月号	(送共三二〇円)
昭和61年11月号	(送共三二〇円)
昭和61年12月号	(送共三二〇円)
昭和62年1月号	(送共三二〇円)
昭和62年2月号	(送共三二〇円)
昭和62年3月号	(送共三二〇円)
昭和62年4月号	(送共三二〇円)
昭和62年5月号	(送共三二〇円)
昭和62年6月号	(送共三二〇円)
昭和62年7月号	(送共三二〇円)
昭和62年8月号	(送共三二〇円)
昭和62年9月号	(送共三二〇円)
昭和62年10月号	(送共三二〇円)
昭和62年11月号	(送共三二〇円)
昭和62年12月号	(送共三二〇円)
昭和63年1月号	(送共三二〇円)
昭和63年2月号	(送共三二〇円)
昭和63年3月号	(送共三二〇円)
昭和63年4月号	(送共三二〇円)
昭和63年5月号	(送共三二〇円)
昭和63年6月号	(送共三二〇円)
昭和63年7月号	(送共三二〇円)
昭和63年8月号	(送共三二〇円)
昭和63年9月号	(送共三二〇円)
昭和63年10月号	(送共三二〇円)
昭和63年11月号	(送共三二〇円)
昭和63年12月号	(送共三二〇円)
昭和64年1月号	(送共三二〇円)
昭和64年2月号	(送共三二〇円)
昭和64年3月号	(送共三二〇円)
昭和64年4月号	(送共三二〇円)
昭和64年5月号	(送共三二〇円)
昭和64年6月号	(送共三二〇円)
昭和64年7月号	(送共三二〇円)
昭和64年8月号	(送共三二〇円)
昭和64年9月号	(送共三二〇円)
昭和64年10月号	(送共三二〇円)
昭和64年11月号	(送共三二〇円)
昭和64年12月号	(送共三二〇円)
昭和65年1月号	(送共三二〇円)
昭和65年2月号	(送共三二〇円)
昭和65年3月号	(送共三二〇円)
昭和65年4月号	(送共三二〇円)
昭和65年5月号	(送共三二〇円)
昭和65年6月号	(送共三二〇円)
昭和65年7月号	(送共三二〇円)
昭和65年8月号	(送共三二〇円)
昭和65年9月号	(送共三二〇円)
昭和65年10月号	(送共三二〇円)
昭和65年11月号	(送共三二〇円)
昭和65年12月号	(送共三二〇円)
昭和66年1月号	(送共三二〇円)
昭和66年2月号	(送共三二〇円)
昭和66年3月号	(送共三二〇円)
昭和66年4月号	(送共三二〇円)
昭和66年5月号	(送共三二〇円)
昭和66年6月号	(送共三二〇円)
昭和66年7月号	(送共三二〇円)
昭和66年8月号	(送共三二〇円)
昭和66年9月号	(送共三二〇円)
昭和66年10月号	(送共三二〇円)
昭和66年11月号	(送共三二〇円)
昭和66年12月号	(送共三二〇円)
昭和67年1月号	(送共三二〇円)
昭和67年2月号	(送共三二〇円)
昭和67年3月号	(送共三二〇円)
昭和67年4月号	(送共三二〇円)
昭和67年5月号	(送共三二〇円)
昭和67年6月号	(送共三二〇円)
昭和67年7月号	(送共三二〇円)
昭和67年8月号	(送共三二〇円)
昭和67年9月号	(送共三二〇円)
昭和67年10月号	(送共三二〇円)
昭和67年11月号	(送共三二〇円)
昭和67年12月号	(送共三二〇円)
昭和68年1月号	(送共三二〇円)
昭和68年2月号	(送共三二〇円)
昭和68年3月号	(送共三二〇円)
昭和68年4月号	(送共三二〇円)
昭和68年5月号	(送共三二〇円)
昭和68年6月号	(送共三二〇円)
昭和68年7月号	(送共三二〇円)
昭和68年8月号	(送共三二〇円)
昭和68年9月号	(送共三二〇円)
昭和68年10月号	(送共三二〇円)
昭和68年11月号	(送共三二〇円)
昭和68年12月号	(送共三二〇円)
昭和69年1月号	(送共三二〇円)
昭和69年2月号	(送共三二〇円)
昭和69年3月号	(送共三二〇円)
昭和69年4月号	(送共三二〇円)
昭和69年5月号	(送共三二〇円)
昭和69年6月号	(送共三二〇円)
昭和69年7月号	(送共三二〇円)
昭和69年8月号	(送共三二〇円)
昭和69年9月号	(送共三二〇円)
昭和69年10月号	(送共三二〇円)
昭和69年11月号	(送共三二〇円)
昭和69年12月号	(送共三二〇円)
昭和70年1月号	(送共三二〇円)
昭和70年2月号	(送共三二〇円)
昭和70年3月号	(送共三二〇円)
昭和70年4月号	(送共三二〇円)
昭和70年5月号	(送共三二〇円)
昭和70年6月号	(送共三二〇円)
昭和70年7月号	(送共三二〇円)
昭和70年8月号	(送共三二〇円)
昭和70年9月号	(送共三二〇円)
昭和70年10月号	(送共三二〇円)
昭和70年11月号	(送共三二〇円)
昭和70年12月号	(送共三二〇円)
昭和71年1月号	(送共三二〇円)
昭和71年2月号	(送共三二〇円)
昭和71年3月号	(送共三二〇円)
昭和71年4月号	(送共三二〇円)
昭和71年5月号	(送共三二〇円)
昭和71年6月号	(送共三二〇円)
昭和71年7月号	(送共三二〇円)
昭和71年8月号	(送共三二〇円)
昭和71年9月号	(送共三二〇円)
昭和71年10月号	(送共三二〇円)
昭和71年11月号	(送共三二〇円)
昭和71年12月号	(送共三二〇円)
昭和72年1月号	(送共三二〇円)
昭和72年2月号	(送共三二〇円)
昭和72年3月号	(送共三二〇円)
昭和72年4月号	(送共三二〇円)
昭和72年5月号	(送共三二〇円)
昭和72年6月号	(送共三二〇円)
昭和72年7月号	(送共三二〇円)
昭和72年8月号	(送共三二〇円)
昭和72年9月号	(送共三二〇円)
昭和72年10月号	(送共三二〇円)
昭和72年11月号	(送共三二〇円)
昭和72年12月号	(送共三二〇円)
昭和73年1月号	(送共三二〇円)

編集後記

○淡々たる語り口によって、傾斜の転げ具合
手にとる如き「壺中の園」(真砂十四郎)の
シグナルは、レッドの点滅で「乗っ取られ」
を暗示しているようです。しかし、連絡不
能のハイジャックとは、こと変り、こちらは
逐一の過程報告、ましてや捧げる姿勢だけに
生命の危機も国際間のゴタゴタもなく、まこ
とに平和的な事件の進行ぶりというべきでし
よう。こういう主権移管方式なら……え？
バカいうなって。ハア、スンマセン。

○淀みなく流れる小川の如き麗文の「被虐の
旅」(由利美千子)。小説とあるからには小
説でしょうが、頭に「告白」がひっついてい
るだけに、その幾多かの火の元を想い、巧み

な筆の隠れミノに、却って体験臭が残るのは
編集子持病の鼻づまりのセイでしょう。こ
んな女性とつき合えたら……ナニ、オマエだ
けじゃない？ イヤ、ゴモットモ。だから昔
から決闘もあつたんでしようナ。オオ怖わ。
○新宿町人氏ご指摘の「文学界」に発表の、
倉橋由美子作「マゾヒストM氏の肖像」が、
先日、新聞(大毎)文芸評欄にて「面白い」
と評価されてましたナア。しかし、どうい
う意味で「面白い」のかは書かれていないので
想像以外にテはないんですが、作品にしろ批
評にしろ、その受取り方の個人差は当然で、
誰がどう書いたからこうだと定義づけられる
ものでもないでしょう。同じ材料でも料理人
によって変る味。他人がほめようがケチろう
が、口に合うものは個人の味付けのみ。ネ。

「懸賞原稿募集」

△体験、告白、手記▽

読者の皆さまが自分で親し
く体験されたことや、かくさ
れた性癖や性向について語っ
てみたいと思われたこと、或
はこれだけは、どうしても書
き残しておきたいと考えられ
た事を大胆にお寄せ下さい。
採用しました原稿には三千円
以上の賞金を贈呈します。

△創作、小説、物語▽

本誌の編集内容に適した特
異な素材を駆使した力作をお
待ちします。すべて自作の未

△感想、論評、批判▽

本誌に関連したものでした
ら話題の内容は問いません。
忌憚なき皆さまの御意見をお
待ちします。採用篇には二千
円以上の賞金を呈します。

△映画、雑誌、通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、
単行本或はその他見聞などで
特に興味をお持ちになった事
項の通信をお待ちします。出

発表作品に限ります。これは
と思う作品は必ず誌上に取り
上げます。腕試しの意味で奮
って御投稿願います。採用篇
には賞金十万円迄贈呈。

△読者通信原稿▽

巻末の読者通信欄は読者の
皆さま方のための公共の広場
として開放してあります。御遠
慮なくお寄せ下さい。

○本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書
店にて一斉に発売いたしますが、御予約下され
ば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳
重包装して確実に発送申し上げます。局留
の方々は二十五日頃受領して下さい。

☆ 本誌御購読の葉 ☆

に限り
予約
一月分(1冊)三五〇円(送20円)▽
三月分(3冊)一〇五〇円(送共)▽
半年分(6冊)二一〇〇円(送共)▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書
店にて一斉に発売いたしますが、御予約下され
ば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳
重包装して確実に発送申し上げます。局留
の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

六月号 (第二十四巻第六号)
(通刊第二百六十六号)

昭和四十五年五月二十日 印刷
昭和四十五年六月一日 発行

編集人 杉原 虹児
発行人 吉田 稔
印刷人 北村 俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

郵便番号558
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大崎特別扱承認雑誌第二一〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵
の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の
健全なる育成に努めることと致しまして、
いよいよ充分に注意して編集いたしました
ますが、本来成人向けとして発行を企図
り、下す関係上、十八才未満の方には絶
い申し上げます。特にくれぐれもお願